

『美作国の山城』の発刊によせて

第25回国民文化祭津山市実行委員会 会長

津山市長 宮地 昭範



美作地域の中世城館を集成した『美作国の山城』の発刊を心からお慶び申し上げます。

津山市では、「人づくりと文化の振興」をまちづくりの大綱に掲げ、史跡の保存整備及び公有化の推進、指定文化財の保存と活用など、「文化財を活かした豊かな地域づくり」に取り組んでいます。

本書は、『第二五回国民文化祭・おかやま二〇一〇』で津山市が主催する「中世山城の祭典」の記念冊子であります。これまで美作地域には、中世城館は約三〇〇箇所くらいあるのではないかと漠然と推定されていましたが、今回の調査で、その数の倍以上の六六六の城館があることが判明いたしました。

これまで、中世城館をまとめた冊子は、美作地域はもとより岡山県内においても皆無であり、本書刊行の意義は計り知れないものがあると考えています。

最後になりましたが、土日・祝祭日もなく本書完成のためにご尽力された編集委員の皆様をはじめ、関係されたすべての方々に対して深甚なる敬意を表し、発刊のあいさつとさせていただきます。

平成二十二年十月吉日

再版にあたって

平成二十二年秋に開催された『第二五回国民俗文化祭・おかやま二〇一〇』において、津山市は「中世山城の祭典」を主催し、その記念冊子として『美作国の山城』を出版いたしました。大変好評をいただき、間もなく完売となつてしまい、多くの方々から再版の要望が寄せられていました。

こうした中、津山市久米川南出身の故山本清徳様のご遺族から、個人の遺志により津山市へご寄付の申し出がありました。作楽神社や院庄館跡に愛着があり、歴史に造詣が深かったという故人のご遺志に添うものと考え、多くの方々お待ち望んでおられる『美作国の山城』を再版刊行することにしました。ここに、故山本清徳様とご遺族の篤志に対し、厚くお礼を申し上げます。上げる次第であります。

なお、本書掲載の縄張り図を作成された山形省吾さんが、平成二十二年度（第四五回）岡山県文化財保護協会賞を受賞されました。長年にわたる地道な調査活動が評価されたものであり、ご紹介をさせていただき、心よりお祝いを申し上げます。本書を手にした皆様が、津山を中心とする美作国の山城に思いを馳せ、歴史をひもとく一助として活用していただければ幸いです。

平成二十三年一月二〇日

津山市長 宮 地 昭 範

例言

一、本書は旧美作国（岡山県北部に兵庫県の一部を含む）における中世城館研究の現時点の成果を中心として編集した。

一、編集作業は、編集委員会を組織し行った。編集委員の構成は、山形省吾、森本基嗣、森俊弘、前原茂雄、中西義昌、行田裕美、小郷利幸、仁木康治、平岡正宏で、平成二十一年九月二十五日、一〇月一八日、一二月二三日、平成二十二年三月一四日、六月一九日の計五回開催した。

一、城館の配列は「平成の大合併」以前の一市五郡を基礎として、旧市町村を行政番号順に、大字を郵便番号順に、城館を五十音順に配列した。

一、城館の名称はできる限りの異称・通称も掲げたが、その全てではない。また現時点で城名不明なものについては、山名や集落名、小字名などをもとに命名し（仮称）の表示を付した。「作陽誌」の漢語表記「堡」は「城」に、「旧宅」は「屋敷」に統一した。ふりがなは先行資料および現地呼称に準拠し、不明なものも地名・氏名・普通名詞については推測してこれを付した。いずれも根拠を示すよう努めた。

一、城館関連文献の調査にあたっては、光吉靖子、中坂なおみの協力を得た。

一、所在地は近世地誌などに示された伝統的な認識を尊重し現状を確認、表記を行ったが、山中に多いことなどから正確性に欠ける場合もある。

一、城館写真は、立地などその様相をよく表した写真を努めて掲載した。なお写真撮影は津山市・苫田郡（津山市）・勝田郡（津山市）及び久米郡を山形・行田・森山誠二・岡崎靖史が、真庭郡を森が、苫田郡（鏡野町）を日下隆春が、勝田郡（美作市）・勝央町及び奈義町を團正雄が、英田郡を池田和雅・山本理史がそれぞれ行った。

一、本文は「立地」、「縄張」、「城史」、「遺物」、「備考」、「文献」の各項目を必要に応じて立て記載した。城館の部分名称・呼称は統一していない。

一、縄張り図は、津山市在住の城郭研究者・山形省吾氏が都市計画図あるいは先

行研究などを参考に踏査、作成したものを主に使用した（以下「山形図」）。山形図は現時点で最もまとまった図面群であり、作成の経緯・実態については第三章の聞き書きおよび同解説に詳しい。なお表示は原則として北を上とするが、原図の上下をあえて変更したものもある。

一、本書の執筆は中西（概説・「縄張」）・前原（「立地」）・山形氏聞き書きおよび同解説）・森（あらまし・「城史」など）・森本（「立地」）の登城ルート解説）が行い、山形氏の助言を受けるなどして最終的に森が取りまとめを行った。また、最終的な編集作業は平岡が行った。

一、城館所在図は『改訂岡山県遺跡地図』などの関係文献、および島崎東氏の提供資料、山形氏の踏査結果などをもとに作成した。ただし館跡については、現地に必ずしも明確な遺構が残っておらず、位置の特定が困難なものが多いため、一部を除き分布図に掲載していない。

一、本書は旧美作国内の中世城館全てについて、現時点での正確な情報を載せることに努めたが、城館以外の遺構の混入や掲載漏れ、記載誤りの可能性もある。本書をもとにした今後の研究深化を期待したい。

一、本書中には差別的な用語が記されている箇所があるが、歴史的事実に基づきそのまま掲げた。これは不当な呼称を容認するものではなく、科学的な認識によって差別意識の根絶にいたることを願っている。読者においてもこの立場を理解し、本書を正しく利用されることを期待する。

一、参考文献については、煩雑となるため一括して巻末に主要参考文献及び解題として掲載した。

一、本書の初版は第25回国民文化祭津山市実行委員会が発刊した。再版にあたっては、内容等の事実関係の誤りを訂正した。

一、第25回国民文化祭津山市実行委員会は平成二十二年度末をもって解散し、版权等は津山市教育委員会生涯学習部文化課が引き継いでいる。

山城散策の心得

(福岡県の城郭刊行会編『福岡県の城郭』より)

山城や遺跡は他人様の土地であるので調査や散策において次のことに留意してください。

- 一、立ち入りについては地元関係者および関係機関に連絡をすること。
- 一、動物、植物、昆虫、石などをもちかえらないこと。
- 一、動物を殺したり、傷つけないこと。
- 一、植物を伐採したり、折ったりしないこと。
- 一、弁当殻ペットボトルなどゴミは必ず持ち帰ること。
- 一、地元の迷惑となることはしないこと。



文化財愛護シンボルマーク

目次

第一章 美作国の城館

津山市

〔旧苦田郡域〕

〔旧勝田郡域〕

〔旧久米郡域〕

真庭郡

〔真庭市〕

新庄村

苫田郡

〔津山市〕

〔鏡野町〕

落合町	51
湯原町	88
久世町	96
美甘村	108
川上村	111
八束村	114
中和村	115
新庄村	117
加茂町	120
富村	132
奥津町	134
鏡野町	148
津山市	3
〔旧苦田郡域〕	4
〔旧勝田郡域〕	32
〔旧久米郡域〕	42
真庭郡	51
〔真庭市〕	52
落合町	74
湯原町	88
久世町	96
美甘村	108
川上村	111
八束村	114
中和村	115
新庄村	117
加茂町	120
富村	132
奥津町	134
鏡野町	148

勝田郡

〔津山市〕

〔美作市〕

勝央町

奈義町

英田郡

〔美作市〕

西粟倉村
兵庫県佐用郡佐用町

久米郡

〔津山市〕

〔美咲町〕

久米南町
〔岡山市〕

補遺

〔備前市〕

〔真庭市〕

〔美咲町〕

城館分布図

勝北町	167
勝田町	168
勝田町	180
勝央町	192
奈義町	203
大原町	221
東粟倉村	222
美作町	245
作東町	246
英田町	268
英田町	283
西粟倉村	286
兵庫県佐用郡佐用町	290
久米町	291
中央町	292
旭町	315
柵原町	316
柵原町	326
御津郡建部町	332
久米南町	340
〔岡山市〕	352
美作国周縁の城館	361
和気郡吉永町	362
上房郡北房町	363
久米郡旭町	366
城館分布図	367

第二章 美作国城館の概説 401

概説 — 美作国の山城・丘城・館城 — 403

第三章 美作国の中世山城をもとめて 419

山形省吾・聞き書き

美作の中世山城をもとめて 421

「聞き書き」を終えて

山形省吾氏と美作城郭史研究 438

付 編 441

主要参考文献および解題 443

掲載山城一覧 450

(表紙・裏表紙 津山郷土博物館蔵「美作国絵図」)

第一章

美作国の城館

津山市

〔旧苦田郡域〕
〔旧勝田郡域〕
〔旧久米郡域〕

〔旧苦田郡城〕

1 平家ヶ城・小原城 へいけ おぼら

所在地 津山市小原

立地

神楽尾城の約1km東にある標高約二四〇mの小高い山頂に位置している。周囲には弥生から古墳時代にかけての古墳群が広がる。

縄張

山頂が主郭となっており美保神社の祠がある。但し、集落に近く後世の可能性がある。現状遺構の評価は慎重を期する必要がある。

城史

「作陽誌」は、苦南郡小原村の「平家城」として、神楽尾城の東にある古城で、伝承では朱雀天皇の承平年中（九三二〜八）に築城され、後に宇都宮下野入道教貞が居城、その靈祠は宇都宮神社として今に祀られていると記し、別に「小原城」ともする。また『苦田郡誌』は、城の東方約一町に教貞の部将八木治部広次の宅跡があり、教貞・広次ともに正平年中の人物とする。

文献

「作陽誌」、「美作古城記」、「苦田郡誌」、「日本城郭大系」744



平家ヶ城・小原城

2 渋谷屋敷 しぶや

所在地 津山市小田中

立地

未詳。

縄張

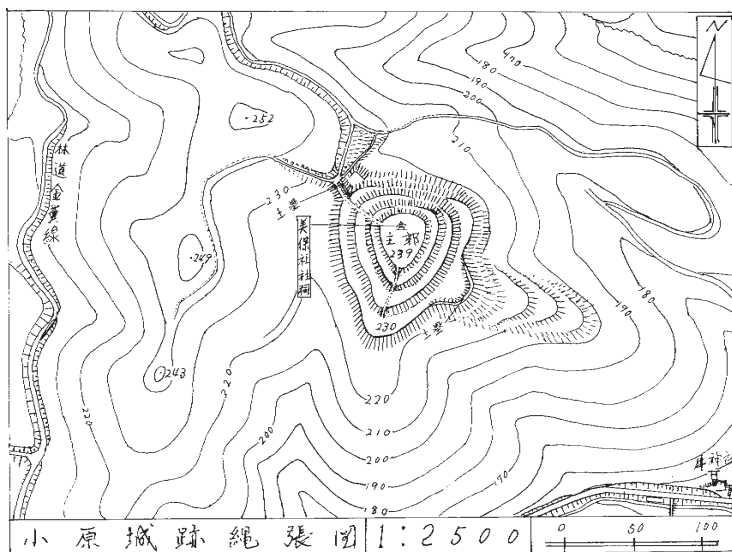
未詳。

城史

「作陽誌」は苦南郡小田中村の「渋谷屋敷」として、永禄年間（一五五八〜七〇）頃に渋谷平内が小田中を領し居住、平内はもと原田氏、尼子晴久の家臣原田左衛門尉の兄で、英田郡の渋谷氏を継ぎ、子孫は山北村（津山市山北）にありと記す。

文献

「作陽誌」、「美作古城史」、「日本城郭大系」752



3 神楽尾城

所在地 津山市糀・小原・上畠・二宮

津山市指定史跡

立地

津山盆地のうち、小原・総社方面と上田邑方面を画する標高三〇八mの山頂一帯に位置する。山頂からの眺望はすばらしく、津山盆地の東西南北を一望することができる。

縄張

神楽尾山山頂が主郭となり、南西側の武者溜・馬場、堀切を挟んで三の丸地区、そして北東側に独立した別郭としての二の丸地区から構成される。

主郭は一辺四〇m程度のほぼ方形の区画で地形に沿って腰曲輪が配された。主郭直下の北側の二つの曲輪と西側曲輪には縁辺部に土塁が配された。武者溜・馬場は城内で最も広い空間である。南側正面に平入りの虎口が設定されている。馬蹄形地形を挟んで三の丸が位置する。城道は三の丸の東脇を通ってこの虎口に到達するようになっており、三の丸が城道を制する役割を果たす。三の丸の南側斜面には帯曲輪と畝状空堀群による遮断線が設定された。武者溜・馬場東側には平入りの虎口があり

二の丸へ通じる。二の丸は堀切を挟んで北側の主郭部と南側の土塁を配した曲輪群に分かれる。二の丸だけで縄張りは完結しており、主郭部（本丸）や武者溜・馬場、三の丸との連携はほとんど見られない。二の丸は主郭部に対して独立性が強く、神楽尾城は一城別郭とも言える



神楽尾城

城史

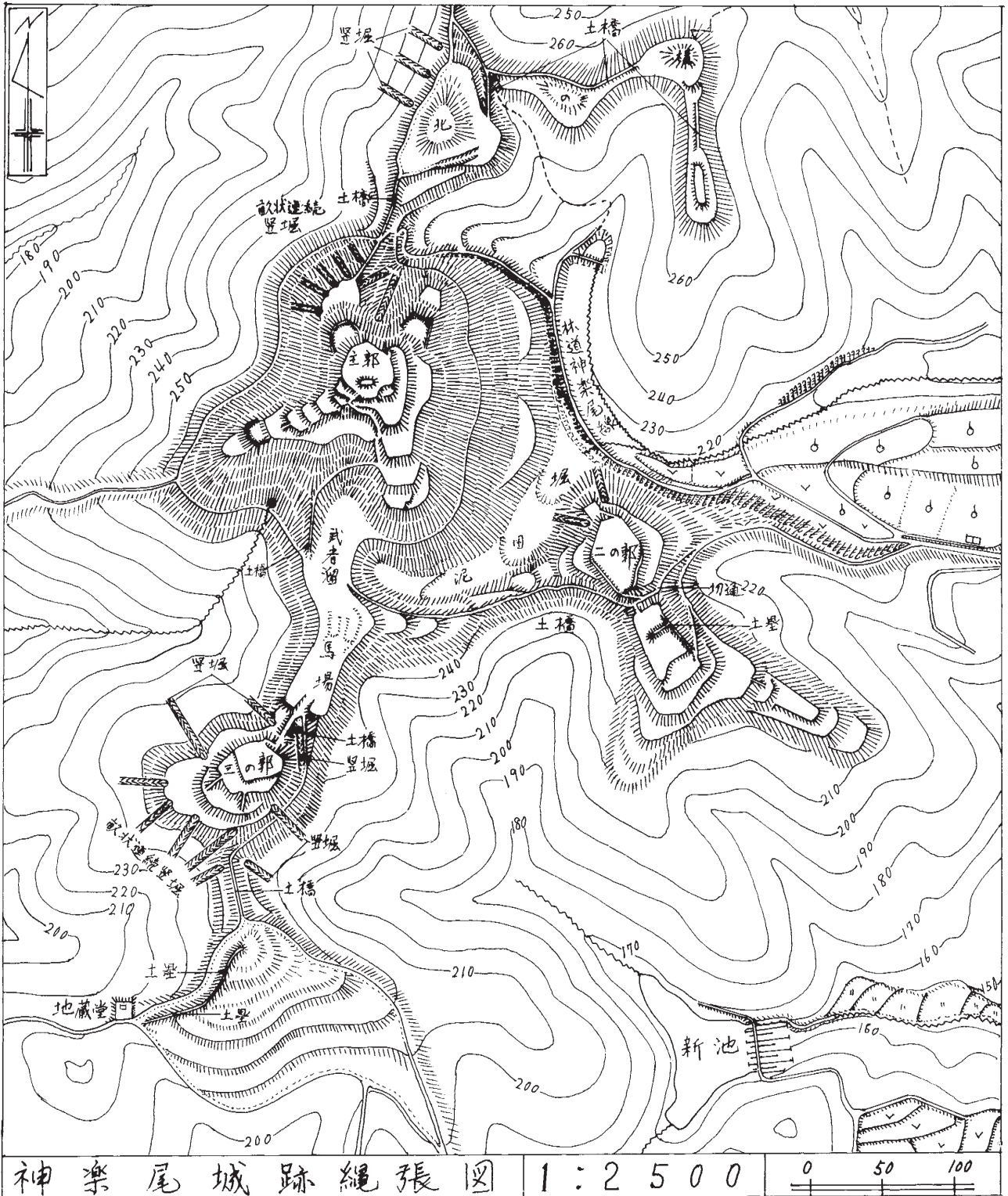
縄張りになっている。

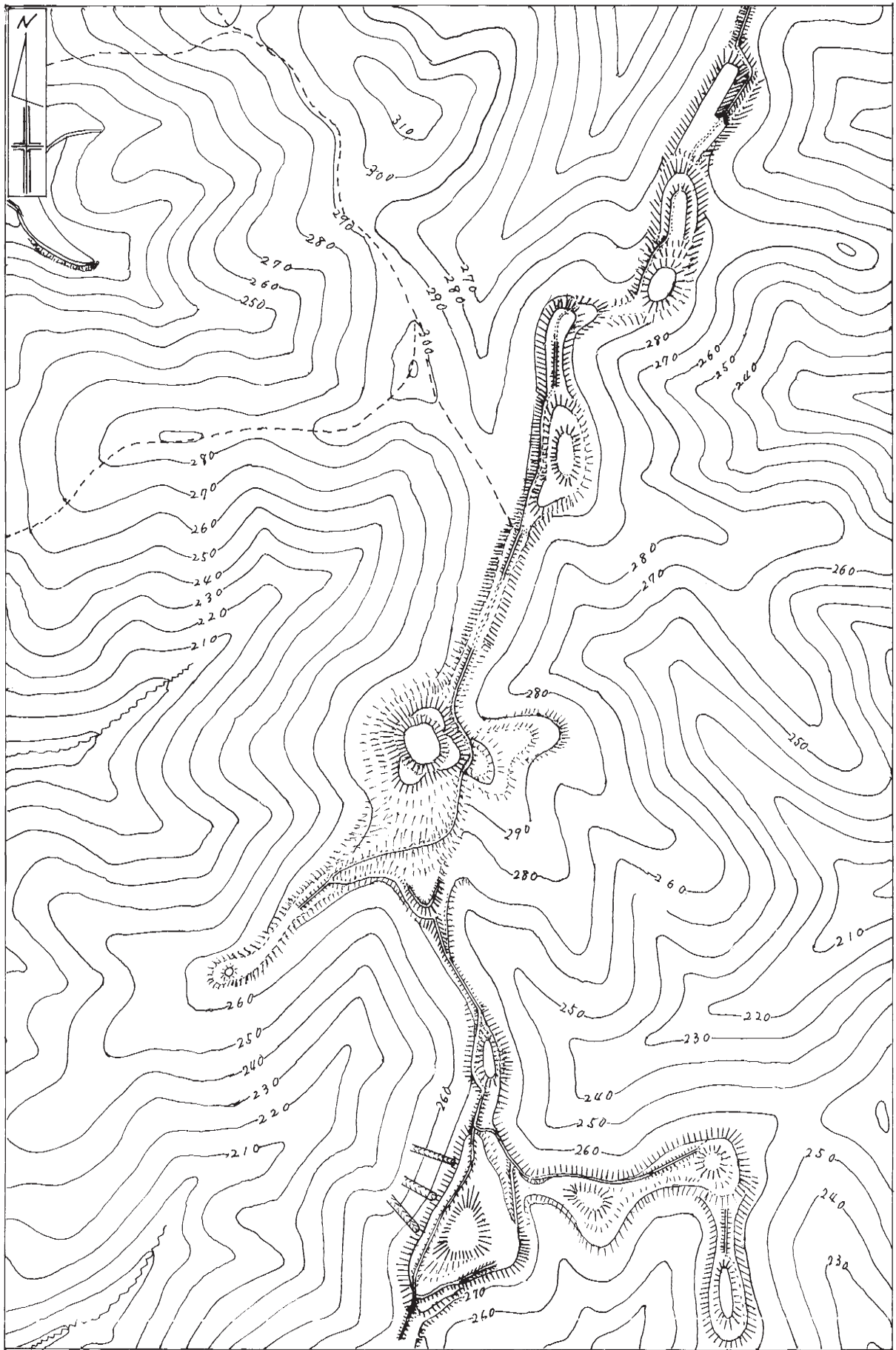
正保書上五四城の一で、「古城之覚」は、西北条郡田野村の「神楽尾城」として、城主を毛利氏幕下の岩岐兵庫・千波三郎左衛門（後に土佐守）とし、陪臣の三浦・大倉・中島・刈屋・宮川氏らが今に残るとする。「作陽誌」は築城者は不詳、昔山上に天劍神社があり、夜々神楽が無人で鳴り響いたことから山の名となった。建武年間（一二三四～八）以降は赤松・山名両氏の相次ぐ領有で城主が定まらず、天文年中（一五三二～五五）には山名右京亮氏兼・小次郎氏直父子が在城していたが、尼子修理太夫の派遣した原田播磨守による攻撃を受け落城、尼子氏の没落後は毛利氏が大蔵甚兵衛尉・千場三郎左衛門らをして守らせ、のち廢城と記す。「美作鬢鏡」は城主を今村越前守とする。天保国絵図に「神楽尾古城跡」とある。

延文五年（正平一五年、一三六〇）八月、山名時氏の因幡・美作両国での布陣に対し、赤松世貞・則祐が攻撃し降参した城のうちに「神楽尾ノ城」がみえる（「太平記」）。城主の大蔵甚兵衛尉尚清については田邑氏神の棟札に「奉再献立天劍大明神 永祿一三年庚午六月朔日施主」とみえる（「武家聞伝記」）。天正七年（一五七九）頃、毛利輝元が三浦・大蔵・宮川氏等を添え「神楽岡之城」に置いていた大将千波土佐は、宇喜多方の花房職秀が籠もる荒神山城（津山市荒神山）を夜討しようとしたところ、却って伏兵に遭い敗走、土佐は「田ノ村」の「小畠」で草木という兵に討ち取られ、同地は後年「千波畠」との名で言い伝えられるという。神楽尾城には「藤屋之城」（升形城、鏡野町香々美）の城主福田勝昌が兵を籠め、まもなく毛利氏から兵三〇〇余を添えて岩岐兵庫が送り込まれたとす（前掲書）。なおこの合戦に際して発給されたとみられる年欠三月一〇日付けの花房職秀感状の写が数通知らられている（「美作諸家感状記」、「美作古城記」）。

文献 遺物

勝間田焼。
 「太平記」、「武家聞伝記」、「作陽誌」、「美作鬢鏡」、「天正年中美作国古城合戦記」、「美作鏡」、「美作古城記」、「美作略史」、「苦田郡誌」、「岡山県通史」苦田1、「美作古城史」、「岡山の城と城址」、「日本城郭全集」津山市2、「日本城郭大系」744、池田誠一九九四「改訂岡山県遺跡地図」津山86、92、397、「岡山の山城を歩く」73、「津山市の文化財」

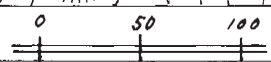




神樂尾城跡

北の備

1 : 2 5 0 0



4 二宮城・美和山城・城山

このみや
みわやま

所在地 津山市二宮

国指定史跡

立地

二宮地区の向陽小学校から約四〇〇m北の美和山古墳群の中に位置し、標高は約四〇mである。北の紫竹川、南の吉井川に挟まれた丘陵地である。国道一七九号線、二宮地区内にある美和山古墳を指す。

縄張

城山と呼ばれる美和山一号墳（全長八〇・五m、後円部径約四八m、高一〇・四mの前方後円墳）墳丘部を利用した丘城。

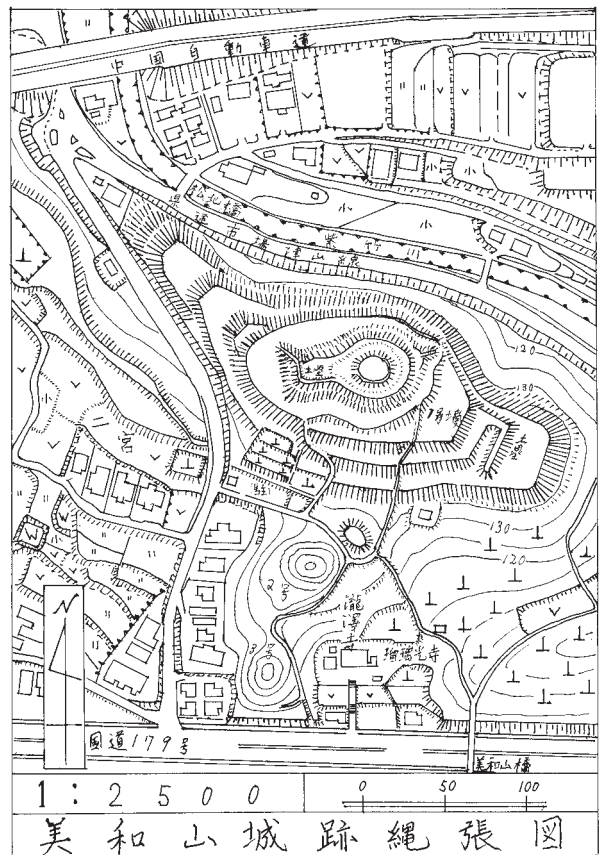
主郭部をみると、墳丘頂部を削平し南向きに土塁を築くと共に、北東側に墳丘を削りだして土塁を創出するなどコンパクトな城域を意識した縄張りとなっている。墳丘の南面には幅の広い横堀状の落ち込みが確認される。縄張りは単郭構造に留まり規模的にもそれほど大きくない。おそらく北西にある局笠山城を詰城とし、二宮城は地域掌握のための丘城として機能した可能性が考えられる。なお、南側にも複数の墳丘が確認されるが、削平などの痕跡はみられず城域には編成されなかったとみられる。

城史

「古城之覚」は苦西郡二ノ宮村の「二ノ宮」として、城主を立石掃部助とする。「作陽誌」は「美和山」の附たりとして古城を示し、立石中務丞漆高光が居城とし、その曾孫掃部亮久朝の時に三星城主後藤勝基の侵攻を受け、久朝は小田中村の笠松で



二宮城・美和山城・城山



備考

迎え撃ったが大敗して一七人が討死、落城したと記す。「美作鬘鏡」は「二ノ宮城」「美作鏡」は「二宮城」。「美作古城記」は「美和山の城」、『苦田郡誌』は「美和山城」とし、東西三町、南北一町三〇間、ほとんど円形で松が繁茂しているとある。

文献

国の史跡指定は、城跡と重複する美和山一号墳などにかかる。
「武家聞伝記」、「作陽誌」、「美作鬘鏡」、「美作鏡」、「美作古城記」、「美作略史」、「苦田郡誌」、「岡山県通史」苦田20、「美作古城史」、「日本城郭全集」津山市12、「日本城郭大系」766、「津山市埋蔵文化財発掘調査報告」42、池田誠一九九四、『改訂岡山県遺跡地図』津山364

所在地 津山市院庄

立地

吉井川と久米川の合流点から約五〇〇m北東、旧出雲街道沿いの院庄地区院庄中集落内に所在する。吉井川の二つの旧河道に画された微高地上に位置する。

縄張

微高地となつている方形の区画が主郭と考えられている。地籍図などから周囲の一段下がった田畑が横堀と考えられている。

城史

「古城之覚」は苫西郡院之庄村の「構之（城）」として、城主を片山空之助宗満とする。「作陽誌」は「院庄城」として、兵乱の時代に美作国では諸城多く、隣国の軍勢により破られ、院庄もまた代々の城主が続かず、天正（一五七三～九三）末年に片山木工允・同左馬助が在城、慶長八年（一六〇三）、森忠政の美作支配にあたっては津山に移るまでの「仮居所」となり、のち寛永一五年（一六三八）に城は破却され、耕作地となり、今は堀がわずかに残るのみと記す。「美作鬢鏡」は、城主を「片山木工之助久義」とする。『美作古城史』は、片山空之丞は戸島村（津山市戸島）に帰農したとの伝承があるとする。

応仁元年（一四六七）、赤松氏の被官中村五郎左衛門は数輩と語らい「院庄」に入り山名勢を逐った（「応仁別記」）が、文明一五年（一四八三）に再び山名氏が院庄を拠点とし（「大乘院寺社雑事記」など）、さらに長享二年（一四八八）七月、赤松氏家臣の浦上伯耆



構城

遺物

守が美作国の「院庄之代」に入り院庄の地から山名勢を退けている（「蔭涼軒日録」）。その後赤松氏の被官中村則久は院庄の「中村館」に拠り、永正元年（一五〇四）に長船鍛冶を招じての鍛刀、同一六年には赤松・浦上氏の対立にあたり館を退き岩屋城（津山市中北上）へ籠城している（「古代取集記録」など）。その後しばらく関連記事はみられない。永禄九年（一五六六）頃、花房職秀は院庄の「どんこ」（神戸、津山市神戸）での合戦で組み討ちし、高名を挙げたという。ただし、この高名は別に、元龜年間（一五七〇～三）頃、「院ノ庄と申城」を攻め落とした際のこととの記載もあって混乱している（「花房家記事」）。同時期の某年三月、毛利輝元は中西三郎兵衛尉に、先年の院庄での籠城を賞し、草苜景継との連携による協力が肝要と書き送っている（「美作牧山文書」）。また牧河内・藤蔵と「片山むく」（木工）は宇喜多直家から「院庄ノ御番」を命じられたとある（「作州高田城主覚書」）。ただし天正九年（一五八一）六月には毛利勢による「院庄」への軍事行動が報じられており、構城は再び毛利方の拠点となつたらしい（「藩中諸家古文書纂」）。構には毛利輝元の家臣片山木工助が籠められ、「皿山の捕手」（嵯峨山城、津山市中島・美咲町錦織）に拠る宇喜多直家の家臣河端丹後と対峙したとされる（「武家聞伝記」）。

備前焼。

平成一九年度（二〇〇七、八）から三ヶ年、城跡周辺の確認調査が行われ、ほぼ近世の記録どおりの規模の四方の堀が検出された。

文献

「応仁別記」、「武家聞伝記」、「作陽誌」、「美作鬢鏡」、「美作古城記」、「美作略史」、「苦田郡誌」、「岡山県通史」苦田21、「美作古城史」、「日本城郭全集」津山市3、「日本城郭大系」741、湊哲夫一九九八～二〇〇九、「極楽山清眼寺」、「改訂岡山県遺跡地図」津山324、「美作の風土古道と宿場集落」、「年報津山弥生の里」16

6 毘沙門屋敷

所在地 津山市院庄

院庄インターチェンジの約五〇〇m南の場所に位置する。周囲は条里制の名残がある低地田園地帯が広がる。

未詳。

「作陽誌」は苫西郡院庄村の「毘沙門屋敷」として、由来不詳、東西三二間、南北二三間で住民は耕作せずと記す。

「作陽誌」、『極楽山清眼寺』

7 院庄館（仮称）

所在地 津山市神戸

国指定史跡

吉井川左岸の低地田園地帯に位置する現・作楽神社の地。周囲は条里制の名残があり、基本的に方形のプランであるが、南西部分は旧河道により一部失われている。

規模の大きな方形居館。周囲を土塁が廻る。江戸時代に、後醍醐天皇の院庄での宿所跡と比定され、この地に顕彰碑が設置された。明治時代に作楽神社が造営された。

「作陽誌」は苫西郡神戸村の「後醍醐天皇駐驛跡」として、元弘二年（一一三三）に隠岐配流途次の後醍醐天皇が院庄に入ったことを「増鏡」や「異本太平記」などを引用して示し、村人の伝承からその遺跡がこの地であるとす。

その後、康安二年（一一三六）六月、山名時氏は五〇〇〇騎をもって伯耆国から「美作ノ院庄」に入り、備前・備中国へと出兵

したとある（『太平記』）。また

応永二年（一四一四）には守護赤松義則が「作州院庄御持人夫」の経費を播磨国矢野荘へと賦課している（『東寺百合文書』）。応仁元年（一四六七）、中村五郎左衛門は数輩と語らい「院庄」に入り山名勢を逐った（『応仁別記』）が、文明一五年（一四八三）以降、しばらくは再び山名氏が院庄を拠点としている（『大乘院寺社雑記』など）。年代的にこれら「院庄」の中心拠点は現在の院庄館である可能性は高いものの、現在のところ明確でない。

青磁・白磁・備前焼・勝間田焼など。

昭和四八～九年、同五五～六年の二度にわたる調査が行われ、土塁に囲まれた内部から井戸、建物などが検出された。

「応仁別記」、「作陽誌」、「美作略史」、「院庄作楽香」、「苫西郡誌」、「美作古城史」、「史跡院庄館跡発掘調査報告」、「津山市埋蔵文化財発掘調査報告7 史跡院庄館跡」、「日本城郭全集」津山市3、「日本城郭大系」740、湊哲夫一九九八～二〇〇九、「美作国府・館・構・城下町の検証」、「極楽山清眼寺」、「美作の風土 古道と宿場集落」、「改訂岡山県遺跡地図」津山323、「岡山の山城を歩く」127、「津山市の文化財」



院庄館（仮称）

8 局笠山城(下田邑局笠遺跡)

つばねかさやま

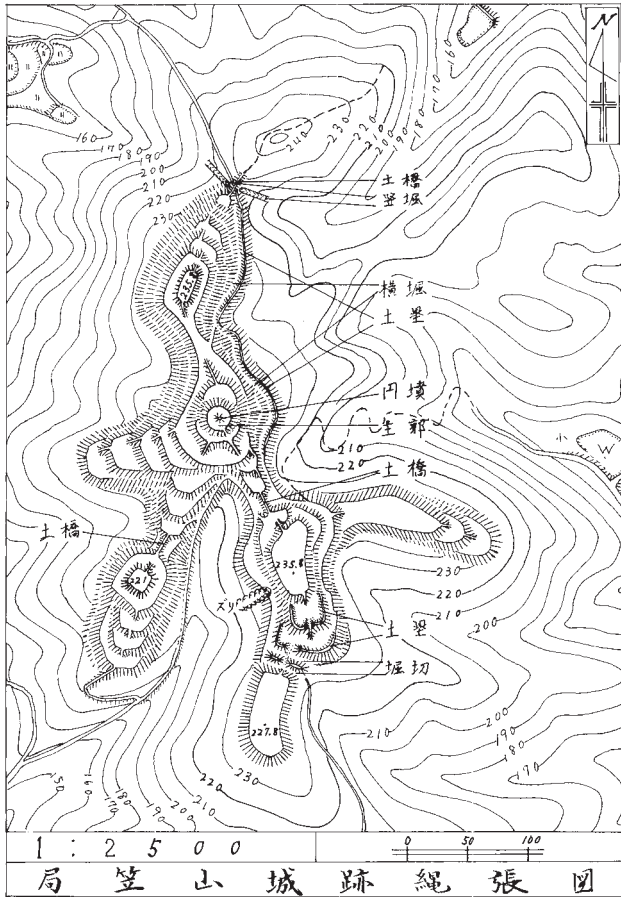
所在地 津山市下田邑・戸島

立地

戸島方面と下田邑方面を画する標高約二四〇mの独立丘陵の頂上付近に位置する。城域からは津山盆地の東西南北や久米方面をも一望することができる。

縄張

円墳を利用した主郭部を中心として、尾根上に別郭の曲輪群を配する。主郭から、北側と南東・南西側の三方向の尾根筋に曲輪群が配された。南側と南西側の二つの別郭は主郭部との間に堀切を入れて区画する。中でも南側の曲輪群は大堀切の先端に土塁を構えて橋頭堡のような防禦ラインを形成する。また、北側の別郭も先端を堀切で遮断する。全体的に分散した曲輪配置となっており主郭への求心



城史

性は低い。周囲の城郭と比べると局笠山城の規模は大きく、広域大名権力の番城か有力国衆の居城クラスの城郭とみられる。二宮城の北西に立地することから、立石氏の詰城の可能性が考えられる。



局笠山城 (下田邑局笠遺跡)

文献

「作陽誌」は苦西郡戸島村の「盒層山」として、山名はその形が盒層(女性の被る、つばんだ形の笠)に似ていることに因むとし、特に城とは記していない。城としての初めての記載は、「美作鏡」に戸島村に「局笠山城」があり、城主は不詳とする。なお『改訂岡山県遺跡地図』は「下田邑局笠遺跡」として載せる。『作陽誌』、「美作鏡」、「苦田郡誌」、「改訂岡山県遺跡地図」津山316、山形二〇〇七

9 鶴山城・津山城

所在地 津山市山下

国指定史跡

立地

津山市街の中心にあり、南を吉井川、東を宮川に画された丘陵一帯に位置する。一帯は鶴山公園の別称でも親しまれており、全国有数の桜の名所として著名である。

縄張

中世から城郭が存在したとされるが、現状は慶長八年（一六〇三）に美作一国を与えられた森忠政が普請した近世城郭。頂上部に主郭部を設定し、主郭の西側に石塁で仕切った天守曲輪を構え層塔式の天守を築いた。一方、主郭の東側は宮川に面して削り出しの巨大な石塁が構築えられた。石塁の上には多間櫓が構えられ嚴重な防備が施された。

城史

『武家聞伝記』は建武（一三三四～八）の頃、鶴山（小篠山）の城主に、山名伊豆守時氏の末流山名美作守忠政（剃髪して法庵入道と号する、幕紋鶴丸）があり、忠政死去ののち城山には鶴山八幡宮が勧請されたといひ、津山城の堀一つは山名氏が掘らせたものと記す。また別に「森家先代実録」は、文明年中（一四六九～八七）に山名美作守惟（唯）重入道芳庵が八幡宮を尊敬して鶴山に宮地を建立、神田を寄進したともある。なお『苦田郡誌』は、嘉吉元年（一四四一）、伯耆山名氏の一族山名判官忠政が築城したもので、今も残る薬研堀は当時の遺構とし、『美作古城史』には、忠政は守護代として在国したとする。

文献

『武家聞伝記』、『森家先代実録』、『津山誌』、『美作略史』、『苦田郡誌』、『岡山県通史』 苦田34、『美作古城史』、『日本城郭全集』 津山市9、『岡山の城と城址』、『日本城郭大系』 760、『改訂岡山県遺跡地図』 津山654、『歴史散歩岡山の城』、『岡山の山城を歩く』 107、『津山市の文化財』

10 うらば城・浦場城

所在地 津山市上横野

立地

横野川と大河内川に三方を囲まれた、入道山から東南に延伸する標高約三九二mの尾根突端付近に位置する。上横野地区石ヶ峪・野介集落の背後にあたる。現在、地元では「うらば（浦場城）」と呼ばれている。

縄張

背後に堀切を入れて遮断し、先端部を城域として整備する。主郭の東側塁線に防禦の足場となる土塁が配された。周りを囲む段状遺構がみられるものの機能としては単郭に近い縄張りとして評価できる。

城史

津山市立共和中学校郷土研究クラブによる『郷土の研究』は「おおごうちのある山」として「うらば城」を載せ、「おおごうち」に入る場所に「こんご岩」という大きな岩があり、門の役目を果たしていたといひ、城の者が百姓を困らせようと水を止めたといった伝説を記す。

備考

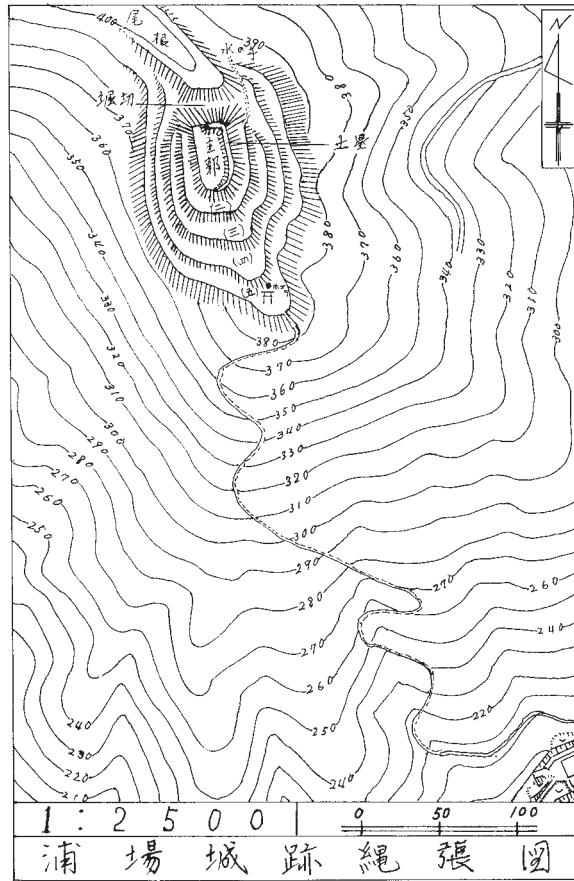
「津山市中世城郭等配置図」には「うらば城」のおおよその場所が示されている。

文献

『郷土の研究』、『神楽尾』



うらば城・浦場城



11

天神山城
てんじんやま

所在地 津山市上横野

立地
縄張

未詳。
未詳。

城史

「古城之覚」は東北条郡上横野村の「天神山」として、城主を平家一族とする。「東作誌」は上城・下城として約「三町」を隔てて南北に二ヶ所の郭跡、馬場がある、事跡は不詳と記す。「美作古城史」には、下高倉の影山氏の所蔵文書に、同氏の先祖は門脇中納言平国盛より出て、もと横野天神山に在城、のち高倉に移るとありとし、さらに懸縄山城（津山市下横野・上横野）かと推測する。

備考

「津山市中世城郭等配置図」は位置不明とするが、津山市立共和中学校郷土研究クラブによる『郷土の研究』は、新瀧寺の東脇あたり、現在横田城と呼ばれている城の位置付近に「天神山城」を示す。

文献

「武家聞伝記」、「美作鬢鏡」、「東作誌」、「美作鏡」、「苦田郡誌」、「岡山県通史」苦田5、「美作古城史」、「郷土の研究」、「神楽尾」

12年本城・年元城・利元城

としもと としもと としもと

所在地 津山市上横野

立地

横野川左岸にあり、津山盆地北部を見渡す標高四九九mの山頂一帯に位置する。津山から加茂地区に至る古道が東側を通る。

縄張

稜線を堀切で仕切り、先端部に城域を形成する。最も高い位置に主郭を置き、南東方向に二股に分かれる尾根筋に曲輪が連なる。近接した位置に領主層が割拠する集落がないことから、大篠から加茂へ抜ける利元峠の道を押さえる番城として機能した可能性が考えられる。

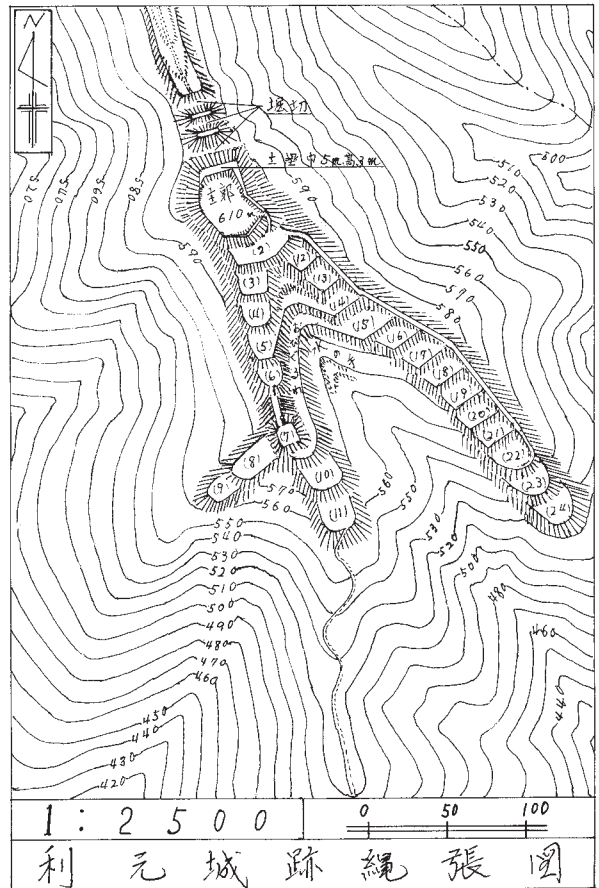
城史

「古城之覚」は吉北郡上横野村の「年本之(城)」として、城主は福田盛昌、また別に東北条郡上横野村の「年元」として城主を福田玄蕃勝昌とする。「美作鬢鏡」は「歳本」、「美作鏡」は「年本」。「東作誌」は「利元城」として、城主は福田助四郎盛昌とその子玄蕃勝昌、慶長期の初めまで城壘があり、城内の井手が今も残ると記す。また城外の郭に「新兵衛墓」があり由来は不詳とある。

天正八年(一五八〇)か、宇喜多直家は「高田ノ城」(利元城か)に付城を構え攻撃するのに先駆けて升形城(鏡野町香々美)を攻撃したが、城兵の決死の籠城のため「高田」(津山市上・下横野か)まで退き、荒神山(津山市荒神山)に花房職之を籠め升形・岩尾山城攻略を進めたともある(陰徳記)。花房職之は草苅氏の出城「い



年本城・年元城・利元城



文献

わう山「ますかた」としもと」の三ヶ城を攻め取り、「ひつめの城」(日詰城、津山市加茂町百々・中原)の相城として加番の兵を籠めたとある(「花房家記事」)。その時期については、同九年正月に岩尾山城から毛利方の城兵が退いた際、福田盛雅も小田草城(鏡野町馬場)へ在番替えとなっていたことから、この前後のことと考えられる(「閥閥録」)。職之による在番支配に関連するとみられる年未詳の某書状には「利元堅固」とある(「美作国諸家感状記」)。「花房家記事」、「寛永諸家系図伝」、「武家聞伝記」、「美作国諸家感状記」、「美作鬢鏡」、「東作誌」、「美作鏡」、「苦田郡誌」、「岡山県通史」苦田7、「美作古城史」、「日本城郭大系」761、「神楽尾」

13 福田城・勝山城

所在地 津山市上横野

立地

横野川左岸にあり、懸縄山城から西に延伸する標高二八七mの尾根突端付近に位置する。上横野地区御先集落の県道六八号線を東に入った山手にあたる。中鉄美作バス破堂停留所から、北東へ県道六八号線を一〇mほど進む。右手宅地方面へ入る舗装道を山裾に向かつて進む。左手下を流れる谷川に架かる三番目の小橋を渡って檜林を登る。地元では「福田城」と呼ばれている。

縄張

尾根筋の背後を堀切り先端を城域とする。最高部に主郭を配し、尾根に三段の曲輪を配置する。南側斜面には畝状空堀群が築かれるなどこの方面からの侵入に対して防禦の意識が強い。村落に近いことから集落に抱った土豪層の持城と考えられる。小規模ながら畝状空堀群を築くなど普請に手を加えており、横野川に抱った土豪勢力の力量を物語る事例と言えるだろう。

城史

「古城之覚」は苫北郡上横野村の「勝山之(城)」として、「福田盛昌抱」とする。「東作誌」は「勝山城」として、福田盛昌の抱城、年代不詳で宮田五右衛門が居城、宮田兄弟の墓が手岩木・野崎にあるとし、また年代不詳で高田城(真庭市勝山)から勝山城を攻撃に出勢し、鳥居畑と破堂で川を隔てて矢軍が行なわれたとの伝承や、「畑辺」の地の本名は「旗投」で、掛縄山城(津山市



福田城・勝山城

備考

下横野・上横野)の砦というと記す。津山市立共和中学校郷土研究クラブによる『郷土の研究』は「勝山城」として、天神山城から東北、横野川東対岸の福田城と同一と思われる地点に「勝山城」を示す。

文献

「武家聞伝記」、「美作鬢鏡」、「東作誌」、「美作鏡」、「岡山県通史」
苫田9、『美作古城史』、『郷土の研究』、『岡山の山城を歩く』99

14 横田城よこた (上横野谷口遺跡・上横野久谷遺跡)

所在地 津山市上横野

立地

横野川右岸にあり、東に延伸する標高約二〇〇mの尾根突端付近に位置する。上横野地区高田集落の県道六八号線を西に入った山手にあたる。

縄張

南東に伸びる尾根筋に築かれた二つの丘城から構成される。東側の丘城は背後に堀切を入れて遮断し、丘陵の先端部を整備した単郭の丘城である。主郭と周囲の帯曲輪から構成される。一方、西側の丘城は「古城」と呼ばれ、主郭とその周囲に帯曲輪を持つ。後者の方が相対的に曲輪の削平は弱い傾向を示す。当城は集落に近い立地と単郭に近い縄張りから、村落に拠る複数の土豪が横並びに立て籠った城郭と考えられる。但し、集落に近いことから後世の改変を受けている可能性があるため、城域の範囲や遺構の評価には注意を要する。

城史

「古城之覚」は東北条郡上横野村の「横田」として、城主を田中修理とする。「美作鬘鏡」は城主を田中修理大夫とす。「東作誌」は「横田城」として、山へは約二町で城は東南に向き、事跡や年代などは不詳と記す。「天正年中美作国古城合戦記」は城主を田中修理大夫重昌として、永祿（一五五八〜七〇）の頃から毛利氏に属して「苦田田中郷の内千石」を与えられたがまもなく死去、子の光井大夫は幼少にて乳母のもとで育ち、そのうち高野（津山市高野本郷一帯）



横田城（上横野谷口遺跡・上横野久谷遺跡）

備考

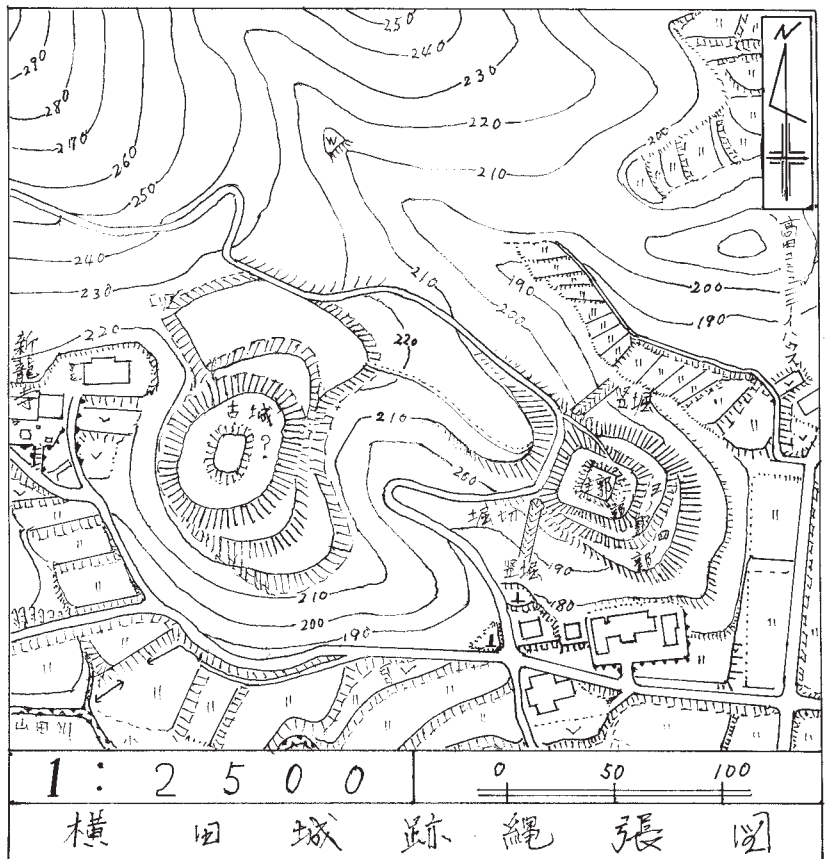
の知人を頼り一生を終えたとする。

ただし津山市立共和中学校郷土研究クラブによる『郷土の研究』は、現在「横田城」とされる地点から西南、おそらくは谷を隔てた東南へと延伸する標高二九〇mの丘陵上付近への所在を示す。

『武家聞伝記』、『美作鬘鏡』、『天正年中美作国古城合戦記』、『東作誌』、『美作鏡』、『苦田郡誌』、『岡山県通史』 苦田6、『美作古城史』、『郷土の研究』、『日本城郭大系』 767、『神楽尾』、『改訂岡山県遺跡地図』

津山 127・129

文献



15 大山城・代山城・台山城

所在地 津山市大篠

立地

大篠地区の県道三四五号線の東側にあり、標高約二六〇mの尾根上にある。天狗寺山麓の南端に位置し、津山盆地北部を一望できる。津山市大篠にある善応寺手前一〇〇mにある石垣の右手が登り口。

縄張

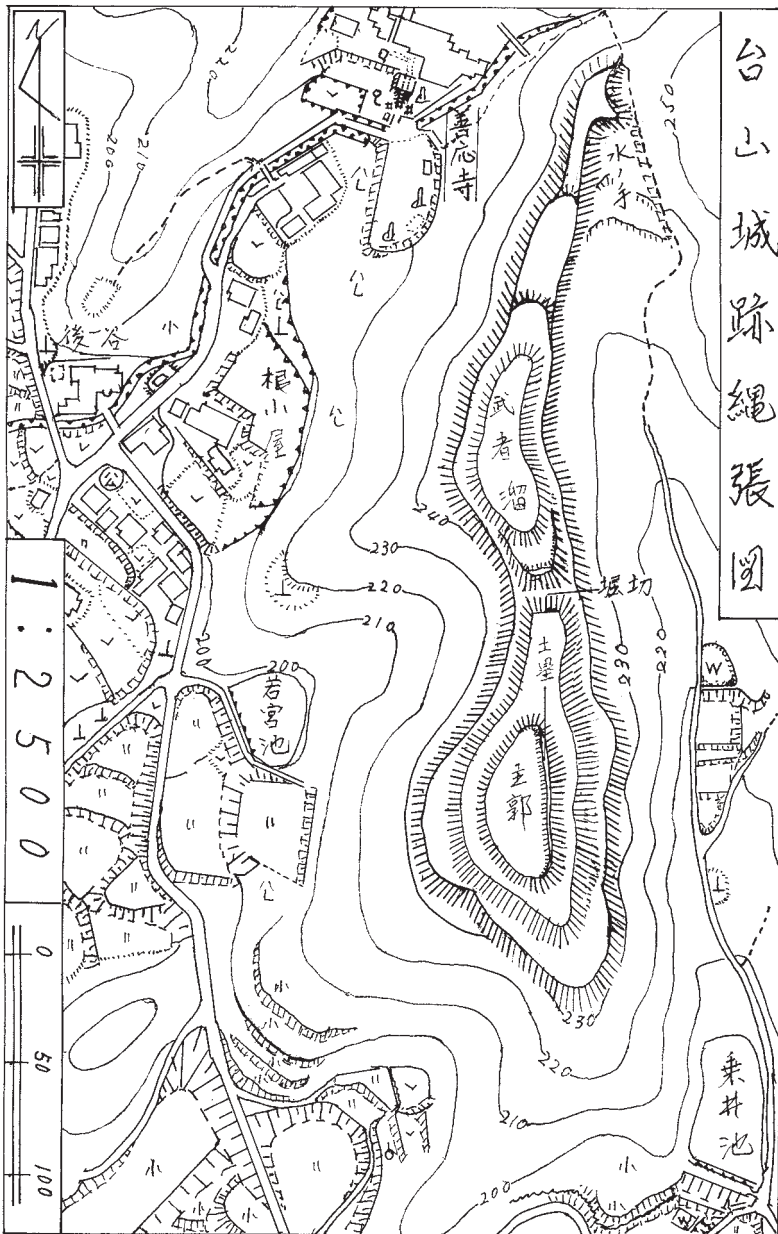
主郭と武者溜と呼ばれる箇所から構成される。南側の主郭を中心に城域として整備されたとみられる。集落に近いことから遺構の評価には慎重な判断が必要であるが、村落に拠った土豪の持城と考えられる。

城史

「古城之覚」は苫北郡大笹村の「大山之(城)」として、城主不詳、また別に東北条郡大篠村の「代山」として、城主を赤松弾正少弼氏範とする。「美作鬢鏡」「美作鏡」はともに「大山の城」「大山城」。「東作誌」は「台山古城」として、大山とも書き、城主を安



大山城・代山城・台山城



文献

黒和泉守久重、本丸跡（二〇間四方）、二の郭（幅四間、長さ五〇間）、三の郭（七間四方）、境に堀切が一条あって北に出張り、台・的場・馬場など城に因む地名が残ると記す。
「武家聞伝記」、「美作鬢鏡」、「東作誌」、「美作鏡」、「苫田郡誌」、「岡山県通史」 苫田4、「美作古城史」、「郷土の研究」、「日本城郭大系」 755、「神楽尾」、「岡山の山城を歩く」 94

16 天狗寺城（仮称）

所在地 津山市大篠

立地

天狗寺山から南に延伸する尾根の頂部に所在する。下芽川の源流に位置し、標高は約六〇〇mである。

縄張

背後を三本の堀切で仕切り先端を城域として整備する。最高部に主郭を配し曲輪を連ねる。機能的には単郭に近い縄張りと呼べる。

近接して村落がなく、大篠から加茂へ抜ける下芽峠の道を抑える立

地から鑑みて、広域大名権力による番城と推察される。

城史

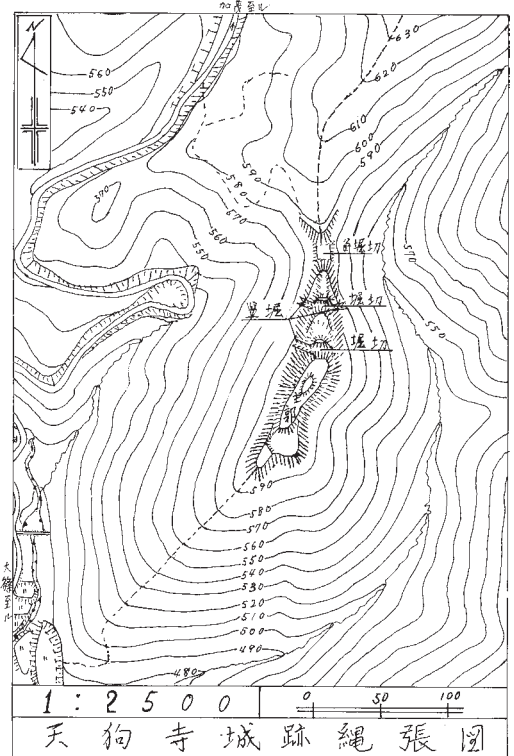
未詳。「東作誌」は東北条郡大篠村の「天宮寺山」として、一般に誤って「天宮岐」というともあり、谷に入り二四、五町、山の高さ約二〇町と記し、また「智悟山天宮寺」として下り茅にあり、天狗寺ともいい地元では誤って天宮義という、西の坊、仁王門、鐘突堂の跡などがあるとする。同書では城郭としての記載はないが、「津山市中世城郭等配置図」は天狗寺山（標高八三一・八m）の東南、梶間山（七〇一m）山頂付近に「天狗寺城」と表記しており、山形省吾氏は踏査によりその西南地域に天狗寺城を見出している。あるいは本来は山寺か。

文献

「東作誌」、「神楽尾」



天狗寺城（仮称）



17 藤田城・たう多山城・藤田山城・藤多山城

所在地 津山市小原

立地

大篠地区の県道三四五号線の北側にあり、標高約二五〇mの小高い丘陵上に位置する。津山盆地北部を一望できる。西側に樋ノ内池がある。

縄張

土塁囲みの主郭を中心として周りに削平地が連なる。村落に近接しており、周辺遺構については後世の改変の可能性が考えられる。立地から考えて村落に拠った土豪の持城とみられる。

城史

「古城之覚」は苫北郡の「藤田之（城）」として、城主不詳、また別に東北条郡大篠村の「たう多山」として、城主を赤松宮内少輔師範とす

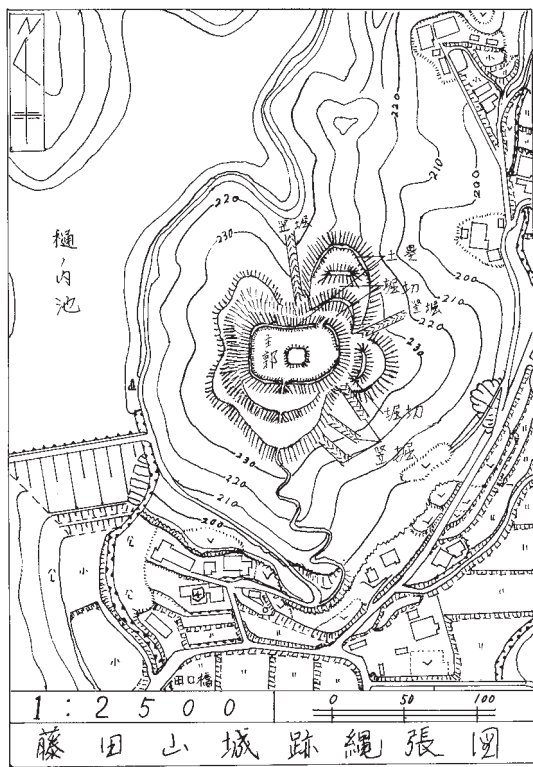


藤田城・たう多山城・藤田山城

文献

る。「美作鬢鏡」にも「藤多山城」「藤田の城」を重出。「美作鏡」は「藤田山城」のみ。「東作誌」は「藤田山古城」として、本丸跡（約一〇間四方）、二の郭（長さ七間、幅二間）、三の郭（幅一間、長さ一〇間）、北の尾崎に堀切が二重、南に三段あつて東南に向けた城と記す。

「武家聞伝記」、「美作鬢鏡」、「東作誌」、「美作鏡」、「苦田郡誌」、「岡山県通史」苦田3、「美作古城史」、「日本城郭大系」763、「岡山県文化財総合調査報告」25、「神楽尾」



18 烏ヶ山からす城・烏ヶ仙せん城

所在地 津山市大篠

立地

烏ヶ山山頂から南の稜線に向けて所在する。標高は七〇一mである。県道三四五号線「上横野・兼田」線から、後谷方面へ。目指す大佐々神社西脇の山道が登り口

縄張

天狗寺山へ続く背後の尾根を堀切で仕切り、前面に城域を形成する。主郭の西側には三本の横堀がみられる。プランとしては奇妙な配置となっており、今後の精査が求められる。さらに南側に向かって尾根筋が伸びるが、城域として積極的な改修はみられない。なお図中には南端に見張台として石塁などが記されているが、岩山の地勢を鑑みると精査の必要がある。



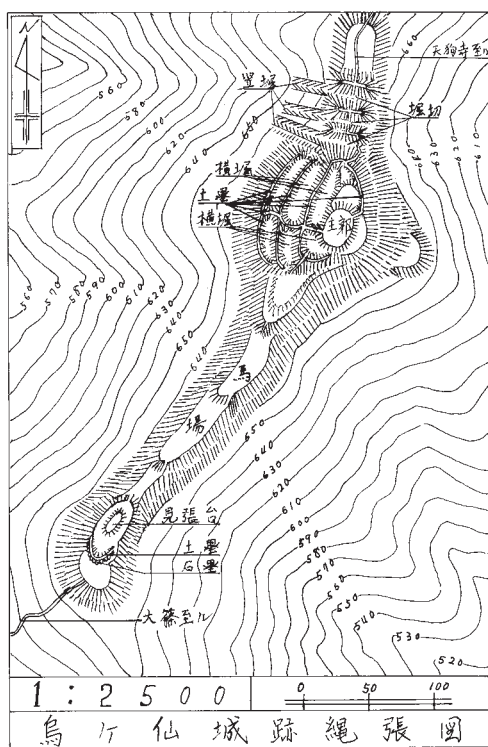
烏ヶ山城・烏ヶ仙城

城史

「東作誌」は東北条郡大篠村の「烏ヶ山古城」として、医王山（津山市吉見）の向城と伝わる砦の跡があり、約七、八間四方の郭と堀切二条があると記す。烏ヶ山は烏ヶ仙とも表記され、綾部・上高倉・大篠三ヶ村の堺にあたるという。東北条郡下原村（津山市加茂町成安）条にも、烏ヶ仙の畦に城跡ありと記す。地元では別名「高倉富士」とも呼ばれている。

文献

「医王山記」、「東作誌」、「美作古城史」、「神楽尾」、「戦国山城を攻略する」



19 城山しろやま

所在地 津山市靱保

立地

未詳。地元では「城山しろやま」と呼んでいる。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は東南条郡靱山村の村内に「城山」の地名があると記す。「津山市中世城郭等配置図」にも位置未詳として「城山」の表記がみえる。

文献

「東作誌」、『神楽尾』

20 勘解由屋敷かげゆ

所在地 津山市大田

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は東南条郡大田村の「勘ヶ由屋敷」として、関勘解由の下屋敷といい、涼矢倉の跡が残ると記す。

文献

「東作誌」

21 池上城いけがみ

所在地 津山市下横野

立地

南西に延伸する標高約一四〇mの丘陵先端に所在する。東を下横野地区植田集落に接する。標高約一四〇mの丘陵先端にある。

縄張

下横野の高田神社の社地が比定されている。神社は方形の区画になっており、北側に土塁が確認される。

城史

「東作誌」は東北条郡下横野村の「池上砦」として、地名は久影ともいい、懸縄山（津山市下横野・上横野）の砦で砦の跡がわずかに残る、永祿期頃に前原新之允が住み、元龜二年（一五七二）一〇月二六日に死したと記す。



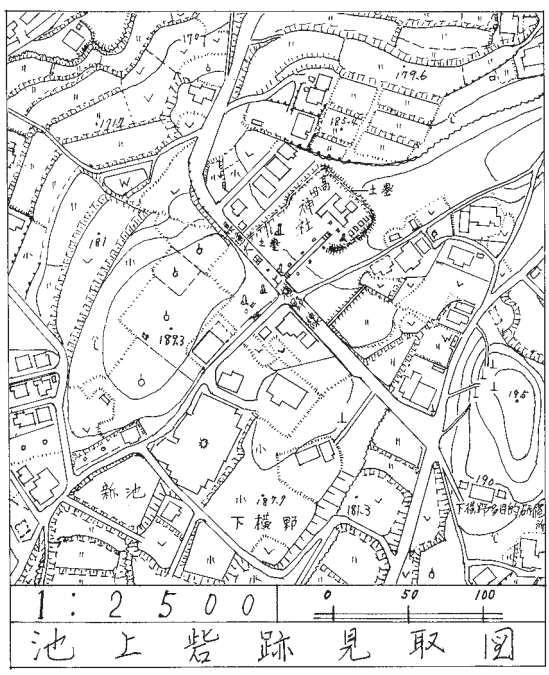
池上城

備考

『英田郡誌』は、大正二年（一九一三）に久保・下横野・植田・奥谷・倉木の五社を合祀し同時に現地に移転、社号を高田神社としたと記す。

文献

「東作誌」、『英田郡誌』、『美作古城史』



22

懸縄山城

所在地 津山市下横野・上横野

立地

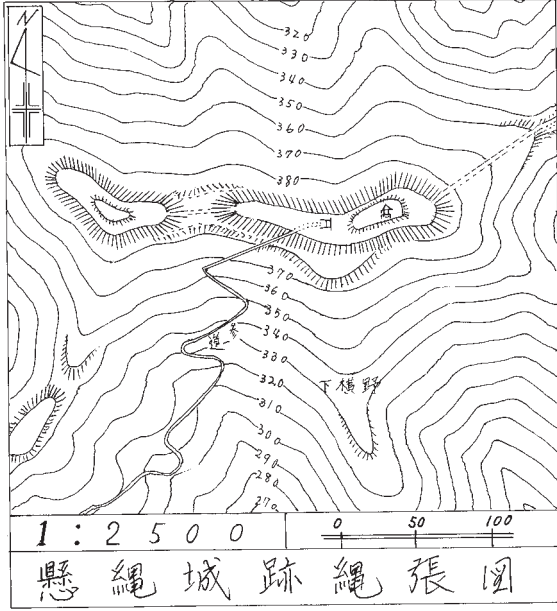
横野川の左岸にあり、北には下茅川が西に流れる。標高約三九〇mの独立峰の天王山山頂付近に位置し、津山盆地北部が一望できる。

縄張

山上に複数の平坦地を持つ。東側の天王社の社地となっている部分が主郭とみられる。村落に拠る土豪の持城と考えられる。

城史

「東作誌」は東北条郡下横野村の「懸縄山」として、天仁年中（二四六七〜九）に前原伊豆守影清が塞を構えたともいうと記す。「東作誌」、「美作古城史」、「神楽尾」



懸縄山城

23

小丸山城（上横野小丸山古墳）

所在地 津山市上横野

立地

下横野地区植田集落にあり、横野川左岸に接する標高約一七〇mの独立丘陵上にある。高田神社の約四〇〇m西に位置する。

縄張

前方後円墳を利用した丘城。墳丘を削平して単郭の敷地を構えたものであり、村落単一位で割拠する土豪層の館城であったと考えられる。

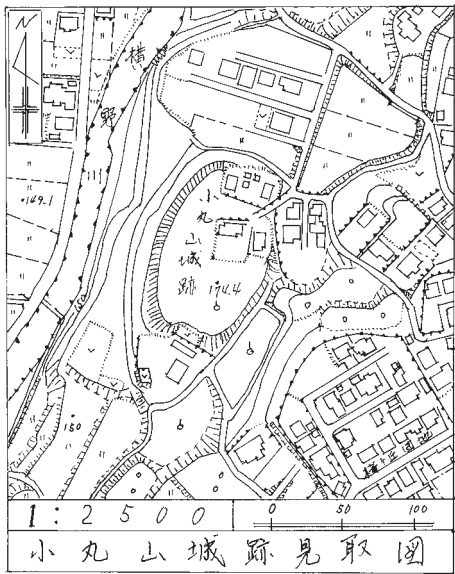
城史

「東作誌」は東北条郡下横野村の「小丸山」として、二木の地の田間に出張った小丸山で、上に土塁や井戸の跡があり、田口志右衛門重光の屋敷というと記す。『日本城郭大系』は別称を天神山城とする。この場所は上横野小丸山古墳と呼ばれる前方後円墳だが、墳丘ほとんどが削平されており、平成四年度（一九九二、三）に津山市教育委員会により発掘調査が行なわれ、葺石の基底部が検出されている。

文献

「東作誌」、「美作古城史」、「日本城郭大系」747、「年報津山弥生の里」1

備考



小丸山城（上横野小丸山古墳）

24 城山

所在地 津山市下横野

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は東北条郡下横野村の「城山」として、大槌の地にあり、竹内の南の山で、少し砦の形があり、半ばに段がある、城主は不詳と記す。「津山市中世城郭等配置図」にも位置未詳として「城山」として表記がみえる。

文献

「東作誌」、「神楽尾」

25 芦田屋敷・城山あしだ じょうやま（東田辺城山遺跡）

所在地 津山市東田辺

立地

東田辺地区の昭和池北西に位置し、黒沢山系から南に延伸する標高約二五〇mの尾根付近にある。

縄張

集落の背後の高台に土塁囲みの単郭の曲輪を構えた縄張りを持つ。東側斜面に段状地形がみられるが集落に近く後世の改変の可能性が高い。伝承の通りとすると、芦田屋敷の存在は、宇喜多氏家中に参画した家臣が在地に構えていた屋敷跡のあり方を知る手がかりとなる。



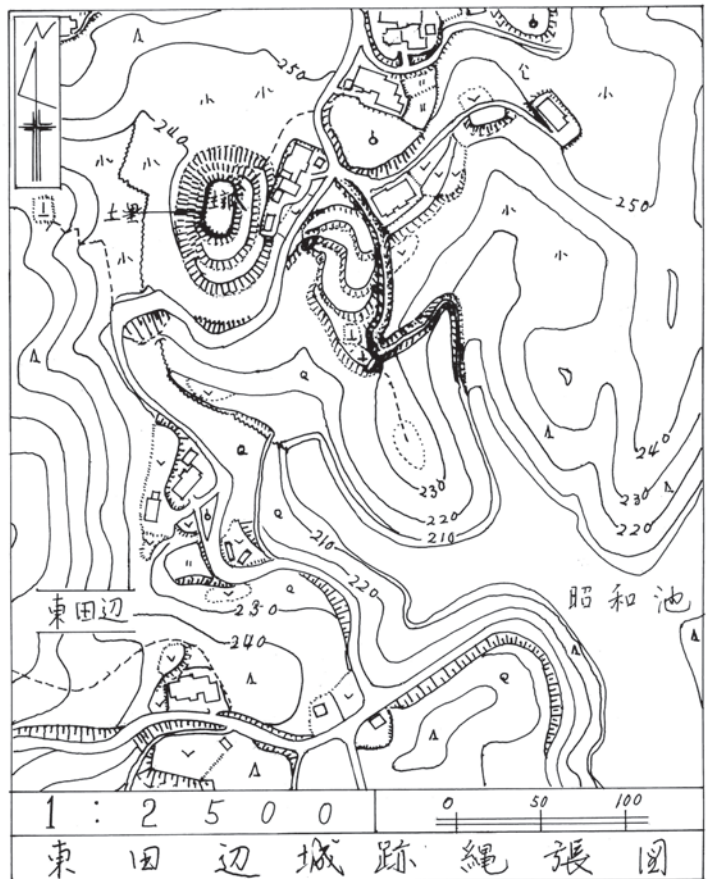
芦田屋敷・城山（東田辺城山遺跡）

城史

「作陽誌」は苦南郡東田辺村の湯谷には、温泉跡と薬師堂とともに宇喜多秀家の家臣芦田右馬丞・作内の旧宅ありと記す。なお右馬允入道宗源は、西田辺村にもあったとする。『苦田郡誌』は、「芦田屋敷」として、俗に城山と称すとする。

文献

「作陽誌」、「苦田郡誌」、「改訂岡山県遺跡地図」津山7、「美作一宮郷土の遺産」



26 谷上城(仮称、東田辺谷上遺跡)

所在地 津山市東田辺

立地

東田辺地区の県道三四三号線の北側に位置し、昭和池の西約五〇〇mにある。黒沢山系から南に延伸する標高約二五〇mの尾根上に位置する。

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、尾根を加工した七ヶ所の郭状平坦部を確認とする。

城史

未詳。『改訂岡山県遺跡地図』は城跡かと記す。

文献

『改訂岡山県遺跡地図』津山10



谷上城(仮称、東田辺谷上遺跡)

27 関勘解由屋敷

所在地 津山市東一宮

立地

山方地区の県道三四三号線の北側に位置し、昭和池の約八〇〇m東にある。黒沢山系から南に延伸する標高約二七〇m付近の尾根上に位置する。

縄張

屋敷地らしき区画が確認されるが、内部は土塁により複雑に仕切られており後世の改変が激しい。屋敷として機能したとすると、関氏は津山盆地の後背地の高台に自らの屋敷を構えたと評価できる。関勘解由は不明であるので今後の検証が必要であるが、津山藩森家一

城史

門、関氏一族の可能性がある。

『東作誌』は東南条郡東一宮村の「関勘解由屋敷跡」として、高築の地にありと記す。同書は併せて「上藤屋敷」

を掲げ、西山方の農民清右衛門の持林の内にあり、上藤については不詳としている。『改訂岡山県遺跡地図』は「山方深田遺跡」とし、尾根を段状に加工

しており城跡かとする。また近接する「山方鳥羽遺跡」は幅二m、高さ一mの土塁が約五〇mにわたって存在し、一部は墓地や林道で切られている。土塁の性格は明瞭でないが城か、とする。

遺物

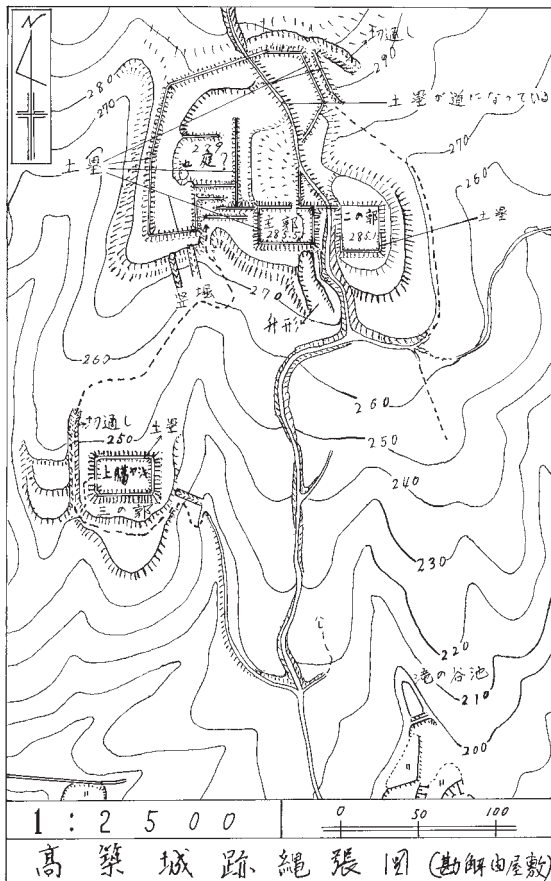
土器(時期不詳)。

文献

『東作誌』、『苦田郡誌』、『美作古城史』、『改訂岡山県遺跡地図』津山18・20・26、『美作一宮郷土の遺産』



関勘解由屋敷



28 中島頼名屋敷

なかしま

所在地 津山市東一宮

立地

縄張

城史

文献

鵜羽川東岸、中山神社の約一〇〇m東にある。
未詳。

『苦田郡誌』に「中島頼名宅趾」として、土地の高さ二丈でおおよそ円形、西北に「影向殿」という小段ありとし、頼名は慶雲年中（七〇四〜八）に中山神社を創立奉仕した人物と記す。

『苦田郡誌』

29 城所屋敷・構屋敷

かまきえ

所在地 津山市一宮

立地

縄張

城史

文献

鵜羽川右岸、横野川との合流地点から北へ約一〇〇m遡上した付近一帯にあたる。
未詳。

「作陽誌」は苦南郡西一宮村の「城所屋敷」として、城所備後守の旧宅で両所にありと記す。『美作一宮郷土の遺産』は、城所氏のち中山神社に仕える泉氏、美土路氏の屋敷となり、古老によれば一町四方の土塁と堀に囲まれていたといい、難波酒造敷地内に東西一五m、高さ三mの土塁が残り、最近まで公会堂東にあった防火用水プールも堀跡だったようだ」と記す。

『作陽誌』、『苦田郡誌』、『美作古城史』、『美作一宮郷土の遺産』

30 長良嶽城

ながらだけ

(仮称、一宮長良嶽遺跡)

甲宮ノ谷城 (仮称一富宮ノ谷遺跡)

所在地 津山市一宮

立地

縄張

城史

備考

美作国一宮・中山神社境内の約四〇〇m西の尾根上にある。谷を挟んで南北にそれぞれ標高約一四〇mの位置に遺構が残る。

複数の削平地が並ぶ。神社地に近いことから中山神社関係の施設跡の可能性が考えられる。中山神社の社地と共に今後の精査が期待される。

天文末頃、「苦田人」が国の疲弊に乗じて叛乱、群盗が呼応し兵は数千となり、尼子晴久は連戦しても勝てなかった。その賊将は美作国一宮に拠っており、晴久は社殿に放火して賊兵を大敗させ、永祿二年（一五五九）に本殿を造営したとされる（『作陽誌』）。この交戦は天文二〇年（一五五一）一〇月、大河原貞尚の先導による尼子晴久らの美作国出勢にあたる（『証如上人日記』「本願寺証如上人書状案」）、併せて天文二年（一五三三）、中村・大河原両氏が西軍守護代職をめぐる論争論し、一宮が炎上したとの所伝もこの事件を伝えるものだろう。社地を取り巻く城郭はこうした兵乱に関連する遺構である可能性が高い。

『改訂岡山県遺跡地図』は「一宮長良嶽遺跡」について、中山神社の背後の尾根上に段状の平坦面が見られ、堀切・土塁が遺存とし、「一

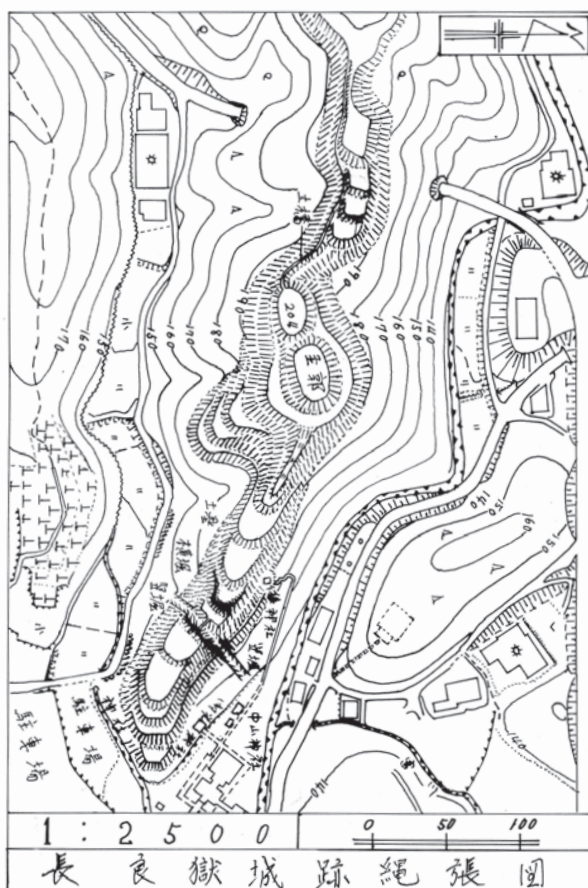


長良嶽城

文献

宮甲宮ノ谷遺跡」について、尾根上に数段の平坦面が存在し、土塁状の部分ありと記す。

「作陽誌」、「二宮社伝書上」、「改訂岡山県遺跡地図」99・104



31 採女屋敷

所在地 津山市小原

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は東北条郡綾部村の「採女屋敷」として、猪股采女の屋敷跡と記す。

文献

「医王山記」、「東作誌」

32 塩屋ヶ城

所在地 津山市綾部

立地

烏山と岩尾山城の中間にある標高約五九〇mの山頂に位置し、美作滝尾駅から南西約一・五kmに位置する。

縄張

最高部を土塁囲みの主郭として、周囲に腰曲輪を廻す。腰曲輪の墨線にも土塁が配されている。城域の南側に堀切がみられる。土塁を廻すことでコンパクトに防禦しようとする意図が見て取れるが、土塁上に虎口はみられず、在地系縄張り技術の範囲を出ない縄張りとなっている。毛利勢の番城か、それに与同する在地の土豪層の持城と考えられる。



塩屋ヶ城

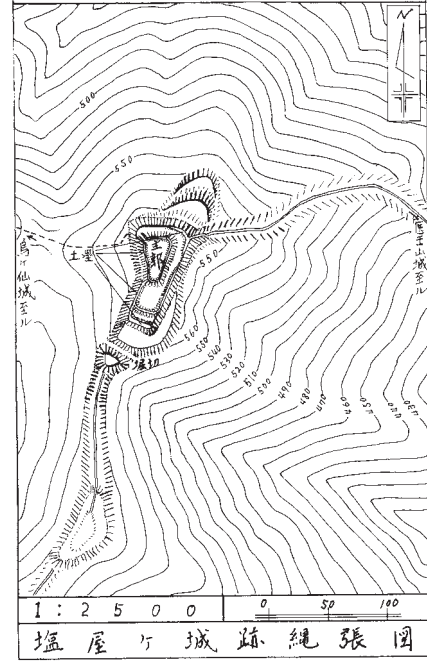
城史

「東作誌」は東北条郡綾部村の「塩屋ヶ城」として、「洞フ谷」の上であり、山へは四町余り、上の丸（東西四間、南北一八間）に堀切、城は東南に向き背後は険しいとし、毛利家の家臣塩屋豊後守らが籠城したと記す。「津山市中世城郭等配置図」は位置未詳とする。

天正七年（一五七九）一月、毛利氏によって岩尾山城に派遣された塩屋豊後守元真は、宇喜多勢の攻撃に対し、湯原春綱や小川元成と同城での籠城を続けている。籠城にあたり元真は五、六〇人の人数を抱えて詰めていたとあるが、同年一〇月には「祝山・仙々番衆」の斎藤・塩屋家中から宇喜多氏への内応者が城から退出する事件が起こっている（「藩中諸家古文書纂」、「福原家文書」）。ある日、元真の子塩屋左介が里の風呂に出かけたところ、風呂屋を取り囲んだ花房職之の兵に討たれ、遺体は父のもとに届けられたという（備前正宗文庫所蔵文書、「陰徳記」）。元真はその後も籠城を続けたが、同九年正月、湯原・小川氏とともに岩尾山城から退去するに至り、湯原氏とともに升形城（鏡野町香々美）への在番を命じられている（「閩閩録」、「吉川家中并寺社文書」）。

備考
文献

平成一八年(二〇〇六)に山形省吾氏が遺構を確認した。「医王山記」、「東作誌」、「美作古城史」、「日本城郭大系」 751



33
中陣

所在地 津山市綾部

立地

綾部草加部工業団地の北方に鎮座する綾部神社の南側、標高約一八〇mの丘陵上に位置する。未詳。

城史

「東作誌」は東北条郡綾部村の「中陣」として、「勿食山」ともい、麓に堀切、山上に

「武者屯」があり、長さ一町、幅五間ばかり、

医王山(津山市吉見)に城があった頃の砦で、「保坂村」の黒見山(黒女城、津山市堀坂・新野山形)と医王山の間なので中陣というとの伝承を記す。「津山市中世城郭等配置図」は位置未詳とする。

遺構は造成により大部分が消滅している。

備考
文献

「医王山記」、「東作誌」、「美作古城史」、「日本城郭大系」 759、「神楽尾」



中陣

34
八臥城・鉢伏城

所在地 津山市綾部

立地

天狗寺山系から南に延伸する標高三一四mの丘陵上に位置する。美作滝尾駅から南西に約一・二kmにあり、津山盆地北部が一望できる。最高部に主郭を配し尾根に曲輪を連ねる。城域の西側に一本、東側に二本の堀切がみられる。曲輪には部分的に土塁があり、単調に連なる曲輪を一体的に防禦しようとする意図が見て取れる。綾部一帯を支配する有力土豪の持城か、岩尾山城に関連した番城のいずれかの可能性が考えられる。

縄張

城史

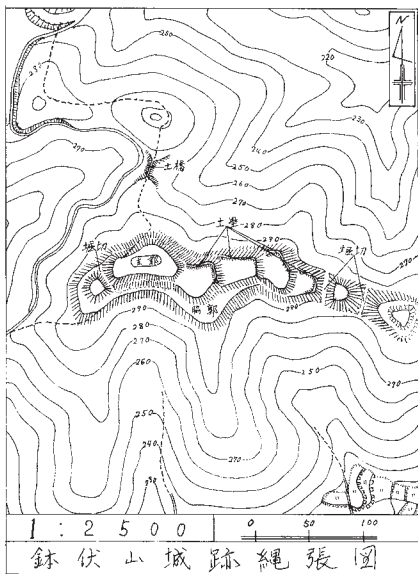
「古城之覚」は苫北郡綾部村の「八臥之(城)」として、城主不詳とする。「東作誌」は、「鉢伏山」へは二町余り、本丸(東西一三間、南北六間)、本丸から一段低く堀切を隔てて東の丸、南を大手に背後は険しいとし、天正七年(一五七九)二月に毛利家の家臣樋崎弾正元兼、後に花房助兵衛職秀の陣城というと記す。

文献

「武家聞伝記」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「医王山記」、「東作誌」、「苦田郡誌」、「岡山県通史」苦田10、「美作古城史」、「日本城郭大系」 762、「神楽尾」



八臥城・鉢伏城



35 岩尾山城・祝山城・医王山城

いわおやま いおつやま いおつやま

所在地 津山市吉見

津山市指定史跡

立地

天狗寺山系から南東に延伸する標高約三九〇mのピーク上一帯に位置し、東部を加茂川が流れる。美作滝尾駅から約五〇〇m北西にあり、妙原・堀坂・綾部・草加部地区を一望する。国道五三号線、成名郵便局前方の信号機を直進し、県道六号「津山、智頭、八頭」線を進行する。滝尾駐在所の先にある「岩尾寺」



岩尾山城・祝山城・医王山城

の裏手に案内板があり、登り口も付設している。

縄張

縄張りをみると北側の山頂部と南側のもうひとつのピークを中心に南北に長い城域を持つ。北側の背後の尾根筋に連続堀切を入れて遮断するとともに、南面に放射状の畝状空堀群を入れて堅固に防禦する。しかし織豊系縄張り技術による改修が幾つか確認でき、山頂の表採瓦による分析でもコビキB類が採集されており、宇喜多氏・小早川氏段階に瓦葺き建物があったと考えられている。織豊系縄張り技術による改修は、主郭と南側のピークにピンポイントで加えられている。まず、主郭部では岩盤の削り出しでつくられた西側の石塁と北東側の石塁が実際は食違いになっており、西側の石塁隅でひと折れして中に入ることができる虎口プランとなっている。一方、南側ピークでは曲輪の中央に配された石列と対応して石垣で楯形虎口が確認される。

城史

「古城之覚」は苦北郡吉見村の「岩尾山之(城)」として、城主を山名入道忠重とし、また別に正保書上五四城の一で、東北条郡綾部村に「医王山」として城主不詳とする。元禄三年(一六九〇)の今井氏書上(『美作古城史』所収)に、今井氏は「岩尾山之城主山名坊庵唯重」の家臣となり、「三星」(美作市明見・入田)から岩尾山を攻撃された際に草加部村(津山市草加部)で迎え撃つたとする。「美作鬢鏡」「美作鏡」もともに「医王山城」「岩尾城」と重出。「東作誌」は「岩尾古城」として、山へは二町半で城は東向き、本丸(六間四方)、二丸(七間四方)、三丸(同上)、本丸の北に「坊主越」と呼ばれる堀切があり、三丸の表は御林山、城主は山名坊庵忠重で事跡は「医王山記」に見えると記す。天保国絵図に「古城跡」とある。祝山城とも。『日本城郭全集』は「医王山城」とし、頂上を本丸とし、二の丸、三の丸跡、深い堀切、井戸跡も明確に残り、石垣に使ったらしき切石も各所にあると記す。『改訂岡山県遺跡地図』は医王山遺跡とする。

天文一三年(一五四四)一月、尼子国久・誠久・敬久父子は備後国を経て美作国に討ち入り、浦上氏が軍勢を籠める「伊王山」など三ヶ城を落とし、出雲国に帰陣したとされる(『安西軍策』二)。永禄二年(一五五九)一月二日、小田草城(鏡野町馬場)の城主斎藤実秀が「岩尾山表」で合戦、実秀は鐘の働きを賞し桜井藤兵衛に所得を与えられている(『桜井家文書』)。

その後、北賀茂草薙氏の家臣黒岩土佐守が在番しており、天正

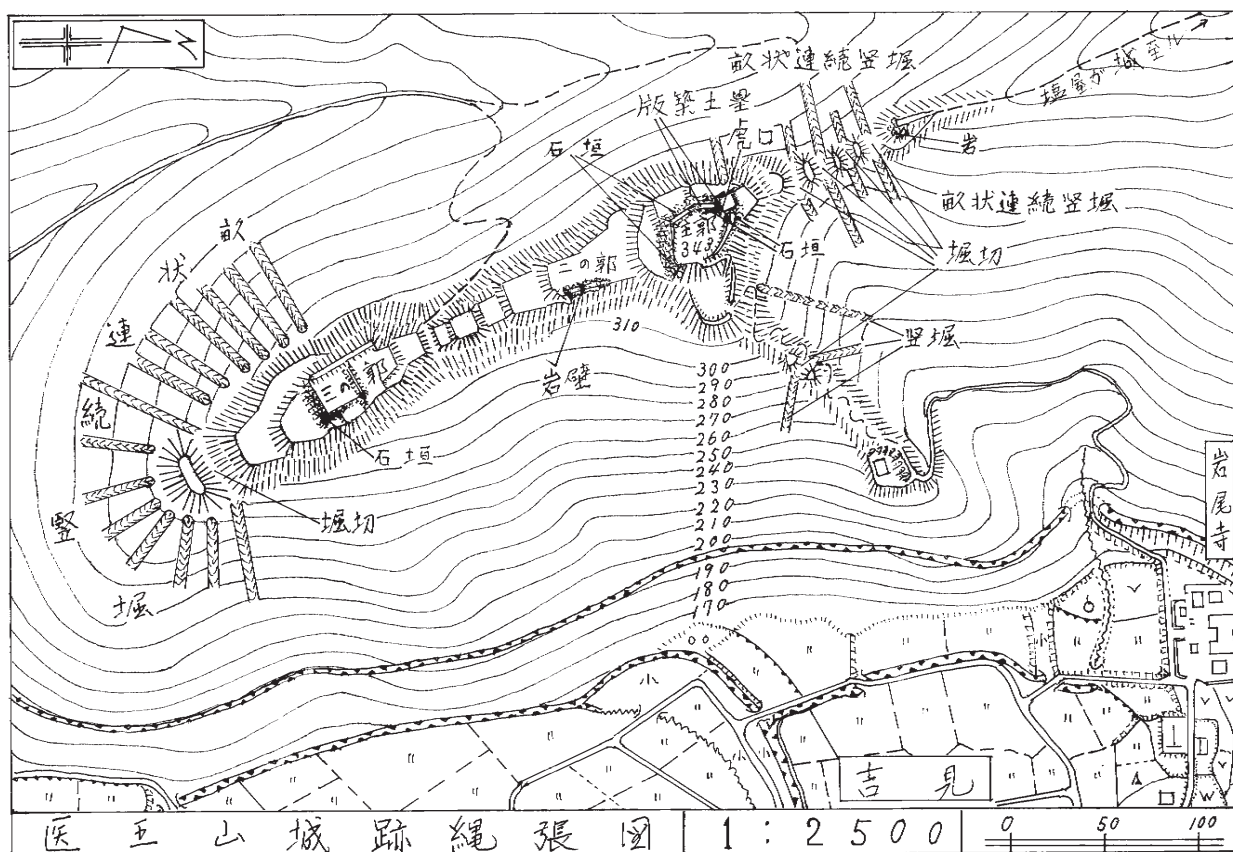


岩尾山城・祝山城・医王山城

文 献
遺 物

七年（一五七九）か、家中の混乱のため土佐守が「祝山」からいったん退去する事件が起こっている（「閩閩録」）。同年、毛利氏との対立にあたり宇喜多氏は「祝山城」に数ヶ所の付城が構え攻撃、対して毛利氏は十一月に塩屋元貞を、次いで湯原春綱、また小川元成を城に籠め、以降、毛利氏からは兵糧の搬入が続けられた（吉川家文書、「閩閩録」、「藩中諸家古文書纂」など）。同年、宇喜多直家は荒神山城（津山市荒神山）に拠り、「祝山」「升形」（鏡野町香々美）両城を攻撃しようとしたが、安芸国に帰陣していた吉川元春が八月二日に四十曲（新庄村）まで出勢したところ、直家は既に備前国岡山へ退いていたとある（「安西軍策」）。同八年八月には城中から離反者が出て三丸まで侵入され、一〇月にも離反者が城から退出している（「藩中諸家古文書纂」、「閩閩録」）。最終的には同九年正月、城兵は城から退去、湯原・塩屋氏は升形城へ、小川氏は小田草城の在番を命じられた（「閩閩録」、「吉川家中并寺社文書」）。ちなみに、花房職之は草苺氏の出城「いわう山」「ますかた」としものと「の三ヶ城を攻め取り、「ひつめの城」（日詰城、津山市加茂町百々・中原）の相城として加番の兵を籠めたとある（「花房家記事」）。

瓦・銅銭。
 「花房家記事」、「安西軍策」、「武家聞伝記」、「美作鬢鏡」、「備前軍記」、「東作誌」、「美作鏡」、「美作略史」、「苦田郡誌」、「岡山県通史」苦田8・11、「美作古城史」、「日本城郭全集」津山市1、「日本城郭大系」739・754、「図説中世城郭事典」三、「神楽尾」、「年報津山弥生の里」4、「改訂岡山県遺跡地図」津山215、「岡山の山城を歩く」68、山形二〇〇七、「津山市の文化財」、乗岡二〇〇九



36 有元屋敷

所在地 津山市草加部

文献

「武家聞伝記」、「美作鬢鏡」、「東作誌」、「美作鏡」、「苦田郡誌」、「岡山県通史」苦田2、「美作古城史」、「日本城郭大系」764

立地

未詳。

城史

「東作誌」は東北条郡草加部村の「有元屋敷」として、広さ三〇間四方で北に土塁の跡あり、また西北に堀切の跡ありとし、居主や事跡、年代など不詳と記す。

文献

「東作誌」

37 別所城

所在地 津山市上高倉

立地

天狗寺山系から南に延伸する標高約二二〇mのピーク上に位置し、西を別所池に接する。鉢伏城の約八〇〇m西にあたる。

縄張

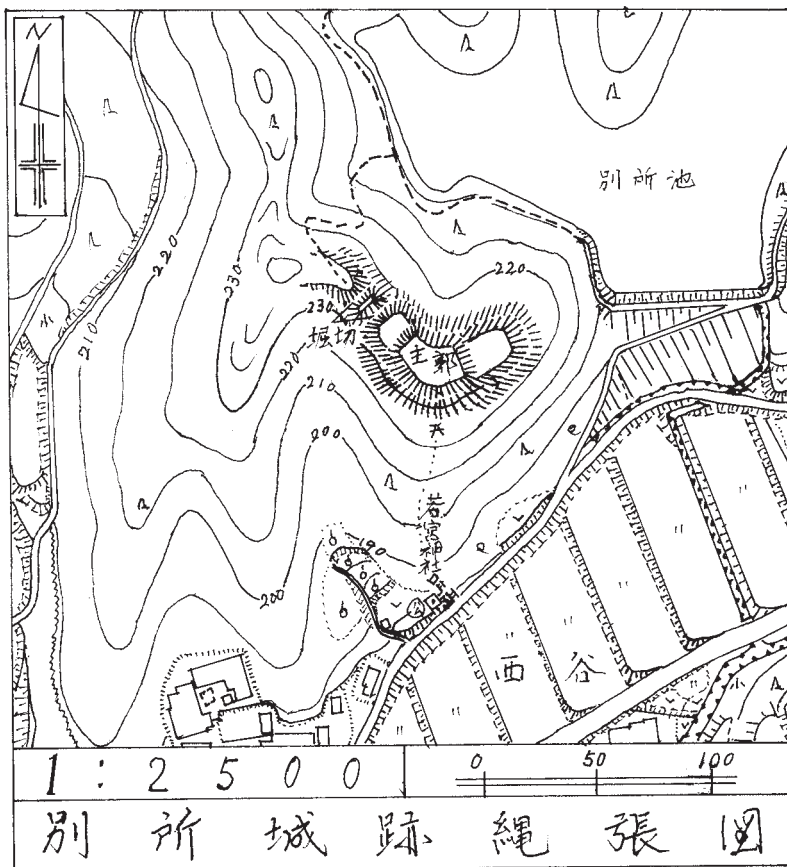
北西側に堀切を入れて先端にコンパクトな城域を形成する。三段の曲輪に分かれるが機能的には単郭の縄張りである。周辺の小規模山城・丘城と同様に、村落に抱った土豪層の持城と考えられる。

城史

「古城之覚」は苫北郡上高倉村の「別所之（城）」として、城主を山口周防守とする。「東作誌」は由来など不詳と記す。



別所城



38

岡隅城

おかずみ

所在地 津山市下高倉西

立地

下高倉西地区西之尾集落の北側にある標高約二〇〇mの丘陵上に位置する。

縄張

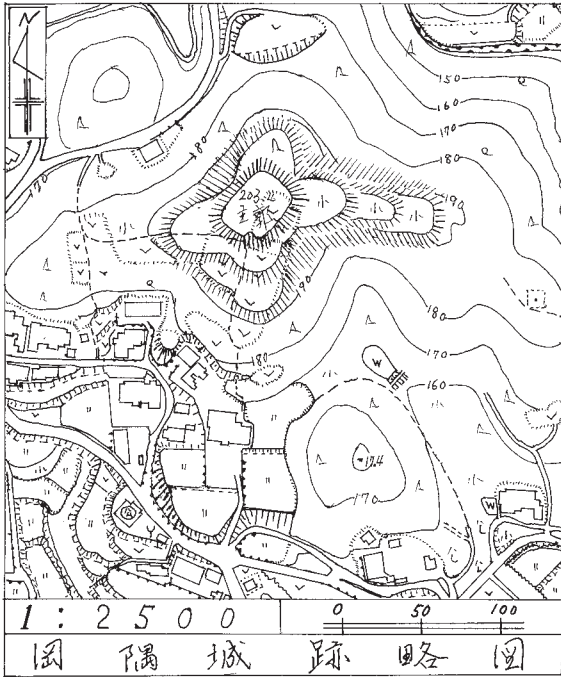
最高部に方形の主郭を配し、周りに削平地が連なる。集落に近いことから、周辺遺構については後世の改変を受けた可能性が考えられる。規模からみて、村落に拠った土豪が築いた持城と考えられる。

城史

『美作古城史』に、地元の伝承として岡隅城跡があり、城主を標備前守とするが事跡等は不詳とする。

文献

『美作古城史』



岡隅城

39 郡家屋敷

所在地 津山市下高倉西

立地

下高倉西地区有重集落の南方、高倉神社付近に位置する。未詳。

縄張

城史

『苦田郡誌』は「郡家屋敷」として、高倉郷の総社である杉森神社（現高倉神社）の馬場に接する四〇間四方の土地があり、付近には縦横に小路を通じ、市場、京田、柳原などの地名を残すとする。

文献

『苦田郡誌』

40 城・高野城

じょう

たかの

所在地 津山市高野本郷

立地

JR因美線高野駅の約六〇〇m西、鴨川公園一带に位置する。

縄張

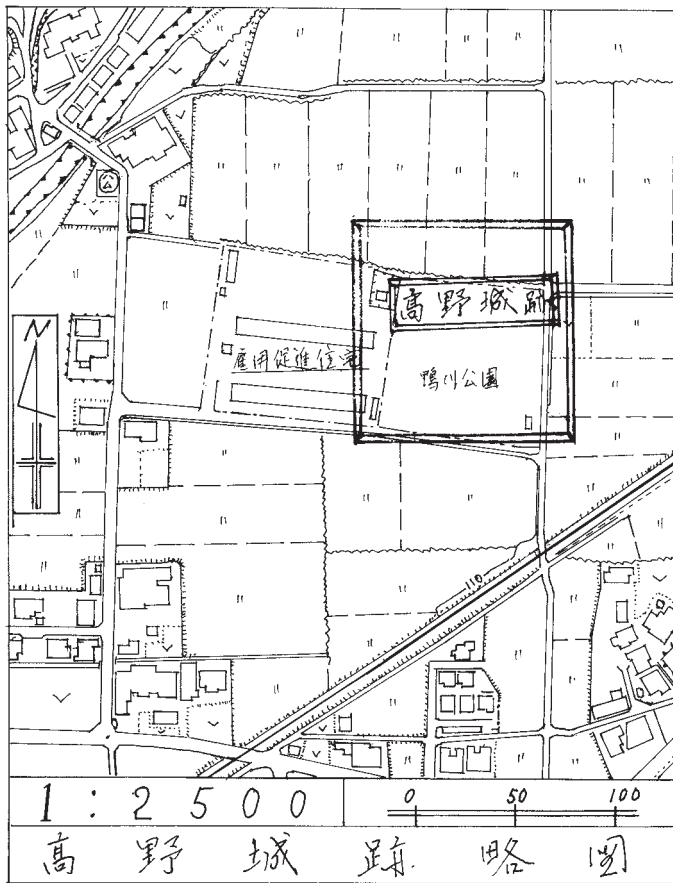
現況では遺構は確認できない。文献史料や地籍図からは土塁囲みの方形居館だったとみられる。高野地域を掌握した土豪の館城と考えられる。

城史

「作州古談」は押入村（津山市押入）に地元民が「ジャウ」と呼ぶ場所があり、三〇間四方で高さ六、七尺の土塁があるとする。これはおそらく高野本郷の城のことであろう。「東作誌」は東南条郡高野本郷西村の「築地跡」として、



城・高野城



文献

756

「東作誌」、『岡山県通史』 苦田 38、「美作古城史」、『日本城郭大系』
 土民は「城」と呼び城主は不詳、約三〇間四方で面積は約一段九畝、
 中には耕作地がある、一説に中島氏、また牧佐介が居城ともいうと
 記す。『岡山県通史』には高野城とし、『美作古城史』に同地は城の
 元と唱えられ、鴨川中学校が建設されるまでは土塁が認められたと
 いうとある。

41 志戸部城 (仮称)

所在地 津山市志戸部

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「天正年中美作国古城合戦記」は「志戸部の出張」として毛利領の
 内とし、永禄年中(一五五八〜七〇)に宇喜多氏が討取り、強力の
 侍「永礼某」に与力・同心を差し添え近郷を夜討し民家に狼藉した
 といひ、対して毛利氏は田口彦兵衛光重・大岡甚兵衛尉尚治をもつ
 て退治させ、出張をも討取り、永礼氏は南に逃げたとする。「東作誌」
 東南条郡志戸部村の項に地字として「土井ノ山」があり、あるいは
 これか。

文献

「東作誌」、「天正年中美作国古城合戦記」

〔旧勝田郡城〕

42

河 辺 構

所在地 津山市河辺

立 地

西を加茂川が流れ、南は国道五三号線に接する。兼田橋東詰の平野部にあり、現在はパナソニックの敷地となっている。

縄 張

詳細は未詳。

城 史

『美作古城史』は「河辺構」として、近世に移転する前の河辺集落跡地に築地、構口、構窪などの地名が残り、うち構口の三反三畝一七歩の地が宅跡の様相を伝えていと記す。
某年二月三日、浦上政宗は江見右衛門太夫の「河述構」への在城について、津田家職を使者として賞している（『美作国諸家感状記』）。

文 献

『美作国諸家感状記』、『美作古城史』、『美作国府館構城下町の検証』

43

河 辺 城

所在地 津山市河辺

立 地

河辺地区河辺集落と国道一七九号線を隔てて西側に鎮座する河辺神社の南側、標高約一六〇mの丘陵上に位置する。丘陵の南には広戸川が流れている。

縄 張

丘陵部の頂部に主郭を構え周囲に複数の曲輪を並べた縄張りとなっている。主郭北側の墨線には土塁が廻る。その中で主郭の東側に虎口が確認される。図をみると榊形虎口の形状を示しており、今後、

城 史

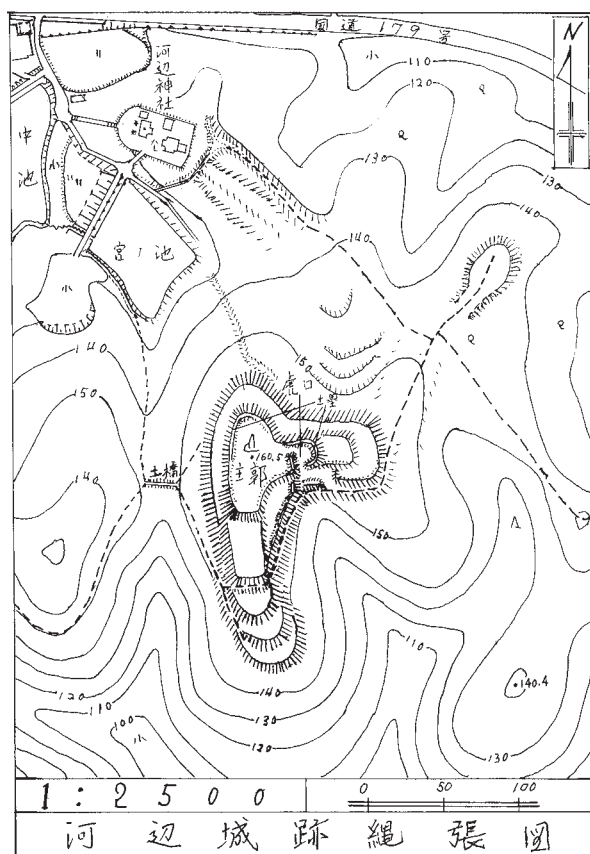
精査して虎口プランの確認をする必要がある。元々は、加茂川と広戸川の分岐点である河辺を支配した土豪の詰城とみられる。河辺構とセット関係で考えるべき丘城である。

『東作誌』は勝南郡川辺村の「城山」として城主や由来、城史や規模も不詳と記す。『美作古城史』には付近に的場、鍛冶という地名があり、古城との関連が伝えられているとする。

文和三年（一三五四）閏一〇月四日、赤松貞規から注進を受けた足利義詮は、相賀一族中の「美作国河述城」での軍功を賞している（上月文書）。

文 献

『東作誌』、『美作古城史』、『日本城郭大系』 745



河辺城

44 シトト城

所在地 津山市河辺

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は勝南郡川辺村の「シト、城」と表記して古戦場とし、時代や由来は不詳で、川辺村の往来家並の地域をいうと記す。『美作古簡集註解』には、年未詳四月二四日付け姓未詳理昌感状には「河辺志戸之原合戦」がみえ、関連の史料とされている。

備考

地元では「シトト原」と呼び古戦場とのみ伝えており、これを城郭とするのはおそらく「東作誌」の誤記か。

文献

「東作誌」、『美作古簡集註解』、『美作古城史』

45 相賀屋敷（仮称）

所在地 津山市瓜生原

立地

下瓜生原集落の東、広戸川に面した標高約一四〇mの丘陵上に位置する。

縄張

北東側の尾根に堀切を入れ、南西側にコンパクトな主郭部を形成する。主郭と周囲に帯曲輪から構成され、西側に下位曲輪を連ねる。立地や規模から、村落に拠った土豪層の持城とみられる。

城史

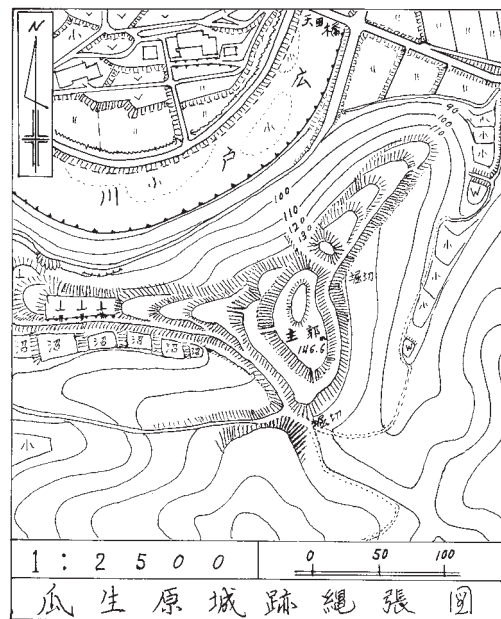
明治一三年（一八八〇）の「美作国勝南郡瓜生原村誌」（大岡家文書）は「相賀市兵衛宅跡」として、村



相賀屋敷（仮称）

文献

の山根の地の北にあり、一二間四方、市兵衛は宇喜多氏に仕え三〇石、荒神山（津山市荒神山）の城主花房職之に与力、慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原合戦で行方不明と記す。『美作国勝南郡瓜生原村誌』、『美作古城史』



46 井保木屋敷（仮称）

所在地 津山市瓜生原

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は勝南郡瓜生原村の「伊保木左衛門」として、時代不詳だが伊保木山に住み武名ありなどとする。明治一三年（一八八〇）の「美作国勝南郡瓜生原村誌」（大岡家文書）は「井保木左衛門宅跡」として、村の東、井崩山の頂上にあり、井保木左衛門が住むと言い伝える、由緒や年代は不詳と記す。

文献

「東作誌」、「美作国勝南郡瓜生原村誌」

47 尉ヶ城・横手城・城山

所在地 津山市瓜生原

立地

県道二六号線の東、吉井川左岸にあり、標高三三二mの山頂一帯に位置する。津山盆地東北部が一望できる。和気山と畝続きである。

縄張

曲輪の削平は良くなく数段の削平地から構成される。それを土塁により仕切ることによって城域が構成されているが、牧草地も近いことから城郭類似遺構の可能性もある。今後の慎重な精査が期待される。

城史

「古城之覚」は英田郡瓜生原村の「しやうがよこて」として、城主は不詳とする。「美作鬘鏡」は「勝横手城」、「美作鏡」は「尉ヶ横手城」とする。「東作誌」は「城山」として、城主は不詳、宇喜多氏の治世以前の城と伝えられている。城は高城とその出丸の平城からなり、ふたつの山が並び立ち、城がある高城への坂路は八町、西方に本丸（一五間四方）、二丸（三〇間四方）、その他小郭があり、大手は南、和気山の方で地名を大木戸といい、平城は小城で山内に火の釜（古墳）が一ヶ所あると記す。明治十三年（一八八〇）の「美作国勝南郡瓜生原村誌」（大岡家文書）は「横手ノ城」として、村の東南の横手山にあり、山の高さ六一間、周囲三里、麓は羽仁村・安井村・金井村に跨り、本丸の三方に「宅地ノ跡・坪ノ座^{（寄み）}跡」あり、中央を「平城」、その西を「高城」、東を「場ガ城」といい、城主などは不詳とする。「美作古城記」は付記として和気山の北の



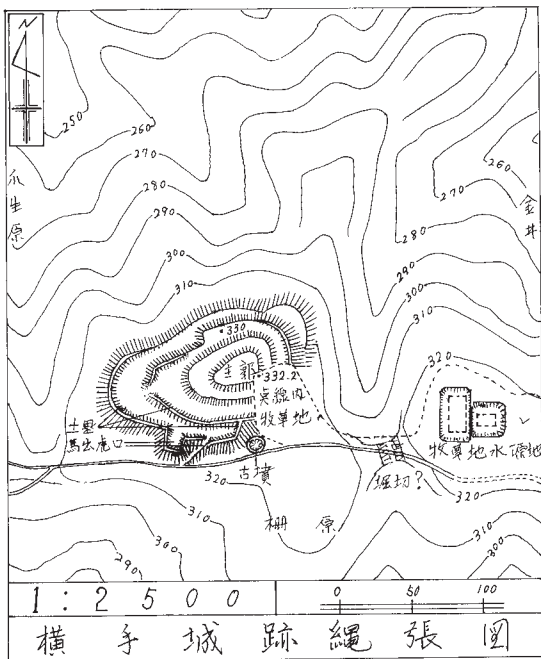
尉ヶ城・横手城・城山

文献

尾鼻にあり、南の尾首にある本城の姥ヶ城（美咲町羽仁）に対して「尉」というか、と記す。『岡山県勝田郡志』には永久元年（一一一三）、横山重敏が館を築き横手山城といい、敏之・敏勝・敏良を経て正中三年（一三二六）に滅亡とする。『美作古城史』は「横手城（田淵城）」とする。

応仁元年（一四六七）一〇月、赤松氏の家臣中村五郎左衛門尉が美作国回復を目指して同国院庄（津山市院庄）に入った際、山名勢は東郡の「和介山」などに籠り抵抗、交戦で栗井加賀と松原弾正が討死したとある（「応仁別記」）。この「和介山」について『美作略史』は、「瓜生原村平城」かとし、山中には鴛淵山（美咲町羽仁）・平・横手等の四城があると記している。

「応仁別記」、「武家聞伝記」、「美作鬘鏡」、「東作誌」、「美作鏡」、「美作古城記」、「美作国勝南郡瓜生原村誌」、「美作略史」、「岡山県通史」勝田19、『美作古城史』、津山市13、『日本城郭大系』742・768



48 神宮城・新宮山城

所在地 津山市新田・福井

立地

広戸川が大きく湾曲する右岸の標高二〇四mの丘陵上にある。県道四一五号線の約五〇〇m北に位置する。国道一七九号線、西吉田地区から新田方面へ。「土居集会所」前にある鳥居脇の道が登山道。

縄張

緩やかに段が連なる丘陵部に対して、中央に二本の堀切を入れて東西に分ける。東側を主郭部とし西側を第二郭として機能させたものとみられる。全体的に曲輪の削平が弱く、曲輪の造成よりも土塁などで城域を囲い込むタイプの縄張りとして評価される。主郭の西側には削り残しの土塁がみられる。一方、第二郭をみると、西端には折れを伴う直線的な土塁や虎口が確認される。城郭関連遺構かどうかを含めて今後の精査が必要である。

城史

正保書上五四城の一で、「古城之覚」は、英田郡新田村の「神宮之(城)」として、城主は木下道光、別に勝田北郡福井村の「新宮山」として城主不詳とし、同一の城を別々に掲げる。城山は東南から北西にかけて約一五〇間、横は西南から東北にかけて約六〇間で高さ約八、九尺の土塁の跡が残り、嶺々には段々があるとす。「美作鏡」は両城を同一と指摘する。「東作誌」は「真宮山」とも表記し、一説に木下道光の家臣木下勘四郎が居城し、城の麓に神宮の小祠がある、東の城(丸)は新田村に、東の城(丸)は福



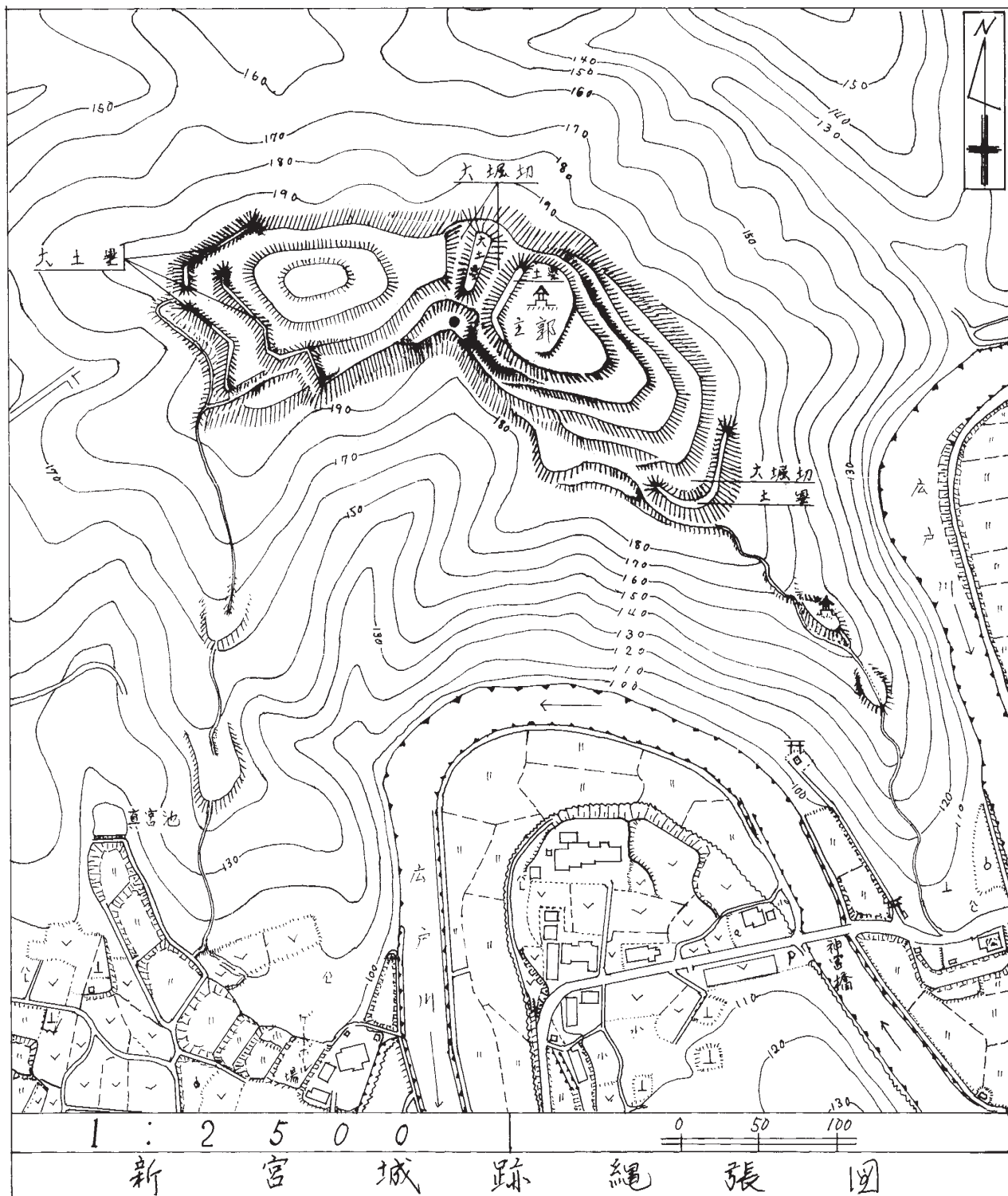
神宮城・新宮山城

文献

井村に属すと記す。また馬乗場と伝える馬場(東西約三〇間)が田畑となり残るとある。天保国絵図に「新宮古城跡」とある。明治一三年(一八八〇)の「美作国勝南郡金井・西吉田・福力・新田四村誌」は「神宮城」として、新田村の東北の神宮山にあり、東は福井村、西は新田村、本丸(東西二二〇間、南北八〇間)と土塁ありと記す。同一二年の「美作国勝北郡福井村誌」は「真宮山古城跡」として、村の西にあり、嶺に土塁(長さ四〇間、高さ一間半)が残ると記す。『岡山県勝田郡志』には、城の南面は断崖絶壁の要害堅固で、東南麓には新宮神祠あり参詣者が多いとある。『日本城郭全集』は「新宮城」とし、長元(一〇二八〜三七)の頃、木下道光が築城、元暦元年(一一八四)道元の時、源氏の軍勢に攻撃され落城したとし、山上は本丸、二の丸に区切られ、南側は断崖絶壁とする。

延文五年(正平一五年、一三六〇)八月、山名時氏の因幡・美作両国での布陣に対し、赤松世貞・則祐が攻撃し降参した城のうちに「新宮」がみえる(『太平記』)。

『太平記』、「武家聞伝記」、「美作鬢鏡」、「東作誌」、「美作鏡」、「美作国勝南郡金井・西吉田・福力・新田四村誌」、「美作略史」、「岡山県勝田郡志」、「岡山県通史」勝田2・20、「美作古城史」、「日本城郭全集」津山市7、「日本城郭大系」753、「津山市広野の歴史散歩」、「改訂岡山県遺跡地図」津山840



49 義経屋敷・義経陣場・義経陣

所在地 津山市新田・池ヶ原

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「山陽道美作国古城跡」は神宮城対岸（津山市新田・福井）の「義経屋」として、昔「義経」が攻撃したと地元で伝わるとし、今は麦畑となつてしていると記す。「東作誌」は勝南郡新田村の「義経」として、新宮の東の外れから南に長い川岸の山で、源義経が平家の残党五郎丸の拠る神宮城（新宮山城）を攻撃するため陣を構えた陣場跡と伝わり、今は畑となつてしていると記す。また義経大明神が祀られているとする。明治一三年（一八八〇）の「美作国勝南郡池ヶ原村誌」（大岡家文書）は村の北に「義経陣跡」ありとし、義経の陣場といい、由来不詳だが地名を義経と称すとする。「山陽道美作国古城跡」、「美作風土略」、「東作誌」、「美作国勝南郡池ヶ原村誌」

文献

50 梶原が陣・梶原陣

所在地 津山市池ヶ原

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は勝南郡池ヶ原村の「梶原が陣跡」として、また往來の北に「梶原」の地名があり、梶原景時父子の陣屋跡というとして記す。明治一三年（一八八〇）の「美作国勝南郡池ヶ原村誌」（大岡家文

文献

書）は村の東北に「梶原陣跡」ありとし、梶原平三景季の陣場といい、由来不詳だが地名を梶原と称すとする。「山陽道美作国古城跡」、「美作風土略」、「東作誌」、「美作国勝南郡池ヶ原村誌」

51 蒲の尾・蒲生陣

所在地 津山市池ヶ原

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は勝南郡池ヶ原村の「蒲の尾」として、義経陣場の北にあり、「範頼」の陣跡というとする。明治一三年（一八八〇）の「美作国勝南郡池ヶ原村誌」（大岡家文書）は村の北西に「蒲生陣跡」ありとし、蒲生飛驒守の陣場といい、由来不詳だが地名を蒲生と称すとする。「東作誌」、「美作国勝南郡池ヶ原村誌」

文献

52 大屋敷

所在地 津山市池ヶ原

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

明治一三年（一八八〇）の「美作国勝南郡池ヶ原村誌」（大岡家文書）は村の東に「庄司宅跡」ありとし、地名は大屋敷で、昔鷹取庄の庄司某の宅跡と伝えていると記す。「美作国勝南郡池ヶ原村誌」

文献

53 田淵城・田口山城

所在地 津山市金井

立地

尉ヶ城・横手城の山から北に延伸する標高約一八〇mの尾根上に位置する。広戸川左岸にあり、津山中核工業団地の南西部にあたる。

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、山城跡とされるが縄張りは不明瞭とする。山形省吾氏も踏査したとされる。

城史

正保書上五四城の一で、「古城之覚」は勝田南郡金井村の「田淵(城)」として、城主不詳とする。「美作鏡」は城主を岸本新五郎とする。「東作誌」は勝南郡金井村奥分の「田口山古城」として、現在は形を失う、小松寺の西北に当たる小山と記し、同村里分に「田淵城」として、山の高さ約五町で村の西南に当たり、上の段(一〇間四方)、下の段(長さ六、七間、横三、四間)、南の方に通じて築城の跡があり、大手は北の「鰐口」という所から登ると記す。また地元民は城主の田淵氏が奇妙の膏薬を製造したと伝えたと記す。天保国絵図に「古城跡」とある。明治一三年(一八八〇)の「美作国勝南郡金井・西吉田・福力・新田四村誌」(大岡家文書)に「田淵城」は金井村の西南西、田淵山にあり、高さ三丈五尺、周り四六丁三〇間、本丸は宅地の跡を失い、城主は岸本新五郎と伝え、落城の由来不詳とする。『岡山県勝田郡志』は、岸本継政が横手城を東北の地に移して



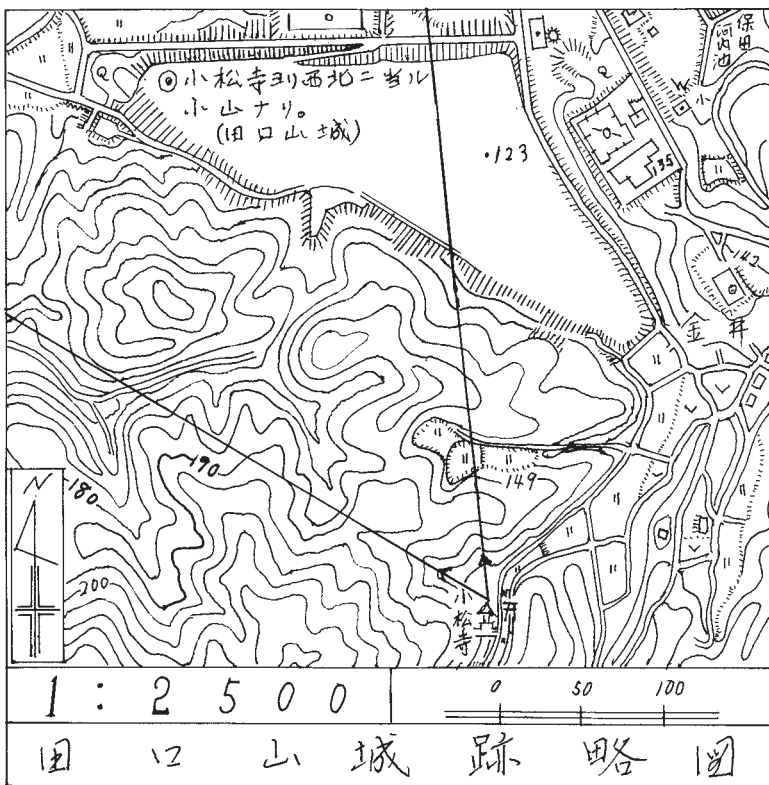
田淵城・田口山城

備考

田淵の城と号し文安元年(一四四四)から居住、頼実・某・俊実を経て天文一三年(一五四四)に没落とする。『美作古城史』には「田口山城」、東南に所在した小松寺との関係から、城も小松重盛と関連があるかと伝えられているとする。

文献

『改訂岡山県遺跡地図』は瓜生原城として記載している。
 『武家聞伝記』、「美作鬘鏡」、「東作誌」、「美作鏡」、「美作国勝南郡金井・西吉田・福力・新田四村誌」、「岡山県勝田郡志」、「岡山県通史」勝田23、『美作古城史』、『日本城郭大系』757、『改訂岡山県遺跡地図』津山1064



54 難波屋敷（仮称）

所在地 津山市西吉田

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

明治一三年（一八八〇）の「美作国勝南郡金井・西吉田・福力・新田四村誌」（大岡家文書）に「難波平次郎ノ宅跡」として、西吉田村の南、南の地にあり、東西九間、南北六間、平次郎は羽仁村の城主難波九郎左衛門行季の次子、宮内信時の弟で、文明四年（一四七二）正月に行季戦死により村に落去したと記す。

文献

「美作国勝南郡金井・西吉田・福力・新田四村誌」

55 殿屋敷

所在地 津山市三浦

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は勝北郡広戸村内津川原村の「殿屋敷」として、湯ノ谷の下にあり、豊田氏の一族が初めてこの地に落ち着いたといい、村内に五輪塔の墓が残り、津山築城の石垣奉行を務めたともいう姓未詳五郎左衛門も、豊田氏の一族と記す。

文献

「美作国勝南郡池ヶ原村誌」

56 黒見山城・黒目城・黒女城

所在地 津山市堀坂・新野山形

立地

津山市堀坂地区と新野山形地区の境、加茂川左岸に起立する標高二六五mの山頂に位置する。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は勝北郡「保坂村」の「黒見山」とある。「新野村史」は「黒目城」として、俗に一の丸、二の丸等の呼称があり、地勢から岩尾山城（津山市吉見）の寄せ城として一時的な城砦かとする。『美作古城史』は「黒女城」とし、土塁・堀切などが認められ、東南尾根伝いの山道が大手で、麓の加茂川畔に自然石「小島地蔵」があり、宇喜多家の侍小島次郎兵衛戦死の場所と伝えられているとする。

備考

「津山市中世城郭等配置図」には「黒女城」として山形仙（七九一・一m）の山頂西方に表示するが、位置が異なる。「東作誌」、「美作古城史」、「日本城郭大系」668、「神楽尾」、「改訂岡山県遺跡地図」勝北8

文献



黒見山城・黒目城・黒女城

57

天王山

所在地 津山市堀坂・西下

立地

縄張

城史

加茂川左岸に接する標高三三六・五mの天王山に比定される。
未詳。

文献

天正八年（一五八〇）三月、升形城（鏡野町香々美）に在番する国司元良・森脇春方から毛利氏に対し「天王山」への築城が猷策され、さらに閏三月、岩尾山城（津山市吉見）に在番する湯原春綱からも要請がなされたが、宮山城（真庭市上市瀬・高屋）・篠吹城（同市三崎・大庭）両城攻略のため延引とされる（「藩中諸家古文書纂」、「閏閏録」）。以降、実際に普請が行なわれたかなどは不明である。
「藩中諸家古文書纂」、「閏閏録」

58

堀坂城（仮称）

所在地 津山市堀坂

立地

山形仙から南東に延伸する標高約一九〇mの尾根の突端にあたり、因美線の切通しの西部分に位置する。加茂川に接し、対岸の岩尾山城との間は約八〇〇mである。

城史

縄張

里に近く後世の改変が多く遺構の解釈は慎重を要する。
未詳。

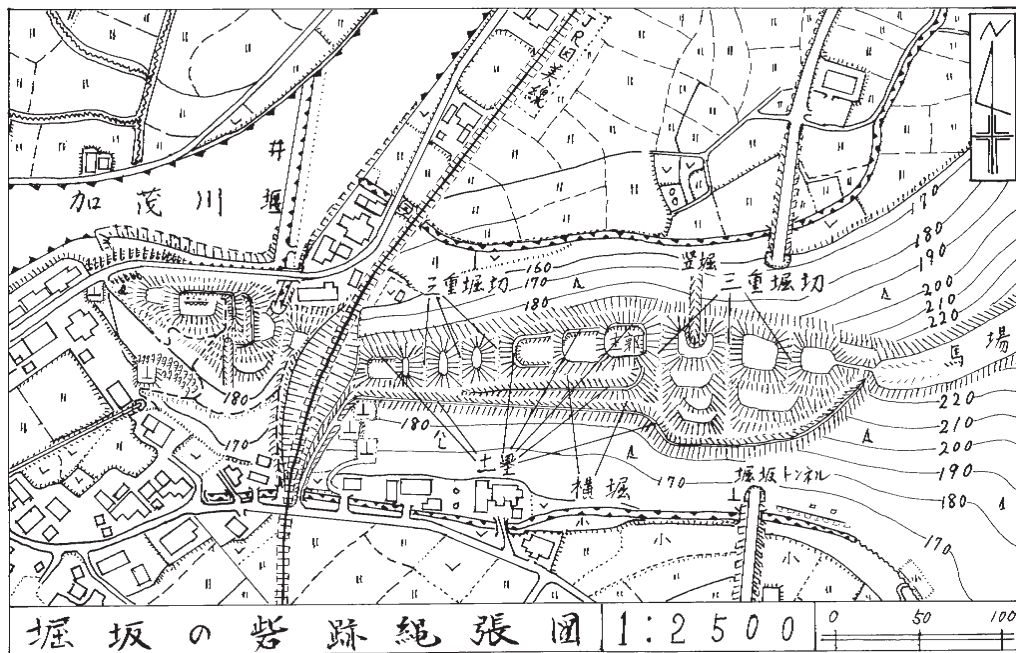


堀坂城（仮称）

備考

文献

平成一五年（二〇〇三）春に山形省吾氏が発見・確認し、地元で「堀坂の砦」と名付けられた。立地的には山形仙上に所在する中山城・津山市新野山形」と加茂川対岸の岩尾山城（同市吉見）の間を塞ぐ施設と考えられる。
山形二〇〇七



59 岩黒山城・岩黒城・岩倉山城

所在地 津山市田熊

立地

広戸川左岸、田熊地区下木集落の東にある標高約一四〇mの丘陵上に位置する。公会堂の上手の山に該当する。田熊地区や上野田・下野田地区を一望する。

縄張

最高部に主郭と帯曲輪を構え、その周囲に横堀を廻す。平地にみられる「構」と呼ばれる館城が台地上上がったタイプと考えられる。村落に拠った土豪層の持城とみられる。

城史

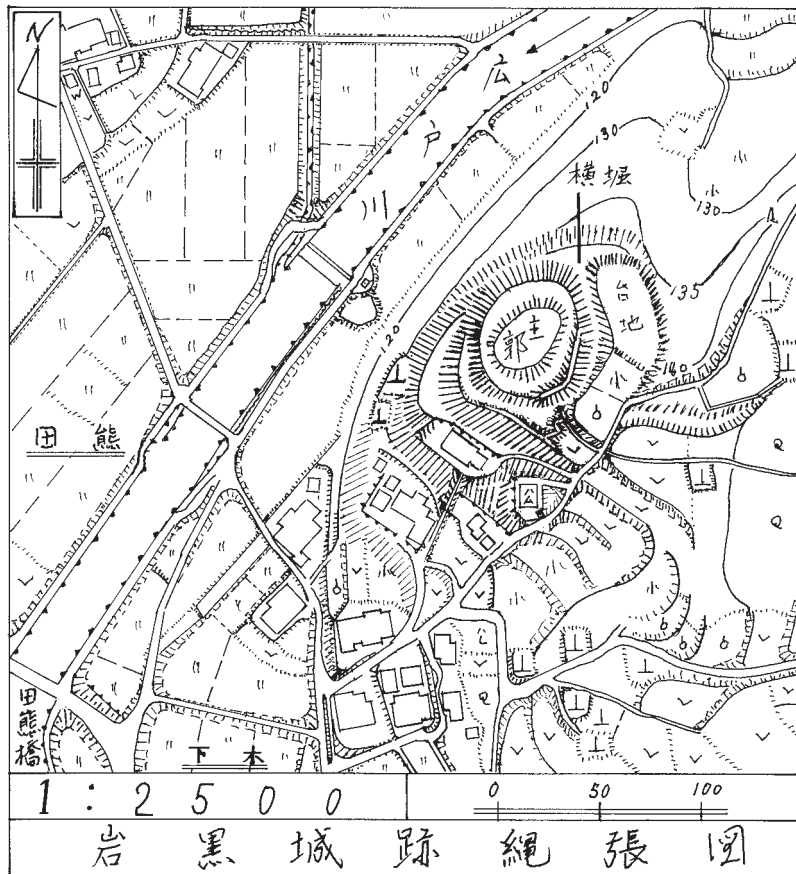
「古城之覚」は勝田北郡田熊村の「岩倉山」「岩黒山」として、城主を井上とする。「美作鬢鏡」は「岩黒城」で城主を井上一族、「美作鏡」は「岩黒倉山城」で城主を井上蔵人正清とする。「東作誌」は「岩黒城」として、今は百姓持林となり、堀切の跡はわずかで、少し均した跡のみと記す。『岡山県勝田郡志』は「岩黒城」として、建武年中（一三三四～六〇）に佐々木氏頼の弟直正が居城、子の正清が井上蔵人を称し、正清は康安元年（一三六一）山名氏に敗れ、横部村に隠れたとする。『日本城郭全集』は「岩黒城」とする。『津山市広野の歴史散歩』は、今はまったく畑となっているとする。

文献

「武家聞伝記」、「美作鬢鏡」、「東作誌」、「美作鏡」、「美作古城記」、「岡山県勝田郡志」、「岡山県通史」勝田一、「美作古城史」、「日本城郭全集」補遺、「津山市広野の歴史散歩」



岩黒山城・岩黒城・岩倉山城



〔旧久米郡城〕

60 神原山城・小桁城

かんばらやま

おげた

所在地 津山市小桁

立地

吉井川右岸にあり、小桁地区の池の谷から約六〇〇m西に入った山頂に位置する。標高は約一八〇mである。地元では「小桁城」と呼ばれている。

縄張

荒神山城（津山市荒神山）へ通じる北の入口を抑える立地にある。図からは主郭となる曲輪と腰曲輪が確認される。南西側に比較的広い曲輪を持つ。その先の下ったところに堀切・堅堀とされる遺構が図化されているが、後世の改変とみられる。荒神山城に拠る宇喜多勢の出城の可能性はあるが、集落に面した立地から村落に拠る土豪層の持城である可能性が高い。荒神山城と対比した場合に、神原山城の造りは相対的に良くない。宇喜多氏が周囲の土豪層の兵力を荒神山城へ集約させたことが推察される。

城史

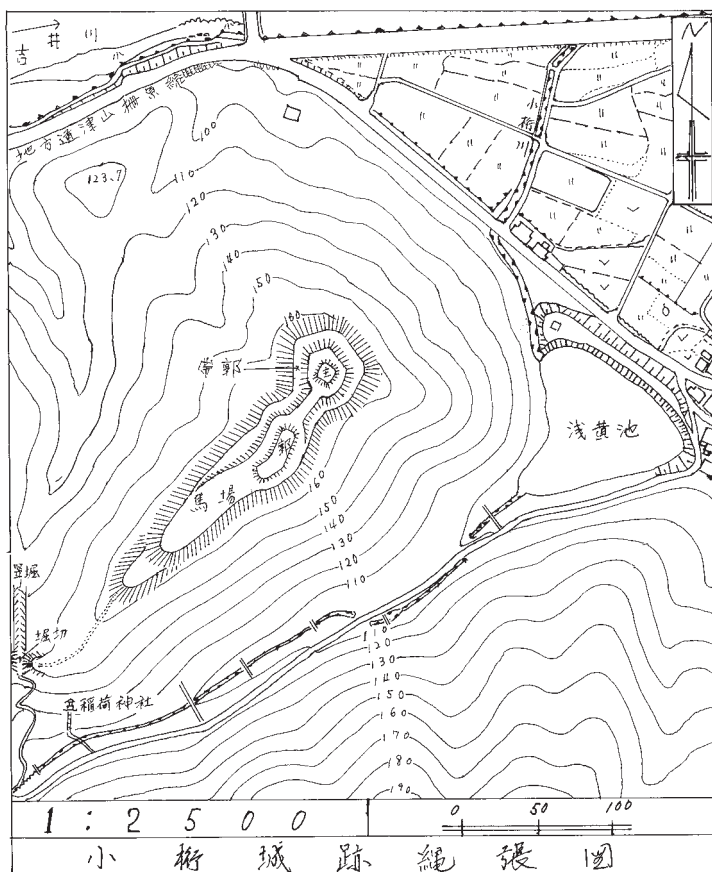
「古城之覚」は久米南郡小桁村の「神原山」として、城主不詳とする。「作陽誌」は高さ七六間、上に平地あり、東西四二間、南北二二間、その下に山椒崩ありと記す。『美作古城史』によれば地元の神原氏に同城からの落居伝承があるとする。



神原山城・小桁城

文献

「武家聞伝記」、「作陽誌」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「岡山県通史」久米15、「美作古城史」、「日本城郭大系」743



61

荒神山城

所在地 津山市荒神山

津山市指定史跡

立地

吉井川に合流する荒神川を約2km西に遡った場所であり、標高二八八mの山頂一帯に位置する。山麓には皿地区と押淵地区を往来する県道四四九号線がある。荒神山地区にある公民館の向かい側に、荒神山城の説明版がある。その先5mの左手に指導標がある。

縄張

全体的に直線的な墨線で曲輪が連なる。石垣は部分的な使用に留まるが、随所に枳形虎口や食違い虎口を積極的に用いられており、織豊系縄張り技術の特徴を示す。荒神山山頂の主郭は北西隅に基壇がある以外は目立った特徴は見出せない。古瓦が多数みられることから瓦葺きの建造物があったことがわかる。山上に居住・政務空間があったことをうかがわせる。主郭部の西側に配された第二郭は西端に凸状の張出しと土塁ラインを持ち、西側尾根筋からの侵入に対して堡塁の役割を果たす。そして、縄張り図では表記されていないが、南側には内枳形虎口と外枳形虎口を組み合わせた複雑な虎口プランを構える。そして、北側にも食違い虎口を構える。この第二郭が外部に出る城道の起点となり防禦の足場としての役割を果たす。さらに、北側尾根筋や北東側に伸びる尾根筋にも曲輪が配された。そして北東側の曲輪には櫓台と土塁を配して枳形虎口が設定されている。



荒神山城

城史

荒神山城は織豊系勢力による美作国統治のはじまりを象徴する城郭であり、森氏時代に使用されていないことから、宇喜多氏時代（或いは小早川氏時代も含む）の縄張り技術の様相を残す貴重な事例と考えられる。

正保書上五四城の一で、「古城之覚」は久米南郡荒神山村の「荒神山」として、城主を花房助兵衛職秀とする。「作陽誌」は山の名は荒神の祠があることに因み、高さ二町五〇間、宇喜多氏の部将花房助兵衛職秀が居城し、職秀の退転後は廃れ、城下には職秀の与力柴田与一郎・難波弥九郎、河内七郎左衛門・苔口宗十郎居宅の跡があり、城の北には職秀の営んだ華教寺跡ありと記す。なお「美作鬢鏡」は助兵衛の諱を直次とする。天保国絵図に「荒神山古城跡」とある。

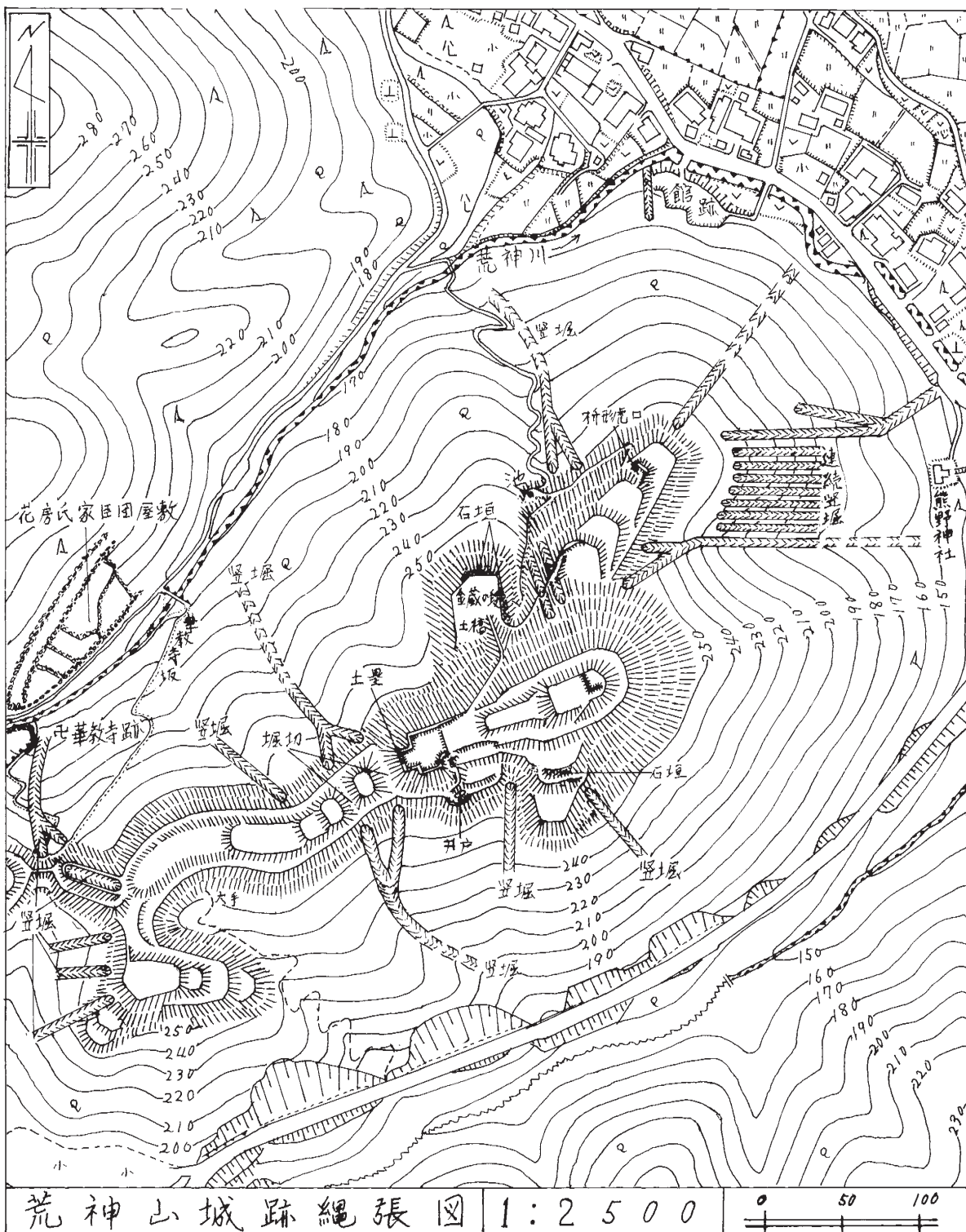
花房職秀は二二、三歳の頃、元龜年間（一五七〇～三）頃に「作州諸軍の頭」となり荒神山城に拠ったという（「花房家記事」、「寛永諸家系図伝」）。その後、天正七年（一五七九）頃、神楽尾城（津山市総社・小原・上田邑・一宮）に拠る千波土佐が荒神山城を夜討したが職秀の伏兵に遭い敗死したとされ、この合戦に際して発給されたとみられる年欠三月一〇日付けの花房職秀感状の写が数通知られている（「武家間伝記」、「美作諸家感状記」、「美作古城記」）。職秀改め職之は天正七年以降、岩尾山城（津山市吉見）、沖構（鏡野町円宗寺）、岩屋城（津山市中北上）の攻囲などで戦功を重ねたが、文禄四年（一五九五）頃、家中での紛争により宇喜多秀家から死罪を命じられた。職之は豊臣秀吉の計らいで常陸国の佐竹氏へ預けられた後、慶長三年（一五九八）頃、宇喜多家中から退去、徳川家康の保護で武蔵国岩槻城（埼玉県さいたま市）に蟄居したという（「花房家記事」、「寛永諸家系図伝」、「岩屋城主次第」、「浦上宇喜多両家記」、「戸川記」など）。荒神山城もその過程で廃城になったと考えられる。

文献

遺物

瓦が本丸付近に散乱
〔改訂岡山県遺跡地
図〕。

〔寛永諸家系図伝〕、
〔武家聞伝記〕、「浦
上宇喜多両家記」、
〔戸川記〕「作陽誌」、
〔美作鬢鏡〕、「備前
軍記」、「美作鏡」、
〔美作略史〕、「久米
郡誌」、〔岡山県通
史〕久米16、〔美作
古城史〕、「日本城
郭全集」津山市4、
〔日本城郭大系〕746、
〔かりがねの行方〕、
池田誠一九九四、
〔改訂岡山県遺跡地
図〕津山902、出宮
二〇〇五、〔津山市
の文化財〕



62 嵯峨山城・州前城

所在地 津山市中島・美咲町錦織

津山市指定史跡

立地

標高二八八mの嵯峨山山頂付近に位置する。北を吉井川、東を皿川が流れ、津山盆地南部や久米方面を一望できる。周囲にはいわゆる佐良山古墳群が分布する。津山市「平福」地区の皿川に架かる「大渡橋」を渡り、一直線に西に進むと「佐良山碑」の案内標柱がある。その先を進む。

縄張

嵯峨山を挟んで北部と南部に城郭が確認される。嵯峨山北城・嵯峨山南城と呼ぶべき二つの城郭が併存したものと考えられる。

【北城】嵯峨山北側に位置する。土塁囲みの主郭の周囲に帯曲輪や横堀が廻る縄張りとなっている。南側に続く稜線を仕切るように横堀と縦堀を組み合わせた遮断線がみられる。機能的には単郭構造の縄張りであり、吉井川の渡河点を押さえる番城の役割を果たしたとみられる。

城史

【南城】嵯峨山南側に位置する。単郭の主郭と腰曲輪から構成される。嵯峨山からの稜線に三重の堀切を構える。南側にも堀切がみられる。東側に下位曲輪を持つ。

「古城之覚」は久米南郡中島村の「嵯峨山」として、城主を錦織右馬丞利政とする。「作陽誌」は和歌に詠まれる佐良山は嵯峨山で古城あり、山の高さ一六〇間、西麓の地名から「洲前城」ともいい、天文年中（一五三三



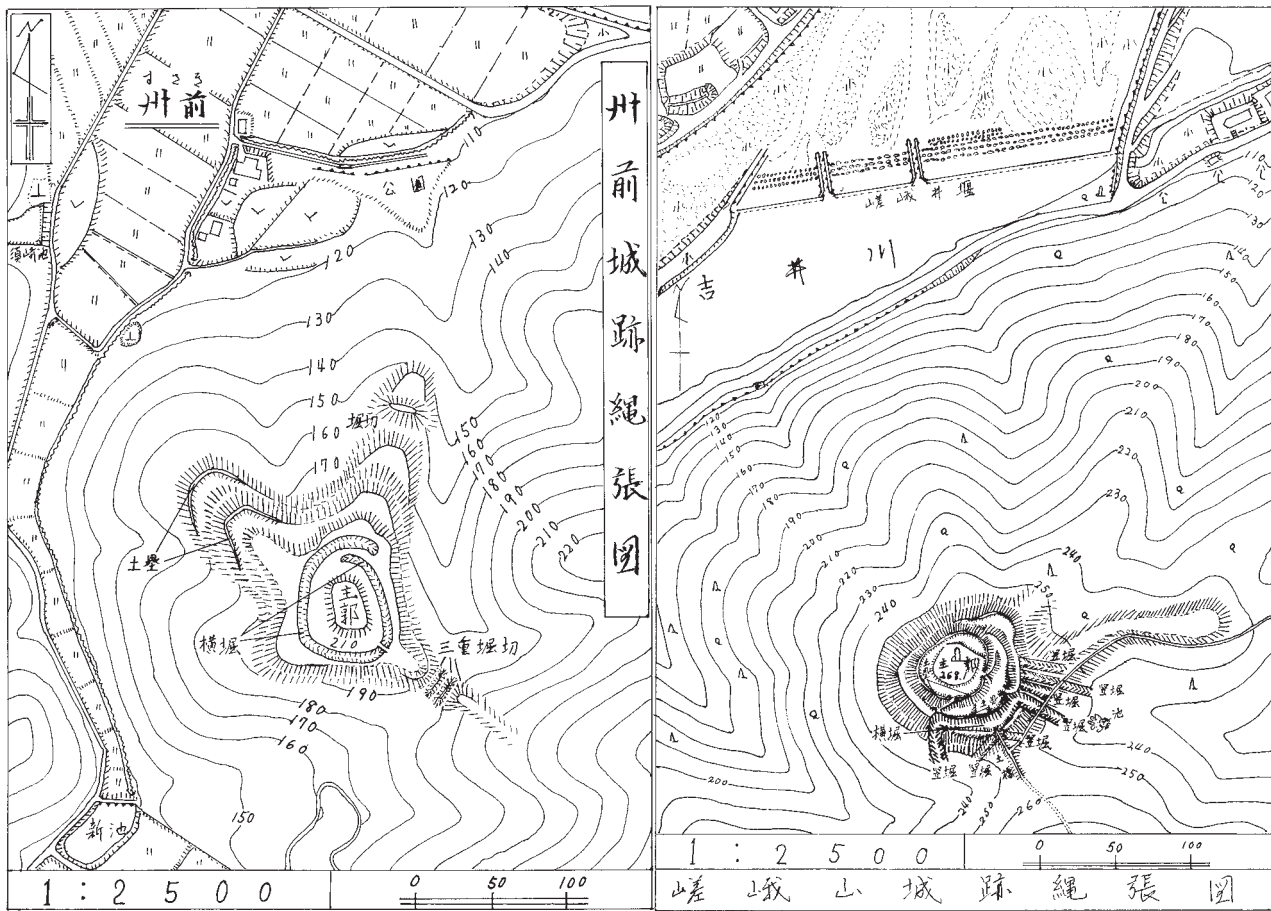
嵯峨山城

文献

（一五五四）に尼子氏の門属錦織右馬助利路が在城、宇喜多秀家の時に川端丹後が城を守り、また「佐良城」があった時には中島村に上今市・下今市として市店があったと記す。ちなみに川端氏先祖書（『美作古城史』所収）には、川端丹後守は西屋城主のち「中島村佐良山之城主」となったと記す。天保国絵図には「佐良山」とのみある。

元龜年間（一五七〇～三）頃、小早川隆景の兵が出城にしていた「さが山」の城を、荒神山城に拠った花房職秀が攻め取ったという（『花房家記事』）。天正七年（一五七九）の宇喜多氏と毛利氏の対立のち、毛利方の拠点となった院庄構城（津山市院庄）と、「皿山の捕手」に拠る宇喜多直家の家臣河端丹後が対峙したとされる（『武家聞伝記』）。「皿山の捕手」は立地から当城のことと考えられる。

「花房家記事」、「寛永諸家系図伝」、「武家聞伝記」、「作陽誌」、「美作鬢鏡」、「備前軍記」、「美作鏡」、「美作略史」、「久米郡誌」、「岡山県通史」久米19、『美作古城史』、『日本城郭全集』津山市5、『日本城郭大系』748、池田誠一九九四、『佐良山地域の歴史を探ろう』『改訂岡山県遺跡地図』津山418・中央15、『岡山の山城を歩く』87、『津山市の文化財』



63 篠山城・皿山城

所在地 津山市皿

立地

皿川の右岸、種川の左岸の丘陵地にあり、標高約三〇六mの笹山山頂に位置する。皿山駅の一・三km西にあたる。

縄張

最高部に腰曲輪を持つ土壘囲みの主郭が配される。図をみると主郭の土壘ラインは南東隅で凹んだ形状になっている。類例のない形状を示しており、今後の精査が求められる。南側に長大な堀切があり、その先に出曲輪がある。それ以外に城域の廻りには削平地が連なる。元々は曲輪が連郭式に連なる山城を、中心部に土壘ラインを配して再編したものと考えられる。

城史

正保書上五四城の一で、「古城之覚」は久米南郡皿村の「皿山城」として、城主を伊利谷河内守長昌、長昌は永正年中までの城主で、のち天正年中まで宇喜多秀家の家臣河端丹後が抱えたとする。「作陽誌」は「篠山」の山上に城跡ありとして、入谷河内守は敵に篠山城を囲まれ、裏門から出たところ流れ矢に当たって死に、佐良村の湯谷に墓があると記す。ただし『久米郡誌』はこれを誤りとして佐良村高尾（津山市高尾）にありとする。天保国絵図に「篠山古城跡」とある。「美作鏡」は「笹山城」とする。

嘉吉元年（一四四一）八月二三日、石見の国人増田兼亮は、「作州高尾代」を焼き落としたとして、山名教清の注進を受け



篠山城・皿山城

遺物

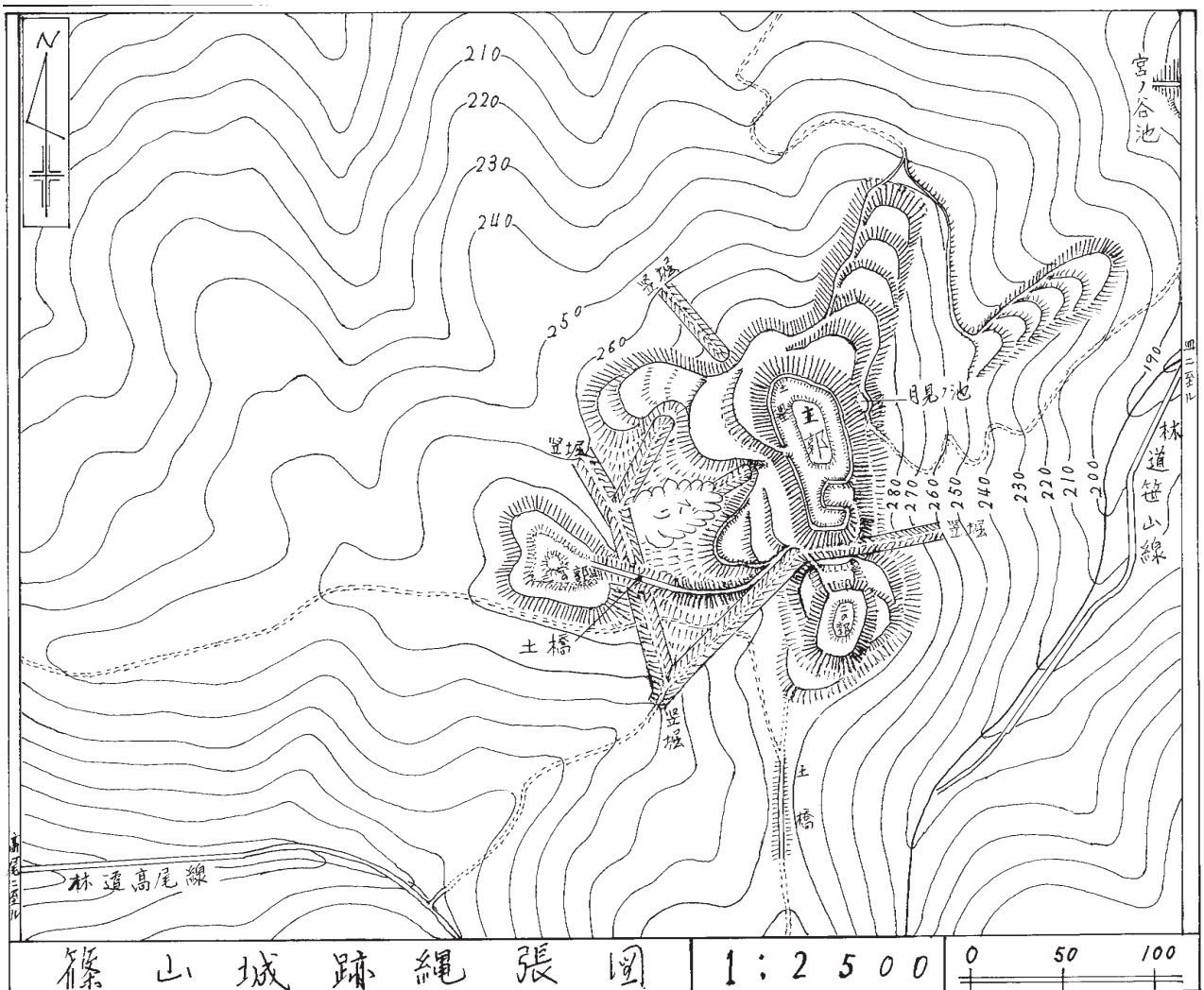
備考

文献

た細川持之から感状を与えられている(益田家文書)。城の南部は高尾の地に接していることから、あるいはこの城か。また元亀年間(一五七〇〜三)頃、「肥多・高橋」あるいは「肥田左馬助・高橋四郎兵衛」両人が拠っていた「さ、山」の城を、荒神山城に拠った花房職秀が攻め取ったという(「花房家記事」)。なお岡氏はその名字からみて備中国を本拠とする侍の可能性が高い(「寛永諸家系図伝」)。

備前焼。
植林伐採のため林道で一部が破壊(「改訂岡山県遺跡地図」)。

「花房家記事」、「寛永諸家系図伝」、「武家聞伝記」、「作陽誌」、「美作鬢鏡」、「備前軍記」、「美作鏡」、「美作略史」、「久米郡誌」、「岡山県通史」久米18、「美作古城史」、「日本城郭全集」6、「日本城郭大系」749・750、「佐良山地域の歴史を探ろう」『改訂岡山県遺跡地図』津山633



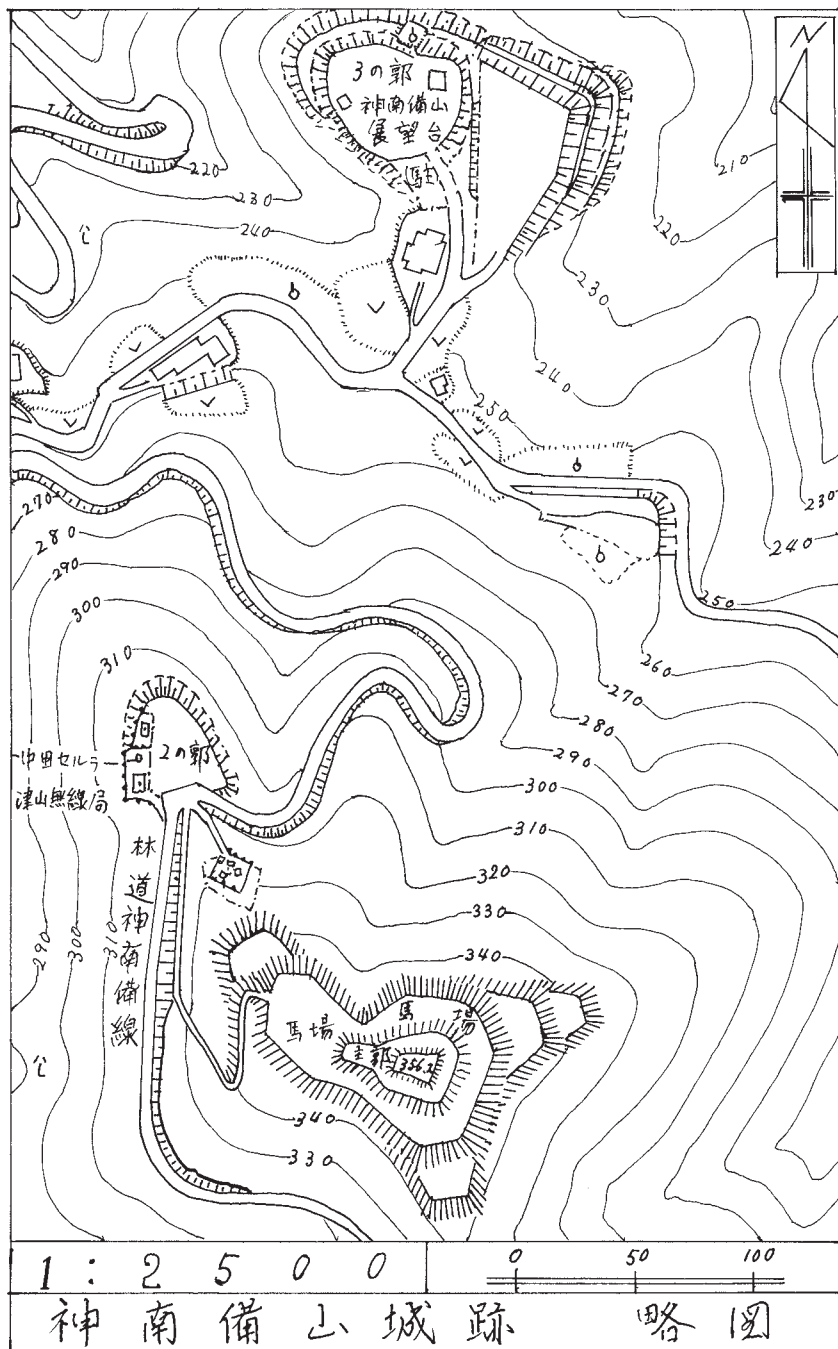
文献

医王山長雲寺(津山市小田中)の前身東漸寺は貞治年間(一二六二
 (七)末、「凶賊」が神楽尾城(津山市総社・小原・上田邑・二宮)
 を攻撃するため「久米神南山」に陣し、寺は廃絶したとする。

「武家聞伝記」、「作陽誌」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「岡山県通史」
 久米 20



間鍋山城・神南備山城



真庭郡

〔真庭市〕

新庄村

落合町 勝山町 湯原町 久世町 美甘村 川上村 八束村 中和村

〔真庭市〕落合町

1 鳥越山

所在地 真庭市古見

立地

古見地区の東、古見山から西に延伸する標高約二五〇mの尾根上に位置する。金崎山善福寺の裏手で、落合・久世の旭川流域を見渡すことができる。

縄張

『落合町史』には、約一〇〇mの山上に郭を配しているとする。主郭と三つの小曲輪、南側の帯曲輪から構成される。単郭構造の縄張りである。

城史

「作陽誌」は「鳥越山」として、大庭郡古見村にあり、高さ一五〇間、周り四二〇間、山上は削平とする。

備考

『落合町史』の分布図は位置を誤っている。

文献

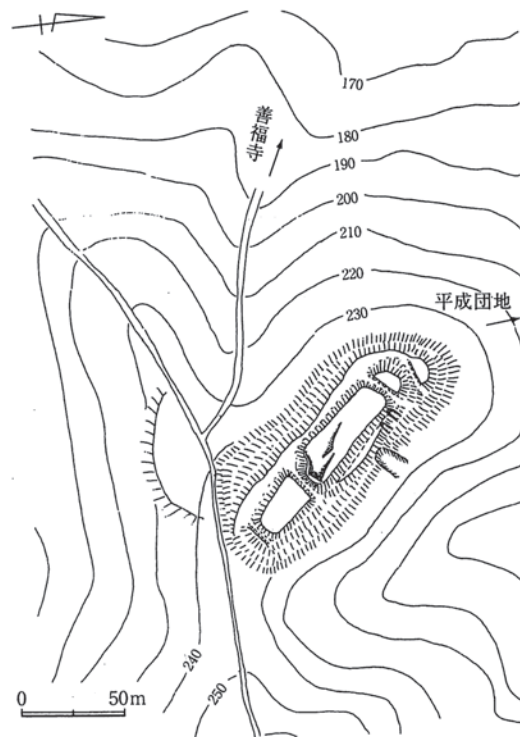
「作陽誌」、『落合町史』通史編



鳥越山

2 かげ由屋敷

所在地 真庭市赤野



鳥越山縄張図（難波澄夫作図『落合町史 通史編』より引用）

立地

『落合町史』では、現在、所在地不明とする。

縄張

未詳。

城史

『美作古城史』に、川東村赤野に地名があり、同地に湯浅氏があると記す。

文献

『美作古城史』

3 家^か中^{ちゅう}屋^う敷^し (赤野遺跡)

所在地 真庭市赤野

立地

赤野地区の河内川左岸で、中国自動車道のすぐ南側。南東から延伸してくる山林部と耕地部との境界付近にある。

縄張

北へと張り出した丘陵を、東端がL字形に屈折した大溝で区画し、内郭には溝に接して土塁が巡らされていたとみられる。横堀は南側で折れを伴う点が特徴である。横矢掛かりといった評価もあるが、地勢条件や土地の境界に沿って曲げた部分が入り口の防禦効果を高めたと考えるのが妥当と思われる。実際に発掘調査が行われた館城の事例である。

城史

未詳。地元では「カチュウヤシキ(家中屋敷)」と呼ばれており、以前から唐津焼のようなものが出ていたといい、南西は「カグラダン」、南山上は「トノノオク」と呼ばれている。

遺物

縄文土器・須恵器・土師器・青磁・備前焼・石器・釘。

備考

昭和五四年(一九七九)、中国縦貫道建設に伴い発掘調査を実施し、古墳時代前半の竪穴住居のほか鎌倉〜室町時代の土塁と溝で区画された掘立柱建物群などの遺構を確認した。調査後に一部消滅。

文献

『岡山県埋蔵文化財報告』2、『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』3、『改訂岡山県遺跡地図』落合276、『戦国時代の城―遺跡の年代を考える―』



家中屋敷(赤野遺跡)遺構配置図(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』3より引用)

4 坂牧城・逆巻城・城山

所在地 真庭市赤野・法界寺

立地

河内川と旭川が合流する地点の西側に所在する。合流点に向かって延伸する尾根のピーク上にあり、標高は約一八〇mである。地元では「城山」と呼んでいる。

縄張

旭川に向かって伸びる稜線上に曲輪が並ぶ。要所に堀切を入れることで三つの区域に分節する。その内、中央の曲輪群が主郭部とみられる。背後となる南東側には曲輪を配して防禦し、主郭部との間には三連続の堀切を配するなど嚴重な防禦を構える。一方、先端の北西側の曲輪群では、主要な曲輪には前面に土塁が配され、尾根に沿って下位曲輪を連ねた縄張りとなっている。周辺の村落を支配した有力国衆の持城か、交通の要衝を抑えるための広域大名権力による番城の可能性が考えられる。『落合町史』は縄張図が掲載されている。参照されたい。

城史

「古城之覚」は大庭郡赤野村の「坂牧」として、城主を牧藤右衛門家信とし、法界寺村と赤野村の境にありとする。「美作鏡」は「逆巻城」とする。『美作古城史』は、垂水神社（真庭市落合垂水）の社記に「永禄年間逆巻城主東郷若狭守源義邦」とあり、石井家記にも東郷若狭守がみえるとしている。『日本城郭全集』は「逆巻城」とする。



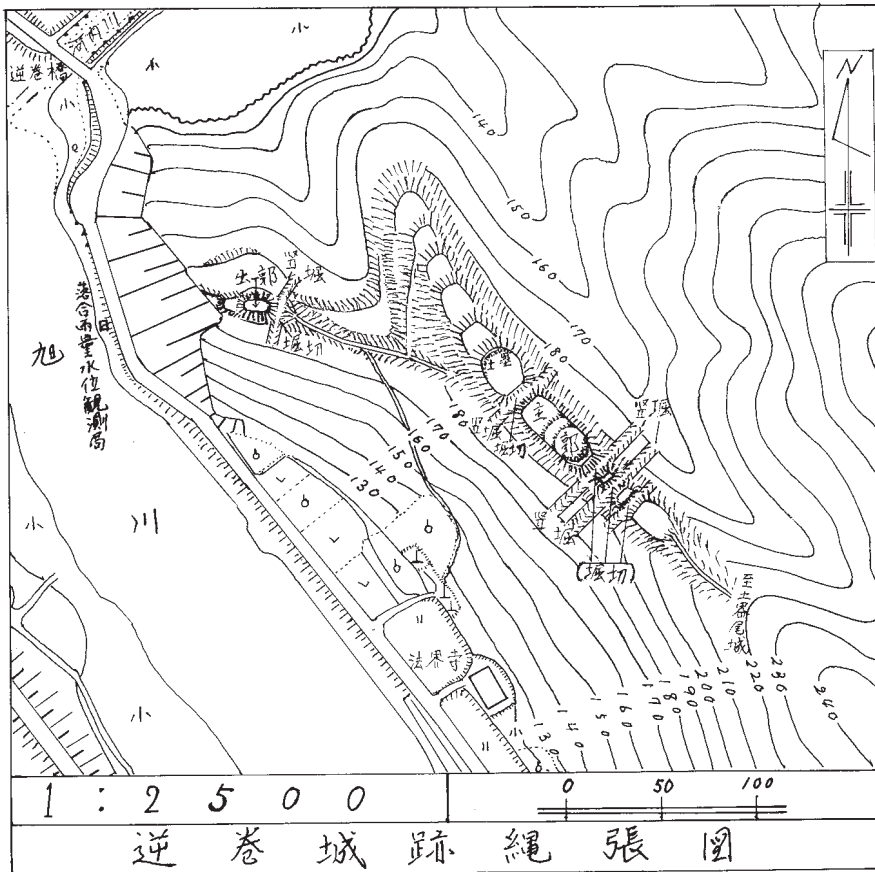
坂牧城・逆巻城・城山

備考

平成九年（一九九七）一二月、道路拡幅のため旭川沿いの城の西屋が掘削された（『落合町史』）。

文献

「武家聞伝記」、「美作餐鏡」、「美作鏡」「真庭郡誌」、「岡山県通史」真庭28、「美作古城史」、「日本城郭全集」補遺、「日本城郭大系」845、「改訂岡山県遺跡地図」落合279、「落合町史」通史編・地区誌編



5月 沢城・手谷城

所在地 真庭市中

文献

えられたという（牧左馬助覚書）。
「武家聞伝記」、「作陽誌」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「美作略史」、「真庭郡誌」、「岡山県通史」真庭4、「美作古城史」、「日本城郭全集」補遺、「落合町史（旧版）」、「改訂岡山県遺跡地図」落合40、「落合町史」通史編・地区誌編

立地

中地区の山の平集落から約四〇〇m北、西から延伸する尾根上に所在する。標高は約二二〇mである。

縄張

『落合町史』には縄張図が掲載されており、主郭の正面を二本の堀切、背後を一本の堀切で画し、北東に小郭が連なるとしている。堀切は削り残しの土塁と共に攻め手を遮断する役割を果たしたとみられる。

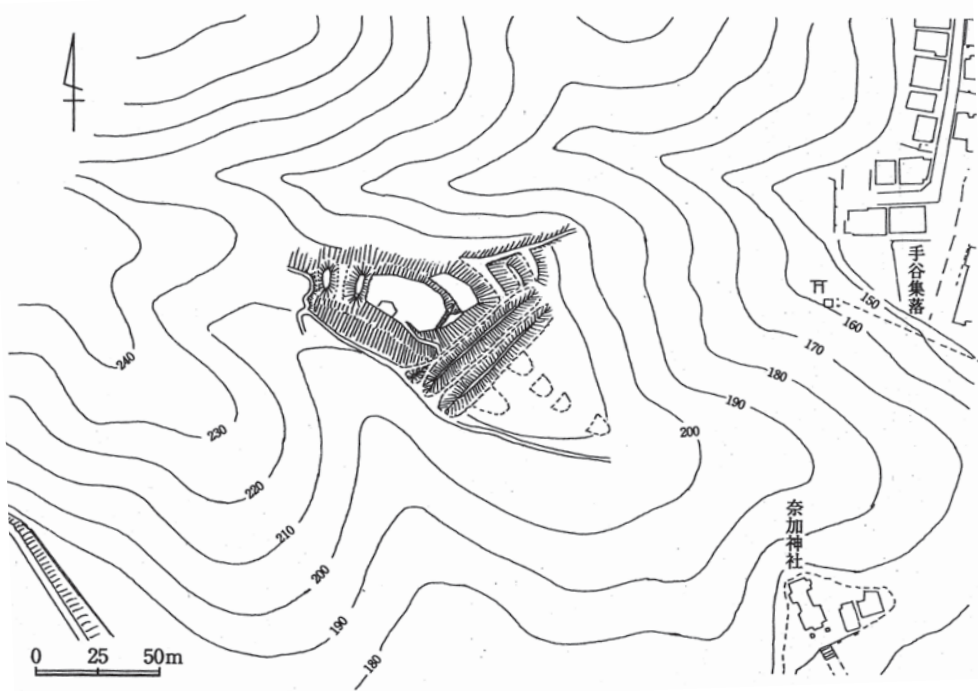
城史

「古城之覚」は真島郡中村の「月沢」として、城主を宇喜多秀家の陪臣北右衛門督直利とする。「作陽誌」は真島郡中村の「手谷堡」として、栗原惣兵衛があり、山の北の谷を手谷というと記す。『美作古城史』は、この城を月沢城とすることに疑念を呈し、萩丸城（美咲町北）のこととする。『落合町史（旧版）』には、惣社宮から登って約五町の道の右側が城跡で、稲荷の小社ありとする。『日本城郭全集』は「月沢城」「手谷砦」として重出する。

宇喜多氏の家臣・牧左馬助は、毛利方の中村氏と宇喜多氏の交戦にあたって「作州月沢」で太刀打ちして小原源太兄弟を討ち取り、褒美として太刀一腰と所領を西々条郡北方村（所在未詳）に与えられた。その後左馬助は北右衛門督と二人、「月沢」の城主となり、岩屋城からの攻撃では沢源次兵衛を討ち取って城を守り切り、宇喜多氏からは直家死去のため家老から感状を与



月沢城・手谷城



月沢城・手谷城縄張図（難波澄夫作図『落合町史 通史編』より引用）

6 野の田屋敷のだ

所在地 真庭市日名

立地

日名地区古風呂集落の当摩川右岸にあり、当摩川に向かって南から延伸してくる尾根の突端に所在する。緩斜面上にあり、標高は約一九〇mである。

縄張

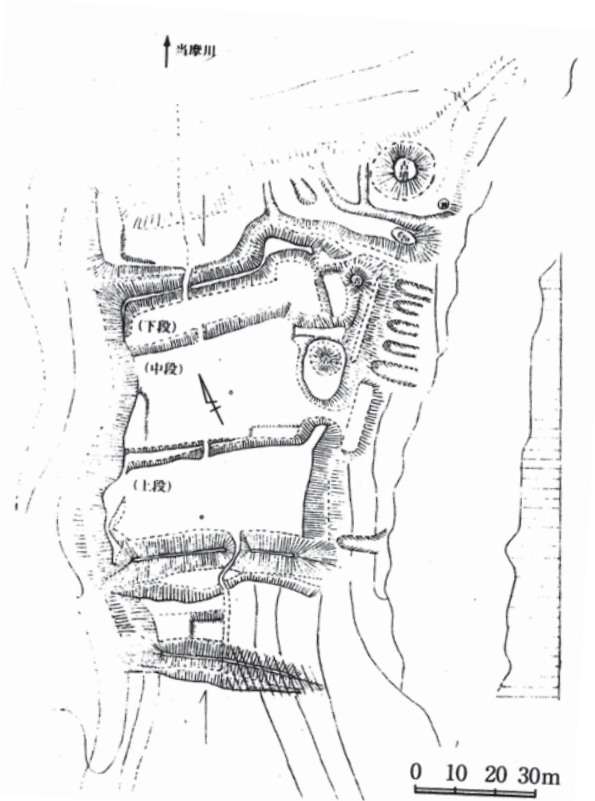
『落合町史』には縄張図が掲載されており、当摩川方面から登ると空堀と高い土塁に囲まれた三段からなる郭に至り、背後は二本の堀切で峰筋を遮断すると記す。曲輪配置は大味であるが、横堀と土塁などを組み合わせた遮断線の構築や虎口プランなどに技巧的な面がみられる。

城史

『落合町史』は、地元では家中屋敷や倉屋敷として使われていたと伝えるとする。

文献

『改訂岡山県遺跡地図』落合39、『落合町史』通史編



野田屋敷縄張図(難波澄夫作図『落合町史 通史編』より引用)

7 市構いち

所在地 真庭市福田

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

『作陽誌』は真庭郡福田村に「市構」ありと記す。

文献

『作陽誌』

8 中村城・地家城なかむら

所在地 真庭市上河内

立地

上河内地区持家集落の河内川右岸にあり、中国自動車道の西側に所在する。車道に分断されたものの、若林山から東に延伸する尾根の突端に該当し、標高は約二七〇m。

縄張

『北西側に主郭を構えて空堀や堅堀を用いて、外郭部に強固な防禦ラインを築いた。西側斜面には連続横堀を廻し、南西側に堅堀・堀切を構えて遮断線とした。北東の尾根筋にも横堀を廻し先端に畝状空堀群を配する。また、南西側尾根筋には堀切を入れて先端部に第二郭・第三郭と曲輪を並べた。空堀・畝状空堀群などを用いて複雑かつ技巧的な縄張り技術を見ることが出来る。河内川流域を抑える有力国衆の持城か、それを毛利氏などが番城として用いた可能性が考えられる。『落合町史』は縄張図を載せる。



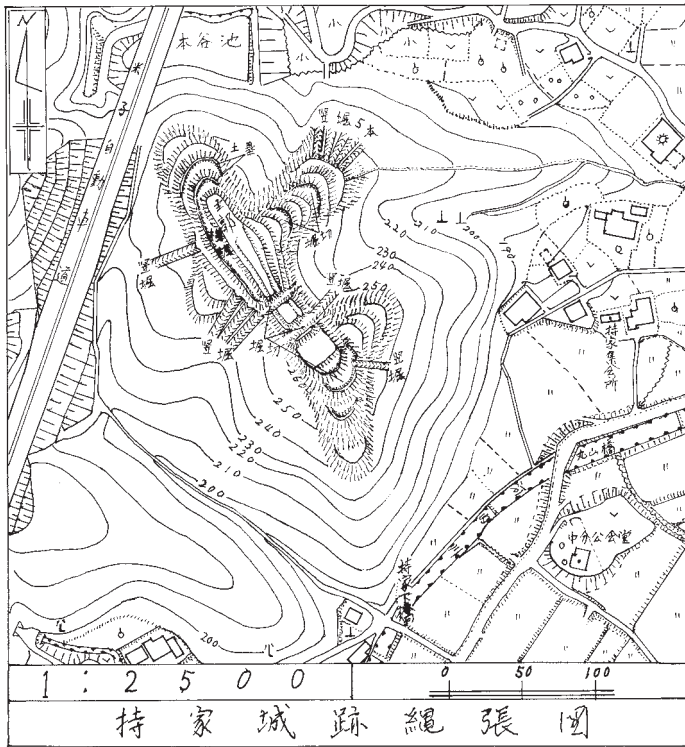
中村城・地家城

城史

「古城之覚」は大庭郡上河内村の「中村之（城）」として、城主不詳。「作陽誌」は「地家堡」として、上河内中村にあり、「地家」は地名で居主は不詳。北の麓から山上へ一町四〇間あると記す。「美作鏡」は「中村地家城」とする。「美作古城史」は「地下堡」とし、麓に大庄屋を勤めた近藤家があることから、同氏が守衛したかと推測する。なお「真庭郡誌」が勝山町山久世にあるとする「中村」は、本城の訛伝でおそらく存在しない。「日本城郭全集」は「中村地家城」とする。

文献

「武家聞伝記」、「作陽誌」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「真庭郡誌」、「岡山県通史」真庭18、「月田郷土史」、「美作古城史」、「日本城郭全集」補遺、「日本城郭大系」861、「改訂岡山県遺跡地図」落合222、勝山27、「落合町史」通史編・地区誌編



9 野州陣山

所在地 真庭市上河内

立地

未詳。

城史

「作陽誌」は「古文山」として、上河内東谷上村にあり、一名を「野州陣山」、山の高さ二町二間、山上はなだらかで東に古道ありと記す。

文献

「作陽誌」、「落合町史」地区誌編

10 高山城（仮称）

所在地 真庭市下河内

立地

下河内地区岡集落の河内川左岸にあり、中国自動車道及び姫新線の南側の小独立峰上に所在する。標高は約二〇〇mである。

縄張

『落合町史』の記述から、山頂に曲輪と小曲輪を並べたものとみられる。

城史

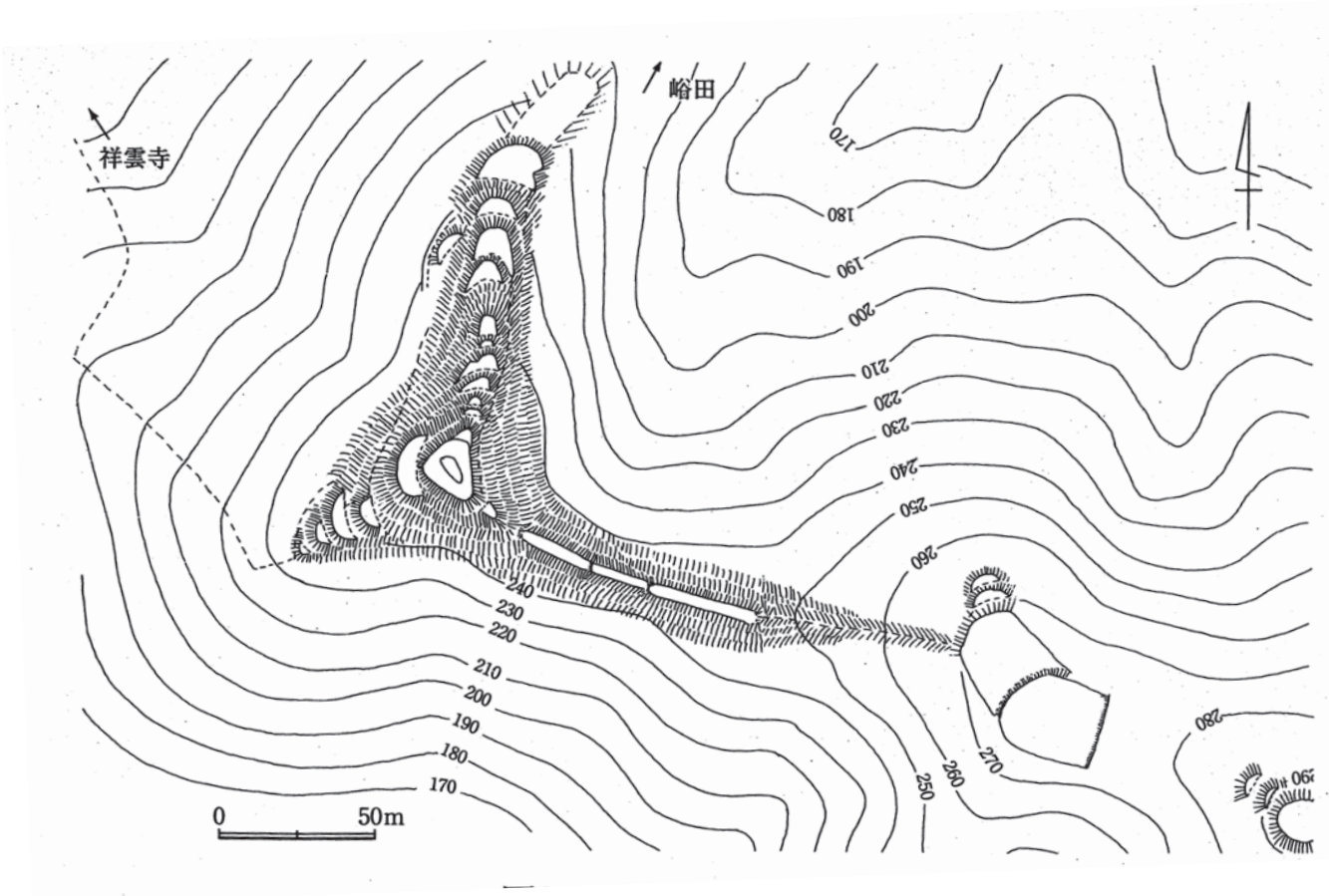
『真庭郡誌』に、岩佐勘解由の居城で下河内にありと記す。『日本城郭全集』は「高山城」とする。

備考

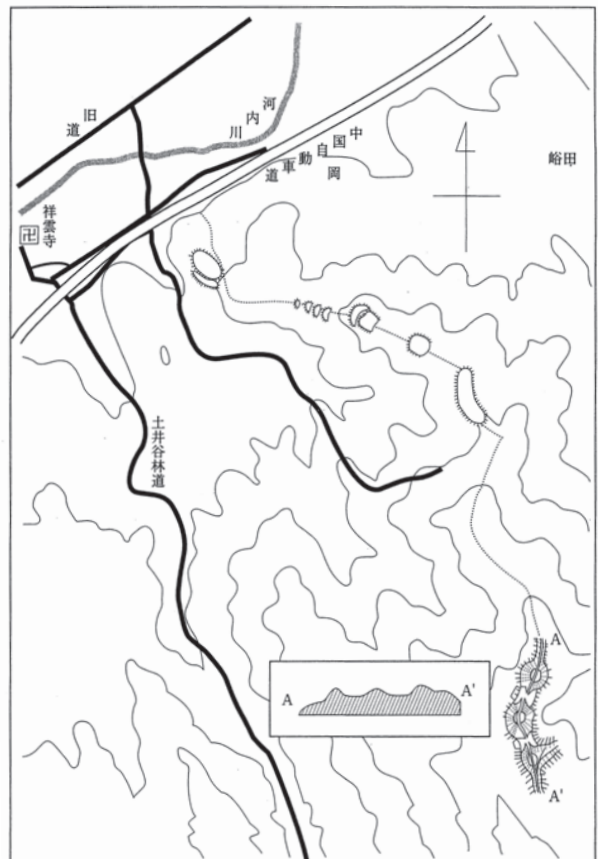
城名と城主は近世の諸記録に「高山城」と誤って表記されている神上城（真庭市榎東）からの訛伝であり、城跡としては検討の余地がある。『改訂岡山県遺跡地図』は同地が「マルステン」と呼ばれているとする。

文献

『真庭郡誌』、『岡山県通史』真庭24、「日本城郭全集」補遺、「日本城郭大系」859、「改訂岡山県遺跡地図」落合288、「落合町史」通史編・地区誌編



高山城縄張図（難波澄夫作図『落合町史 通史編』より引用）



高山城略平面図（『落合町史 通史編』より引用）

11 土器尾城

所在地 真庭市下河内・赤野

立地

法界寺地区の旭川左岸、中の谷山山頂付近に所在する。標高は約四五一mである。山頂を「一の丸」と呼び、南東には「二の丸」、「城楼ヶ峪」の地名が残る。地元では「要害」と呼称する。

縄張

城域は谷を挟んで二箇所に分かれる。西側の主郭部は方形・土塁囲みの主郭と周囲に下位曲輪を構えて広い平坦地を抱える。そして北西側に沿って曲輪を並べる配置となっている。曲輪の縁辺部は比較的直線的な塁線が多く、宇喜多氏段階に改修された可能性も考えられる。東側の城域も主郭を起点に南北の稜線に曲輪を並べる配置となっている。

城史

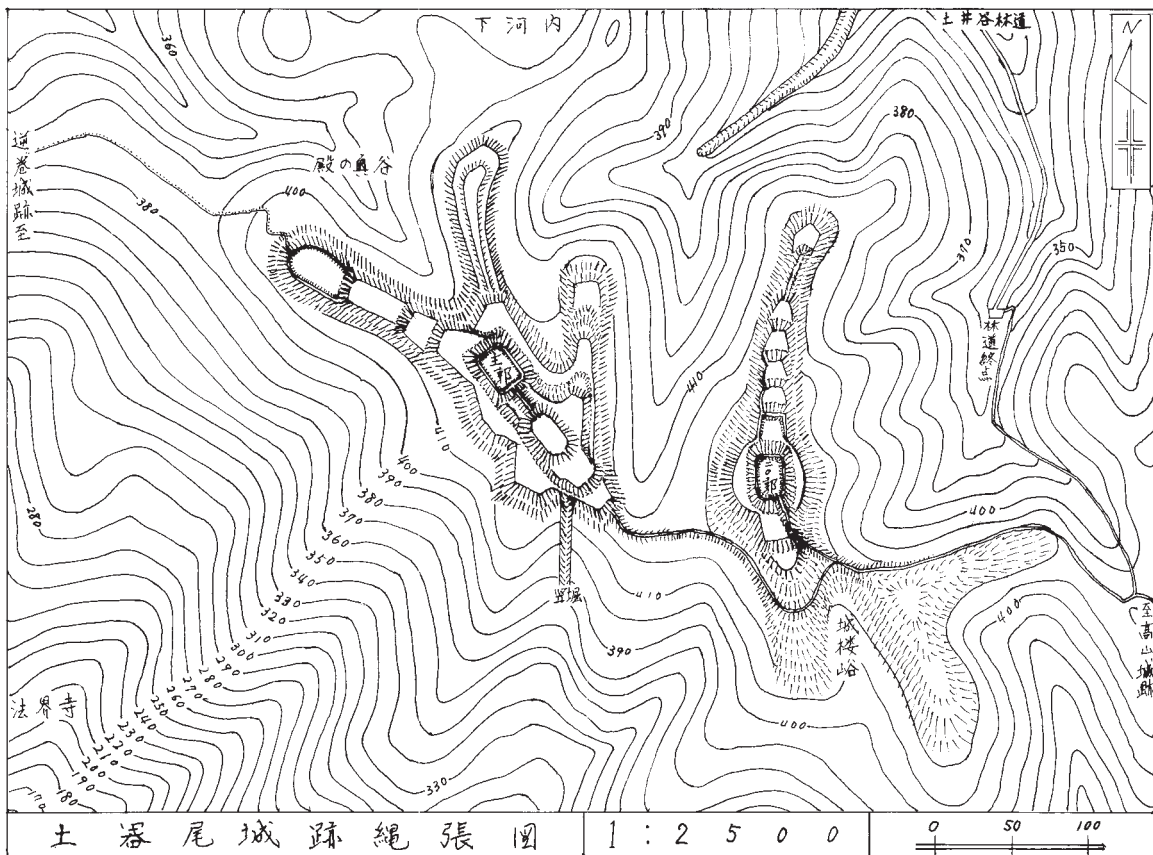
逆巻城と併せて交通の要衝を抑える立地にあることから拠点城郭として機能したものと考えられる。今後詳細な精査が期待される事例である。

文献

『作陽誌』は大庭郡の附録として「土器尾山」を載せ、山上に「墓石」があり、城主を宇喜多秀家の家臣牧藤左衛門家信と記す。妹尾氏の覚書（『美作古城史』所収）に、妹尾重助が「土器尾之城」を預かり数度の高名のち山下で討死したとある。『日本城郭全集』は「土器尾城」とする。『作陽誌』、『真庭郡誌』、『岡山県通史』真庭23、『美作古城史』、『日本城郭全集』補遺、『日本城



土器尾城



郭大系 866、『改訂岡山県遺跡地図』落合280、『落合町史』通史編
地区誌編

所在地 真庭市中河内

850・856、『改訂岡山県遺跡地図』落合299・300、勝山28、『落合町史』通史編・地区誌編、『真庭市埋蔵文化財調査報告3』

立地

中河内地区の河内川左岸、八幡集落の南側の山頂部に所在する。中国自動車道及び姫新線の南側に位置する。標高は約三二〇mである。

縄張

『落合町史』は縄張図を掲載し、山の頂部を平坦に削平し、東北に向けて二〜三段の落差のない郭を配する。その下に腰郭のような施設があるようだが、テレビ塔建設に伴う道路新設によって破壊され確認できないとする。



田楽城

城史

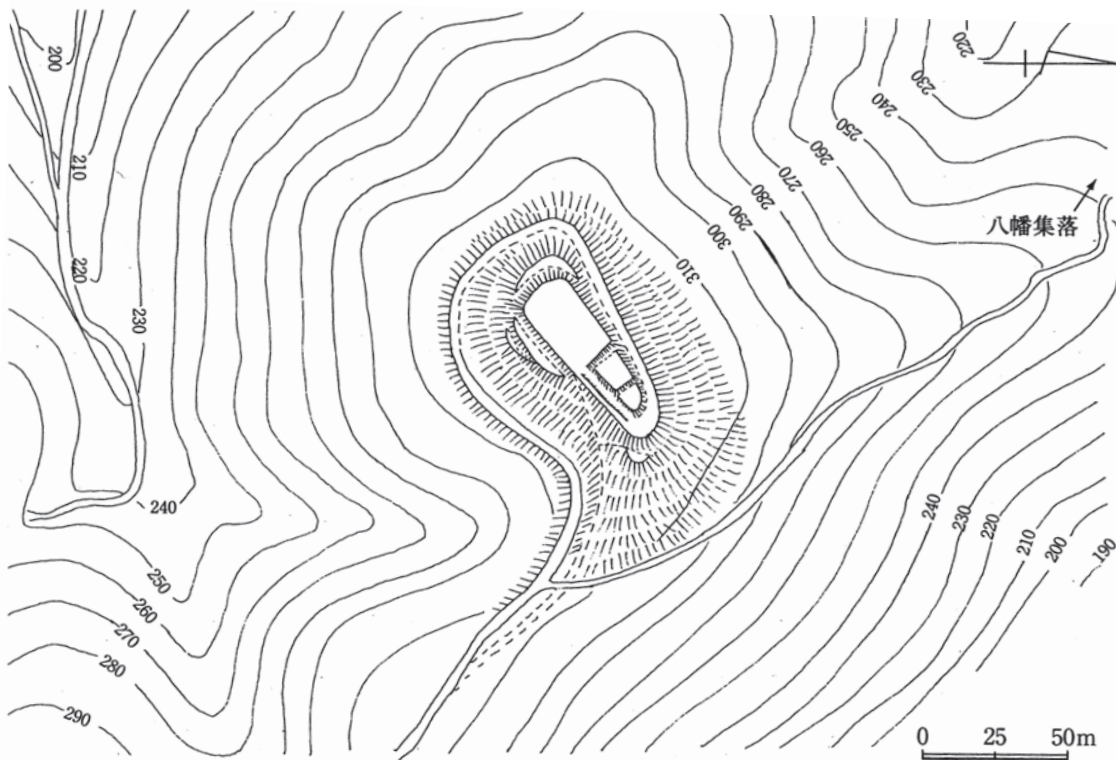
『作陽誌』は「田楽堡」として、大庭郡上河内下村にあり、宇喜多秀家の家臣牧藤左衛門が居すと記す。『真庭郡誌』は一名を「田永城」とするが、「楽」字の草書を「永」と誤読か。また、勝山町山久世にあるとする「下村田永城」も、本城の訛伝でおそらく存在しない。『日本城郭全集』は久世町下村の「下村田永城」とするが誤りである。

備考

平成二二年（二〇〇九）、地上デジタルテレビ放送施設建設に伴い主郭の発掘調査が行なわれたが、顕著な遺構や出土遺物は認められなかった。なお『改訂岡山県遺跡地図』によれば、当城の西、真庭市下河内の久保谷出口にある独立丘陵頂上西側に平坦面（一〇×二〇m）と西側下部に帯状の平坦面（幅四m）があり、田楽城の見張り台等の小規模施設と推測されている。

文献

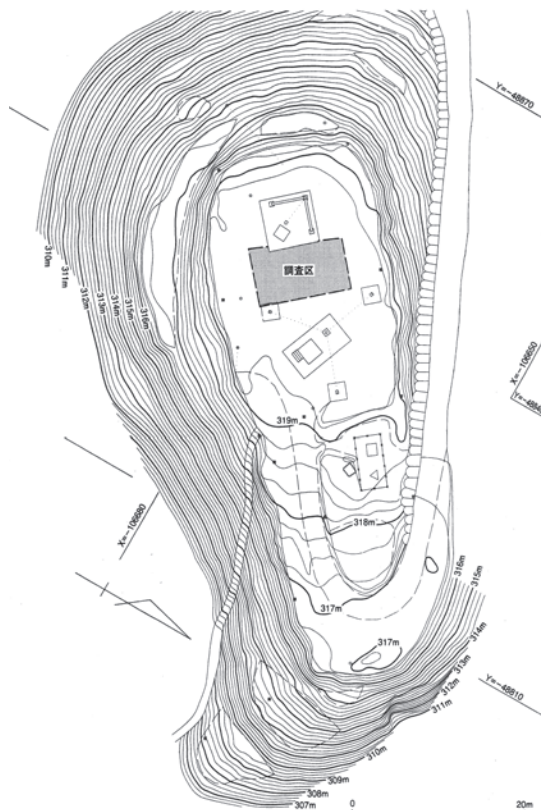
『作陽誌』、『美作鏡』、『真庭郡誌』、『岡山県通史』真庭19、『月田郷土史』、『美作古城史』、『日本城郭全集』補遺、『日本城郭大系』



田楽城縄張図（難波澄夫作図『落合町史 通史編』より引用）

13 上山城・梅森城・都我布呂城

所在地 真庭市上山



田楽城平面図（『真庭市埋蔵文化財調査報告3』より引用）

城史

正保書上五四城の一で、「古城之覚」は真島郡上山村の「上山」として、城主を由井宗四郎、備前国との境で「つかふく」とする。「作陽誌」は「都我布呂城」として、高さ六〇間、周り六〇〇間、芦田作内・新山玄蕃らが守ると記す。天保国絵図に「塚室古城跡」とある。『美作古城史』は都我布呂城（塚風呂城）と上山城を別に掲げ、共に伝えられるものがないとする。『日本城郭全集』は「上の山城」「都我

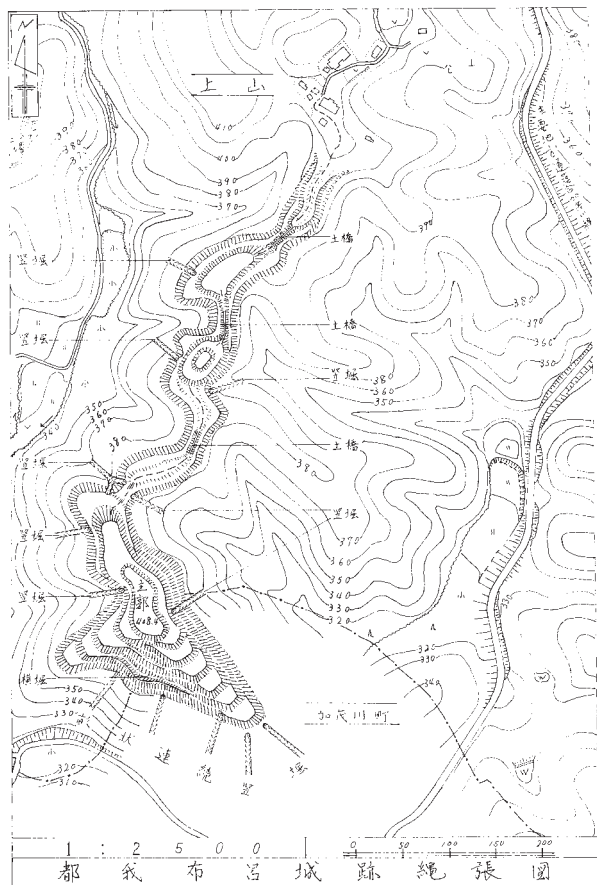
縄張

旧落合町と加茂川町の境界付近、恩木ダム北部の独立峰上に所在する。標高は約四一〇mである。緩やかに続く尾根に沿って曲輪を連ね、南側斜面には均等距離に縦堀を配した畝状空堀群が確認される。『落合町史』は縄張図を載せる。参照されたい。

立地

文献

布呂城」と重出する。
 永禄九年（一五六六）頃、牧左馬助は一六歳の時に「有為山之城主由井宗四郎」との合戦で太刀打し、高田城（真庭市勝山）の城主三浦貞広から感状を与えられたという（「牧左馬助覚書」）。天正八年（一五八〇）正月、毛利輝元は河北元貞や高須元与の「梅森」「つかふる」在番を賞し、所領を与える旨、判物を与えている。同年閏三月、小早川隆景と吉川元春は、宇喜多直家が「埴和表」に出勢との情報に宮山城（真庭市上市瀬・高屋）攻撃の予定を転じ、当城に陣替している（河北家文書、「閥閥録」）。
 「武家聞伝記」、「作陽誌」、「美作鬘鏡」、「美作鏡」、「真庭郡誌」、「岡山県通史」真庭2、「美作古城史」、「日本城郭全集」補遺、「日本城郭大系」863、「改訂岡山県遺跡地図」落合40、「落合町史」通史編・地区誌編



14

城山じょうやま

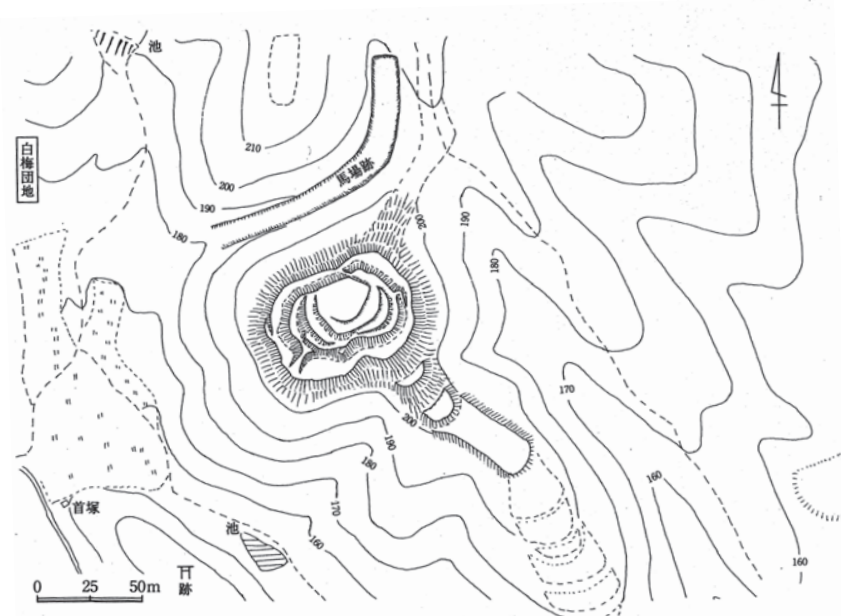
所在地 真庭市上市瀬

立地

深山から東南に延伸する尾根のピーク上にあり、宮山城の南麓、上市瀬地区檜集落の北に位置する。標高は約二二〇mである。

縄張

『落合町史』は縄張図を掲載し、主郭は広く、円形状に下へ郭を配し、南東の尾根に郭が続き、北の谷に手を加えた「馬場」と呼ばれる場所があると記す。



城山縄張図（難波澄夫作図『落合町史 通史編』より引用）

城史

『落合町史（旧版）』は、「城山堡」として、城山の地に弘治元年（一五五五）、妹尾孫九郎が備中国から来て砦を構え住むとする。『落合町史』は「城山（丈山）」として、中組集落を少し登り、「馬ヶ峪」という谷の下の喉首の場所にありとし、「馬ヶ峪」をそのまま登ると宮山城（真庭市上市瀬・高屋）に至るとする。

文献

『落合町史（旧版）』、『落合町史』通史編

15 殿土居とのどい

所在地 真庭市上市瀬

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

『落合町史（旧版）』は、「殿土居」として、現在田となり、累石と古祠を取り巻く一六坪ほどが残り、地元民は「殿土居様」というとする。

文献

『落合町史（旧版）』

16 宮山城・高屋城

所在地 真庭市上市瀬・高屋

立地

深山から東に延伸する尾根のピーク上にあり、旭川流域、当摩川流域を広く一望する。標高は約四五〇mである。高屋地区にある天津神社を指すと、その先の道脇に「宮山（高屋）城址」の標柱がある。山頂に主郭を置いて東側へ稜線に沿って曲輪と帯曲輪を連ねる。主郭は南側にスロープ状に下りる平入り虎口が確認される。そして城

縄張

城史

道に沿って曲輪を並べる配置となっている。主郭の西側は幾重にも堀切が築かれ遮断線を構築する。宮山城で特徴的なのは南側斜面に均等な幅を以て築かれた畝状空堀群である。主郭や南東側の足場となる斜面に効果的に畝状空堀群を配した。城域も大きく、この地域を抑えるための拠点城郭として機能したものと考えられる。また、主郭部は後世の宇喜多氏段階で虎口などの改修など整備された可能性も考えられる。『落合町史』は縄張図を掲載する。参照されたい。正保書上五四城の一つ、「古城之覚」は真島郡高屋村の「高屋」として、城主を宇喜多秀家の陪臣市又次郎、別に同郡市瀬村の「宮山」として城主を同じく秀家の陪臣市瀬三郎兵衛とし、城山は南向きで南の高さ三九〇間、北の高さ三三〇間、本丸（東西一三間、南北九間）、二丸（東西一七間、南北八間）、三丸（東西三〇間、南北八間）、太鼓櫓之段（東西四〇間、南北四間）、又次郎は秀家が八丈島流罪のち「行方不明」とする。元禄二年（一六八九）の「真島郡村々古事名物書上ヶ御帳」（『真庭郡誌』所収）に「宮山」の古城は、平地からの高さ八二間、本丸（南北一〇間、東西九間）、二ノ丸（南北五間、東西一〇間）、三ノ丸（南北八間、東西九間）、「横から堀切」「立から堀切」などが多くあり、宇喜多直家家来の市三郎兵衛・小瀬中（つな）将取立の城で二人が居住などである。「作陽誌」は「宮山城」として、上市瀬村にあり、山の高さ八〇間余り、影村・高屋村・開田村・西河内村・下市瀬村に跨り、宇喜多家の將小瀬中務・市三郎兵衛が守るとする。「美作鏡」は宮山城のみとし、上市瀬村と高屋村へ跨るとする。「天保国絵図」には記載がない。ちなみに『落合町史(旧版)』に、城跡の山は俗に要害といふとある。『日本城郭全集』は「高屋城」たかやに、「宮山城」として重出する。

天正七年（一五七九）九月、宇喜多氏は毛利氏との対立に際し「宮山」に諸牢人を抛らせ、対して十一月、吉川元春は、「宮山」など

を落去させ岩尾山城（津山市吉見）への連絡をとるといった戦略を示している。また宇喜多直家は同年一二月晦日に、篠向城（真庭市大庭・三崎）へ在番中の沼元新右衛門尉に、「宮山」の普請などは堅固であることを伝えている（『藩中諸家古文書纂』、「譜録」、新出沼元家文書）。ちなみにこの時に宮山城に籠められたのは、小瀬修理衛（りょうゑ）市三郎兵衛・新身平内丞とされている（『武家聞伝記』）。翌八年正月になると毛利氏による宮山城攻撃が予定されたが、他城への対応に追われるなどたびたび延引、九月以降になってようやく城を取詰めるに至ったようで、二月一日朝、小早川隆景は「宮山」に付城数ヶ所を付けようと山見に出た際、城から出た宇喜多勢と鉄砲戦となり、双方に死者を出しともに退いた（『閩閩録』、「佐々部一斎留書」、「花房家記事」、井原家文書、「藩中諸家古文書纂」）。そして同九年四月には吉川元長が宮山城を攻囲、麓で戦闘が行なわれ、城内の「ひた権丞」が内通し放火、夜半過ぎから吉川勢の攻撃が明朝七時まで続き負傷者が相次いだ、吉川勢は退却した（『佐々部一斎留書』、「美作国諸家感状記」、木村文書、「御答書」、「安西軍策」。同年五月一〇日、今度は宇喜多勢が真木山城（真庭市鹿田）を攻撃、城内の辻新次郎はこれを退け、宮山城下へ兵を出し放火し兵を討ち取っている（『美作国諸家感状記』、「武家聞伝記」）。しかし岩屋城（津山市中北上）が六月二五日に落城、篠向城も同月二九日に退去し、宮山城の一城だけとなったことから直家の命で城兵は日中に退去した（『吉川家中并寺社文書』、「閩閩録」、「花房家記事」。同年一月には和知元郷と有福元貞の宮山在番について、元貞に備前国馬屋郷の内が与えられている（『閩閩録』）。その後、同一二年正月、安国寺恵瓊は児玉元良らに対し、「高田・岩屋・宮山・高仙」の城へ国元からも退去を言い聞かせるように要請している（毛利家文書）。その後、天正期後半頃には篠向城（真庭市三崎・大庭）の城主江原

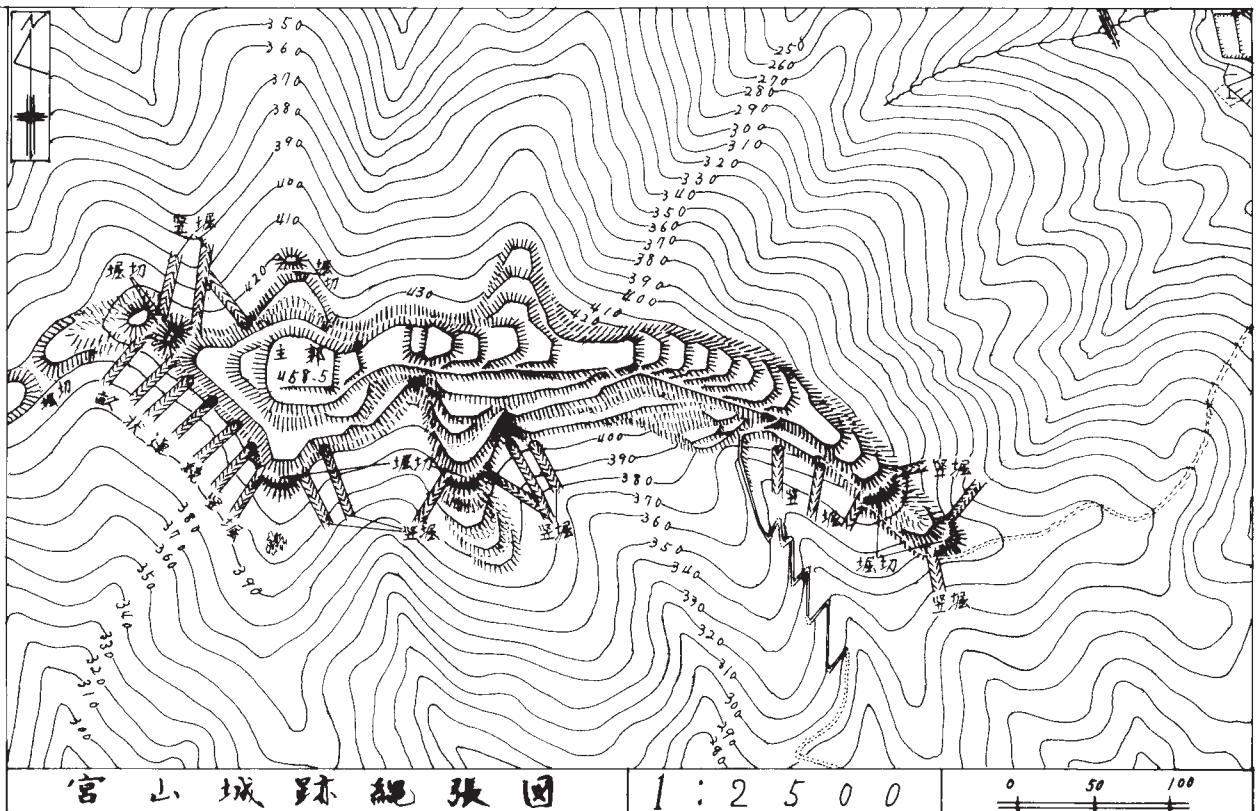
文献

親次の家臣中島本政は、走者を討った功により「宮の城主市三郎兵衛」から刀を与えられたという（中島本政覚書）。

「安西軍策」、「陰徳記」、「武家聞伝記」、「作陽誌」、「美作鬢鏡」、「陰徳太平記」、「備前軍記」、「美作鏡」、「美作略史」、「真庭郡誌」、「岡山通史」真庭1・31、「美作古城史」、「落合町史（旧版）」、「日本城郭全集」真庭郡8・補遺、「日本城郭大系」858、「改訂岡山県遺跡地図」落合56、「岡山の山城を歩く」69、「落合町史」通史編・地区誌編



宮山城・高屋城



17 志見山城・志め山城・注連山城

所在地 真庭市落合垂水

立地

垂水地区の旭川右岸、備中川左岸にある丘陵頂上付近に所在する。標高は約三三〇mで、旭川流域、備中川下流域を一望する。



志見山城・志め山城・注連山城

縄張

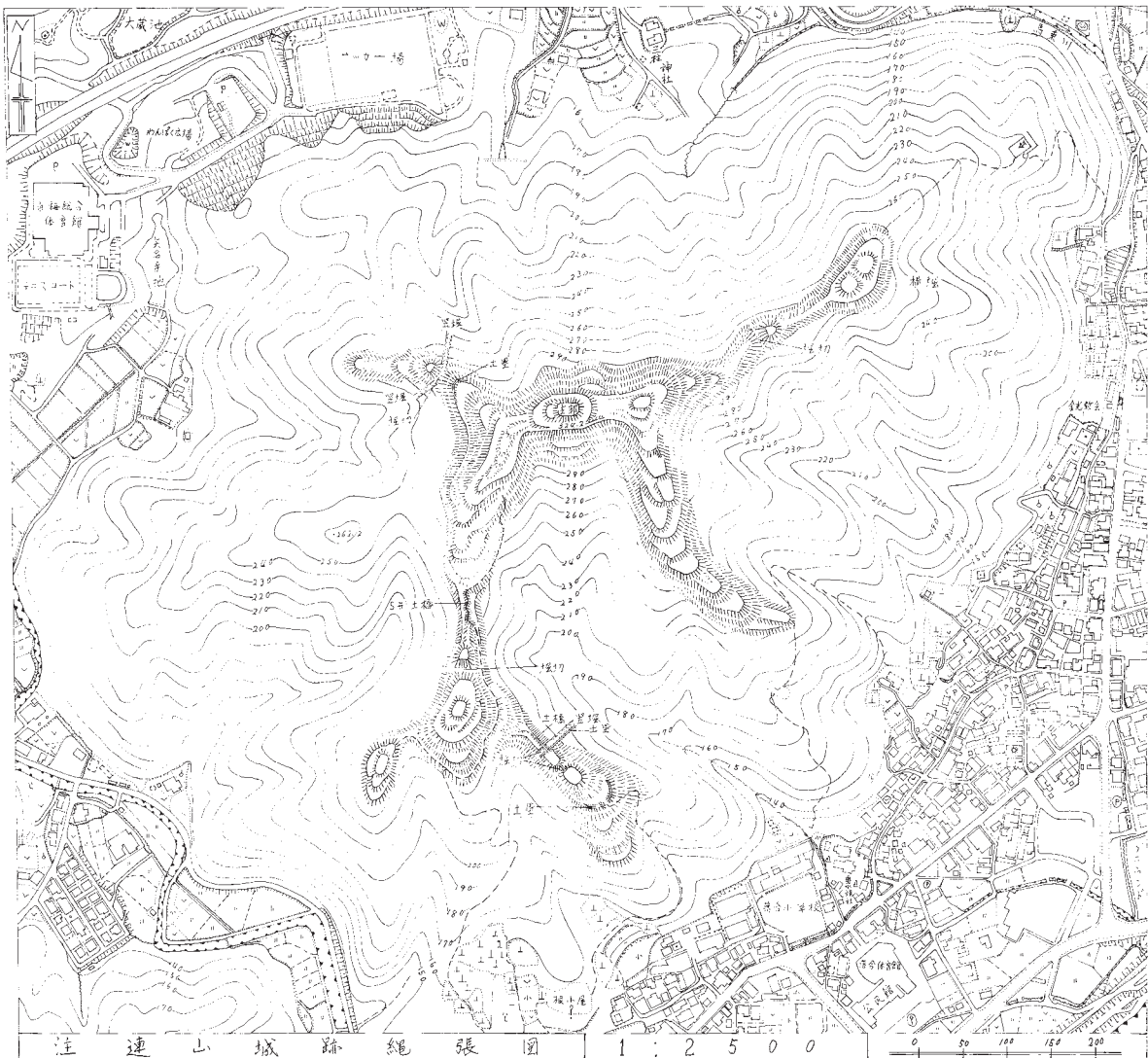
『落合町史』は縄張図を載せる。全体としてまとまりのない散漫な形で曲輪群が山上に並んでいることがわかる。中心となる主郭がわかりづらい。部分的に堀切や堅堀が確認される。天正年間（一五七三～一五九三）以前の古式な縄張りと思われる。

城史

正保書上五四城の一で、「古城之覚」は真島郡垂水村の「志見山」として、城主を井原左衛門尉、また別に同郡の「志め山」として城主を小瀬右京進広勝とする。「作陽誌」は「注連山城」として、木山天王（現木山神社）が初めて鎮座、注連縄を張ったことから注連山といい、かつて比多淡路守という人物が築城、あるいは井原左衛門が居城という記事。『美作鬘鏡』は「志見山城」と「志め山ノ城」を併記、「美作鏡」は「志見山城」のみとする。天保国絵図に「志見山古城跡」とある。『日本城郭全集』は「志見山城」「注連山城」として重出する。

文献

『武家聞伝記』、「作陽誌」、「美作鬘鏡」、「美作鏡」、「真庭郡誌」、「岡山県通史」真庭5、「美作古城史」、「落合町史（旧



版）、『日本城郭全集』補遺、『日本城郭大系』849、『改訂岡山県遺跡地図』落合150、『落合町史』通史編・地区誌編

18 薬師寺構（仮称）

所在地 真庭市西河内

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

元禄二年（一六八九）の薬師寺九右衛門先祖書（『美作古城史』所収）には、「赤松宗景」から西河内村と向津屋村に知行を与えられた薬師寺与三左衛門が平城を構え、今にその跡があるとする。

文献

『美作古城史』

19 殿屋敷

所在地 真庭市日野上

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

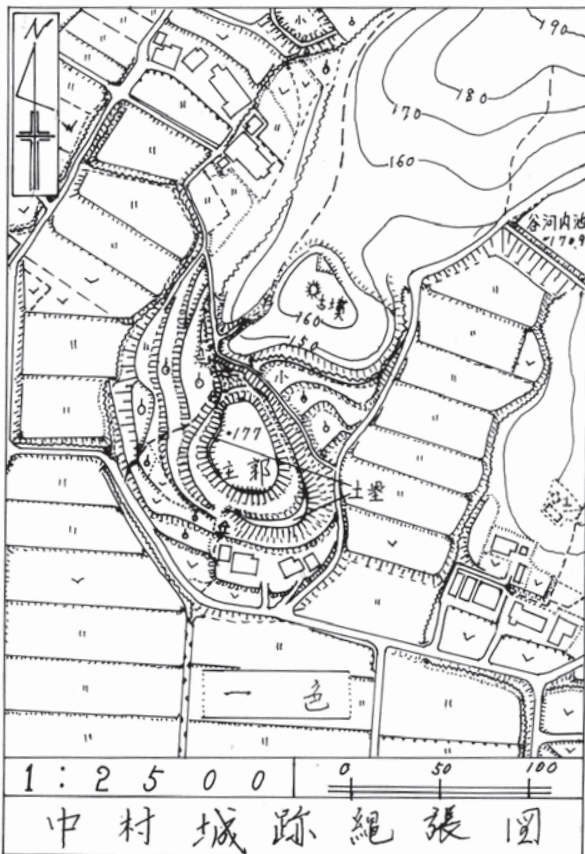
「作陽誌」は「殿屋敷」として、真島郡日上村小宗の地に「旧宅跡」があると記す。

備考

山形省吾氏の踏査によれば、現地には城郭遺構が残り、頂部には宝篋印塔や五輪塔が集積されているとのことである。

文献

「作陽誌」



20 一色山城・大井手城・中村城・城山

所在地 真庭市一色

立地

一色地区の備中川左岸にあり、中一色集落と下一色集落との中間にある小丘陵上に所在する。標高は約一五〇mで、緩斜面上に位置する。付近に「城山」「城の前」「マトバ」「中村」などの地名が残る。

縄張

丘陵の先端に単郭の主郭を構え、周囲に横堀を配して防禦する縄張りとなっている。『落合町史』では館跡と評価する。村落に割拠する土豪層の持城と考えられる。



一色山城・大井手城・中村城・城山

城史

「古城之覚」は真島郡中村の「一色山」として、城主を三輪与惣兵衛、「大井手之城」ともいうと記す。「美作鬢鏡」は「中村ノ城」、「美作鏡」は「一色山城」、「美川村郷土誌」は「一色村中村城」とする。『美作古城史』は、美川村一色の中央部に構居の跡があり、これを中村城に比定している。『改訂岡山県遺跡地図』は「城山城」とする。

文献

「武家聞伝記」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「岡山県通史」真庭22、『美川村郷土誌』、『美作古城史』、『日本城郭全集』補遺、『日本城郭大系』869、『改訂岡山県遺跡地図』落合311、『落合町史』通史編・地区誌編

21 石ヶ城・城山

所在地 真庭市鹿田

立地

鹿田地区の備中川右岸にあり、備中川に南東から迫り出してくる独立峰上に所在し、標高は約二四八mである。約五〇〇m北東に横ヶ城がある。付近に「木戸ヶ峪」の地名がある。

縄張

東側の尾根に堀切を入れて先端を城域として整備した縄張りを持つ。東西に二つのピークがありそれぞれ主郭と第二郭を形成する。いずれの曲輪も土塁囲みの単郭で周囲に腰曲輪を持つ。近接する真木山城と共に、備中川沿いの土豪層の持城と考えられる。『落合町史』は縄張図を載せる。

城史

「作陽誌」は「石城」として、真島郡鹿田村にあり、高さ八〇間余り、周り一三町余り、辻新



石ヶ城・城山

備考

次郎が居城と記す。「美作鬢鏡」は「石ヶ城」とし城主は辻秀正とある。『美作古城史』は辻氏系図により「石井ヶ城」ともいうとし、真木山城（真庭市鹿田）と並立しているとする。

文献

『落合町史』は旧松山往来が通る下方・鹿田地区境の備中川沿いに「城山」という寂しい場所があり、「城山狐」が人を騙していたとする。「作陽誌」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「真庭郡誌」、「美作古城史」、「日本城郭全集」補遺、『日本城郭大系』848、『改訂岡山県遺跡地図』落合394、『落合町史』通史編・地区誌編

22 真木城・真木山城・横山城・横ヶ城

所在地 真庭市鹿田

立地

鹿田地区の備中川右岸にあり、備中川に西から迫り出してくる尾根上に所在する。標高は約二七〇mで、約五〇〇m南西に石ヶ城がある。山上の単郭の主郭と南西側の第二郭から構成される。主郭の虎口には石組みが確認される。周囲に

縄張

段状に削平地が続くが後世の改変の可能性が高いので遺構の評価には注意を要する。近接する石ヶ城と共に、備中川沿いの土豪層の持城と考えられる。『落合町史』は縄張図を掲載する。

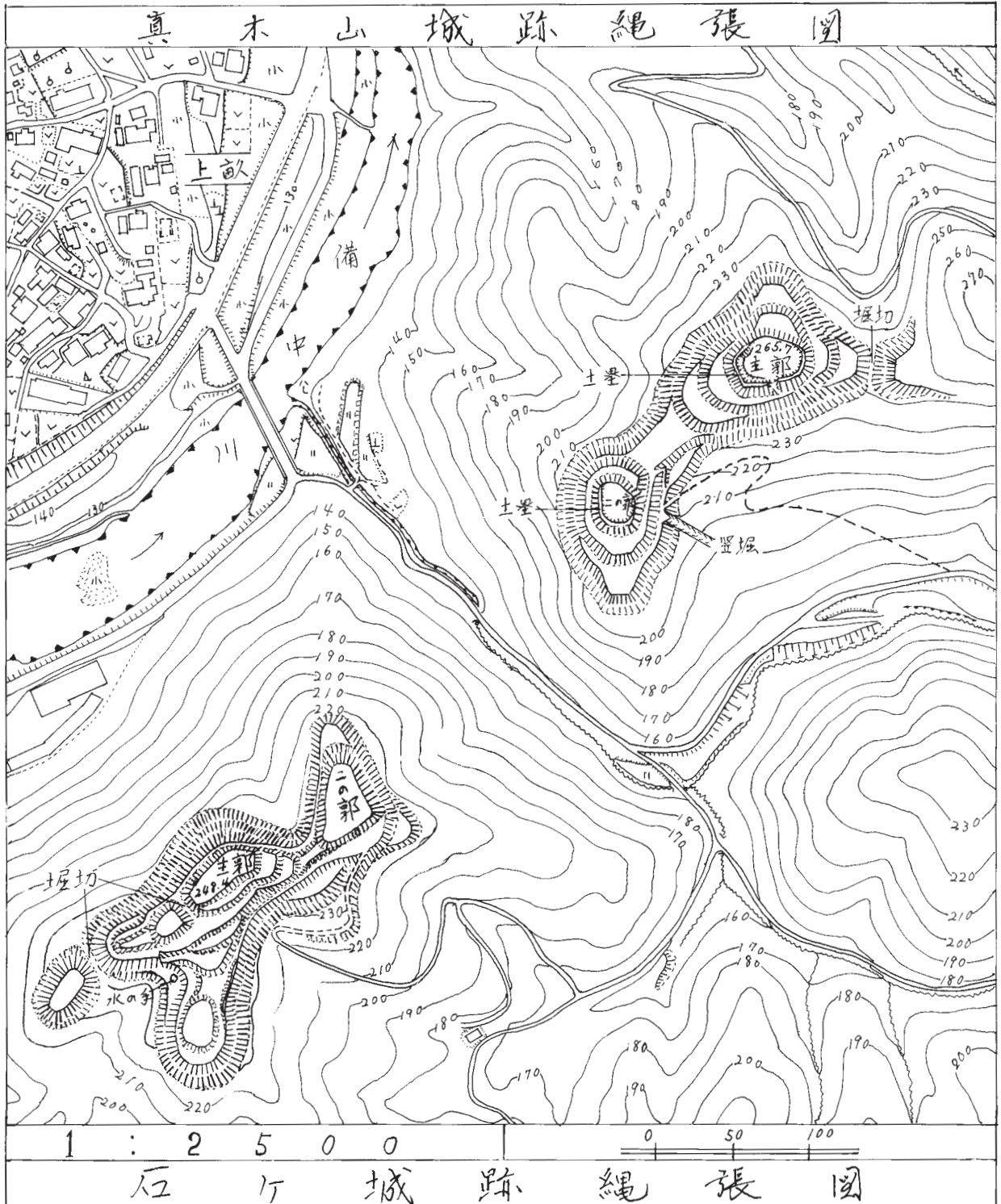
城史

正保書上五四城の一で、「古城之覚」は真島郡鹿田村の「横山」として、城主を鈴木孫右衛門と



真木城・真木山城・横山城・横ヶ城

する。「作陽誌」は「石城、附真木城」として関係史料を載せる。真光寺（真庭市鹿田）の記録（『美作古城史』所収）は元禄二年の書上を引用し、平地より本丸まで高一〇〇間、周り五九五間、本丸（長さ一五間、横一〇間）、二の丸（長さ一一間、横六間）、昔の城主は不詳で、毛利家の家臣三輪与三兵衛、のち鈴木孫右衛門が居城と伝わるとする。天保国絵図に「榎ヶ古城跡」とある。『真庭郡誌』は「石城下谷」を隔てて城があると記す。『美作古城史』には「真木山城（榎ヶ城）」とある。『日本城郭全集』は「真木城」「榎山城」



と重出する。

天正三年（一五七五）三月一日、高田三浦氏の家臣牧菅兵衛尉らは、備前国虎倉の城主伊賀氏の拠点である「真木城」を夜討ちして城を切り取り、三浦貞広から太刀を与えられている（下河内牧家文書）。同八年（二月二七日）、辻新次郎らが在番する真木山城（真庭市鹿田）が敵から攻撃を受けたが即時に退け、三輪与三兵衛からの注進を受けた毛利輝元は同一〇年（一五八二）正月、新次郎を賞し、「旧冬」からの在番を労っている（『諸家感状記』）。そして同九年五月一〇日、再び真木山城を攻撃された辻新次郎はこれを退け、宮山城下へ兵を出し放火し兵を討ち取っている（『美作国諸家感状記』、「武家聞伝記」）。その後の経緯は不明だが、同一一年六月、鈴木孫右衛門は宇喜多又四郎（江原親次）に神文誓詞を差し出し、同氏に与して「真木城」を堅固に守ったことで宇喜多秀家から判物を与えられている（『美作国諸家感状記』）。

『改訂岡山県遺跡地図』は「榎山城跡」と「真木ヶ城跡」の二ヶ所を重複して地図表示するが誤りである。

『武家聞伝記』、「作陽誌」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「美作略史」、「真庭郡誌」、「岡山県通史」真庭7、「美作古城史」、「日本城郭全集」補遺、『日本城郭大系』877、『改訂岡山県遺跡地図』落合383、393、『落合町史』通史編・地区誌編

23 植木構うえき（須内遺跡・須の内遺跡）

所在地 真庭市鹿田

立地

鹿田地区の備中川左岸にあり、上寺集落がある河岸段丘上に所在する。



植木構遺構配置図（『岡山県埋蔵文化財調査報告11』より引用）

縄張

未詳。

城史

『作陽誌』は「植木構」として、真島郡鹿田村上寺の地にあり、かつて植木惣十郎が鹿田郷地頭職を領して居住、惣十郎は越尾五郎次郎に討たれたと記す。天明七年（一七八七）の真光寺（真庭市鹿田）の記録（『美作古城史』所収）は、上寺の地に城跡があり、脇の番山という小丸山は物見櫓の跡と伝わるとある。

遺物

須恵器・土師器・備前焼・陶磁器・銅印・瓦質土器など。

備考

中国縦貫自動車道建設に伴い昭和四九年（一九七四）に確認調査が行なわれ、中世の掘立柱建物や土壙、井戸、溝などが検出された。また県営ほ場整備事業に伴い平成一三～四年（二〇〇一～二）に確認調査が行われ柱穴列や溝が確認された。調査後一部消滅。

文献

『作陽誌』、『美作略史』、『美作古城史』、『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』11、『日本城郭大系』836、『落合町史』地区誌編、『落合町埋蔵文化財発掘調査報告』4

所在地 真庭市栗原

立地

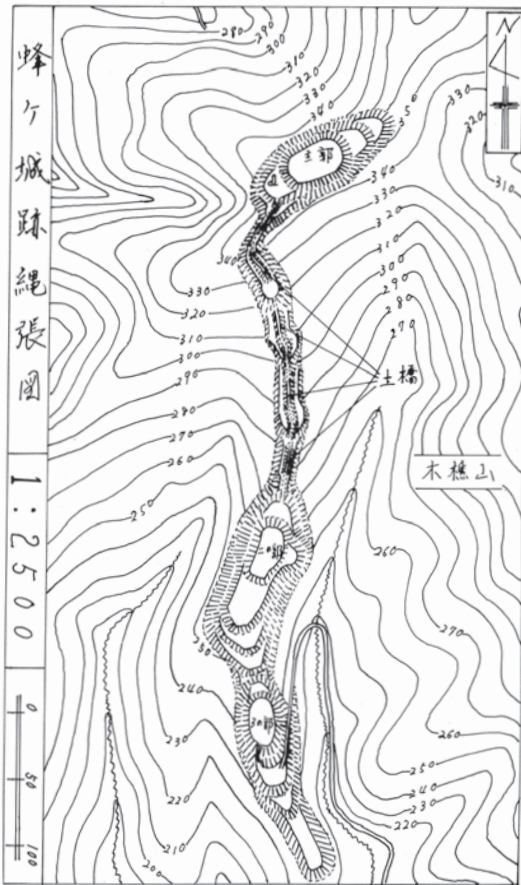
備中川左岸の木樵山集落の北、中国自動車道の北側の独立峰・木樵山頂上付近に所在する。標高は約三三三mで、一色・栗原・鹿田地区など備中川流域を広く眺望する。

縄張

『落合町史』は縄張図を載せる。木樵山上から尾根に沿って複数の曲輪を持つ。山上に曲輪を並べることで城域が構成される。この地域に割拠した土豪層が立て籠る程度の城郭と考えられる。



八ヶ城



城史

延享四年（一七四七）の栗原村の明細帳（『美作古城史』所収）に、「八ヶ城」は三浦与三右衛門の古城跡とある。『美川村郷土誌』は「蜂ヶ城」として、木樵山にあり、城主不詳であるとする。三浦与三右衛門について『美作古城史』は「八ヶ城」とし、毛利氏の軍監三輪与三兵衛の誤伝かとする。

文献

『美川村郷土誌』、『美作古城史』、『日本城郭大系』881、『改訂岡山県遺跡地図』落合316、『落合町史』通史編・地区誌編

25
栗原城
くりはら

所在地 真庭市栗原

立地

栗原地区の備中川右岸で、古市場集落に向かって北に延伸する尾根の先端付近に所在する。標高は約二七〇mである。

縄張

尾根に沿って曲輪を並べ、複数の堀切で城域を分けたことが見て取れる。『落合町史』は縄張図を掲載する。参照されたい

城史

「古城之覚」は真島郡栗原村の「栗原」として、城主を栗原惣兵衛とする。延享四年（一七四七）の栗原村の明細帳（『美作古城史』所収）に、「前川山」は栗原惣兵衛の古城跡とある。『美川村郷土誌』に、古市場にあり、城主は栗原与惣兵衛（惣四郎）といい、数年前まで子孫の老婆がおり、城跡には礎石がみられるとする。『日本城郭全集』は「栗原城」とする。



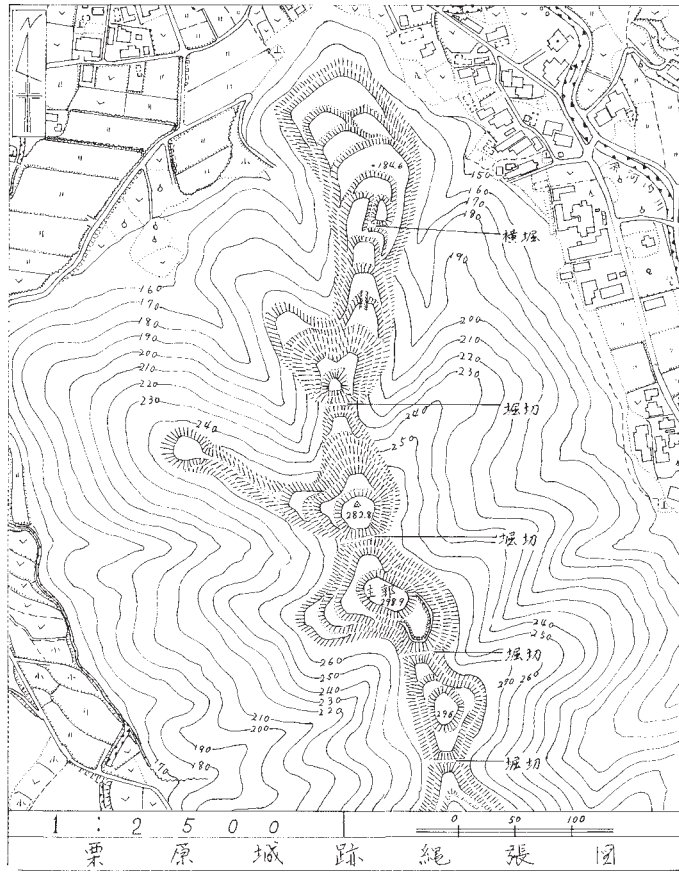
栗原城

立地

関川右岸にあり、佐引地区佐引集落の北西背後の丘陵頂上に所在する。標高は約三三〇mである。

26 佐引城

所在地 真庭市佐引



備考

『落合町史』によると、前川城は麓の館城の跡、山上の城は「水船城」と呼ぶことがあるという。

文献

「武家聞伝記」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「真庭郡誌」、「岡山県通史」真庭8、「美川村郷土誌」、「美作古城史」、「日本城郭全集」補遺、「日本城郭大系」841、「改訂岡山県遺跡地図」落合366、「落合町史」通史編・地区誌編

縄張

山頂に主郭を配し、南東側に郭を連ねる。集落に近いことから後世の改変が加わっている可能性が高く、斜面の遺構評価は慎重を要する。『落合町史』は縄張図を載せる。参照されたい。

城史

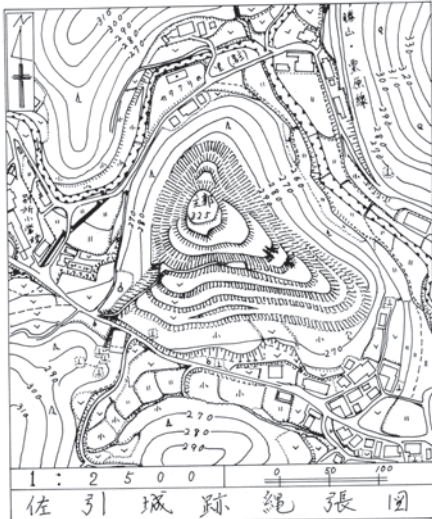
「古城之覚」は真島郡佐引村の「佐引」として、城主不詳、「作陽誌」は「佐引堡」として、山の高さ六〇間、城主不詳と記す。『美川村郷土誌』は、戦国時代の砦の跡と推測している。『美作古城史』は、山は二段で、俗に本丸といい、地名は城畝、城主の霊を村社境内に城山神社として祀る、杉系図に「佐引城主の後裔中山次郎右衛門」とあることから、中山氏の居城と推測されるが、伝承はないとする。『日本城郭全集』は「佐引城」とする。『落合町史』は頂上を「本丸」と呼ぶとする。

備考

『改訂岡山県遺跡地図』の地図表は誤りである。

文献

「武家聞伝記」、「作陽誌」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「真庭郡誌」、「岡山県通史」真庭9、「美川村郷土誌」、「美作古城史」、「日本城郭全集」補遺、「日本城郭大系」847、「改訂岡山県遺跡地図」落合102、「落合町史」通史編・地区誌編



佐引城

27 十六城・十六ヶ城

所在地 真庭市下方・落合垂水

立地

備中川右岸で、南垂水集落から約五〇〇m南東の山頂部に所在するとされる。標高は約三六〇mである。

縄張

『落合町史』は、現地は自然地形であるとして縄張り図は掲載されていない。積極的な曲輪の創出は成されなかったものとみられる。

城史

『古城之覚』は真島郡下方村の「十六」として、城主不詳とする。元禄二年（一六八九）の「真島郡村々古事名物書上ヶ御帳」（『真庭郡誌』所収）に「十六ヶ城」は、本丸（東西長さ一四間、南北横六間）、二ノ丸（東西長さ一〇間、南北横六間）、三ノ丸（東西長さ一八間、南北横一一間）、道は一筋で本丸から平地まで四町、年代・城主ともに不詳とある。「作陽誌」は「十六山」として、山名の由来不詳、山上に砦跡があり、山へは四町と記す。「美作鏡」は「十六城」とし、『美作古城史』は一夜城の跡と推測。『落合町史（旧版）』には「万賀岐城」として、今も埋没した古瓦等が発見されるとある。

文献

「武家聞伝記」、「作陽誌」、「美作鏡」、「真庭郡誌」、「岡山県通史」真庭6、『美作古城史』、『落合町史（旧版）』、『日本城郭全集』補遺、『改訂岡山県遺跡地図』落合392、『落合町史』通史編

28 関山城・飯山城・城頭山城・初伏城

所在地 真庭市関

立地

関地区飯山集落北側の標高約三四〇mの独立峰上か、もしくは谷河内集落の北西にある標高約二五〇mの尾根上とされている。

縄張

『日本城郭大系』は、二つの郭と二条の堀切、土塁が残存とする。『落合町史』では中腹に飯山城があるとする。

城史

『古城之覚』は真島郡関村の「関山」として、城主不詳、『真庭郡誌』は小瀬右京進広勝の居城と記す。現在、城頭山城（初伏城）とその中腹にある飯の山城の総称と考えられる。城頭山城は『真庭郡誌』に、一名初伏城とし、嘉吉・文安（一四四一〜九）の頃、綱島左近将監が居城、応仁年中（一四六七〜九）将監に従い細川氏と戦い京都で滅亡し城も落城した、今も山頂に平坦な場所があり城跡を残すとある。『美川村郷土誌』には、山頂を愛宕山というところ。飯山城は、「作陽誌」は「飯山堡」として、山の高さ一六〇間、城主不詳と記す。『真庭郡誌』は「飯の山城」として、城頭山城主綱島将監の老臣初摩総兵衛が居城し、応仁年中（一四六七〜九）将監に従い細川氏と戦い京都で滅亡し城も落城した、山麓の谷川を初摩川というところ。なお『美川村郷土誌』には城は城頭山の中腹にありとする。『日本城郭全集』は「飯の山城」「城頭山城」「関山城」として重出する。



関山城・飯山城・城頭山城・初伏城

備考

なお『美作古城史』は城頭山城を「成瀬山城」とするが、これは『美川村郷土誌』の謄写文字を誤読した結果とみられ、また『改訂岡山県遺跡地図』が成瀬山城として所在地を大河内池北の丘陵頂とするのも誤りである。

文献

「武家聞伝記」、「作陽誌」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「真庭郡誌」、「岡山県通史」真庭10、「美川村郷土誌」、「美作古城史」、「日本城郭全集」補遺、「日本城郭大系」833・839・871、「改訂岡山県遺跡地図」落合103・301、「落合町史」通史編・地区誌編

29 佐野屋敷

所在地 真庭市別所

立地

縄張

別所地区の栗村集落付近に所在するとみられる。
未詳。

城史

「作陽誌」は「浄妙塚」として、別所村にあり、墓石は五層で浄妙については不詳で、同村栗村に「佐野屋敷」があり、あるいはこの人かとする。

文献

「作陽誌」、「真庭郡誌」、「美川村郷土誌」、「落合町史」地区誌編

〔真庭市〕勝山町

30 舟津屋敷

所在地 真庭市組

旭川右岸、組地区集落北側の緩斜面上に所在する。標高は約二一〇mである。

立地

未詳。

縄張

「作陽誌」は「舟津屋敷」として、真島郡組村にあり、三浦氏の家臣舟津弾正左衛門の屋敷で、永祿の始めに讒言にあい退去、後の人が憐れみ小祠を建て祀ると記す。また同書の「三浦氏十三世家系」は別に、讒言により殺害された弾正が祟りをなしたため、三浦貞勝が舟津家を回復、組村に舟津社が建てられたと記す。「船津先祖之系図」（『美作古城史』所収、『久世町史』所収）には、長さ六〇間、

文献

「作陽誌」、「美作古城史」、「日本城郭大系」875、『改訂岡山県遺跡地図』勝山17

31 大壇城

所在地 真庭市山久世

立地

旭川左岸、山久世地区集落に向かって南西に延伸する尾根上に所在する。東を下谷川、西を寺谷川が流れる。標高は約三一〇mである。

縄張

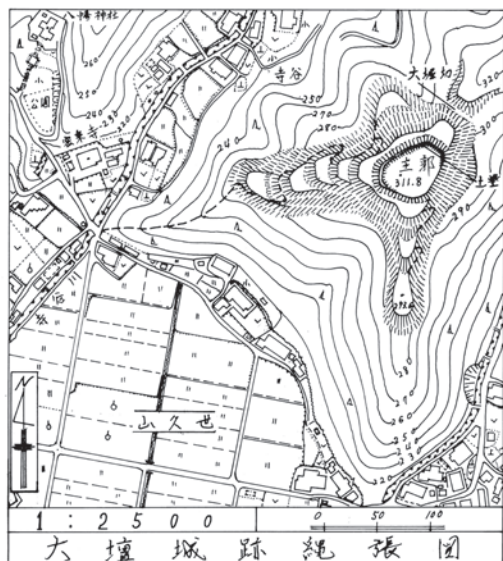
集落の背後の山頂に主郭を構え、北東側に大堀切を入れて先端を城域として整備する。主郭には土塁を配し、先端の尾根伝いに曲輪を並べる。

城史

「作陽誌」は「大壇堡」として、大庭郡山久世村にあり、居主不詳と記す。『山久世小史』によれば、地元では「城ヶ段」と呼ばれ、尼子氏の武將上井手六衛門が天文期に築城、同氏はのち高田城（真庭市勝山）の城主三浦氏に属し

文献

「作陽誌」、「美作古城史」、「山久世小史」、「日本城郭大系」854、『改訂岡山県遺跡地図』勝山31。



大壇城

32 阿波土居

所在地 真庭市勝山

「作陽誌」は「鍛冶屋敷」として、真島郡高田村の勝山麓、且の地にありとし、鍛冶の且忠光が住んで三浦家の武器を作っていたと記す。

文献 「作陽誌」

立地

旭川左岸にあり、勝山地区原方集落と国道一八一号線の間、現在の銘建工業本社敷地内に所在していた。

縄張

未詳。

城史

「作陽誌」は「阿波土居」として、高田村の勝山東にありとし、阿波とは昔の人の名前で、その宅地と記す。

備考

戦後まで土塁などが確認されたが、工場敷地となり消滅。

文献

「作陽誌」

33 市構

所在地 真庭市勝山

縄張

勝山地区の旭川右岸、国道三一三号線の西側の陣山山頂に所在する。標高は約四〇〇mで、旭川の対岸には高田城がある。



陣山

鈴神社の背後に平坦地が確認される。その背後は一段下がっており堀切と考えられる。現状の遺構からは高田城攻めの陣城ではなく、その後高田城の支城として整備されたものと考えられる。

立地

未詳。

城史

「作陽誌」は「市構」として、真島郡高田村にありとし、市又次郎の居所と記す。

文献

「作陽誌」

34 鍛冶屋敷

所在地 真庭市勝山

立地

「作陽誌」は「鍛冶屋敷」として、真島郡高田村の勝山麓、且の地にありとし、鍛冶の且忠光が住んで三浦家の武器を作っていたと記す。

立地

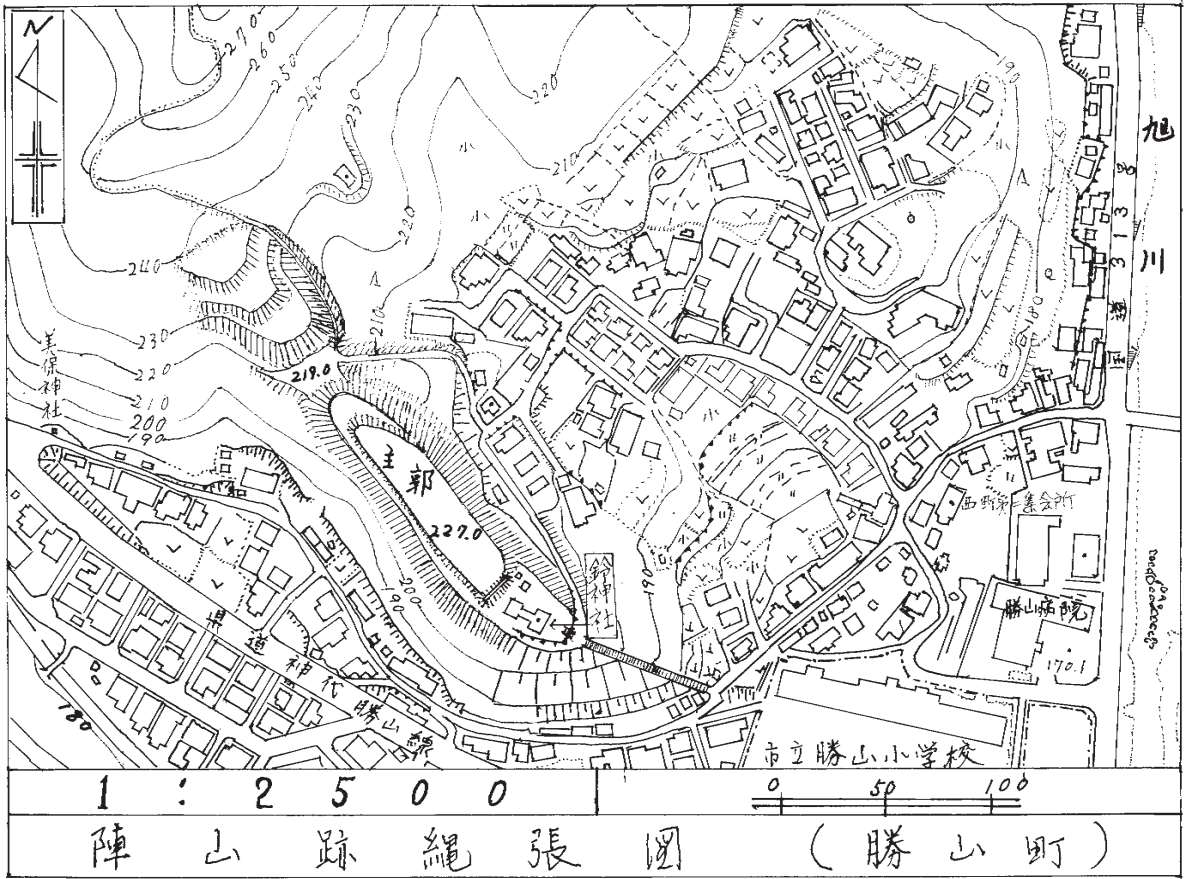
未詳

縄張

未詳。

文献

「作陽誌」、「真庭郡誌」、「月田郷土史」、「日本城郭全集」補遺、「勝山町史」前編、「改訂岡山県遺跡地図」勝山61



36

高田城

所在地 真庭市勝山

真庭市指定史跡

立地

勝山地区の旭川左岸、旭川が西から南へと湾曲する部分の南側独立峰上に所在する。標高は約三一〇m。旭川流域を広く眺望する。勝山地区にある勝山スポーツセンターに城山登山口の標柱がある。

縄張

城域は北側の本城部分と谷を挟んだ南側の城域に大別される。北側の本城部分は、山上に主郭を構えて東側の稜線に沿って曲輪を並べる縄張りとなっている。主郭部に後世の改修の可能性が考えられるが、それを除けば、曲輪と堀切、土塁を用いた典型的な戦国期の在地系縄張り技術で整備されたことがわかる。一方、南側の城域は、山上の曲輪を頂点として地形に沿って曲輪を丹念に連ねる縄張りに終始する。縄張りからみた場合、高田城は織豊期以降の改修された部分を除くと、曲輪配置などに戦国期の様相を強く残す事例と評価できる。

城史

正保書上五四城の一で、「古城之覚」は真島郡高田村の「高田山」として、城主を三浦駿河守貞連とし、「後太平記」を引いて永禄末期の高田城を巡る交戦に触れるなどしている。「作陽誌」は「大総山」として、本城を如意山、山へは一二〇間、周り一六町、その南は「二廓」で勝山といひ、合わせて大総山城と記す。天保国絵図に「勝山城」とある。「美作鏡」は「勝山城」



高田城

とし、『真庭郡誌』は、勝山城（高田城、大総山城）として現在、大佐分利・小佐分利といい城山と総称、一名を津府山・大頼山とする。

高田城の城主は三浦貞連に始まり、子の貞国、孫の貞久と代々継続したとされる（『作州高田城主覚書』）。享禄五年（一五三二）、尼子氏は美作国への侵攻にあたり、備中国の新見氏を高田城の在番としており（東寺百合文書）、また天文一三年（一五四四）一月、尼子国久・誠久・敬久父子は備後国を経て美作国に討ち入り、浦上氏が軍勢を籠める「高田」など三ヶ城を落とし、出雲国に帰陣したとされる（『安西軍策』）。同一七年九月に城主の三浦貞久が籠城のなか病死したのち、城には尼子氏の家臣宇山飛驒守が在城したとされる（『作州高田城主覚書』、『作陽誌』）。永禄二年（一五五九）二月、貞広の弟貞勝を擁立した牧河内らは合戦のすえ宇山氏を駆逐、貞勝が高田城に入ったが、同七年（八年とも）一二月、家臣の金田氏によって自刃した。まもなく牧氏は貞広・貞勝の「祖父」とされる三浦貞守を擁立、高田城へと戻ったといい、貞広も永禄八年の九月には高田城へと回復した（『作州高田城主覚書』、石見牧文書、美作美甘文書など）。

しかし同一一年二月、毛利氏に対して反抗した「三浦衆」らが「高田表」で討ち果たされ、同月一九日には毛利方の長・香川・宍道氏は謀って三浦貞守に切腹させたとされ、以降毛利方の兵が在番した。難から逃れた牧氏は翌同一二年に三浦貞広を擁立し、一〇月には高田城を攻撃し回復、貞広は入城を果たしたとある。しかし天正二年（一五七四）以降、三浦氏は宇喜多方の侵攻を受け、さらに翌同三年以降の毛利勢の攻囲に九月一日、貞広は宇喜多直家の仲介により下城、高田城は落去し、城には毛利方の榎崎元兼が入城したとされる（『吉川家中并寺社文書』、香川家文書、「閥閥録」、「作州高田城主覚書」、「作陽誌」）。以降、毛利方の拠点として推移し、毛利氏

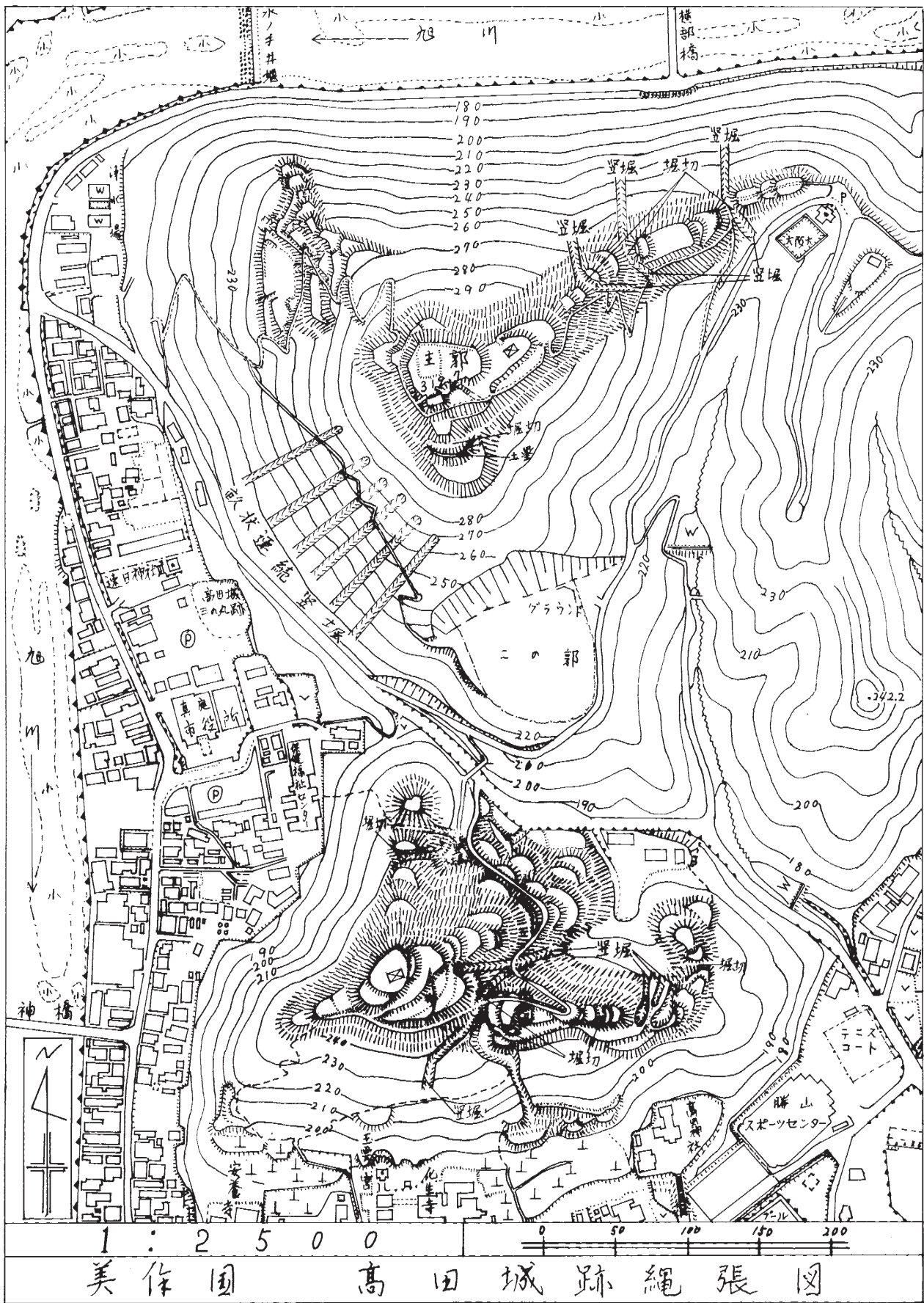
遺物 備考

と羽柴氏の和睦のち同一二年正月、安国寺恵瓊は児玉元良らに対し、「高田・岩屋・宮山・高仙」の城へ国元からも退去を言い聞かせるように要請している（毛利家文書）。

榎崎元兼が退去した跡には、牧藤左衛門を始めとした三浦氏旧臣が在番したが、まもなく服部隠岐守へ交代となったといい、篠向城（真庭市三崎・大庭）の城主江原親次の家臣中島本政は走者を討った功により「高田城主服部隠岐」から脇差を与えられたという（高田城主覚書、美作勇山寺文書、美作岡田家文書、中島本政覚書）。一説には宇喜多氏の家臣不破内匠が城を抱えたともいう（『武家聞伝記』）。また慶長三年（一五九八）九月に戸川達安は宇喜多秀家から「山内・高田近辺」五一〇〇石を預け置かれ、達安組の岡市丞も同年に「高田城領」として一〇〇〇石を加増されている（秋元興朝所蔵文書、「宇喜多秀家土帳」）。同五年八月、関ヶ原合戦に先立ち、宇喜多秀家は領国内の城の在番に対し人質の差出を求めており、その内に「高田中務」として小瀬中務がみえる（新出沼元家文書）。宇喜多氏の没落後、慶長六年（一六〇一）からは小早川秀秋の陪臣木下斎之助が城を抱えたという。慶長八年からは各務四郎兵衛が、同一四年春以降は大塚丹後とその子息が五代、相次いで城を抱えたという（『武家聞伝記』）。

瓦等。

平成六年（一九九四）、岡山県真庭地方振興局が車道拡幅や休憩小屋建設のため造成を行い、遺構の一部で原形が失われた。同一二年、地上デジタルテレビ放送施設建設に伴い出丸跡の発掘調査が行なわれ、掘立柱建物跡が検出されたが、攪乱が激しく遺物もほとんど見られなかった。



美作国 高田城跡縄張図

文献

「安西軍策」、「陰徳記」、「武家聞伝記」、「作陽誌」、「美作鬢鏡」、「陰徳太平記」、「備前軍記」、「美作鏡」、「美作略史」、「真庭郡誌」、「岡山県通史」真庭3、「月田郷土史」、「久世町誌」、「美作古城史」、「岡山の城と城址」、「勝山町史」前編、「日本城郭全集」真庭郡2、「日本城郭大系」857、「美作地侍戦国史考」、「岡山県埋蔵文化財報告」26、「歴史散歩岡山の城」、「改訂岡山県遺跡地図」勝山63、「勝山町の文化財」、「岡山の山城を歩く」84、乗岡二〇〇九、「真庭市埋蔵文化財調査報告3」



高田城三の丸遺構配置図（『高田城三の丸遺跡』勝山町教育委員会より引用）

37

牧土居

所在地 真庭市勝山

立地

旭川左岸にあり、阿波土居の南西、国道一八一号線沿いに所在していた。

縄張

未詳。

城史

「作陽誌」は「牧土居」として、真島郡高田村の勝山東にありとし、牧とは昔の人の名前で、その宅地と記す。

備考

現在も遺称地名が残っている。

文献

「作陽誌」

38 出羽屋敷・殿屋敷

所在地 真庭市柴原

立地

旭川右岸にあり、柴原地区の北側山麓に所在する。

縄張

集落背後の高台に方形の区画を以て居館を構えたものと考えられる。背後に堀切などはみられない。

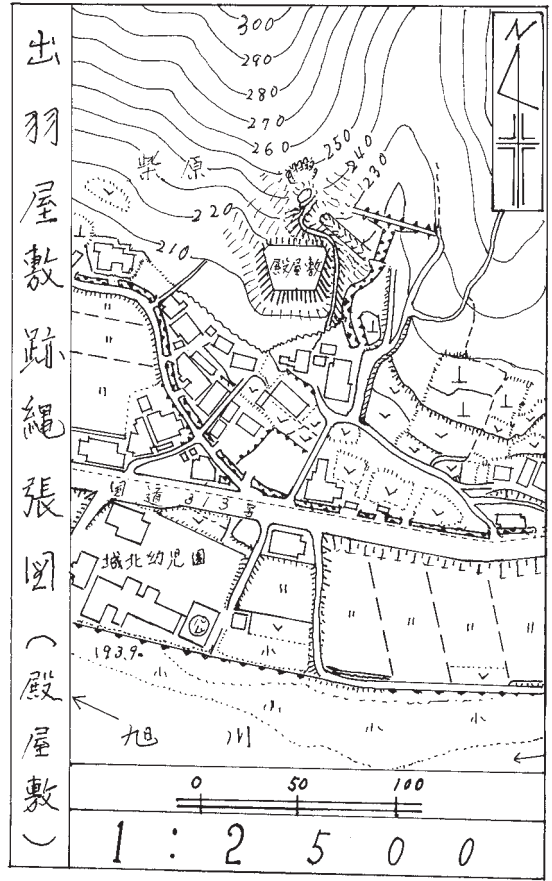
「作陽誌」にもみられる三浦氏関係の一族の屋敷、或いはこの地域を支配する村落単位の有力被官の居館の可能性が考えられる。

城史

「作陽誌」は「出羽屋敷」あるいは「殿屋敷」として、真島郡柴原村にあり、三浦出羽守貞俊の屋敷で、同所に貞俊の墓があり、住民が彼岸と中



出羽屋敷・殿屋敷



元には祭を行うと記す。

文献

「作陽誌」、『勝山町史』前編

39 浅田城

所在地 真庭市福谷

立地

福谷川上流で、上福谷集落の東端にある尾根に所在する。標高は約二七〇mである。

縄張

未詳。

城史

『勝山町史』に、羽別村、勝山町大字福谷にあり、三浦氏の拠った大料城（真庭市神代・本郷）を尼子氏が攻撃、落城した際に浅田城も落城したと伝えるとある。『改訂岡山県遺跡地図』は神代から勝山に至る道の押えとして築かれた可能性を指摘している。

文献

『勝山町史』前編、『改訂岡山県遺跡地図』勝山59・60

40 会下山城・後谷山城（仮称）

所在地 真庭市月田

立地

月田地区の月田川左岸、三堂集落の北側丘陵の山頂に所在する。標高は約三〇mで、約三〇〇m東の尾根続きに三堂坂城がある。

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、三堂坂城の詰めめの城の可能性を指摘し、南東端には虎口状の施設。各郭は外側に土塁を配し、その内側に堀を有し、全周する郭もあるとする。

城史

『作陽誌』は、真島郡三堂坂村の会下山に陣跡ありと記す。『月田郷土史』によると、三堂坂城の尾根続き西に寺跡があり、一帯に家下、大門などの地名があるとされる。『改訂岡山県遺跡地図』は後山谷城と仮称する。

文献

『作陽誌』、『月田郷土史』、『改訂岡山県遺跡地図』勝山80

41 三堂坂城

所在地 真庭市月田

立地

月田地区の月田川左岸、三堂集落の東側丘陵のピーク上に所在する。標高は約二六〇mで、約三〇〇m西の尾根続きに会下山城がある。

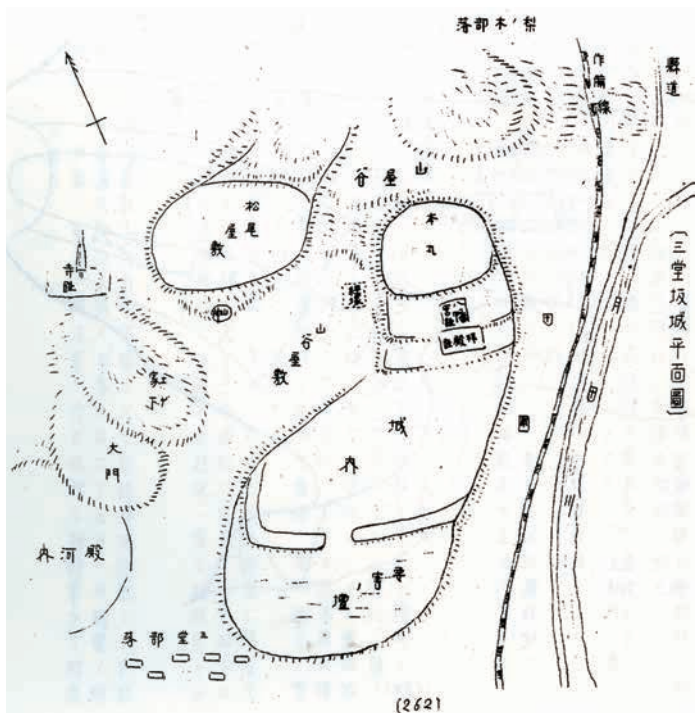
縄張

『日本城郭全集』は山の高さは一一〇mばかり、本丸（東西三六m）、櫓丸二つ（東西四〇m・南北七m、東西二二m・南北二五m）、櫓



会下山城・後谷山城（仮称）

城史



三堂坂城 (『月田村郷土史』より引用)

規模な堀切については詳細不明とする。
 「古城之覚」は真島郡三堂坂村の「三堂城」とし、城主を牧左衛門の家臣池田新兵衛・沼田太郎左衛門とする。「作陽誌」は「山屋堡」

丸と本丸の境に八幡宮があるとする。
 『日本城郭大系』は、本丸を中心に曲輪で固めた本城遺構が完存とする。また『改訂岡山県遺跡地図』は、城郭は中ほどに設けられた二本の堀切によって前後に区分され、前側は土塁をもつ大形の郭を中心とし居館部分の可能性があり、後側は山城になっており長さ三〇mの郭の周囲に犬走りを配し、その後方については不明で、小



三堂坂城

文献

『作陽誌』『改訂岡山県遺跡地図』勝山91



宮原山城・鳶乃森城 (仮称)

備考

遺物

土器・大刀？。

城史

『作陽誌』は、真島郡宮原村の宮原山に陣跡ありと記す。『改訂岡山県遺跡地図』は鳶乃森城と仮称する。

縄張

は犬走りを三〜四重に巡らせるとする。

立地

月田地区の月田川右岸にあり、春日神社の南側の独立峰上に所在する。標高は約二九五mである。月田川流域を一望する。

42 宮原山城・鳶乃森城 (仮称)

みやはらやま とびのもり

所在地 真庭市月田

文献

『武家聞伝記』、『作陽誌』、『美作鬘鏡』、『美作鏡』、『岡山県通史』真庭13、『月田郷土史』、『美作古城史』、『勝山町史』前編、『日本城郭大系』878、『改訂岡山県遺跡地図』勝山81

とし、かつて沼田太郎左衛門が住むと記す。なお同書は牧左衛門・池田新兵衛は手谷城に在城とするが、「古城之覚」の記載に窺われるように、本来は当城にかかる記事と考えられる。「美作鬘鏡」は「三堂ノ城」、「美作鏡」は「三堂坂城」とする。『月田郷土史』には付近に山屋敷敷や山屋谷などの地名が残るとし、併せて平面図を載せ参考になる。『日本城郭全集』は「三堂阪城」とする。『勝山町史』は、山谷氏の先祖が築城とする。

43 手谷城・月田城

所在地 真庭市月田

立地

月田地区の月田川右岸、手谷集落の北側の丘陵上にある。標高は約四一〇mで、月田川流域を一望する。

縄張

『月田郷土史』には側面図・鳥瞰図を載せ、『改訂岡山県遺跡地図』は連郭式山城で、出丸を含めた延長は六〇〇m以上。斜面の各所に犬走りを配し、後方には大規模な堀切、畝状堅堀を有するとする。

城史

「古城之覚」は真鳥郡手谷村の「手谷」として、城主不詳、山の高さ約二〇〇間、西向きで東南に山続きとなり、本丸（一四間四方）、屋くら丸二つ（東は長さ七間、横一五間、西は長さ一二間、横八間）、本丸の西にかんへい丸（東西六間、南北二一間）、北西に馬場（東西五〇間、南北二一間）、本丸に明神社があるとす。「作陽誌」は「手谷堡」として、兼居城・月田城ともいい、榑崎弾正忠元兼の居城で、永祿・天正（一五五八〜九二）の間、美作国に抛り毛利・小早川氏にくみして織田信長・羽柴秀吉に従わず、功を立てず死去したと記す。同書は一説に牧左衛門・池田新兵衛等があったともするが、「古城之覚」の記載に窺われるように、本来三堂坂城にかかる記事と考えられる。

天文二〇年（一五四一）、出雲尼子氏が美作国篠尾（真庭市月田本か）で国人中村氏を破った際、「築田ノ城」にあった三浦氏は落去、備中国皆部（同市上・下皆部）の植木氏も大勢が討ち取られた（『岩屋寺快円日記』）。降って元龜三年（一五七二）頃か、宇喜多氏の家臣花房職秀は毛利氏の抱える「つきだの城」を攻撃、城を奪ったと

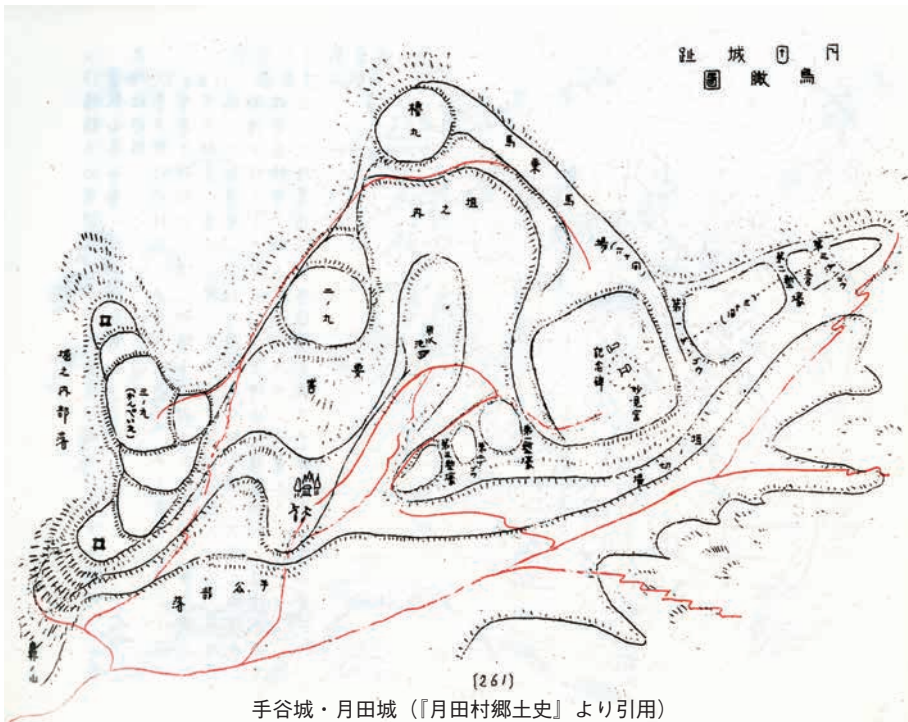


手谷城・月田城

文献

『花房家記事』。さらに天正二年（一五七四）末、安芸毛利氏から備中三村氏が離反した際、「作州月田山」には三村元親の妹婿・榑崎元兼が居城していたが、元兼は毛利氏に与し、備前宇喜多氏の軍勢を引き入れたという（『備中兵乱記』）。

『武家聞伝記』、「作陽誌」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「美作略史」、「真庭郡誌」、「岡山県通史」真庭12・15、『月田郷土史』、『美作古城史』、『日本城郭全集』補遺、『勝山町史』前編、『日本城郭大系』864・865、『改訂岡山県遺跡地図』勝山95



手谷城・月田城（『月田村郷土史』より引用）

44

栩原城

所在地 真庭市荒田

立地

荒田地区の新庄川右岸にあり、荒田集落の南側の独立峰上に所在する。標高は約三六〇mである。

縄張

未詳。

城史

『美作古城史』に、『月田村史』編纂者の植田源吾によると、城主の子孫栩原六右衛門は天和年間（一六八一～四）に没し、以降代々又三郎を名乗ると記す。



栩原城

文献

『美作古城史』、『日本城郭大系』868、『改訂岡山県遺跡地図』勝山79

45 大料城・横塚城

所在地 真庭市神代・本郷

立地

神代地区の新庄川左岸、国道一八一号線の東側の独立峰上に所在する。標高は約五二四mで、西に神代地区を一望する。

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、山頂の大規模な山崩れにより主郭等の一部のみ残存、北西斜面に階段状に犬走りを配するのを特徴とする。



大料城・横塚城

城史

正保書上五四城の一で、「古城之覚」は真島郡神代村の「横塚」として、城主不詳とする。「作陽誌」は「大料城」とし、大料山の東は本江村、西は神代村で城主不詳、山の高さ一〇八間、中腹に古道がわずかに通じ、山上は水乏しく、地元民は南の少し下の伯耆札に尼子氏の兵が、また山の西の「備後樓」に備後国の兵が陣し、山の麓の古墳は城兵を埋めた地というと記す。横塚の城名はこの塚に因むか。天保国絵図に「古城跡」とある。『日本城郭全集』は「横塚城」とし、『勝山町史』は神代側の城下には「大料くずれ」という墳墓が多く点在し、また尼子勢が神代の「備後うね」に拠って川を隔てた大料城と対陣したと伝えるところ。

文献

『武家聞伝記』、『美作鬢鏡』、『美作鏡』、『真庭郡誌』、『岡山県通史』真庭14、『月田郷土史』、『美作古城史』、『日本城郭全集』補遺、『勝山町史』前編、『日本城郭大系』883・855、『改訂岡山県遺跡地図』勝山14

46 八幡山城

所在地 真庭市曲り

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「作陽誌」は「八幡山」として、真島郡曲村にあり、山上に八幡の祠あり、陣跡があると記す。

文献

「作陽誌」

47 城山

所在地 真庭市若代畝

立地

後谷川左岸にあり、北の高田山上地区に境を接する荒木集落の、東側山上に所在する。標高約五二〇mである。

縄張

未詳。

城史

『富原村史』は若代畝地区の荒木集落にありとし、荒木屋敷と伝えられる場所の東側の小高い山を一名「城山」というとする。

文献

『富原村史』

48 荒木屋敷

所在地 真庭市若代畝

立地

後谷川左岸にあり、高田山上地区に境を接する荒木集落内に所在する。

縄張

未詳。

城史

「作陽誌」は「荒木屋敷」として、畝方村の岡田にあり、荒木という人が住むと記す。『富原村史』は若代畝地区の荒木集落にありとし、若代畝一〇〇四番地、字家の脇、おそらく山下静二郎氏宅が荒木屋敷と伝えられており、東側の小高い山を一名「城山」というとする。

文献

「作陽誌」、『富原村史』

49 臼水城・城山

所在地 真庭市古呂々尾中

立地

首尾川右岸にあり、首尾集落に北から延伸してくる尾根の突端に所在する。標高は約五三〇mである。

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、一辺十数mの主郭とその周囲に配された小さな郭からなり小規模、主郭には土塁がL字形に配されている可能性があり、後方には二重の堀切とする。

城史

「作陽誌」は、真島郡古呂々尾中村の山に陣跡があると記す。

備考

遺跡調査カードには、城山と呼ばれているとある。

文献

「作陽誌」、『改訂岡山県遺跡地図』勝山9

50 岩明山・要害

所在地 真庭市清谷

立地

月田川右岸にあり、清谷中集落の西側山上に位置する。標高は五五四・三mである。

縄張

未詳。

城史

「作陽誌」は「岩明山」として、真島郡清谷村にあり、昔人ありと記す。『富原村史』は字黒岩より一kmばかり南にある尾根筋の最高峰で、俗に「要害」「がんみょう」等と呼ばれ、標高六〇〇m、西側には四通りの縦割堀切が残るとする。

文献

「作陽誌」、『富原村史』

51 城山

所在地 真庭市清谷

立地

月田川最上流の右岸にあり、入来尾集落の西側山上に位置する標高は五五八mの山と考えられる。

縄張

未詳。

城史

『富原村史』は「清谷城山」として字城山にあり、山は三方險峻で北方はやや緩やか、付近は「城ヶ谷」といい、頂上より約五〇m下に径四間位の天水池あるいは溜池の跡が二つあり、砦があったと伝えられるが城主未詳、同所から「丸瓦に似て非なる精工なる破片」が出土したなどとする。

文献

『富原村史』

52 長者屋敷

所在地 真庭市若代

立地

月田川右岸、若代地区の長谷集落付近に所在する。

縄張

未詳。

城史

『富原村史』は「大日名長者の跡」として長谷集落の字日名山にあり、大日名長者が住んでいたとする。

文献

『富原村史』

53 長者屋敷

所在地 真庭市若代

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

『富原村史』は「長者屋敷」として、桐峪集落にあり、口碑では何処からか修験のため来た桐峪長者が住んでいたとする。

文献

『富原村史』

54 若代城

所在地 真庭市若代

立地

若代地区の月田川左岸にあり、富原小学校の約三〇〇m東の尾根上に所在する。標高は約三六二mであり、若代地区を一望する。

縄張

山頂に土塁を持つ単郭の主郭を置いて、周囲に横堀状の堀切と帯曲輪が廻る。東側の背後には堀切が配された。その東側には土塁囲みの堡塁状の第二郭が構えられた。なお、周辺に削平地が確認されるが集落に近いことから評価は慎重にする必要がある。

城史

「作陽誌」は「若代堡」として、真島郡若代村にあり井原越前守が居城し、山の高さ七四間と記す。「美作鏡」は「若代城」とする。『美作古城史』は、注連山城（真庭市落合垂水）の井原氏との関係を推測している。『日本城郭全集』は「若代砦」とする。

文献

「武家聞伝記」、「作陽誌」、「美作鏡」、「真庭郡誌」、「美作古城史」、「富原村史」、「日本城郭全集」補遺、「日本城郭大系」884、「改訂岡山県遺跡地図」勝山45



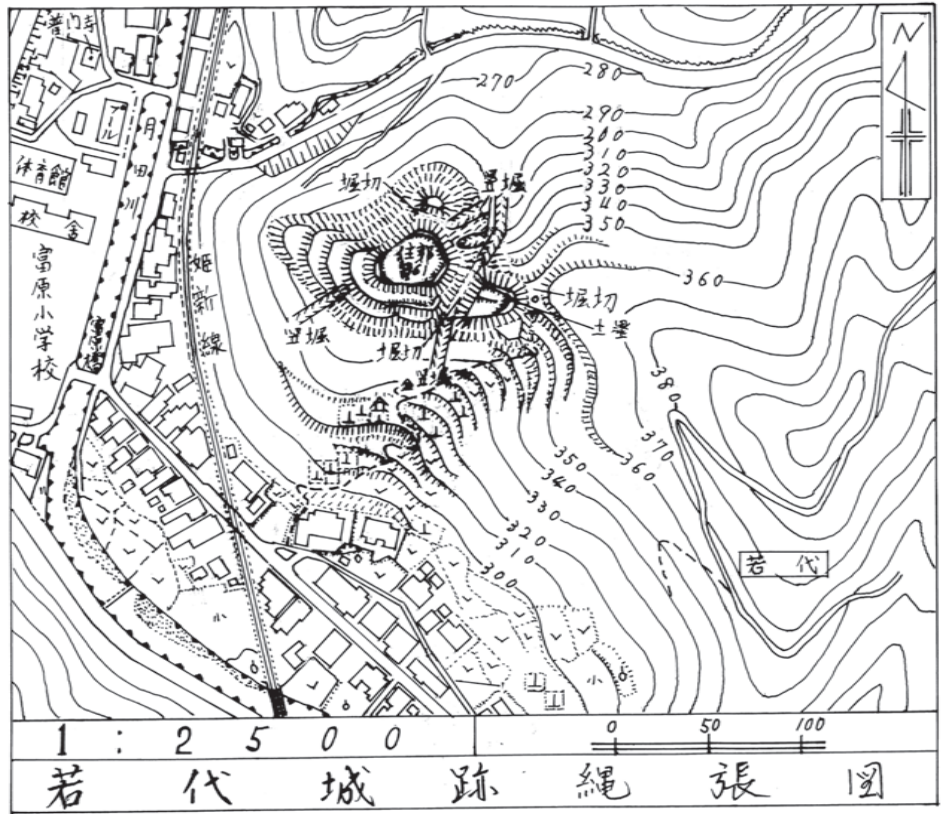
若代城

立地

月田川の右岸にあり、土井谷集落の西側、殿河内集落の南側に位置する。北に延伸する標高約三八〇mの尾根上に所在する。

55 本山城・城山

所在地 真庭市月田本



縄張

山頂に主郭を構え北西側と東側の尾根筋に沿って曲輪を配置する。南西側背後となる尾根は堀幅の広い堀切で遮断する。加えて主郭から北西側尾根筋へ連なる曲輪群に對して、西側に土塁による防禦ラインを構える。土塁は主郭を二つに分断する形で築かれ、そのまま北西側へ登り土塁のように伸びる



本山城・城山

城史

特異な形状をみせる。但し、後世の境界土塁の可能性も考えられるので評価は慎重にする必要がある。一方、城域の東側は地形に沿って曲輪が連なるが空堀や土塁などのパーツはみられない。築城主体としては月田川一帯を支配した国衆の持城の可能性が考えられる。「古城之覚」は真鳥郡本村の「本山」として、城主を源修理亮秋行とし、山の高さ約一〇〇間、東北に向き、本丸（東西六間、南北一三間）、二丸（東西六間、南北四間）、三丸（東西二間、南北二四間）、四丸（東西六間、南北三七間）、村内の正八幡社に大般若経があり、奥書に城主の名前があり、「応永九年壬午三月」とする。「作陽誌」は「本山堡」とし、山の高さ一四〇間とする。「富原村史」は字城山にあり、山の高さ一五〇m、山上は五段となり大規模、月田本はもとより月田方面は一望され、城に西方に水の手とみられ城の者が生姜を作ったとされる「生姜谷」が、南方に「小市」また「屋敷」の地名があり、家中屋敷があったと伝わり、毛利勢によって落城した時の同勢の死者を祀った七人塚が稻荷平と殿河内の二ヶ所にあるとする。「日本城郭全集」は「本山城」とする。

文献

「武家聞伝記」、「作陽誌」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「真庭郡誌」、「岡山県通史」真庭1、「美作古城史」、「富原村史」、「日本城郭全集」補遺、

城史

「古城之覚」は真島郡岩井村の「岩井」として、城主を河内兵庫助とする。「作陽誌」は「則行堡」とし、山の高さ八〇間と記す。『富

縄張

背後に堀切を構えて、尾根の先端を城域として整備したもの。高所を主郭として前後に曲輪を並べる。

立地

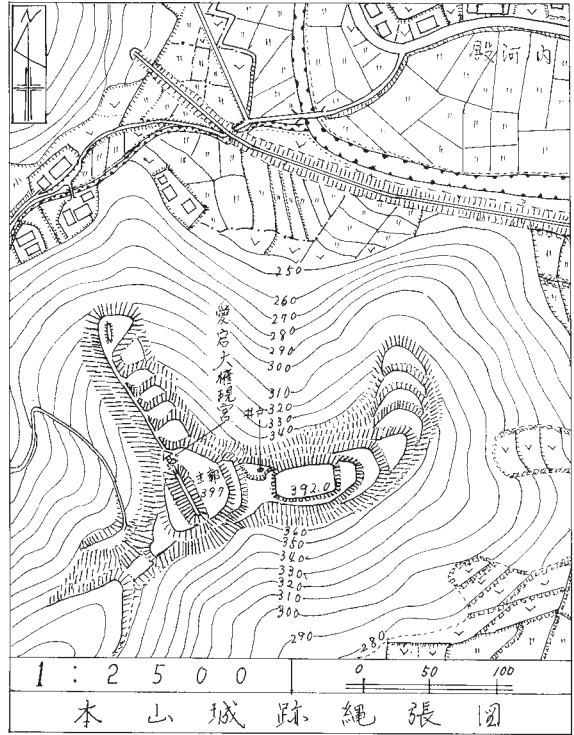
岩井谷地区谷村集落の谷を約九〇〇m西に進んだ地点にある。谷の北側の尾根先端にあり、標高は約三八〇mである。



則行城・岩井城・城山

56 則行城・岩井城・城山

所在地 真庭市岩井谷



『日本城郭大系』880、『改訂岡山県遺跡地図』勝山58

文献

「作陽誌」、『富原村史』

城史

「作陽誌」は、則行城（真庭市岩井谷）の城主河内兵庫助との関連で、上村に兵庫屋敷ありと記す。

縄張

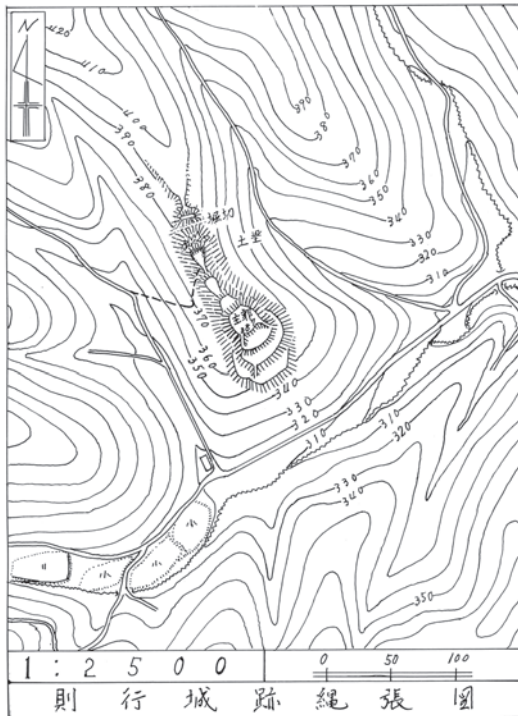
未詳。

立地

未詳。

57 兵庫屋敷

所在地 真庭市上



文献

『武家聞伝記』、「作陽誌」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「真庭郡誌」、「岡山県通史」真庭17、「美作古城史」、「富原村史」、「日本城郭全集」補遺、『日本城郭大系』835、『改訂岡山県遺跡地図』勝山47

〔真庭市〕湯原町

58 湯山城・湯本城

所在地 真庭市湯原温泉

立地

湯本地区の旭川左岸にあり、湯原温泉街に向けて南側に迫り出した尾根上に所在する。国道三三三号線の西側にあり、標高は約四八〇mである。

縄張

尾根伝いに北東から南西にかけて曲輪を連ねる縄張り。北東側に連続堀切を配する。最高部が主郭となる。

城史

「古城之覚」は大庭郡湯本村の「湯本之(城)」として、城主を牧野源内、また湯原村の「湯山」として、城主を宇喜多平右衛門盛重と重出する。「作陽誌」は「湯山堡」として、湯本村にあり、南に道があり、山の上四町に浮田平右衛門・牧左馬助らが居城と記す。「美作鬢鏡」は「湯元の城」の城主を「牧源内」、「湯山の城」の城主を「宇喜多平右衛門」とし、「美作鏡」は

湯山城のみで城主を宇喜多平右衛門盛重・牧左馬助とする。「湯原町史」は、湯原温泉を麓とする「城山」と呼ばれる山と考えられ、田羽根川を隔てた墳墓の上に「城主様」として祀られている石塔があり、住民は宇喜多氏の部将浮田平右衛門の墓だろうと言っているとする。『日本

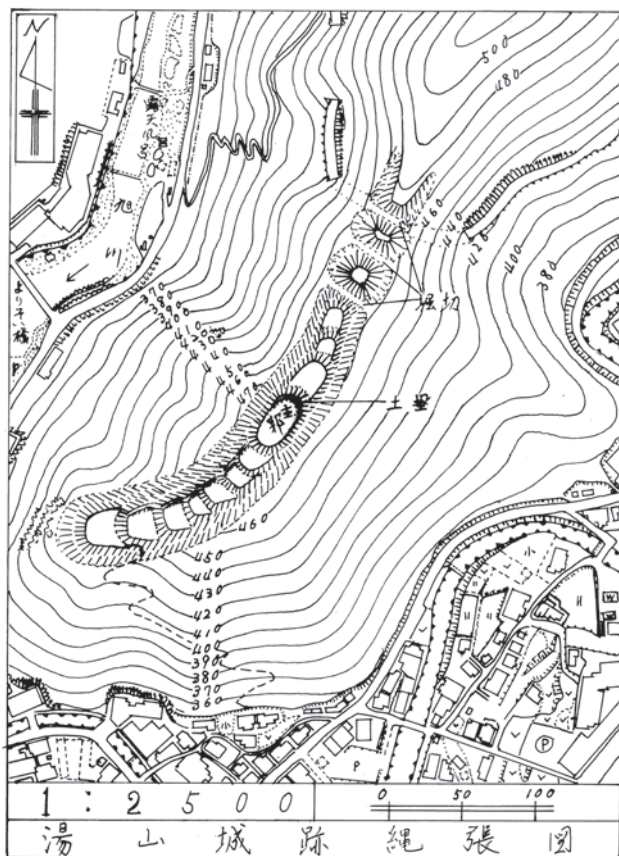


湯山城・湯本城

文献

城郭全集』は「湯山城」「湯本城」として重出する。
天正三年（一五七五）に高田三浦氏が没落した後、家臣の牧氏は宇喜多直家に湯山城へと在番したという（高田城主次第）。天正七年末、牧左馬助は、宇喜多直家が城主とした浮田平右衛門、また牧源之丞と「湯山」に同道したところ、毛利勢の攻撃を受けた。左馬助は対岸から筏で渡河し「三ノ丸」を取り詰めた毛利方の杉原盛重の軍勢を追い返し対岸で高橋という侍を討ち取り、直家から道服（羽織）を与えられ、目木村（真庭市目木）に加増を受けたという（牧左馬助覚書）。

『武家聞伝記』、「作陽誌」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「美作略史」、「真庭郡誌」、「岡山県通史」真庭29・30、『湯原町史』前編、『美作古城史』、『日本城郭全集』真庭郡9・補遺、『日本城郭大系』882、『改訂岡山県遺跡地図』湯原47



59

田井城

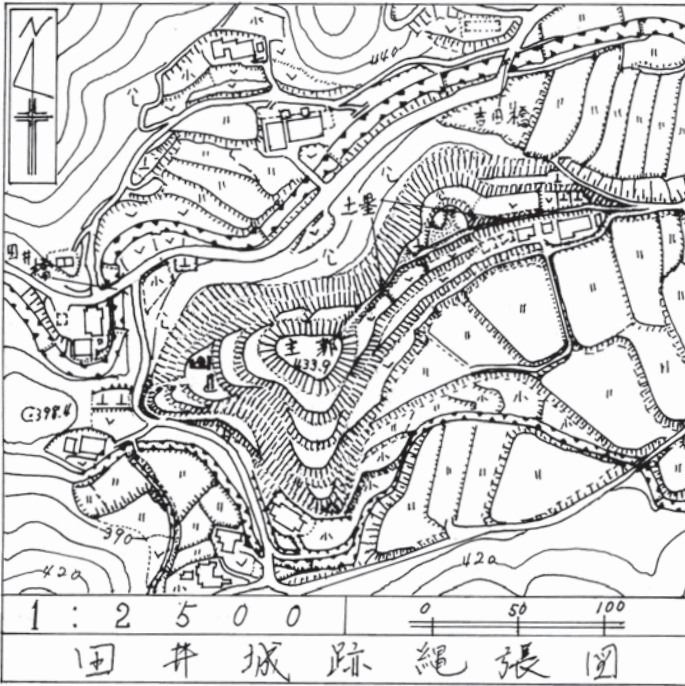
所在地 真庭市社

立地

社地区本谷集落から約五〇〇m西の丘陵地突端に所在する。東側は緩斜面。旧富村へ至る交通路の要衝に該当する。標高は約四二〇mである。

縄張

丘陵の高所に主郭を構え、周囲に帯曲輪を配した縄張りを持つ。集落に近く後世の改変も多いと思われるが、集落の背後の高所に居館を構えたあり方を



田井城

城史

うかがわせる好例である。

「作陽誌」は「田井堡」として、大庭郡社村にあり、伝えでは「三浦之党」が居城とし、村に美甘氏があつて永祿年中（一五五八〜七〇）にその先祖が三浦貞尚に従い功があつたことからおそらくこの人か、と記している。「美作鏡」は「田井城」として城主を美甘助右衛門とする。

文献

「作陽誌」、「美作鏡」、「真庭郡誌」、「湯原町史」前編、「美作古城史」、「日本城郭全集」補遺、「日本城郭大系」853、「改訂岡山県遺跡地図」湯原204

60 大沼嶽

所在地 真庭市豊栄

立地

旭川右岸の向湯原集落の北側尾根上に所在する。標高は約三八〇mで、約七〇〇m北東に湯山城がある。

縄張

湯原ダム建設のため消滅した。『改訂岡山県遺跡地図』では、旧ロープウェイ乗り場の北側と南側に分かれて広がるようである。「作陽誌」が記していると思われる北側地点には、長さ

一五m程の平坦部が、また斜め下方にも小規模な平坦部があり、南側地点にも二段ほどの平坦部があるとす。山頂部の周囲に平坦地が並ぶ縄張りだったとみられ、一時的な陣所として用いられた可能



大沼嶽

61 目的地山城

所在地 真庭市豊栄

立地

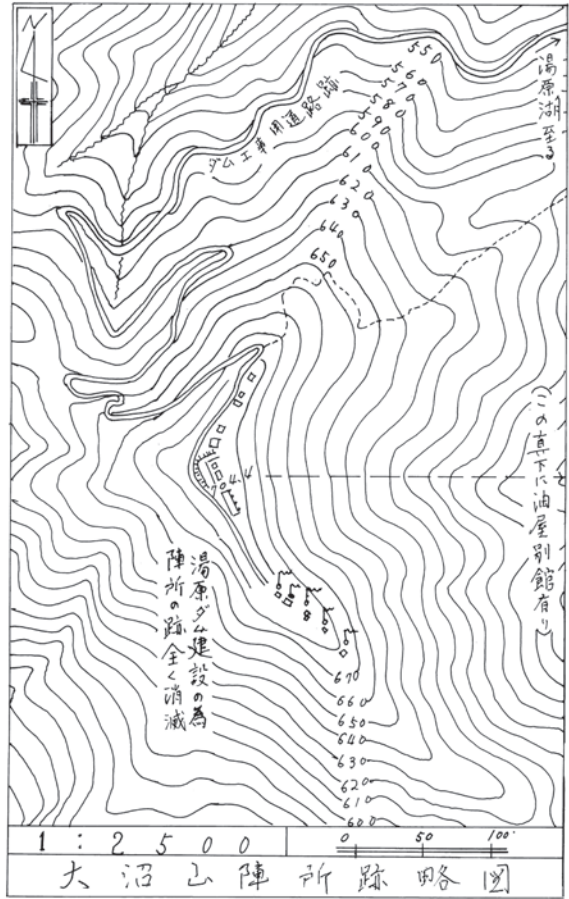
旭川と鉄山川が合流する地点の約五〇〇m北の丘陵上に所在する。標高は約四一〇mで、久見地区を一望する。東西南北へ交通路が交又する要衝である。

縄張

複数のピークを持つ山地の一角を城域とする。背後に堀切をいれて尾根の先端に曲輪を配する。

城史

「作陽誌」は「目的地」として、真鳥郡目的地村にあり、山上は少し平坦で昔、佐山氏がここに陣したと記す。『湯原町史』には、「目的地



城史

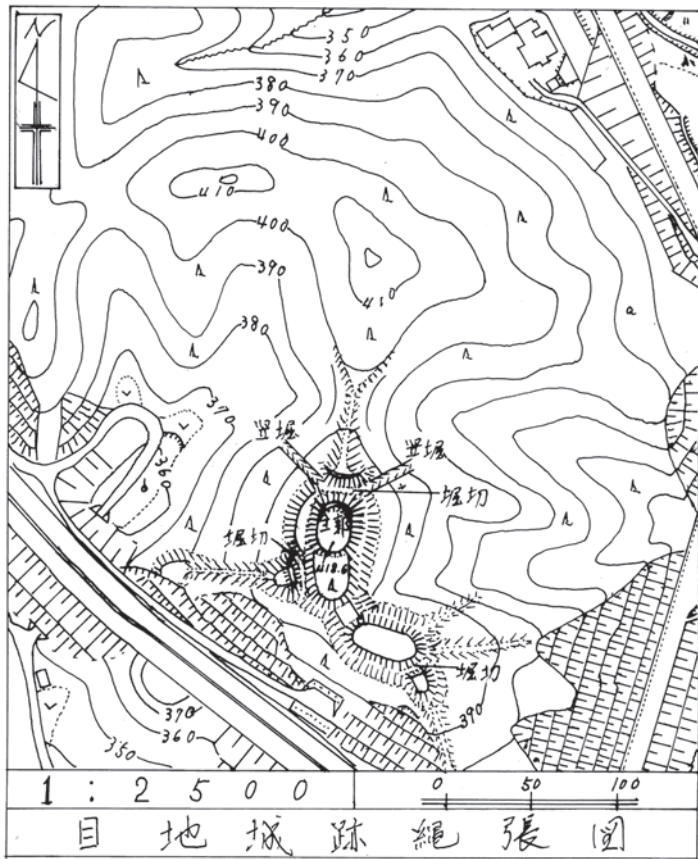
性が考えられる。

「作陽誌」は、真鳥郡向湯原村の大沼山の下に大沼嶽があり、崖の高さ三〇間、伝えでは飯山城（真庭市藤森）の城主の安芸盛重が陣して「湯元城」（真庭市湯原温泉）を攻め、城守の牧氏が戦ったと記す。『湯原町史』には、向湯原に戦死した毛利方の勇士高橋長清の五輪塔があるとする。

天正七年（一五七九）末、宇喜多勢の籠もる湯山城が毛利勢の攻撃を受け、宇喜多方の牧左馬助は対岸から筏で渡河して城を取り詰める毛利方の杉原盛重の軍勢を追い返し、対岸で高橋という侍を討ち取ったという（「牧左馬助覚書」）。

文献

「作陽誌」、『美作略史』、『真庭郡誌』、『湯原町史』、『改訂岡山県遺跡地図』湯原82



遺物

山屯所」として、屯所跡から明治初年に発掘された伊部焼の瓶の写真を載せる。



目地山城

文献

「作陽誌」、「湯原町史」前編、「改訂岡山県遺跡地図」湯原93

62 藪 途 山 城 (仮称)

立地

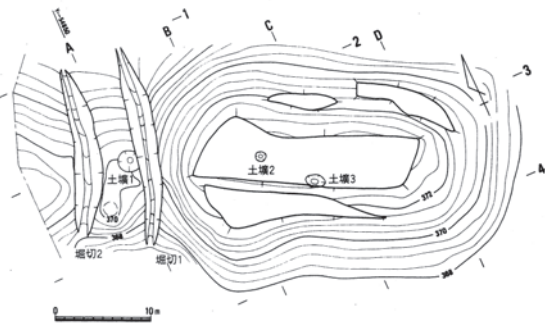
豊栄地区の旭川右岸、目地集落の西の尾根上に所在する。標高は約三七〇mで、約二五〇m西に目地山城がある。

『改訂岡山県遺跡地図』は、長四〇mと小規模であるが、山側には二重の堀切を配するとする。

未詳。

硯・砥石・鉄釘。

平成七年度(一九九五、六)の県北リゾート構想に伴う湯原町の分布調査で発見された。同一一年、国道三二一三号線改良に伴い発掘調



藪途山城(仮称)遺構配置図(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』166より引用)

所在地 真庭市豊栄



目地山城

文献

査を実施し、郭面と二重の堀切を検出した。調査後消滅。
『岡山県埋蔵文化財報告』30、『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』166、『改訂岡山県遺跡地図』湯原95



藪途山城(仮称)

63 小 坂 山 城・城 山 (小坂向城山城跡)

立地

見明戸地区の鉄山川左岸にあり、西から常隆院集落に向かって延伸する尾根上に所在する。標高は約四九〇mである。見明戸地区を一望する。

『改訂岡山県遺跡地図』は、南北方向に延びる尾根上に三方を土塁で囲まれ、内部に加工された三つの段を持つとする。

『作陽誌』は、真島郡見明戸村の小坂山に陣跡ありと記す。『湯原町史』は「小坂山屯所」とする。

もと「広段城山城」と命名されていた。『岡山県埋蔵文化財報告』は所在を真庭市種とするが誤り。県道改築に先駆けた立木伐採に伴う重機の搬入で土塁など遺構の一部が破壊を受けた。まもなく平成一三、四年(二〇〇一、二)に発掘調査が実施され、土塁に囲まれた郭面を検出。その際に「小坂向城山城」と改称された。調査後消滅。



小坂山城・城山(小坂向城山城跡)

所在地 真庭市見明戸

備考

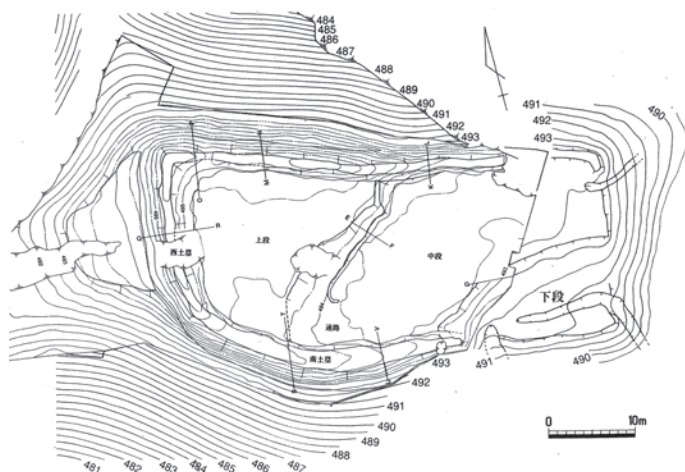
城史

縄張

立地

文献

『作陽誌』、『湯原町史』前編、『岡山県埋蔵文化財報告』31・32・33、『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』176、『改訂岡山県遺跡地図』湯原102



小坂山城・城山遺構配置図（『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』176より引用）

64

鶴山城・粟田城・城山
はいたかやま あわた
（見明戸城山城跡）

所在地 真庭市見明戸

立地

見明戸地区の鉄山川右岸にあり、すぐ北を県道五五号線が通る。北に延伸する尾根上にあり、標高は約五〇四mである。

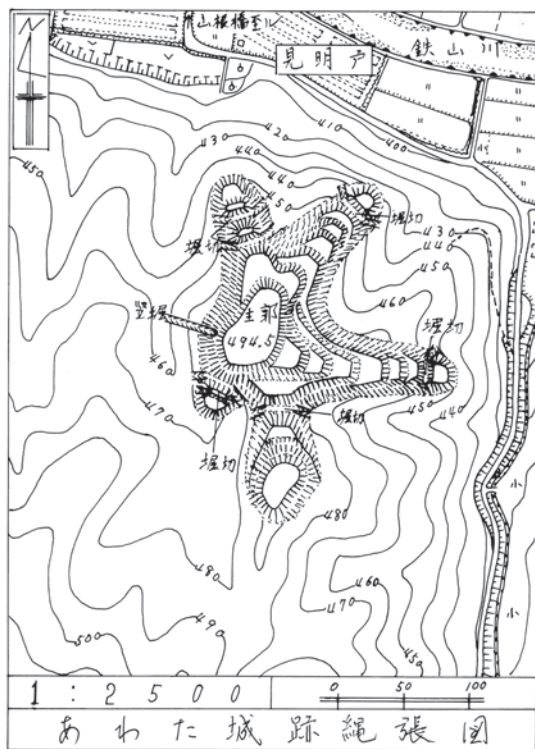
縄張

背後の南側に堀切を配し先端に城域を整備する。山頂に主郭を構え、東側の尾根伝いに曲輪を並べた縄張りとなっている。それぞれの尾根の先端には丹念に堀切を入れて城域を画する点が特徴。



鶴山城・粟田城・城山

城史



文献

『作陽誌』は「鶴山」として、見明戸村にあり、山上は少し平坦で昔、人が拠ったと記す。『湯原町史』には「鶏山屯所」として、住民は「城山」と言い伝え、落城の時自刃した城主以下七人を略に「七人の御崎」として祀る、粟田城ともいうとする。『改訂岡山県遺跡地図』は「見明戸城山城」とする。『作陽誌』、『湯原町史』前編、『改訂岡山県遺跡地図』湯原128

65
常隆院屋敷（仮称、古川遺跡）
じょうろいん

所在地 真庭市見明戸

立地

見明戸地区の鉄山川左岸にあり、常隆院集落内の東端に所在する。南に下る緩斜面上にある。標高は約四四〇mである。

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、室町時代の遺跡と推測される古川遺跡とし、「堀の内」「馬場」の地名が残る。

城史

未詳。

備考

『改訂岡山県遺跡地図』にも城名の記載はない。

文献

『改訂岡山県遺跡地図』湯原122・127

66 土居城（仮称）

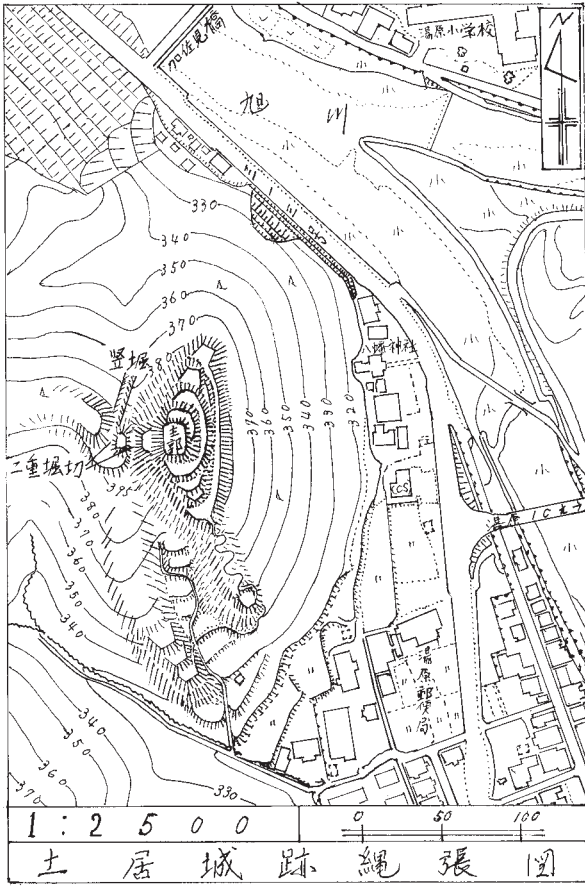
所在地 真庭市禾津



常隆院屋敷（仮称、古川遺跡）

立地

禾津地区の旭川右岸にあり、土居八幡神社の西側の尾根先端に所在する。標高は約三九〇mで、すぐ東を国道三二一三号線が通る。久見・



1 : 2 5 0 0

土居城跡縄張図

縄張

釘貫小川地区を一望する。

旭川と鉄山川の合流点禾津の背後にある山上に位置する山城。西側の鞍部に向けて連続堀切を築いて先端部を城域として構成する。主郭と帯曲輪がみられる。単郭構造の縄張りでそれほど規模も大きくないことから、村落単位で割拠した有力土豪の持城と考えられる。

「作陽誌」は、土居村に陣跡があると記す。「作陽誌」、「湯原町史」、「改訂岡山県遺跡地図」湯原167

城史

「作陽誌」は、土居村に陣跡があると記す。「作陽誌」、「湯原町史」、「改訂岡山県遺跡地図」湯原167

文献

「作陽誌」、「湯原町史」、「改訂岡山県遺跡地図」湯原167

67 向立石城（仮称）

所在地 真庭市粟谷



土居城（仮称）

立地

粟谷川と柳谷川が合流する地点、二川小学校の約七〇〇m北の丘陵に所在する。標高は約五三〇mで、向立石集落に南接する。

未詳。

城史

『改訂岡山県遺跡地図』にも城名の記載はない。タタラ製鉄遺構かとの山形省吾氏の指摘もあり、検討が必要である。

文献

『改訂岡山県遺跡地図』湯原16



向立石城（仮称）

所在地 真庭市藤森

真庭市指定史跡

立地

湯原湖の西、米子自動車道の東にある丘陵山頂部に所在する。標高は約六二〇mである。北に藤森地区を一望する。

縄張

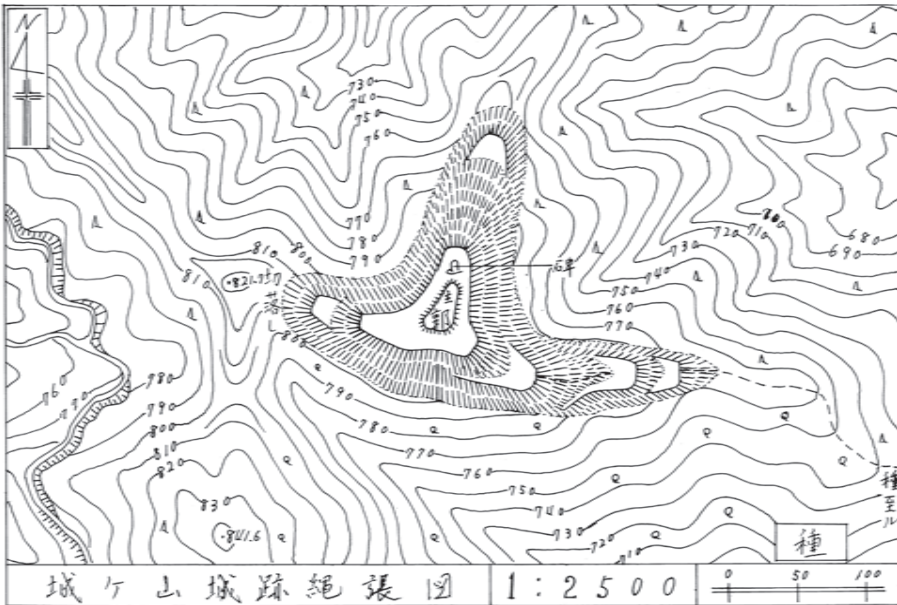
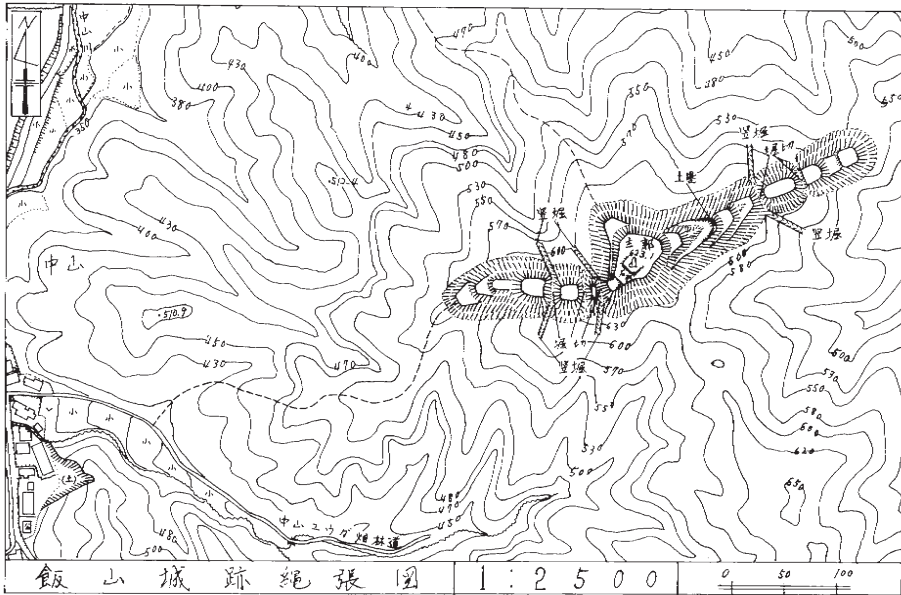
山頂に主郭を構え東西に曲輪を並べる。要所に堀切を入れて城域を分ける。『改訂岡山県遺跡地図』では、平地との

城史

比高二〇〇mの山頂、長さ約二三〇mの連郭式山城で、北面山腹に段、空壕など遺存とある。正保書上五四城の一で、「古城之覚」は真島郡藤森村の「飯山」として、城主不詳とする。「作陽誌」は「飯山城」として、山の背は桑瀬村に属し、安芸盛重という人が居城と伝えると記す。「美作鏡」は「飯ノ山城」とする。天保国絵図に「古城跡」とある。『真庭郡誌』は城礎・空壕などが残るとする。『三川村史』は、城跡に城主を祀る飯山大明神があり、明治中期以後は黒杭地区の妙見堂境内に移され、高さ八寸ほどの木彫の素朴な鎧武者の立像が神体として残り、藤森地区の飯田氏・田口氏は城の落人と称しているとする。



飯山城



文献

天正七年（一五七九）一〇月、宇喜多氏が毛利氏と対立に及び、毛利方の杉原盛重は因幡国から美作国の「山内表」へ出勢、在陣し、「要害二ヶ所」を攻撃したとある（『拾遺感状録』、厳島野坂文書、吉川家文書）。

『武家聞伝記』、「作陽誌」、「美作鬘鏡」、「美作鏡」、「真庭郡誌」、「岡山県通史」真庭16、「美作古城史」、「三川村史」、「日本城郭全集」補遺、「日本城郭大系」834、「改訂岡山県遺跡地図」湯原14、「湯原町の文化財」

69

城ヶ山じょうやま

所在地 真庭市種

立地

大谷集落の西、種川最上流の山林部に所在する。旧湯原町と旧美甘村の境界付近にあり、標高約八二〇mのピーク上にある。

縄張

山頂に一段高い主郭を構え、周囲に腰曲輪を配する。尾根伝いに段状に曲輪が並ぶ。

城史

未詳。『改訂岡山県遺跡地図』は見張り場かとする。

文献

『改訂岡山県遺跡地図』湯原56

70 塚原城（仮称）

所在地 真庭市種

立地

金原谷川と種川の合流点、その南西の尾根上に所在する。標高は約五〇〇mで、種地区を一望する。

縄張

未詳。『改訂岡山県遺跡地図』は土塁が遺存とする。

城史

未詳。

備考

未詳。タタラ製鉄遺構かとの山形省吾氏の指摘もあり、検討が必要である。

文献

『改訂岡山県遺跡地図』湯原64



塚原城（仮称）

71 釜戸原城（仮称）

所在地 真庭市小童谷

立地

湯原湖のほぼ中央に西から迫り出した尾根上にある。標高約五〇〇mで、東に銅山神社が隣接する。

縄張

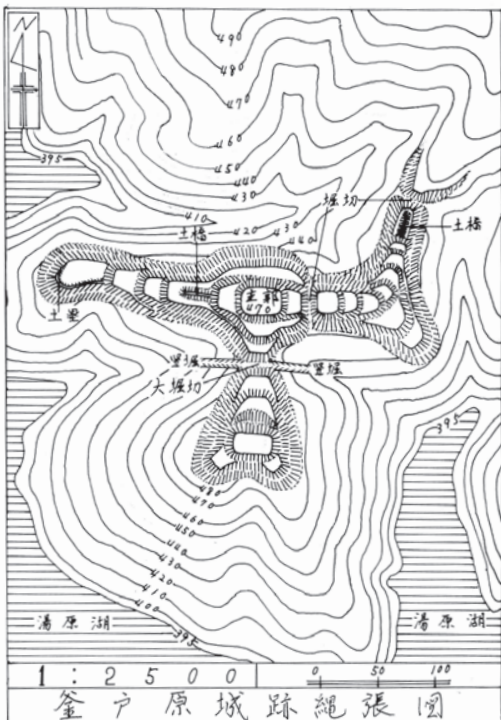
南側の山頂に主郭を構え、堀切を挟んで北側に尾根伝いに東西に曲輪が連なる。図では主郭とあるが第二郭と考えられる。部分的に土塁などが確認される。

城史

未詳。

文献

『改訂岡山県遺跡地図』湯原28



釜戸原城（仮称）

〔真庭市〕久世町

72 大寺畑城

所在地 真庭市久世

立地

小谷集落の約1km北西、標高約五四〇mの独立峰・寺畑山の山頂付近に所在する。南に久世・鍋屋地区を眺望する。久世地区にある宮芝グラウンドを左手に見過ごして下ると、左手に林道「西谷」線がある。現在、東側先端部が一部テレビ塔建設により破壊された以外、遺構は良好に残る。山頂に主郭を構えて、北側と南西側尾根筋に郭を連ねる。主郭は中央に方形の櫓台状遺構を持つ。部分的に石積みが見られる。南西側尾根筋の曲輪群には墨線に沿って土塁が確認される。土塁は橋頭堡的な役割を果たす。

縄張

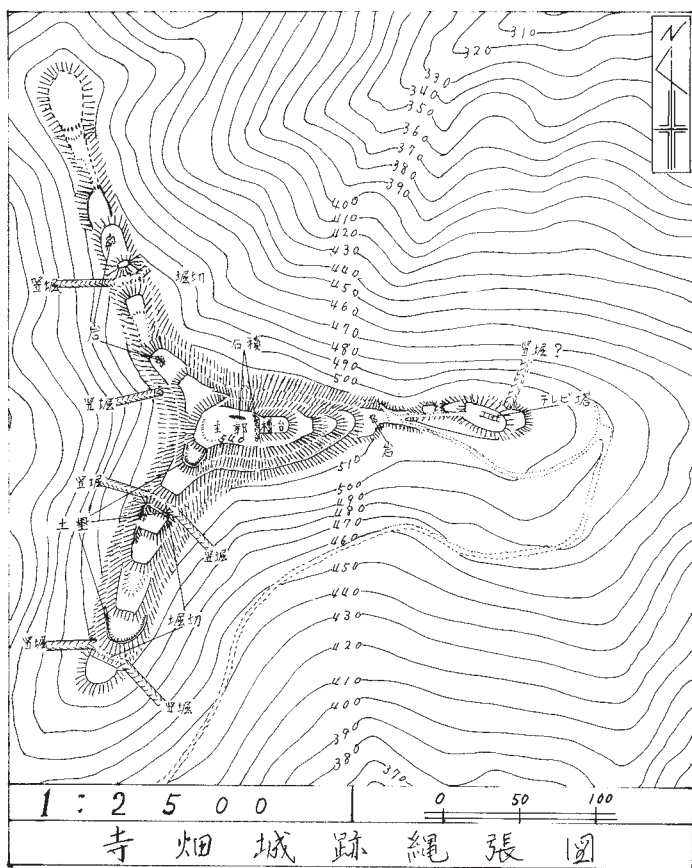
縄張りからは、この地域を支配した国衆の持城と考えられる。但し土塁の用法などから技巧的な面も見られることから、国衆の持城を毛利氏や宇喜多氏などの広域大名権力が接収して改修した可能性もある。詳細な見極めは難しいと思われるが、いずれにしても技巧的な在地系縄張り技術で整備された山城と評価できる。

城史

「古城之覚」は大庭郡久世山形村の「寺畑」として、城主を牧兵庫・息勘兵衛尚晴とする。「作



大寺畑城



陽誌」は「寺畑堡」として、高さ八町、三坂村の小寺畑城と相對し、天文（一五三二〜五五）の頃、牧兵庫・菅兵衛父子が相續いて居城し、三浦貞久に属し軍功を立てたと記す。「美作鬢鏡」は「寺畑城」で城主を牧野兵庫、「美作鏡」は「寺畑城」で城主を牧兵庫・同菅兵衛とする。『久世町誌』は平面図を載せる。『日本城郭全集』は「寺畑山城」とし、山上に本丸、二の丸、三の丸などの跡が残るとする。

天正三年（一五七五）三月二十六日、三浦貞広は家臣の牧菅兵衛尉らが加茂伊賀氏の軍勢の拠る真木山城（真庭市鹿田）を攻撃、落城させたとの報を「寺畑」から受け、これを賞している（下河内牧文書）。天正七年（一五七九）、宇喜多氏と毛利氏の対立にあたり、宇喜多方の篠向城（真庭市大庭・三崎）の城主江原兵庫は高田城の相城と

して「寺畑山」に「取出之城」を築いて籠城、一月に吉川元春は「寺畑之城」などを落去させ岩尾山城（津山市吉見）への連絡をとるといった戦略を示している（『佐々部一斎留書』、「譜録」）。そして実際に翌八年正月、「寺畑・宮山」の両城を攻撃することを決し、二月二日に月田（真庭市月田）から陣替して九日から小寺畑城を攻撃し一二日の夜に落去、一六日から「本城」の「大寺畑」の攻撃が予定されている（巖島野坂文書、「閩閩録」）。毛利勢が仕寄を付けて大寺畑城を包囲したところ、城中の反逆人が固屋に放火。切岸際まで迫った攻城勢を、江原兵庫助ら籠城勢は何とか退けたが、毛利勢はさらに仕寄を近くに付けたため、城を明け渡し家城の篠向城へ落ち延びたとされる（『桂叟円覚書』、「佐々部一斎留書」、『安西軍策』、「武家聞伝記」）。以降、閏三月には毛利氏の家臣和智元郷と有福元貞が寺畑在番が命じられているが、その後の消息は不明である（『閩閩録』）。

備前焼。

平成五年（一九九三）三月、久世町が有線テレビ受信設備の設置にあたり工事用道路を建設、出丸周辺が破壊された。

「桂叟円覚書」、「佐々部一斎留書」、「安西軍策」、「陰徳記」、「武家聞伝記」、「作陽誌」、「美作鬢鏡」、「陰徳太平記」、「備前軍記」、「美作鏡」、「美作略史」、「真庭郡誌」、「岡山県通史」真庭25、「久世町誌」、「美作古城史」、「日本城郭全集」真庭郡6、「久世町史」、「日本城郭大系」837、「岡山県埋蔵文化財報告」24、「改訂岡山県遺跡地図」久世1、「戦国山城を攻略する」

立地

久世地区黒尾集落の北側の山頂、標高約三八〇m付近に所在する。谷を挟んで約九〇〇m北に大寺畑城がある。久世地区にある宮芝グラウンド北側、久世神社境内の土蔵の右上上に登山道がある。

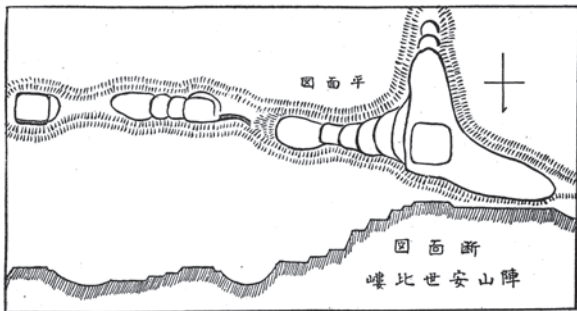
縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、最高所の主郭を中心に大小の郭や堀切で構成された梯郭式山城とする。現地には丘陵上の東西数kmにわたり土塁が連絡し、複数の陣城が存在する。

「作陽誌」は「陣山」として、伝えでは寺畑の戦で敵が陣したことから名付けられ、高田村（真庭市勝山）との境である杉河原から生健神社（現久世神社、同市久世）の上、長さ一六町で、「安世比叞」を本陣とすると記す。『久世町誌』は「陣山安世比叞」の平面図と断面図を載せ、山嶺はよく寺畑と対し、峰の数町に砦の跡があるとす



陣山



陣山縄張図（『久世町誌』より引用）

る。

文 献

天正八年（一五八〇）に寺畑城を攻撃するため毛利勢が布陣した陣に比定され、落城後も小早川隆景は五月五日に備中国へと陣替するまで「寺畑の御陣」にあったらしい事が窺われ、その間に宇喜多直家の命で牧左馬助・同源之丞らが夜討ちし城兵に三二人の死者を出している（「閩閩録」、牧左馬助覚書、「桂岬円覚書」）。「桂岬円覚書」、「真庭郡誌」、「久世町誌」、「美作古城史」、「日本城郭全集」補遺、「日本城郭大系」852、「改訂岡山県遺跡地図」久世134

74 中山屋敷（仮称）

所在地 真庭市久世

立 地

久世地区黒尾集落の北側、陣山麓の標高約一八〇mの丘陵上に位置する。久世盆地を広く眺望する。

縄 張

未詳。

城 史

「作陽誌」は、中山三郎兵衛は三浦貞広麾下で、その玄孫は先祖代々久世村に住み、古墳がその裏の耕作地にありと記す。「真庭郡誌」は「古宅の跡」として美和村の西方、字中山とするが、久世町の誤り。

文 献

「作陽誌」、「真庭郡誌」

75 羽庭城（仮称）

所在地 真庭市久世

立 地

久世地区田下集落の北側、二つの池の上流尾根上に所在する。標高は約二二〇m。近くに羽庭古墳群がある。

縄 張

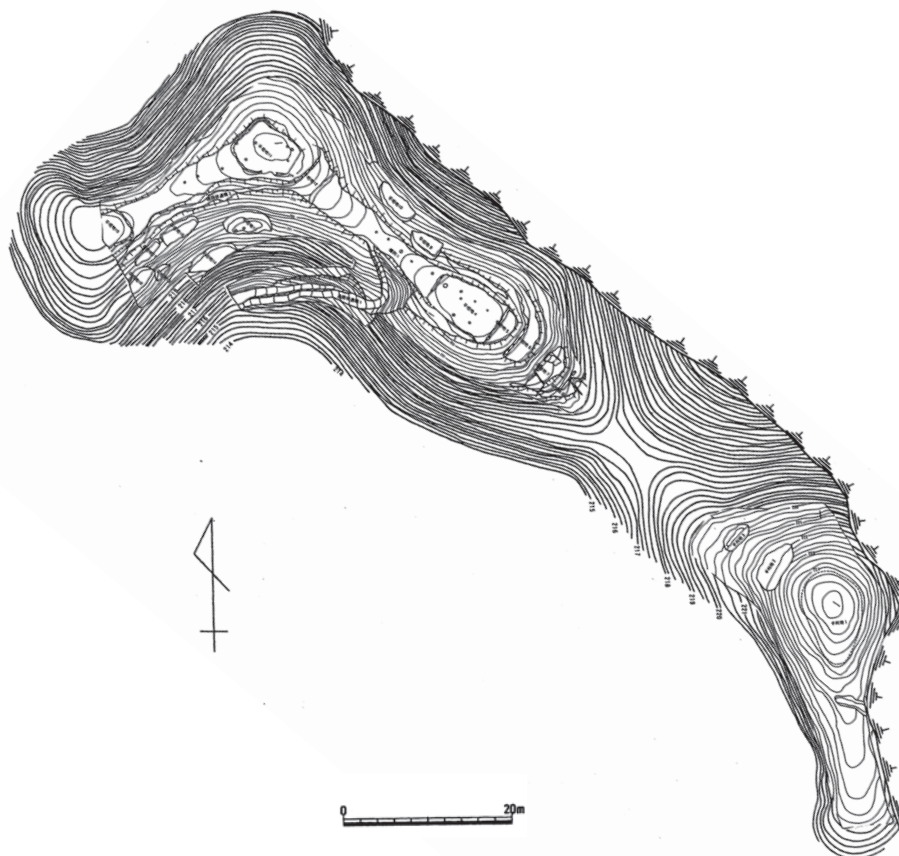
尾根主軸上に方形壇状に四つの郭を削り出し、犬走りや半月状平坦地、堀切等を配する。

未詳。寺畑城攻撃のための陣城の一部と考えられている。

須恵器・土師器・備前焼・銭貨・刀子・鉄鎌・小札・鉄釘。

高齢者福祉施設建設に伴う平成九〜一〇年（一九九七〜八）の発掘調査により遺構が検出された。調査後一部消滅。

『久世町埋蔵文化財発掘調査報告』3、「改訂岡山県遺跡地図」久世48



羽庭城地形図（『久世町埋蔵文化財発掘調査報告』3より引用・一部加工）

文 献

備 考

遺 物

城 史

76 陣屋 (仮称、上ヶ市遺跡)

所在地 真庭市久世

立地

久世地区上ヶ市集落の西側段丘上に所在する。標高は約一六〇mである。

縄張

未詳。

城史

『久世町誌』は上ヶ市の地に「もりぶん」と呼ぶ区画整然とした数枚の畑があり、森忠政の美作入国により遣わされた重臣が陣屋を構え、各地で城地を選定したと記す。

遺物

須恵器・土師器。

備考

『改訂岡山県遺跡地図』は「上ヶ市遺跡」として、奈良～室町時代の土器が散布とする。

文献

『久世町誌』、『改訂岡山県遺跡地図』久世143



陣屋 (仮称、上ヶ市遺跡)

77 加那女岐山・金砕山城

所在地 真庭市惣・日名

立地

旭川右岸にあり、旧落合町との境界である金砕山山頂付近に所在する。標高は約五四六mで、東南北の三方向に対して旭川流域を広く眺望する。

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、山頂部の主郭と西に二つの主要な郭で構成、曲輪・堅堀・畝状堅堀等を配置とする。

城史

『作陽誌』は「加那女岐山」として、真島郡惣村の西境にあり、かつて神林寺(真庭市神)の僧徒が篠向城(真庭市三崎・大庭)の城主との戦いに陣したと記す。

文献

『作陽誌』、『美作古城史』、『改訂岡山県遺跡地図』久世95、『戦国山城を攻略する』

78 飯山城

所在地 真庭市草加部

立地

草加部地区の旭川右岸にあり、岩内集落の西端の小独立丘陵・飯山頂上に所在する。標高は約二〇〇mである。

縄張

背後を連続堀切で仕切り山頂を削平して単郭の曲輪を主郭とする。周囲に一段の帯曲輪を持つ。村落規模で割拠した土豪層の持城と考えられる。

城史

『作陽誌』は「飯山」として、真島郡草加部村にあり、高さ三二間、山上に福島右近の陣跡があり、福島右近は高田城主三浦氏の家臣と記す。『久世町誌』は「要害(飯の山)」とし平面図と断面図を載せ、「構」と呼ばれる田の西側北方に、堀切二本を経て山頂の平坦地(面積五畝三歩)、平坦地の西と南に



飯山城



加那女岐山・金砕山城

立地
縄張
城史

草加部地区の旭川右岸、寿和集落に所在する。標高は約一八〇m。旭川河岸の高地に数段の平坦地を造成し土塁を配していた。「作陽誌」は「梶原屋敷」として、真島郡草加部村にあり、諏訪明神の祠があることから諏訪檀ともいい、村人は景時の屋敷と伝え、南

79 梶原屋敷

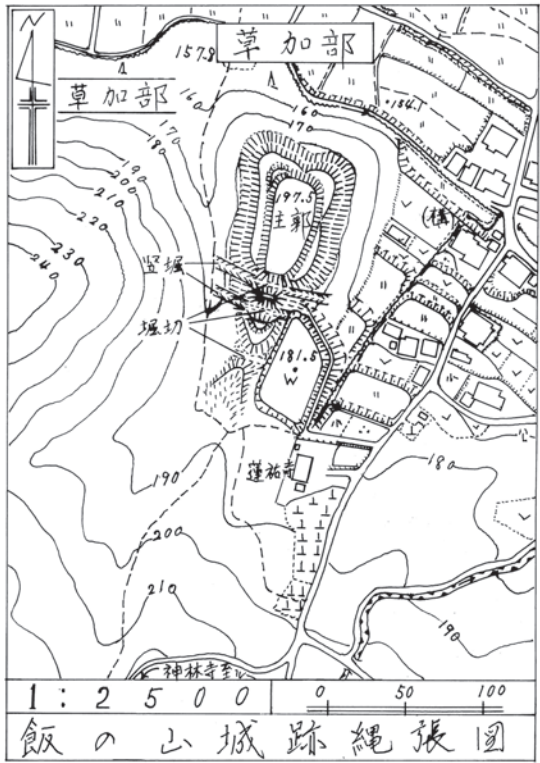
所在地 真庭市草加部

文献

「作陽誌」、「久世町誌」、「美作古城史」、「日本城郭大系」832、「改訂岡山県遺跡地図」久世73・74。

備考

は土塁あり、その東は急崖でまた一段があるとする。城の東に館跡とみられる惣七遺跡があり、付近に須恵器が散布。一辺約二〇〜三〇mの範囲で周辺に石が散乱し石垣状を呈する箇所があり、飯山城関連の可能性がある。



立地

80 殿土井

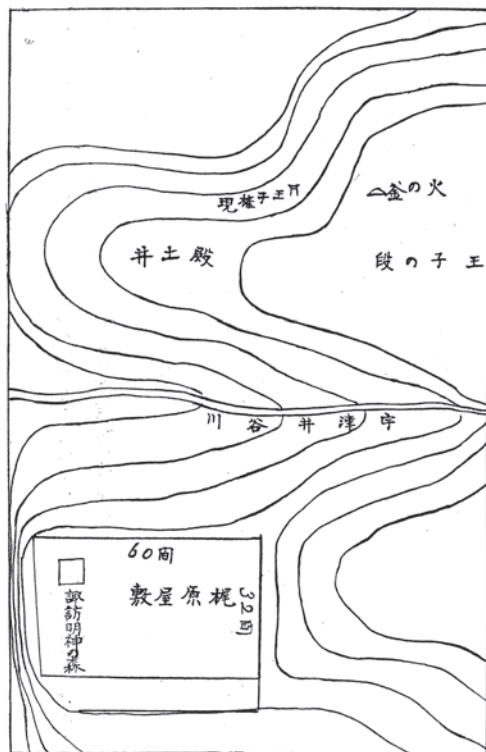
所在地 真庭市草加部

梶原屋敷から谷を隔てた南の尾根上に所在する。

文献

「作陽誌」、「美作略史」、「久世町誌」、「美作古城史」、「日本城郭大系」838

に「梶原馬冷場」という池があると記す。「久世町誌」は平面図を載せ、草加部の「諏訪の段」は、東西三二間ないし四〇間、南北は西側五〇間、東側六〇間、所々に高さ二〜三尺の土塁の跡あり、東は緩斜面、西は平坦地で二段となり地続き、北は断崖、南は山麓に接するとする。



梶原屋敷・殿土井位置図（『久世町誌』より引用）



梶原屋敷

縄張

未詳。

城史

『久世町誌』に平面図を載せ、梶原屋敷の東、宇津井谷を隔てて殿土井と呼ぶ地があり、屋敷と関係あるかとする。

文献

『久世町誌』

81 さいししょう小屋

所在地 真庭市櫛西

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

天正一〇年（一五八二）に羽柴秀吉が宇喜多家の先導で中国地方に出勢した際、大庭郡余野・櫛村（真庭市余上・下、同市櫛西・櫛東）の土民が「寨」を構えたとあり、秀吉から同年三月日付けで発給された「かし村さいしやう小屋」に宛てた禁制が残るとある（『作陽誌』）。

文献

『作陽誌』、『美作古城史』

82 小寺畑城

所在地 真庭市三阪

立地

三阪地区の北側、標高五二七・八mの巖山山頂に所在する。久世盆地を広く眺望し、麓を伯耆街道が通る。

縄張

未詳。

城史

『作陽誌』は大庭郡三坂村に小寺畑あり、高さ四町、大寺畑城と相対すと記す。『真庭郡誌』は、東西一町、南北一町、回字形をなすとするが、これは多田山城（茶臼山城、真庭市三阪）の説明である。

文献

天正八年（一五八〇）二月二日、毛利勢は月田（真庭市月田）から陣替、九日から宇喜多勢の籠もる小寺畑城を攻撃したところ、城兵が投降したため一二日の夜に落去した（巖島野坂文書、『閩閩録』、『安西軍策』）。



小寺畑城

83 多田山城

所在地 真庭市三阪

立地

三阪地区の三坂川左岸にあり、火葬場の約四〇〇m南東の茶臼山山頂付近に所在する。標高は約三一〇mである。

縄張

山頂に主郭を配し、南北に曲輪を並べ縄張りを持つ。主郭は二段に分かれており縁辺部に堡壘状の土塁を構える。この地域は近隣に複郭規模の山城が多く分布する。特定の拠点城郭に軍力が集約されず、分散して割拠したものと考えられる。



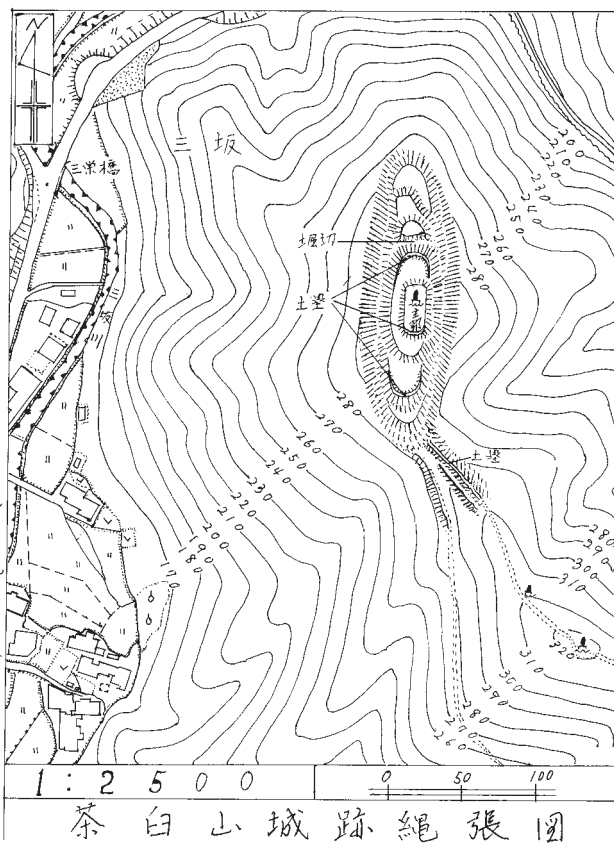
多田山城

城史

『古城之覚』は大庭郡久世村の「多田山」として、城主を沼本新右衛門とする。『作陽誌』は、三坂村北方にあり、高さ二町、牧兵庫・

文献

『武家聞伝記』、「作陽誌」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「美作略史」、「真庭郡誌」、「岡山県通史」真庭26、「久世町誌」、「美作古城史」、「日本城郭全集」真庭郡3・補遺、「日本城郭大系」860・862、「改訂岡山県遺跡地図」久世162

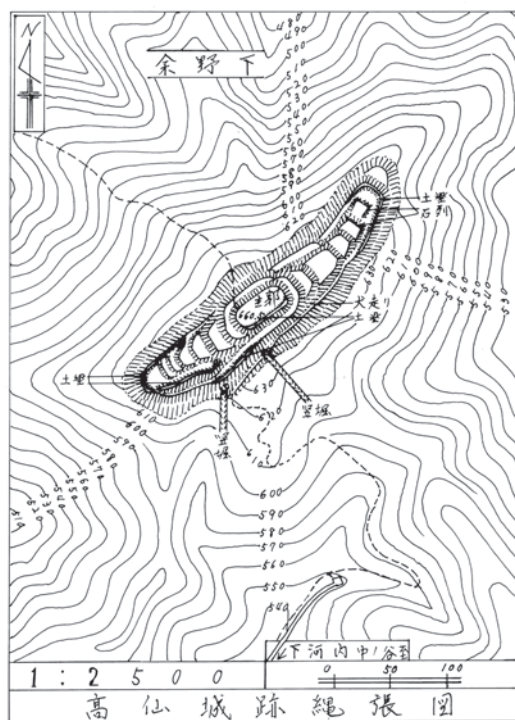


牧菅兵衛が在城すると記す。「美作鏡」は三坂村の「多田山城」とし、城主を沼本新右衛門・牧兵庫とある。「久世町誌」は「茶白山」として平面図と断面図を載せ、頂上の山形は整然として遠く西方から眺めると伏せた茶碗に似ており、頂上は平坦で南北に階段状をなし、平地が九段、上段に石の観音像を祀るとする。

牧左馬助は、高田城（真庭市勝山）を攻撃に出勢した宇喜多方の先手花房助兵衛・沼本新右衛門の拠る「久世多田山」を夜討ちし、首一つを討ち取り、褒美として太刀一腰を与えられたという（牧左馬助覚書）。

城史

「作陽誌」は「高山堡」として、大庭郡余野上村にあり、高さ七町、昔、水沢為虎が築城、東は播磨国、北は伯耆国、南は備前国が見え、上河内東谷村との境で小道が頂上を通じると記す。天保国絵図に「高山」と山名がみえ、「美作鏡」は「高仙城」とする。
 天正八年（一五八〇）十一月四日、毛利輝元は高田（真庭市勝山）から二山城（真庭市余野下）近辺まで出張・山陣し、所々の山見などを命じ、一七日には小早川隆景に「高仙」の普請を命じ、隆景は



縄張

立地

84 高仙城・高山城

所在地 真庭市余野上

余野下地区の目木川左岸にあり、高山の山頂付近に所在する。標高は約六五三mである。旧久米町宮部上方面に至る山道が東を通る。山頂に主郭を構え、南北に段々状に曲輪を連ねる。主郭には土塁がみられる。周囲には横堀状の帯曲輪が確認される。

文献

二三日までには普請を終わらせており、三沢氏を「城督」にするとしている（『閩閩録』）。同一二年正月、安国寺恵瓊は児玉元良らに対し、「高田・岩屋・宮山・高仙」の城へ国元からも退去を言い聞かせるように要請している（毛利家文書）。



高仙城・高山城

『作陽誌』、「美作鏡」、『真庭郡誌』、『岡山県通史』真庭21、『美作古城史』、『日本城郭全集』補遺、『日本城郭大系』843、『改訂岡山県遺跡地図』久世60

85 二山城

ふたつ やま

所在地 真庭市余野下

立地

余野下地区の目木川右岸にあり、標高約五六〇mのピーク付近に所在する。矢古集落の北側に該当する。

『改訂岡山県遺跡地図』は、連郭式山城で曲輪・堀切等あり、一部消滅とする。



二山城

城史

『作陽誌』は「二山堡」として、大庭郡余野下村にあり、山の高さ一町余り、昔、鶴殿（湯殿）右衛門尉・落合刑部大輔が拠ると記す。「美作鏡」は「二山城」とする。ただし先行する「古城之覚」にはみえず、「湯野藤右衛門尉」は別の二ツ山城（苦田郡鏡野町養野）の城主とされているように、余野と養野という類似

文献

した地名による混乱がみられる。『日本城郭全集』は「二つ山城」とする。天正八年（一五八〇）一月四日、毛利輝元は高田（真庭市勝山）から「二山」近辺まで出張・山陣し、所々の山見などを命じ、まもなく高仙城（真庭市余野上）の普請が行われた（『閩閩録』）。

『作陽誌』、「美作鏡」、『真庭郡誌』、『岡山県通史』真庭20、『美作古城史』、『日本城郭全集』補遺、『日本城郭大系』874、『改訂岡山県遺跡地図』久世49

86 神上城・高上城

こうのうえ こうのうえ

所在地 真庭市樫東

立地

樫東地区鴻殖集落の北側の尾根上に所在する。目木川が西から南に湾曲する部分の南東の山に該当し、標高は約三七七mである。目木川左岸である。

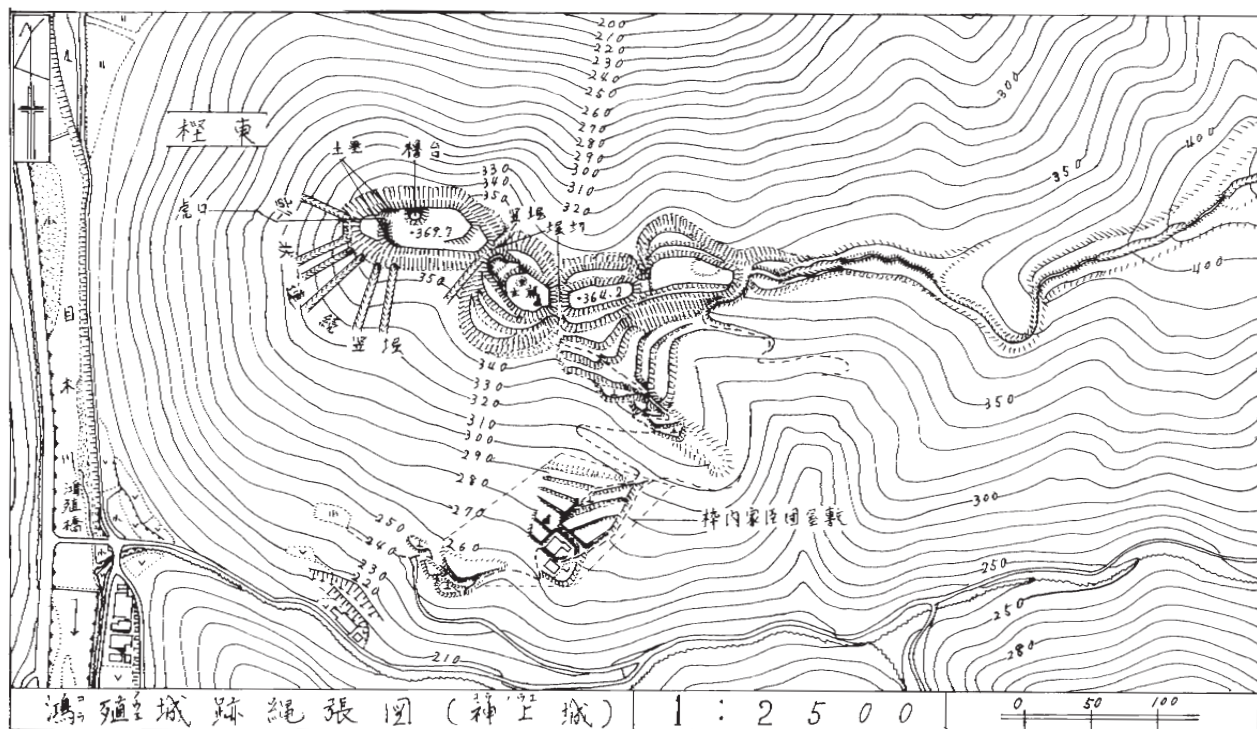
尾根伝いに先端に三つの曲輪（と帯曲輪）から構成される。それぞれの曲輪の間には堀切が配される。西側の曲輪がやや高く主郭の役割を果たすとみられる。西側斜面には畝状空堀群がみられる。



神上城・高上城

城史

『古城之覚』は大庭郡樫村の「高上之（城）」として、城主を岩佐勘解由とする。『作陽誌』は「神上堡」として、高さ七町余りと記す。ただし「美作鬢鏡」は「高山の城」、「美作鏡」も「高山城」として城名を誤り、混乱の原因となっている。『久世町史』は「鴻ノ殖城」



文 献

『安西軍策』、『陰徳記』、『陰徳太平記』、『備前軍記』、『久世町史』
 という（安西軍策）。

城 史
 縄 張

『久世町史』は「砥石山城」として、遠景の写真のみ載せる。

立 地

目木川右岸、目木地区の北側にあり、標高四一八・五mの砥石山山頂付近に所在する。

87 砥石山城

所在地 真庭市目木

文 献

として写真のみを載せる。
 永禄九年（一五六六）頃、牧左馬助は一六歳の時に岩屋城（津山市中北上）と高田城（真庭市勝山）との合戦で、「大庭郡樫村高の上之城」で首二つを討取り、高田城主三浦貞広から感状を与えられたという（牧左馬助覚書）。

『武家聞伝記』、『作陽誌』、『美作鬢鏡』、『美作鏡』、『真庭郡誌』、『岡山県通史』真庭24、『美作古城史』、『久世町史』、『日本城郭大系』842、『改訂岡山県遺跡地図』久世62、『戦国山城を攻略する』



砥石山城

88

目木構

所在地 真庭市目木

真庭市指定史跡

立地

目木川右岸の目木地区平野部にあり、米来小学校の約一五〇m北西に所在する。周囲の水田には条里制遺構が残る。

縄張

方形の屋敷地に水堀が廻らされている。

城史

『美作古城史』は「目木構」として、福島氏の旧宅で四周に堀を廻らせ、門前の大樹など構居の遺形を完全に留めるとし、福島玄蕃一則が居を構えて以降、子の七郎右衛門則盛以降は大庄屋を勤め、一三代正美までこの地に住んだが、現在は廃絶したなどとする。

文献

『美作古城史』、『日本城郭大系』879、『改訂岡山県遺跡地図』久世208

89

篠向城・篠吹城・篠茸城

所在地 真庭市三崎・大庭

立地

旭川左岸、目木川左岸にある標高約四一九mの独立峰・笹向山頂上付近に所在する。頂上付近には無線中継施設が林立している。旭川流域、目木川下流域を広く眺望する。

縄張

主郭は二段に分かれており一部に石垣が確認される。虎口は平入り虎口となっている。主郭の周囲は腰曲輪が廻る。西側には



篠向城・篠吹城・篠茸城

城史

大味な曲輪が連なる。東側は痩せ尾根となっており、現在は電波塔などで改変を受けており遺構の評価が難しい。腰曲輪の南側墨線には土塁が配され、斜面に放射状に畝状空堀群が配される。北側尾根には城道が確認されるが、城道の周囲の斜面にも連続空堀が配された。主郭は豊臣期の宇喜多氏による整備が考えられるが、それ以外の城域は戦国期の様相を色濃く残すと考えられる。積極的に畝状空堀群を採用した点は宇喜多氏の城郭としては珍しい。

正保書上五四城の一で、「古城之覚」は大庭郡三崎村の「篠向之(城)」として、城主は江原兵庫(親次、剃髪して久清と号す)とする。「作陽誌」は「篠向城」として、山路は五町三〇間、東は瑞景寺山に続き、北は三崎村・目木村、西北は台金屋村、西は大庭村・平松村、南は古見村と広く眺望することができる、居宅の跡が城の西辺にあり、今は耕作していると記す。「美作鬢鏡」は「笹向の城」とし、「美作鏡」は「笹向城」、天保国絵図に「笹向古城跡」とする。

康安元年(一三六一)七月、山名時氏の美作国侵攻にあたり降参した六か城のうちに「飯田ノ一族方籠タル篠向ノ城」がみえる(「太平記」)。明徳の乱(明徳三年・一三九二)のことか、浦上則宗の祖父「美作入道」が敵を追討するために作州に発向、篠向城に籠もる大敵を攻め落としたとある(「蔭涼軒日録」)。嘉吉の変(嘉吉元年・一四四一)にあたっては城に拠った赤松方の「凶党数百」を山名教之が討ち、また文龜年中(一五〇一〜四)には高田城主三浦貞連が城に拠っていた山名右近亮を討ち取り、福田・金田氏らを在番としたとされる(「作陽誌」)。天文一三年(一五四四)十一月、尼子国久・誠久・敬久父子は備後国を経て美作国に討ち入り、浦上氏が軍勢を籠める「篠吹」など三ヶ城を落とし、出雲国に帰陣したとされる(「安西軍策」一)。永禄一〇年(一五六七)のことか、「大庭郡篠向城」へ「岩屋衆」が攻撃した際、一七歳の牧左馬助は岩佐勘解

遺物
備考

由と出勢し、山下で首二つを討ち取り、高田城主三浦貞広から感状を与えられたという（「牧左馬助覚書」）。同一一年二月に毛利勢によって高田城が没落した後、家臣の牧氏は貞広を擁立、同一二年七月にまず篠向城を切り取り、当城を拠点に高田城を攻撃したとある（「美作国諸家感状記」、香川家文書、備中原家文書、「作州高田城主覚書」）。

それからしばらくは当城の記事はみられず、天正七年（一五七九）、宇喜多氏と毛利氏の対立の際、高田城の向城「篠吹之城主郷原兵庫」は寺畑城に籠城したが、同八年正月、毛利勢の攻勢に城を明け渡し家城の篠向城へ落ち延びたとされる。さらに城兵は同九年六月二十九日に城を明け退き、江原親次は牢人したという（「吉川家中并寺社文書」、「関関録」、「佐々部一斎留書」、「安西軍策」、「武家聞伝記」、「花房家記事」など）。

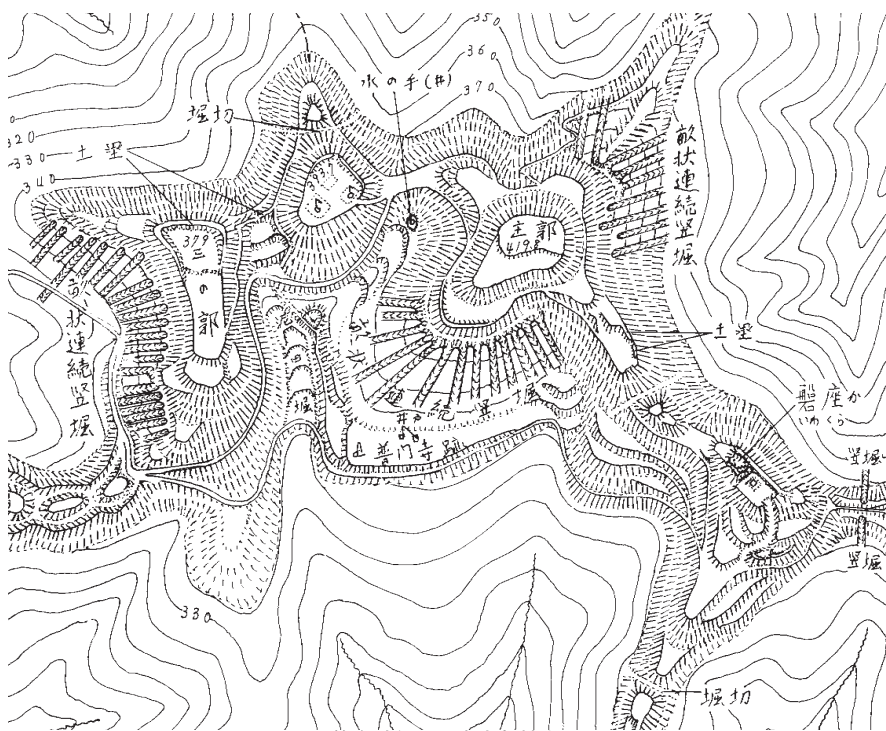
その後篠向城は再び江原氏の居城となり、天正期中頃から中島本政は「作州笹向」で古見源三郎を「本丸ト二ノ丸」の間で切り伏せ、親次から脇差を与えられたとある（中島本政覚書）。親次は朝鮮へと出勢したが、慶長三年（一五九八）五月一七日に釜山で病死、後継者が無く家は絶えたという（「作陽誌」）。ただし内記という子息の存在を記す史料もある（「金田家中興由緒書」）。

瓦・備前焼・土師器・陶磁器・鉄釘等。

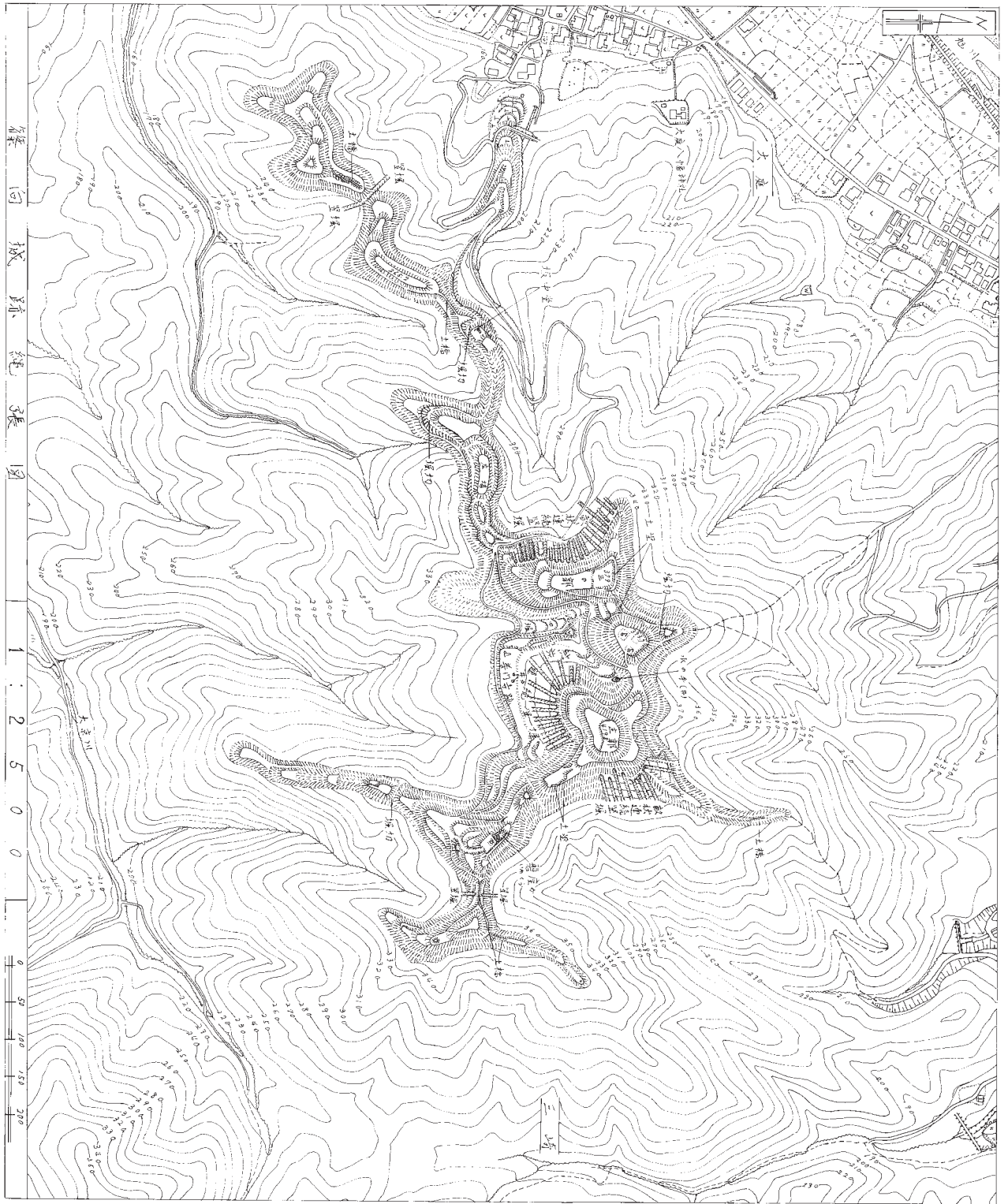
平成一二年（二〇〇〇）、NTTドコモ中国受信施設建設に伴い本丸北の腰曲輪の発掘調査を実施、礎石建物跡と掘立柱建物が検出された。同一九年、久世デジタル放送中継局建設に伴い二ノ丸跡の発掘調査を実施、土塁及び掘立柱建物跡が検出された。調査後一部消滅。

文献

「太平記」、「安西軍策」、「陰徳記」、「武家聞伝記」、「作陽誌」、「美作鬢鏡」、「陰徳太平記」、「美作鏡」、「美作略史」、「真庭郡誌」、「岡山県通史」真庭27、「久世町誌」、「美作古城史」、「日本城郭全集」真庭郡4、「久世町史」、「岡山の城と城址」、用田一九七九、「日本城郭大系」846、「図説中世城郭事典」三、岸田一九九二、「歴史散歩岡山の城」、乗岡二〇〇〇、「落合町史」通史編・地区誌編、「改訂岡山県遺跡地図」久世294、「岡山の山城を歩く」72



篠向城縄張図中央部拡大



张家口城迹图

1 : 2500

〔真庭市〕美甘村

90 柴平山

所在地 真庭市鉄山

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「作陽誌」は真鳥郡鉄山村に柴平山があり、山上に削平があるとする。「作陽誌」

文献

91 要害山城

所在地 真庭市黒田・鉄山

立地

鉄山川右岸、黒田川左岸にある、標高約六八〇mの独立峰頂上付近に所在する。黒田地区を通る県道五五号線の北側に該当する。

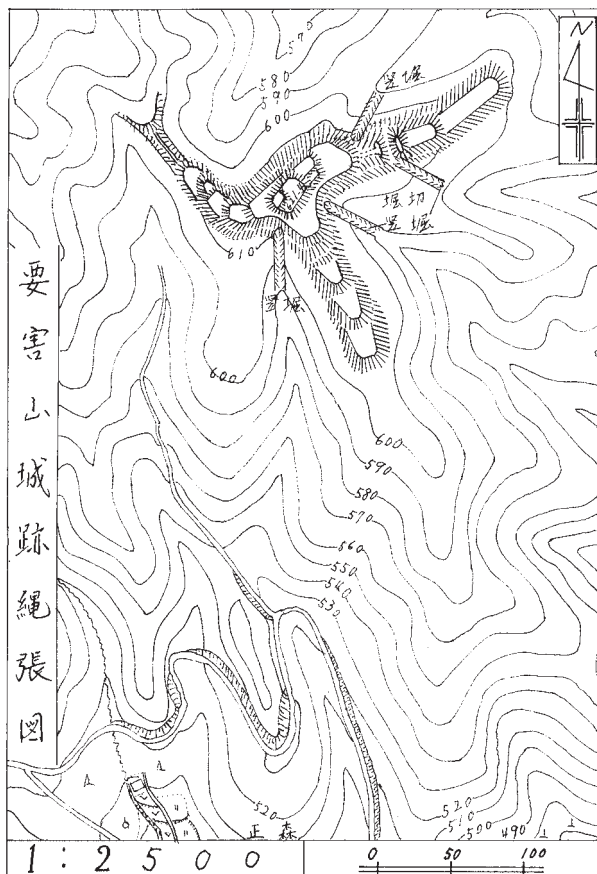
縄張

山頂に主郭を構え周囲に帯曲輪が配される。南側尾根筋に沿って曲輪がみられる。東側の尾根に堀切がみられる。主郭と複数の曲輪を持つ複郭構造であり、

村落単位で割拠する土豪層の持城としては比較的規模が大きい。鉄



要害山城



要害山城跡縄張図

城史

山川沿いで台頭した土豪層が高山に築いた可能性が考えられる。

「作陽誌」は「姫園山」として、真鳥郡黒田村にあり、高さ三二間、山上に砦跡があると記す。「村誌美甘」は、黒田地区では昔、大森采女という武士が居城していたと伝え、麓には勝負谷・的場・馬場などの地名が残るが、山頂には建物が建つような地形ではないと記す。『改訂岡山県遺跡地図』は大盛左馬介が在城と伝えるとする。

文献

「作陽誌」、『村誌美甘』上巻、『改訂岡山県遺跡地図』美甘29

92 陣山

所在地 真庭市美甘

立地

新庄川右岸、黒畑川左岸にあり、旧美甘村中心部南側の丘陵地頂上付近に所在する。標高は約五四八mで、北側対岸に麓城がある。

縄張

主郭から稜線に沿って曲輪群が連なる縄張りとなっている。尼子勢が麓城攻略のために築いた陣城とされるが、現状の遺構はそれ以降に整備された可能性が高い。麓城と併せて街道の往來を押える役割を果たしたものと考えられる。

城史

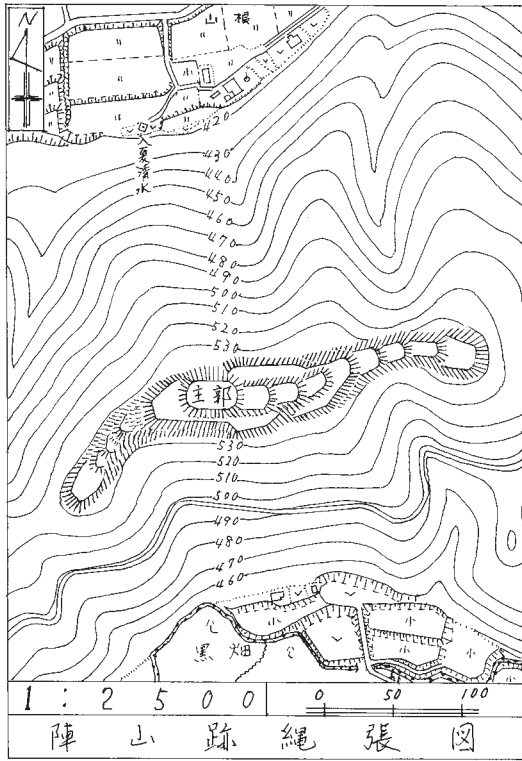
『改訂岡山県遺跡地図』は麓城攻略の際、尼子勢が陣を敷いたと伝えるとする。

備考

『改訂岡山県遺跡地図』は陣山に隣接して、北に延伸する尾根の先端、標高約五二〇mにある、丘陵上に四本の堀切と七〇八面と小規模な郭をもつ城、また標高約五〇〇mにある、一段か二段からなる小規模な城を掲げており、いずれも陣山関連の遺構と考えられている。

文献

『改訂岡山県遺跡地図』美甘77・78・79



陣山

93 麓城・城山

ふもと じょうやま

所在地 真庭市美甘

立地

新庄川左岸、森谷川右岸にあり、南に麓集落、西に当政集落がある。標高約五一〇mの尾根先端ピーク上に所在する。国道一八一号線が南を通る。城山と呼ばれる。美甘地区にある、国道一八一号線と県道四四七号「粟谷・美甘」線の分岐点より、森谷川沿いに一〇〇mほど北上した道路退避場近くの墓地横の道。



麓城・城山

縄張

山頂に主郭を構え、下位曲輪を城域の先端に配して足場を固める縄張りプランとなっている。主郭の北側背後には三連続の堀切が築かれ、強固な遮断線となっている。東側の尾根筋には二本の堀切が築かれ、その間に足場となる曲輪が配された。全体をみると、在地系縄張り技術が施された連郭式の縄張りであると位置付けられる。美甘に割拠した国衆の持城か、街道を抑える広域大名権力の番城として機能したものと考えられる。

城史

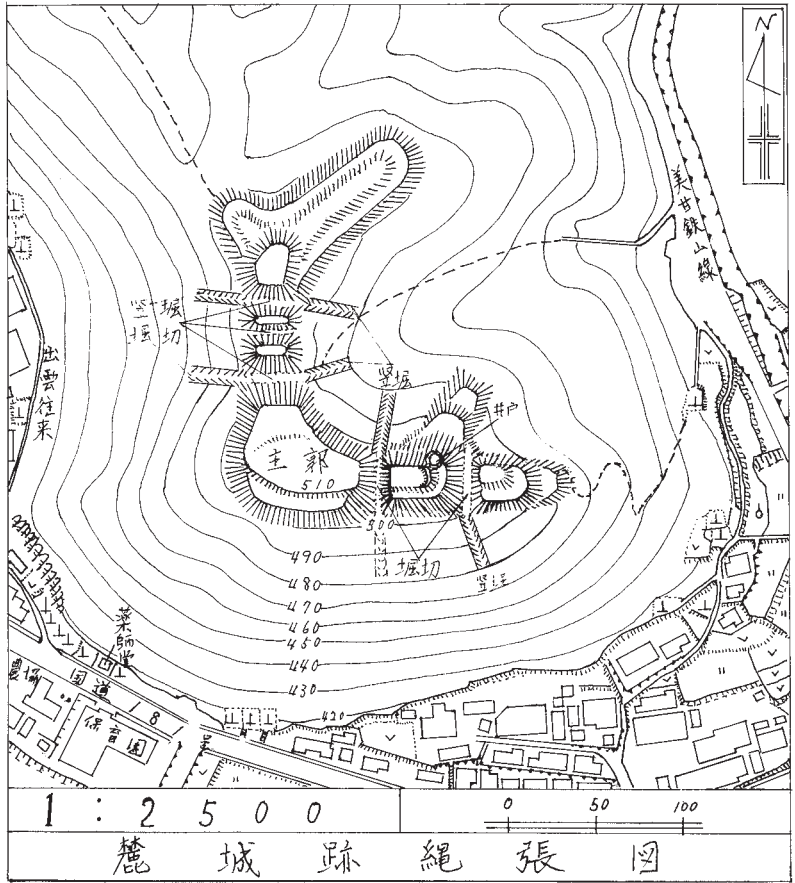
『作陽誌』は「麓城」として、真島郡麓村にあり、城下に腹切石があるなどと記す。「美作鏡」は「麓山城」とする。天保国絵図に「古城跡」とある。『村誌美甘』は、今も麓地区には武士が自決した「腹切り岩」や「女中墓」が、河田地区には三浦忠近が自刃したという「腹切岩」があるとする。『日本城郭全集』は「麓山城」とし、「ふもと

文
献

55、『岡山の山城を歩く』76
『作陽誌』、『美作鏡』、『美作古城史』、『村誌美甘』上巻、『日本城郭全集』真庭郡10、『日本城郭大系』876、『改訂岡山県遺跡地図』美甘

陽誌』。
戦つて助丞らを討ち、柴田党六人の墓が同村にあるとされる（『作陽誌』）。

やまじょう」ともいうとする。



〔真庭市〕川上村

94 粟住山城・城山

あわずみやま

所在地 真庭市蒜山東茅部

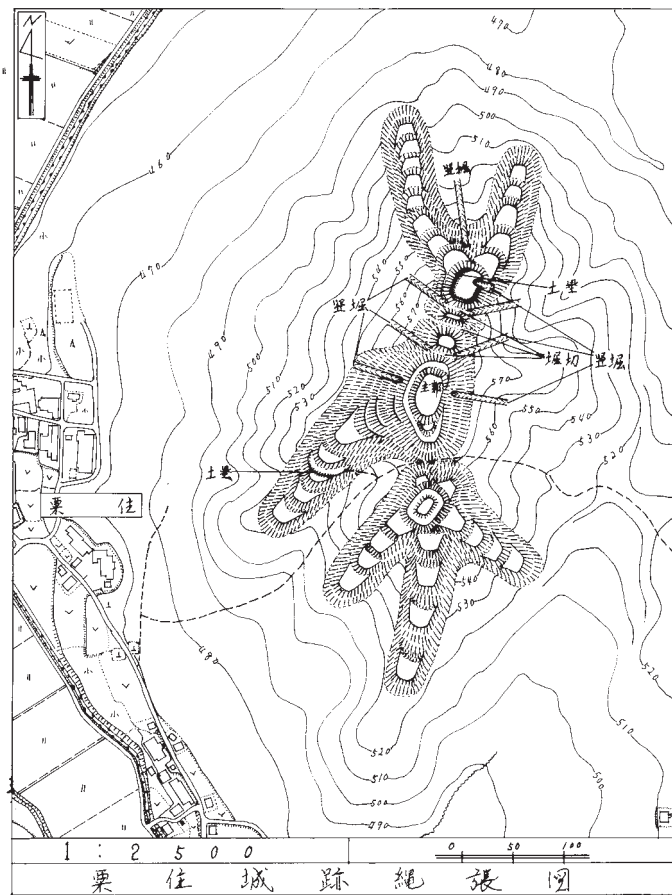
真庭市指定史跡

立地

東茅部地区粟住集落の西に位置する独立峰上にある。標高は約六〇五mで、粟住川の右岸にある。旭川流域を広く眺望する。城山とも呼ばれている。

縄張

集落の背後の山上に主郭を構え、周囲の尾根伝いに曲輪を配した縄張りとなっている。幾つかの頂部を城域に取り込み広い城域を校正



粟住城跡縄張図

城史

する。要所に堀切を配する。曲輪には横堀状の帯曲輪や土塁などがみられる。

「作陽誌」は「粟角山」として、真島郡東茅部村にあり、高さ八町、横一一町、松が鬱蒼とし、津山城の粟角矢倉はこの山の材木で造ったとされ、粟角の東北の山と間屋山にはとくに昔の人の陣跡がありと記す。「美作鏡」は「粟角山城」とする。「日本城郭全集」は「粟住城」とし、「川上村史」は平面図を載せる。

文献

「作陽誌」、「美作鏡」、「真庭郡誌」、「美作古城史」、「日本城郭全集」真庭郡1、「日本城郭大系」831、「川上村史」、「改訂岡山県遺跡地図」川上186、「蒜山の文化財」

95 経塚山城（仮称）

きょうづかやま

所在地 真庭市蒜山東茅部

立地

旭川と粟住川が合流する地点の南側独立峰上にあり、標高は約五四三mで、旭川流域・蒜山高原を広く眺望する。

縄張

未詳。「改訂岡山県遺跡地図」は、東西に平坦面が連続しており、小規模な山城跡と推定している。

城史

未詳



経塚山城（仮称）



粟住山城・城山

備考

『改訂岡山県遺跡地図』は、堀切の規模から陣城の可能性が考えられるとする。

文献

『改訂岡山県遺跡地図』川上 202

96 城

所在地 真庭市蒜山東茅部

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

『川上村史』に、間谷地区に石賀氏の先祖が住んでいた「城」という平坦地があり、台地面を約2m切り取り造成し、北端は土塁として外側は5m切り下げて崖とし、堀をめぐらせるとする。

文献

『川上村史』

97 波佐利山城・岩倉山城

所在地 真庭市蒜山本茅部

真庭市指定史跡

立地

旭川最上流の右岸にあり、蒜山インターチェンジの南側に位置する。北に延伸する尾根上にあり、標高は約七二〇mである。蒜山高原を一望する。

縄張

山頂に主郭を配し、尾根に沿って南北に曲輪を連ねる縄張りとなっている。背後となる南側に堀切を配置し、主郭には土塁や石積みが部分的に確認され



波佐利山城

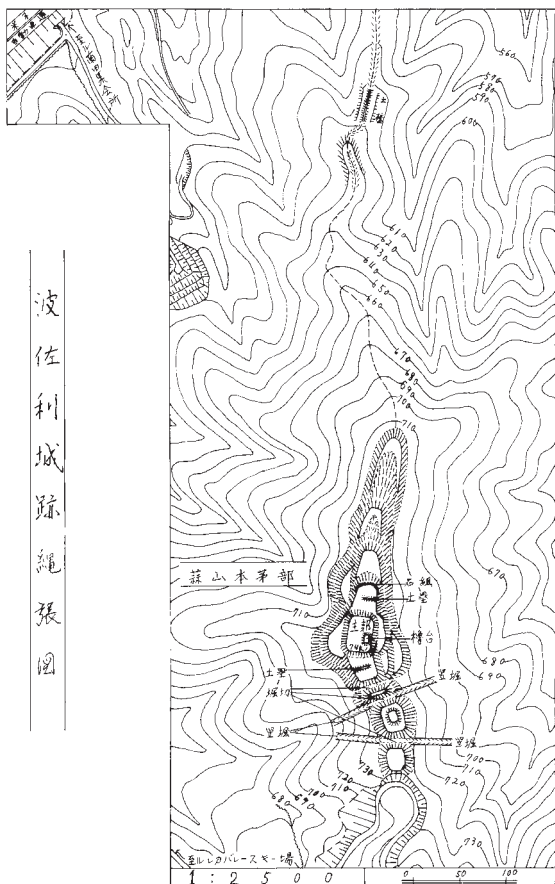
城史

る。伯耆国との境に近く要衝を抑える位置を占める山城。

「作陽誌」は「波佐利山」として、真鳥郡西茅部村にあり、山上は削平されている、また同村の中山も古人の居所と記す。「美作鏡」は西茅部村の「岩倉山城」として城主不詳とする。「真庭郡誌」には、岩倉権頭晴時の居城で、晴時は赤松氏に従ったが、康安二年（一三六二）、山名時氏・師氏父子に攻撃され落城、権頭も討死し、家老の徳山将監は山名氏に、のち赤松義則に属したとする。『日本城郭全集』は「波佐利城」とする。

文献

「作陽誌」、「美作鏡」、「真庭郡誌」、「美作古城史」、「日本城郭全集」真庭郡7、「日本城郭大系」872、『改訂岡山県遺跡地図』川上21、『蒜山の文化財』



98 天王屋敷（仮称）

所在地 真庭市蒜山上徳山

城史

『作陽誌』は「徳山屋敷」として、大庭郡上徳山村にあり、徳山氏が代々住むと記す。『真庭郡誌』に、波作利城主岩倉権頭の家老徳山将監が屋敷を構えたとする。『日本城郭全集』は「徳山砦」とし、土地の人は「徳山屋敷」「徳山構」と呼ぶとする。

立地

旭川最上流の左岸、天王神社の約二〇〇m西の谷にある。内海尻方面へ至る道が通る。

文献

「作陽誌」、『真庭郡誌』、『美作古城史』、『日本城郭全集』補遺、『日本城郭大系』867、『川上村史』、『改訂岡山県遺跡地図』川上25、『蒜山の文化財』。

縄張

未詳。

備考

『改訂岡山県遺跡地図』は館とするが名称の記載はない。

文献

『改訂岡山県遺跡地図』川上19

99 徳山屋敷・城山

所在地 真庭市蒜山下徳山

真庭市指定史跡

立地

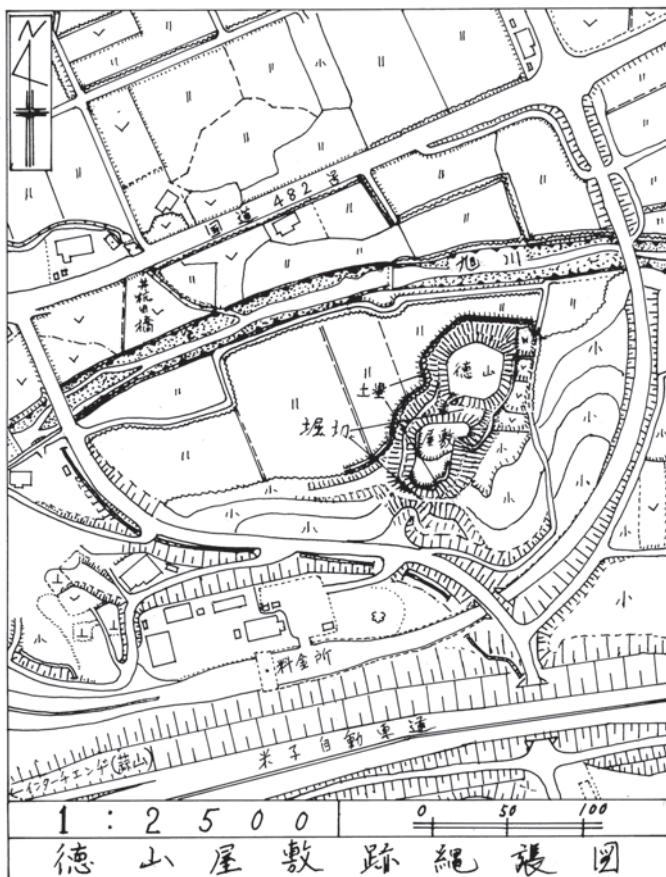
旭川右岸、蒜山インターチェンジの北に位置する。北に延伸する尾根の先端、標高約四九〇m地点にあり、蒜山高原を東に広く眺望する。城山とも呼ばれている。

縄張

平地に近い尾根の突端部に二つの曲輪から構成される。曲輪の間には堀切が配される。南側の曲輪には土塁が確認される。『改訂岡山県遺跡地図』では、東側の谷や西の裾部に遺物が堆積している可能性があるとする。



徳山屋敷・城山



〔真庭市〕八束村

100 日爪城・日ノ爪城

所在地 真庭市蒜山中福田

真庭市指定史跡

立地

玉田川左岸にあり、中福田下集落に向かって南東に延伸する尾根の突端に所在する。標高は約四九〇mである。福田神社の約五〇〇m北東に位置する。

縄張

蒜山高原から伸びる台地の先端を大規模に掘りきって先端部を城域として整備した丘城である。主郭の周囲に土塁を廻し横矢掛かりのような折れが確認される。東側に堀切をいれて主郭をコンパクトにまとめようとする意図が見られる。日ノ爪城で特筆されるのは背後の堀切である。長さが二〇〇m近くある大堀切が三本連続して配され背後を強力に遮断する。加えて、その方向に対して主郭部から凸状に張り出した櫓台が確認される。北西隅にも要所を押える櫓台が確認される。

城史

図をみる限りでは、伯耆国との境目を固める支城として、既存の戦国期城郭を織豊系縄張り技術で改修した可能性が考えられる。精査を行い確認する必要がある。

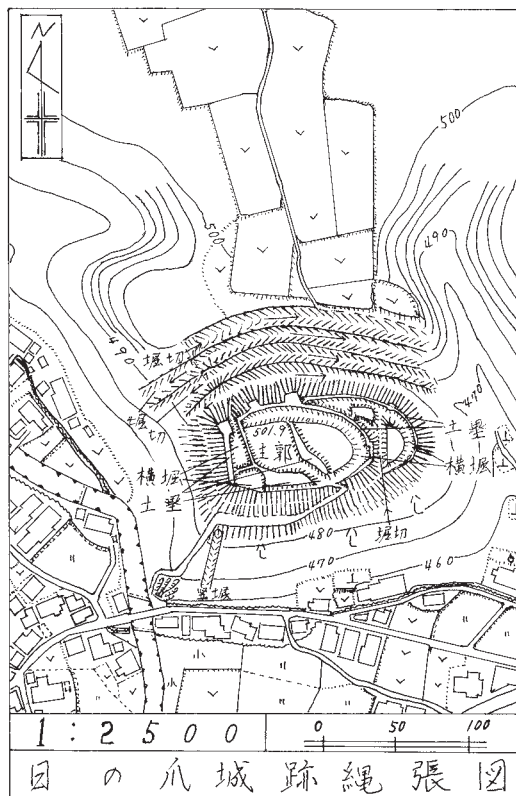
「作陽誌」は「日爪堡」として、大庭郡中福田村にあり、山上は東西四二間、南北二三間、北に旧道ありと記す。『日本城郭全集』は「日爪砦」とする。



日爪城・日ノ爪城

文献

「作陽誌」、『真庭郡誌』、『美作古城史』、『日本城郭全集』補遺、『日本城郭大系』873、『改訂岡山県遺跡地図』八束14、『蒜山の文化財』



101 山名屋敷(仮称)

所在地 真庭市蒜山上長田

立地

旭川左岸にあり、北を花園集落に接する。

縄張

宮城川に面した平坦地の三方を土塁で囲んでいる。

城史

「作陽誌」は「山名氏旧宅」として、大庭郡上長田村にあり、山名某が世間を避け同地に住み、和歌を嗜むなど風月を楽しみ、苑草を植えたことから今その地を花園という、下和村に墓があると記す。『日本城郭全集』は「山名砦」とする。『八束村史』は「花園のいわれ」として、花園集落の公会堂の場所は城跡で、山名某がいた頃、毛利氏の軍が旭川の方から攻め寄せ落城し、今でも公会堂の前には「こもん口」という地名が残り、門前に広い花畑があり、地名の由来になったとする。

「作陽誌」、『真庭郡誌』、『日本城郭全集』補遺、『八束村史』

文献

〔真庭市〕中和村

102 城山

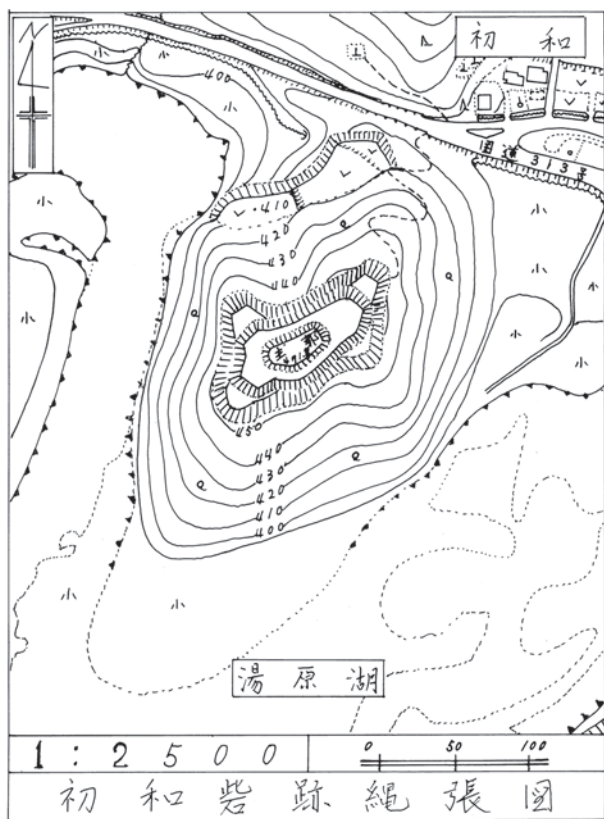
所在地 真庭市蒜山初和

立地

下和川右岸にあり、初和集落南側の独立峰上に所在する。湯原湖に突き出た半島状になっており、標高は約四七〇mである。国道三二三号線が北側を通る。

縄張

山頂に主郭を構え腰曲輪が周囲を囲む。そして登り口になる位置に防禦の足場となる曲輪を配する。適所に切岸による防禦を配置する。『改訂岡山県遺跡地図』では、見張り場の可能性があるとす。



城史

『中和村史』に通称「城山」といい、台帳には丸山とあり、山頂に三、四〇坪の平地あり、初和の美甘氏一門が出雲国の尼子氏に属し城に拠ったと伝えるところ。

文献

『中和村史』、『改訂岡山県遺跡地図』中和79、『中和の文化財』

103 下和城

所在地 真庭市蒜山下和

立地

下和川左岸、植杉川右岸にあり、下鍛冶屋集落に向かって北西に延伸する尾根の突端に所在する。標高は約五〇〇mである。中和神社付近に位置する。

縄張

集落に伸びる尾根の先端に複数の堀切を入れ、先端の高所を主郭として周囲に腰曲輪を配する。削平が良くないことから、非常時に立て籠る詰めの城として機能したものとみられる。集落に近い場所での丘城のあり方を知る一例である。『改訂岡山県遺跡地図』では、山頂部分は削平されておらず、宮山一・二・四号墳が位置するとす。



下和城



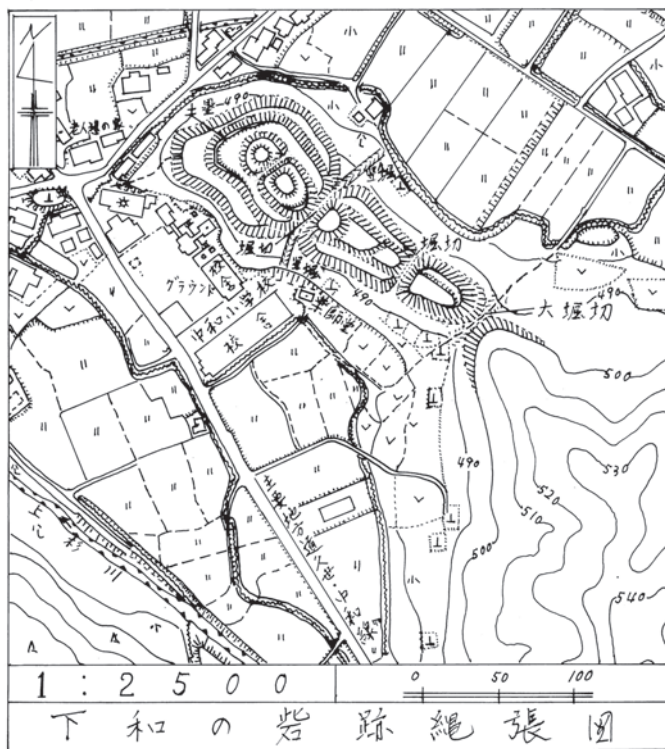
城山

城史

『作陽誌』は「下和堡」として、大庭郡下和村下鍛冶の地にあり、山の高さ一三間と記す。『中和村史』は、下鍛冶屋地区の久那止山、中和神社の境内地で通称宮山にあり、堀切があるとす。『日本城郭全集』は「下和砦」とする。

文献

『作陽誌』、『真庭郡誌』、『美作古城史』、『日本城郭全集』補遺、『日本城郭大系』851、『改訂岡山県遺跡地図』中和71、『中和の文化財』



104 殿屋敷

所在地 真庭市蒜山下和

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

文献

『中和村史』は門所地区の奥、門所谷を遡った所にあり、通称を殿屋敷といい、三段の屋敷跡と北・西・南に壕があるとす。『中和村史』

105 殿屋敷

所在地 真庭市蒜山吉田

立地

常藤集落の南西にある標高約五二〇mの丘陵上に所在する。北東に延伸する尾根上にあり、東側を国道四八二号線が通る。『長者の屋敷』『豪族の屋敷』とも呼称される。

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、三段の平坦面が階段状に続くが、確実な居館遺跡かどうか不明とする。

城史

『中和村史』は北に面して三段の屋敷跡と周辺に二箇所、おおよそ三段の階段式になっている「馬乗場」と呼ばれる平坦な道路様のも（延長数十町、幅一間か二、三尺）が丘陵を廻ると記す。

文献

『中和村史』、『改訂岡山県遺跡地図』中和32、『中和の文化財』



殿屋敷

新庄村

106 浦山城

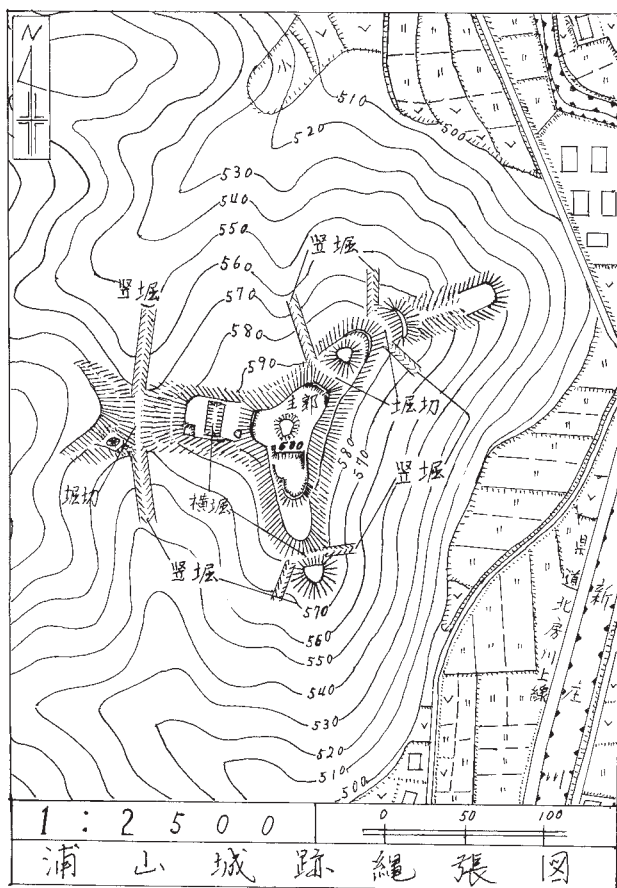
所在地 真庭郡新庄村

立地

新庄川右岸、田中集落の北にある尾根上のピークに所在する。標高は約六一〇mで、県道五八号線の西側に該当する。

縄張

山頂に主郭を構えて稜線に沿って曲輪を配する。主郭部の塁線には土塁がみられる。そして、西側・南側・北東側の三方向に堀切を入れて城域を画する。近隣を支配した国衆の持城と考えられる。



城史

元禄二年（一六八九）の「新庄村古事書上ヶ御帳」は「城山」「はやせの城山」の二つの古城ありとして城名、城主ともに不詳とする。「美作鏡」は「浦山城」として城主不詳とする。「新庄村史」は、地名は城山で一名「掛ヶの城」と称しているとして、地元では城主を池田孫三郎、尼子氏に従ったのち高田城主三浦家の家臣に礫とされたと伝えているといい、平坦地二段と堀切があり、北隅に小段がある頂上（東西五〇歩、南北四〇歩）の平坦地には川石や土器、瓦の破片があり、その両端に二段ずつの段があると記す。

文献

「美作鏡」、「新庄村史」前編、「日本城郭全集」補遺、「改訂岡山県遺跡地図」新庄34

立地

新庄川右岸、戸島川左岸にある。新庄小学校の約三〇〇m西にあり、東から延伸してくる尾根と耕地部が接する平地部分に所在する。標高約四八〇mで、水田地帯である。

縄張

未詳。

城史

元禄二年（一六八九）の「新庄村古事書上ヶ御帳」は「沢の城」として、平地に土塁が少しあり、



沢城

四方は古くは大沢とみえ今は城の内外とも田となっている、城主は吉田という人物が居たと記す。「作陽誌」は「沢城」として、真庭郡新庄村にあり、昔は大沢で囲まれていたが今は畝となり、吉田という人物が住むとする。『新庄村史』によれば、地元では最後の城主を吉田修理と伝え、大正四年（一九一五）の耕地整理完了で形跡を留めないが、面積一段二畝二三歩、城跡は扇面形で、現在も水田下に石畳ありとの聞き取りを記す。『日本城郭全集』は「沢城」とする。

文献

「作陽誌」、「真庭郡誌」、「新庄村史」前編、『日本城郭全集』補遺、『改訂岡山県遺跡地図』新庄97

苦田郡

〔津山市〕
〔鏡野町〕

加茂町
富村
奥津町
上斎原村
鏡野町

〔津山市〕加茂町

1 殿ノ山との

所在地 津山市加茂町宇野

立地 宇野地区古屋集落と岡本集落との間に広がる標高約三四〇mの緩斜面の山林で、周囲には「屋舗」「古屋敷」などの小字名が残る。

縄張 未詳。

城史 「東作誌」は、東北条郡宇野村の「殿ノ山」として、上り約一町で頂上に高さ約八間の所があり、昔の高貴な人の居所というと記す。

文献 「東作誌」

2 比丘尼屋敷びくに

所在地 津山市加茂町物見

立地 未詳。

縄張 未詳。

城史 「東作誌」は、東北条郡物見村の「比丘尼屋敷」として、舞見山の内にあり、旧跡は約二町四方で由来は不詳と記す。

文献 「東作誌」

3 高山城・矢筈山城こうやま やはずやま

所在地 津山市加茂町山下・知和

岡山県指定史跡

立地

物見川左岸にある標高七五六mの矢筈山一帯に位置する。美作河井駅から南に約八〇〇mにあり、山頂からは阿波・加茂方面を眺望できる。県道六号「津山・智頭・八頭」線沿いにある千磐神社の裏手。もしくはJR美作河井駅裏手から。

縄張

城域は矢筈山山上の「東城」と西側の曲輪群「西城」に分けられる。両者の間をつなぐ曲輪や防塁型ラインはなく、二つの山城が並列した配置となっている。東城は矢筈山山頂を中心に尾根に曲輪を配した山城となっている。山頂は岩盤であり削平もそれほどではない。北西の尾根や西側の尾根上に配された曲輪の先端部には土塁が堡塁状に配された。但し、土塁に付随して虎口は設定されていない。一方、西城は東側に三重堀切を入れて西側の稜線に曲輪を配置した縄張りとなっている。東側の三段に分かれた曲輪が主郭とみられる。主郭をはじめ主要部には石列や石垣の使用が確認される。中央部に広い空間があり、居住空間が設定されていた可能性が考えられる。中央西寄りには岩盤を援用した土塁と堀切が一体になった防禦ラインが設定された。その西側には地形に沿って曲輪群が続く。

高山城の縄張りからは、用法をみる限りでは西城の方が石垣を使用するなど技法的に後発の



高山城・矢筈山城

城史

可能性が見て取れる。最終段階では、岩盤の多い東城を詰城とし、西城を本城として使い分けていたものと推察される。当初は毛利氏が設定した番城として矢筈山頂を中心に複数の在番衆が駐留するプランであったのが、天正期に草薙氏が次第に加茂川流域に影響を延ばし村落との結びつきを深めるとともに、西側に居住空間などを設定して機能の充実を図ったものと考えられる。複数の城域が並列するあり方は、広域大名権力の拠点城郭にみられる特徴を示す。その一方で、西城に偏重した縄張り技術はその後の土着化を進める草薙氏の行動をうかがわせる。この二つの特徴を合わせ持つ高山城は戦国後期の毛利氏の美作進出とそれに応じた国衆・土豪層の台頭を検証する「物的」史料と評価される。

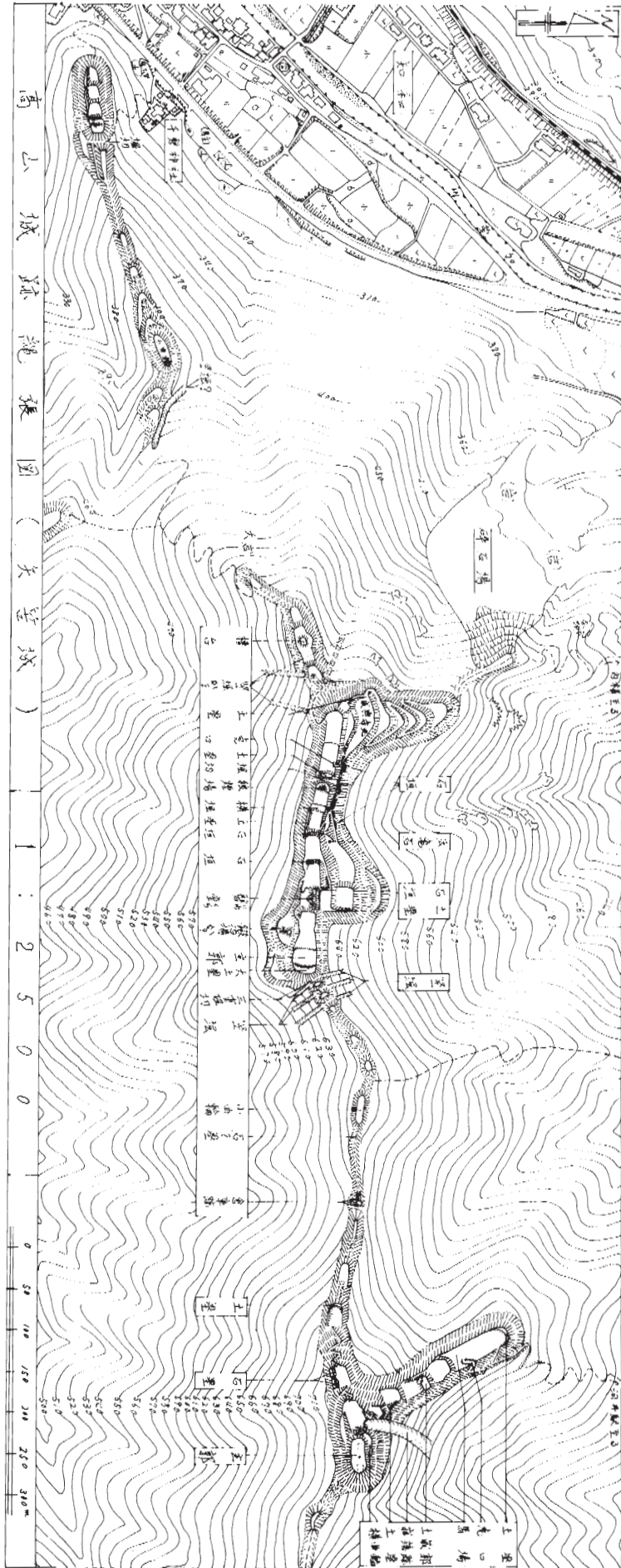
「古城之覚」は苫北郡山下村の「高山之（城）」として、城主を草刈三郎左衛門景綱とし、別に東北条郡知和村の「高山」として正保書上五四城の一で城主不詳とする。「美作鬢鏡」は山下村と知和村の高山城をそれぞれ掲げ、山下村の城主を「草薙三郎左衛門尉」とのみ記し、「美作鏡」は両城を同一として城主を「草刈三郎左衛門尉景継」とする。「東作誌」は、高山、一名矢筈山とし、城主は草刈三郎左衛門景継・同対馬守重継で、天文年中（一五三二～一五五四）の築城で天正一四年（一五八六）退城と「草刈家記」にみえるとし、山へは大手の山下村まで二〇余町、搦手の知和村まで三〇町、本丸（東西一五間、南北六間）、二丸（東西二二間、南北一〇間）、三丸（東西一三間、南北六間）の三段、大手となる山の先で矢筈の下約五〇間に、米蔵があったという土蔵郭（東西六間、南北三間）、郭の下に馬場（東西四三間、南北六間）、別に搦手となる山の後に、成興寺丸（東西三〇間、南北八間）、成興寺の上の段に腰郭（東西八〇間、南北四間）があり中程の北に城門の跡、腰郭の上に小郭（東西一〇間、南北四間）がありここから登って少し下

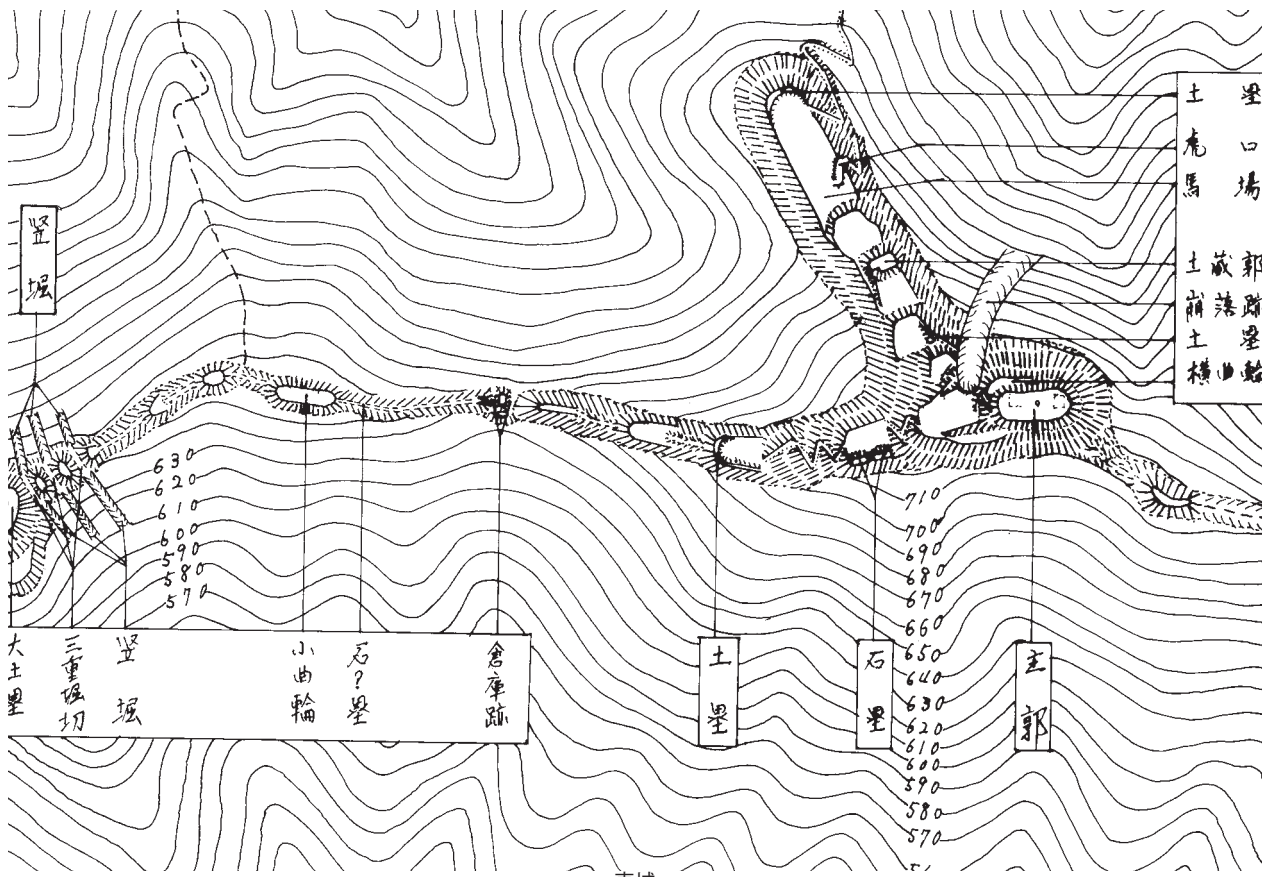
文献

がった所に一段（南北六間、東西三間）あり、南に降ると知和村丸鞍、北に下る道には「アベノ門」という城門の跡があるなどと記す。天保国絵図に「高山古城跡」とある。なお『日本城郭全集』は「高山城」とする。

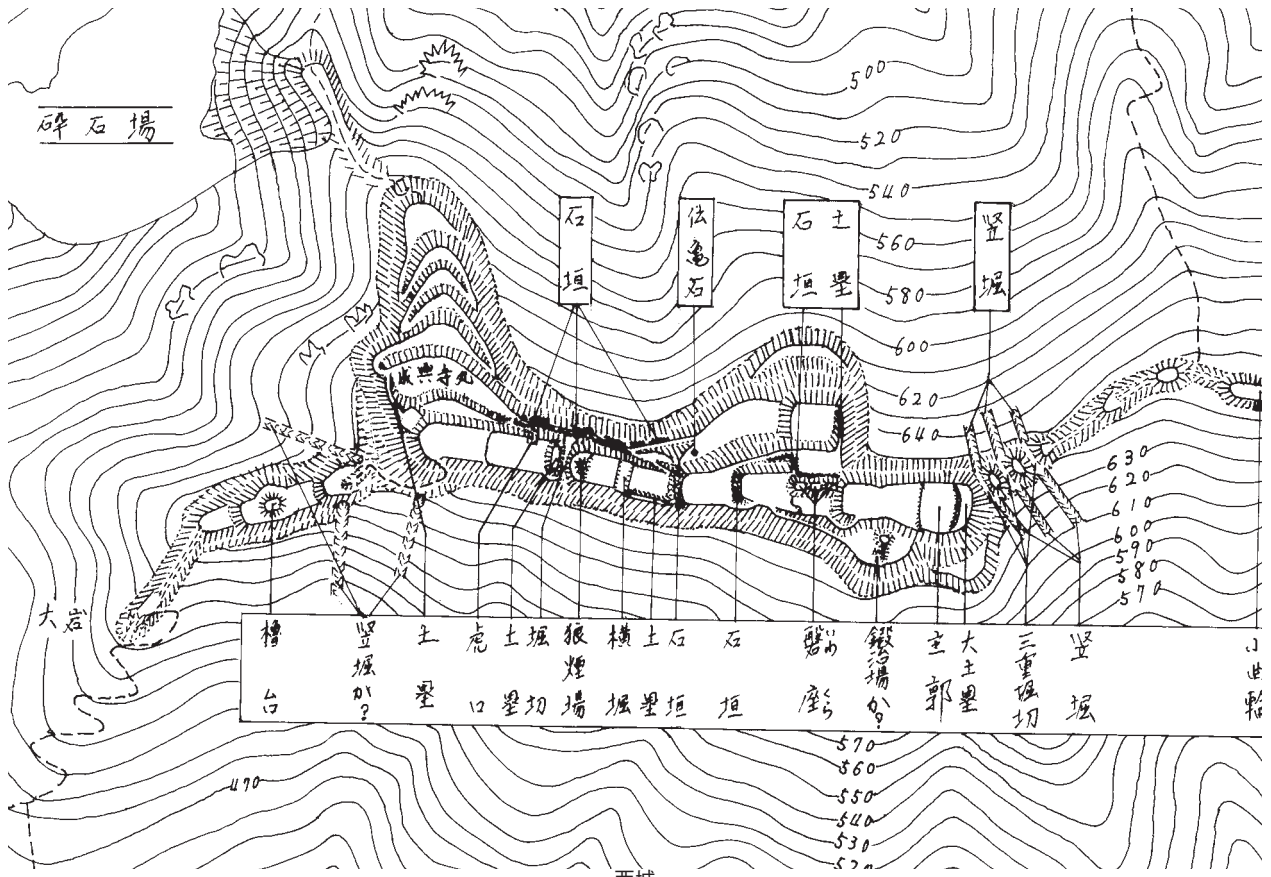
同時代史料にほとんど直接には現れないが、草薙衡（平）継・景継・重継三代の居城として推移したとされる（「草薙氏覚書」など）。天正六年（一五七八）には山中幸盛が「高山城」に押し寄せた際、寺坂桃千代が初陣し、幸盛配下の高村氏を討ち取ったとされる（寺坂三郎右衛門家伝覚）。同一一年正月、羽柴秀吉は蜂須賀正勝・黒田孝高に対して「草薙城」を入念に請け取るべきと指示している（小早川家文書）。しかし重継が退去しなかったためか、八月には宇喜多方の河端勢が「石米・佐良山両城」まで、因幡国からも荒木重堅が出勢し、草薙勢と交戦している（「閩閩録」）。その後、同一二年になって「高山の城」を明け退き、安芸国へと下向したとされる（「家伝鏡」、毛利家文書）。

『武家聞伝記』、「美作鬢鏡」、「天正年中美作国古城合戦記」、「東作誌」、「美作鏡」、「美作略史」、「苫田郡誌」、「岡山県通史」 苫田13、『美作古城史』、『日本城郭全集』 苫田郡1、『日本城郭大系』736、『加茂町史』、『岡山県文化財総合調査報告』21、『歴史散歩岡山の城』、『改訂岡山県遺跡地図』 加茂126、池田二〇〇四、『岡山の山城を歩く』66、山形二〇〇七、『津山市の文化財』、『矢筈山』創刊号／続刊





東城



西城

4

内構うちがまえ

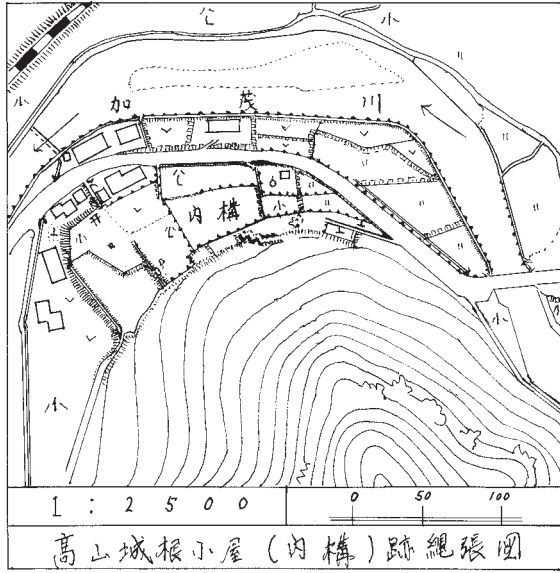
所在地 津山市加茂町知和

立地

知和地区大ヶ原集落を流れる加茂川左岸にあり、青坂橋の南西尾根突端部に所在する。標高約三〇〇mの緩斜面上にあり、南に高山城が位置する。

縄張

高山城の西城部分の麓にあり、居館跡とされる。現地は後世の改変が激しく現状では評価は難しい状況にある。



城史

『苦田郡誌』は上加茂村知和の「内構」として、高山城（津山市加茂町山下・知和）の西にあり、広さ一五〇〇余坪、口碑では草苅氏が高山城へ在城当時は城下頗る繁昌したといひ、今なお地中より刀剣や瓦片を発掘することありなどとす。

文献

『苦田郡誌』

5 杉山城・青柳城すぎやま あおやぎ

所在地 津山市加茂町青柳

立地

未詳。地元では青柳城とも呼んでいる。未詳。

縄張

城史

正保書上五四城の一で、「古城之覚」は東北条郡青柳村の「杉山」として、城主不明とし、「美作鏡」は杉山城主を「河端又次郎」とする。『加茂町史』は杉山備中守が築いたと記す。

文献

「武家聞伝記」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「岡山県通史」苦田14、「美作古城史」、「加茂町史」

6 室尾城・石米城むろお こくまい

所在地 津山市加茂町青柳

立地

加茂川と青柳川の合流付近（北東）に位置する標高約四〇八mの独立峰。白金山に連なる。知和駅から西約八〇〇mにある。

縄張

加茂川沿い、室尾地区に近接して築かれた山城。高山城主草苅氏の出城として機能したとみられる。山頂に主郭を構え、周囲に腰曲輪を配して主郭部を形成する。西側に土塁囲みの堡壘状の墨線を持つ曲輪がみられる。



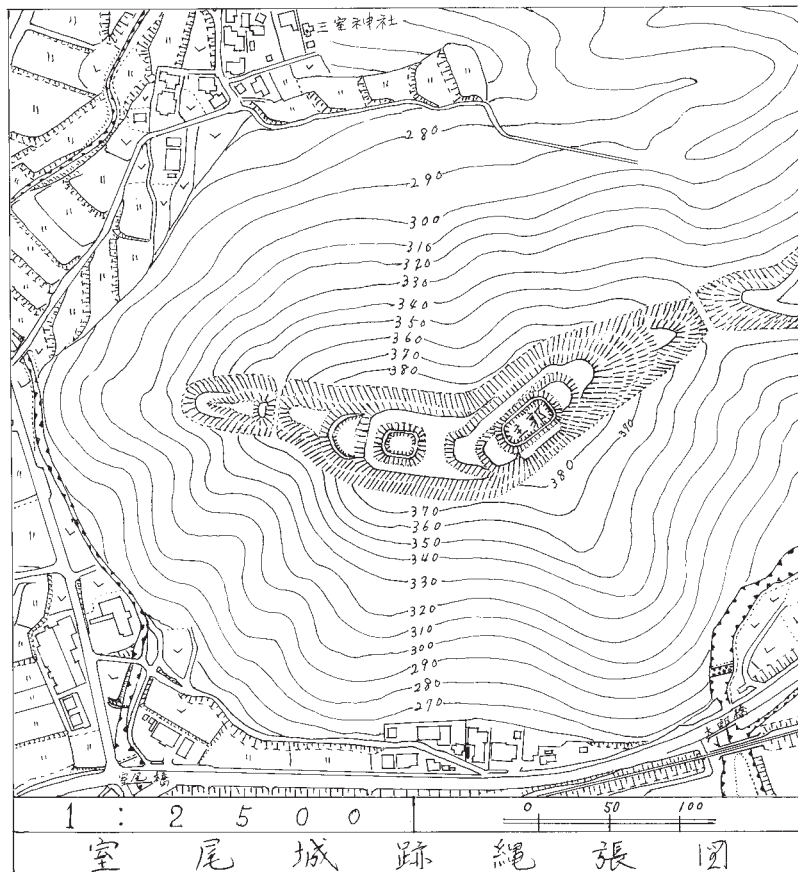
室尾城・石米城

「古城之覚」は苦北郡室尾村の「室尾之(城)」として、城主を川端左近とし、天正年中の正月二四日、愛宕精進のため肉食を断った「近習の児姓」に、左近が鹿肉を無理強いたところ眉間を斬りつけられ、疵が悪化した左近は翌月の同じ日に二五歳で死去したとする。

「美作鬢鏡」は室尾城主を「川端左近太夫」、「東作誌」は、城主は川端丹後守で天正年中に退城、山の高さ三町、上ノ段(四間四面)、西の方に二ノ段(同上)、さらに西に三ノ段(長さ三〇間)、その他にも多くの郭段があり、大手は東南と記す。天保国絵図に「古城跡」としてみえる。『加茂町史』は室尾城の別名を石米山城とする。

天正十一年(一五八三)八月六日「石米・佐良山両城」へ宇喜多勢が兵を籠め、また因幡口へ荒木重堅が出勢してきた。対して高山城に籠城していた草薙勢は八日に重堅と交戦、一八日に「河端居城石米」へ出勢し山下で合戦、また同日、「佐良山口」でも合戦しいずれも多くの首級を挙げていた(「関関録」)。室尾城の南に隣接する小淵村に「石米」の地名がある(「東作誌」)ことから、同時代史料にみえる石米城とは当城のことと考えられる。

「武家聞伝記」、「美作鬢鏡」、「天正年中美作国古城合戦記」、「東作誌」、「美作鏡」、「苦田郡誌」、「岡山県通史」苦田12、「美作古城史」、「日本城郭大系」735、「加茂町史」、「改訂岡山県遺跡地図」加茂87



7 佐良山城

所在地 津山市加茂町公郷

立地

加茂川の左岸にあり、公郷仙から西に延伸する尾根の突端に位置する。標高は約二七〇mで、美作加茂駅の南東約一kmにある。

縄張

低位丘陵に築かれた丘城。尾根に複数の削平地が連なるが、現在は稲荷祠の敷地や果樹園などで現況は大きく改変されている。尾根に沿って曲輪を並べたものと推察できるが、詳細な部分の評価は困難である。

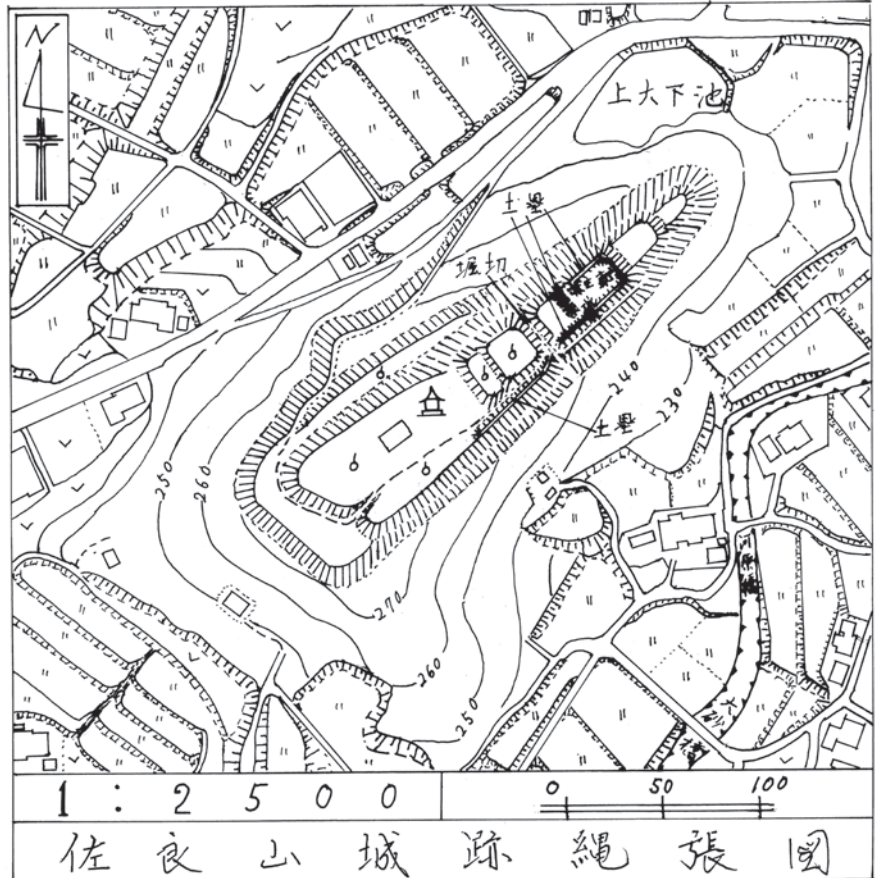
城史

『東作誌』は東北条郡公郷上村の「佐良山城」として、城主は川端丹後守、山へは西と東からは一町、北と南からは四〇間、上段（二〇間四方）は堀を廻らせ幅二間の堀切あり、城主の居館があったという二の段（南北四〇間、東西一五間）、二の段と堀切を隔てて西に稲荷の祠を勧請する約二町の平地があり、山名は皿を伏せたようであることによると記す。『美作古城史』には、山上は開拓され人家がある、『加茂町史』は、現地は果樹園の開拓でその姿を留めず上段の位置に稲荷が移されていると記す。

天正一一年（一五八三）八月六日「石米・佐良山両城」へ宇喜多勢が兵を籠め、また因幡口へ荒木重堅が出勢してきた。対して高山城に籠城していた草薙勢は八日に重堅と交戦、一八日に「河端居城石米」へ出勢し山下で合戦、また同日、「佐良山口」でも合戦しい



佐良山城



備考

ずれも多くの首級を挙げている（「閩閩録」）。

城の位置について『改訂岡山県遺跡地図』の表記は全く異なる。

文献

「東作誌」、『美作略史』、『苦田郡誌』、『美作古城史』、『日本城郭全集』補遺、『日本城郭大系』723、『加茂町史』、『改訂岡山県遺跡地図』加茂116

8 松ヶ嶋城

所在地 津山市加茂町下津川

立地

公郷仙から南西に延伸する尾根の突端部分に位置し、標高は二八五m。城跡と加茂川との間を因美線が通る。松ヶ嶋に加茂方面から津山方面への古道が通っていた。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は東北条郡下津川村の「松ヶ嶋古城」として、笠松城の砦で、山へは約三町、本丸（長さ二〇間、横一五間）、出丸（長さ一八間、横一五間）、城は南向きで、幅二間の堀切が三ヶ所あり、同地は敵を待ち受ける要所から待ヶ嶋から書き改めた、麓の地名は城平、嶋は日照りの時雨乞いをする」と記す。



松ヶ嶋城

文献

「東作誌」、『日本城郭大系』734、『加茂町史』、『改訂岡山県遺跡地図』加茂168

9 笠松城

所在地 津山市加茂町下津川

立地

公郷仙から南に延伸する丘陵のうち、標高約五三〇mのピーク付近に位置する。奥津川右岸にあり、対岸には奥津川集落が広がる。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は東北条郡下津川村の「笠松城」として、城主は上原修理大夫高経、山へは一二、三町、城は南西向きで、本城（七間四方）、本城の東北に二丸（七間四方）、三郎郭（三〇間四方、馬場ともいう）、本城の南東に松之段（長さ七間、幅三間）、土塁は三ヶ所、西北に堀切あり、山中には岩が多い、高経は草刈景継と争い永禄七年（一五六四）七月一六日に討死し落城と記す。



笠松城

文献

「東作誌」、『吾田郡誌』、『日本城郭全集』補遺、『日本城郭大系』718、『加茂町史』、『改訂岡山県遺跡地図』加茂170

10 丹後屋敷

所在地 津山市加茂町下津川

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は東北条郡下津川村の「丹後屋敷」として、川端丹後守の屋敷跡といい、今は田の地名となると記す。また「村老物語」（『美作古城史』所収）には昔、「かまへ大町」の地に室尾山城主の川端丹後が住むと伝えると記す。

文献

「東作誌」、『美作古城史』、『加茂町史』

11 大島屋敷

おおしま

所在地 津山市加茂町下津川

立地

未詳。

未詳。

城史

「東作誌」は東北条郡下津川村の「大島屋敷」として、丹後屋敷の下にあると記す。

文献

「東作誌」

12 梶間山

かじま

所在地 津山市加茂町成安

立地

未詳。

縄張

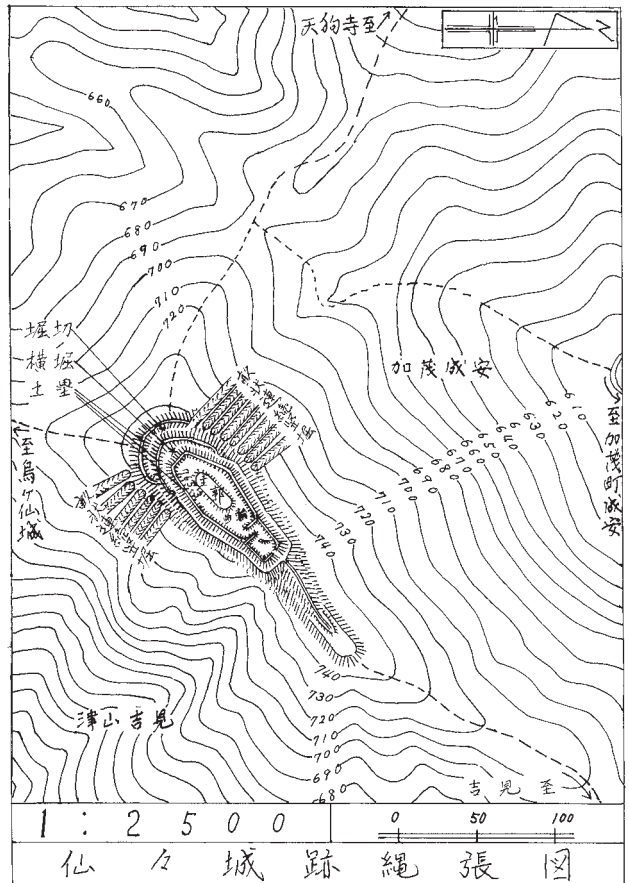
岩尾山城の北方に位置する山城。加茂と大篠をつなぐ峠道を牽制する位置に築かれた。山頂に主郭を構える。南西側に向かって畝状空堀群による強力な防禦ラインを築く。一方、主郭の周囲には直線的な土塁が廻る。今後の精査により、詳細な縄張りの把握が期待される。



梶間山

城史

「東作誌」は東北条郡下原村の「梶間山」として、「天狗岩」と鳥ヶ仙の間の平山で、下原村から約一五町、南の畝は八代・吉見両村に、西の端は大篠村に境し、また寺院の常法坊があり、退転の年代は未詳と記す。



備考

東作誌では城郭としての記載はないが、山形省吾氏は踏査によりその頂部に城郭遺構を見出し、仙々城に比定している。

文献

「東作誌」

13 袴腰城

はかまがこし

所在地 津山市加茂町行重・上横野

立地

未詳。

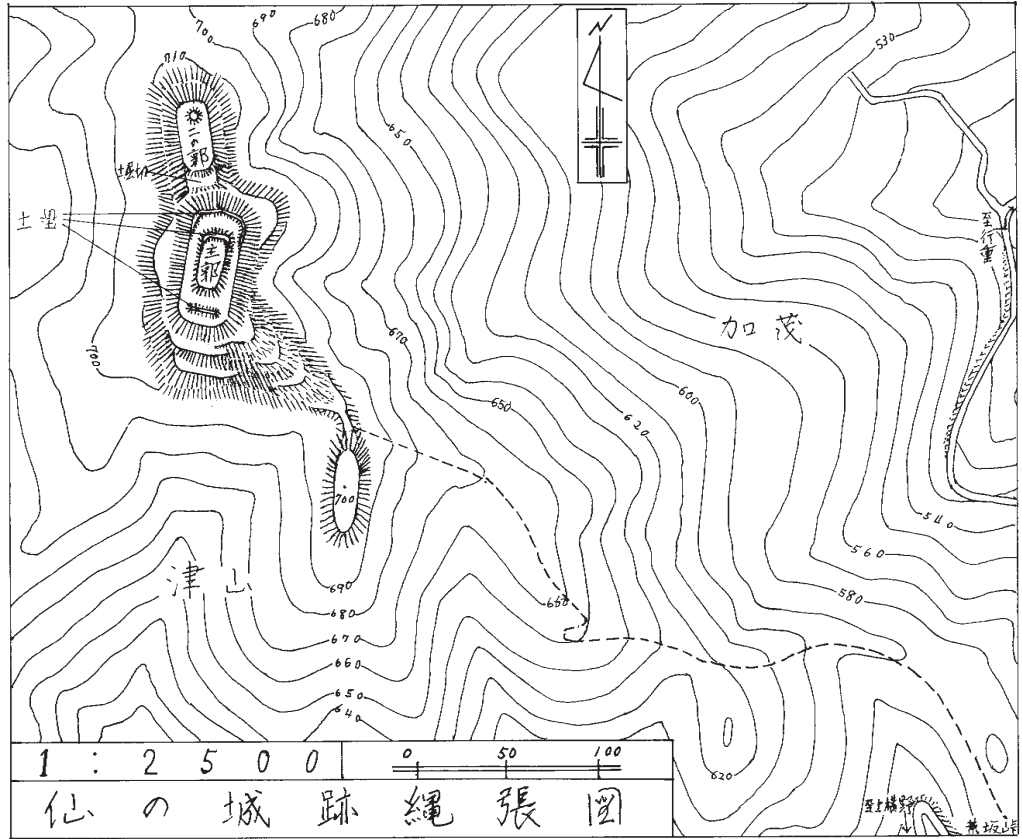
縄張

未詳。

城史

「東作誌」は東北条郡行重村の古城「袴腰」として、行重村と上横野村の境にある野山で、幅四、五間、長さ三〇間の馬場跡、その下に南北とも幅二、三間の帯郭二条などあり、城主は不詳、「古城記」に行

いて指示しているが、同年一〇月には「祝山・仙々番衆」の齋藤・塩屋家中から宇喜多氏への内応者が城から退出する事件が起こっている（『藩中諸家古文書纂』、『関関録』）。以上、同時代史料に見える「仙」「仙々城」とは当城のことと考えられる。



17日詰城・百々城

所在地 津山市加茂町百々・中原

立地

百々地区の欠場川を挟んで南に位置する標高三五九mの独立丘陵、日詰山山頂にある。高山城を始め、加茂地区の中心部を眺望することができる。

縄張

加茂地域の西方に位置する山城。日詰山山頂の主郭部から東側に曲輪を連ねる縄張りとなっている。先端部では曲輪の縁辺に土塁が確認される。なお、現在、社地と公園整備のために一部改変を受けている。加茂地域に割拠した土豪層の持城と考えられる。また「東作誌」の記述を踏まえるならば、草薙氏がそうした持城を接收して領内支配の番城に整備したものと位置付けられる。

城史

「古城之覚」は苫北郡百々村の「百々之(城)」として、城主は「草刈一族」とする。元禄一六年(二七〇三)一〇月の小西孫左衛門書状(『東作誌』所収)には、草刈景継の出城で、家臣の黒岩土佐守・草刈左近・中西四郎左衛門・真野市兵衛尉の四人が廻番を勤めたところがある。「東作誌」は、「城山」として、古くは「落合城」といい、山へは五町、本丸(縦七間、横四間)、本丸の西に二丸(四間四方)同じく東に小郭(二間四方)、その下に小段があり、天正年中に落城と記す。また中原村条に「日詰」の地名がみえる。『日本城郭全集』は「百々城」とする。

花房職之は草薙氏の出城「いわう山」「ますかた」「としもと」の三ヶ城を攻め取り、「ひつめの城」(日詰城、津山市加茂町百々・中原)の相城として加番の兵を籠めたとある(『花房家記事』)。

備考

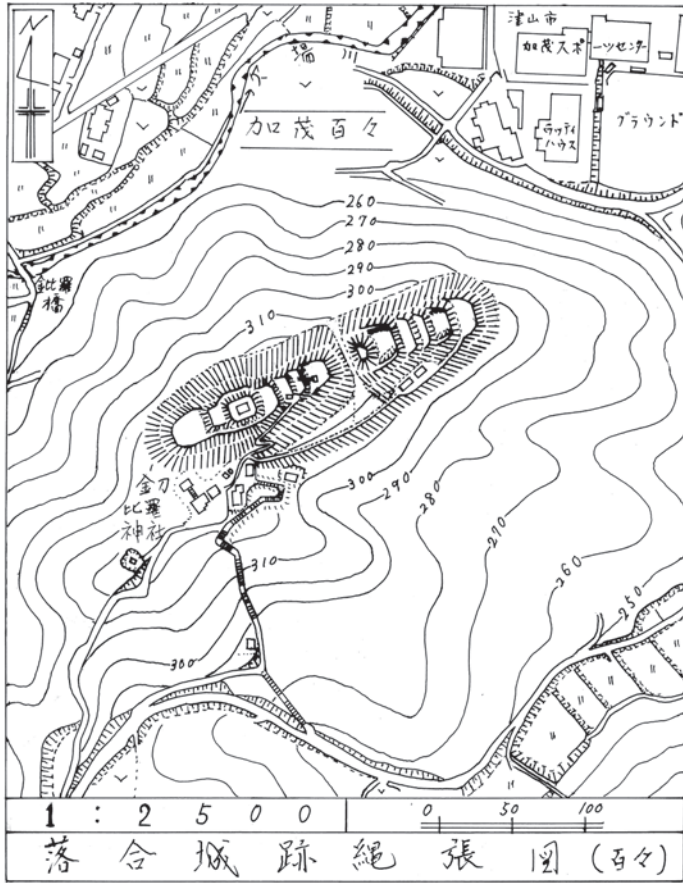
落合城という城名は因幡国の落谷城（富貴谷城、鳥取県八頭郡智頭町）の読み誤りと考えられる。

文献

「花房家記事」、「武家聞伝記」、「美作鬢鏡」、「東作誌」、「美作鏡」、「苫田郡誌」、「岡山県通史」
苫田 36、「日本城郭全集」補遺、
『日本城郭大系』13・716・731、「加茂町史」、「改訂岡山県遺跡地図」
加茂 103



日詰城・百々城



〔鏡野町〕富村

18

城山

所在地 鏡野町富西谷

立地

黒郷川右岸、富西谷地区鍛冶屋集落の西にあり、黒郷川沿いの畑地の中に位置する。南側の山上にびくにヶ城がある。

縄張

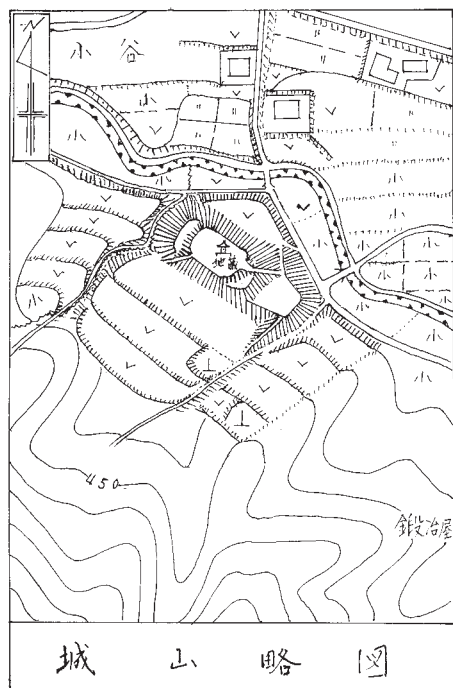
傾斜地の独立丘を削平して築かれた館城。主郭と小曲輪から構成される。村落単位で割拠した土豪層の館城と考えられる。

城史

『富村史』に、字柿原にあり、土壘を盛り上げて祠を祀っており、尼子氏の武将長田九郎左衛門の住居跡と伝えられていると記す。

文献

『富村史』



城山

19 殿屋敷

所在地 鏡野町富西谷

立地

富地区の中心部、旧森江家住宅から南西に約二〇〇mに位置する。

縄張

未詳。

城史

『富村史』に字原田、富診療所の南側にあり、詳細不詳と記す。

文献

『富村史』

20 びくにヶ城

所在地 鏡野町富西谷

立地

黒郷川右岸で、目木川右岸にもあたる。標高約五八〇mの山頂一帯に位置し、富西谷地区中心部を北に一望する。

縄張

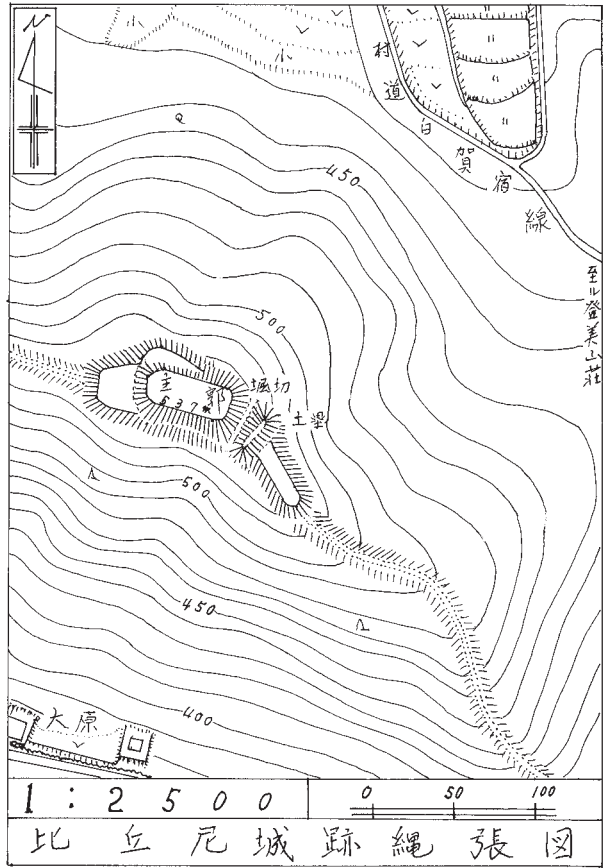
集落の背後に築かれた山城。主郭と北側・西側に小曲輪を持つ。東側には堀切を配して遮断する。その先にも曲輪が見られる。全体をみると、小規模で単郭に近い縄張りとして評価できる。この地域に拠った土豪層の持城と考えられる。



びくにヶ城



殿屋敷



城 史

『富村郷土史』には、村内の押坂岨西南の山嶺にあり、この時代の伝説を留めると記す。

文 献

『富村郷土史』『改訂岡山県遺跡地図』富46

21 三塚の壇・岡の岨城 (仮称)

所在地 鏡野町富東谷

鏡野町指定史跡

立 地

扇山から南に延伸する標高約五三〇mの尾根先端に位置する。白賀川の左岸にあたり、富地区中心部が南に広がる。

縄 張

白賀川左岸に舌状の丘陵に築かれた城郭。北東の背後に堀切を入れて先端を城域として整備する。頂部に主郭を構え稜線に向けて下位曲輪を構える。集落に近いことや城域の広がりから、この地域に割

城 史

扱した土豪層の持城と考えられる。なお、図面からは東側に五本の畝状空堀群が確認される。また南側は尾根筋そのものを破壊するように空堀が一本配されている。こうした用法は他に類例がない。城郭関連遺構とするとこれらの用法は単発的に創出されたものと思われる。今後の精査が求められる。



三塚の壇・岡の岨城 (仮称)

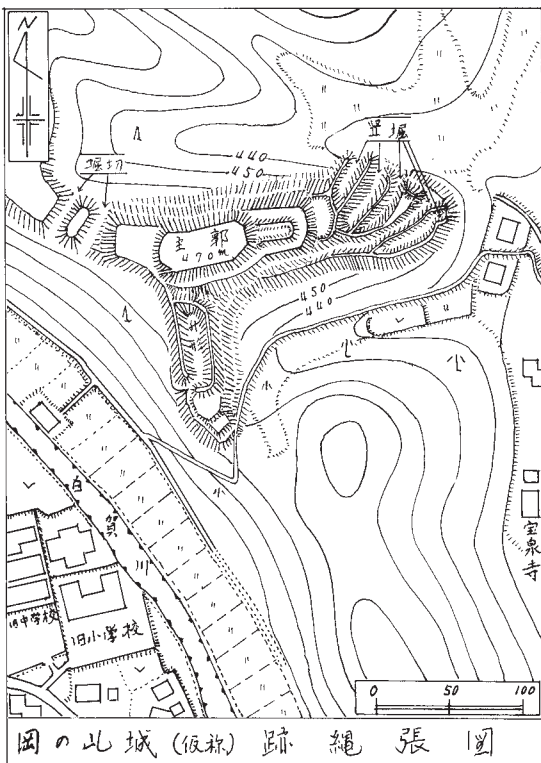
備 考

『作陽誌』は大庭郡富西谷村の同地は布施神社の旧社地の所在地であると記す。

山形省吾氏が平成一六年(二〇〇四)に城郭跡を見出し、地元により「岡の岨城」と命名されている。

文 献

『作陽誌』、『改訂岡山県遺跡地図』富36、山形二〇〇七、『鏡野町の文化財』



〔鏡野町〕 奥津町

22 西浦城・井坂城

所在地 鏡野町井坂・養野

立地

吉井川と養野川が合流する地点の井坂地区の東に位置する。標高四一四mのピーク上に遺構が連なる。

縄張

井坂集落の背後に築かれた山城。北側から三本の堀切を入れて城域を分ける。北側の堀切に対しては土塁囲みの曲輪を配して橋頭堡の役割を果たす。そして南側の二つの堀切に挟まれた部分に山頂があり主郭となる。さらに堀切より南側の尾根筋に沿って曲輪が連なり第二郭を構える。稜線に曲輪を連ねる構造であるが、堀切により主郭の求心性を高めようとする意図が確認できる。



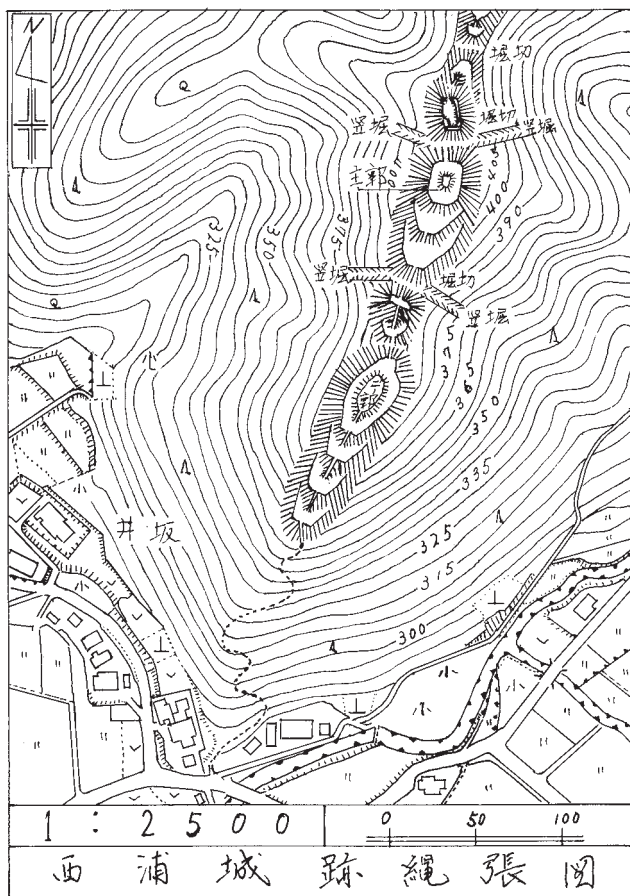
西浦城・井坂城

城史

「古城之覚」は「西浦之（城）」として、城主を「大原主計頭相共」とする。「作陽誌」は「井坂堡」とし、山の高さ一八〇間で城主不詳、伝えでは西屋城と争ったといい、井坂山は北が羽出村に接すると記す。「奥津町史」は、周辺に「家の上」「皆畑平」「竹の花」の地名

文献

「武家聞伝記」、「作陽誌」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「美作古城記」、「苦田郡誌」、「岡山県通史」 苦田25・33、「美作古城史」、「日本城郭大系」728、「改訂岡山県遺跡地図」奥津106、「奥津町史」通史編上巻



23 二ツ山城・二山城

所在地 鏡野町養野

立地

養野川左岸にあり、東養野集落の南、標高約三七〇mの尾根の先端に位置する。西浦城の南東約七〇〇mにある。

縄張

養野集落の中の丘陵に位置する。丘陵の頂部を主郭として複数の削平地が確認される。里山でもあり後世の改変の可能性が高く遺構の

城史

評価は極めて難しい。

「古城之覚」は苦西郡養野村の「式ツ山」として、城主を湯野藤右衛門尉とする。

宇喜多氏の家臣牧左馬助は、毛利氏の陣へ夜討ちした際、「余野二ツ山」の城主湯殿右衛門督と切り合い負傷、互いに退いたという（「牧左馬助覚書」）。

なお真庭市余野下にも二ツ山城があり、養野と余野という類似した地名による混乱がみられる。

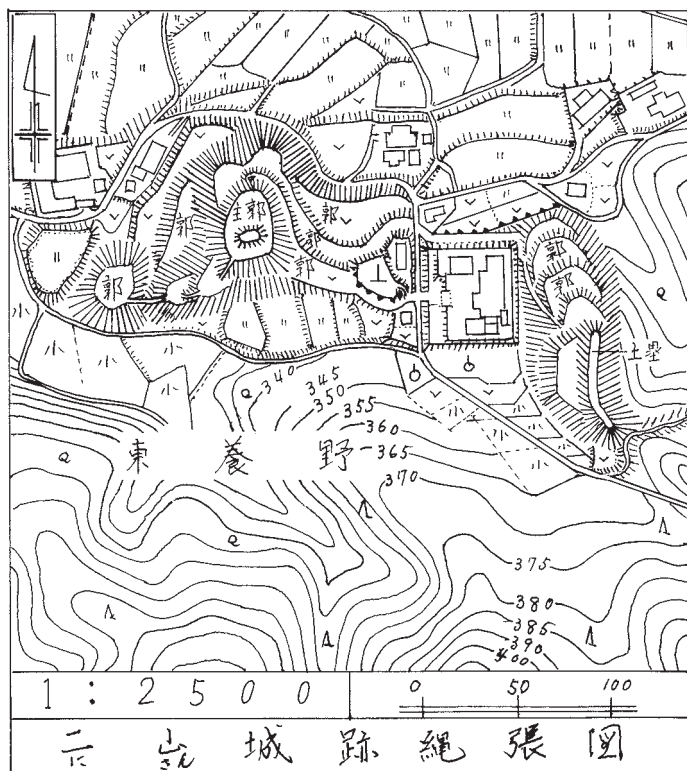


二ツ山城・二山城

備考

文献

「武家聞伝記」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、
「苦田郡誌」、「岡山県通史」
苦田32、「改訂岡山県遺跡地図」奥津108



24 寄山城

所在地 鏡野町養野

立地

養野川左岸にあり、東養野集落の北、中養野集落の南、標高約三六〇mの尾根の突端に位置する。

縄張

平坦地がいくつか確認されるが、城郭遺構かどうか判断は難しい。明確な遺構はほとんどみられない。

城史

「美作鏡」は井坂村の「寄山城」として、城主を河端周防・丹後とする。「改訂岡山県遺跡地図」は、西屋城の見張り場と伝えられ、一部が公園として整備され、看板も設置されているとする。

文献

「美作鏡」、「苦田郡誌」、「改訂岡山県遺跡地図」奥津109



寄山城



25 小丸山城（仮称）

所在地 鏡野町杉

立地

女原地区の対岸、吉井川左岸の杉地区にあり、上杉集落の東、標高約三二〇mの尾根突端に位置する。

縄張

吉井川に面した尾根上に築かれた小規模な丘城。『改訂岡山県遺跡地図』は、主郭は南北一〇m、東西八m程度で山頂を占める、山頂の周囲に半円形に腰曲輪が配される、主郭に五輪塔が一部を欠いて遺存しているとす。また、



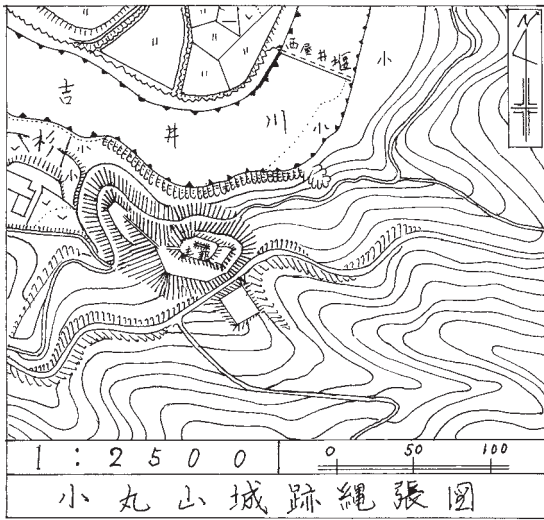
小丸山城

城史

『奥津町史』に、最近確認された山城とある。

文献

『改訂岡山県遺跡地図』奥津137、『奥津町史』通史編上巻



26 天狗山城（仮称）

所在地 鏡野町杉

立地

吉井川が箱地区で大きく湾曲する左岸にある。標高三五三mの尾根突端上に位置し、杉地区の石原集落と下杉集落とを画する。

縄張

『奥津町史』に調査図が掲載される。天狗山に築かれた山城。東西の二つのピークにそれぞれ主郭と腰曲輪が配する。中央には堀切がみられる。こうした曲輪配置から、村落規模の土豪層が横並びに山上に立て籠った様相が考えられる。

城史

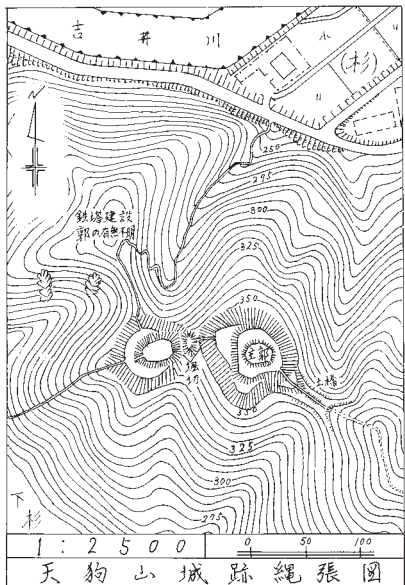
『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』が久田地区の中世山城として初めて紹介し、『奥津町史』にも最近確認された山城で、文献上にも、伝承にもない城と記す。ちなみに「作陽誌」は、苫西郡杉村の上房の地に「砲場」があり、伝えでは西屋城と争った際の遺跡というと記す。

文献

『改訂岡山県遺跡地図』奥津153、『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』170、『奥津町史』通史編上巻



天狗山城



27 齋藤屋敷（仮称）

所在地 鏡野町西屋

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「作陽誌」は「齋藤別墅」として苦西郡西屋村にありとする。別墅とは下屋敷、別荘の意。「奥津町史」は地理的な観点から西屋城の西南麓、西屋川と西谷川に挟まれ「屋敷・古邸」の地名が残る平坦地に比定している。

文献

「作陽誌」、『奥津町史』通史編上巻



齋藤屋敷

28 侍屋敷（仮称）

所在地 鏡野町西屋

立地

吉井川右岸、吉井川と西屋川の合流地点にあたり、国道一七九号の南一帯に位置する。

縄張

未詳。

城史

「作陽誌」は、苦西郡西屋村の前田の地に「西屋士人居宅跡」が四十八あり、現在は開墾されているとする。

文献

「作陽誌」、『奥津町史』通史編上巻

29 西屋城

所在地 鏡野町西屋・女原

立地

吉井川右岸にあり、女原地区の西側、標高五一四mの独立峰山頂付近に位置する。北東南の三方の集落・耕地を眺望することができる。

縄張

西屋地区の背後に位置する山城。土塁で囲まれた主郭を中心に、南北に曲輪が連なり主郭部を構成する。主郭の塁線には土塁が配され、複数の曲輪を一体的に防禦する役割を果たす。要所に空堀・堀切を構えることで主郭への求心性を高めるプランとなっている。東側にも別郭となる曲輪群が確認される。東側は、馬蹄状地形を経てピークに曲輪群が確認される。それらの曲輪群は麓の西屋地区から登りつく足場を城域に取り込んだものと評価される。

城史

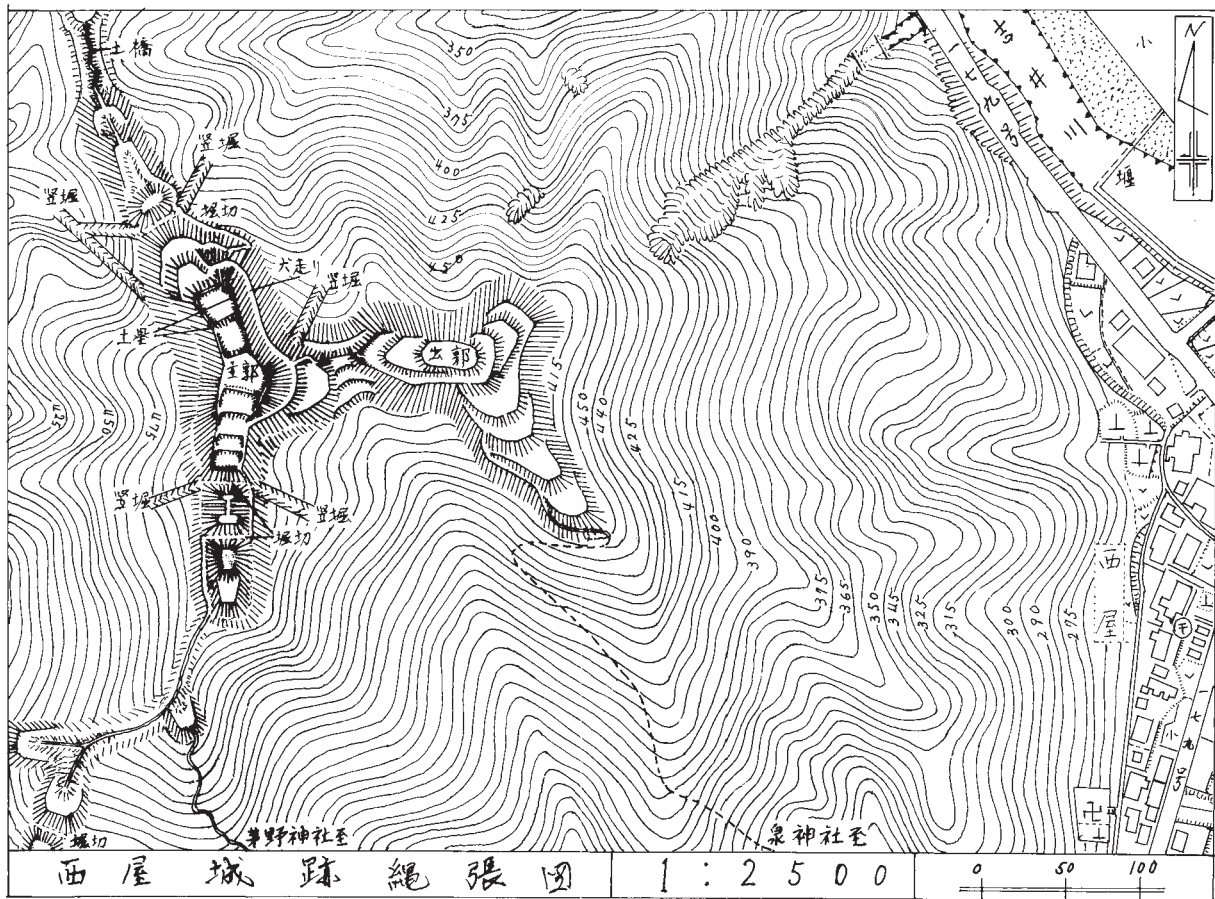
正保書上五四城の一で、「古城之覚」は苦西郡西屋村の「西屋」として、城主を河端丹後とする。「作陽誌」は高さ二二三〇間、天正の初め宇喜多直家の将齋藤玄蕃助近実が居城、吉川・小早川氏が城を囲んだが積雪のため開陣、翌春再び城を囲み、玄蕃は逃れ落城したと記す。「美作鏡」は城主について河端丹後に続き、後苔口宗十郎・齋藤玄蕃とする。天保国絵図に「古城跡」とある。『日本城郭全集』は「西屋城」とし、本丸、二の丸、三の丸の区画、堀切、堀、井戸などの跡が明確に残るとする。

文献

「武家聞伝記」、「作陽誌」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「美作古城記」、「美作略史」、「苦田郡誌」、「岡山県通史」苦田31、「美作古城史」、「日本城郭全集」苦田郡2、「日本城郭大系」729、「改訂岡山県遺跡地図」奥津135、「奥津町史」通史編上巻、「鏡野町の文化財」



西屋城



30 河端構・構ノ城 (河内構遺跡)

所在地 鏡野町河内

立地

河内地区から奥津湖に接岸する部分に位置する。すぐ東にはかつて高倉集落があり、南東約二〇〇mの位置には河内城がある。

縄張

『奥津町史』に概要がまとめられている。河内城の麓に位置する館城。吉井川に近接して三方に堀を構える。『改訂岡山県遺跡地図』は「吉井川東岸の段丘面。川よりも一段高く、広い水田面で東西一二〇m、南北一三〇mを測る」とする。

城史

『作陽誌』は「河端構」として、苫西郡河内村にあり、河端清次の屋敷跡と記す。「美作鏡」は河内村の「構ノ城」とし、城主を「川端清次」とする。『改訂岡山県遺跡地図』は現在も「かまえ」と呼ばれ、河内城跡に伴う居館かとする。

遺物

弥生土器・土師器・備前焼・陶磁器。

備考

苫田ダム建設に伴い平成八、九年(一九九六、七)に発掘調査を実施。鎌倉時代以降の掘立柱建物・井戸・墓・袋状土壇・土壇・溝などを確認。なお、弥生時代の遺構・遺物も確認。調査後に一部消滅。

文献

『作陽誌』、「美作鏡」、「美作古城記」、『岡山県通史』 苫田30、『日本城郭大系』721、『岡山県埋蔵文化財報告』 27・28、『改訂岡山県遺跡地図』 奥津154、『奥津町の民俗』、『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 170、『奥津町史』 通史編上巻



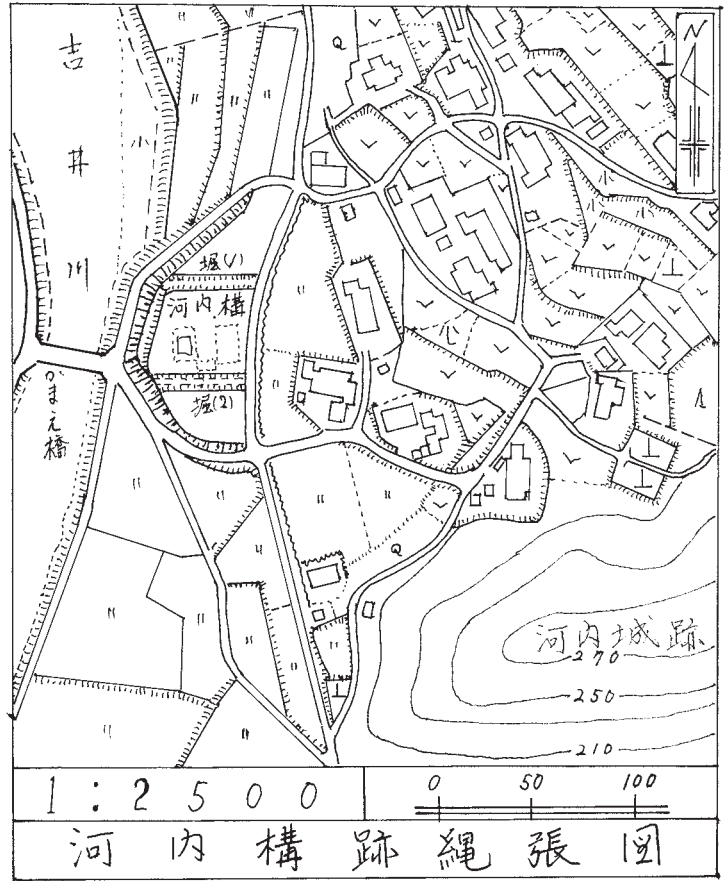
河端構・構ノ城 (河内構遺跡)

縄張

立地

31 河内城（仮称）

所在地 鏡野町河内



河内地区の山林部が奥津湖に向けて小さく迫り出した尾根上に位置する。標高は約二七〇m。住宅地移転のため、一部消滅している。北西約二〇〇mの位置には河内構がある。

縄張りをみると、尾根上に東西に曲輪が並ぶ。最高部が主郭となり前後に堀切と帯曲輪状の横堀が廻る。機能的には単郭の縄張りである。発掘調査の結果、周囲に帯曲輪が廻ることが確認された。この地域の村落に拠った土豪層の築城と考えられる。

文献

備考

遺物

城史

通史編上巻

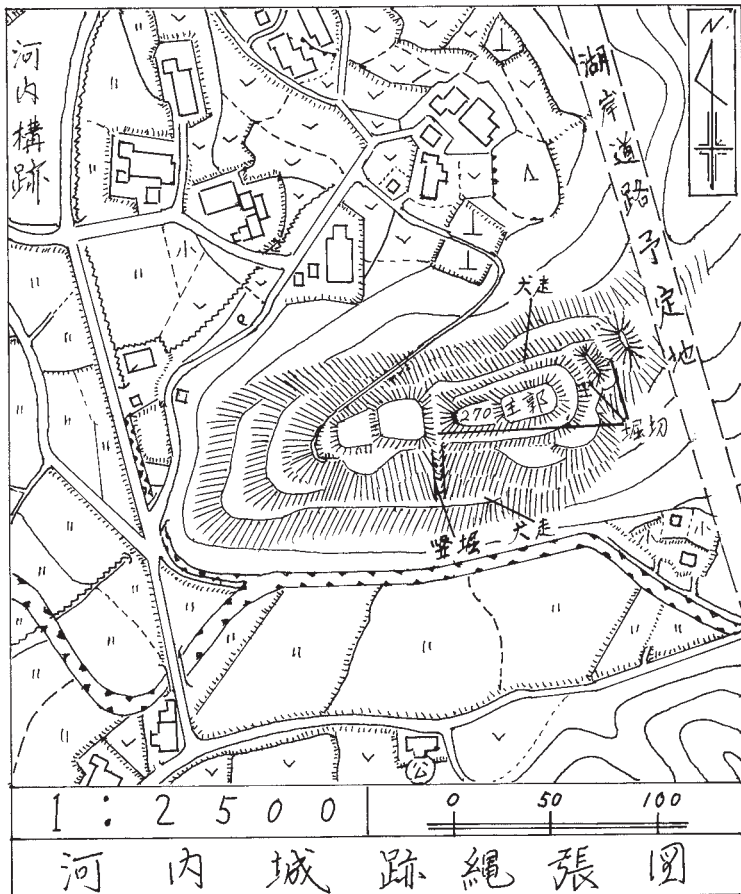
『岡山県埋蔵文化財報告』26・27・28、『発掘された久田の埋蔵文化財Ⅰ』、『改訂岡山県遺跡地図』奥津155、『奥津町の民俗』、『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』170、『奥津町史』

郭の全容が明らかとなった。調査後に一部消滅。

苦田ダム建設に伴い平成七、八、九年（一九九五、六、七）に発掘調査を実施、城

勝間田焼・土師器・備前焼・磁器・鉄鏃・鉄鍋・つぶて石。

未詳。



河内城（仮称）

32 城尾山・城山・久田上原城(仮称)

所在地 鏡野町久田上原

立地

久田上原地区の山林部が奥津湖に向けて迫り出す標高約二五〇mの尾根上に位置する。苦田ダム建設により、山麓の集落は移転した。地名は「城山」で、付近に「城ヶ峪」「四郎ヶ峪」の地名も残る。

縄張

吉井川南岸の山塊に築かれた城郭。吉井川に伸びる尾根筋の背後に二本の堀切を入れて先端を城域として整備したものとみられる。基本的には単郭構造であり、村落に割拠した土豪の持城と考えられる。『奥津町史』に鳥瞰図を掲載する。

城史

『作陽誌』は「城尾山」として、苦西郡久田上原村岩元の地にあり、同所に鉦穴あり昔、和泉国堺の富人道珍がここで銀を鑄たと記す。『苦田郡誌』は、今に道珍の地名が残るとする。

遺物

土師器・備前焼・磁器・釘・つぶて石。

備考

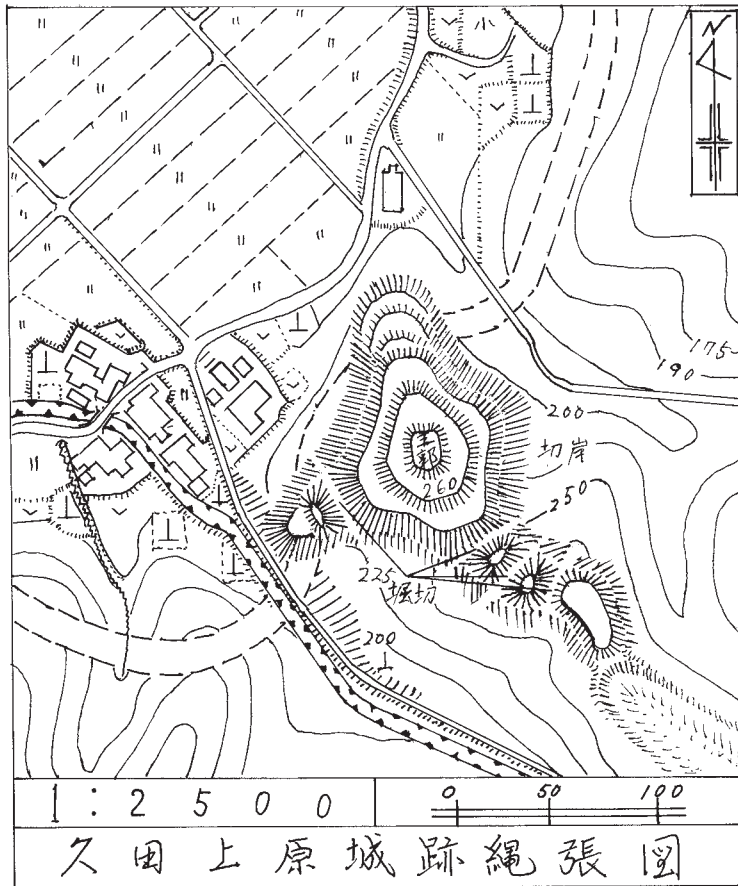
苦田ダム建設に伴い平成七、八年(一九九五、六)に発掘調査を実施。土壇状遺構・曲輪・切岸・土塁を検出。段調査後に一部消滅。

文献

『作陽誌』、『苦田郡誌』、『岡山県埋蔵文化財報告』26・27、『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』170、『改訂岡山県遺跡地図』奥津161、『発掘された久田の埋蔵文化財Ⅰ』、『奥津町史』通史編上巻



城尾山・城山・久田上原城(仮称)



33 堀ノ内（久田堀ノ内遺跡）

所在地 鏡野町久田下原

立地

もと久田下原地区の原共栄にあつたが苦田ダム建設のため消滅した。旧国道一七九号線と吉井川に挟まれた低地一帯に位置していた。

縄張

苦田ダム建設のため発掘調査が行われ、コの字型二重の区画溝や掘立建物遺構などが検出された。戦国期にみられるような防禦的な構築物はみられない。館城や丘城へ移行しない平地居館として貴重な事例。



堀ノ内（久田堀ノ内遺跡）現況

城史

文明一三年（一四八二）八月、山名氏の内紛により山名元之父子が因幡国から美作国へ敗走、父子は赤松氏家臣大河原氏に引き取られ「久多庄」に滞在、南条氏の与力も「奥津」に城を構えたとある（蜷川家文書）。

遺物

縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器・陶磁器・石器・鉄器・鏡・玉類・鉄蒔・炉壁・羽口。

備考

苦田ダム建設に伴い平成九〜一三年（一九九七〜二〇〇一）に発掘調査が実施され、縄文時代の土壙・炉、弥生時代の竪穴住居・掘立柱建物・土壙・溝、古墳時代の土壙墓、鎌倉〜室町時代の居館・墓、江戸時代の墓など多数の遺構・遺物が確認された。調査後に消滅。

文献

『岡山県埋蔵文化財報告』28・32、『発掘された久田の埋蔵文化財Ⅱ』、『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』192、尾崎二〇〇二、『改訂岡山県遺跡地図』奥津169、『奥津町の民俗』、尾崎二〇〇四、『よみがえる



堀ノ内（久田堀ノ内遺跡）調査状況（古代吉備文化財センター提供）

久田の歴史 久田原遺跡・久田堀ノ内遺跡・夏栗遺跡とその周辺』、伊藤二〇〇五、『奥津町史』通史編上巻

34 末谷の城・東山城（仮称）

所在地 鏡野町久田下原

立地

久田上原地区と久田下原地区を画する標高四三〇mの山頂部分一帯に位置する。北西南の集落を眺望することができた。

縄張

現在は苦田ダムの奥津湖となった吉井川に面して築かれた山城。東西に伸びる稜線に沿って曲輪が連なる。最高部に主郭を構え、前後に堀切を入れる。周囲には曲輪はみられないことから、主郭を中心とした単郭構造の縄張りと呼ばれられる。この久田上原・下原一帯は単郭規模の小規模山城・丘城が集中して分布する。東山城もこれらの城郭と同じく、村落に拠った土豪の持城と考えられる。『奥津町史』に測量図が掲載される。

城史

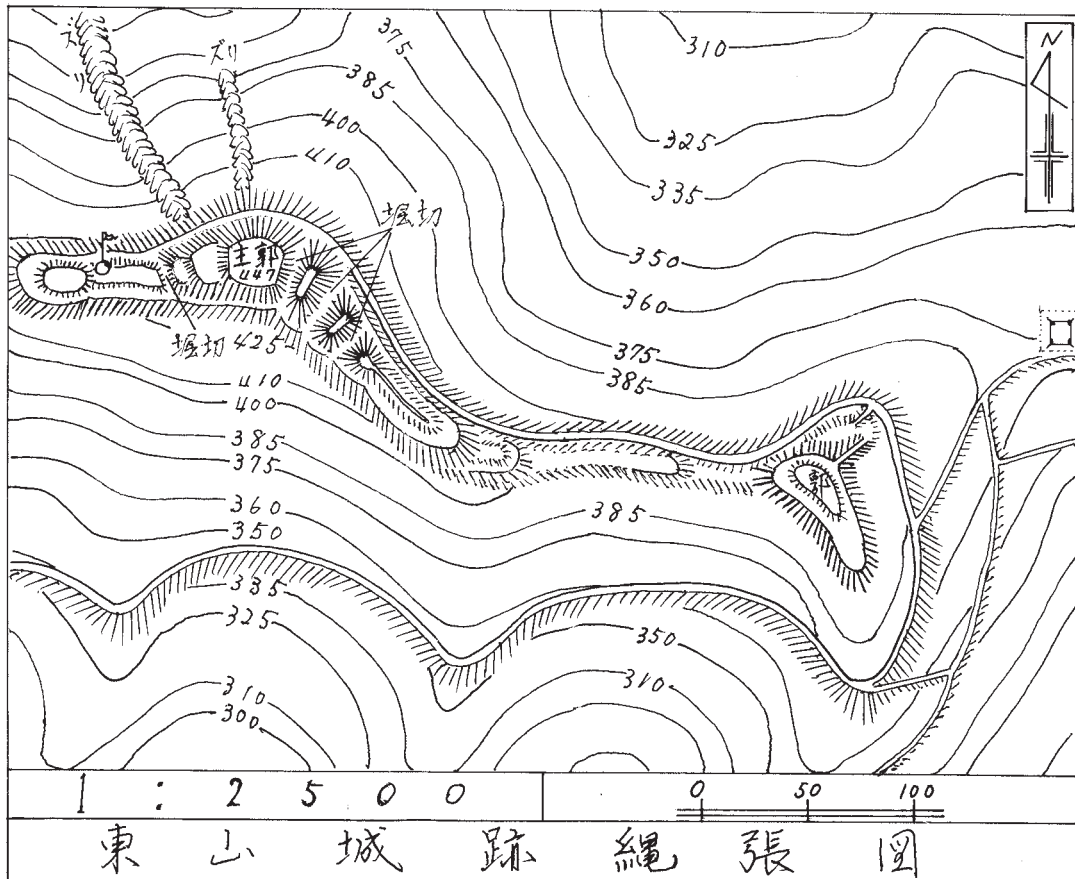
未詳。『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』が「東山城」の名称で、久田地区の中世山城として初めて紹介した。尾崎聡氏は当城について「地元では末谷の城と呼ぶ」と記す。

文献

『改訂岡山県遺跡地図』奥津170、『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』170、尾崎二〇〇六、『奥津町史』通史編上巻



末谷の城・東山城（仮称）



35 下原城・比丘尼城・比丘尼ヶ城

所在地 鏡野町久田下原

立地

奥津湖が西から東へ湾曲する部分の突端に位置する。東山城の山から南に延伸する標高約二九〇mの尾根上にある。付近に「城ヶ峪」の地名が残る。

縄張

吉井川に面して築かれた山城。現在はダム湖に面して立地する。城域は丘陵上の頂部が削平され複数の帯曲輪を持つ主郭部を形成する。そして、北東から伸びる背後の尾根筋を二本の堀切で仕切り侵入を妨げる。下原城も周囲の山城・丘城と同様に単郭構造の縄張りに留まる。村落単位で割拠した土家層による普請と考えられる。

城史

「作陽誌」は「下原堡」あるいは「比丘尼城」として、苦西郡久田下原村にあり、山の北に弥谷があり、水が流れ出て西へ溝に入ると記す。「美作鏡」は「比丘尼城」として城主不詳とする。須恵器。

備考

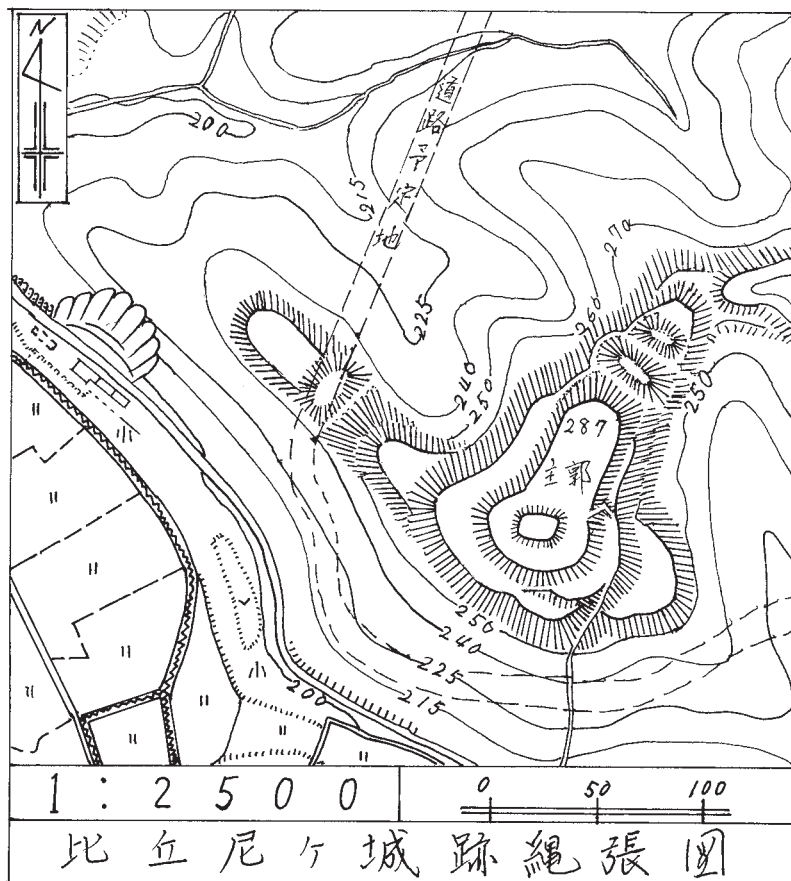
苦田ダム建設に伴い平成九年～一〇年（一九九七～八）に発掘調査を実施、堀切、尾根先端部、北部斜面で製炭窯が確認された。調査後に一部消滅。

文献

「作陽誌」、「美作鏡」、「苦田郡誌」、「岡山県埋蔵文化財報告」28・29、「発掘された久田の埋蔵文化財Ⅰ」、「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」170、尾崎二〇〇二、「改訂岡山県遺跡地図」奥津171、「奥津町の民俗」、尾崎二〇〇六、「奥津町史」通史編上巻



下原城・比丘尼城・比丘尼ヶ城



36 城峪・城谷・城峪城(仮称)

所在地 鏡野町久田下原

立地

奥津湖に孤島として取り残された、標高約二四〇mの丘陵上に位置する。付近に「城峪」^{しろや}、「城谷」^{しろや}、「市場」の地名が残る。

縄張

吉井川左岸の低丘陵上に築かれた丘城。縄張りをみると、山頂の主郭部と南東側の第二郭から構成される。山頂の主郭は東西に二段に分かれ周囲に帯曲輪を廻す。主郭から東側の尾根筋に二本の堀切、南側の尾根筋に堀切を構える。さらに南東側に伸びる尾根筋の先端にも複数の曲輪が築かれ、先端に堀切を配する。周囲の山城・丘城と比べて規模が大きいことから、有力土豪による築城か、外部勢力の番城の可能性が考えられる。

城史

「作陽誌」は下原城の南二町余りに古城あり、城主不詳と記す。土師器・磁器・備前焼・石突・硯・つぶて石・土錐。

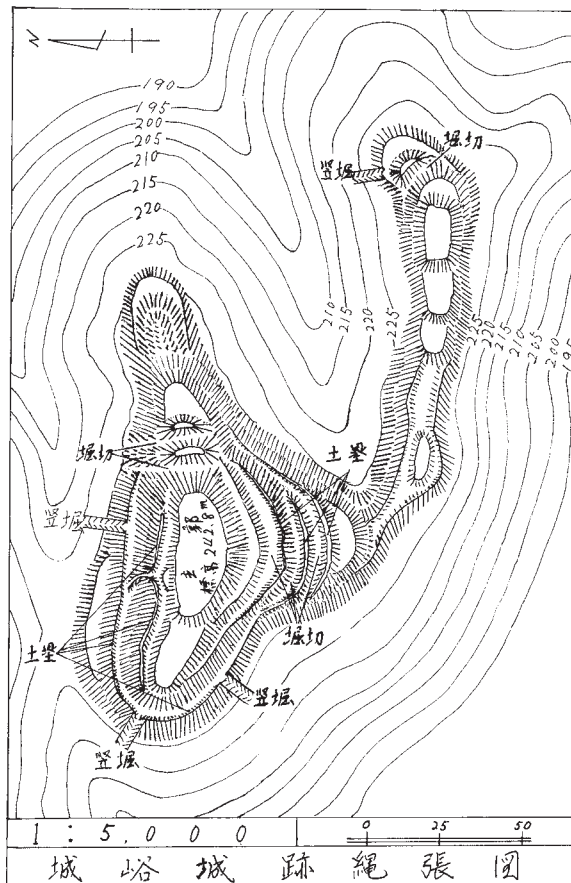
苦田ダム建設に伴い平成八、九年(一九九六、七)に発掘調査を実施。弥生時代の竪穴住居や古墳時代の製鉄炉なども確認された。調査後一部消滅。

文献

- 「作陽誌」、「岡山県埋蔵文化財報告」27・28、「発掘された久田の埋蔵文化財Ⅰ」、「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」170、尾崎二〇〇二、「改訂岡山県遺跡地図」
- 奥津172、「奥津町の民俗」、尾崎二〇〇六『奥津町史』通史編上巻



城峪・城谷・城峪城(仮称)



37 城尾山・奥津城山城(仮称)

所在地 鏡野町奥津

立地

奥津温泉など中心地から約五〇〇m南に位置する。吉井川左岸にあり、標高約五一〇mのピーク上にある。

縄張

奥津温泉の東南側に築かれた山城。吉井川に面し、南北両側の山裾は谷になっている。標高四七五mの山頂と西に伸びる尾根を利用し築かれた小規模な山城。『改訂岡山県遺跡地図』は、山頂に東西二五m、南北二〇mの主郭を構え、西に伸びる尾根には幅三mほどの小規模な曲輪を複数連ね、主郭の東斜面には小規模な犬走りが確認され、その一方で土塁や空堀はみられないとする。奥津周辺地域を支配する在地勢力の持城と考えられる。

城史

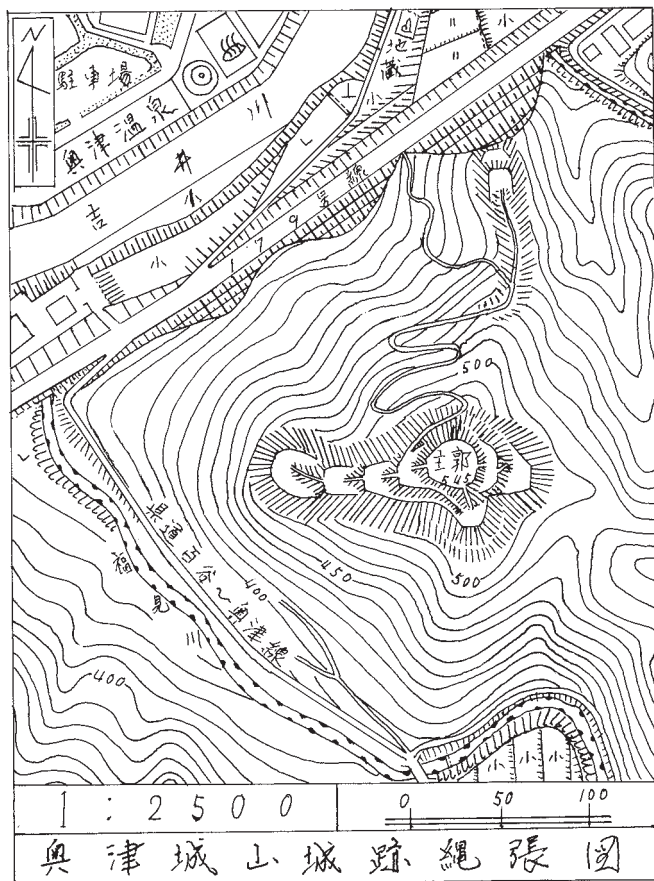
「作陽誌」は「城尾山」として、苫西郡奥津川東村にあり、山の高さ二六〇間、「塹削」の跡があると記す。『奥津町史』に、大正期に錦泉楼の牧野又一郎が城跡を整備してビアガーデンを開いたとある。

文献

「作陽誌」、『改訂岡山県遺跡地図』
奥津54、『奥津町史』通史編上巻



城尾山・奥津城山城(仮称)



38 大河原城・鷹巣山城・余瀬ヶ城

所在地 鏡野町奥津川西

立地

大釣溪の西にある標高五五一mの独立峰の山頂一帯に位置する。南麓で吉井川と羽出西谷川・羽出川が合流する。

縄張

奥津溪のある小畑集落の南西に位置する山城。『改訂岡山県遺跡地図』は、東西約一五〇mほどの規模を持ち、周囲の地形に沿って曲輪を並べる、南側尾根筋に堀切がみられるとする。規模から奥津地域を支配する有力国衆の持城か拠点城郭の可能性が考えられる。

城史

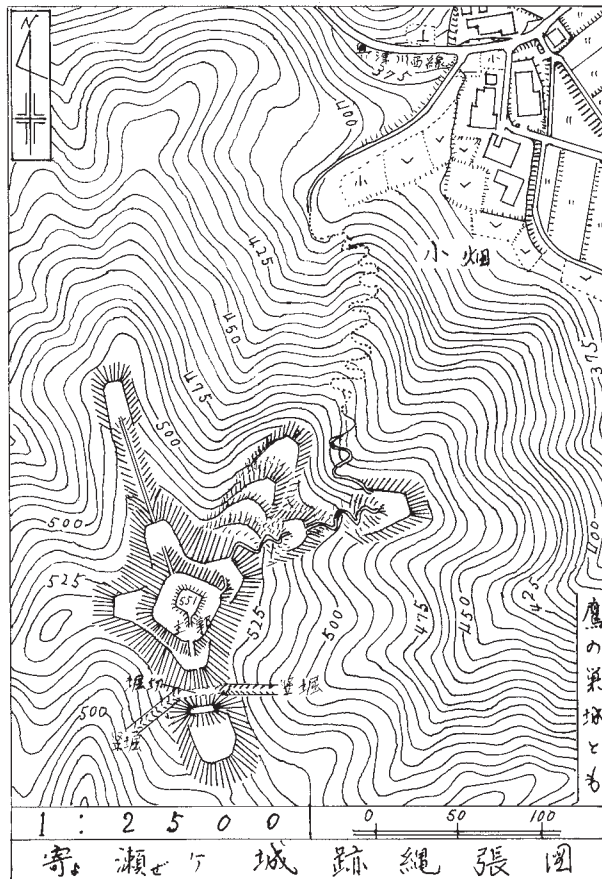
『作陽誌』は、「大河原堡」として、苫西郡奥津川西村にあり、高さ八町ばかり、大河原将監が居城し、羽出村との境の宇土坂に旧道があり、その南に墓標を梨の木とする将監の墓がある、伝えでは小畑の住民の叛乱で殺されたというと記す。「美作鏡」は「鷹巣山城」として、城主を「河原将監」とする。延享元年（一七四四）の「三浦家統道」（『美作古城史』所収）に、「西々条郡奥津村東西谷筋名残」の領主大河原将監は小幡という所に居城、のち討死とある。小幡とは小畑である。『奥津町史』は「余瀬ヶ城」とする。

文献

「作陽誌」、「美作鏡」、「美作古城記」、
『苫田郡誌』、『美作古城史』、『日本城郭大系』712、『岡山県文化財総合調査報告』25、『改訂岡山県遺跡地図』奥津77、『奥津町史』通史編上巻



大河原城・鷹巣山城・余瀬ヶ城



39 陣山

所在地 鏡野町羽出

立地

羽出西谷川の左岸、ウド坂北側の山頂に位置するとされる。

縄張

未詳。

城史

未詳。

文献

『奥津町史』通史編上巻



陣山

40 山崎鼻

所在地 鏡野町羽出西谷

立地

羽出川と西谷川が合流する羽出地区の岡祖山から東南に延伸する標高約五三〇mの尾根上に位置するとされる。

縄張

未詳。

城史

『奥津町史』は羽出西谷の「山崎鼻砦」と載せ、岡曾山を「古くから言い伝えられている伝説にも登場する山」とするが、山形省吾氏の踏査では山崎鼻に遺構は確認できず、実は城郭という伝承もないとのことである。



山崎鼻

文献

『奥津町史』通史編上巻

〔鏡野町〕 鏡野町

41 さんこう城（仮称）

所在地 鏡野町岩屋

立地

岩屋地区と大町地区を画する標高約五六〇mの山林に位置する。泉山から南東に延伸する尾根の突端にあり、北側をヒビラ川が流れる。香々美川とヒビラ川の合流点背後の稜線に位置する丘城。背後に堀切を構え前面に複数の曲輪を並べたもの。曲輪は小規模なものが続く。里に近いことから後世の改変の可能性も考えられるが、縄張りからは村落規模の土豪層の持城とみられる。

縄張

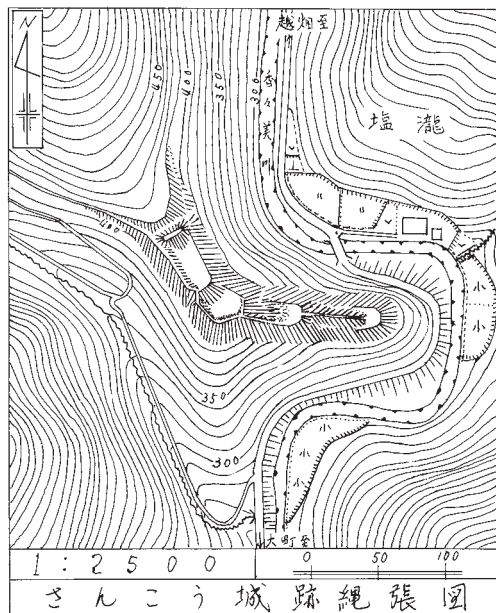
城史

文献

『日本城郭大系』724、『改訂岡山県遺跡地図』鏡野11、『鏡野町史』通史編



さんこう城（仮称）



さんこう城跡縄張図

42 あふさかの城・相坂城・逢坂城

立地

香々美川が真経地区で大きく湾曲する部分、西に迫り出した尾根上にある。標高二八八mで、山麓には香々美川筋の南北道だけでなく、西の奥津方面への古道も通る。

縄張

香々美川が大きく迂回する日下集落背後に築かれた山城。城域の背後に堀切を構えて先端に城域が整備された。最も高い位置が主郭で南西側に虎口を構える。南東側に帯曲輪があり北東側の尾根筋に曲輪を配する。曲輪の先にも堀切を築き遮断線を形成する。縄張りは基本的には主郭を中心とする単郭構造であり、この地域の有力土豪が築いた城郭と考えられる。

城史

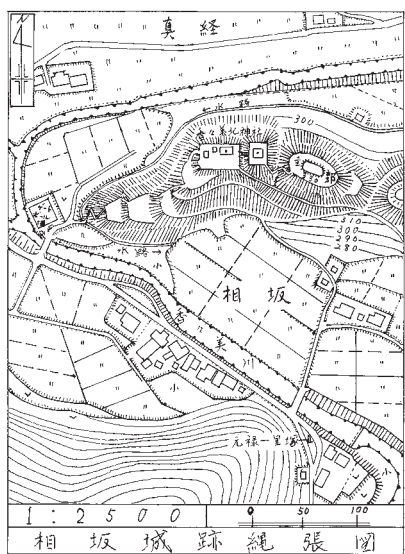
「古城之覚」は西北条郡真経村の「あふさかの城」として、小瀬勘兵衛の抱とする。「美作鬢鏡」は「相坂ノ城」、「美作鏡」は「逢坂城」とする。

文献

「武家聞伝記」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「苦田郡誌」、「岡山県通史」苦田18、『日本城郭大系』711、『改訂岡山県遺跡地図』鏡野26、『鏡野町史』通史編



あふさかの城・相坂城・逢坂城



相坂城跡縄張図

43 日上城・日上山城

所在地 鏡野町寺和田

鏡野町指定史跡

立地

香々美川が寺和田地区で大きく湾曲する部分、東に迫り出した尾根上にある。標高約二七〇mである。国道一七九号線、寺元地区から、県道七五号「加茂・奥津」線を北上すると、右手に「円通寺」、左手に「日上山城登城口」の標柱がある。

縄張

香々美川が大きく迂回する日下集落背後に築かれた山城。城域の背後に堀切を構えて先端に城域が整備された。最も高い位置が主郭で南西側に虎口を構える。南東側に帯曲輪があり北東側の尾根筋に曲輪を配する。曲輪の先にも堀切を築き遮断線を形成する。縄張りは基本的には主郭を中心とする単郭構造であり、この地域の有力土豪が築いた城郭と考えられる。

城史

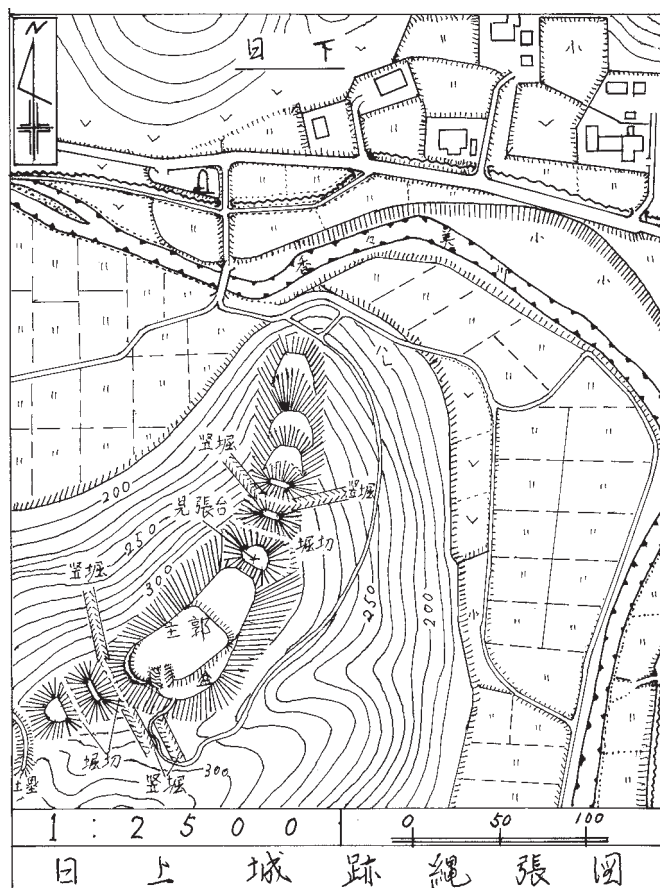
「古城之覚」は西北条郡寺和田村の「ひかみの城」として城主を小瀬勘兵衛とする。「作陽誌」は「日上山」として、山路は二丁三〇間で険しく、小瀬勘兵衛が住むと記す。「美作鬢鏡」は「日上ノ城」、「美作鏡」は「日上城」とする。

文献

「武家聞伝記」、「作陽誌」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「美作古城記」、「苦田郡誌」、「岡山県通史」 苦田17、「美作古城史」、「日本城郭大系」730、「改訂岡山県遺跡地図」 鏡野31、「岡山の山城を歩く」75、「鏡野町史」 通史編、「鏡野町の文化財」、「枳形・日上山城と香々美村の暮らし」



日上城・日上山城



44 升形城・枿形城

所在地 鏡野町香々美

鏡野町指定史跡

立地

津山市との境界にある標高六四五mの枿形山山頂付近に位置する。香々美川左岸にあり、寺和田地区にある円通寺の東約一・五kmに所在する。国道一七九号線、鏡野町寺元地区から、県道七五号「加茂・

縄張

奥津」線の藤屋地区の宿場町跡に「枿形城址登城口」の看板がある。枿形山を中心に南北に曲輪が連なる山城。この地域では神楽尾城や葛下城などと共に拠点城郭として機能した。伯耆国倉吉へ抜ける往還と香々美盆地を抑える立地から、毛利方の拠点城郭として整備されたものと考えられる。主郭には土塁が廻り、周囲に帯曲輪を配する。主郭の北側に地形に沿って平入り虎口が確認される。北側には土塁を廻した「枿形」と称される曲輪群が続く。下位曲輪群は地形に沿って配されたが、要所には土塁が配された。全体的にみて土塁や堀切を積極的に使用した縄張りとなっている。小早川隆景が修築し福田氏が在番するなど毛利方の要衝として機能したことを鑑みると、それ以後の改修などを確認するためにも、今後現地での精査が必要である。

城史

正保書上五四城の一で、「古城之覚」は西北条郡藤屋村の「升形之城」として、城主を福田玄蕃勝昌・同助四郎盛昌とする。「作陽誌」は小早川隆景が修築し、福田勝昌・盛昌らに守らせたとある。本城へは一七丁余り、その南は「大塚郭」といい勝昌の家臣で戦死した大塚某の古墓があると記す。天保国絵図に「古城跡」とある。『日本城郭全集』は「枿形城」とし、山上の本丸、二の丸、三の丸の形が枿形なことから城名となったかとする。

永禄一二年（一五六九）以降、少なくとも翌元亀元年（一五七〇）

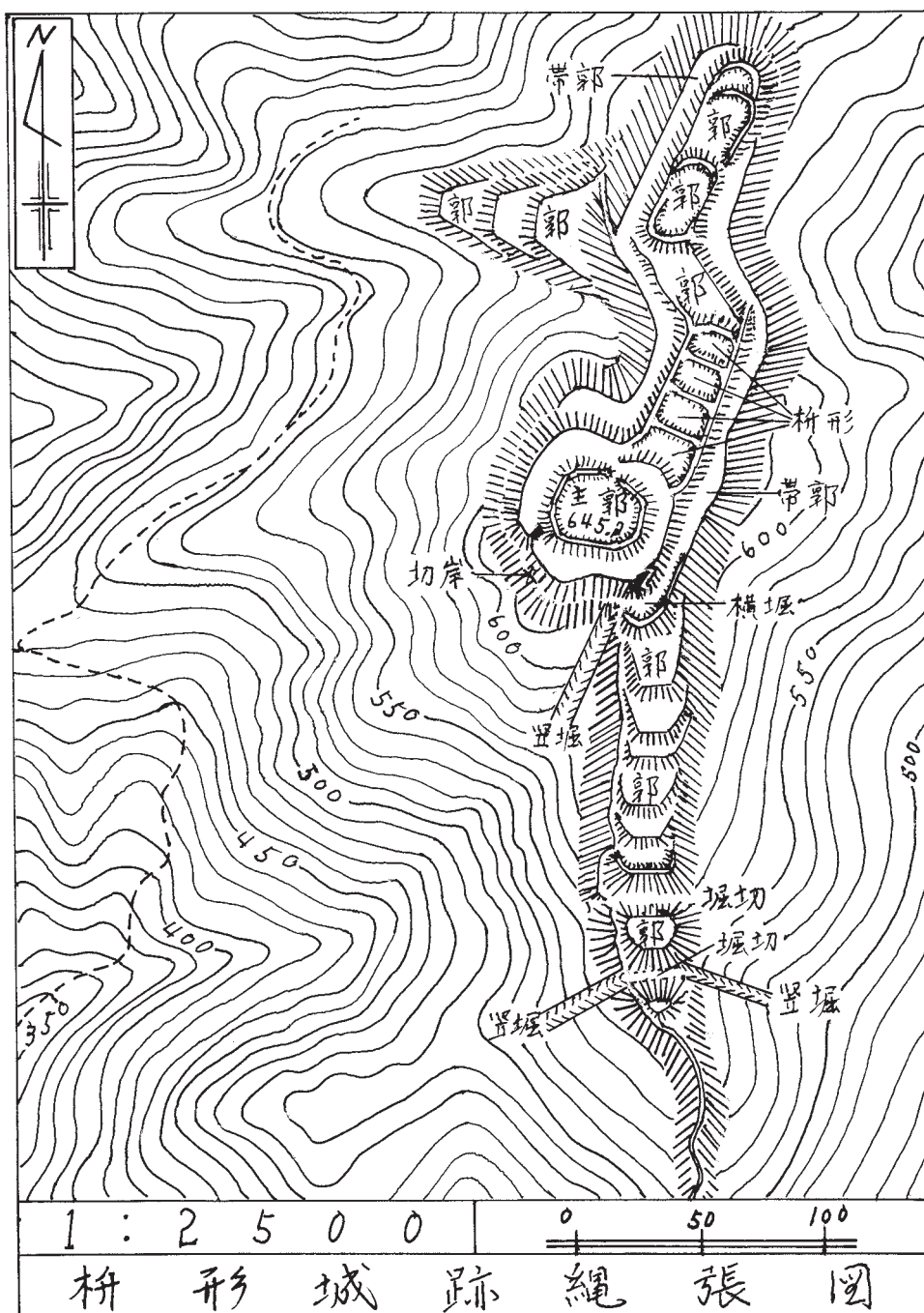
まで毛利方で出雲国高平城（島根県雲南市）の城主牛尾豊前守が「益形」に在番したとの記事がある（「陰徳記」）。その後、天正七年（一五七九）一月、「祝山・北賀茂中間一城」の普請が命じられ、毛利氏からの要請に応えた森脇春方・蔵田与三右衛門によって三月には城の普請が調い、まずは吉田源四郎、閏三月には熊野兵庫助、野村藤内が、更に四月には宇山久信が加番となり、以降毛利氏による岩尾山城への兵糧搬入の拠点となっている（吉川家文書、「閏閏録」、「藩中諸家古文書纂」、西善永興寺旧蔵文書）。升形城には吉田肥前守が在番、元春から検使として森脇一郎右衛門（春方か）が在城しており、直家は「高田ノ城」（利元城か）に先駆けて升形城を攻撃したが、まもなく「高田」（津山市上・下横野か）まで退き、荒神山城に花房職之を籠め升形・岩尾山城攻略を進めたとある（「陰徳記」）。また宇喜多直家は、荒神山城に拠り、岩尾山・升形両城を攻撃しようとしたが、安芸国に帰陣していた吉川元春が八月二日に四十曲（新庄村）まで出勢したところ、直家は既に備前国岡山へ退いていたとある（「安西軍策」）。花房職之は草薙氏の出城「いわう山」「ますかた」としものと「三ヶ城を攻め取り、「ひつめの城」（日詰城、津山市加茂町百々・中原）の相城として加番の兵を籠めたとある（「花房家記事」）。ただし、同九年正月に岩尾山城から退去した湯原春綱は升形城の在番を命じられており、また同一二年正月、羽柴秀吉は蜂須賀正勝・黒田孝高が毛利氏から升形城を請取るとの報告を受けていることからすると、その後も継続して毛利氏の支配下にあったことが窺われる（「閏閏録」、「吉川家中并寺社文書」、「小早川家文書」）。

文献

『武家聞伝記』、「作陽誌」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「美作古城記」、
 『美作略史』、『苦田郡誌』、『岡山県通史』 苦田19、『美作古城史』、『日
 本城郭全集』 苦田郡3、『日本城郭大系』 73、『改訂岡山県遺跡地図』
 鏡野33、『岡山の山城を歩く』 79、『鏡野町史』 通史編、『美作一宮
 郷土の遺産』、『鏡野町の文化財』、『枅形・日上山城と香々美村の暮
 らし』



升形城・櫛形城



45 山名屋敷（仮称）

所在地 鏡野町香々美

立地

香々美川左岸の平野部にあり、周囲の耕地はかつて条里制の名残をとどめていた。周囲に「築地」「市場」などの地名が残る。『日本城郭大系』は、方四、五〇間の屋敷とする。

城史

「作陽誌」は「山名旧宅」として、苦南郡市場村にあり、土地の住民は「山名房安」の住所というと記す。

文献

「作陽誌」、『美作古城史』、『日本城郭大系』737、『改訂岡山県遺跡地図』鏡野291、『鏡野町史』通史編



山名屋敷（仮称）

46 犬城・犬ヶ城・張方城

所在地 鏡野町土居

立地

土井地区土井上集落の南にあり、張方池に接した薬師山に位置するとされる。未詳。

城史

『鏡野町史』は、城主は不明で、森藩時代に張方池を築く際に山の一部を掘り崩され形を失っており、またその城名が池の名前の由来となっているとする。

文献

『鏡野町史』民俗編、『鏡野町史』通史編



犬城・犬ヶ城・張方城

47 土居

所在地 鏡野町土居

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

未詳。

備考

『鏡野町史』は、地区内に「土居」の小字があり、昔権勢のあった者の屋敷跡かとし、「地頭屋敷」「地頭墓」などの地名も残るとする。またこの居館の存在が近世の村名のもとになったと考えられるというと記す。

文献

『鏡野町史』民俗編、『鏡野町史』通史編



土居

48 沖構・構ノ城

所在地 鏡野町円宗寺

立地

香々美川左岸の平野部にあり、広域農道（作州街道）のすぐ北側に位置する。周囲の耕地はかつて条里制の名残をとどめていた。津山広域農道の円宗寺地区にある鏡野町物産館「夢広場」の先にJA津山墓石センターがある。その北側の畑一帯。

縄張

図をみると、南北一二〇m、東西五〇mほどの長方形の区画が主郭とされる。



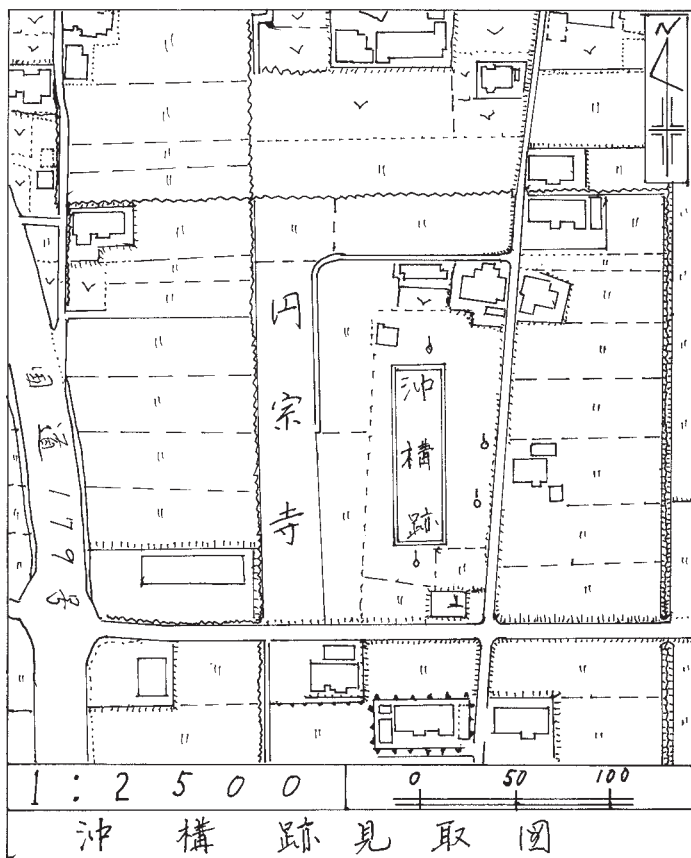
沖構・構ノ城

城史

周囲に比べてやや微高地となっている。現在、堀跡は北側から東側にかけて残る。それ以外の堀跡は耕地整理などで消滅しているが明治期の地籍図から周囲を堀が廻っていたことがわかっている。平地居館に対して、より防御性を高めた館城と評価される。

「作陽誌」は「沖構」として、苫西郡円宗寺村にあり、芦田右馬允の旧跡で、東西二三間、南北五六間、四方に水沢あり、濠みは深さ四、五尺で人馬は渡れないと記す。「美作鏡」は「構ノ城」として、城主を「芦高右馬之丞」とする。

永禄年中（一五五八〜七〇）、毛利氏は西の大田和城と、南の茶臼山に陣を構えて沖構を攻撃、城主の芦田右馬允は堅固に城を守ったが、毛利勢は大田和城の前方、構から三町（約三三七メートル）の地点の「築山」に井楼を築いて大砲を放ち城は落去させたという。右馬允は



文献

「作陽誌」、『美作古城史』、『鏡野町史』通史編

城史

「作陽誌」は沖構の東北約四町に「家老屋敷」があり、東西二五間、南北一九間、今は「畦畝」となると記す。

縄張

未詳。

立地

未詳。

49 家老屋敷

所在地 鏡野町円宗寺



家老屋敷

遺物

土器。

文献

「作陽誌」、「美作鏡」、「美作略史」、「苫田郡誌」、「岡山県通史」 苫田22、『美作古城史』、『日本城郭全集』補遺、『岡山県埋蔵文化財報告』2、『日本城郭大系』714、『改訂岡山県遺跡地図』鏡野429、『鏡野町史』通史編

のち出家して宗源と称し、西田辺村（津山市西田辺）に住んだとある

〔作陽誌〕。天正十一年（一五八三）六月、「草刈太郎左衛門領」にあって毛利氏配下の国人・土豪らが籠城していた沖構（鏡野町円宗寺）に対し、宇喜多勢は「付城」を構えて城を攻撃、この戦闘で沖構に籠城

した武本源兵衛は鉄炮で敵数人を討ち取り中村頼宗から感状を与えられ、また籠城勢が花房職之の拠る附城に夜討ちした際、職之の家臣難波又市郎が先駆けの興津市郎を討ち取り敵を撤退させ、宇喜多秀家から感状を与えられたという。なおこの時のものか、七月二〇日に中村頼宗が立石孫一郎に「今度花房陣所焼崩」を賞した感状がある。その後沖構は落去した（「閩閩録」、「東作誌」、「美作国諸家記」、「花房家記事」、「寛永諸家系図伝」、立石家文書）。

50 古川城・城山

所在地 鏡野町寺元

立地

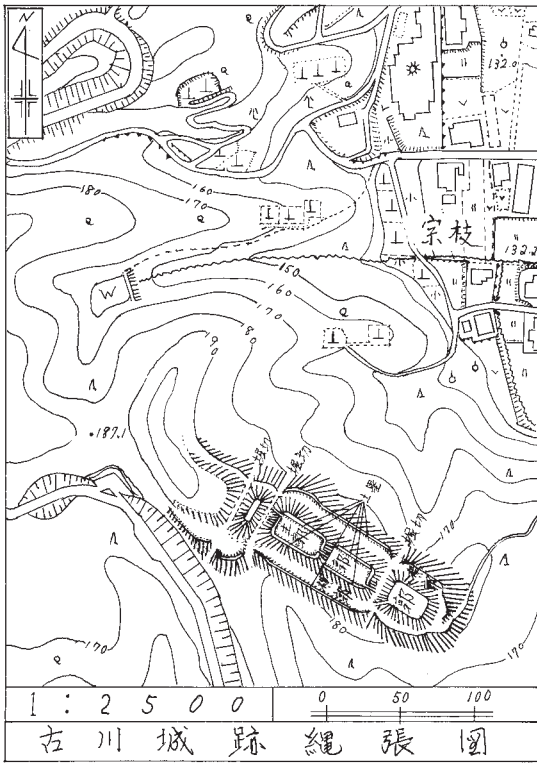
香々美川右岸の標高約一八〇mの丘陵上にあり、東に寺元地区、西に真加部地区が位置する。

縄張

背後を二本の堀切で仕切り、三つの曲輪の周囲を横堀で囲い込んだ独特な縄張りを持つ。中央の二つの曲輪では周囲に土塁が配された。築城主体は周囲の在地勢力が考えられるが、比較的技巧的なことから広域大名権力の軍事行動に関連して築かれた陣城の可能性もある。今後の検証作業が期待される。



古川城・城山



城史

「作陽誌」は苦西郡寺元村の「茶白山」の西に小城があると記す。これか

文献

「作陽誌」、「美作略史」、「日本城郭大系」732、「改訂岡山県遺跡地図」鏡野609、「鏡野町史」通史編

51 茶白山

所在地 鏡野町寺元・沖

立地

香々美川左岸、寺元地区の東にある茶白山山頂に位置する。標高は約一七〇mである。

縄張

未詳。

城史

「作陽誌」は「茶白山」として苦西郡寺元村にあり、永禄年中(一五五八〜七〇)、備中国の兵が陣した地と記す。「苦田郡誌」は、山の高さ二〇尺、雑木が疎生とする。

文献

「作陽誌」、「美作略史」、「苦田郡誌」、「鏡野町史」通史編。



茶白山

52 大田和城(竹田遺跡)

所在地 鏡野町竹田

立地

香々美川右岸の女山から南に延伸する尾根の突端部分に位置する。標高約一七〇mで、現在の鏡野中学校の北側一帯である。

縄張

人工的な平坦地が複数確認される。全体に切岸が甘い傾向がみられる。早い段階に城郭施設として使用されたものか、陣所の可能性が考えられる。

城史

『作陽誌』は「大田和堡」として、苦西郡竹田村にあり、山上は平坦で東西二〇間、南北五〇間、土塁と堀が残る、永祿（一五五八〜七〇）頃、芦田右馬允の拠る沖構を、毛利氏の兵が大田和



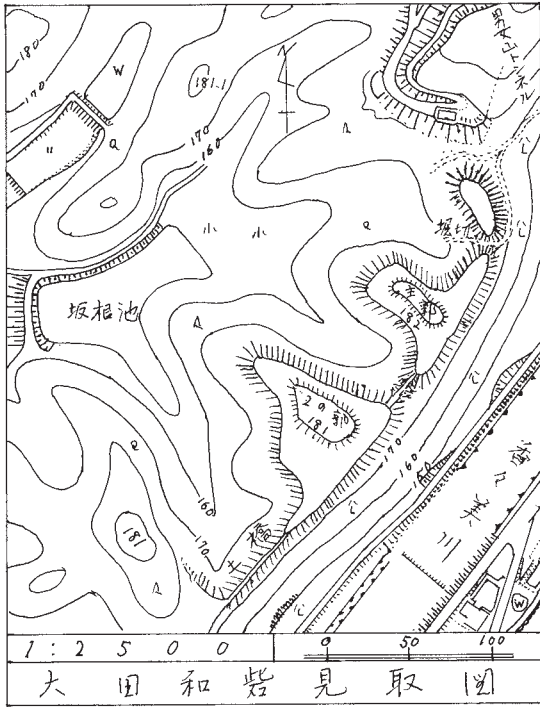
大田和城（竹田遺跡）

遺物

縄文土器（早期）・弥生土器・石鎌・石斧・石庖丁・スクレイパー・玉類・人形土製品。

備考

『改訂岡山県遺跡地図』は竹田遺跡として一括。大規模農道建設に伴う昭和四七年（一九七二）の発掘調査で縄文時代早期の竪穴住居を確認。また、弥生時代の竪穴住居や土壙墓、大田和城跡の堀切も確認。



文献

調査後に一部消滅した。

『作陽誌』、『美作略史』、『苦田郡誌』、『美作古城史』、『日本城郭大系』713、『日本城郭全集』補遺、『改訂岡山県遺跡地図』鏡野199・200、『鏡野町史』考古資料編・通史編

53 齋藤丸（竹田古墳群）

所在地 鏡野町竹田

立地

香々美川右岸の女山から南に延伸する尾根の突端部分に位置する。標高約一六〇mで、現在の鏡野中学校一帯である。「齋藤丸」の地名が残る。未詳。

縄張

『鏡野町史』は構城攻略時、毛利氏に属した小田草城主齋藤親実の陣所とする。

城史

備考

『改訂岡山県遺跡地図』は竹田古墳群として載る。統合鏡野中学校建設に伴う昭和四六年（一九七二）の発掘調査で方墳・円墳を複数確認。なお報告書の実測図からは、古墳の墳丘を土塁に転用した陣城の様相を看取できる。

文献

『鏡野町埋蔵文化財発掘調査報告第一集』、『改訂岡山県遺跡地図』鏡野201、『鏡野町史』考古資料編・民俗編・通史編

54 景清屋敷

所在地 鏡野町古川

立地

香々美川左岸、古川地区の東南部分に所在する。香々美川に面した段丘突端に位置し、県道三三九号線に接している。国道一七九号線、古川地区の宝性寺を目指す。

縄張

周囲に明確な遺構は残っていない。

城史

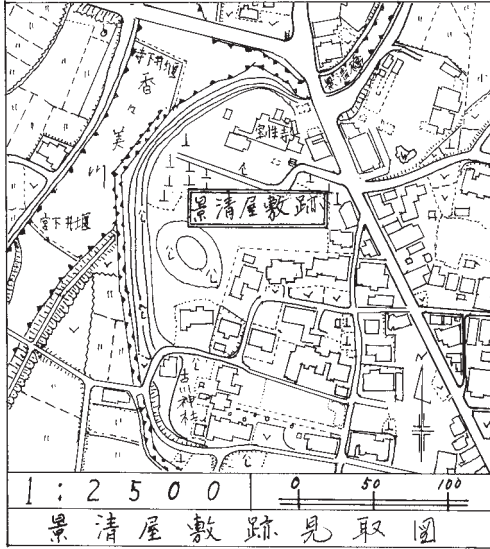
『美作古城史』には「景清屋敷」として現在景清山宝性寺の所在地とする。「作陽誌」は筑後守藤原景清を足利義詮の時代の因幡国人とし、黒川村（古川村の古名）を領し貞治六年（一三六七）秋殺害されたとするもの、同地を屋敷とする積極的な記述はなく、また安永六年（一七七七）の「古川村銘細帳」（『鏡野町史』史料編所収）にも、宝性寺は「筑後守藤原景清」母子の墓所であって、その居城の跡は不明と記す。

文献

『美作古城史』、『日本城郭大系』717、『鏡野町史』民俗編・通史編、『鏡野町の文化財』



景清屋敷



景清屋敷跡見取図

55 石須構・鴨津構

所在地 鏡野町真加部

立地

吉井川左岸で、広域農道（美作街道）の南約三〇〇mに位置する。吉井川に向かって西に延伸する緩斜面にある。地元では「構」と呼ばれている。

縄張

沖構が平野部の館城とすると、石須構は段丘の先端部に築かれたタ イプとなる。周囲が宅地や田畑として開発された中で「構」と呼ばれる館城の形状が良好に残った城郭遺跡であった。ところが、近年、土塁が破壊され堀が埋められた。良好に遺構を残していたにも関わらず、史跡として保全策が講じられていなかった点は極めて残念である。幸い破壊前に畑和良氏により縄張り調査が行われており、図をみると、北側に空堀を配してほぼ四〇m四方の主郭を切りだした形になっている。主郭からみて上方にあたる北側に対して土塁を構えた。但し「作陽誌」では四方に土塁を廻すとある。築城主体などは不明であるが、南方に平野部を一望する高台に立地しており、周辺の村落を支配した有力土豪層の居館であった可能性が高い。

城史

「作陽誌」は「石須構」として、昔西郡真加部村にあり、石須の名称は不詳、宅地は二〇間四方で土塁あり、外に堀ありと記す。『美作古城史』には、今小丘の上に田となっているが、土堀の残形など往時の面影を偲ばせるとある。『日本城郭大系』は「鴨津



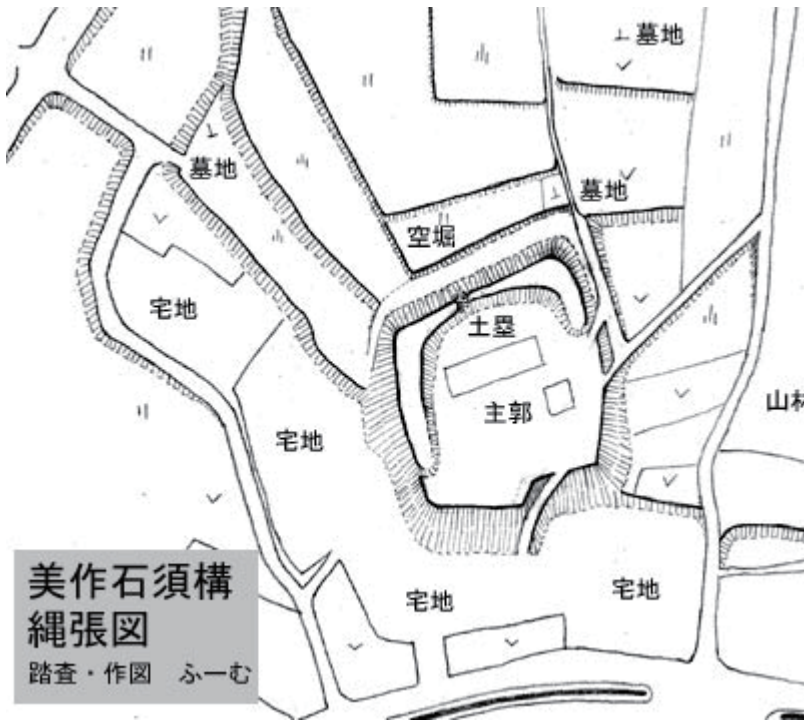
石須構・鴨津構

備考

の構」とし、『鏡野町史』は「石須構」とする。
平成二〇年（二〇〇八）、開発により堀、土塁など遺構の一部が損壊した。

文献

「作陽誌」、「美作古城史」、「日本城郭大系」709、『改訂岡山県遺跡地図』鏡野385、『岡山県埋蔵文化財報告』39、『鏡野町史』民俗編・通史編



石須構・鳴津構縄張図 (畑和良作図)

56 眼崎城・目崎城

所在地 鏡野町下原・津山市領家

立地

鏡野町と津山市久米地区との境界付近、標高二八八mの丘陵上に位置する。山麓の下原構は東約六〇〇mにある。

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、主郭（本丸）と南西側の第二郭（二の丸）が横堀によって仕切られており、その外側に伸びる尾根筋に下位曲輪がみられるとする。目崎城の縄張りで特徴的なのは、斜面に無数に築かれた畝状空堀群である。北東側と西側斜面に集中的に築かれ、斜面からの侵入を妨げる強力な防塁型ラインとなった。周囲の在地系縄張りの城郭と比べて土塁や横堀、畝状空堀群を複雑に組み合わせた縄張り技術を持ち、技術的には一歩抜け出た水準をみせる。おそらく天正期の毛利方勢力が拠点城郭のひとつとして整備した可能性が考えられる。

城史

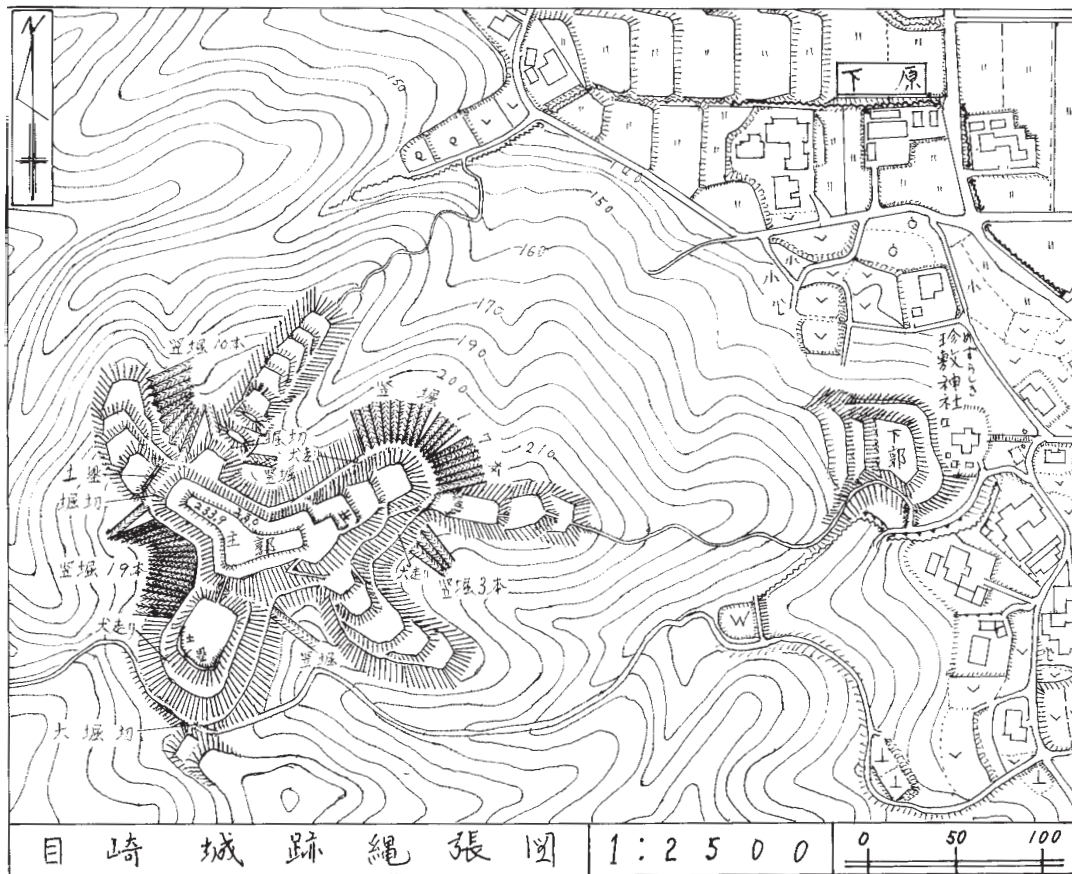
正保書上五四城の一で、「古城之覚」は苦西郡下原村の「眼崎之（城）」として、城主不詳、領家村に跨るとする。「作陽誌」は「目崎城」として、一名を妻山、山頂へは三町余り、砦跡が残る、事跡不詳、目裂金剛王が拠ったと記す。「美作鬢鏡」は城主を「浦山左馬助行信」とし、「美作鏡」は「目崎城」として城主を「浦山行信」とする。天保国絵図に「目崎古城跡」とある。『日本城郭全集』は「目崎城」、別名を妻山というとする。



眼崎城・目崎城

文献

「武家聞伝記」、「作陽誌」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「美作古城記」、
 『苦田郡誌』、『岡山県通史』 苦田27、『美作古城史』、『日本城郭大系』
 苦田郡4、『日本城郭大系』 725、『改訂岡山県遺跡地図』 鏡野524、『鏡
 野町史』 通史編



57 下原構

立地

下原地区の平野部にあり、西を城下集落に接する。眼崎城は約六〇〇m西に位置する。

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は南北一〇〇m、東西五〇mの範囲内で、構の地名などが残るとする。

城史

『作陽誌』は「構屋敷」として、苦西郡下原村にあり、目崎城に拠った目裂金剛王の館というと記す。

備考

消滅（『改訂岡山県遺跡地図』）。

文献

『作陽誌』、『久米郡誌』、『美作古城史』、『日本城郭大系』 725、『改訂岡山県遺跡地図』 鏡野530、『鏡野町史』 通史編



下原構

所在地 鏡野町下原

58 城山（キリゴ谷城山）

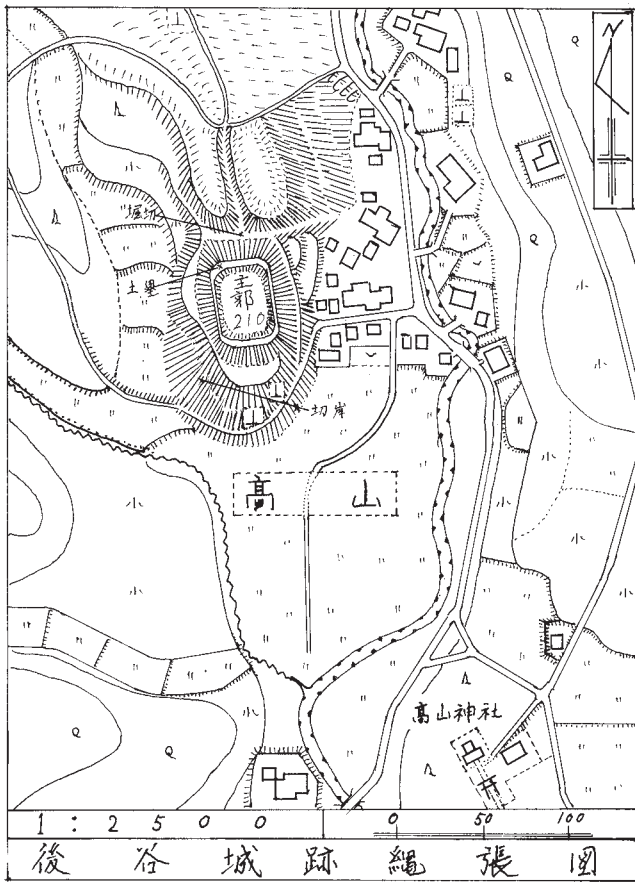
立地

高山地区高月集落の西、標高約一九〇mの尾根上にある。吉井川右岸の平野部を眺望する。

縄張

高山神社背後の丘陵に位置する。主郭は方形で畧線に土塁を配し四周を横堀（堀切と帯曲輪）で圍繞する。伝承では陣跡とされているが、縄張りからは恒常的な造りとなっており、「構」と呼ばれる地域の土豪層による館城と考えられる。築城主体としては、高山地域

所在地 鏡野町高山



城山 (キリゴ谷城山)

城史

に拠った有力土豪の可能性が考えられる。今後、周辺の調査や後背地にある小田城との関わりなども考える必要があるだろう。

「作陽誌」は「後谷」として、苦西郡高山村にあり、谷の上に陣跡があり、尼子勝久の兵が拠るともいうと記す。

須恵器・石斧・叩石。

「作陽誌」、『改訂岡山県遺跡地図』

鏡野317、『鏡野町史』通史編



縄張

立地

59 小田城

所在地 鏡野町高山

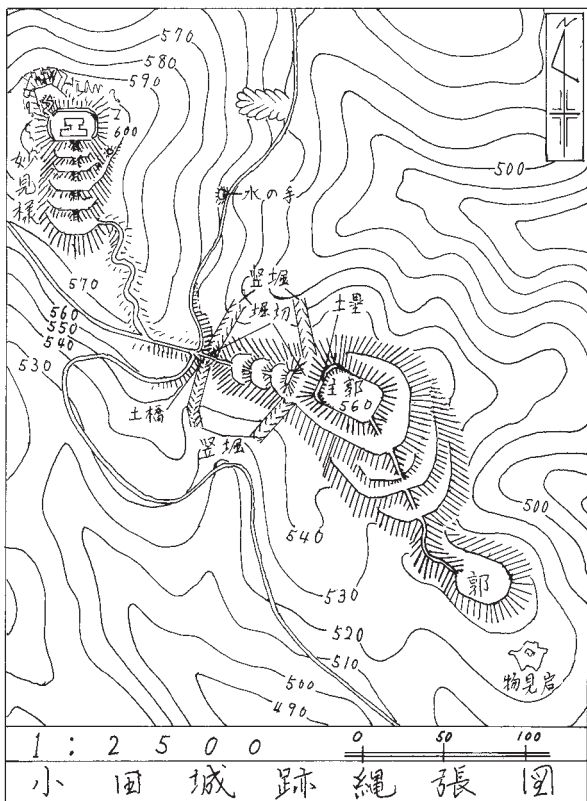
妙見山から南東に延伸する標高約四七〇mの尾根上に位置する。鏡野南部・西部の山間・平野部を眺望する。

妙見山から伸びる尾根筋に位置する山城。

背後に堀切を入れて東側を城域として整備する。最高部に築かれた主郭は西側に向けて削り出しの土塁を構える。主郭の

周囲には帯曲輪を配し、南東側に向けて

小曲輪を連ねる。やや集落から離れる立地ではあるが、規模的にみて周囲に勢力圏を持つ有力土豪勢力の持城と考えられる。



小田城

城史

「作陽誌」は「小田城」として、苦西郡高山村にあり、築城者不詳、山の頂きからは東は播磨国、眺望はよく、東は播磨、西は伯耆、北は因幡、南は備前が指呼のうちであると記す。『美作古城史』は松ヶ仙の支峰コダガセンにありとする。

文献

「作陽誌」、『苦田郡誌』、『岡山県通史』 苦田28、『美作古城史』、『日本城郭大系』726、『改訂岡山県遺跡地図』 鏡野300、『鏡野町史』 通史編

60 小屋谷

所在地 鏡野町高山

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「作陽誌」は「小屋谷」として、苦西郡高山村にあり、葛下城攻めにあたり攻城勢が陣屋を構えたことにちなみ、谷の東にも斥巖があると記す。

文献

「作陽誌」、『鏡野町史』 通史編

61 離山

所在地 鏡野町高山

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「作陽誌」は苦西郡高山村、小田城の東の「離山」に城跡が残ると記す。

文献

「作陽誌」

62 岩棚構

所在地 鏡野町入



小屋谷



離山

立地

入地区の吉井川左岸にあり、中国電力入発電所の東、県道八二号線の北に面して位置する。

縄張

背後に堀切を入れて川に面した先端部を城域に整備している。堀切は明確に残るが、近くに発電所水路が建設されていることから主郭部はかなりの改変を受けている可能性が考えられる。曲輪配置から単郭構造の縄張りと考えられる。

城史

平地の「構」と呼ばれる館城が丘陵上に築かれたものとみられる。「作陽誌」は「岩棚構」として、苦西郡入村にあり、斉藤玄蕃が陣した場所では無量寺の僧が住むと記す。



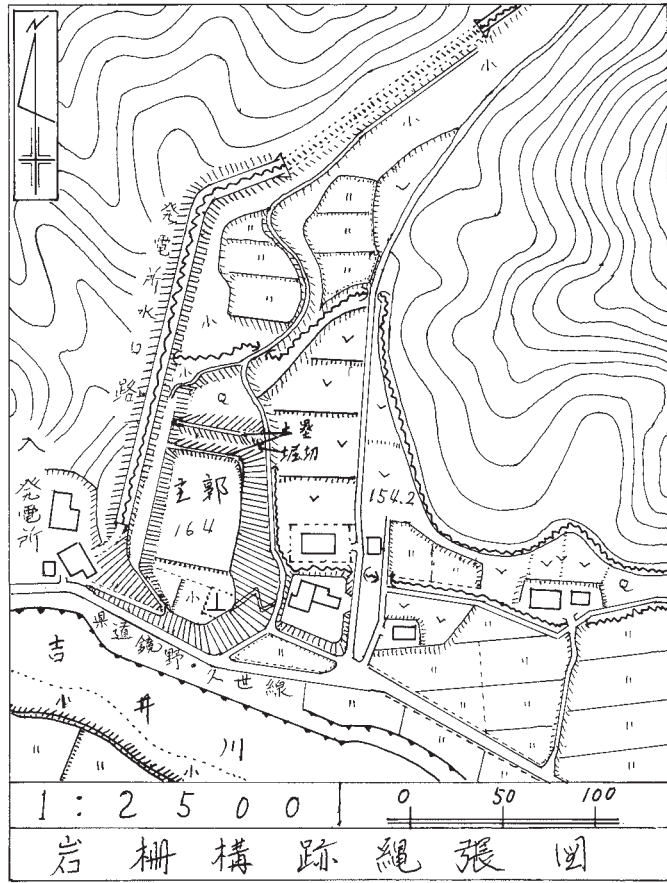
岩棚構

備考

城の位置について楨が平にありとする『改訂岡山県遺跡地図』の表記は全く異なる。

文献

「作陽誌」、『美作古城史』、『日本城郭大系』710、『改訂岡山県遺跡地図』鏡野56、『鏡野町史』通史編



63 五郎丸山城・五郎やぶ城

所在地 鏡野町入・下森原

立地

縄張

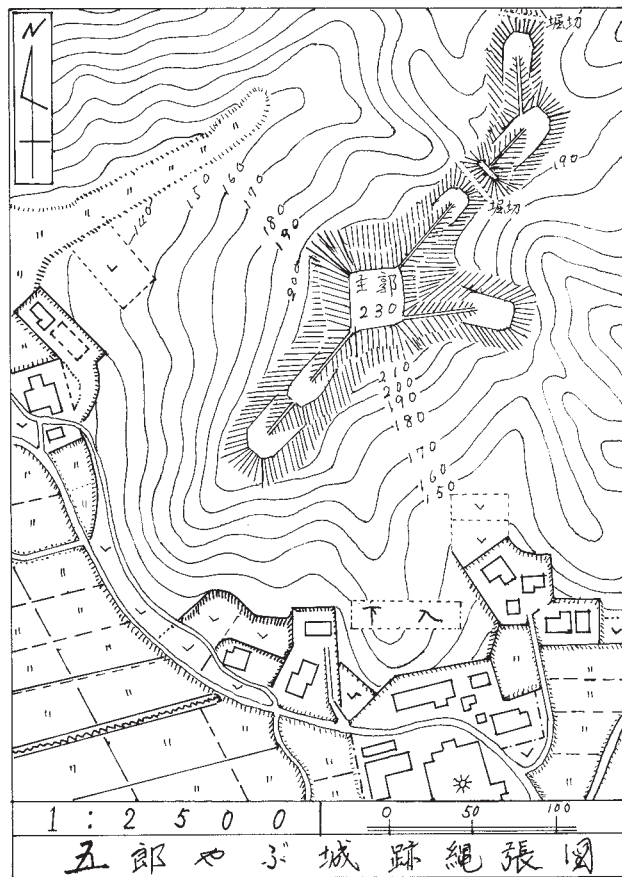
入地区の吉井川左岸にあり、標高二二二mのピーク上に位置する。吉井川支流、上森川右岸の山地に位置する。山頂部に主郭を構える単郭構造の縄張りである。北西側に堀切を構えて尾根筋からの侵入

城史

を妨げる。立地や曲輪の規模から村落に拠った土豪層の持城とみられる。

文献

「作陽誌」、『日本城郭大系』722、『改訂岡山県遺跡地図』鏡野57、『鏡野町史』通史編



五郎丸山城・五郎やぶ城

所在地 鏡野町山城・中谷

鏡野町指定史跡

立地

東を吉井川、北を中谷川が流れる。標高約三七〇mの大松山山頂一帯に位置し、山麓に鏡野と富・久世方面をつなぐ古道が通る。国道一七九号線、小座の交差点より、県道八二号「鏡野・久世」線の中谷の中谷川に架かる蔓下橋を渡ると「蔓下城登城口」の標柱がある。吉井川西岸にのぞんだ大松山山頂一帯に広大な城域を形成した山城。



葛下城

縄張

主郭を含めて稜線や尾根筋に沿って曲輪を連ね、要所に堀切を入れた縄張りとなっている。堀切は多数見られるが、土塁や畝状空堀群等は積極的には使用されていない。また、主郭の南側斜面には数段の広い削平地が連なっており屋敷地に充てられたと考えられる。

築城主体は大河原氏、或いは中村氏とされる。いずれも、美作国統治を進める外部勢力の郡代クラスとして活躍した勢力である。葛下城の広い城域から、外部の広域大名権力と結びつくことで幅広く在地諸勢力を動員することに成功したことが見て取れる。但し主郭の求心性は弱いことから、着陣した在地諸勢力は外部の広域大名権力との結びつきが強い一方で、城主への救心性については弱かったことが見て取れる。

城史

正保書上五四城の一で、「古城之覚」は苦西郡山城村の「葛下之(城)」として、城主を「中村大炊助槍沢頼宗」、頼宗の家臣桜井越中の末流が山城村へ今にあるとする。「作陽誌」は、山へは五町半、城主

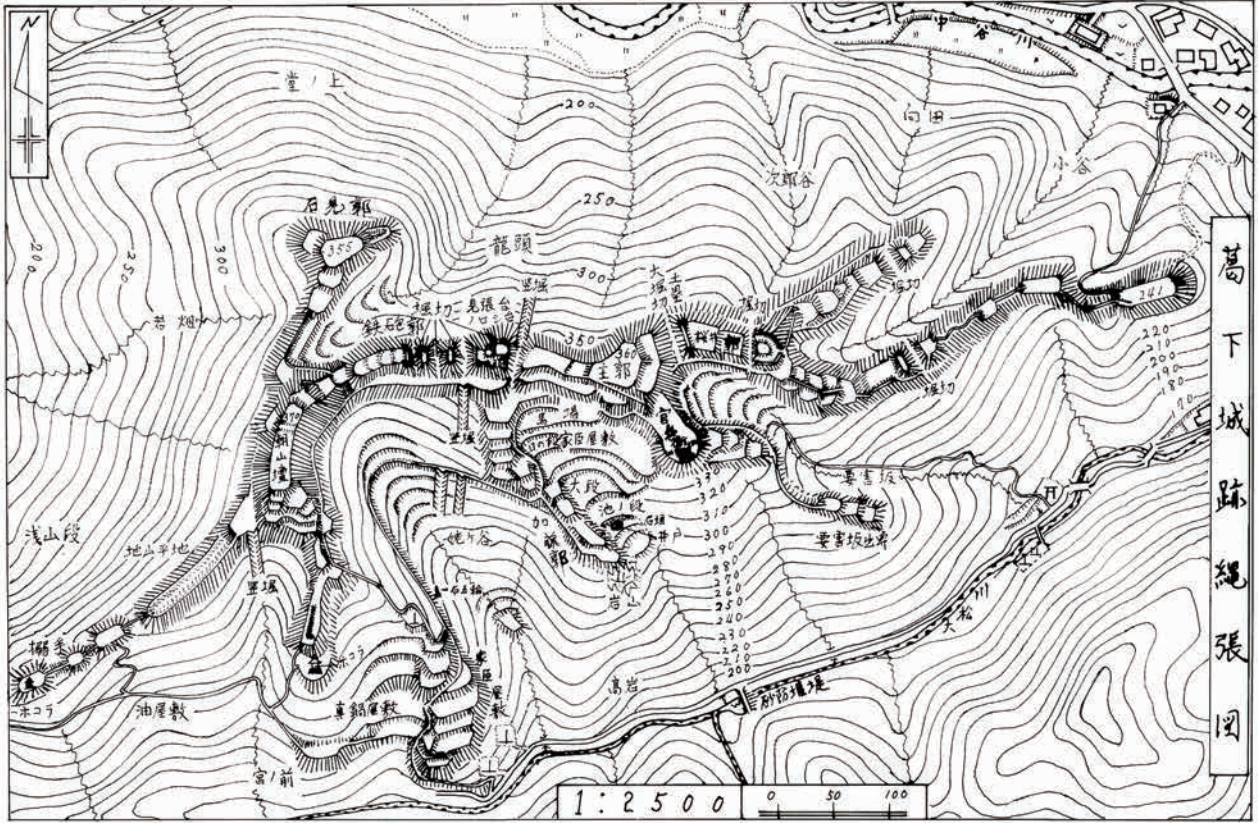
文献

は初め大河原大膳大夫、のち中村大炊介頼宗、事跡不詳で、落城の日、頼宗に仕える浅山図書は城を焼き死んだ、城の西南、東には桜井越中・加藤豊後・木村菅兵衛・浅山図書・一柳平次・茅山将監・田中八右衛門・大蔵如真らの屋敷跡があると記す。「美作鬘鏡」「美作鏡」は城主を「中村大炊助頼宗」とする。天保国絵図に「葛下古城跡」とある。天保九年(一八三八)の山城村の「高反別村差出明細帳」は、字「葛下り」に古城山があり、城主は中村大炊之助、一ノ丸・二ノ丸、三ノ丸・矢倉之段・御蔵屋敷と言い伝える屋敷があると記す。『日本城郭全集』は「葛下城」とする。

永禄一二年(一五六九)の二月、閏五月に毛利元就は備中国の侍、原太郎左衛門尉に重ねて「葛下里」「葛下」での在番を慰労している。七月には浦上宗景の反攻にも「葛外里」を堅固に保っていることを賞されているが、八月になると高田在番へと移っている(備中原文書)。

天正七年(一五七九)十一月、吉川元春は、「作州葛下の城」が毛利方の城となればとして、岩尾山城(津山市吉見)救援に向けた戦略を報じている(「譜録」)。その後まもなくして葛下城を拠点とした中村頼宗の活動が確認されるようになり、同八年九月には桜井越中守を使者に兵糧と玉葉の補給を毛利氏に要請している(福原家文書)。同九年六月の岩屋城の落去を受けて毛利輝元は、頼宗にそれまで居城としていた葛下城から岩屋城への引き移りを命じ、その後城が落去するに至って、頼宗の家臣浅山図書は城に火をかけ自らも死を選んだという(「作陽誌」)。

「武家聞伝記」、「作陽誌」、「美作鬘鏡」、「美作鏡」、「美作古城記」、「苦田郡誌」、「岡山県通史」 苦田23・24、「美作古城史」、「日本城郭全集」補遺、「日本城郭大系」720、「岡山の山城を歩く」82、「改訂岡山県遺跡地図」鏡野34、「鏡野町史」民俗編・通史編、「鏡野町の文化財」



文 城 縄 立
 献 史 張 地

中谷地区楠合集落の標高約三七〇m地点に位置する。楠谷と寺山集落との間、道路北側の山麓部分に所在する。
 『改訂岡山県遺跡地図』は、民家裏の水田および畑の北側に土塁らしき土盛あり、西隅と土塁下に古井戸ありとする。未詳。
 『日本城郭大系』727、『改訂岡山県遺跡地図』鏡野17、『鏡野町史』通史編



長者屋敷

66

長者屋敷

所在地 鏡野町中谷

文 献

「作陽誌」、『鏡野町史』民俗編・通史編
 未詳。
 「作陽誌」は「朝山壇」として、苫西郡中谷下村、葛下城の北にあり、昔朝山某が住んだことに因むと記す。『鏡野町史』は、葛下城の西方中腹にあり、今は畑となるとする。



朝山壇

城 縄 立
 史 張 地

65

朝山壇

所在地 鏡野町中谷

67 中屋山城・城山

所在地 鏡野町貞永寺

立地

貞永寺地区の集落の東側、標高約二二〇mの尾根先端に位置する。奥津方面へ向かう古道が山麓を通る。

縄張

春日神社・貞永寺の東側にある小山に築かれた城郭。『改訂岡山県遺跡地図』や『城郭大系』は、山地の両端に堀切を入れて方形の主郭を創出する。山頂平坦部の曲輪は一部土塁が遺存とする。貞永寺・春日神社に関連し村落に拠った有力土豪層の持城と考えられる。

城史

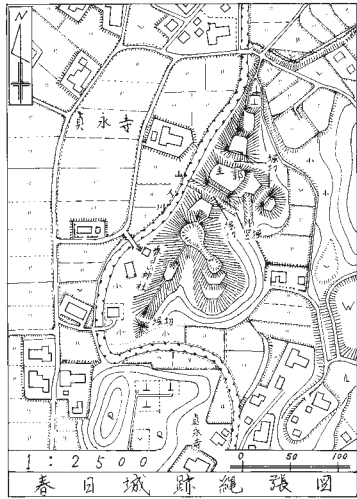
『作陽誌』は「中屋山」として、苫西郡貞永寺村にあり、中屋平三兵衛が中村大炊助頼宗に属してこの地を領し、麓に中屋墓があり、山名はこれに因むとする。「美作鏡」は貞永寺村の「城山」として、城主を中屋平三兵衛とする。『美作古城史』は春日山城または春日城とし、春日神社の祠の背面に砦があり、神社の西一町ばかりの田圃の中に小祠を祀り、中屋平三兵衛の墓と伝えられるとする。

文献

『作陽誌』、「美作鏡」、「美作古城記」、「岡山県通史」 苫田29、「美作古城史」、「日本城郭大系」719、「改訂岡山県遺跡地図」鏡野154、「鏡野町史」通史編



中屋山城・城山



68 桜井屋敷

所在地 鏡野町塚谷

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

『作陽誌』は「桜井屋敷」として、苫西郡塚谷村にあり、斎藤氏の家臣桜井越中守は後中村大炊助頼宗麾下となり、頼宗が安芸国に帰ったのち老いた越中守は塚谷で死去したと記す。

文献

『作陽誌』、「鏡野町史」通史編



桜井屋敷

69 小田草城

所在地 鏡野町馬場

鏡野町指定史跡

立地

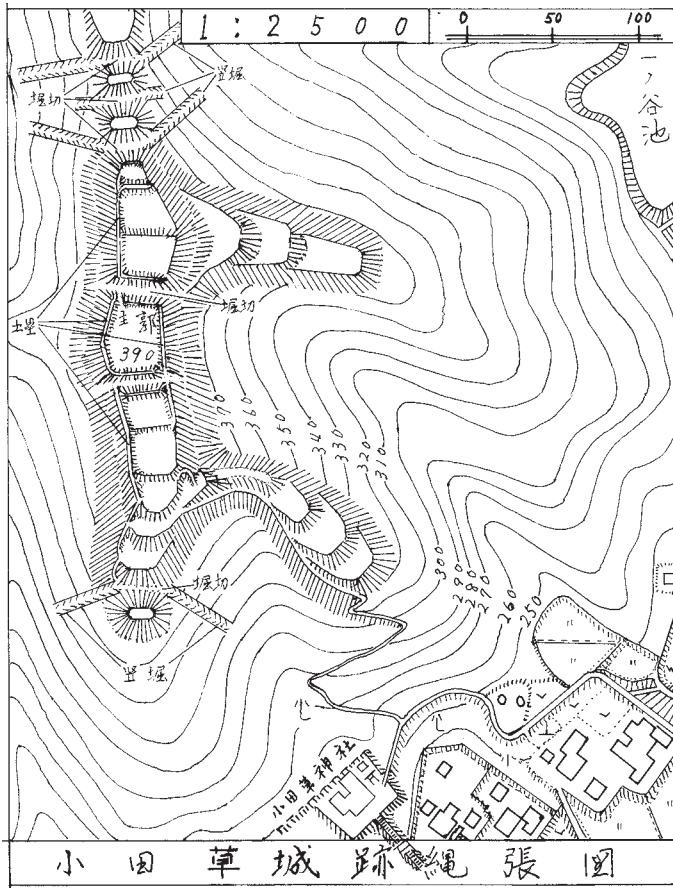
馬場地区の北、小田草神社の北側に所在し、標高約三九〇mの小田草山山頂一帯に位置する。鏡野南部を一望することができる。国道一七九号線、下森原地区沿いに「小田草神社」の標柱があるので、それに沿って進むと、神社境内右脇の赤い鳥居の先に「小田草城址登山道」の標柱がある。



小田草城

縄張

北側に堀切を配して、山頂部に曲輪を並べた配置となっている。最も高い位置に主郭を構える。主郭の前後には横堀を入れることで他の曲輪に対して求心的な空間を生み出す。この横堀は堀底の両端を土塁で閉塞することで斜面に対して一体的な防禦を図る。そして虎口の通路とするなど技巧的な工夫がみられる。主郭の南北には比較的広い曲輪が配され、地形に沿って二・三段に分かれる。そして尾根筋の城道に沿って下位曲輪が続く。在地系縄張り技術としては比較的技巧的であることを踏まえると、築城主体の斎藤氏はこの地域でも一歩抜き出した勢力であったと考えられる。



城史

正保書上五四城の一で、「古城之覚」は苦西郡馬場村の「小田草之(城)」として、城主を斎藤玄蕃頭とする。「作陽誌」は「小田草山、附古城」とし、麓に小田草明神社あり、山の高さ二二二間、天正(一五七三〜九二)初めに斎藤玄蕃が住み城跡が残ると記す。「美作鬢鏡」と「美作鏡」は城主を「斎藤玄蕃」とする。天保国絵図に「小田草古城跡」とある。

月山富田城に籠城していた尼子義久は、家臣の平野又右衛門に使者を命じたが、又右衛門は美作国の小田草で「斎藤」という人物に討ち取られ、その首は出雲国洗合に在陣する毛利元就のもとにもたらされたとされる(佐々木文書、「御答書」、「森脇覚書」、「陰徳記」)。天正八年(一五八〇)五月、吉川元春は「小田草之城」が近々落去する情勢を報じ、まもなく岡本大蔵丞を在番させ、九月にも富屋氏の在番を急がせている(吉川家文書、岡本文書、「吉川家中并寺社文書」)。同九年正月、岩尾山城に拠る毛利方の城兵が退去した際、在番していた小川氏は福田盛雅とともに小田草城の在番を命じられている(「閩閩録」、「吉川家中并寺社文書」)。

文献

「御答書」、「森脇覚書」、「陰徳記」、「武家聞伝記」、「作陽誌」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「美作古城記」、「美作略史」、「苦田郡誌」、「岡山通史」 苦田26、「美作古城史」、「日本城郭全集」補遺、「日本城郭大系」715、「改訂岡山県遺跡地図」 鏡野74、「岡山の山城を歩く」85、「鏡野町史」通史編、「鏡野町の文化財」

70 城山

所在地 鏡野町馬場

立地

馬場地区から下森原地区にいたる道の西側丘陵上、標高約二二〇mの位置にある。小田草城の約六〇〇m南にあたり、周囲には古墳も所在する。

縄張

未詳。

城史

「作陽誌」は小田草城の東南二町ばかりに小堡ありと記す。これか。

文献

「作陽誌」、『美作古城史』、『改訂岡山県遺跡地図』鏡野85、『鏡野町史』通史編



城山

勝田郡

〔津山市〕 勝北町
〔美作市〕 勝田町
勝央町
奈義町

〔津山市〕勝北町

1 関源次郎屋敷（仮称）

所在地 津山市奥津川

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

〔東作誌〕は勝北郡広戸村市場分に、藩主森家の親類、関源次郎の「居館」があり、市場から奥津川村の小畑毛の地に、さらに備中国新見に移ると記す。

文献

〔東作誌〕

2 矢櫃城

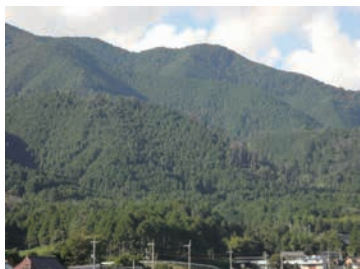
所在地 津山市大吉

立地

那岐山系の高峰、爪ヶ城山（広戸仙）から南東の甲山に延伸る尾根上に位置する。標高は約九〇〇mであり、那岐山丘陵を一望する。国道

縄張

五三号線、津山市工門にある津山市勝北支所の前方を北上する。声ヶ札ふれあい広場に登山道が付設している。縄張りをみると、尾根に堀切を入れて主郭・第二郭に分節して城域を構成する。背後には二重の堀切を、主郭と第二郭の間には三重の堀切を構える。高山という限定された立地に左右される



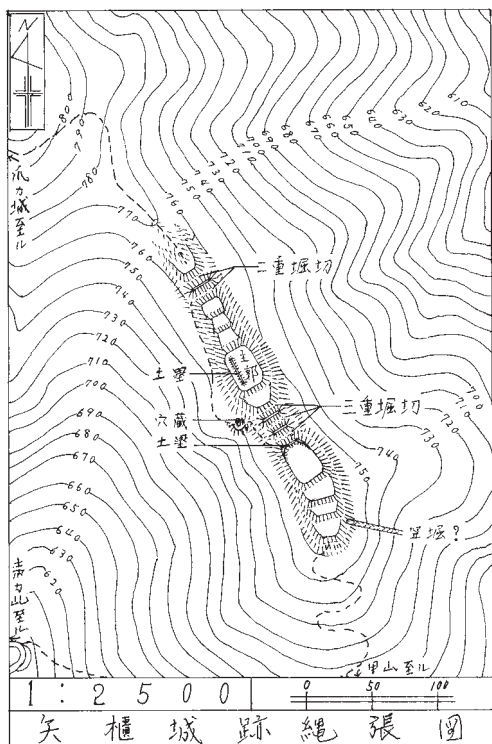
矢櫃城

城史

面があるものの、堀切を除けば曲輪が並ぶ縄張りである。高地に立地する爪ヶ城と同じく、集落から離れた立地から、広域大名権力の軍団が駐屯した番城か、山岳を活動の場にした修験等の寺社勢力が築いた可能性が考えられる。

文献

〔武家聞伝記〕、「美作鬢鏡」、「美作古城記」、『美作太平記』、「美作鏡」、『勝北郡各村誌抄録』、『岡山県勝田郡誌』、『美作古城史』、『日本城郭大系』699、『勝北町誌』、『改訂岡山県遺跡地図』勝北120、『岡山の山城を歩く』90



3 つめ 爪ヶ城

所在地 津山市大岩

立地

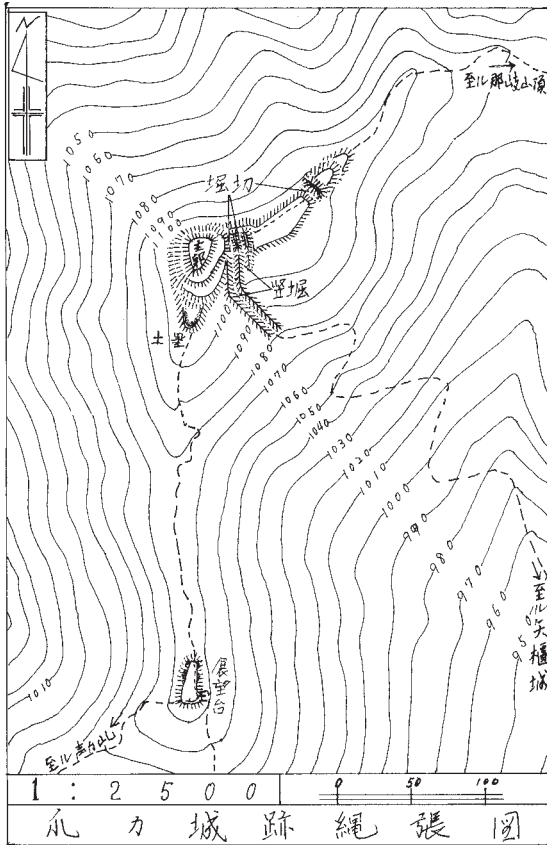
那岐三山のひとつ、爪ヶ城山（広戸仙）頂上付近に位置する。標高は約一〇七〇mで岡山県内では最も高地に所在する中世山城とされる。国道五三号線、津山市工門にある津山市役所・勝北支所の前方を北上する。声ヶ峠ふれあい広場に登山道が付設している。



爪ヶ城

縄張

縄張りをみると、高地に位置することから堀切以外に目立った遺構が確認されない。しかしながら、標高の高い山であっても地表面を削平し堀切を普請する築城主体の力量を十分にかがいがい知ることができる。



城史

主郭の南側には前面に土塁を配した堡塁型の曲輪が配された。堀切より東側には削平地があり、先端にも堀切が配された。集落から遠く離れた山上に位置することから、那岐山を活動の場にした修験道に関連した寺社勢力が築いた可能性が考えられる。

『改訂岡山県遺跡地図』は、正徳年間（一七一〜五）の古地図に広戸仙の頂上を「爪ヶ城」と記すとする。

『改訂岡山県遺跡地図』勝北119

4 かまえ 構

所在地 津山市新野東

立地

未詳。

未詳。

城史

平賀元義の「美作視聴録」（『新野村史』所収）には新野の東村に「構」という平地の庁の跡があり、古き聞書のいう公文の地に置かれた庁かと記す。『新野村史』は、新の東には構の地名が二箇所あり、川西にある構は現在上山氏の居宅があり、周囲の築地、堀跡など面影を伝えるとある。

文献

「東作誌」

5 草刈景継屋敷

所在地 津山市新野東

立地 未詳。

縄張 未詳。

城史

「東作誌」は勝北郡東村上分の「草刈景継屋敷」として、久本の地
にあり、天正（一五七三〜九二）の頃、草薙三郎左衛門景継が賀茂
から来て住むと記す。

文献

「東作誌」

6 寺坂屋敷

所在地 津山市新野東

立地 未詳。

縄張 未詳。

城史

「東作誌」は勝北郡東村上分の「寺坂屋敷」として、可部の地にあり、
寺坂桃千代が住む、桃千代は草刈氏の老臣で、のち宇喜多家に属す
と記す。

文献

「東作誌」

7 古土居

所在地 津山市新野東

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

平賀元義の「美作視聴録」（『新野村史』所収）には新野郷東村下分
公文に「古土居」という所があると記す。『新野村史』は新野東
の俣称工門の地は公文所の所在地で、古土居は現在武山氏の宅地と
なっているとする。

文献

『新野村史』

8 河原山城（仮称）

所在地 津山市市場

津山市指定史跡

立地

市場地区の吹山城（本丸城）の北に位置し、広戸小学校の北西約
四〇〇mにあり、標高約二六〇mの丘陵上に所在する。

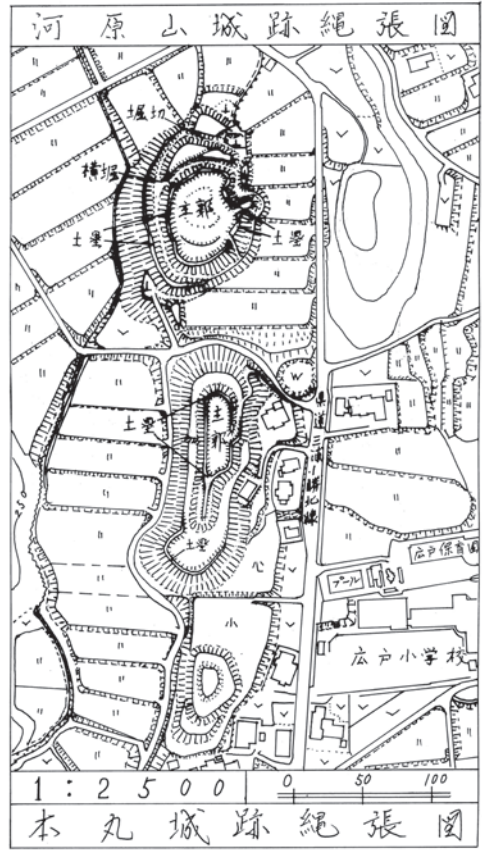
縄張

縄張りをみると、土塁を持つ主郭がありその廻りを横堀で囲繞す
る。立地的には丘城ともいえる様相を示す。中心となる主郭は六〇
〜七〇m四方の正方形の区画となっている。北側から西側にかけて
土塁と横堀がみられる。東側にも土塁が部分的にみられる。横堀を
挟んで北側にも削平の良い曲輪が確認される。主郭はさらに三
つの空間に分節する。その内、北東の曲輪が高所を占め、北東隅に
横矢掛かりを伴う櫓形虎口が確認される。

全体をみると、河原山城は沖構や石
須構のように方形の館城である。しか
しながら主郭の内側はさらに分節さ
れ、櫓形虎口を持つ最高部の曲輪に強
い求心性を持たせるような縄張りとな
っている。このような縄張り技術は



河原山城（仮称）



在地系縄張り技術ではほとんど見られない。むしろ織豊系縄張り技術の特徴を示す。このことから、おそらく主郭内部は後世に宇喜多氏など織豊系勢力による改修が入り陣城として整備された可能性が考えられる。中国国分け後の掃討戦に際して勝北地域掌握のために築かれた陣城とする可能性が高い。主郭の改修を除くと周囲は在来の館城の形状を残す。隣接する本丸城・国司尾館と共に複数の館城が密集する分布を示しており、村落単位の土豪層が横並びに割拠する様相を示す貴重な城郭遺跡となっている。

「東作誌」が吹山城（津山市市場）の家老屋敷とするうちのひとつにあたる。

平成一〇年度（一九九八、九）に勝北町教育委員会による実測調査が行なわれ、河原山城と命名された。

『勝北町埋蔵文化財発掘調査報告』1、『改訂岡山県遺跡地図』勝北43、『岡山の山城を歩く』78、『津山市の文化財』

文献

備考

城史

9 国司尾館（仮称）

所在地 津山市市場

津山市指定史跡

立地

市場地区の吹山城（本丸城）の東に位置し、広戸小学校の北約三〇〇mにある。前川右岸で、県道四五〇号線の東側に位置する。

北側に直線状の土塁が二本現存する。その他は後世の改変や破壊を受けており、現状から城跡の評価は困難である。

「東作誌」が吹山城（津山市市場）の家老屋敷とするうちのひとつにあたる。

文献

平成一〇年度（一九九八、九）に勝北町教育委員会による河原山城の実測調査に併せ調査が行なわれ、国司尾館と命名された。

文献

「東作誌」、『勝北町埋蔵文化財発掘調査報告1』、『改訂岡山県遺跡地図』勝北133、『津山市の文化財』

城史

10 関源次郎屋敷（仮称）

所在地 津山市市場

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は勝北郡広戸村市場分に藩主森家の親類、関源次郎の屋敷があり、今は竹内弥兵衛の屋敷となり、今に地名を「屋敷」という、のち奥津川村の小畑毛の地に、さらに備中国新見に移ると記す。

文献

「東作誌」



国司尾館（仮称）

11 吹山城・本丸城

所在地 津山市市場

津山市指定史跡

立地

前川右岸、広戸小学校や県道四五〇号線の西側に位置し、標高約二五〇mの丘陵上に所在する。

縄張

集落に近接して築かれた丘城。山頂に土塁囲みの主郭を構えて周囲に帯曲輪を配した縄張りを持つ。基本的には単郭に近い縄張り構造と評価される。近接して河原山城があり、村落に拠る土



吹山城・本丸城

城史

豪層が館城を近接して構えていた様相を知る手がかりとなる。正保書上五四城の一で、「古城之覚」は勝田北郡新野西村の「吹山城」として、城主を「岡本」次郎広実とする。「美作鬢鏡」と「美作鏡」は城主を「岡本次郎広実」とする。「東作誌」は「吹山城」として、岡本次郎広実のち竹内下総守吉家の居城で、本丸（上段、東西一〇間、南北七間、土塁が東・北・西の三方に廻る、竹藪）、本丸の南面は高さ一五、六間で急、二丸（東西四〇間余り、南北四〇間、高さ七間半、「小口」に二間四方の井戸あり、畑）、三丸（二〇間四方、南面は上り一〇間、畑）、家老屋敷が二ヶ所にあると記す。天保国絵図に「吹山古城跡」とあり。「勝北郡各村誌抄録」（大岡家文書）には「本丸城」として、村の南西にあり、小山は山林や畑になり、中央に古井戸（周囲四間、深さ三〇余間）、また邸趾が数十あり、言い伝えでは広戸弾正菅原弘家の子広戸新三郎が築城し、新三郎はのち備中国新見の合戦で戦死したという」と記す。『美作古城史』は、地元では本丸と唱えられているとある。

文献

「武家聞伝記」、「美作鬢鏡」、「東作誌」、「美作鏡」、「勝北郡各村誌抄録」、「岡山県通史」勝田18、「美作古城史」、「日本城郭大系」699、「勝北町誌」、「勝北町の文化財と石造美術」、「勝北町埋蔵文化財発掘調査報告」1、「改訂岡山県遺跡地図」勝北134、「岡山の山城を歩く」78、「津山市の文化財」

12 吹山

所在地 津山市市場

立地

広戸川右岸、市場地区の南方に位置し、標高約二七〇mの丘陵上に所在する。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は「吹山城」とは別に勝北郡広戸村市場分の「吹山」を載せ、別名岡本城、山のみで段は見えたと記す。

天正八年（一五八〇）三月、毛

利輝元は升形城に在番していた森脇春方に、「中山」（津山市新野山形）の付城「吹山」から敵勢が退いたとの報に接し、草薙氏と岩尾山城（津山市吉見）は一安心であろうと報じている（「藩中諸家古文書纂」）。書状にみえるのはあるいはこの吹山か。

「東作誌」、「勝北町埋蔵文化財発掘調査報告」1、「改訂岡山県遺跡地図」勝北48

文献



吹山

13 河内館

所在地 津山市原

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

『勝加茂史』は原に土居の内の地名があるとする。『日本城郭全集』は勝央町原の「河内館」として、岩井谷（真庭市岩井谷）の城主河内兵庫助政継の子八郎右衛門政康が、尼子氏によって城が落ちたため当地に逃れ、館を築いたとする。

文献

『勝加茂史』、『日本城郭全集』勝田郡10



構・仁木屋敷・下野田構（仮称）



構屋敷・野田構・上野田構（仮称）

14 構・仁木屋敷・下野田構（仮称）

所在地 津山市野田勝田郡勝央町榎北

立地

広戸川と羽出川に挟まれた下野田地区内にあり、県道四一五号線の西側で経王寺の北側付近の微高地に該当するとされる。

縄張

未詳。

城史

『勝加茂史』と『美作古城史』は下野田に「構」の地名があり、仁木氏の構居跡と認められ、前者は下野田に中土居の地名もあるとする。『日本城郭全集』は「野田城」とし、「構」または「仁木屋敷」と呼ばれており、当地の旧族仁木氏の居城で、当時のものと思われる石垣の一部と井戸、城主の塚があるとする。

文献

『勝加茂史』、『美作古城史』、『日本城郭全集』津山市20、『日本城郭大系』688、『改訂岡山県遺跡地図』勝北154・勝央57

15 構屋敷・野田構・上野田構（仮称）

所在地 津山市上野田

立地

県道四一五号線の西側の上野田地区内にあり、小沢池西側付近の微高地に該当するとされる。

縄張

未詳。

城史

『勝加茂史』は上野田の「構屋敷」として、由緒不明ながら、「東作誌」に長船氏が野田村に住むとあることから同氏の構居かとし、古土居、どる根、市場の地名があり、平賀元義の「視聴録」に「上市・下市といふ所在」とあるとする。『美作古城史』は「野田構」とし、『日本城郭全集』は「野田構」とし、服部慎吾氏宅を「構」と呼ぶとする。『改訂岡山県遺跡地図』は「上野田構」とする。

文献

『勝加茂史』、『美作古城史』、『日本城郭全集』勝田郡19、『日本城郭大系』689、『改訂岡山県遺跡地図』勝北153

16 金盛山城・金森山城

かなもりやま

かなもりやま

所在地 津山市中村

立地

広戸川と田柄川の合流点の南西にあり、新善光寺の東約二〇〇mに位置する。標高約一六〇mの小丘陵上にある。

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、上面はほぼ平坦とする。

城史

元禄二年（一六八九）の書上（『美作古城史』など所収）には、「金盛山」の古城があり、山の高さ二七間、山の畝の四方にある土



金盛山城・金森山城

文献

畠の内は東西二二間、南北二二間、城主年代ともに不詳とする。「東作誌」の勝賀茂庄西中村の項は「城山」の地名を載せ、今井兵庫介入道兼重が信濃国善光寺如来の前立像を将来し、小城を築いたなどと記す。明治初年の「勝加茂西村誌」（『美作古城史』など所収）には「金森山古城」として、東西三〇間、南北四〇間、山の高さ三〇間、土塁（長さ二〇間、高さ六尺）が残り、永徳二年（一三八二）の頃に今井兼重の居城というとする。なお『美作古城史』は、地元では「城山」と呼ぶとする。『改訂岡山県遺跡地図』は戦中、戦後に畑に開墾。城というよりも屋敷地か、土塁などは見られないとする。

『東作誌』、『美作古城史』、『勝加茂史』、『日本城郭大系』661、『勝北町誌』、『改訂岡山県遺跡地図』勝北89

17 いまさか屋敷・今坂屋敷・美作屋敷

いまさか

みまさか

所在地 津山市西上

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

元禄二年（一六八九）の「新野西上村古事書上ヶ帳」（『新野村史』所収）には「いまさか屋敷」として、村内の「だるま」という所に古屋敷あり、広さ東西一二間、南北一六間、北に横一間の堀のようなものがあると記す。『新野村史』は今は誤って「美作屋敷」と呼んでいるとする。

文献

『新野村史』

18 川戸屋敷

かわと

所在地 津山市西上

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

『新野村史』は、烏帽子形城（津山市西上）麓の金剛寺の東北に「川戸屋敷」の地名があると記す。

文献

『新野村史』

19 金剛山城・金剛寺城・鳥帽子形城

所在地 津山市西上

立地

山形仙から南南東に延伸する尾根の突端、標高約三八五mの金剛山頂上付近に位置する。旧勝北町から奈義町にかけて、那岐山丘陵を一望する。

縄張

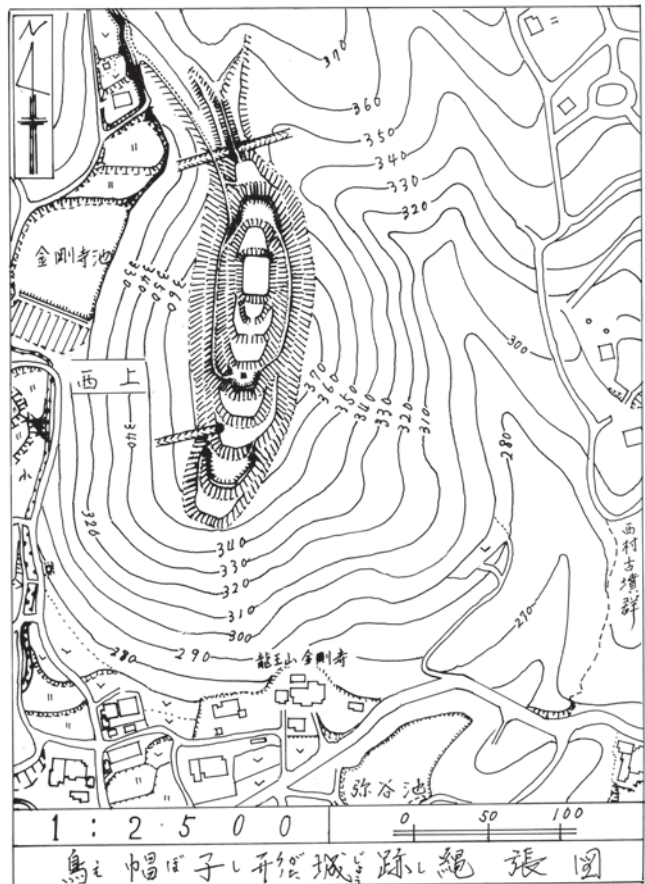
金剛山上に築かれた山城。山頂に主郭を構えて南北に曲輪を連ねる縄張りとなっている。南北の端に位置する曲輪は先端に土塁を凸状に構えており尾根筋からの攻め手に対する堡塁の役割を果たす。コンパクトに構成された縄張りで、この地域を支配した有力国衆の持城であると考えられる。

城史

正保書上五四城の、「古城之覚」は勝田北郡新野西村の「金剛山」「金剛寺」として、城主を山名忠村・上野対馬とする。元禄二年（一六八九）の「新野西上村古事書上ヶ帳」（『新野村史』所収）には「古城」として、山の高さ四五間、御本丸（東西一六間・南北二〇間、龍王の小社あり）、南へ一間下に構（長さ一一間・横六間）、さらに一間下に構（長さ三四間・横一〇間）、一間下に構（長さ九間・横一間）、二間下に構（長さ三〇間・横四間）、二間下に構（長さ二六間・横九間）、さらに西方から北東にかけて構（長さ五六間・横二間）があり、落城の経緯、城主ともに不明とある。「美作鬢鏡」は「金剛寺城」として城主を上野対馬守のみとする。また「古城之覚」



金剛山城・金剛寺城・鳥帽子形城



文献

は同村の「鳥帽子形」として、城主を江戸弾正入道広家、江戸氏の
本氏は岡本とする。城主について「美作鬢鏡」は「岡本弾正広家」。「美
作鏡」は「岡本弾正入道広家」とする。「東作誌」は古城「金剛寺山」
として、本丸（一五間四方、龍王の社あり）、二丸（一〇間四方）、
ほかに小郭三段、山へは三町余り、南に大手、井戸あり、松山で後
ろは険しい、一名鳥帽子形といひ永禄（一五五八〜七〇）の頃に岡
本弾正広家が居城というと記す。天保国絵図に「金剛寺古城跡」と
あり。『新野村史』と『美作古城史』は、別名に「岡本城」「尼ヶ城」
を挙げる。
「武家聞伝記」、「美作鬢鏡」、「東作誌」、「美作鏡」、「岡山県通史」
勝田16・17、『新野村史』、『美作古城史』、『日本城郭大系』673、『改
訂岡山県遺跡地図』勝北24

20 土居

所在地 津山市西上

立地 未詳。

縄張 未詳。

城史

『勝加茂史』は勝加茂西上字土居の「賀茂郷庁趾」として、往古郡郷の制度が機能していた時代の賀茂郷の庁の跡とする。加茂郷総社跡に隣接し、付近には保頭土居、鋳物師垣内地名も残るとする。

文献 『勝加茂史』

21 中西屋敷(仮称)・中西城(仮称)

所在地 津山市西中

立地 未詳。

縄張 未詳。

城史

『東作誌』は勝北郡西中村の「屋敷跡」として、宇喜多直家・秀家、小早川秀秋、池田輝政の時代までこの村に庁館があり、今に土塁の跡がわずかに残り、また東北条郡小中原村(津山市加茂町小中原)の中西氏は、新野庄西中村より出ると記す。『新野村史』と『美作古城史』は「中西城」として西中字中西にありとし、後者は東・南・北は道路、西は小流に限られた平坦地で、中西玄蕃頭吉勝が在城、中西氏の子孫という神田氏の宅地となっているが、北背に土塁などが残ると記す。

文献

『東作誌』、『新野村史』、『美作古城史』、『日本城郭大系』 683

22 城ノ段

所在地 津山市上村

立地 未詳。

縄張 未詳。

城史

『東作誌』は勝北郡西中村の「城ノ段」として、山で峯に平地(東西約一六間、南北約一八間)、古城跡と言いつたが不詳で、年代も不詳、今は墓地になると記す。

文献 『東作誌』

23 流郷構・流郷屋敷

所在地 津山市上村

立地 未詳。

縄張 未詳。

城史

『日本城郭全集』は勝北町上村の「流郷館」として、「流郷構」、「流郷屋敷」と呼ばれる城で、天和元年(一六八二)、流郷彦右衛門忠信が屋敷を構え、以降数代を経て重郎右衛門忠通に至り帰農したと記す。

文献

『日本城郭全集』勝田郡29、『日本城郭大系』 707

24

土居

所在地 津山市西下

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

『勝加茂史』は勝加茂西下の「土居の内構居趾」として、「土居の内」、「西堀」、「東堀」などの地名があり、石垣の基礎や井戸の跡があったが現在は埋没といい、村の土井氏と関係がありと伝えるなどとする。

文献

『勝加茂史』

25

末田城

所在地 津山市新野山形

立地

山形仙から南に延伸する標高約二五〇mの尾根上にある。津山市堀坂地区と新野山形地区を通る道の要衝に位置する。

縄張

『日本城郭全集』は、頂上の本丸、深い溝を挟んで二の段があり、石垣の一部、二の段と麓に井戸があると記す。

城史

『日本城郭全集』は、正平年間（一三四六～七〇）、美作菅家の一族末田大学頭重頼が築城、現在麓は開墾され田畑となると記す。

文献

『日本城郭全集』勝田郡15、『日本城郭大系』675、『改訂岡山県遺跡地図』勝北3



末田城

26 中山城、東ヶ城・西ヶ城

所在地 津山市新野山形

立地

新野山形地区の北方に位置する標高七九一・一mの山形仙を中心、東西の峰上に所在する。

地元では「西ヶ城」のことを

「城頭」とも呼ぶ。

縄張

山頂に主郭を構え東西の稜線に沿って曲輪を連ねる連郭式の縄張りである。西側には曲輪の塁

線に土塁を構えて橋頭堡のような縄張りが確認される。複郭構造でもあり広域大名権力の番城として整備された可能性も考えられる。



中山城、東ヶ城・西ヶ城

城史

明和七年（一七七〇）の山形村明細帳（『新野村史』所収）に「一古城跡 中山与申老ヶ所御座候得共、年数何角相不申候」とある。また「東作誌」は、勝北郡山形村の「東ヶ城・西ヶ城」として、北山にあり、城主・時代など不詳と記す。また別に八幡宮の後ろに嘉保年中（一〇九四～五）の国主、一説に菅原知範の墓を祀るといい、今に土塁の跡あり、北嶽を中山という」と記す。『新野村史』は「中山城」として、史実が不明で位置があまりに高いことから一夜陣ではないかとし、また『美作古城史』はこの山を「仲山城」とする。

天正八年（一五八〇）三月、毛利輝元は升形城に在番していた森脇春方に、「中山」の付城「吹山」から敵勢が退いたとの報に接し、草薙氏の拠る岩尾山城は一安心であろうと報じ、同年閏三月、吉川

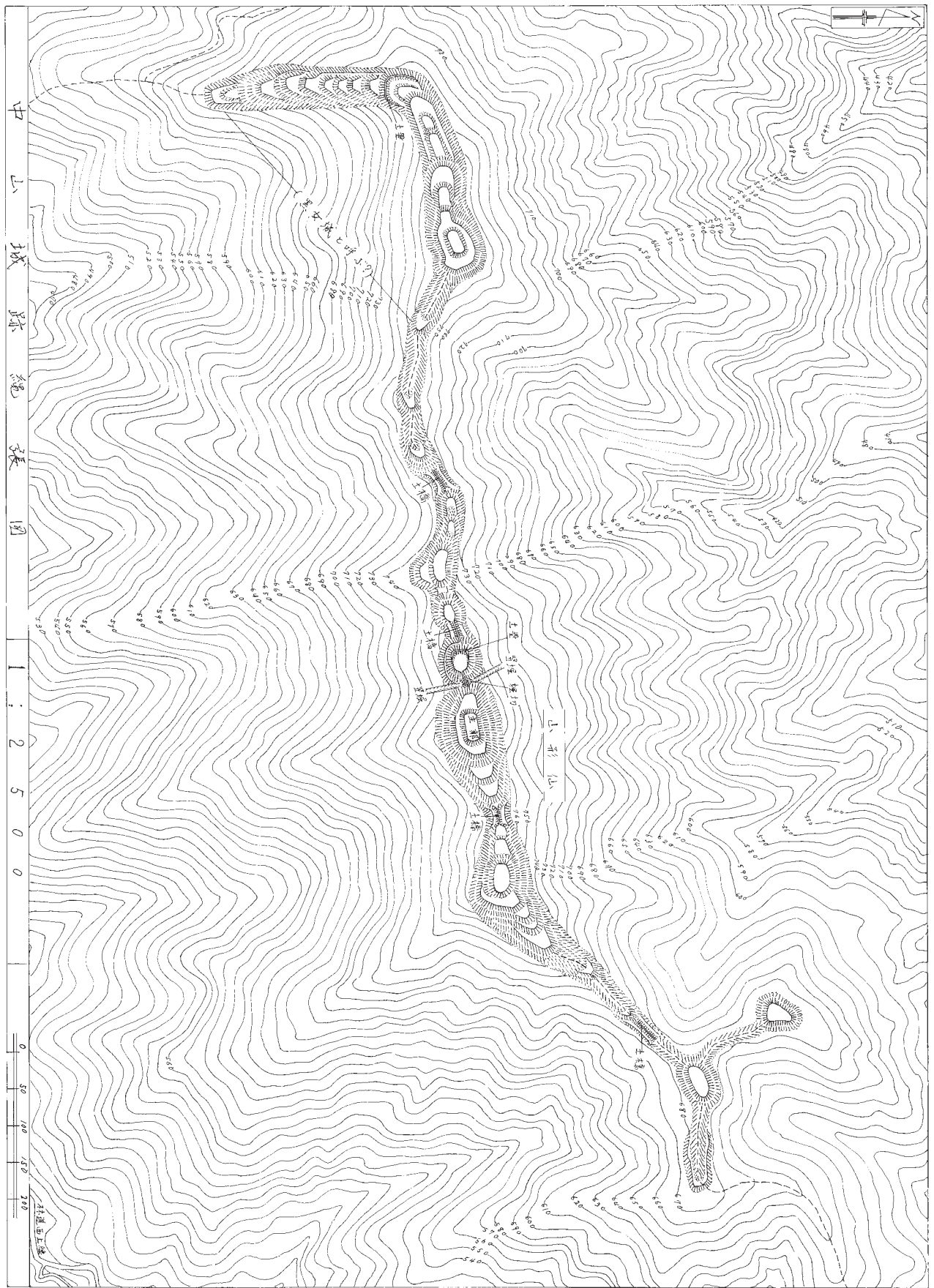
備考

元春は同じく春方に「祝山・中山」両城への兵糧搬入を命じている（『藩中諸家古文書纂』）。しかし同年六月には輝元が草苜重継に「中山逆意」に際しての岩尾山城堅持を賞しているように、城兵が毛利氏から離反したことが知られる（『関関録』）。

『津山市中世城郭等配置図』には山形仙（七九一・二m）の山頂西方を「黒女城」と表示する。

文献

『東作誌』、『新野村史』、『美作古城史』、『日本城郭大系』686、『勝北町誌』



〔美作市〕勝田町

27 長畑構

所在地 美作市久賀

立地

梶並川左岸で、久賀ダムの下流、下久賀橋の東側に位置する。集落が丘陵部に接する部分の東側、標高約一八〇mにある。

縄張

未詳。

城史

『日本城郭全集』は「長畑構」とし、久賀の字長畑にあり、地元では城山の名で呼ばれており、天正二年（一五七四）一〇月、長畑三郎三右衛門重則が築城した



長畑構

文献

『日本城郭全集』勝田郡17、『勝田町誌』、『日本城郭大系』684、『勝田町の城址と構え跡』、『改訂岡山県遺跡地図』勝田10

28 佐々木屋敷

所在地 美作市余野

立地

梶並川右岸にあり、余野地区の余野下集落付近に位置する。未詳。

縄張

城史

『日本城郭全集』は「佐々木館」として、「城の段」「佐々木屋敷」とも呼ばれているとし、近江国の蒲生氏郷の子清綱が天正一〇年（一五八二）六月に逃れ住んだという」と記す。

文献

『日本城郭全集』勝田郡14、『勝田町誌』、『勝田町の城址と構え跡』

29 鷹取城（仮称）

所在地 美作市余野

立地

梶並川右岸、淀川右岸にあり、県道三五六号線の西側にあたる。標高約二〇〇mの丘陵上に位置する。未詳。

縄張

城史

鷹取城は『日本城郭全集』『勝田町誌』ともに余野山屋敷の別名とするが、『改訂岡山県遺跡地図』は別の城館として所在と記す。

文献

『改訂岡山県遺跡地図』勝田14



鷹取城（仮称）

30 松本寺構

所在地 美作市余野

立地

余野下地区の集落の北部に接する標高約一六〇mの丘陵突端にある。梶並川右岸にあり、余野地区から奈義町中島東地区に至る道の要衝にある。

縄張

未詳。

城史

未詳。『日本城郭全集』は「松本寺構」とし、廃寺跡は当地の豪族で赤松氏の一族の上原氏の本拠で「上原構」ともいうとす



松本寺構

文献

『日本城郭全集』勝田郡26、『日本城郭大系』702、『勝田町誌』、『勝田町の城址と構え跡』、『改訂岡山県遺跡地図』勝田13

31 余野山屋敷・鷹取城

所在地 美作市余野

立地

梶並川右岸、淀川左岸にあり、丘陵尾根が南西に延伸し淀川に接する標高約一八〇m部分に位置する。鷹取城の東約四〇〇mに該当する。

縄張

未詳。

城史

元禄三年（一六九〇）の鷹取氏書上（『東作誌』所収）には、大和国から来た鷹取彦次郎種佐は「小吉野庄内余野村山屋敷」を築いて住んだといい、京都猪熊合戦で討死、種佐の弟で、余野村の「風呂屋之土居」に住んだ鷹取源右衛門は宇喜多氏に奉公し美野村（勝央町美野）を知行したとある。『日本城郭全集』



余野山屋敷・鷹取城

文献

『日本城郭全集』勝田郡27、『勝田町誌』、『日本城郭大系』677、『改訂岡山県遺跡地図』勝田15

32 大爺構

所在地 美作市真加部

立地

真加部地区の真加部中の集落内にあり、現在の勝田交通の場所に該当する。

縄張

未詳。

城史

『日本城郭全集』は大屋構、大爺屋敷ともいうとし、播磨国佐用郡大屋村の土豪大屋左衛門基尚が寛永九年（一六三二）に



大爺構

文献

屋敷を構え地域を開発、のち大爺を氏としたとする。『改訂岡山県遺跡地図』は現在は宅地化、圃場整備により地形が大幅に変更されており、その痕跡は認められない、消滅かとする。

『日本城郭全集』勝田郡5、『日本城郭大系』655、『勝田町誌』、『勝田町の城址と構え跡』、『改訂岡山県遺跡地図』勝田23

33 真加部構

所在地 美作市真加部

立地

真加部地区の旧勝田町役場付近一帯に該当するとされる。標高は約一五〇mで、県道五一号線の西側にあたる。

真加部集落の背後に位置する丘城。丘陵の先端に堀切を入れて城域として整備したもの。城域は単郭の主郭と帯曲輪から構成される。主郭の周りには土塁がみられるが、主郭自体が地下げされている可能性がある。



真加部構

城史

「古城之覚」は勝田北郡真加部村の「真加部」として、城主を「安東信濃」とする。「東作誌」は勝田北郡真加部村の「構」として、屋敷構（東西三八間、南北三三間）、輪のように空堀（深さ三間、幅三間）あり、西を表に四方とも田畑、東に梶並川、昔安藤信濃守が住む、時代不詳と記す。『岡山勝田郡志』は、元亀・天正中（一五七〇～九二）に安東信濃守為泰、肥前守らが居住し、後藤勝基に属したという。『美作古城史』は構は現在学校の敷地とし、『勝田町誌』は旧勝田中学跡現勝田町役場の敷地がこの一画であるとする。

文献

「武家聞伝記」、「東作誌」、「美作古城記」、「岡山県勝田郡志」、「美作古城史」、「日本城郭全集」勝田郡24・補遺、「日本城郭大系」701、『勝田町誌』、『勝田町の城址と構え跡』、『改訂岡山県遺跡地図』勝田25

34 真加部山城・上の山城

所在地 美作市真加部

立地

旧勝田町の中心地・真加部地区の西にあり、当林寺の北西約二〇〇mに位置する。標高は約一六〇mで、東に延伸する丘陵先端に位置する。

真加部集落の背後に位置する丘城。丘陵の先端に堀切を入れて城域として整備したもの。城域は単郭の主郭と帯曲輪から構成される。主郭の周りには土塁がみられるが、主郭自体が地下げされている可能性がある。



真加部山城・上の山城

城史

「古城之覚」は勝田北郡真加部村の「真加部山」として、城主を「原与四郎」とする。「美作鬢鏡」は「真加部山城」、「美作鬢鏡」は「真加部城」とし、城主を「原与次郎」とする。「東作誌」は勝田北郡真加部村の「上の山城」として、本丸（東西三三間、南北二三間）、二丸（東西二四間、南北一二間）、城山の高さ六間、南を表に西は山続き、東は家、南は平地で「城の段」といい、城主を原与次郎とする。『岡山県勝田郡志』は、文明・長享年中（一四六九～八九）に山名持豊の家臣原与次郎が居城、与次郎は延徳元年（一四八九）に有元・奥山・小坂氏らの領地に侵攻したが、赤松氏の一族宇野貞重の攻撃を受け、与次郎は播磨国へ逃れたとする。

縄張

縄張

立地

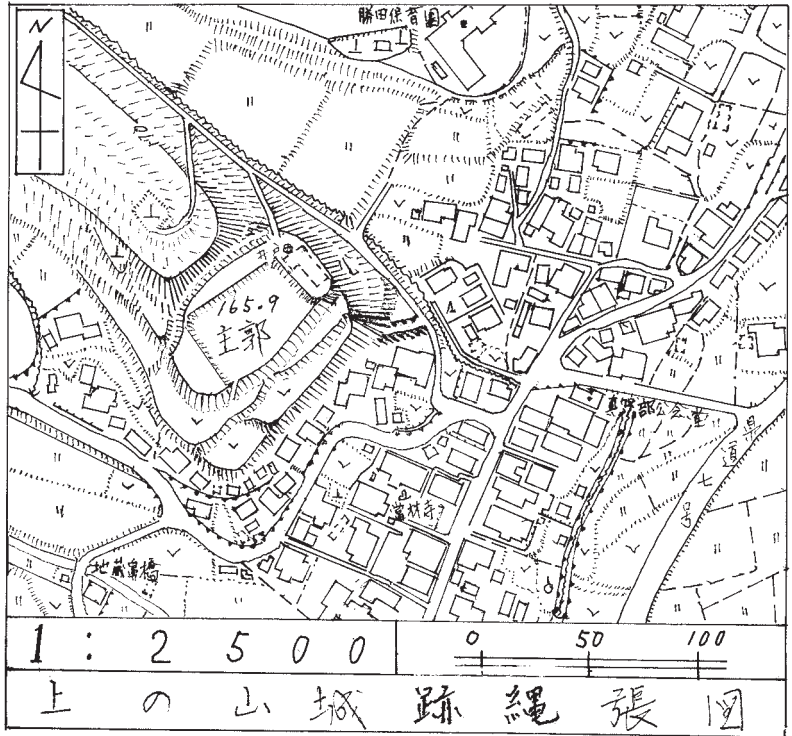
大町地区と長谷内地区との間に位置する標高約二八〇mの丘陵尾根上にある。

35 比丘尼城

所在地 美作市長谷内・大町

文献

「武家間伝記」、「東作誌」、「美作古城記」、「岡山県勝田郡志」、「美作古城史」、「日本城郭全集」勝田郡24・補遺、「日本城郭大系」701、「勝田町誌」、「勝田町の城址と構え跡」、「改訂岡山県遺跡地図」勝田25

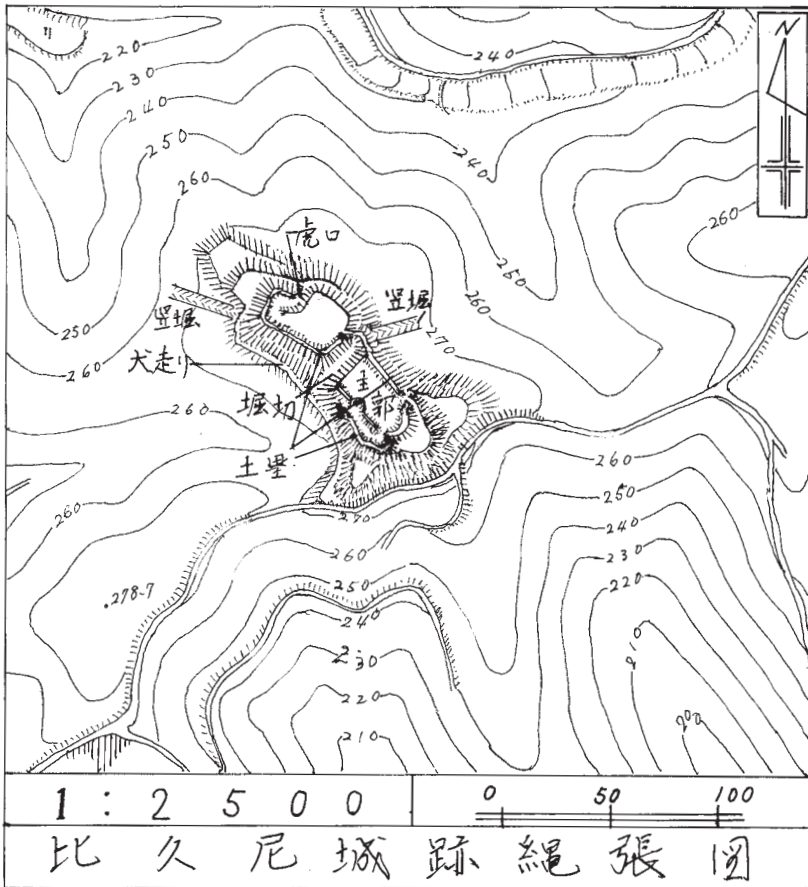


城史

「勝田町誌」所収)に長谷内村に古城屋敷あり、「天文年中雲州戸田大兎の領地なり、其の節止城(此)に尼子の軍勢陣取り要塞致し候も、昔老人のもの共申し伝え、これを比丘城と申すなり」とあるという。

縄張

縄張りをみると、中央に横堀を入れて北西と南東に曲輪を配する。それぞれの曲輪には折れを伴う虎口が確認される。また、中央の横堀は北東側に閉塞土塁がみられる。図の表記通りに確認されるならば、比丘尼城は周囲の在地系縄張り技術の城郭に比べて技巧的な用法が多々みられる。今後縄張りについて精査する必要がある。



文献

『東作誌』の吉野郡長谷内村の項には城主不明、尼子氏の城跡であるので比丘尼城と言い習わすといい、山の高さ約六〇間、形はわずかに残り嶺を切り開いた所あり、山の西半分は向原村との境と記す。勝北郡向原村の項には、大谷ともいい、本丸（東西二四間、南北四間）、東が大手で山の高さ七二間などと記す。『英田郡史考』は「比丘尼ヶ城」とする。『美作古城史』は一夜城の跡で、名前から天文年間、出雲尼子氏進出の際の拠点かとする。

『東作誌』、『英田郡誌』、『英田郡史考』、『美作古城史』、『勝田町誌』、『勝田町の城址と構え跡』、『改訂岡山県遺跡地図』勝田36

36 高山城

所在地 美作市馬形

立地

馬形地区の粟井川左岸、標高約二六〇mの丘陵上に位置する。国道四二九号線、馬形地区に「作州武蔵CC」の看板がある。その看板を右手に見つつ、右斜め前方のお椀を伏せたような小山が城跡である。その麓に標柱も立っている。

縄張

縄張りをみると、西側の主郭部と北側の第二郭（图中、楯形・馬場郭）に大きく分かれる。主郭部は山頂の主郭と周囲の帯曲輪から構成される。主郭の西側は一段下がり両端を土塁で囲む橋頭堡となっている。一方、北側の第二郭は堀切で二分され、両側に帯曲輪



高山城

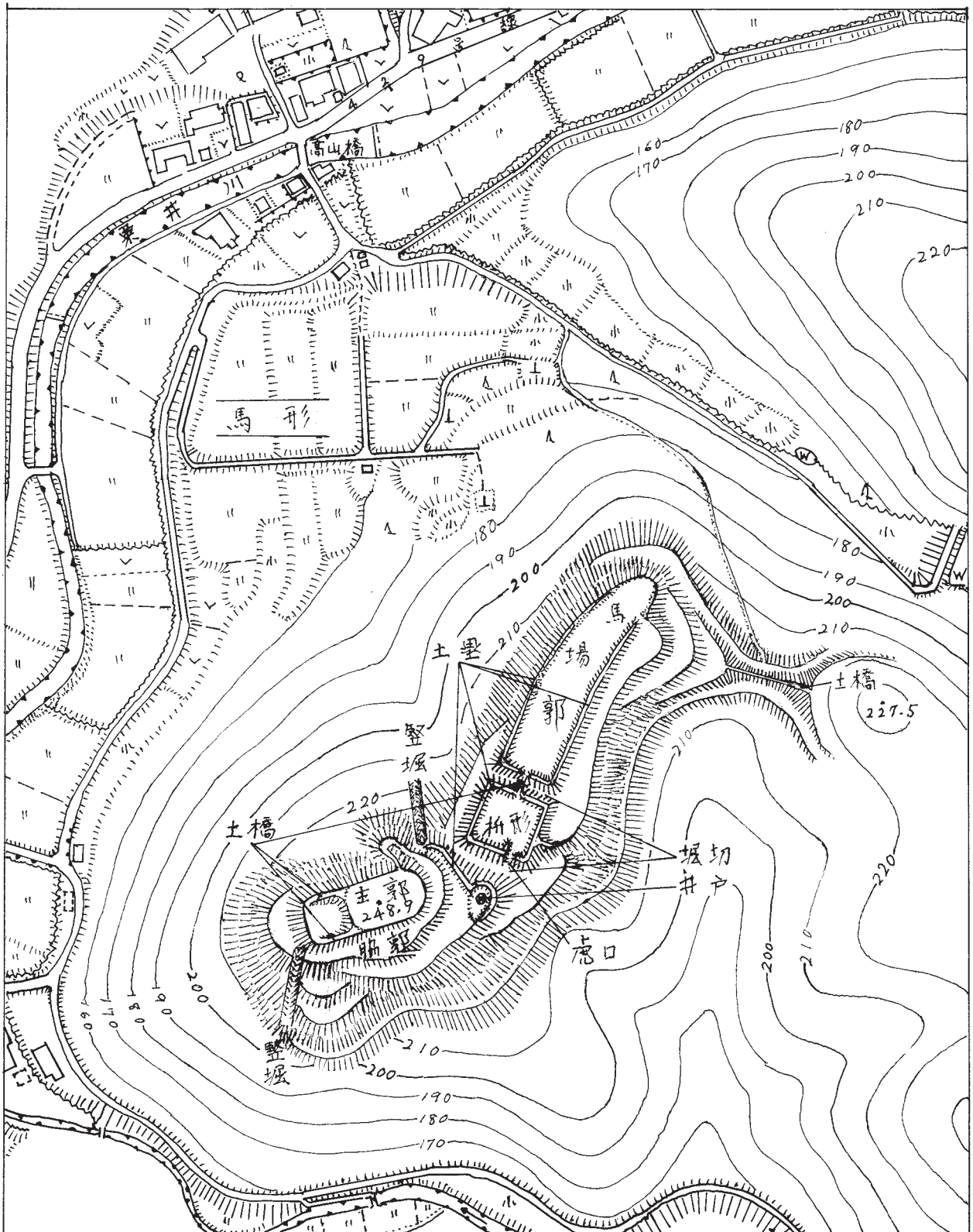
城史

が配された。主郭部と第二郭はつながりがみられず、それぞれ単体で機能する縄張りとなっている。複数の曲輪群が横並びに分布する配置から、村落に拠った有力土豪が立て籠った山城と考えられる。高山城や高畑城などの事例から、粟井川流域の土豪層はそれぞれが自前の城郭普請を行い横並びに割拠していたことが見て取れる。また、土塁を積極的に行うなど活発な築城を行っていたことがうかがえる。

正保書上五四城の一で、「古城之覚」は吉野郡馬形村の「高山」、勝部村の「高山之（城）」として、後者には城主を粟井一族、粟井からの出城で、高さ一町半余り、南・北・西は谷が深く、山続きは要害でよい水が多いとする。元禄一〇年（一六九七）とされる村々書上（『粟広村史』所収）には、勝部村の内に高山城あり、高畑城と共に「粟井の城主軍用之出城」で城番は年替りの者といい、今跡はなしとする。「美作鬢鏡」も勝部村と馬瀬村（馬瀬）にそれぞれ高山城があるとするが、村名の改称による重複である。「東作誌」は城主を粟井一族あるいは須々木主計とし、本・二・三と三段からなり、二・三の丸は一町四方、本丸は四〇間四方で土塁と堀跡あり、「須々木段」があると記す。天保国絵図に「古城跡」とある。

『武家聞伝記』、『美作鬢鏡』、『東作誌』、『美作古城記』、『英田郡誌』、『英田郡史考』、『岡山県通史』英田2、『美作古城史』、『日本城郭大系』679、『勝田町誌』、『勝田町の城址と構え跡』、『改訂岡山県遺跡地図』勝田55、『戦国山城を攻略する』

文献



高山城跡縄張図

所在地 美作市馬形

立地

粟井川の上流右岸、馬形上集落の東奥、旧作東町との境界付近の標高約三二〇mの丘陵上にある。南を県道四二九号線に接する。



高畑城

縄張

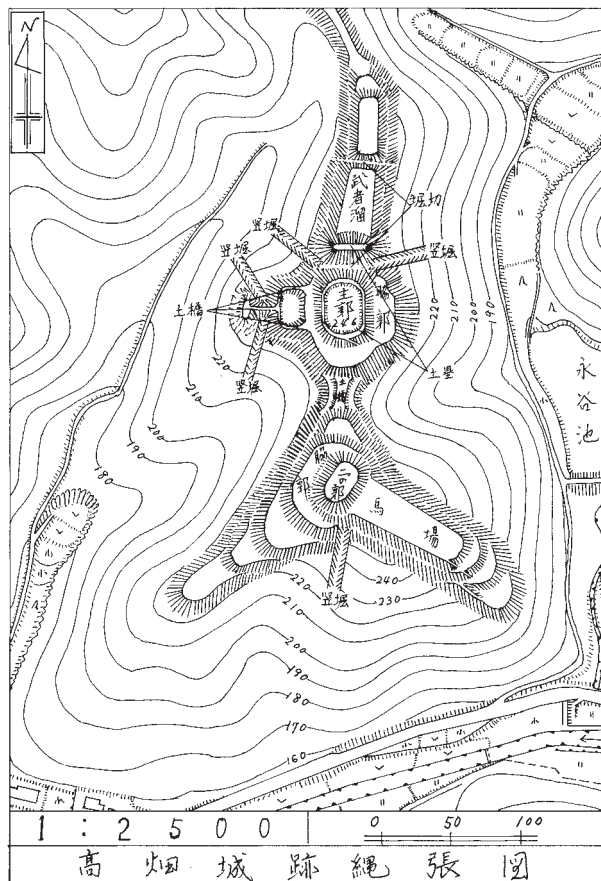
高畑城の縄張りをみると、北側の主郭部と南側の第二郭に大きく分かれる。主郭部は、土塁囲みの主郭を中心に横堀のように取り囲む帯曲輪と堀切が周囲を囲む。主郭の西側には両端に土塁を伸ばし先端に堅堀を配した堡塁状の曲輪がみられる。一方、南側の第二郭は中央の曲輪と南東側の馬場とよばれる広い曲輪から構成される。そして南西側に向けて複数の曲輪を連ねるプランとなっている。

城史

高山城と同じく、複数の曲輪群が横並びに割拠するプランから、複数の土豪層が横並びに立て籠った様相がうかがえる事例である。「古城之覚」は吉野郡勝部村の「高畑之（城）」として、城主を粟井景盛の家臣須々木主計と記す。元禄一〇年（一六九七）とされる村々書上（『粟広村史』所収）には、勝部村の内に高畑城あり、高山城と共に「粟井の城主軍用之出城」で城番は年替りの者といひ、今跡はなしとする。「東作誌」は城主不詳と記し、あるいは高山城と記事が混乱か。『英田郡史考』は「高畑城」とする。『美作古城史』は高山城の属城かとする。

文献

「武家聞伝記」、「美作鬢鏡」、「東作誌」、「美作鏡」、「英田郡誌」、「英田郡史考」、「岡山県通史」 苦田35・英田1、「美作古城史」、「日本城郭大系」 678、「勝田町誌」、「勝田町の城址と構え跡」、「改訂岡山県遺跡地図」 勝田56

38 大町山城・別所山城
おおまちやま べっしよやま

所在地 美作市大町

立地

大町下地区の粟井川右岸にあり、勝田東小学校の西約六〇〇mに位置する。標高約一六〇mの緩やかな丘陵上にあり、谷を挟んで東に星尾城が隣接する。

縄張

単郭の曲輪の周囲を平坦地が続くプランとなっている。近接する星尾城・干尾城と共に小規模な丘城が横並びに分布する。村落単位の

城史

土豪層がそれぞれ高所に立て籠り割拠した様相が見て取れる。

「古城之覚」は勝田北郡大町村の「大町山」として、城主を「大町甚右衛門尉」とする。「東作誌」は勝北郡大町村の「別所山城」として、別名を小山、本丸（東西二三間、南北二二間）、二丸（東西七間、南北二一間）、三丸（東西六間、南北九間）、山の高さ四五間、東・西は谷、北は山に連なり、南は平地で大手口、大町右京・同主計が住むと記す。



大町山城・別所山城

文献

「武家聞伝記」、「美作鬢鏡」、「東作誌」、「美作鏡」、「美作古城記」、「岡山県通史」勝田12、「美作古城史」、「日本城郭全集」補遺、「日本城郭大系」696、「勝田町誌」、「勝田町の城址と構え跡」、「改訂岡山県遺跡地図」勝田39

39 星尾城・構

所在地 美作市大町

立地

大町下地区と上地区の中間、粟井川右岸にあり、勝田東小学校の西約四〇〇mに位置する。標高約一六〇mの尾根上にあり、谷を挟んで西に大町山城、東に干尾城が隣接する。

集落へ向けて伸びる尾根筋を堀切で断ち割り、先端部を城域として整備したプランである。単郭を含めて四段の曲輪で構成される。隣接する大町城・干尾城の二つの城と共に小規模な丘城が横並びに分

縄張

城史

布する。村落に割拠した土豪層が背後の高所に立て籠った様相が見て取れる。

「東作誌」に勝北郡大町村に「星尾城」、一名を「構」として、東西二五間、南北二二間、四方は平地で南が大手、城主は大町右京などとする。「日本城郭全集」は「星尾城」「星尾構」と重出し、前者に天文（一五三二～五五）



星尾城・構

遺物

の初めに干尾重郎忠朝が築いて居城としたもので、本丸跡の中央には礎石が埋めてあり、その上に忠朝を祀る小祠があり、二の丸との間の段には忠朝の五輪塔など古墓が多くあり、本丸の周囲には石垣が軒々と残るとする。瓦等。

文献

「東作誌」、「勝田町誌」、「美作古城史」、「日本城郭全集」勝田郡23・補遺、「日本城郭大系」697、「勝田町の城址と構え跡」、「改訂岡山県遺跡地図」勝田40

40 干尾城

所在地 美作市大町

立地

大町上地区の粟井川右岸にあり、勝田東小学校の西約三〇〇mに位置する。標高約一八〇mの尾根上にあり、谷を挟んで西に干尾城が隣接する。



文
献

『勝田町の城址と構え跡』

『勝田町の城址と構え跡』は「山王山砦、山王山と呼ぶ砦跡があり、同村の水鳥氏の拠点との説もあり、城主と星尾城（美作市大町）の城主との合戦により、付近に「きり田」の地名があるとする。

城
史

縄
張

粟井川左岸にあり、標高約二〇〇mの緩やかな丘陵上に位置するとみられる。付近一帯は、現在ゴルフ場になっている。
未詳。

立
地

41 山王山城

所在地 美作市大町

文
献

『勝田町の城址と構え跡』、『改訂岡山県遺跡地図』勝田41

城
史

『勝田町の城址と構え跡』は『日本城郭全集』を引き、星尾城とは別に干尾



干尾城

丘陵上の曲輪は切岸が弱く自然地形に近い様相を示す。大町山城・星尾城と共に小規模な丘城が横並びに分布する。村落単位で割拠した土豪層が背後の高地に築いて立て籠ったものと考えられる。

縄
張

42 河内山城

こうちやま

所在地 美作市河内

立地

河内地区の梶並川右岸にあり、県道四二九号線の西側に位置する。標高約二二〇mの丘陵上にある。

河内集落の背後に伸びる尾根の先端を城域として整備したものとみられる。

城史

「古城之覚」は勝田北郡河内村の「河内山」として、城主を「有本遠江」とし、「美作鬢鏡」は「有本遠江守」とする。

「東作誌」は勝北郡河内村の「河内山城」として、城主は有元遠江守、

高さ五〇間、本丸（東西二〇間、南北一八間）、土塁（横一間、高さ二間）、二の丸（東西一八間、南北七間）、土塁（横一間、高さ二間）、本丸と二の丸の間に土塁（長さ二〇間、横一間、高さ三尺）あり、

東は吉野郡から津山への往還で下に川、西は山続き、南は谷、北は平地で東を表とすると記す。『日本城郭全集』は「河内山城」とし、

現在何の遺構もないとする。『日本城郭大系』は、美作菅家の宗家 有元佐弘、のちに有元佐氏が在城し、文龜三年（一五〇三）に落城とする。

踏査を行なった山形省吾氏は埋立で消滅とするが、『改訂岡山県遺跡地図』はその上方に遺構を示している。

文献

「武家聞伝記」、「美作鬢鏡」、「東作誌」、「美作鏡」、「美作古城記」、「岡山県通史」勝田11、「美作古城史」、「日本城郭全集」勝田郡11、「日本城郭大系」670、「勝田町誌」、「勝田町の城址と構え跡」、「改訂岡山県遺跡地図」勝田27



河内山城

立地

縄張

城史

文献

43 西田屋敷

にしだ

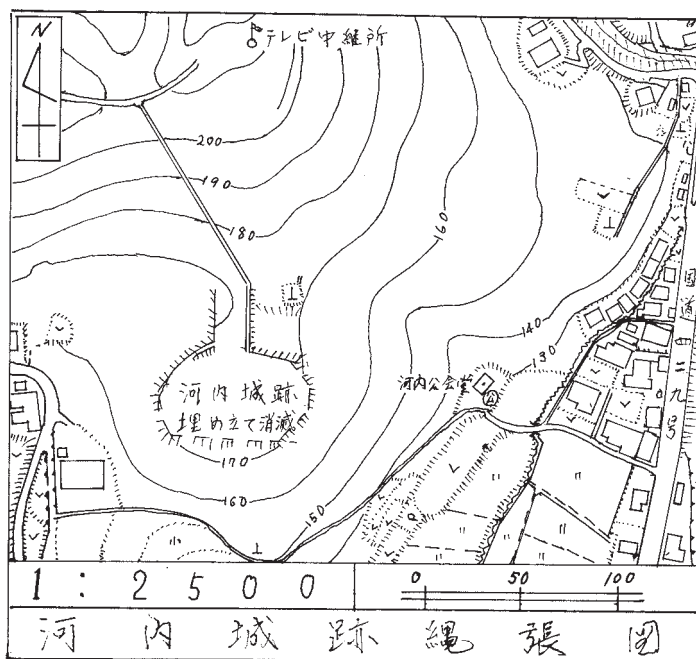
所在地 美作市矢田

梶並川右岸にあり、矢田地区と杉原地区の間にある広い谷を西に進んだ場所付近に所在するとみられる。

未詳。

『勝田町の城址と構え跡』に「西田屋敷」として、京都四条猪熊の合戦で討死した西田右衛門佐知衡の子平太夫知義から七代次郎大夫裕高まで浦上氏に属し、矢田に屋敷を構えたといわれているとする。

『勝田町の城址と構え跡』



44 右手城

所在地 美作市右手

立地

梶並川の右岸、中右手地区の集落西側の標高約三七〇mの尾根上に位置する。

縄張

縄張りをみると、丘陵の先端に複数の郭を連ねたプランとなっている。他の事例と異なり、後方に堀切を持たない。但し斜面の曲輪は集落に近いことから後世の造作や畑・山仕事等の城郭類似遺構の可能性もあるので注意を要する。城郭として機能した場合は、村落に抱った土豪層の持城と考えられる。

城史

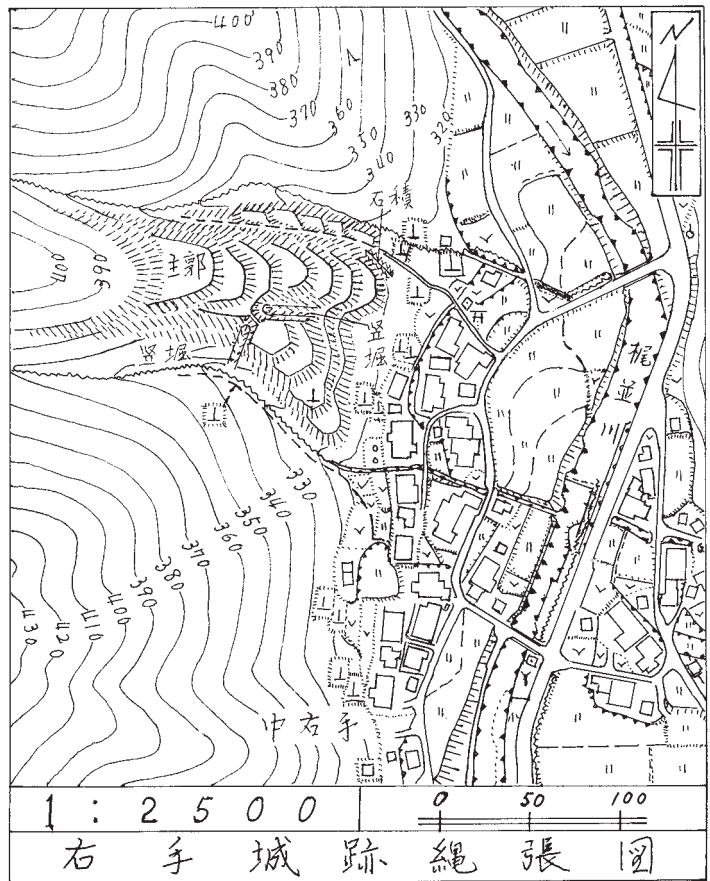
『日本城郭全集』は「右手城」として、古手谷に城山とか城の跡と呼ばれている山があり、灌木、雑草が茂っているが頂上は平坦で二段三段と区切られていると記す。また『改訂岡山県遺跡地図』は、尼寺があったとの伝承があり、山裾には五輪塔の集積もあることから寺院跡の可能性もあるとする。

文献

『日本城郭全集』勝田郡2、『勝田町誌』、『勝田町の城址と構え跡』、『改訂岡山県遺跡地図』勝田7



右手城



45 上の土居・富坂屋敷・駿河屋敷

所在地 美作市東谷下

立地

東谷下地区の富坂集落の西側に位置し、東谷川右岸の標高約三七〇mの尾根上にある。

縄張

縄張りをみると、背後に堀切を入れて先端を城域として整備する。単郭の主郭部が城域の大半を占める。後は周囲に帯曲輪がみられる。但し、南東側に延びる尾根筋は墓地として造成されており形状を読み取ることが難しい。築城主体は明らかではないが、分散的な縄張り構造と集落に隣接したことから、村落に抱った土豪層の持城と考

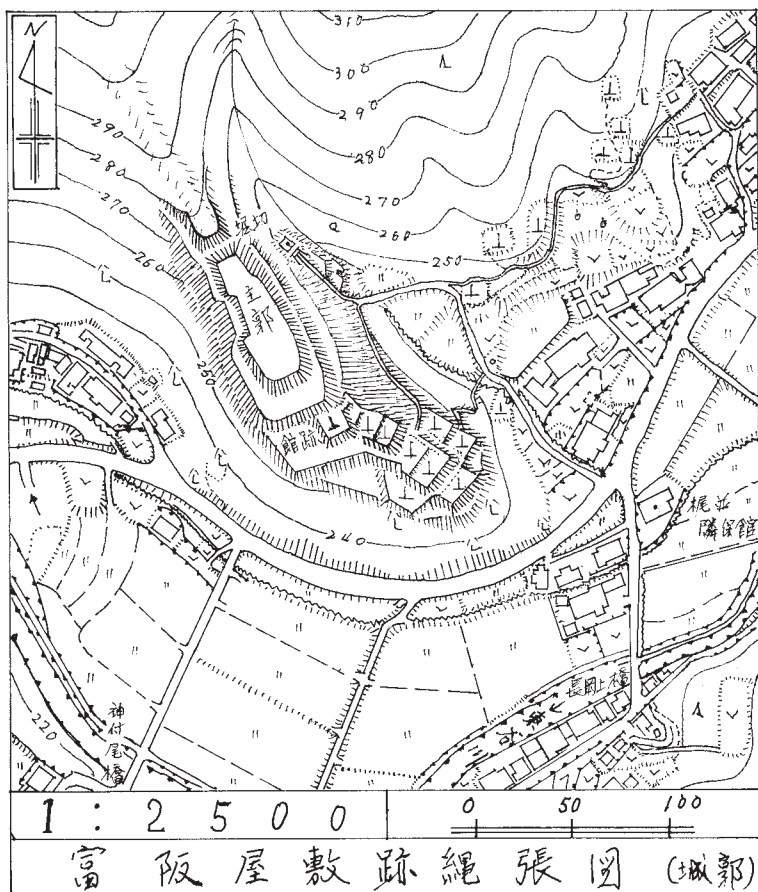
城史

えられる。

『東作誌』は勝北郡東谷下村の「上の土居」として、二〇間四方、富坂駿河守の屋敷跡と記す。『岡山県勝田郡志』は「梶並上の土居館址」として、富坂氏は本姓工藤氏、伊勢国長野城主で右京進某が美作国に来住したとする。『美作古城史』は「富坂屋敷」とし、字上の土居にありとする。『日



上の土居・富坂屋敷・駿河屋敷



文献

本城郭全集』は「富坂屋敷」、別名を「駿河屋敷」といい、石垣の一部と井戸を遺すと記す。『勝田町の城址と構え跡』は、屋敷の上に砦跡と呼ばれてきた段があるとする。

『東作誌』、『岡山県勝田郡志』、『美作古城史』、『日本城郭全集』勝田郡16、『日本城郭大系』681、『勝田町誌』、『勝田町の城址と構え跡』、『改訂岡山県遺跡地図』勝田5

勝央町

46 出雲井館

所在地 勝央町河原

立地

河原地区の梶並川右岸にあり、大銀杏の古木の西、背後を山林部と接する場所に屋号「出雲井」の居宅がある。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は勝北郡磧村の「出雲井館」として、竪二六間、横一八間で周りに堀切あり、諏訪明神の神主・大宮司の供として出雲井（諏訪）宗四郎が来て住むと記す。

文献

「東作誌」

47 菊松屋敷

所在地 勝央町河原

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は勝北郡磧村の「出雲井館」として、竪二六間、横一八間で周りに堀切あり、諏訪明神の神主・大宮司の供として出雲井（諏訪）宗四郎が来て住むと記す。

文献

「東作誌」

48 鎌倉屋敷

所在地 勝央町豊久田

立地

県道四二九号線と三五四号線が合流する地点の北東約三〇〇mにあり、標高約一七〇mの平地上に位置する。池のすぐ西側に該当する。

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、荒神池の南側丘陵の先端部、六五mにわたり丘陵を切断する深さ三mほどの掘と西側に一mほどの土塁が残存とする。

城史

「東作誌」は勝北郡八日市村の「鎌倉屋敷」として、土居の地にあり、東西六五間、南北七〇間、北東・南の三方に土塁（広さ三間、深さ二間）、堀切あり、今は田畑となつて少々館の跡が残る、二階堂法眼の家臣で地頭代の土井兵庫・佐桑佐兵衛が住み五、六代相続し、北条高時滅亡の時、菅家一族に亡ぼされると記す。

遺物

土師器・勝間田焼。

文献

「東作誌」、「美作古城史」、「日本城郭全集」勝田郡8、「日本城郭大系」665、「美作国鎌倉屋敷」、「勝央町誌」、「改訂岡山県遺跡地図」勝央467



鎌倉屋敷

49 神尾山城

所在地 勝央町豊久田

豊久田地区の大畑集落の西、標高約二六二mの神尾山頂付近に位置する。

未詳。

未詳。

『改訂岡山県遺跡地図』勝央544

立地

縄張

城史

文献

50 殿屋敷との

所在地 勝央町上香山

未詳。

未詳。

「東作誌」は勝北郡上香山村の「殿屋敷」として、誰の居跡か不詳と記す。

「東作誌」

立地

縄張

城史

文献

51 構城かまえ

所在地 勝央町美野

美野地区天地集落を通る県道三五五号線の東側にあり、標高約一七〇mの緩斜面上に位置する。

立地

縄張

城史

未詳。

「東作誌」は勝北郡美野村の「構城」として、山城なり、西を表とする本丸（二二間四方）、東には土塁（高さ四間）、堀（長さ五六間、横二間半）、南は高さ一〇間の岸、南西は山の八合目に汲池あり、山下には昔片原町があったという「市場」、谷に昔浴室という「風呂屋」の地があり、城主は堀田加賀守というが時代不詳と記す。

「東作誌」、「美作古城記」、「岡山県勝田郡志」、「美作古城史」、「日本城郭大系」663、『勝央町誌』、『改訂岡山県遺跡地図』勝央540

文献

52 小風呂城・城山こふる

所在地 勝央町美野

美野地区天地集落を通る県道三五五号線の西側にあり、集落北側の標高約一六四mの丘陵上に位置する。

未詳。

「東作誌」は勝北郡美野村の「小風呂城山」として、本丸（東西一六間、南北一〇間）、二丸（東西八間、南北六間）、西に大手、東北に堀（長さ三〇間、横一二間）、北に櫓跡（東西五間、南北三間）あり、城山は高さ

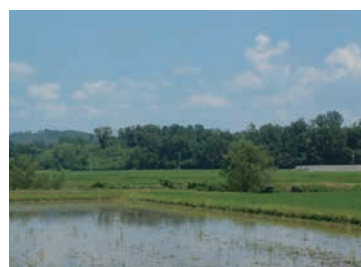
一二間で、南は道、西は平地、北は連山、東は谷、城主は鷹取彦次郎でのち宇喜多氏の家臣猪股采女が居城し近郷を支配したと記す。

また城山には法浄寺墓があり、昔僧のいた法浄寺の跡という。ちなみに元禄三年（一六九〇）の鷹取氏書上（「東作誌」所収）には、大和国から来た鷹取彦次郎種佐の弟で、余野村（美作市余野）の「風

立地

縄張

城史



小風呂城・城山

呂屋之土居」に住んだ鷹取源右衛門は宇喜多氏に奉公し美野村を知
行したとある。

文 献 「東作誌」、「美作古城記」、「岡山県勝田郡志」、「美作古城史」、「日
本城郭大系」671、「勝央町誌」、「改訂岡山県遺跡地図」勝央 553

53 将監屋敷

所在地 勝央町美野

立 地 未詳。

縄 張 未詳。

城 史 「東作誌」は勝北郡美野村の「将監屋敷」として、片山の地にあり、
何某将監の屋敷跡といい、一六間四方あり、今は畑となると記す。

文 献 「東作誌」

54 石生構・構

所在地 勝央町石生

立 地 岩倉川左岸にある、標高約二〇九mの緩やかな山頂付近に位置する。
石生・河原・美野地区を一望できる。

縄 張 未詳。

城 史 「東作誌」は、勝北郡石生の「構」として長ケ鼻にあり、山の高さ
二七間で、構（二〇間四方）の跡があり、西は川、東は連山、北は
谷、南は平地、居主は不詳と記す。

文 献 「東作誌」、「美作古城史」、「日本城郭大系」652、「勝央町誌」、「改訂
岡山県遺跡地図」勝央 443

55 糸山城・筑紫城

所在地 勝央町岡

立 地

縄 張

城 史

岡地区の集落北西部、中国自動
車道と南を接する標高約一六〇
mの尾根突端上にある。

未詳。

「古城之覚」は英田郡岡村の「い
と山」「筑紫」と併記して、城主
不詳とする。「美作鬢鏡」は誤つ
て「圓山筑紫城」、「美作鏡」は
「糸山筑紫城」と一つの城名とす
る。「東作誌」は黒土村の条に載
せ、岡村の北にあり、今は少々の岡となつて確かでない、城主は不詳、
村の伝えでは昔、源頼光が筑紫国に赴くときこの地に屯陣したこと
で筑紫の城というと記す。『勝間田町誌』は「筑紫城」とし、一説
に九州の小式澄友が、元弘二年（一三三二）に筑紫探題北条英時を
滅ぼし、残党掃討のため美作国に入り、仮城を構えたことにより、
居城二年で京都に向かい廃城になったとする。『日本城郭全集』は
「糸山筑紫城」と「京山筑紫城」として重複掲載している。

「武家聞伝記」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「勝間田町誌」、「岡山県通史」
勝田25、「美作古城史」、「日本城郭全集」補遺、「日本城郭大系」650、「勝
央町誌」、「改訂岡山県遺跡地図」勝央 711



糸山城・筑紫城

56

岡城 おか

所在地 勝央町岡

立地

岡地区の集落の南南東の端にある微高地上に位置する。標高は約一〇〇m。

縄張

未詳。

城史

『日本城郭全集』は「岡城」とし、天正（一五七三〜九二）の頃、宇喜多直家が部将岡平内家利・延原弾正・川副美作守・斎藤新五右衛門らを出勢させた際、神社の社地に岡家利が本陣を置き、三星城（美作市明見・入田）の城主後藤勝基、小山城（勝央町植月中）の城主植月豊後守を討った、別名を八幡山城といい、周辺に「馬場」「城内」の地名が残り、本丸跡の神社本殿裏には城の石垣の一部が残ると記す。



岡城

文献

『日本城郭全集』勝田郡6、『日本城郭大系』656、『改訂岡山県遺跡地図』勝央715

57 神崎屋敷・神崎城 かんざき

所在地 勝央町黒土

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

『日本城郭全集』は「神崎屋敷」とし、または「神崎城」、神崎氏は播磨国神崎郡を本拠とする赤松氏の一族で、赤穂浪士の神崎与五郎は津山藩主森忠継、次いで赤穂藩主浅野長矩に仕えたとする。

文献

『日本城郭全集』勝田郡12

58 小矢田城・戸倉城 おやた

所在地 勝央町小矢田

立地

東吉田地区と小矢田地区の間の滝川右岸に位置し、標高約一六〇mの城山山頂付近にある。北側を滝川に接する。

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、東西に伸びる丘陵の頂上は平坦で東西に段がある、東に張り出す尾根上には戸倉神社の祠ありとする。

城史

「古城之覚」は英田郡小矢田村の「小矢田山」として、城主不詳とする。「美作鬢鏡」「美作鏡」はともに「小矢田城」とする。「東作誌」は、「城山」として、村の西にあり、城主不詳、山頂へは八町余り、土塁の跡が一重あるのみで件数は不詳、村の老人は天正年中（一五七三〜九二）以前の城とし、今も下の谷を「城谷」という、ある人は戸倉某の居城を伝えるが未詳で古書にもみえないと記す。『岡山県勝田郡志』は、初め戸倉城、赤松則祐の族戸倉弾正が暦応二年（一三三九）築城、文安二年（一四四五）に山名氏の族塩見氏が居城し小矢田城と称し、天文一三年（一五四四）に尼子氏の攻撃で落城し、五代貞盛は子息二人



小矢田城・戸倉城

遺物

と逃れたとする。『勝間田町誌』は「戸倉城跡」として、大字小矢田字城山にあり、後に小矢田城と改めた、高さ四〇間、周囲二〇町四〇間、頂は平坦で東西三〇間、南北八間、搦手は瀧川鶏淵に望み、表は字城谷の上にある、城谷は城の全盛期に家臣の邸宅の跡と伝え、『岡山県勝田郡志』と同様の城史をより詳しく載せるとともに、天正五年（一五七七）に宇喜多直家の家臣宮本左衛門長資が入城し三星城（美作市明見・入田）の城主後藤勝基に対抗したが、同六年四月勝基を支援する一揆の夜討ちで城は炎上、長資は自刃し廢城となつたとする。

文献

「武家聞伝記」、「美作鬢鏡」、「東作誌」、「美作鏡」、「岡山県勝田郡志」、「勝間田町誌」、「岡山県通史」勝田27、「美作古城史」、「日本城郭全集」勝田郡7、「日本城郭大系」672・754、「勝央町誌」、「改訂岡山県遺跡地図」754・756

59

高山城

所在地 勝央町東吉田

立地

東吉田地区の集落から南西に約五〇〇mの距離にあり、標高約一八三mの丘陵上に位置する。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」にはみえず。『勝間田町誌』は大字東吉田字大成の付近にあり、その跡からは未完成の城郭のようであるとす。『美作古城史』は一夜陣の跡と



高山城

文献

推測している。『勝央町誌』には未完成の城壁が残されていたというと記す。『勝間田町誌』、『美作古城史』、『日本城郭大系』669、『勝央町誌』、『改訂岡山県遺跡地図』勝央280

60 吉田城・城山

所在地 勝央町東吉田

立地

東吉田地区の東光寺の西約一五〇mの緩斜面に位置する。標高は約一三〇mである。

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、北に長く伸びる尾根の北に三段の平坦面がある、南側は明確な堀切はないとする。

城史

「古城之覚」は英田郡吉田村の「吉田」として、城主不詳とする。「東作誌」



吉田城・城山

には、岡村の項に「城山」として、城主や由来などは不詳、東光寺の西の山で、今は繁茂の林山となり跡は分からないと記す。『岡山県勝田郡志』と『勝山町誌』には、安東信濃守高泰の居城、『勝央町誌』には吉田一夜城として伝えられると記す。『日本城郭全集』には「竜門城」「吉田城」として重出し、前者は中央町東吉田の城山にあり、後藤一族の龍門照重が三星城（美作市明見・入田）の城主後藤勝基を頼り永祿二年（一五五九）、山頂に築城したが、天正七年（一五七九）五月、勝基が宇喜多氏に敗れた際に殉死とい、城跡は数段、平地はそのまま残るが、雑草や灌木が茂り容易に近づ

文献

けない、また後者は所在を「津山市西吉田」とするが誤りである。
 『武家聞伝記』、「美作餐鏡」、「東作誌」、「美作鏡」、「岡山県勝田郡志」、
 『勝間田町誌』、『岡山県通史』勝田24、『美作古城史』、『日本城郭全
 集』勝田郡30、『日本城郭大系』705・708、『勝田町誌』、『改訂岡山県
 遺跡地図』勝田301

61

畑屋城

所在地 勝田町畑屋

立地

遺物

城史

備考

文献

国道一七九号線の南の山中に位置し、畑屋集落の北北西に該当する。
 標高約一五〇mのピーク上に所在する。
 未詳。

「東作誌」にはみえず。「勝間田町誌」には「畑居城」とし、大字畑
 屋にあり、城主及び築城年代不詳とする。「美作古城史」は一夜陣
 の跡と推測している。

『改訂岡山県遺跡地図』は、台地開発が進んで大幅に地形が改変と
 する。

『勝間田町誌』、『美作古城史』、『勝田町誌』、『日本城郭大系』690、『改
 訂岡山県遺跡地図』勝田255

62 塔尾城・井上城

所在地 勝田町為本

立地

為本地区の県道五二号線西側にあり、神社の西約二〇〇mの位置に
 ある。標高約一八九mの山頂付近に所在する。神田山城の北に該当

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、東
 北に平野を見下ろす丘陵を利用
 し、頂上部には平坦部が存在と
 する。

城史

「東作誌」にはみえず。「美作古城
 記」は「塔尾の城」として、「太
 平記」にみえるとし、のち井上河
 内守が在城するとするが、美作市
 影石にも同名の城があり、検討を
 要する。『岡山県勝田郡志』は「塔の尾城」として、赤松政則が故
 地を回復してのち、文明二年（一四七〇）に高取庄が井上二郎三郎
 に与えられ、二郎三郎は兵部少輔元辰と改め池ヶ原の塔の尾に館を
 築いたのち、為本に塔の尾城を築くとする。ただし『勝田町誌』は
 塔尾の「塔尾城」として、木山神社（津山市塔尾）北西にありとし、
 別冊の資料編収録の地図では『改訂岡山県遺跡地図』の新造構の位
 置を示す。『改訂岡山県遺跡地図』は「井上城（愛宕山）」とする。
 「太平記」、「美作古城記」、「岡山県勝田郡志」、「美作古城史」、「日
 本城郭大系」680、『勝田町誌』、『改訂岡山県遺跡地図』勝田327



塔尾城・井上城

文献

『改訂岡山県遺跡地図』は、東
 北に平野を見下ろす丘陵を利用
 し、頂上部には平坦部が存在と
 する。

63 神田山城・為本城

所在地 勝央町為本

立地

為本地区の県道五二号線と接する西側の丘陵上にある。井上城の南約四〇〇mにあり、標高約一六〇mの尾根上に位置する。

縄張

縄張りをみると、主郭は複数の段に分かれ周囲に削平地が広がる。かなり後世に改変された可能性が考えられる。現況から遺構の評価は難しい。

城史

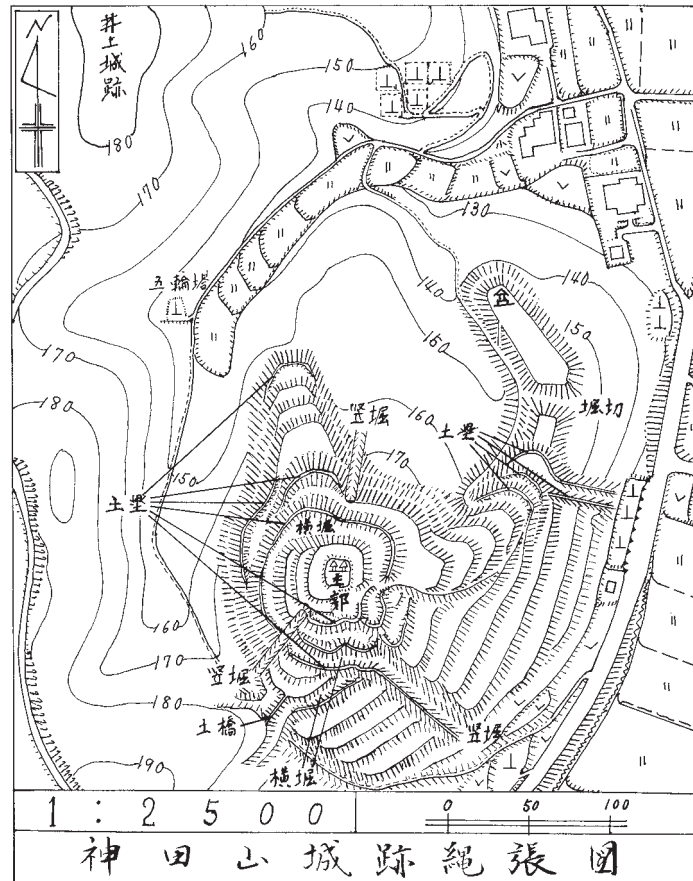
正保書上五四城の一で、「古城之覚」は英田郡（今）為本村の「神田山」、また別に勝田南郡為本村の「為本之（城）」として、それぞれ城主不詳とする。「美作鬘鏡」は神田山城と「為本の城」とし、「美作鏡」は神田山城の城主を難波一族、為本城の城主を井上河内守としてそれぞれ記す。「東作誌」は、「神田山」として、村の子供は「ライツ山」といい、あるいは「齋田山」といい、本丸（二〇間四方）、二丸（幅三間、長さ七間）、東に堀切が三ヶ所（同様に幅三間、長さ三〇間）、北にも堀切、東の「面の城」には今に古瓦の残りがあ、城主は後藤豊前入道良貞、ただし地元民は次郎丸氏が時代不詳の城主で、落城ののち堂尾村の池の辺に住むとすると記す。天保国絵図に「古城跡」とある。『岡山県勝田郡志』は、承安年中（一一七一〜七五）に平清盛の外孫藤原種憲が神田山に館を築き、のち高取左馬頭氏元と称し承久三年（一二二二）三月京都に出て廢城となったとする。『勝央町誌』は「神田山城」の城



神田山城・為本城

文献

名で、旧蓮池西側の齋田山にあると記し、別冊の資料編収録の地図でも同様に表示し、『改訂岡山県遺跡地図』も、該当する城郭を「神田城（神田山）」とする。
 「武家聞伝記」、「美作鬘鏡」、「東作誌」、「美作鏡」、「美作古城記」、「岡山県勝田郡志」、「岡山県通史」勝田21・22、「美作古城史」、「日本城郭大系」666、「勝央町誌」、「改訂岡山県遺跡地図」勝央328



64 為本城・高取城

所在地 勝央町為本

立地

為本地区を通る県道五二号線の東側、標高約一九二mの丘陵上にある。古宮池の西に該当する。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」にはみえず。『勝央町誌』は「為本城」の城名で、遊屋八幡宮の旧遷座地から赤池を隔てて西側の山頂に城があったとし、城主は高田下野守と伝え、南東の山裾に城主一族の墓と伝える五輪塔数器があると記し、別冊の資料編収録の地図でも「為本城」と表示する。一方『改訂岡山県遺跡地図』は、該当する城郭を「高取城」とする。



為本城・高取城

65 塔尾城・新造構

所在地 勝央町為本

立地

為本地区を通る県道五二号線の東側に位置し、北北西に迫り出す標高約一八〇mの尾根上にある。

備考

『改訂岡山県遺跡地図』は「平野を東に見下ろす丘陵を利用」とあるが、西の誤り。

文献

『勝央町誌』、『改訂岡山県遺跡地図』 勝央 335

縄張

未詳。

城史

「東作誌」にはみえず。『勝央町誌』別冊の資料編収録の地図では「塔尾城」と表示する一方、『改訂岡山県遺跡地図』は、該当する城郭を「新造構」とする。

文献

『改訂岡山県遺跡地図』 勝央 343

66 スガシ山城

所在地 勝央町田井

立地

田井地区の県道三五五号線の西側にあり、標高約二五〇mの独立峰上に位置する。滝川左岸にあり、田井・美野・石生・植月東地区の平野部を一望できる。

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、美野平野を北に一望できる独立丘陵、標高二五〇mの山頂に平坦面あり、また北側には出丸ありとする。

城史

「東作誌」にみえず。『勝央町誌』は、険阻なスガシ山山頂に築かれた山城で、城主、年代ともに不詳と記す。

文献

『勝央町誌』、『改訂岡山県遺跡地図』 勝央 581



スガシ山城



塔尾城・新造構

67 鬼池ヶ城・鬼ヶ池城

所在地 勝央町植月中

立地

長良地区を通る県道六七号線の西側にあり、池の西側の丘陵に該当する。標高は約一四〇mである。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は勝北郡植月中村の「鬼池ヶ城」として、山で、本丸（東西二〇間、南北八間）、二の丸（東西二三間、南北一四間）、南は大手で、北と東は連山、西は谷田、



鬼池ヶ城・鬼ヶ池城

文献

南は平地で畑、植月彦五郎重佐が築城と記す。「東作誌」、「美作古城史」、「日本城郭大系」657、「勝央町誌」、「改訂岡山県遺跡地図」勝央163

68 金山城・穢多城・江田ヶ城

所在地 勝央町植月中

立地

滝川左岸にあり、県道三五五号線の東側に位置する。標高約二四〇mの山頂付近にある。約四〇〇m東には金山池がある。

縄張

未詳。

城史

「古城之覚」は勝田北郡植月村の「金山」として、「大なて山」と傍注を付し、城主を大谷佐助とする。「東作誌」は「穢多城」として、

山で、本丸（東西六間、南北三四間）、南は大手、東と西は谷、南

は山続き、城主は大谷左馬介あるいは佐介と記す。「岡山県勝田郡志」は「江田ヶ城」、別名金山城

として現在の奈義町中島東に所在とするが、誤記とみられる。「日本城郭全集」も勝田郡奈義町中島

東の「江田ヶ城」とし、城のある山の裏側の中腹と正面二段目の

隅に井戸跡らしき窪みがあり、今も湿気っている、治承（一一七七～一二八五）の初め、平家方の大谷佐助兼近が築城したが、寿永四年

谷城とし、城跡に瓦片多数散在するとある。「武家聞伝記」、「美作鬢鏡」、「東作誌」、「美作古城記」、「岡山県勝田郡志」、「岡山県通史」勝田9、「日本城郭全集」勝田郡3、「日本城郭大系」662、「勝央町誌」、「改訂岡山県遺跡地図」勝央640



金山城・穢多城・江田ヶ城

文献

69 構の城・構城

所在地 勝央町植月中

立地

大砂池の東約二〇〇mの山中にある。標高は約六三三mである。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は勝北郡植月中村の「構の城」として、本丸（二〇間四方）で東は大手、南と西は谷田、北は土塁（長さ二〇間、横三間、高一間半）、植月彦五郎重佐が築城し、植月彦次郎種重が居ると記す。「勝

文 献

『東作誌』には、城跡に古い五輪塔が数基並ぶとある。

「東作誌」、『美作古城史』、『日本城郭大系』664、「勝央町誌」、『改訂岡山県遺跡地図』勝央160



構の城・構城

70 比 丘 尼 屋 敷

所在地 勝央町植月中

立 地

未詳。

縄 張

未詳。

城 史

「東作誌」は勝北郡植月中村の「比丘尼屋敷」として、妹賀山にあり、東西八間、南北五間の古跡と記す。

文 献

「東作誌」

71 宮 山 城 ・ 小 山 城

所在地 勝央町植月中

勝央町指定史跡

立 地

植月中地区を通る県道六七号線の約三〇〇m東側にあり、集落の中に位置する。

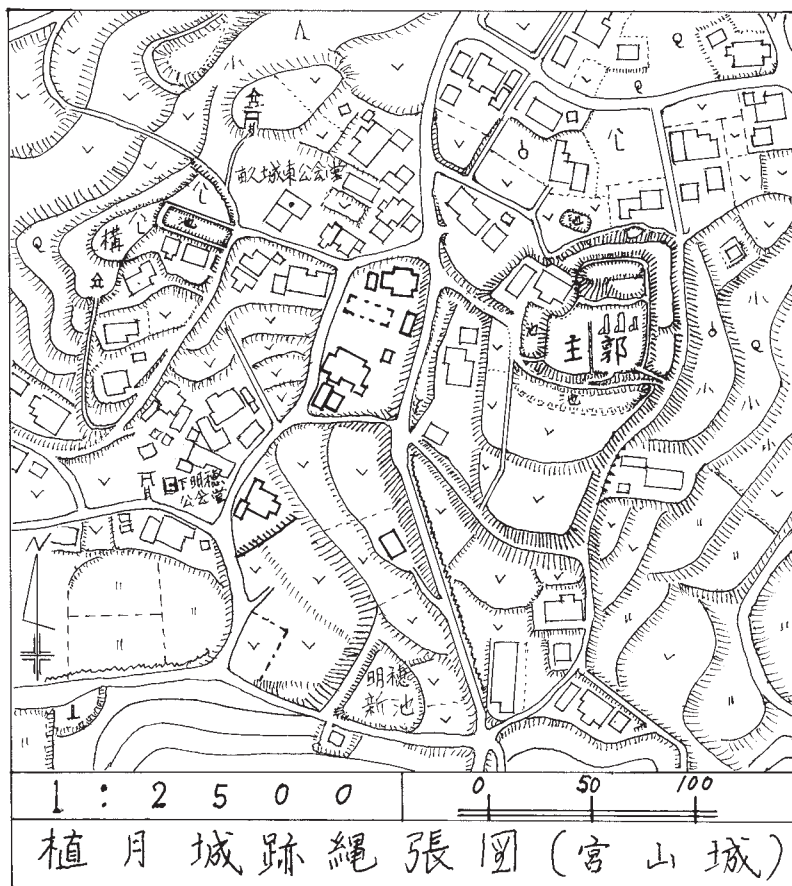
縄 張

集落内の丘に築かれた館城である。方形の主郭部の周囲を横堀・帯曲輪（一部池となつてゐる）で囲い込む。この地域に多く分布する

城 史

「構」と呼ばれる館城のひとつと評価できる。村落内の諸勢力から一歩抜きん出た土豪勢力が構えたものと考えられる。

正保書上五四城の一で、「古城之覚」は勝田北郡植月村の「宮山」として、城主を植月彦五郎とし、「穢多山」「小山とも云」と傍注を付すが、前者は金山城（江田ヶ城）への註か。「美作鏡」は、城主を植月彦五郎重佐とする。「東作誌」は「小山城」として、山で、本丸（一三間四方）、二の丸（一八間四方）、南は大手、東は谷田、西と北は平地、植月彦五郎重佐が築城し当城に居り、子孫は農民となつて今、城跡に住むと記す。天保国絵図にはみえない。『岡山県



城史

縄張

立地

72 茂平城（仮称）

所在地 勝央町植月中

新勝英中核工業団地内を通る大きな道路の三叉路の池付近にあった。発掘調査に伴う全体図では、高所に主郭を構え周囲に腰曲輪を配した縄張りとなっている。館城として機能したものと思われる。

『勝央町中核工業団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』は城のある田畑の小字名を「城山」とし、『勝央町誌』は、約一一間の高台上に築かれ、構の一部が残り、北には城の抜穴、西には的場の跡

文献

勝田郡志』は「小山城」とし「有元家譜」を引き植月豊後守公興が当地に拠るも元弘三年（一三三三）に京都猪熊で戦死、のち赤松氏に従うとし、天文一三年（一五四四）に尼子氏に降参して衰微してとする。ちなみに同書が続けて宇喜多氏の領有するところとなり江原又四郎親次等が拠つたとする記事は、宮山城（真庭市上市瀬・高屋）との混同である。『美作古城史』は「小山城」とし、近隣の構城と鬼池ヶ城（勝央町植月中）と併せ「植月城」としており、東西三〇間、南北四〇間の方形で約四反歩、北側には約一間ばかりの土塁があり、周囲の畑より約五間位高く、南麓には太郎兵衛屋敷、孫兵衛屋敷、彦次郎屋敷の、西麓の人家があるところには平次郎屋敷の地名が残るとする。『勝央町誌』には、毎年四月八日、植月一族城跡に集まり、先祖供養を盛大に行っているとある。

『武家聞伝記』、「美作鬢鏡」、「東作誌」、「美作鏡」、「美作古城記」、「勝北郡各村誌抄録」、「岡山県勝田郡志」、「岡山県通史」勝田8、『美作古城史』、『日本城郭大系』704、『勝央町誌』、『改訂岡山県遺跡地図』勝央96

文献

城史

縄張

立地

73 矢入道屋敷

所在地 勝央町植月中

未詳。

『東作誌』は勝北郡植月中村の「矢入道屋敷」として、下村のうち鬼山の地にあり、由来は不詳と記す。

『東作誌』

立地

備考

文献

備前焼がある」と記す。

平成四〇五年（一九九二〜三）、新勝央中核工業団地建設に伴い発掘調査が行なわれ、掘立柱建物跡や土壇などを確認。調査後消滅。

『勝央町中核工業団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』、『勝央町誌』、『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』111、『改訂岡山県遺跡地図』勝央771



茂平城（仮称）遺構配置図（『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 111』より引用）

奈義町

74

鎌倉山城

所在地 奈義町馬桑・関本・小坂

立地

馬桑地区を通る国道五三号線の西側にある鎌倉山の山頂付近に位置する。標高は約五五六mで、因幡国と美作国の国境付近の交通の要衝に位置する。

縄張

縄張りをみると、鎌倉山上に複数の曲輪が並ぶプランとなっている。高山に立地することから切岸などの加工は弱く、それぞれの曲輪は連なって配されている。国境

付近の交通の要衝を押える番城として築かれたものと思われる。築城主体は山間部を活動の場とした山岳寺院勢力が考えられる。

城史

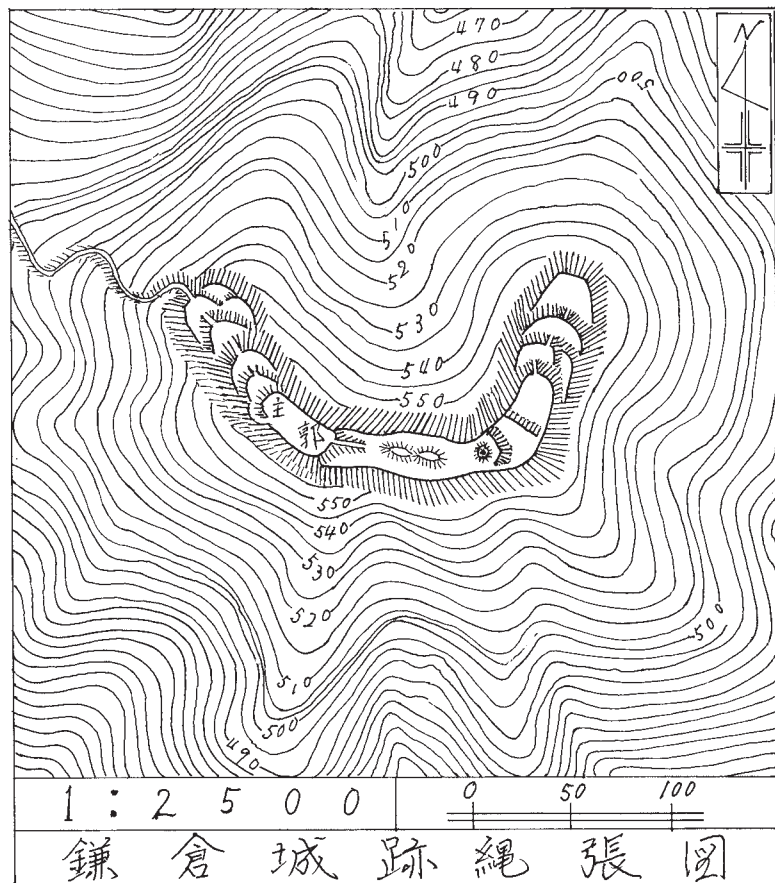
正保書上五四城の一で、「古城之覚」は勝田北郡馬桑村の「鎌倉山」として、城主を江見兵庫親政とし、西の登り口を七曲、峠を大別堂、北の川奥を後生菩提谷と呼んでおり、古城跡が三箇所あるが城主は不詳と記す。「美作鬘鏡」と「美作鏡」はともに城主を江見兵庫とのみ記す。天保国絵図には「鎌倉山城跡」とある。「勝北郡各村誌抄録」（大岡家文書）には「鎌倉城」として、村の西南、城山の地



鎌倉山城

文献

「武家聞伝記」、「美作鬘鏡」、「白玉拾」、「東作誌」、「美作鏡」、「美作古城記」、「勝北郡各村誌抄録」、「岡山県勝田郡志」、「岡山県通史」
勝田4、「美作古城史」、「日本城郭全集」勝田郡9、「奈義町内の中世城郭」



75

丸山城まるやま

所在地 奈義町皆木

立地

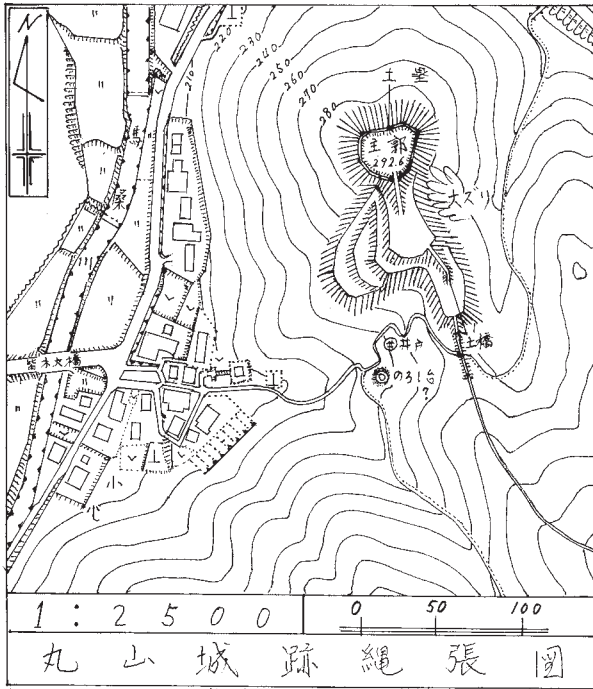
皆木地区中皆木付近を流れる馬桑川左岸にある。集落に向かって北北西方面に延伸する標高約二九〇mの尾根上に位置する。

縄張

縄張りをみると、山頂に主郭から南側に曲輪を連ねる配置となっている。皆木地区に割拠した土豪層の持城と考えられる。

城史

「東作誌」は勝北郡西谷皆木村の古城「丸山」として、高さ約三町、



丸山城

文献

皆木弥平治が居城し、宇喜多氏の治世を全盛として森家の治世になると帰農したと記す。

「東作誌」、「美作古城記」、「岡山県勝田郡志」、「美作古城史」、「日本城郭大系」703、「奈義町内の中世城郭」、「改訂岡山県遺跡地図」奈義130

76 永光城えいこう

所在地 奈義町関本

立地

関本地区の集落の西側丘陵部にある。山林部が南西に延伸する尾根上に位置する。標高は約三三〇mで、南西に那岐山丘陵が一望できる。

縄張

縄張りをみると、稜線の先端の突き出した部分を城域として整備したものである。主郭から複数の段が続く。但し、集落に近いことからこれらの削平地が

城郭関連遺構なのかは更なる精査が必要である。立地から村落に拠った有力土豪層により築かれた丘城と考えられる。

元禄元年（一六八八）の関本村書上（「東作誌」所収）にみえる古城三ヶ所のひとつか。「東作誌」は勝北郡関本村の「永光城」として、城主は有元備前守で同地に墓所があるとし、のち地士の高江万五郎正頭が居城という。宇喜多氏の治世とされるが、正頭は高田の有元屋敷での席順を巡って行方村の地士織田八十右衛門と対立、屋敷近くで殺害され、正頭の屋敷も有元氏の家来寺坂助兵衛が合力して打ち壊されたという。また元禄二年（一六八九）の関本村五郎兵衛書上

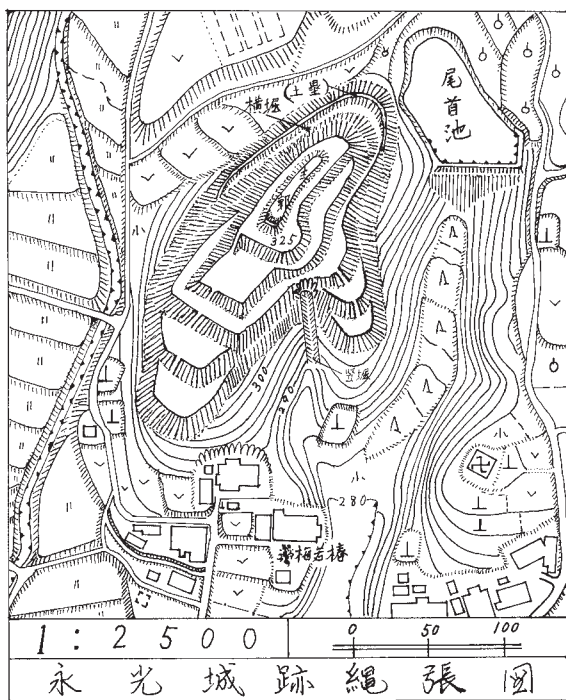


永光城

文献

には、有元備前守は元龜三年に持高三〇石で永光に分家、子の高井万五郎以降も代々村内で存続しているとある。なお、『日本城郭全集』は「永光城」とし、また『奈義町内の中世城郭』には、背後の愛宕山に土塁、曲輪状の地形があるとする。

『東作誌』、「美作古城記」、「岡山県勝田郡志」、「美作古城史」、「日本城郭全集」補遺、『日本城郭大系』685、『奈義町内の中世城郭』、『改訂岡山県遺跡地図』奈義111



77 加賀尾城

所在地 奈義町西原

立地

西原地区の中興集落を流れる淀川の左岸に位置する。標高約二一〇mの小高い丘陵上にある。

縄張

縄張りをみると、山上に土塁を構えた単郭の主郭を中心に、周囲に削平地が連なるプランとなっている。主郭と周囲の曲輪以外は後世の改変の可能性があるため、更なる精査が必要である。淀川流域に割拠した土豪層の持城であると考えられる。

『東作誌』は勝北郡西原村の「加賀尾城」として、本丸（東西二〇間、南北三五間。四方に土塁）、本丸の南に二丸（東西二〇間、南北一〇間）、二丸の南に三丸（東西二〇間、南北八間）、山は高さ一町半で周囲約一〇町、東に谷二箇所、北に屋敷跡と荒閑大明神（祭神三穂太郎）、南に横尾山八幡社が近く、豊田・皆木氏代々の居城と記す。なお「村老伝聞」には、西原城主として豊田出雲守を掲げ、五郎左衛門・弥右衛門・五郎兵衛と続き、五郎兵衛は森長継に仕えたという。

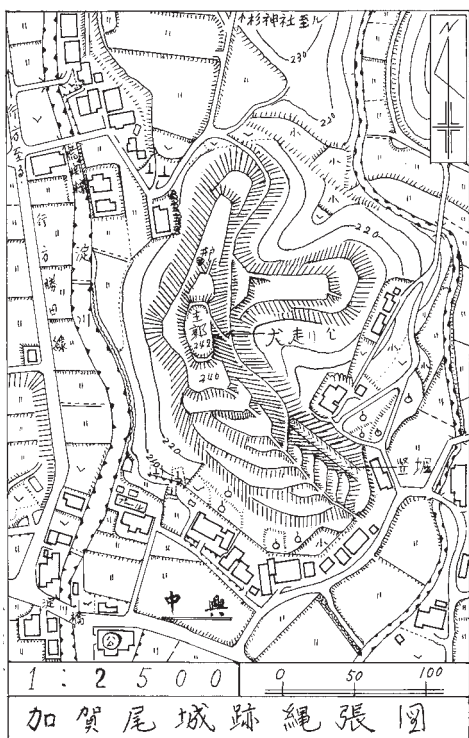
『東作誌』、「美作古城記」、「岡山県勝田郡志」、「美作古城史」、「日本城郭大系」659、『奈義町内の中世城郭』、『改訂岡山県遺跡地図』奈義126

城史

文献



加賀尾城



78 倉内屋敷

所在地 奈義町西原

立地

未詳。

城史

「東作誌」は勝北郡西原村の「倉内屋敷」として、倉内隼人助の居宅の跡で、安祥寺より三町ばかり南に地名があると記す。

文献

「東作誌」

79 天神城

所在地 奈義町西原

立地

高殿川の左岸にあり、東山工業団地の西側に該当する標高約二二〇mの丘陵上に位置する。

縄張

縄張りをみると、丘陵を横掘で複数の区画に分節し、それぞれ単郭（十帯曲輪）の丘城が並ぶ群郭式（十帯曲輪）の丘城が並ぶ群郭式の縄張りとなっている。縄張りプランとしては個々の曲輪は相互の結びつきはみられない。群郭式の配置は美作地域では他に類をみない。築城主体は村落に拠った土豪層と考えられる。

「東作誌」は勝北郡西原村の「天神城」として、豊田修理進久光が居城という。



天神城

80 三穂太郎屋敷

所在地 奈義町高円・是宗

立地

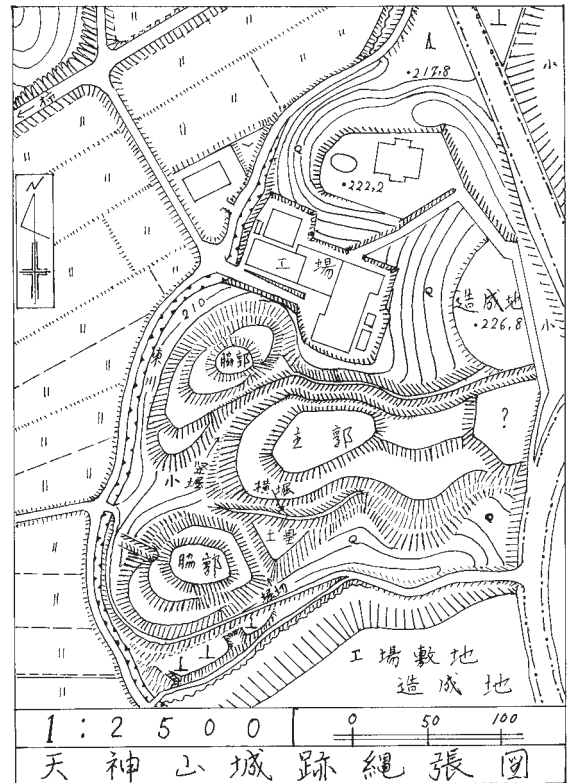
未詳。

城史

「東作誌」は勝北郡高円村の「三穂太郎屋敷跡」として、那岐山の絶頂にあり、東西二〇間、南北拾五間、西・北・東に土居（土塁）の跡があり、西方に二三間の馬場、東南に井戸、南に厠（踏石。両方に長八間・横六間の黒石）とれるものとされる。

文献

「東作誌」



文献

「東作誌」

81 大見丈城・大別当城

所在地 奈義町高円・関本

立地

国道五三号線から菩提寺方面へ行く道路の南北に位置する大別当山と八巻山の山頂付近にある。

淀川上流の左岸にあり、大別当山の標高は五九一m、八巻山の標高は七四六mで、那岐山丘陵を一望できる。国道五三号線、奈義町高

円地区の「那岐山菩提寺登山口」の標識を左折。「蛇淵の滝」の駐車場より三〇〇m上手に「大別当山展望台」の標柱がある。



大見丈城・大別当城

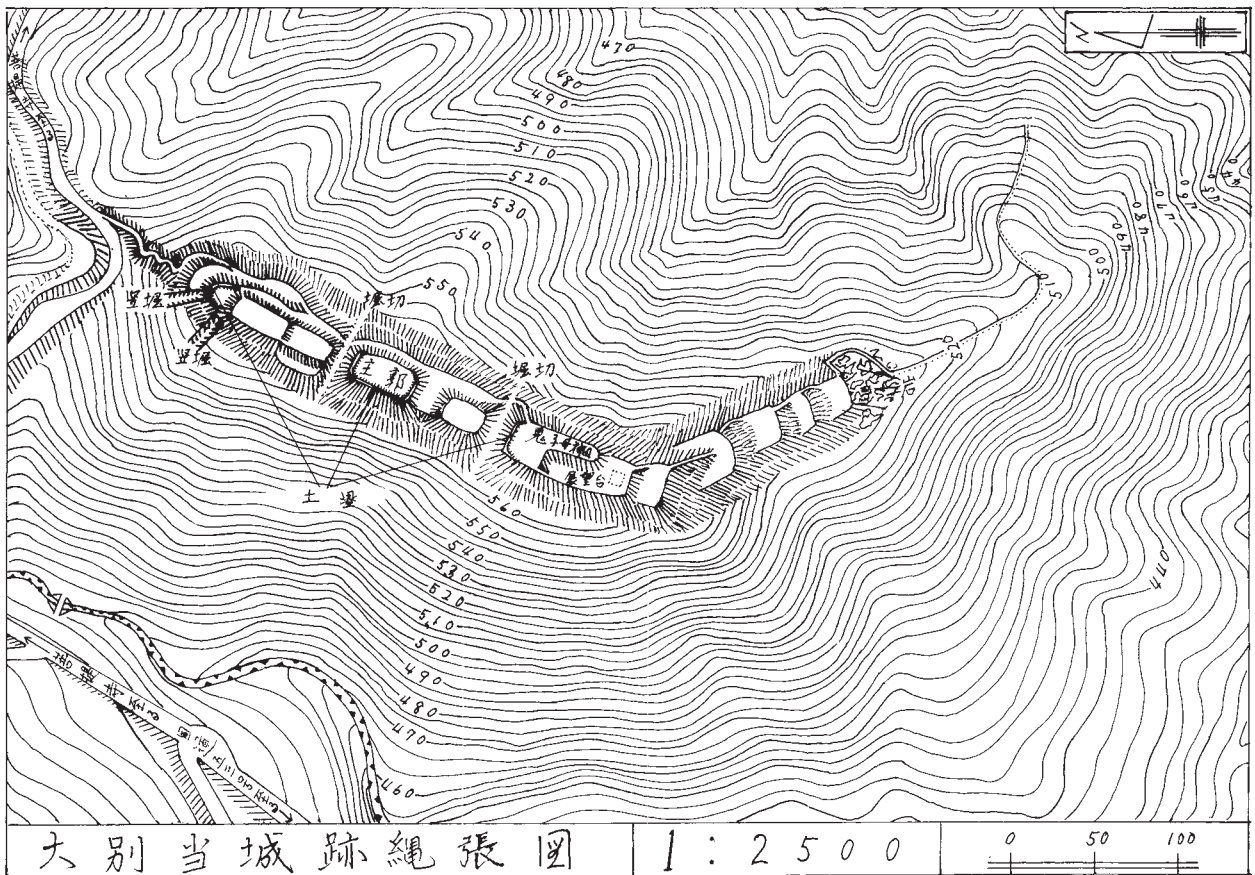
縄張

南の大別当山は細長い山頂に曲輪が並ぶプランとなっている。二本の堀切で挟まれた中央部が主郭にあたる。そして東西に曲輪が続く。削平はあまりよい方ではなく複数の段や帯曲輪に分かれる。

北の八巻山は尾根筋を堀切で仕切り先端部を城域として整備するプランである。地形的な制約から複数の段に分かれるなど削平はかなり悪い。築城主体は不明であるが、菩提寺など那岐山麓を掌握する山岳寺院勢力築城、詰城として立て籠った施設の可能性があると考えられる。或いは峠越えを抑えるための広域大名権力が設定した番城の可能性が考えられる。

元禄元年（一六八八）の関本村書上（「東作誌」所収）にみえる古城三ヶ所のひとつか。「東作誌」は勝北郡高円村の「大見丈城」「大別当城」として、それぞれ城主を有元佐頭、有元右衛門大夫佐国と

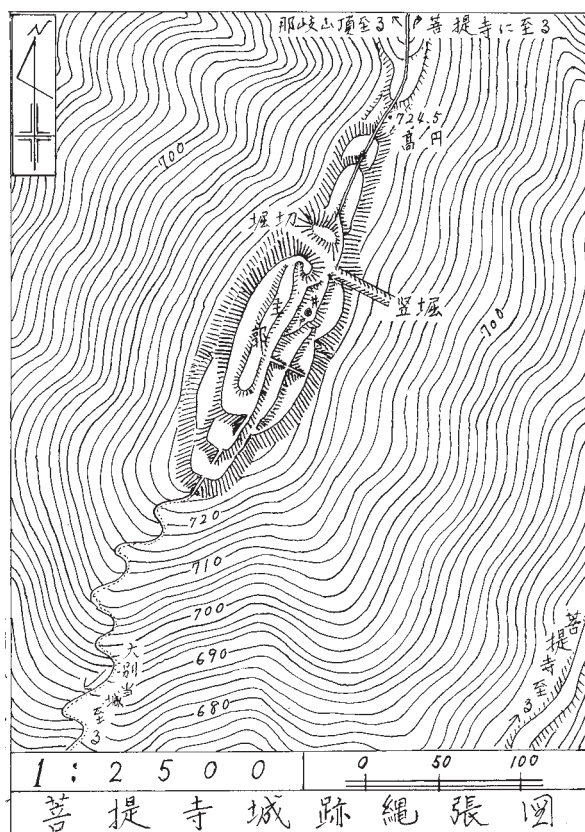
城史



大別当城跡縄張図

1 : 2 5 0 0

0 50 100



し、両城は一山とする。また大見丈と鉢巻山は諾(那岐)山中の離山で、大見丈は東南にあり、因果摺と呼ぶ芝山を隔て三町ほど北に大別当城にあたる鉢巻山があると記している。ただし同書の記述は、大見丈を鉢巻山の西方に位置する「能仙」とする里民の説も紹介されており、混乱している。ここでは「東作誌」本文に従い、鉢巻山の南、現在大別当山と呼ばれる山域に比定しておきたい。「白玉拾」には「大別当」として、高さ六五丈、周囲一里半、南北に連なっており、北は高円村に接する、山頂は芝草のみと記し、別図には菩提寺西下方に「大見丈、大別当トモ云」と記し、背後を堀切で画した三段の曲輪を描いている。『日本城郭全集』は「大見丈城」、「日本城郭大系」は「大別当城」で別名を「大見丈城」とする。

康安元年(一三六一)七月、山名時氏の美作国侵攻にあたり降参した六か城のうちに「菅家ノ一族ノ大見丈ノ城」がみえる(「太平記」)。

備考

山形図では、八巻山の城を菩提寺城に比定している。
 『奈義町内の中世城郭』は大別当山南麓の丘陵上で平坦地・堀・土塁・石組からなる根小屋及び複数の館跡に「高円構」を見だし、「改訂岡山県遺跡地図」は「イムラ遺跡」として、蓮光寺から尾根上を一五〇mほど上がった付近から大規模な土塁状の地形が続き、周辺に人工段地形あり、館跡か、井戸や五輪塔もあるが江戸時代のものか、「美作太平記」に登場する「高円構」跡ではないかと地元で推定されるとする。出典のことも今後検討を要する。

文献

『太平記』、「白玉拾」、「東作誌」、「美作古城記」、「岡山県勝田郡志」、「岡山県通史」勝田6、『美作古城史』、『日本城郭全集』勝田郡4、『日本城郭大系』676、『歴史散歩岡山の城』、『奈義町内の中世城郭』、『改訂岡山県遺跡地図』奈義7、『岡山の山城を歩く』88

82 殿小屋

所在地 奈義町高円

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

『東作誌』は勝北郡高円村の「小丸山」として、一名「尖り山」もい、山半南東にありとし、また「殿小屋」ともい昔、大将の本陣ということからこの名があるとする。

文献

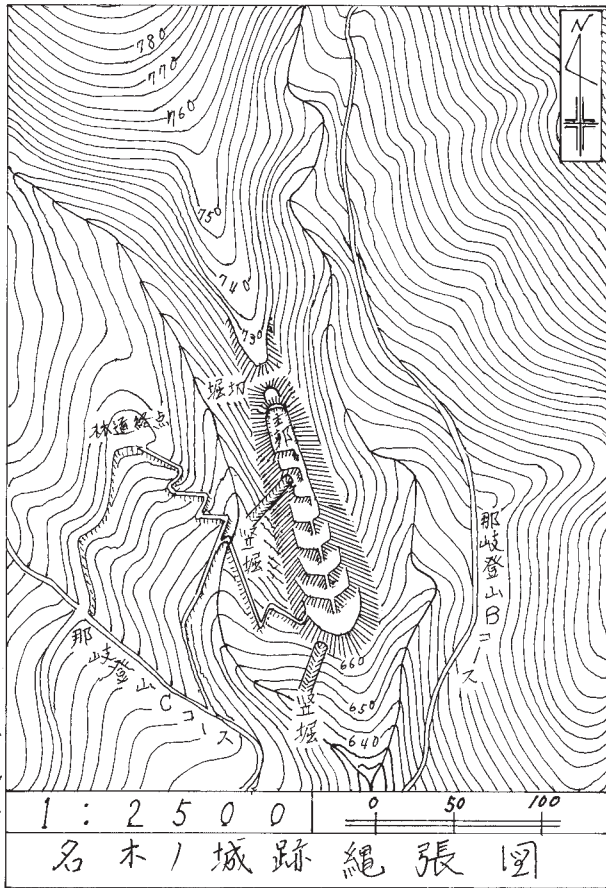
『東作誌』

立地

国道五三号線から菩提寺方面に行く道路が蛇淵の滝から東に曲がる場所にある標高約七四〇mの山頂付近に位置する。

縄張

尾根筋の背後に堀切を構えて先端部を城域として整備する在地系城郭では一般的にみられるプランである。地勢的な問題もあると思われるが、分化された小曲輪が段々に続く。南西側に堅堀が一本みられるが流水によるものの可能性が高い。築城主体としては那岐山に関連した山岳勢力か、因幡国へ通じる山岳ルートを抑える番城のいずれかの可能性が考えられる。



城史

「古城之覚」は勝田北郡高円村の「なきか仙」として、城主を有本右衛門大夫とし、菩提寺と山峰続きで、東へは高円・関本から馬桑村へ通じる山続きと記す。「美作鬘鏡」は「ナキカ仙城」、「美作鏡」は「奈義能仙城」とする。

建武三年（一三三六）三月、美作国では、九州に逃れた足利尊氏に帰服して「菅家・江見・弘戸ノ者共」が「奈義能山・菩提寺ノ城」を築いて国中を領有したが、江田行義が三〇〇〇余騎で美作国に討ち入り、「奈義能山・菩提寺二箇所ノ城」を取り巻いたところ、馬や武器を捨てて城に連った上の山へ逃走したとする。また康安元年（一三六一）七月、山名時氏の美作国侵攻にあたり降参した六か城のうちに「広戸掃部助ガ名木杣二箇処城」がみえる（「太平記」）。

備考

なお「二箇処城」に関して「東作誌」が里民の説として大見丈を「能仙」、大別当（鉢巻山）を「奈木」という二つの城とすること、「白玉拾」が「能敵」として、菩提寺と大別当城の西上方の尾根上に堀切二本で画した曲輪を描いていることなどを参考に、本書では奈義仙城について本項のように比定しておく。

文献

「太平記」、「武家聞伝記」、「美作鬘鏡」、「白玉拾」、「東作誌」、「美作鏡」、「美作古城記」、「美作略史」、「岡山県勝田郡志」、「岡山県通史」勝田7、「美作古城史」、「奈義町内の中世城郭」、「歴史散歩岡山の城」、「日本城郭大系」676、「改訂岡山県遺跡地図」奈義4

84

菩提寺城

所在地 奈義町高円

立地

那岐山登山道口でもある山岳寺院・菩提寺の付近一帯。標高は約六〇〇m。

縄張

未詳。

城史

正保書上五四城の一で、「古城之覚」は勝田北郡高円村の「菩提寺」として、城主を小原孫次郎入道と記すが、その典拠とみられる「太平記」には「有元民部大夫入道ガ菩提寺の城、小原孫次郎ガ籠リタル小原ノ城」とあるように籠城主体は有元民部大夫入道とするべきである。また元禄元年（一六八八）の関本村書上（『東作誌』所収）にみえる古城三ヶ所の一として「菩提寺城」がみえるところ、「東作誌」は勝北郡高円村の「菩提寺城」として、城主を有元民部大夫佐頭と小原孫次郎入道信明とし、また同郡関本村の項にも城名が見える。天保国絵図に「菩提寺」として寺院が描かれており、その名称からも山岳寺院である諾山菩提寺を城郭として利用したものと考えられる。

建武三年（一一三六）三月、美作国では、九州に逃れた足利尊氏に帰服して「菅家・江見・弘戸ノ者共」が「奈義能山・菩提寺ノ城」を築いて国中を領有したが、江田行義が三〇〇〇余騎で美作国に討ち入り、「奈義能山・菩提寺二箇所ノ城」を取り巻いたところ、馬や武器を捨てて城に連った上の山へ逃走したとする（『太平記』）。また康安元年（一一六一）七月、山名時氏の美作国侵攻にあたり降参した六か城のうちに「有元民部大夫入道ガ菩提寺ノ城」がみえる（『太平記』）。応仁元年（一四六七）一〇月、赤松氏の家臣中村五郎左衛門尉が美作国回復を目指して同国院庄（津山市院庄）に入った

遺物

際、山名勢は東郡の「菩提寺」などに籠もり抵抗したとある（『応仁別記』）。
備前焼・勝間田焼。

備考

昭和五八年（一九八三）、那岐山青少年研修センター建設に伴い確認調査を行い、室町時代の堀立柱建物などを確認。菩提寺城の一部と推定されている。調査後一部消滅。

文献

『太平記』、『応仁別記』、『武家聞伝記』、『美作鬘鏡』、『東作誌』、『美作鏡』、『美作古城記』、『美作略史』、『岡山県勝田郡志』、『岡山県通史』勝田5、『美作古城史』、『岡山県埋蔵文化財報告』14、『歴史散歩岡山の城』、『改訂岡山県遺跡地図』奈義6

85 松岡刑部屋敷

所在地 奈義町高円

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

『東作誌』は勝北郡高円村の「松岡刑部屋敷跡」として、「山の上」の地に所在するが時代・人物ともに不詳という。

文献

『東作誌』

86 久常城

所在地 奈義町久常

立地

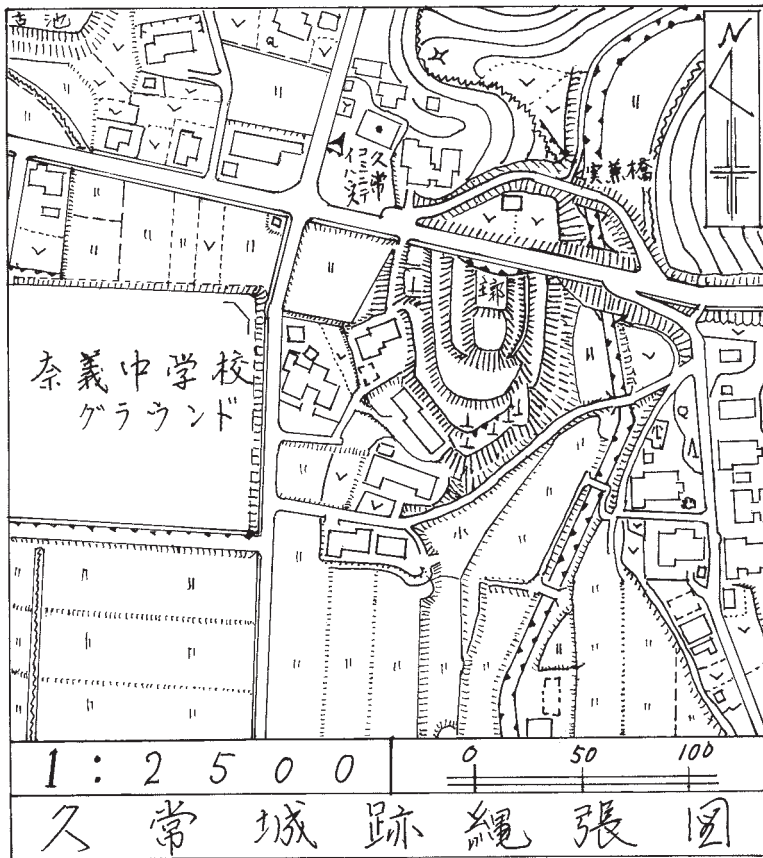
久常地区を流れる高殿川の右岸にある。奈義中学校の南東約四〇〇mの河岸段丘上の平地に位置する。

縄張

主郭の周囲を帯曲輪状の横堀が囲むプランとなっている。周辺には段がみられるが後世の改変の可能性も考えられる。久常城はこの地域に多数分布する「構」と呼ばれる館城が独立丘に上がった形状と考えられる。集落に近い立地や単郭構造の形状から、村落による土豪層の居城と考えられる。



久常城



城史

「東作誌」は勝北郡久常村の古城として、「上山」の地に幾らかの切岸が耕作地になりつつわずかに残り、永正年間（一五〇四～二一）に久常村に居住した岡備後左衛門の子・岡新介が居城と伝える。新介は宇喜多秀家治世に代官を勤め、子の孫左右衛門は沢・久常・柿三ヶ村で田畑五町を拝領したが、宇喜多氏の改易で帰農したという。

文献

「東作誌」「美作古城史」「日本城郭大系」692、『奈義町内の中世城郭』、『改訂岡山県遺跡地図』奈義71

87 菅原実兼卿館

所在地 奈義町久常

立地

未詳。

未詳。

城史

「東作誌」は勝北郡久常村の古跡「菅原実兼卿館跡」として、今は耕作地になって地字に残るといい、実兼は菅原道真一〇代の後裔で、美作国の押領使として久常村に住んだと記す。

文献

「東作誌」

88 長者屋敷

所在地 奈義町柿

立地

高殿川左岸にあり、なる集落の南、標高約二一〇mの丘陵上に位置する。

縄張

縄張りをみると、集落に近接して高台上に構えた居館の様相を示す。村落に拠った土豪層の館城のあり方を残す事例と思われる。なお、曲輪の背後にある堀切状遺構は里道と切り合いになっており、後世の改変が加わっている可能性が高い。現地での確認作業を行う必要がある。

城史

「東作誌」は勝北郡柿村の「長者屋敷跡」として、長一七間、横一五間、周囲に高さ四尺の土塁をめぐらせるが居住者は不詳、乱世の時に兵糧を入れ置いたという長者穴蔵（深さ二間、広さ二間四方）があると記す。

文献

「東作誌」、『柿誌』

89 福光三郎屋敷

所在地 奈義町柿



長者屋敷

立地
縄張

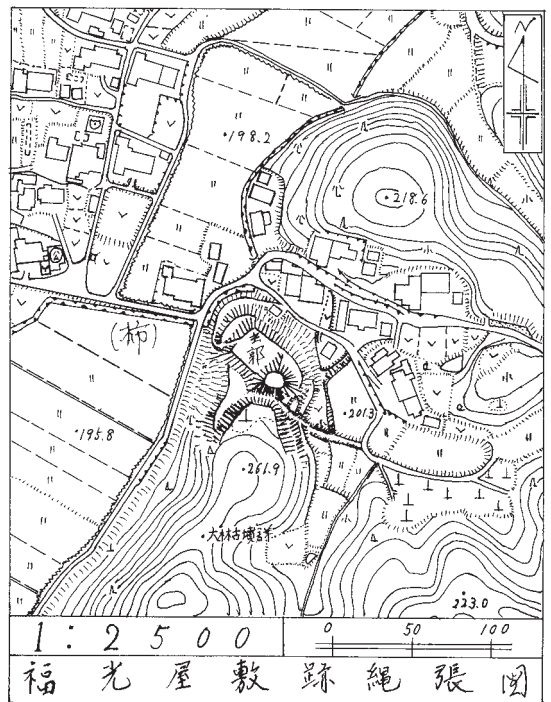
未詳。
未詳。

「東作誌」は勝北郡柿村の「福光三郎屋敷跡」として、東西約三〇間、南北約二〇間、地名を福光といい、福光三郎の屋敷跡と記す。

「美作古城史」は「福光屋敷」として、福光氏ほのち笹尾城（福本城、奈義町中島東）に移り福元氏と改めたとする。

文献

「東作誌」、『美作古城史』、『日本城郭大系』 695



90 中島山城・西坪城・有元城

所在地 奈義町中島東

奈義町指定史跡

立地

中島東・中島西地区に向けて南西に延伸する尾根の先端に位置する。中島西地区を県道三五三号線が通る場所の東側の山に該当する。標高は約二〇〇mである。国道五三三号線、広岡地区より県道五一号「美作・奈義」線へ右折。特別養護老人ホームなぎみ苑を左手に見つ一二km直進後左折。県道三五三号「石生・奈義」線を右折すると、左手に「有元城址」の標柱がある。集落に近接していることもあり、後世の改変から現況遺構による評価は難しい。丘陵の先端に方形の区画があり有元構とする。その南側に横堀が部分的に残る程度である。



中島山城・西坪城・有元城

縄張

城史

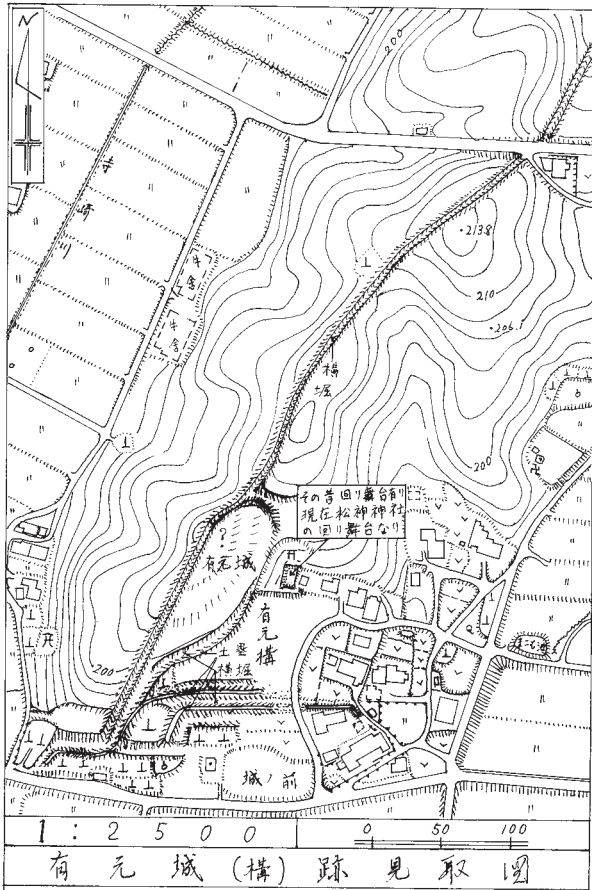
「古城之覚」は勝田北郡中島東村の「中島山」として、城主を有本勘四郎佐弘とする。「美作鏡」は城主を有元菅四郎佐広とする。「東作誌」は勝北郡中島村東分の「西坪城」として、「城の前」の地にあり、本丸（東西二間、南北一五間）、惣囲の土塁は二七〇間、東は谷、南は田、西・北は山で、城主は有元遠江守菅原佐氏とする。また有元家の旧記を引いて城跡は前深田、後山、跡敷三丁四方、二重堀の跡ありと記す。なお『改訂岡山県遺跡地図』が城の北部に示す江田ヶ城について、『岡山県勝田郡志』が別名金山城、笹尾城（奈義町中島東）に次いで「同所にあり」として以降、『日本城郭大系』『改訂岡山県遺跡地図』へと引き継がれているが、城の情報は現在の勝央町植月中にある金山城のもので誤りである。あるいは本城の関連遺構とも考えられる。

備考

奈義町の史跡指定名称は「有元城」である。

文献

「東作誌」、「美作鏡」、「美作古城記」、「岡山県通史」勝田13、「美作古城史」、「日本城郭全集」勝田郡18、「日本城郭大系」653・682、「奈



有元城(構)跡見取図

91 比久尼城

所在地 奈義町中島東

立地

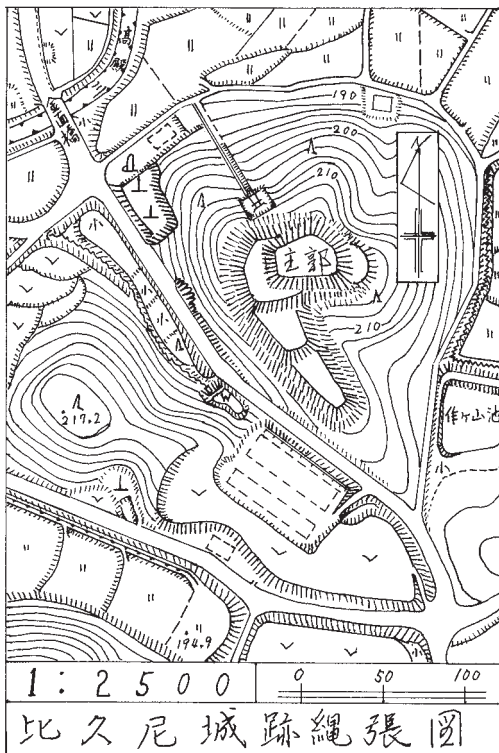
高殿川右岸にあり、柿地区と中島東地区の境界に位置する標高二二〇mの独立丘陵上に所在する。現在の境界区分では、柿地区に所在するようである。

縄張

縄張りをみると、山頂部の主郭とそれに続く曲輪から構成されている。村落単位で割拠する土豪層による築城と考えられる。

城史

「東作誌」は勝北郡中島村東分の「比丘尼城」として、「面目梨」の地にあり、山の高さ三五間、頂上に七間半四方の土塁があり、昔の比丘尼が居住と伝える。また『美作古城史』は目梨の地にあり、尼子氏進攻当時の一夜陣と推測している。



比久尼城跡縄張図

文 献

『東作誌』、『美作古城史』、『日本城郭大系』 691

92 福本城・笹尾城

所在地 奈義町中島東

立 地

中島東地区の松神社の北側、標高約二一〇mの緩斜面上にあつた。

縄 張

未詳。

城 史

『東作誌』は勝北郡中島村東分の「福本城」として、東畦といい、「笹尾」の地であり、本丸（東西二四間、南北二〇間）に惣構の土塁あり、北は山、東・南・西は谷と田地、城主は菅家の一族福本和泉守で、居館の「外土居」「内土居」があり、伝承では有元遠江守の攻撃により没落、和泉守は播磨国へ逃れ同国に子孫があると記す。「美作古城記」は「笹尾の城」とし、『美作古城史』は福元城ともいうとする。『日本城郭全集』は「笹尾城」として、城跡に遺構はないが、山上は三段となり、隣の峰には出丸、馬場の地名があるとするとする。造成され地形が改変し消滅。



福本城・笹尾城

文 献

『東作誌』、『美作古城記』、『岡山県勝田郡志』、『美作古城史』、『日本城郭全集』勝田郡13、『日本城郭大系』674、『奈義町内の中世城郭』、『改訂岡山県遺跡地図』奈義227

備 考

造成され地形が改変し消滅。

93 大上屋敷

所在地 奈義町荒内西

立 地

荒内西地区の集落の西側、名義川が細かく蛇行する部分の右岸にある。平地の水田地帯にあり、標高は約一九〇mである。

縄 張

未詳。

城 史

『荒内村古ものがたり』（『美作古城史』所収）に、宇喜多秀家の治世、「大上の屋敷」に住む皆木左兵衛は中島村（桑村）弥藤次の夜討ちにあい没落、屋敷は弥藤次から井戸二郎左衛門が買取り居住とあるという。『美作古城史』は大上構として、面積は約五反、その宅跡中に中上・大西・下前などの屋号を唱える家があつて四周には堀跡とみられる形状と流水があるとするとする。

文 献

『美作古城史』、『日本城郭大系』654、『改訂岡山県遺跡地図』奈義185

94 石引城

所在地 義町中島西

立 地

中島西地区を通る県道三五三号線の西側集落内にある。標高は約一八〇m。東南約四〇〇mには中島山城が所在する。

縄 張

未詳。

城 史

『東作誌』は勝北郡中島村西分の「石引城」として、本丸（一七間四方）の土居は畑となり不分明、東・南は民家、西・



石引城

文 献

北は田地・大沼で、桑村与七郎が築城、三星山（美作市明見・入田）で討死した与七郎を祀る「大歳塚」が残ると記す。
「東作誌」、『美作古城史』、『日本城郭大系』649、『改訂岡山県遺跡地図』奈義195

95 吉正城

所在地 奈義町中島西

立 地

中島西地区吉政集落の西側、堆肥発酵処理施設付近への道路の北側山中にある。標高は約二一〇mである。

縄 張

縄張りをみると、丘陵上に位置する単郭のプランである。現在は畑になっており土塁が部分的に残されている。この地域に多く分布する「構」と呼ばれる館城のひとつと位置付けられる。築城主体は村落単位で割拠した土豪層とみられる。

城 史

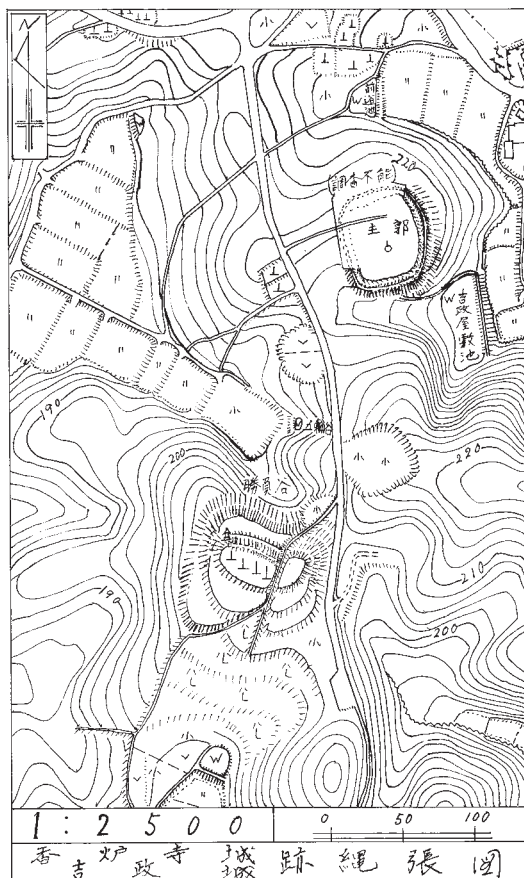
「東作誌」は勝北郡中島村西分の「吉正城」として、本丸（東西二二間、南北二五間）の四方の土塁は畑となり不分明、東は川、西は山、南北は谷田・大沼で、桑村刑部大輔が築城しその後、子・余所兵衛、孫・右衛門大夫と続いたが浪人、城は落城したと記す。

文 献

「東作誌」、「美作古城記」、「岡山県勝田郡志」、「美作古城史」、「日本城郭大系」706、『奈義町内の中世城郭』、『改訂岡山県遺跡地図』奈義165



吉正城



96 香炉寺山

所在地 奈義町中島西

立 地

奈義町と勝央町との境界に位置する標高約二一〇mの丘陵上にある。県道三五三号線が東を通り、膝下で滝川と高殿川が合流する。

縄 張

地域の比定地は墓地であり、里道が貫入するなど後世の改変が多いため評価が難しい。

城 史

「東作誌」は勝北郡中島村西分の「松尾山香炉寺跡」として真言宗仁和寺末で退転の時代は不詳、鐘堂の跡が残ると記す。これか。
「美作太平記」は巻三「香炉寺合戦の事」として、天文元年



香炉寺山

備考

(一五三三)に尼子方の三吉安芸守らが東美作国の平定のため「松尾山香炉寺」に陣を取ったところ、広戸氏、有元氏と重ねて攻撃を受け、安芸守らは「吉見岩尾山」(津山市吉見)に退いたとするが、事実かどうか確認できない。

文献

現地踏査した山形氏によると、城郭遺構は確認できないとの事である。「東作誌」、「奈義町内の中世城郭」、「改訂岡山県遺跡地図」 奈義 169・勝央25

97 比丘尼屋敷

所在地 奈義町中島西

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は勝北郡中島村西分の「比丘尼屋敷」として、大路の地にあり、長さ三八間、横一八間の屋敷で付近に女男池があると記す。

文献

「東作誌」

98 比丘尼屋敷

所在地 奈義町宮内

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は勝北郡宮内村の「比丘尼屋敷」として、諾(那岐)山上にある二〇間四方の屋敷で由来は不詳、「升形」というと記す。

文献

「東作誌」、「白玉拾」

99 細尾城

所在地 奈義町宮内

立地

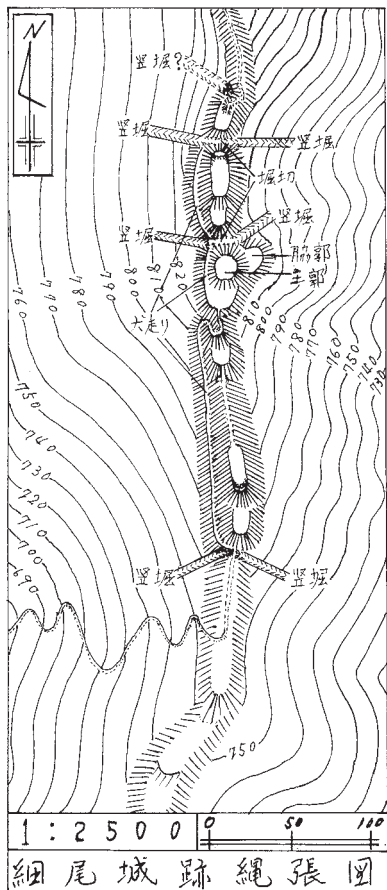
那岐山頂西の平坦部にあった那岐神社跡から南に約九〇〇m延伸した尾根上にある。標高は約八四〇mである。

縄張

縄張りをみると、細長い尾根筋を堀切で分けて城域を整備したものとみられる。尾根筋の山岳ルートを押える番城として機能した可能性が考えられる。

城史

「古城之覚」は勝北郡宮内村の「細尾」として、城主を福田助四郎盛昌(後孫八と号す)とし、天正七年(一五七九)夏に羽柴秀吉の播磨国攻略の過程で落城、盛昌は毛利氏を頼ったが関ヶ原合戦後に牢人、宮内村へと戻ったと記す。「東作誌」は、本丸(東西三間五尺、南北五間、高八間)、二丸(東西三間、南北九間)、三丸(東西四間、南北四間)、南北に乾堀があると記す。「白玉拾」には細尾城の図があり、尾根の頂部を「本丸」として、上方へ堀切状の窪みを隔てて「二ノ丸」、下方に「家老やしき」を配し、両端に「からほり」を描いている。



文献

「武家聞伝記」、「美作鬘鏡」、「医王山記」、「白玉拾」、「東作誌」、「美作鏡」、「美作古城記」、「美作略史」、「岡山県勝田郡志」、「岡山県通史」勝田15、「美作古城史」、「日本城郭大系」698、「奈義町内の中世城郭」、「改訂岡山県遺跡地図」奈義2

100 成松構

所在地 奈義町成松

立地

国道五三号線が豊沢地区を通る場所から約八〇〇m北上した諾集落の西端にある。標高約二七〇mの緩斜面上に位置する。

縄張

那岐山麓の成松地区に位置する館城。「構」とよばれる地名が残り、三方を囲む土塁が確認される。この地域に多くみられる「構」と呼ばれる館城のひとつと推定される。村落規模で割拠した土豪層の居城と考えられる

城史

「東作誌」は勝北郡成松村の「成松構」として、有元近江守が居城という。

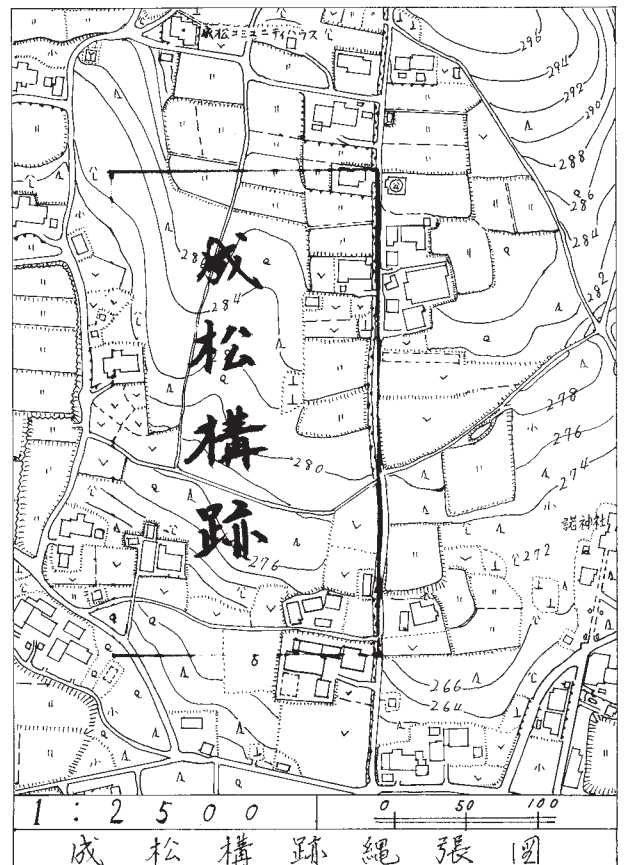
文献

「東作誌」、「美作古城史」、「日本城郭大系」687



成松構

立地



101 広岡城

所在地 奈義町広岡

立地

国道五三号線が広岡地区を通る場所から約五〇〇m南にある岡畝集落内にある。緩斜面上にあり、集落のすぐ南には県道五一号線が通る。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」に城そのものの説明はないが、同村の里正（庄屋）権左衛門は旧家で森家の治世には代々大庄屋で福元彦左衛門を通称としたと記



広岡城

文献

『日本城郭全集』は、城山と呼ばれる山の平坦地で、その下の段の隅には井戸の跡もあるとし、永禄（一五五八〜七〇）の初め、福元城（奈義町中島東）の城主福本彦四郎行光が築城、行光の子長光は三星城（美作市明見・入田）の城主後藤勝基に仕え、その滅亡の後には宇喜多直家につくと記す。
「東作誌」、「日本城郭全集」勝田郡21、「日本城郭大系」694、「改訂岡山県遺跡地図」奈義192

102 矢倉か鼻城

所在地 奈義町広岡

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は勝北郡沢村東分の「矢倉か鼻」として、小山で、鎮西亦四郎が合戦のとき砦を構えた跡で、槽跡と呼ばれる平地があるといい、安永年中（一七七二〜一七八〇）太刀一振が出土、古墓が二、三か所あると記す。

文献

「東作誌」

103 今宮城

所在地 奈義町滝本

立地

国道五三号線が滝本地区から広岡地区に至る中間地点の北側にある。標高約二三〇mの尾根先端にあり、東側を出店川が流れる。

縄張

稜線の先端に築かれた方形の館城。現在は第二郭の南面を国道五三号線により削られている。主郭は方形であり周囲を土塁で囲む。但

城史

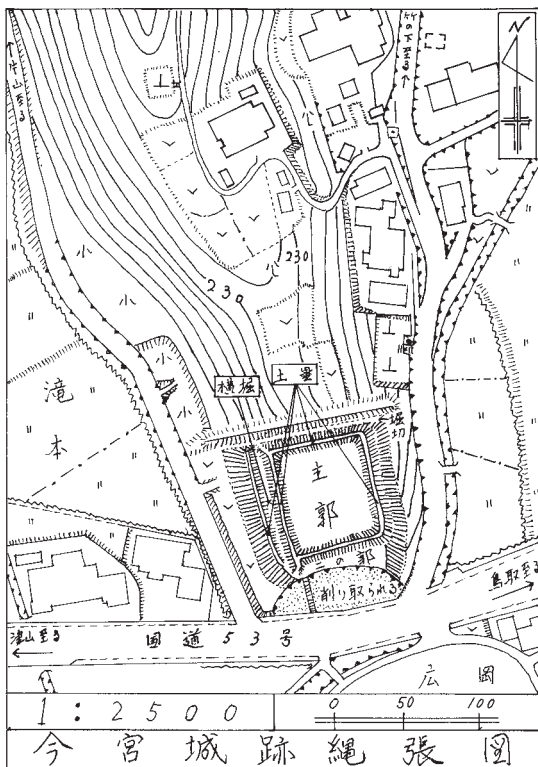
し土塁には虎口はみられない。主郭の背後には堀切を入れ、西側に横堀を配する。これにより、土塁に横堀を組み合わせた防禦が施されている。この地域に分布する「構」と呼ばれる館城が丘陵上に立地したものとみられる。集落に近い立地と規模から、築城主体は村落に拠った土豪層の居城と考えられる。



今宮城

文献

「東作誌」は勝北郡北野村東分の「今宮城」として、城主は皆木勘四郎佐保、本丸（東西八間、南北一五間）には土塁（高さ外一丈、内五尺）と北に堀切、二丸（東西九間、南北六間）があり、本丸の南は約一丈低く、北は山続きで高さ約四〇間と記す。
「東作誌」、「美作古城記」、「岡山県勝田郡志」、「美作古城史」、「日本城郭大系」651、「奈義町内の中世城郭」、「改訂岡山県遺跡地図」奈義42



104

久永屋敷

所在地 奈義町滝本

立地

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は勝北郡近藤村の「久永屋敷」として、今は畑となる、二町四方と記す。

文献

「東作誌」

105

久永屋敷

所在地 奈義町滝本

立地

那岐池から約七〇〇m北東の緩斜面上に位置する。標高は三二〇mである。周囲に陸上自衛隊日本原演習場がある。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は勝北郡近藤村の「久永屋敷」として、東西二〇間、南北一五間で、東南を「門口」、南と西方にそれぞれ「前小路」「西小路」、北方を「背戸の町」といい、村長の久永氏が代々居住、屋敷の南の向いには同氏が射事を行っていた跡があると記す。

文献

「東作誌」、「美作古城史」、「日本城郭大系」693、『改訂岡山県遺跡地図』奈義35

英田郡

〔美作市〕 大原町

東粟倉村

美作町

作東町

英田町

西粟倉村

兵庫県佐用郡佐用町

〔美作市〕大原町

1 大熊屋敷（仮称）

所在地 美作市江ノ原

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「新免家侍帳」とされる文書には「中村刑部 江原大熊」とある。

文献

「東作誌」

2 県構

所在地 美作市古町

美作市指定文化財

立地

吉野川が古町地区を流れる右岸にある。標高約二五〇mの平地にあり、すぐ西側を旧因幡街道が通る。

縄張

未詳。

城史

「新免家侍帳」とされる文書には「春名三之丞 県同上（古町）」とある。「東作誌」は吉野郡古町村の「構」として、「県」の地にあり、春名三之丞の屋敷で約一町四方、今は陸田となり、矢筈竹あり、石垣の跡が残ると記す。



県構

備考

『改訂岡山県遺跡地図』は、一部石垣があるが後世のものであるとする。

文献

「東作誌」、『美作古城史』、『日本城郭大系』573、『改訂岡山県遺跡地図』大原21、『大原町史』地区誌編

3 会下城

所在地 美作市古町

立地

吉野川が古町地区を流れる右岸にあり、西から山林部が迫り出してくる突端に所在する。標高は約三〇〇m。

縄張

『英田郡史考』に略図が掲載されている。

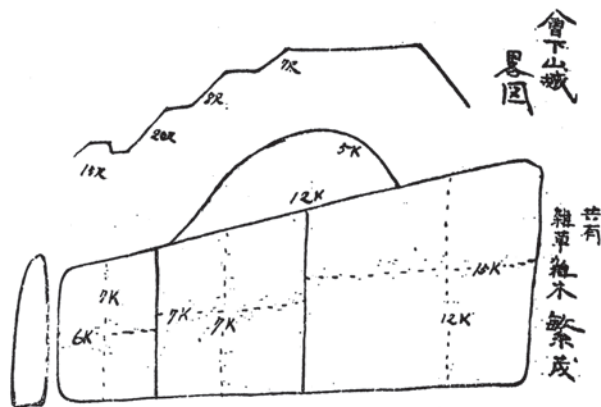
城史

正保書上五四城の一で、「古城之覚」は吉野郡古町村の「会下（城）」として、城主不詳とする。

「東作誌」は「古城」として、会下山あるいは山本山と称し、佐用美濃守貞久が居す、本丸（一〇間四方）、乾の丸（一〇間四方）、坤



会下城



会下城略図（『英田郡史考』より）

文 献

の丸(同)、東南が大手で山野高さの坂路の約六〇間と記す。天保国絵図に「会下古城跡」とある。

「武家聞伝記」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「美作古城記」、「英田郡誌」、「英田郡史考」、「岡山県通史」英田12、「美作古城史」、「日本城郭大系」581、「改訂岡山県遺跡地図」大原20、「大原町史」地区誌編

4 三王山城・山王山城

さんのうざん さんのうざん

所在地 美作市古町

美作市指定史跡

立 地

智頭急行大原駅の東側の山にあたり、標高は約三五五mである。吉野川流域とともに、後山川流域も一望できる。国道四二九号線、大原・古町の信号から、智頭急行の高架橋の先、大原神社の裏手。

縄 張

城域は北東側の主郭部と南西側の別郭に分かれ、両区域の間は三重の堀切で仕切られている。主郭部と別郭

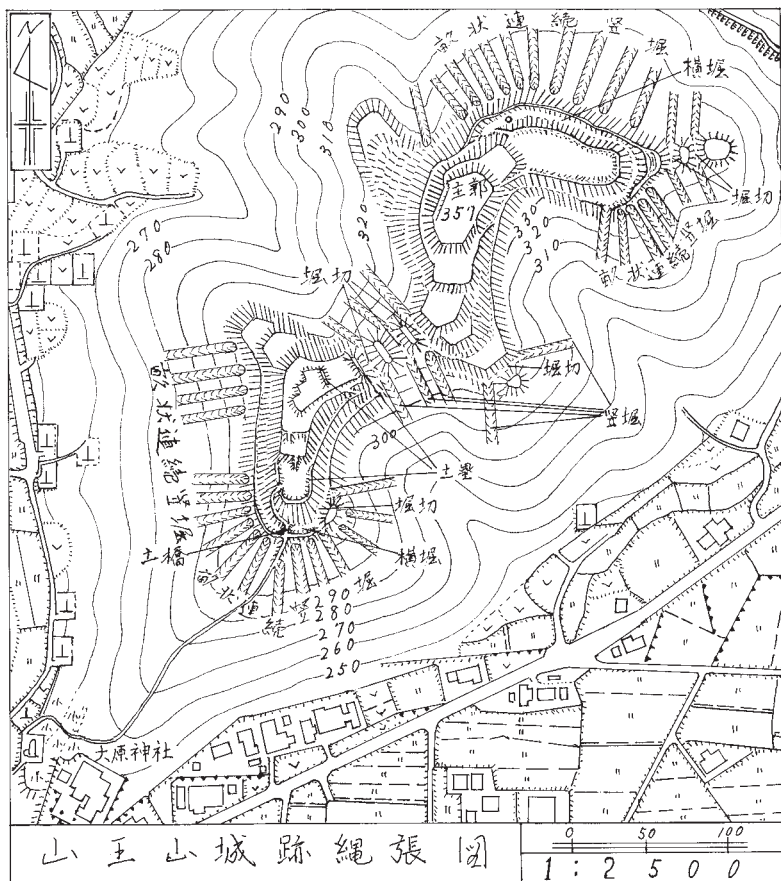


三王山城・山王山城

はそれぞれ外郭部に土塁と横堀・畝状空堀群を組み合わせた複雑かつ技巧的な防塁型ラインを築き、強固な防禦線を形成する。

曲輪配置からは、山王山城は城主とそれに匹敵する勢力が横並びにそれぞれ持ち場を構える体制にあったことが見て取れる。この地域に複数の勢力が割拠した可能性、或いは外部の広域大名権力のもとで在番衆が編成された可能性のいずれかが考えられる。

城 史



山王山城跡縄張図

正保書上五四城の一で、「古城之覚」は吉野郡尾崎村の「三王山城」として、城主を新免弾正少弼宗政とする。「東作誌」は「山王山城」として小原孫次郎入道信明が居し、康安元年(一三六一)に山名時氏のために落城ののち、康正二年(一四五六)に宇野中務大輔家貞が再興して小原城と称し、次いで新免伊賀守貞重が明応二年まで居すという、本丸(東西二〇間、南北一〇間)、二段(二〇間四方)、三段(二〇間四方、あべの木あり)、東北に厩廊(三〇間、二〇間)、その他小廓多く、帯廓もあり、堀切(幅一間半、長さ一町余り)を引き回し、南向きの城と記す。天保国絵図に「山王古城跡」とある。

康安元年（一三六二）七月、山名時氏的美作国侵攻にあたり降参した六か城のうちに「小原孫次郎入道ガ小原ノ城」がみえる（「太平記」）。この城にあたるか。

備考

『改訂岡山県遺跡地図』に、本丸の一部が対空監視哨によって破壊とある。平成一八年（二〇〇六）に尾崎遺跡の調査区北端、当城の丘陵裾部で階段状に掘立柱建物を検出、城郭関連遺構と考えられている。

文献

「太平記」、「武家聞伝記」、「美作鬢鏡」、「東作誌」、「美作鏡」、「美作古城記」、「美作略史」、「英田郡誌」、「英田郡史考」、「岡山県通史」英田11、「美作古城史」、「日本城郭大系」602、「改訂岡山県遺跡地図」大原15、「大原町史」地区誌編、「岡山県埋蔵文化財報告」37、山形二〇〇七、「戦国山城を攻略する」

5 土居田構

所在地 美作市古町

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「新免家侍帳」とされる文書には「新免伊予守 尾崎土居田構 備中守従弟なり」とある。

文献

「東作誌」

6 平尾弥十郎屋敷（仮称）

所在地 美作市古町

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「新免家侍帳」とされる文書には「平尾弥十郎 同上（古町）」とあり、「東作誌」はこれを受け「平尾弥十郎屋敷」として新免家に仕え古町村に住むとされるが、具体的な在在所は不詳と記す。

文献

「東作誌」、「美作古城史」

7 平田又右衛門屋敷（仮称）

所在地 美作市古町

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「新免家侍帳」とされる文書には「平田又右衛門 同上（古町）」とあり、「東作誌」はこれを受け「平田又右衛門屋敷」として新免家に仕え古町村に住むとされるが、具体的な在在所は不詳と記す。

文献

「東作誌」、「美作古城史」

8 山田勘介屋敷（仮称）

所在地 美作市古町

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「新免家侍帳」とされる文書には「山田勘介 古町」とあり、「東作誌」はこれを受け「山田勘介屋敷」として新免家に仕え古町村に住むとされるが、具体的な所在は不詳と記す。

文献

「東作誌」、「美作古城史」

9 八幡城

所在地 美作市古町

立地

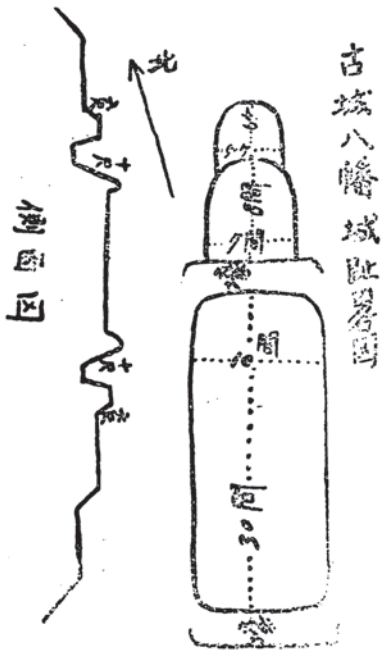
古町地区にある八幡神社のすぐ北側の丘陵地。標高は約二七〇mである。

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、西に延びる尾根先端、南側と東側の尾根を堀切によって切断し、南北約七〇mを測る。東側の堀切外側は五〇mにわたり平坦であり、城郭が堀切の外に広がる可能性ありとする。

城史

『英田郡史考』は尾崎の八幡城として、由来不詳、城跡の形式からみれば、康安年中（一二三六）に山名氏が落城させたものかとする。



八幡城略図（『英田郡史考』より）

備考

小寺民部太夫が居城との口碑があると記す。『改訂岡山県遺跡地図』は「八幡山城」とする。

文献

『英田郡史考』、『改訂岡山県遺跡地図』
大原10、『大原町史』地区誌編



八幡城

10 安積小四郎屋敷（仮称）

所在地 美作市中町

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「新免家侍帳」とされる文書には「安積小四郎 上庄」とあり、「東作誌」はこれを受け上庄村の「安積小四郎屋敷」として竹山城全盛期に当村に住むと記す。

文献

「東作誌」、「美作古城史」

11 内海孫兵衛屋敷（仮称）

所在地 美作市中町

立地

国道三七三号線が雪見橋を渡る約二五〇m北西の集落内にある。吉野川左岸にあたり、すぐ南で吉野川と後山川が合流する。

縄張

未詳。

城史

「新免家侍帳」とされる文書には「内海孫兵衛 同上(上庄)」とあり、「東作誌」はこれを受け上庄村の「内海孫兵衛屋敷」として新免家の侍で竹山城全盛期に当村に住むと記す。

文献

「東作誌」、「美作古城史」、「日本城郭大系」579、「改訂岡山県遺跡地図」大原23



内海孫兵衛屋敷 (仮称)

12 小山城

所在地 美作市宮本

立地

宮本地区の集落南側にある標高約三五六mの山林部にある。兵庫県の手用町釜坂地区に至る古道が北側を通る。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は吉野郡宮本村の「小山古城」として、城主不詳、高さ一七〇間余り、西の麓から八〇間などとし、峰の広さ南北四〇間、東西七間と記す。

文献

「東作誌」、「美作古城史」、「日本城郭大系」599、「改訂岡山県遺跡地図」大原116



小山城

13 高岡構

所在地 美作市宮本

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「新免家侍帳」とされる文書には「新免備後守 高岡構 宮本村の内 備中守従弟なり」とある。

文献

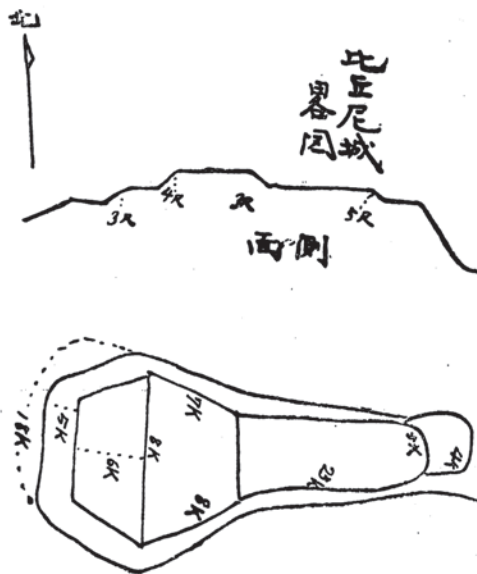
「東作誌」

14 比久尼ヶ城・蜂谷城(仮称)

所在地 美作市宮本

立地

宮本地区中西町集落の南側の山にあたる。宮本川左岸。標高は約三六〇mで、智頭急行の蜂谷トンネルが山中を通る。



比久尼ヶ城・蜂谷城(仮称)略図(『英田郡史考』より)

縄張

城史

『英田郡史考』に略図が掲載されている。「東作誌」は吉野郡宮本村の「蜂谷」として、古城跡と呼び城主不詳とする。『英田郡史考』は宮本の「比丘尼ヶ城」として、築城方式から尼子以前のもので記す。

『英田郡史考』、『改訂岡山県遺跡地図』大原126、『大原町史』地区誌編



比久尼ヶ城・蜂谷城（仮称）

文献

15

宮本構

所在地 美作市宮本

岡山県指定史跡
美作市指定文化財

立地
縄張

宮本地区の集落内に位置し、北を宮本川に接する。未詳。

城史

「新免家侍帳」とされる文書には「平田武二 宮本」「宮本武蔵 武二の子なり」とある。「東作誌」は吉野郡宮本村の「宮本武蔵屋敷」として、三〇間四方で石垣は寛永一五年（一六三八）、天草一揆の際公儀からの命で取り崩したとし、宮本武蔵の父無仁以来この地に住み、今に子孫ありと記す。『英田郡誌』は「宮本武蔵誕生地」として、宅地は「構屋敷」と称するとある。『英田郡史考』は「宮本武蔵出生地」として「セド畑」の地にあり、東西一八間、南北三〇間とし、また『美作古城史』は地名を「構の段」というとする。

備考

『改訂岡山県遺跡地図』は所在地を誤っている。

文献

『東作誌』、『英田郡誌』、『英田郡史考』、『美作古城史』、『日本城郭大系』639、『改訂岡山県遺跡地図』大原124、『大原町史』地区誌編

16

隠岐殿

所在地 美作市下町

立地
縄張

未詳。

城史

文献

「新免家侍帳」とされる文書には「新免隠岐守 下町 備中守伯父なり」とある。「東作誌」は吉野郡下町の「隠岐殿」として、地元民は誤って「オキントノ」というとし、屋敷跡が残ると記す。「東作誌」

17

本位田構（仮称）

所在地 美作市下町

立地
縄張

未詳。

城史

文献

「新免家侍帳」とされる文書には「本位田外記之介 小谷上城構 下町の内」とある。「東作誌」

香山屋敷（仮称）

所在地 美作市下町

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「新免家侍帳」とされる文書には「香山半大夫 下町竹山の下」とある。

文献

「東作誌」

19 竹山城

所在地 美作市下町

美作市指定史跡

立地

下町地区の千歳橋のすぐ南の山頂部にある。吉野川右岸に位置し、標高は約四二四mである。膝下東側を旧因幡街道が通る。国道四二九号線、下町地区の大原中学校手前に登山道の標識がある。



竹山城

縄張

縄張りをみると、東側に本城があり、西側に別郭を持つ配置となっている。東の本城部分は、二つのピークに挟まれて馬場と呼ばれる広い空間を中心に、南側に太鼓丸と呼ばれた空間を持つ。尾根筋に沿って下位曲輪が並び先端に堀切を配する。一方、尾根伝いに離れて位置する西の曲輪群は要所に堅堀を配した単郭の曲輪を中心に、南側に伸びる尾根筋に幾つかの曲輪が確認される。東側の本城部分の曲輪群は主要部として慶長期まで機能した可能性が高く、後の改修が考えられる。

城史

正保書上五四城の一で、「古城之覚」は吉野郡下町村の「竹山之(城)」として、城主を新免伊賀守長重とする。「東作誌」は吉野郡第一の大城として、城主は新免伊賀守貞重・同左衛門尉宗貞・同伊賀守

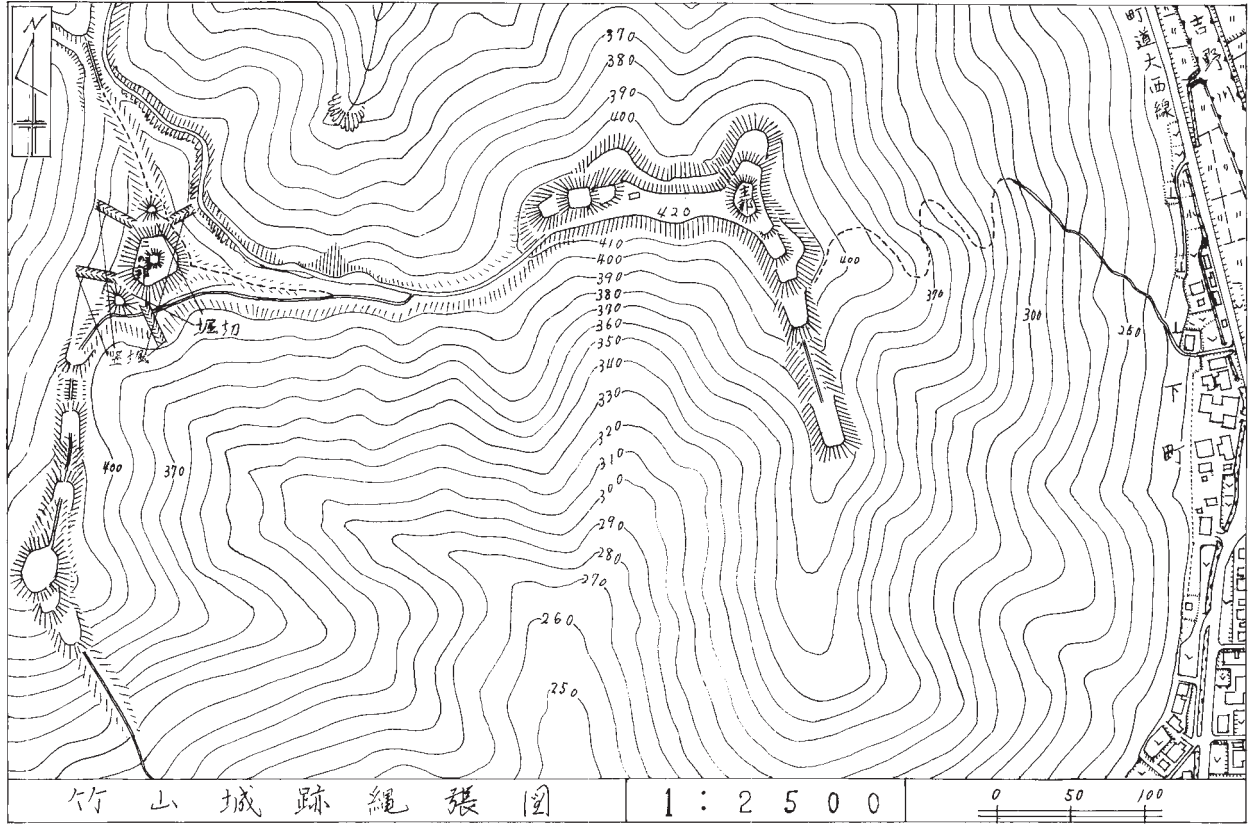
文献

宗貫の三代、明応二年(一四九三)に吉野郡小原より移り慶長五年(一六〇〇)まで在城とする、本丸(東西三〇間、南北八〇間)、西丸(東西三〇間、南北〇間)、坊主ヶ丸(上の段一〇間四方。下の段長さ三間、横六間)、太鼓丸(五間四方)、段郭(東に二箇所、馬場の北に一箇所三段)、馬場(幅六間、長さ五〇間)、坊主丸の西に堀切(幅三間、長さ五間)一箇所、東・北・西に井戸跡三箇所、土塁や門の跡あり、城山の高さは三〇〇間余り、東が大手と記す。天保国絵図に「竹山古城跡」とある。

康安元年(一三六一)七月、山名時氏の美作国侵攻、倉懸城攻囲の救援のため赤松則祐が兵を籠めた播磨・美作国境の四か城のうち「竹山」とはこの城にあたるか(「太平記」)。

天正五年(一五七七)一二月、「作州之内新免弾正左衛門」が羽柴秀吉に人質を召し連れ出頭、織田方に一味したため居城させたとある(下村文書)。

「太平記」、「武家聞伝記」、「美作鬢鏡」、「東作誌」、「美作鏡」、「美作古城記」、「美作略史」、「英田郡誌」、「英田郡史考」、「岡山県通史」英田10、「美作古城史」、「岡山の城と城址」、「日本城郭大系」610、「歴史散歩岡山の城」、「改訂岡山県遺跡地図」大原27、「大原町史」地区誌編、「岡山の山城を歩く」74



縄張
未詳。

立地
星祭山は標高約五七五mの独立峰であり、吉野川流域や後山川流域を一望できる場所である。

22 星祭城
ほしまつり
所在地 美作市下町

文献
「東作誌」

城史
「新免家侍帳」とされる文書には「船曳左衛門 扇屋の上同上」とある。

縄張
未詳。

立地
未詳。

21 船曳屋敷(仮称)
ふなびき
所在地 美作市下町

文献
「東作誌」

城史
「新免家侍帳」とされる文書には「野村藤左衛門 土居構 下町の内」とある。

縄張
未詳。

立地
未詳。

20 土居構
どい
所在地 美作市下町

城史

「古城之覚」は竹山城（美作市下町）の北に「星祭」と言い伝える大山があり、「太平記」に詳しくみえらるとする。「東作誌」は吉野郡下町村の「星祭城」として、竹山の上の山で甚だ高く、古町・川上・下町の三ヶ村にかかると記す。天保国絵図に「星祭山」とある。

康安元年（一三六一）七月、山名時氏の美作国侵攻、倉懸城攻囲の救援のため赤松則祐が兵を籠めた播磨・美作国境の竹山城など四か城に対抗し、山名方の小林民部丞重長が扱った「星祭ノ嶽」とはこの山にあたるか（「太平記」）。

文献

「太平記」、「武家聞伝記」、「東作誌」

23 尼ヶ城

あま

所在地 美作市川上

立地

未詳。

縄張

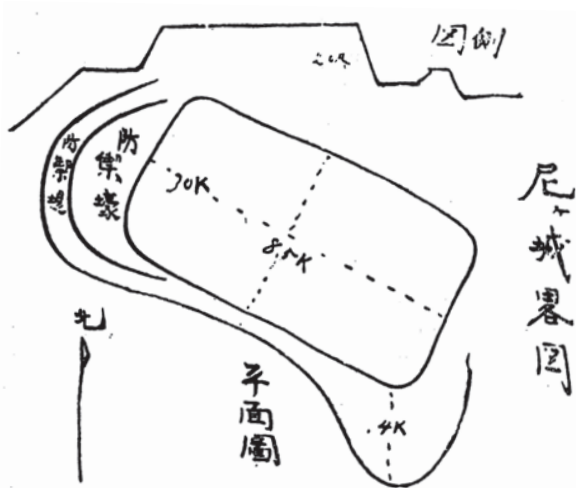
「英田郡史考」に略図が掲載されている。

城史

「英田郡史考」に「尼ヶ城」として、城主不詳、正平一〇年（一三五五）に山名時氏の執事小林重長のため落城したと記す。

文献

『英田郡史考』



尼ヶ城略図（『英田郡史考』より）

24 大野新左衛門屋敷

おおのしんざえもん

所在地 美作市川上

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は「大野新左衛門屋敷」として、家末の地にあり、大永年中（一五二一〜八）に新免備中守貞弘が住み、子孫が続いていると記す。

文献

「東作誌」、「美作古城史」

25 大門屋敷(仮称)・井垣屋敷(仮称)

いがき

所在地 美作市川上

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「新免家侍帳」とされる文書には、「元木刑部 大門 同上（川上村の内）」とある。「美作古城史」は「井垣」として元木刑部が住み、明慶（一四九二〜五〇一）の頃に新免一族が住み名字を改め、森孫二兵衛泰高・日向守泰光・孫兵衛泰信・宗四郎泰弘が代々新免氏に仕えたが、竹山廃城のち子孫が絶えたとする。

文献

「東作誌」、「美作古城史」

26 岡屋敷おか

所在地 美作市川上

立地
縄張

未詳。

城史

「新免家侍帳」とされる文書には、「新免藤右衛門 岡 同上（川上の内）」とある。『美作古城史』は、「岡」「岡屋敷」に平田次郎左衛門が住むとする。

文献

『東作誌』、『美作古城史』

27 小淵城

所在地 美作市川上

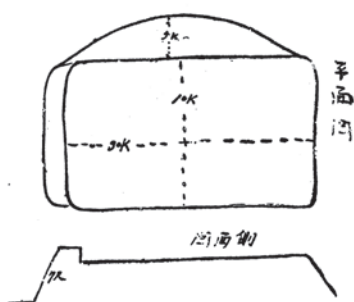
立地

国道四二九号線が川上地区で大きく湾曲する部分の南東にある標高約三三〇mの独立峰上にある。真船川と川上川が合流する地点の左岸

に該当する。



小淵城



小淵城略図（『英田郡史考』より）

小淵城跡畧圖

縄張

城史

文献

『英田郡史考』に略図が掲載されている。
東作誌」は、古くは大野一族が籠り、本丸・二の丸の跡あり、のち元木三郎三衛門が住むと記す。『英田郡史考』は野形にあるとする。
「東作誌」、『英田郡史考』、『美作古城史』、『日本城郭大系』 598、『改訂岡山県遺跡地図』大原26、『大原町史』地区誌編

28

構かまえ

所在地 美作市川上

立地
縄張

未詳。

城史

「東作誌」は「構」として、砦の跡で「惣土居、昔大野の氏族大夫坊法橋の住むところ」と記す。

文献

「東作誌」、『美作古城史』

29 久古屋敷

所在地 美作市川上

立地
縄張

未詳。

城史

「東作誌」は「久古屋敷」とし、久古という人物が住む、久古は伯耆国の人で、俗名は杉原孫兵衛、元龜二年（一五七一）に毛利元就が因幡国から宇塚越で美作国に乱入して際、孫兵衛は一九歳で一番乗すると記す。

文献

「東作誌」、『美作古城史』

30 新免与三屋敷

所在地 美作市川上

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は「新免与三屋敷」として下山の地にあつて今は田となると記す。

文献

「東作誌」、『美作古城史』

31 寺坂城

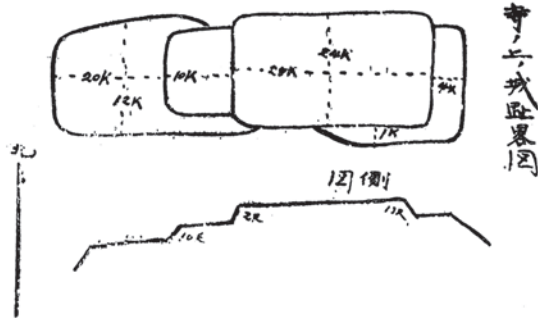
所在地 美作市川上

立地

川上地区にある靈山寺の付近一帯。集落を見下ろす小丘陵地にある。標高は約二四〇m。



寺坂城



寺坂城略図（『英田郡史考』より）

縄張

『英田郡史考』に略図が掲載されている。

城史

「新免家侍帳」とされる文書には「劔持土佐守 寺坂城主 川上」とある。「東作誌」は「寺坂城」として、康安年中（一三六一）に大野一族が城に籠ったのを山名時氏が攻破り、後に大永年中（一五二二〜八）に新免備中守貞弘が再興して住む、また山下の竹の鼻の地には土屋敷の跡があると記す。『英田郡史考』は「寺之上之城址（一名寺坂城）」とし、大野一族が籠るとする。『美作古城史』は、城跡は現在の靈仙寺背後の平坦地で、面積約二反位が畑となっているとする。

文献

「東作誌」、『英田郡史考』、『美作古城史』、『日本城郭大系』614、『改訂岡山県遺跡地図』大原25、『大原町史』地区誌編

32 竹の鼻屋敷（仮称）

所在地 美作市川上

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「新免家侍帳」とされる文書には、「同（新免）弥十兵衛 竹の鼻同（川上の内）」とある。「東作誌」は寺坂城の山下の「竹の鼻」の地には土屋敷の跡があると記す。

文献

「東作誌」

33 寺内屋敷・劔持土佐守屋敷

けんもちとさのかみ

所在地 美作市川上

立地 未詳。

縄張 未詳。

城史

文献

「新免家侍帳」とされる文書には「同（劔持）又次郎 寺内」とある。「東作誌」は「劔持土佐守屋敷」として、奥の坊下屋敷の地にあり、子の又次郎、藤八の三代が住むと記す。

「東作誌」、「美作古城史」

34 土居

所在地 美作市川上

立地 未詳。

縄張 未詳。

城史

文献

「東作誌」は「土居」として、大野氏代々の屋敷で、元弘年中（一三三二～四）に大野弾正忠氏永があり、子孫は新免家に仕え、墓所は山上、権現に祭った宮居や持仏堂観音ありと記す。

「東作誌」、「美作古城史」

35 塔田屋敷（仮称）

所在地 美作市川上

立地 未詳。

縄張 未詳。

城史 「新免家侍帳」とされる文書には、「新免又四郎 塔田 同上（川上の内）」とある。

文献 「東作誌」

36 中尾屋敷（仮称）

所在地 美作市川上

立地 未詳。

縄張 未詳。

城史

文献

「新免家侍帳」とされる文書には、「同（新免）官千代丸 美土路川上の内」とある。「美作古城史」は「中尾」として、新免官千代丸、ついで中尾助之允・同助大夫らが住んだと記す。

「東作誌」、「美作古城史」

37 中島屋敷（仮称）

所在地 美作市川上

立地 未詳。

縄張 未詳。

城史

文献

「新免家侍帳」とされる文書には、「新免次郎九郎 中島 同上（川上の内）」とある。「美作古城史」は「中島」として、元弘（一三三二～四）の頃中島左近が住み、後に新免一族また菅井次兵衛、船曳孫右衛門・孫兵衛・藤兵衛の屋敷となったとする。

「東作誌」、「美作古城史」

38 中屋屋敷（仮称）

所在地 美作市川上

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「新免家侍帳」とされる文書には、「有元三郎右衛門 中屋 同上（川上の内）」とある。「美作古城史」には新免与三右衛門・同弥右衛門の屋敷であったがのち有元左兵衛の屋敷となったとする。

文献

「東作誌」、「美作古城史」

39 仁寿寺城（仮称）

所在地 美作市川上

立地

未詳。

縄張

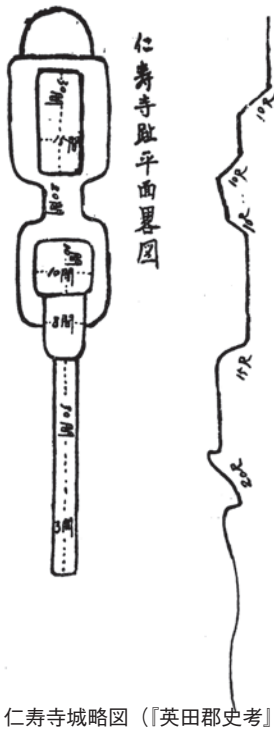
『英田郡史考』に略図が掲載されている。

城史

『英田郡史考』に、仁寿寺跡の地形から、同寺は古城跡を利用して建立されたものと記す。

文献

『英田郡史考』



40 野間藤三郎屋敷

所在地 美作市川上

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は「野間藤三郎屋敷」として、竹の鼻の地にありと記す。

文献

「東作誌」、「美作古城史」

41 比丘尼ヶ城

所在地 美作市川上

立地

川上川の左岸にあり、大野神社背後の丘陵上付近に位置するとみられる。

縄張

『英田郡史考』に略図が掲載されている。

城史

「東作誌」は吉野郡川上村の「駿論坊」として、宮山の嶺に段があり、昔、大野一族の駿論坊が住んだ跡でその塚があるとする。『英田郡史考』は「殷論坊城」ともいうとし、大字川上二九八七番地にあり、城主不詳、大野五ヶ城の一にして康安元年（一二六一）山名時氏に攻め落とされると記す。

文献

「東作誌」、「英田郡史考」

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、堀切・犬走りが明確に確認でき、郭面が確実に二面と、堀切の両側に土塁ありと記す。



法天山城

立地

川上川と吉野川が合流する地点の北側に該当し、標高約二七〇mの尾根上に所在する。立石地区を県道五号線が通る際の、北方面の山である。

42 法天山城

所在地 美作市川上・立石



比丘尼ヶ城略図（『英田郡史考』より）

文献

『東作誌』、『美作古城史』

城史

「東作誌」は吉野郡川上村の「的場」として昔、大野一族や在々の郷士が朝夕射事を行った場所、寛永（一六二四～四四）の頃、村井監物成政が住むとする。

縄張

未詳。

立地

未詳。

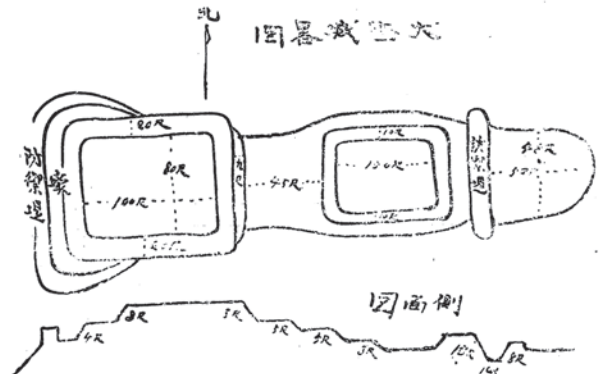
43 的場屋敷（仮称）

所在地 美作市川上

文献

『東作誌』、『美作略史』、『英田郡史考』、『美作古城史』、『日本城郭大系』633、『改訂岡山県遺跡地図』大原155、『大原町史』地区誌編

大野の一族が居城、大野五ヶ城の一にして康安元年、山名時氏に攻め落とされると記す。



法天山城略図（『英田郡史考』より）

城史

「東作誌」は吉野郡川上村の「法天山城」として元弘（二三三～四）の頃に出城

44 宮脇屋敷（仮称）

所在地 美作市川上

立地
縄張

未詳。

城史

「新免家侍帳」とされる文書には、「新免孫惣 宮脇 同上（川上の内） 同上（新免備中守子なり）」とある。『美作古城史』は「宮脇」として、大野氏の一族宮脇氏ののち、新免藤衛門泰貞、ついで慶長（一五九六〜六一五）の頃には新免貞弘が出家して隠居とする。

文献

「東作誌」、『美作古城史』

45 森畑屋敷（仮称）

所在地 美作市川上

立地
縄張

未詳。

城史

「新免家侍帳」とされる文書には、「森惣兵衛 森畑 川上村の内」とある。

文献

「東作誌」、『美作古城史』

46 山根屋敷（仮称）

所在地 美作市川上

立地
縄張

未詳。

城史

「新免家侍帳」とされる文書には、「新免源太夫・孫惣 山根 同上（川上の内） 新免備中守子なり」とある。『美作古城史』は「山根」とする。

文献

「東作誌」、『美作古城史』

47 和気周防屋敷（仮称）

所在地 美作市笹岡

立地
縄張

未詳。

城史

「新免家侍帳」とされる文書には、「和気周防 笹岡堀切」とある。

文献

「東作誌」

48 大当屋敷（仮称）

所在地 美作市下庄町

立地
縄張

未詳。

城史
文献

「新免家侍帳」とされる文書には、「木南加賀右衛門 大当
下の庄の内」とある。
「東作誌」

49 本位田駿河守屋敷(仮称)

ほんいでんするがのかみ

所在地 美作市下庄町

立地
縄張

未詳。

城史
文献

「新免家侍帳」とされる文書には、「本位田駿河守 下の庄千
代」とある。
「東作誌」、「美作古城史」

50 千原城

ちはら

所在地 美作市下庄町

立地
縄張

未詳。

城史

『日本城郭全集』は「千原砦」として、赤松貞規範の子貞時
が平尾氏を称し、四代の正家は吉野郡下庄村千原に移り砦を
築いたが、天正六年（一五七八）に宇喜多直家の美作国侵攻
で討死、子の正直は千原氏に改め帰農したとある。

文献

『日本城郭全集』英田郡9、『日本城郭大系』613

51 桂坪城・四辻構

かつらつば

所在地 美作市桂坪

立地

大屋川と川上川が合流する地点のす
ぐ北側の尾根突端上にある。標高は
約二五〇m。

縄張

未詳。

城史

「新免家侍帳」とされる文書には、「同
（新免）治部左衛門 桂坪城 同上
（備中守弟なり）」とある。「東作誌」
は吉野郡桂坪村の「古城」とのみあ
り、城主は新免備中守の弟、治部左
衛門、今は畑となる高陽の地で土塁や段々があり約一町四方と記す。
『英田郡史考』は桂坪の「四辻の構」として、竹山城と小房城の両
軍が戦った際、竹山城兵がこの構まで退き西麓で自害したとの伝承
があるとする。『大原町史』は現在城跡は不明とする。

文献

「東作誌」、「英田郡史考」、「美作古城史」、「日本城郭大系」588、『改
訂岡山県遺跡地図』大原85、『大原町史』地区誌編

52 滝構

たき

所在地 美作市滝

立地

未詳。

縄張

未詳。



桂坪城・四辻構

城史
文献

「新免家侍帳」とされる文書には、「水島与三左衛門 滝構」「佐志太郎左衛門 同上」とある。「東作誌」

53 正岡城

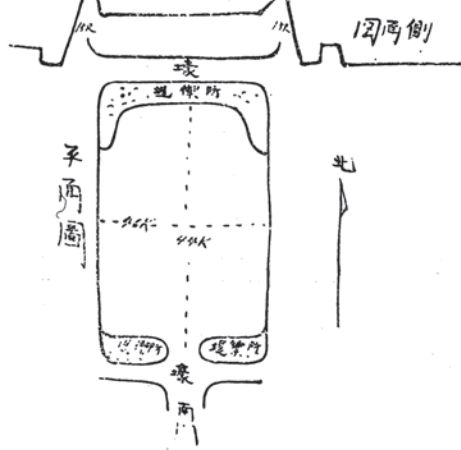
所在地 美作市滝

立地

大屋川右岸にあり、滝地区大屋集落の東端の緩斜面上に所在する。国道四二九号線が大屋川を跨ぐ地点の、すぐ西側に位置する。標高は約二二〇mである。

縄張

畑和良氏の歴史サイト「落穂ひろい」によれば、周囲を道路によって囲まれているが主郭部の保存状態はよく、段丘上の主郭はほぼ長方形で、南縁全体に土塁が残され中央が開口、食い違い土塁の虎口を形成する。北辺部も土塁状の高まりがあり、東北角の一段高い墨上に墓地が存在、主郭北側の尾根筋は宅地となっているが、屋敷の北辺の尾根に接して折れを伴う土塁があり、屋敷に入る開口部が残ることから土塁より内側を旧城域と推測し、二つの曲輪の西側の舗装道路と脇の平地は帯曲輪を利用して作



正岡城略図（『英田郡史考』より）

城史

られた可能性が高いとする。『英田郡史考』は「正岡城」として、城主を新免備中守の弟遠江守、慶長年間に落城し、南門や水汲場などの地名が残り、南の土塁の上に墳墓五基がありと記す。

文献

『英田郡史考』、『改訂岡山県遺跡地図』大原74、『大原町史』地区誌編

54 赤田城・大野城

所在地 美作市赤田

立地

川上川が吉野川に合流する地点の南西部にある標高約三一一mの独立峰上に所在する。吉野川右岸にあり、吉野川上流域・下流域ともに一望できる。

縄張

縄張りをみると、主郭を中心に南北の稜線に曲輪を並べた配置となっている。主郭から北側に土塁を廻して虎口が確認される。南西側の曲輪にも土塁を廻して北西隅に虎口が設定される。なお、今後の精査により虎口の形態を中心に確認する必要がある。

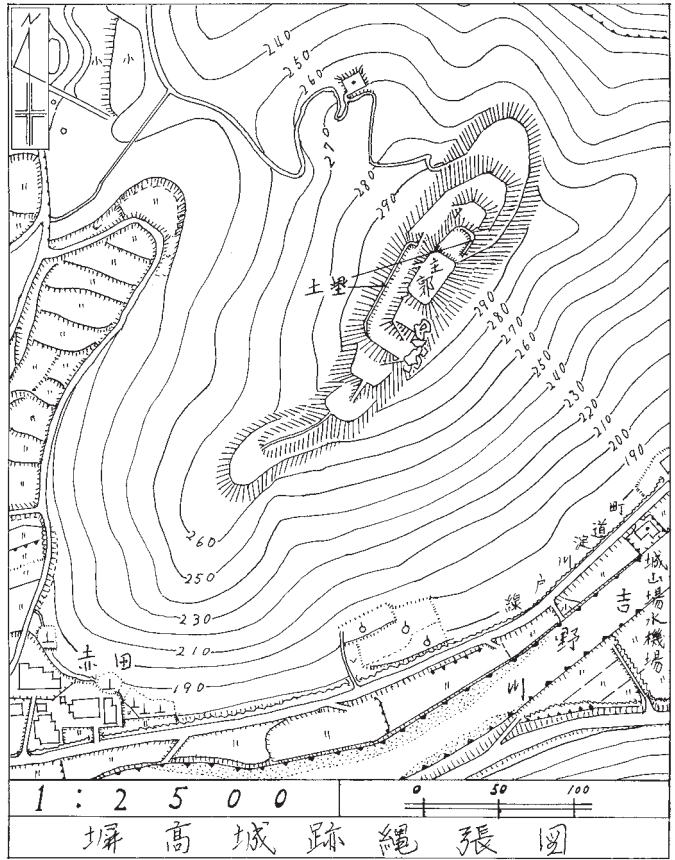


赤田城・大野城

城史



正岡城



城史

正保書上五四城の一で、「古城之覚」は吉野郡赤田村の「赤田之(城)」として、城主は大野一族、天正年中(一五七三〜九二)には浮田直家の家臣井口長兵衛が抱え、川上村の内「大山小山六ヶ所之城」は大野一族の寄城と言い伝えるところ。「東作誌」は吉野郡赤田村の「堀高城」あるいは「大野城」とし、城主は始め赤松貞規、中興に井口長兵衛貞詮、天正の頃に春名三之丞といひ、本丸(東西一〇間半、南北一五間)、腰郭(長さ四〇間、幅五間余り)、山の高さは五町、東に大手、西北が搦手、堀切はなし、二の段の下に井戸あり、今は柴山となつていと記す。天保国絵図に「大野古城跡」とある。「美作鏡」は「赤岩城」、別名「堀高ノ城」とするが、これは天正八年五月五日付け新免宗貫書状に「堀高城(堀和高城、岡山市北区建部町和田南)」とある文言の誤読に由来すると思われる。『日本城郭

遺物

文献

『全集』は赤岩城、赤田城、大野城とそれぞれを挙げ、大野城について、里人は「城山」「お城山」と読んで大野氏を崇敬しているとす。康安元年(一三六一)七月、山名時氏的美作国侵攻にあたり降参した六か城のうちに「大野ノ一族ガ籠リタル大野城」がみえる(『太平記』)。この城にあたるか。
古銭・鉄釘・鉄器(刀子か)。
平成一九年度(二〇〇七、八)、エヌ・ティ・ティ・ドコモ中国携帯電話無線基地局新設に伴い発掘調査を実施、遺構は確認されなかつたが一部消滅。

文献

『太平記』、『武家聞伝記』、『美作鬢鏡』、『東作誌』、『美作鏡』、『美作古城記』、『美作略史』、『英田郡誌』、『英田郡史考』、『岡山県通史』英田8、『美作古城史』、『日本城郭全集』英田郡1・2・5、『日本城郭大系』632、『改訂岡山県遺跡地図』大原154、『大原町史』地区誌編

55

井口構(仮称)

所在地 美作市赤田

立地

吉野川右岸、川上川が吉野川に合流する地点の南西部に所在する。県道五号「作東・大原」線の立石地区の信号を右折し、吉野川に架かる白滑橋を渡る。次に川上川に架かる井ノ口橋を渡って直進すると井ノ口構跡がある。

未詳。

「新免家侍帳」とされる文書には「井口長兵衛 堀高城下構」とある。

文献

『東作誌』

縄張

城史

56 広井城（仮称）

所在地 美作市赤田

立地

赤田地区の大滝川左岸、吉野川右岸の緩斜面上に位置する。標高は約二二〇mである。

縄張

未詳。

城史

『日本城郭全集』は「広井の砦」として、小山の頂上部にあり、「広井の墨址」「本位田屋敷」と呼ばれており、天正（一五七三〜九二）の初年、本位田源太夫義継が築城したが、天正六年（一五七八）、宇喜多氏の攻撃で落城、帰農したとする。

文献

『日本城郭全集』英田郡12、『日本城郭大系』628、『改訂岡山県遺跡地図』大原140

57 石塔城・堂ヶ峰城

所在地 美作市立石

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

古城之覚」は吉野郡立石村の「石塔之（城）」として、「赤松一族百騎籠候由」とする。「東作誌」は「堂ヶ峰古城」とし、城主は赤松筑前守貞範、康安元年（一三六一）に山名時氏により落城と記す。「天保国絵図」に播磨国との国境へ「石塔峯古城跡」とある。『英田郡史考』は「太平記」にある堂ヶ峰古城はこの付近ならんとしてつても位置不明とし、『日本城郭全集』は「石堂の峰城」とし、本丸を中心に二の丸、三の

文献

丸の区画も明瞭で、周囲に堀切跡も残るとし、また補遺に重ねて「石塔城」を載せる。
康安元年（一三六一）七月、山名時氏的美作国侵攻、倉懸城攻囲の救援のため赤松則祐が兵を籠めた播磨・美作国境の四か城のうち「石堂ガ峯」とはこの城にあたる（「太平記」）。
「太平記」、「武家聞伝記」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「美作古城記」、「英田郡誌」、「英田郡史考」、「岡山県通史」英田9、『美作古城史』、『日本城郭全集』英田郡3、『日本城郭全集』補遺、『日本城郭大系』617、『大原町史』地区誌編

58 立石構

所在地 美作市立石

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「新免家侍帳」とされる文書には「新免惣兵衛 立石構」とある。

文献

「東作誌」

59 立石城

所在地 美作市立石

立地

吉野川左岸にあり、立石地区集落の東側の独立峰上に所在する。標高は約三〇〇mであり、西に法天山城、赤田城が一望できる。

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は山頂部に郭状地形、谷部に瓦片が散乱、堀切等は不明とする。

城史

正保書上五四城の一で、「古城之覚」は吉野郡立石村の「立石（城）」として、城主不詳とする。「美作鬢鏡」は「立石村ノ城」、「美作鏡」は「方天城」とし城主を立石秀胤とするが、立石村と川上村の境に立地する法天山城（美作市川上・立石）との混同か。「東作誌」は「立石城」として、城主は立石秀胤と記すが、『美作古城史』は城主について疑問を呈している。『日本城郭全集』は「立石城」「方天城」として重出し、城跡に何らの遺構もないとする。



立石城

文献

「武家聞伝記」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「東作誌」、「英田郡誌」、「岡山県通史」英田7、「美作古城史」、「日本城郭全集」補遺、「日本城郭大系」611、『改訂岡山県遺跡地図』大原164、『大原町史』地区誌編

60 尼山城・比丘尼ヶ城

あまやま びくにか

所在地 美作市壬生・沢田

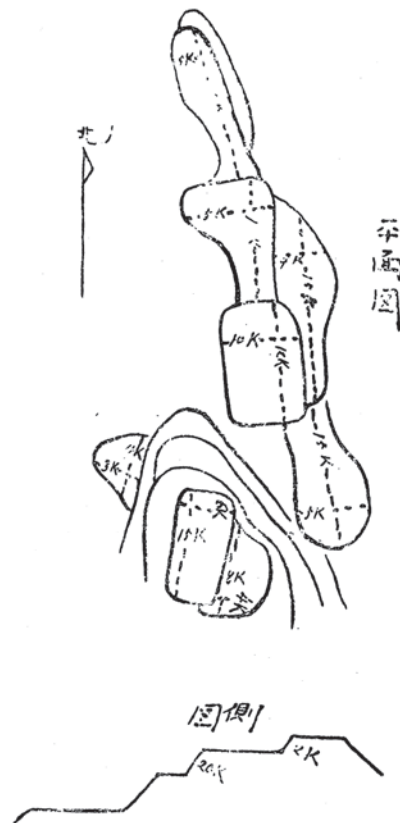
立地

沢田地区の集落から約1km東の独立峰上に位置する。標高は約三八〇mで、吉野川流域の赤田・壬生・川戸・沢田地区を一望でき。『大原町史』には地元では城山と呼ばれるとある。

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、北西に下降する尾根に最も多くの郭を配す、頂部南半の郭はやや広いものが多い、部分的に城の改修がな

比丘尼ヶ城各図



尼山城・比丘尼ヶ城略図（『英田郡史考』より）

城史

されているかとする。

正保書上五四城の一で、「古城之覚」は吉野郡壬生河戸村の「尼山」として、城主は赤松一族とする。「東作誌」は「尼山」、あるいは「比丘尼ヶ城」というとし、本丸（東西一四間、南北四〇間、上段）、東の丸（八間、一〇間、二段）、西の丸（一〇間四方）、北の丸（八間、一五間）、大手は西、南と東が搦手で険しく、堀切は見えないと記す。天保国絵図に「古城跡」とある。



尼山城・比丘尼ヶ城

文献

「武家聞伝記」、「美作鬢鏡」、「東作誌」、「美作鏡」、「美作古城記」、「英田郡誌」、「英田郡史考」、「岡山県通史」英田6、『美作古城史』、『日本城郭全集』補遺、「日本城郭大系」576、『改訂岡山県遺跡地図』大原160、『大原町史』地区誌編

61

壬生構みぶ

所在地 美作市壬生

立地 県道五号線の東側、壬生地区集落内に所在するとされる。集落は河岸段丘上にあり、比較的平面である。

縄張

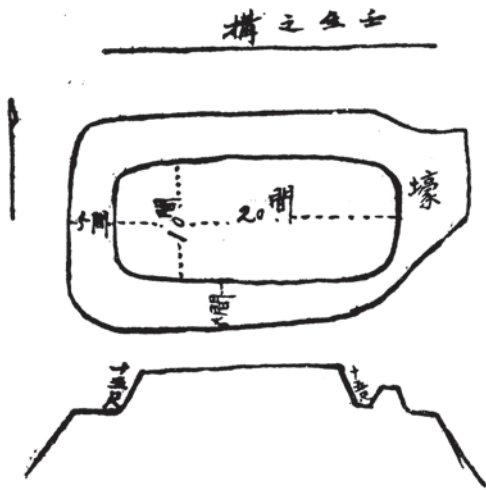
『英田郡史考』に略図が掲載されている。

城史

「新免家侍帳」とされる文書には「川副甚七郎 壬生構」とあり、「東作誌」もこれを受けて「壬生の構」として屋敷跡が残ることを記す。

文献

「東作誌」、「英田郡史考」、「美作古城史」、「日本城郭大系」638、「改訂岡山県遺跡地図」大原162



壬生構略図（『英田郡史考』より）

62 沢田城下構（仮称）さわだ

所在地 美作市沢田

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「新免家侍帳」とされる文書には「中村源蔵兵衛 沢田城下構」とある。

文献

「東作誌」

63 源内屋敷・中北構げんない

所在地 美作市川戸

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「新免家侍帳」とされる文書には「江見源内 中北構」「江見友八郎 源内子なり」とあり、これにあたるか。「東作誌」は吉野郡川戸村の「源内屋敷」として、山下の地にあり、英田郡友野浄福寺城（美作市友野）の城主江見久盛の舎弟左馬介久次が源内と改名、城の落城後に新免宗貫の扶助を受けたと記す。

文献

「東作誌」、「美作古城史」

64 郷籠山

所在地 美作市川戸

立地
縄張

未詳。

城史

「東作誌」は吉野郡川戸村の「郷籠山」、一名「香炉山」として、比丘尼城（美作市壬生・沢田）攻撃時の向城の跡といい、堀切二ヶ所ありと記す。『英田郡史考』は一説に「大舌民族」の遺跡というとする。

文献

「東作誌」、『英田郡史考』、『美作古城史』、『日本城郭大系』 597

65 福原構

所在地 美作市川戸

立地
縄張

川戸地区の吉野川右岸にあり、集落に向かって南東に延伸する尾根上に所在する。標高は約二五〇mである。未詳。

城史

「新免家侍帳」とされる文書には「川副美作守 川戸福原構」とあり、「東作誌」もこれを受け「福原構」として屋敷跡が残ることを記す。

文献

「東作誌」、『美作古城史』、『日本城郭大系』 630、『改訂岡山県遺跡地図』 大原 130



福原構

66 寺床山構

所在地 美作市川戸

立地
縄張

未詳。

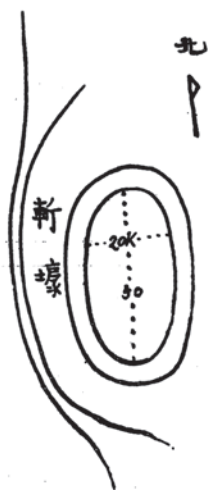
城史

「東作誌」は吉野郡川戸村の「寺床山光明寺」として、今は亡び「中の堂」という屋敷が残ると記す。また『英田郡史考』は「寺床山之構」として、比丘尼ヶ城（美作市壬生・沢田）攻撃の時築いたもので、一説に郷籠山は「大舌民族」の遺跡というとする。

文献

「東作誌」、『英田郡史考』

寺床山構畧図



寺床山構略図（『英田郡史考』より）

67

山根構やまねの

所在地 美作市川戸

立地

川戸地区の集落に向かって西に延伸する尾根上に位置する、吉野川右岸にあり、標高は約三三〇mである。

縄張

未詳。

城史

「新免家侍帳」とされる文書には「井門亀右衛門 川戸山根構」とあり、「東作誌」もこれを受け「山根構」とし、井門氏はもと播磨国の赤松

秀の家臣で、天正八年（一五八〇）に宇野下野守祐清滅亡のち新免宗貫の家臣となり、竹山城落去後は細川越中守に仕え子孫が今もあると記す。



山根構

文献

「東作誌」、「英田郡誌」、「美作古城史」、「日本城郭全集」英田郡13、「日本城郭大系」643、「改訂岡山県遺跡地」大原128、「大原町史」地区誌編

〔美作市〕東粟倉村

68 土居殿

所在地 美作市太田

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は殿村の内高陽の地に屋敷跡あり、地元民は「土居殿」という人が居たといい、時代や姓氏等は不詳と記す。

文献

「東作誌」、『英田郡史考』

69 郷城

所在地 美作市川東

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

『英田郡史考』は川東の「郷城」の地に古城跡があり、元大原卿司（傳）の居跡と伝えられるが誰の居城か不明で、原形も不詳と記す。

文献

『英田郡史考』、『美作古城史』、『日本城郭大系』 596

70 梅ヶ坂構

所在地 美作市川東

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「新免家侍帳」とされる文書に、「竹内中務大輔 梅ヶ坂 河東」とある。『英田郡史考』は面積一町五反歩で梅ヶ坂にあり、竹山城主新免氏の家臣竹内中務太夫が明徳二年（二三九一）に住み、「梅ヶ坂の構」と称したと記す。『日本城郭全集』は、天正一二年（二五八四）、毛利氏と宇喜多氏が和睦したため、竹内市左衛門久能と同五郎左衛門久次が構を築き居住、久次は宇喜多氏没落後に尾崎に移り、のち当地に帰農したとする。

文献

『英田郡史考』、『美作古城史』、『日本城郭全集』英田郡4、『日本城郭大系』 580

〔美作市〕美作町

71 城山

所在地 美作市明見・中尾

立地

滝川左岸にあり、明見地区の集落北側の丘陵上に位置する。国道一七九号線と滝川を隔てた対岸に三星城がある。

縄張

未詳。

城史

山頂は耕作による削平もあって遺構は確認できないとする。

文献

『美作町史』地区誌編・通史編

72 三星城

所在地 美作市明見・入田

美作市指定史跡

立地

梶並川と滝川の合流点の西側にあり、川と山との間を一七九号線が通る。標

高約二二三mの独立峰・三星山頂上にあり、勝間田・檜原・林野方面を一望する要衝の位置にある。国道一七九号線、明見地区にある美作中央病院裏手の稲荷神社を目指す。

縄張

三星山に主郭を置き東西に曲輪を連ねる。全体的に岩盤質のため積極的な普請は難しく東西の頂部を中心に曲輪が造成されている。山上部をみる限りでは典型的な在地系城



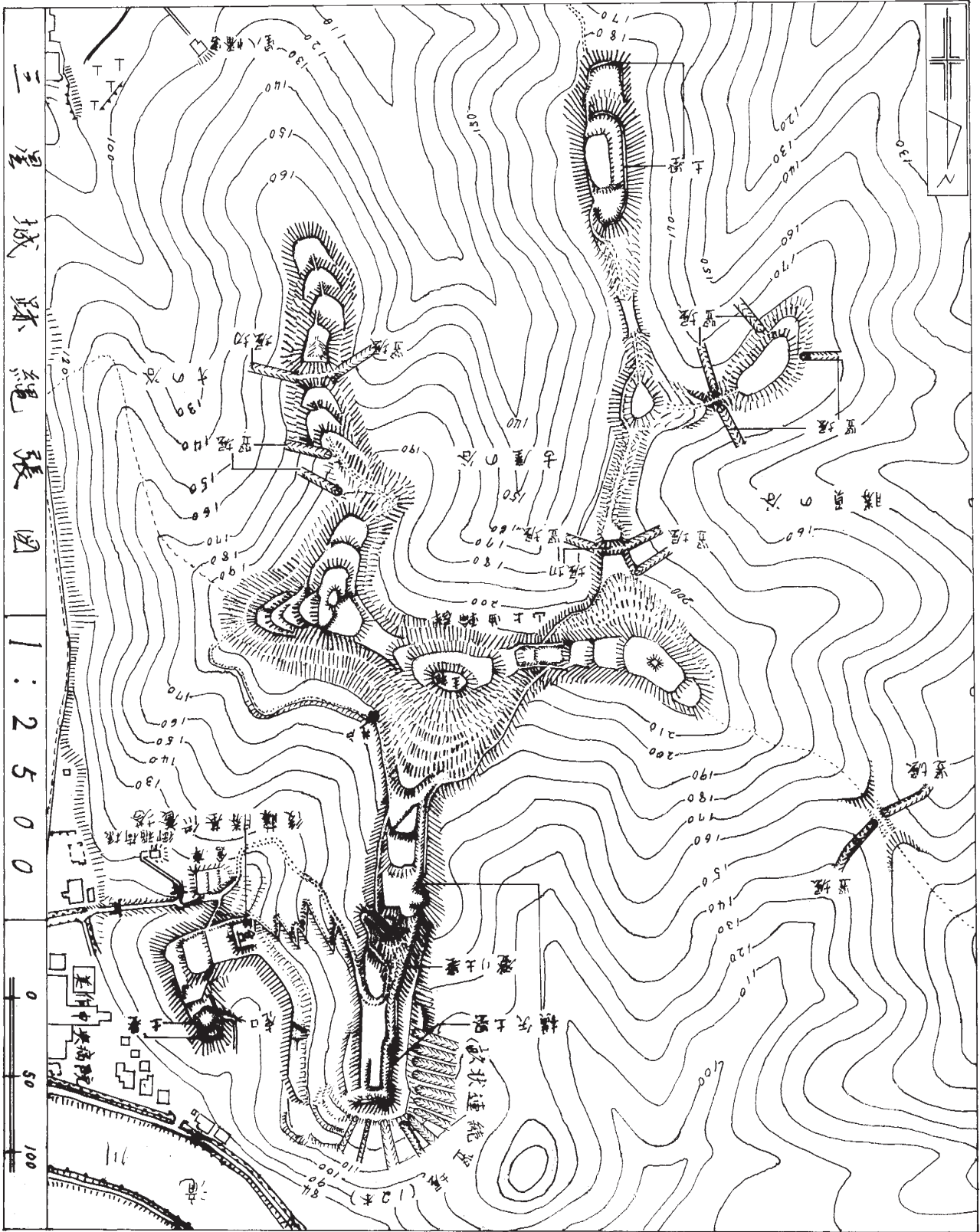
三星城

城史

郭と判断される。ところが、北側尾根筋に目を転じると長大な土塁ラインの存在が注目される。しかもこの土塁ラインには横矢掛かりが設けられている。三星山を詰めにして、麓曲輪群の背後となる尾根筋を外郭ラインとして整備したと考えられる。土塁ラインは北側尾根筋上方の曲輪からはじまり、複雑に折れて虎口を創出する。そして、上方の土塁ラインから分岐して登り土塁が斜面を下る。登り土塁は内側に堅堀を備えており、城道として機能したものとみられる。同様の縄張りは天正十五年に小早川隆景により改修された筑前立花山城にもみられる。さらに、この登り土塁は北側尾根筋直下で西側の墨線に横矢掛かりを伴う土塁ラインとして続く。この土塁ラインは先端に櫓台を伴い北東隅で虎口を形成する。そして、そのまま北東側斜面にて途切れる。この長大な土塁ラインは縄張り技術としては洗練されたものではないが、横矢掛かりを持つ土塁ラインや登り土塁は在地系城郭にはみられない技法である。むしろ織豊系城郭に幾つか確認できると評価される。

三星城は中国国分けで美作国を領国に加えた宇喜多氏段階で織豊系縄張り技術による改修が施されたものと位置付けることができ。三星城の遺構からは、後藤氏時代の塩湯郷支配のみならず、その後も宇喜多氏が豊臣期まで塩湯郷支配を通して美作東部支配の拠点としたことがうかがえる。

正保書上五四城の一で、「古城之覚」は英田郡明見村の「三星之(城)」として、城主を「五島左衛門尉勝元」、勝元は宇喜多直家の智で、直家の家臣中島奎之助が後藤藤兵衛を謀り勝元を毒殺させたと記す。「美作鏡」は「三星城」として城主を後藤撰津守勝元、城山は入田村へ跨るとする。「東作誌」は勝南郡明見村の「三星山古城」とし、明見村の南にあり、入田村と境を接するとし、また同郡入田村の古城跡として、三星山であり前山は明見村に、後山は入田村にかけ



当村の城山と称すと記す。天保国絵図に「三星古城跡」とある。『岡山県勝田郡志』は、初め渡辺進左兵衛長寛が応保年中（一一六一～三）に当地に館を構え三星と称し二代居住、暦応二年（一三三九）後藤康基が塩湯郷地頭職を得て居住したとする。

康安元年（一三六一）七月、山名時氏の美作国侵攻にあたり二〇日余りの抵抗のち山名方となった「妙見」の城がみえる（『太平記』）。応仁元年（一四六七）一〇月、赤松氏の家臣中村五郎左衛門尉が美作国回復を目指して同国院庄（津山市院庄）に入った際、山名勢は東郡の「妙見ノ城」などに籠り抵抗したとある（「応仁別記」）。あるいはこの城にあたるか。出雲国の尼子氏は、備前国周匝（赤磐市周匝）の城山を攻撃したのち「英田郡倉敷村ノ三星ノ城」を一日で、さらに「粟井村ノ赤松之城」を攻め落として出雲国に引き取ったと言いつづける（『備前記』）。しかし城主の後藤勝基はまもなく尼子氏から離反、永禄三年とみられる五月朔日には江見久盛と三星山下の入田で合戦。江見左馬助は久盛と尼子晴久から合戦での健闘を賞されている（『美作国諸家感状記』）。三村家親が美作国に出勢、「浦上宗景家老」の守る三星城に対して向城を構えた際には、宇喜多直家は加番として馬場二郎四郎を籠め、永禄六年（一五六三）五月二四日の山下での合戦で馬場二郎四郎は敵勢を附城へ逐い、また奥田与六は入田表での合戦での働きによりそれぞれ宗景から感状を与えられている（『馬場家奉公書』、『黄薇古簡集』、『美作国諸家感状記』など）。同八年一月二七日に「三星表」へと出勢した敵に対し、「妙見口」で太刀打した難波長三郎は、江見久盛から感状を与えられている（『美作国諸家感状記』）。同九年正月一日に斎藤親実は「三星表」で初陣した太田新九郎に所得を与え（『美作国諸家感状記』）、対して江見久盛は同年正月一四日の妙見表での合戦で太刀打した難波長三郎を賞し、またこの年か三月五日に、江見久盛も「三星山下」での合戦での一番鎧により江見源次郎に感状を与えている（『美作

文献

国諸家感状記」、「東作誌」。

その後、元龜二年（一五七一）秋頃から浦上宗景と対立していた後藤勝基は翌三年に毛利氏へ属したため、宗景は三星城を攻囲、三星城は三月に敵の攻撃を退け勝利したが、その後浦上勢の「武略」により三丸を奪われたため、毛利輝元は足立十郎衛門尉らを籠め、さらに救援の派兵を報じている（山田家古文書）。まもなく将軍足利義昭の仲裁で和睦に向かうが、一〇月の時点で未だ三星城には浦上・宇喜多氏によって陣を構えられたままであった（『閩閩録』）。

天正五年一〇月、江見九郎次郎は山中幸盛を通じ、織田信長に「三星出頭事」を段取りすると申し出て本領安堵や恩賞地の約束を受けている（江見文書）。同六年正月には吉川元春が「三星之儀堅固」との報に接しているが、同年の上月合戦に出陣した「作州三星ノ城主、直家ニむこの後藤」は戦後、宇喜多直家の在陣する八幡山城（兵庫県上郡町）に呼び入れられ討たれたといい、三星城も翌七年二月からの宇喜多氏の攻撃により五月に落去、後藤勝基は長内（美作市長内）に逃れたものの自刃したとされる（『吉川家中并寺社文書』、『佐々部一斎留書』、『東作誌』など）。その後の当城の消息は不明となるが、慶長三年（一五九八）に明石掃部頭は宇喜多秀家から「山之内」九六一〇石を預け置かれ、掃部頭組の明石四郎兵衛尉も同年に「三星城領」として一〇〇〇石を増加されている（『宇喜多秀家士帳』）。『太平記』、『応仁別記』、『武家聞伝記』、『美作鬘鏡』、『備前軍記』、『東作誌』、『美作鏡』、『美作古城記』、『美作略史』、『岡山県勝田郡志』、『岡山県通史』勝田26、『美作古城史』、『三星城の合戦』、『岡山の城と城址』、『新訳三星軍伝記』、『日本城郭大系』637、田口一九八七、『歴史散歩岡山の城』、『改訂岡山県遺跡地図』美作206、『岡山の山城を歩く』93、『美作町史』地区誌編・通史編、田口二〇〇三

73

入田城にめう た

所在地 美作市入田

立地
縄張

未詳。

城史

正保書上五四城の一で、勝田南郡入田村の「入田之（城）」として城主を「五島勝元」とし、三星城、明見城のことと記す。「東作誌」も勝南郡入田村の古城跡として、三星山であり前山は明見村に、後山は入田村にかり当村の城山と称すと記す。ただし『岡山県勝田郡誌』は、三星城とは別に「入田城」として後藤氏の一族が拠るとし、また『日本城郭全集』も「入田城」として、三星山と峰続きの入田山に築いた出城とする。

備考

実際には三星城と同一の城郭か。

文献

「武家聞伝記」、「美作鬢鏡」、「東作誌」、「美作鏡」、郭全集』英田郡11、『日本城郭大系』623

74

花房屋敷はなぶさ

所在地 美作市入田

立地
縄張

未詳。

城史

『日本城郭全集』は「花房屋敷」として、入田城主の常の居館で現在は畑となっている、宇喜多家滅亡後、花房氏がこの地に帰農して館に住んだことから名付けられたかとする。

文献

『日本城郭全集』補遺

75

龍王山城りゅうおう

所在地 美作市入田

立地
縄張

未詳。

城史

『日本城郭全集』は「龍王山城」として、入田城（美作市入田）より西に約七〇〇m、吉井川に望んだ急な山の山頂にあり、八頭竜王宮の岸壁上に本丸、北へ一〇m下がって二の丸、三の丸がある、天文（一五三二〜五五）の初め、山名相模守氏重の二男岸備前守氏秀が築城し居城としたが、永禄元年（一五五八）一〇月、備前国の浦上宗景の攻撃で落城、氏秀は自刃した、現在城跡には遺構はないとする。

備考

城主名などから、龍王山城（久米南町下柵）の誤りか。

文献

『日本城郭全集』英田郡14、『日本城郭大系』647

76

刑部屋敷ぎょうぶ

所在地 美作市田殿

立地
縄張

未詳。

城史

『英田郡史考』は「刑部屋敷」として、広井郷司の屋敷跡とする。

文献

『日本城郭全集』補遺

77

鞍懸城・倉掛城・鞍掛城・榎原城

所在地 美作市田殿・榎原中

立地

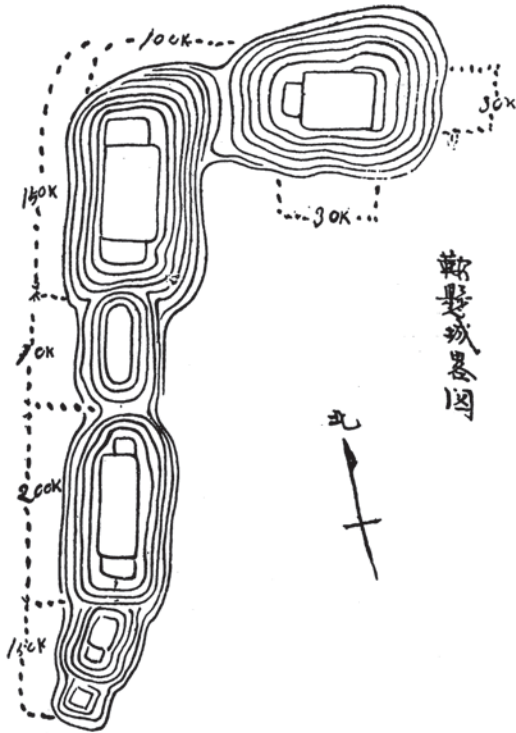
榎原中地区の梶並川左岸にある、標高約二三〇mの急峻な独立峰・鞍懸山頂上付近に所在する。北側を県道三八八号線が通る。

縄張

『日本城郭大系』は本丸・二の丸・東の丸・堀切の存在を記し、『改訂岡山県遺跡地図』は曲輪・堀切・堅堀が遺存とする。

城史

正保書上五四城の一で、「古城之覚」は吉野郡田殿村で英田堺の「鞍懸之城」として、城の高さ二町七、八反、西は大河、東南は谷が



鞍懸城略図（『英田郡史考』より）



鞍懸城・倉掛城・鞍掛城・榎原城

文献

深い、険阻で東北に嶺が続き、北に出丸あり、本丸・二ノ丸は南北約一〇〇間、東北に八町隔てた上に「伊豆か陣」があり、これと出城のほかに寄城が二八ヶ所ある、また弘治年間（一五五五〜八）頃に五島基政が丹波国から入部、鞍懸城を見立てて住んだとする。元禄一〇年（一六九七）とされる村々書上（『粟広村史』所収）には、村の南境に「鞍懸ヶ城」がありとする。「美作鬘鏡」も「鞍掛城」と「榎原ノ城」、「美作鏡」も「鞍懸城」と「榎原城」をともに掲げる。「東作誌」は榎村中村の「鞍掛城」として、榎原上村より一二町、榎原城ともいう、登道は約三町余り、本丸（一町四方）、東丸（五〇間四方）、二丸（一町四方）、堀切（幅三〇間）、西は林山、東は野山、北は吉野郡田殿村に連なり南は榎原中村、山中に斥候ヶ嶽という山があり、山の坤の尾には一間四方の岩ありと記す。天保国絵図に「鞍懸城古城跡」とある。

文和四年（一三五五）正月一七日、足利尊氏は上月左近將監に「美作国鞍懸城」の警固を命じている（上月文書）。康安元年（一三六一）七月、山名時氏による美作国侵攻の結果、「倉懸ノ城」一城となり、赤松方の佐用美濃守貞久と有元和泉守佐久が三〇〇余騎で籠城したが、時氏らは四方の山々峰々に二三箇の陣を構え攻め寄せた。城側は兵糧も少なくなり後詰も得られず、同年十一月四日に落城したとある（『太平記』）。『日本城郭大系』は、鞍掛城が美作町田殿にあり、またの名を倉掛山城とし、別に榎原城が同町榎原上にあり、山名忠重が居城、のち矢櫃城に移ると記す。

「太平記」、「武家聞伝記」、「美作鬘鏡」、「美作鏡」、「美作古城記」、「美作略史」、「英田郡誌」、「英田郡史考」、「岡山県通史」英田5、「美作古城史」、「日本城郭大系」592・622、「改訂岡山県遺跡地図」美作29、「美作町史」地区誌編・通史編、「戦国山城を攻略する」

78 大将ヶ陣たいしょう

所在地 美作市田殿

立地

田殿地区の南、標高約三三二mの独立峰・大将ヶ陣山山頂付近に所在する。梶並川左岸にあり、梶並川流域を広く眺望する。

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、曲輪六つの連郭式山城、山頂に墓石二基ありとする。

城史

元禄一〇年（一六九七）とされる村々書上（『粟広村史』所収）には、田殿村の「大将ヶ陣」として、鞍



大将ヶ陣

文献

懸城の東北にあり、高山で麓から七八町上に陣取の跡があるとする。『英田郡史考』も田殿の「大将ヶ陣」として、鞍掛山城を攻撃の時、山名氏の主将が陣を敷き持久戦に備えたとする。「古城之覚」が記す「伊豆か陣」にあたるか。『太平記』、「武家聞伝記」、「美作略史」、「英田郡誌」、「英田郡史考」、「美作古城史」、「改訂岡山県遺跡地図」美作26、「美作町史」地区誌編・通史編

79 尼ヶ城あま

所在地 美作市北山

立地

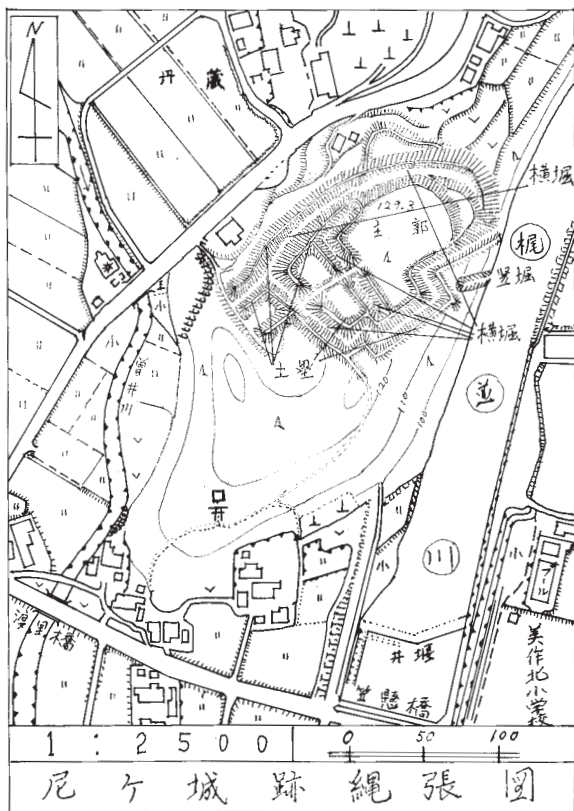
梶並川右岸にあり、美作北小学校の北西約二〇〇mの位置に該当する。標高約一九〇mの小丘陵上に所在する。県道五一号「美作・奈義」線の豊国地区の交差点を右折、

縄張

梶並川に架かる新笠縣橋手前の土手から左手の小山を目指す。縄張りをみると、周囲を横堀で仕切るなど周辺の城郭にはみられない突出した用法が確認される。そ



尼ヶ城



城史

の上、梶並川に面して横矢掛りのような折れを持つ等、在地系縄張り技術にはみられない技巧的な縄張りが駆使されている。今後の精査が必要であるが、宇喜多勢など織豊系勢力による陣城の可能性が考えられる。

「古城之覚」は英田郡北山村の「尼ヶ城」として、城主不詳とする。「東作誌」は勝南郡北山村東分の「尼城」として、低い岡山で、あるいは尼子の城という、狐山で今に空堀り跡あり、東は川の上を覆い、今は百姓持の林となると記す。

文献

「武家聞伝記」、「美作鬢鏡」、「東作誌」、「美作鏡」、「改訂岡山県遺跡地図」美作127、「美作町史」地区誌編・通史編、山形二〇〇七、「戦国山城を攻略する』

80 龍王山城

所在地 美作市北山

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は勝南郡北山村西分の「古城跡」として、龍王山というと記す。

文献

「東作誌」

81 屋敷

所在地 美作市豊原

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は昔大身の人が住んだ跡ありとして、村に東門・西門、土塁の跡があり、北には堀切、南は埋めると記す。

文献

「東作誌」

82 大塚屋敷（仮称）

所在地 美作市榎原中

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は「古屋敷」として、矢田原高下にあり、森家第一の国老大塚氏がここに住むとし、今も稀に小柄鬢搔などが出土し、村の老人が黄金が埋めてあるという大石があると記す。「英田郡史考」は大塚氏の在住は各説あつて定かでない、一考を要すとす。

文献

「東作誌」、「英田郡史考」、「美作古城史」、「日本城郭大系」584

83 比丘尼城

所在地 美作市榎原中

立地

榎原中地区の集落の北側にある、標高約一六〇mの小さなピーク上に所在する。鞍懸城の南に該当し、梶並川末流域を広く眺望する。「改訂岡山県遺跡地図」は金焼山一号墳に改変を加える、山腹から帯曲輪を造作、山頂北に曲輪が認められるとする。

縄張

城史

「東作誌」は「金焼山」として、高さ一町半、比丘尼城ともいい、鞍掛山の南西で差し向かっている、谷に水が流れるのみで、倉敷から攻めようとするのと先だって城主が切腹したため攻撃に及ばなかったと記す。

「東作誌」、『改訂岡山県遺跡地図』美作131『美作町史』地区誌編・通史編



比丘尼城

文献

84

妙見山城

所在地 美作市平福

立地

平福地区の集落北側に位置する。吉野川右岸の標高約二二〇mの独立峰上にあり、膝下を国道一七九号線が通る。

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、曲輪、井戸などが遺存とする。

城史

「東作誌」は平福村から分村した下福原村の条に妙見山を載せ、難波氏系譜を引いて難波氏が「緑青山・妙見山両城主」であったと記す。ちなみに『日本城郭大系』が当地の比丘尼城（天王山城）とする城は、別の城である比丘ヶ城（美作市上福原）に相当する。



妙見山城

文献

康安元年（一二三六）七月、山名時氏の美作国侵攻にあたり二〇日余りの抵抗のち山名方となった「妙見」の城がみえる（『太平記』）。応仁元年（一四六七）一〇月、赤松氏の家臣中村五郎左衛門尉が美作国回復を目指して同国院庄（津山市院庄）に入った際、山名勢は東郡の「妙見ノ城」などに籠り抵抗したとある（『応仁別記』）。あるいはこの城にあたるか。

「太平記」、『応仁別記』、「東作誌」、『美作古城史』、『改訂岡山県遺跡地図』美作163、『美作町史』地区誌編・通史編

85

難波屋敷

所在地 美作市平福

立地

吉野川の左岸、平福地区の集落付近に位置する。未詳。

縄張

城史

「東作誌」は「旧屋敷」として、難波屋敷といい、山口村と友野村の間の川向いにあり、森忠政から拝領し難波利介以来数代居住と記す。『英田郡史考』は「旧屋敷」として平福畑一三九三番地にあり、古井戸と土塁ありとする。なお『日本城郭大系』は「平福城」、別に平野城とし、難波氏一族の居館かとする。

文献

「東作誌」、『英田郡史考』、『美作古城史』、『日本城郭大系』 627

86 平野城（緑青遺跡）

所在地 美作市平福

立地

集落北西にある緑青山城西麓の丘陵上に位置し、南を姫新線と国道一七九号線が通り、吉野川が流れる。

縄張

未詳。

城史

『英田郡史考』は「平野城」として、美作町平福三四七番地にあるとする。なお『日本城郭大系』は「平福城」、別に平野城とし、難波氏一族の居館かとする。

遺物

須恵器・勝間田焼。

備考

『改訂岡山県遺跡地図』は「緑青遺跡」として、鍛冶屋敷と呼ばれる地に古墳・室町時代の遺物が散布とする。

文献

『英田郡史考』、『美作古城史』、『日本城郭大系』627、『改訂岡山県遺跡地図』美作161

87 緑青山城

所在地 美作市平福

立地

平福地区の集落北西の標高約二四〇mの山上に位置し、南を姫新線と国道一七九号線が通る。平福地区や江見地区など、吉野川流域を一望する。

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、曲輪・堀切・堅堀・土塁が遺存とする。



緑青山城

城史

『東作誌』は「緑青山」の古城として、西向きで門・土塁跡あり、ほかに砦山があり登りは約八町、城主は難波備前守恒宗以来居住と記す。

文献

『東作誌』、『美作古城記』、『英田郡史考』、『美作古城史』、『日本城郭大系』648、『改訂岡山県遺跡地図』美作158

88 塩垢離山城（仮称）

所在地 美作市檜原下

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

『東作誌』は「塩垢離山」として、山の高さ約一〇町、砦の跡といい、西谷の岩に大砲の銃痕あり、柿ノ木峪というところ。

文献

『東作誌』、『美作町史』通史編

89 天狗松山城（仮称）

所在地 美作市檜原下

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

『東作誌』は「天狗松山」として、巨松があり、松の東は「コヘノ段」といい段が多い、「塩カキ山」の砦を攻めた際の寄手の陣所というところ。

文献

『東作誌』、『美作町史』通史編

90 檜原城ならばら

所在地 美作市檜原下

立地
縄張

未詳。

城史

正保書上五四城の一で、英田郡檜原中村の「檜原之(城)」として城主を山名藏人とする。「東作誌」は鞍懸城(美作市田殿)の別名とする。「英田郡史考」は「檜原城」として、(檜原)上一六三番地にあり、竜王山山頂の長方形の平地(東西四〇間、南北三〇間余り)で、堀切が囲み、足利時代に山名藏人の居城というとする。

文献

『英田郡史考』、『岡山県通史』英田17、『美作町史』通史編

91 鬢櫛山城びんぐしやま

所在地 美作市檜原下

立地

梶並川左岸、下土居集落の南、槇沢神社西の丘陵上に位置する。標高は約一八〇mである。

縄張

独立した山の上に主郭を構え周囲に曲輪を配する。集落に近いため周囲の削平地については精査が必要であるが、村落に拠った有力土豪の持城と考えられる。



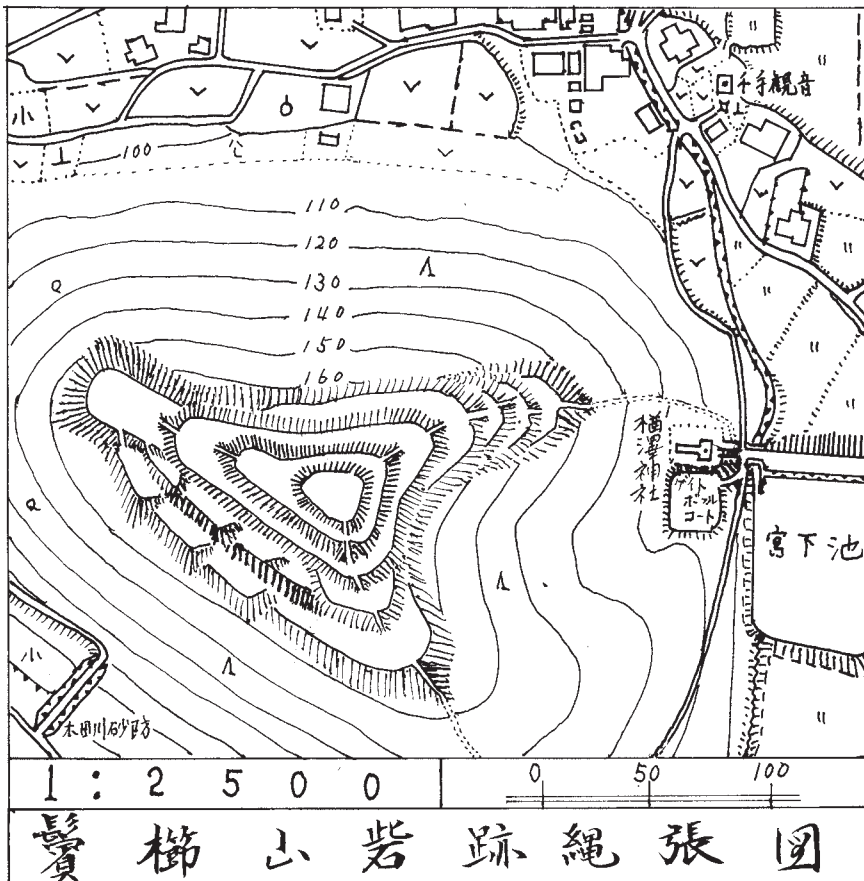
鬢櫛山城

城史

『英田郡史考』は「ピン櫛山城」として安東甚左衛門・小林平内を城主とし、付近に馬場尻、殿様井戸などの名称があるとする。

文献

『英田郡史考』、『美作古城史』、『美作町史』通史編



92 小坂田屋敷（仮称）

所在地 美作市栄町

立地
縄張

未詳。

城史

『英田郡史考』は「小坂田又四郎宅址」として三海田一〇三番地の田がそれで、三星城の城主後藤勝基の老臣小坂田備前守の子孫がここに住み、近世に絶家したというと記す。

文献

『英田郡史考』

93 屋敷（仮称）

所在地 美作市栄町

立地
縄張

未詳。

城史

『英田郡史考』に、三海田一二四番地は天正（一五七三〜九二）以前からの屋敷地で、付近一帯に古瓦の破片、器具などの発掘されることありとする。

文献

『英田郡史考』

94 安東相馬屋敷

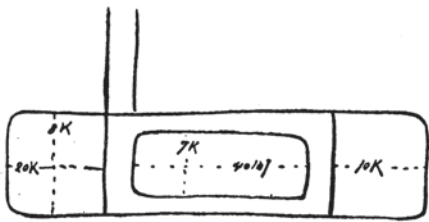
所在地 美作市山口

立地

未詳。



比丘ヶ城



比丘ヶ城略図（『英田郡史考』より）

安東相馬之標城跡
平面畧図

縄張

未詳。

城史

『英田郡史考』は「安東相馬の屋敷」として、二七二番地にあり、泉水の一部が残るとする。

文献

『英田郡史考』

95 比丘ヶ城

所在地 美作市山口

立地

吉野川左岸、西側に迫り出した尾根が山口地区集落と接する部分に所在する。比丘ヶ山の標高は約一三〇m。

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、曲輪・堀切・堅堀が遺存、連郭式山城とする。

城史

「東作誌」は「比丘ヶ城」として、安東千代一丸が住む、山の高さ直立で約二〇間、城跡は山の畝で平坦、松林あり、千代一丸は康永（一三四二〜五）頃の人、三の丸に安東屋敷があり、今に子孫の安東甚左衛門が住むと記す。『美作古城史』は「比丘尼城」とし、安東左右馬助の居城とする。

「東作誌」、「美作古城記」、「英田郡誌」、「英田郡史考」、「美作古城史」、「日本城郭大系」626、『改訂岡山県遺跡地図』美作245、『美作町史』地区誌編・通史編

文献

96 大畠城

所在地 美作市山外野・山口

山口地区から山外野地区に至る道路の中間地点、その東側の独立峰上に所在する。標高は約二二三五mである。

立地

『改訂岡山県遺跡地図』は、曲輪・堅堀のみ遺存とする。

縄張

「古城之覚」は英田郡山外野村の「大畠之（城）」として、城主を角南法印とする。「美作鏡」は城主を「角南如慶」とする。「東作誌」

は時代不詳として、村の西北西にある山で坂路約五町、東と北は繁茂し西と南は柴山、山上は南北約二町、東西約三〇間、山はなかば山口村にかかり、郭数や堀跡などは不明と記す。『英田郡史考』は城主を角南如慶入道及び角南覚左衛門とする。

「東作誌」、「美作古城記」、「英田郡誌」、「英田郡史考」、「美作古城史」、「日本城郭大系」626、『改訂岡山県遺跡地図』美作245、『美作町史』地区誌編・通史編



大畠城

文献

「武家聞伝記」、「美作鬘鏡」、「東作誌」、「美作鏡」、「美作古城記」、「英田郡誌」、「英田郡史考」、「岡山県通史」英田14、『美作古城史』、『日本城郭大系』585、『改訂岡山県遺跡地図』美作298、『美作町史』地区誌編・通史編

97 大岨城（仮称）

所在地 美作市大原

大原地区の北側、標高約三一九mの稗田山の山頂付近に所在する。西側を県道三六〇号線が通る。

立地

『改訂岡山県遺跡地図』は、帯曲輪・曲輪・堅堀などが遺存とする。「東作誌」は大原村の「古城」として、城主不詳、城の段は上の段（二五間、一五間）、西の段（一〇間四方）、二の段（一〇間四方）、東の段（縦二五間、横一一間）、大手口は南、南に帯郭（幅二間、長さ三〇間）と記す。

縄張

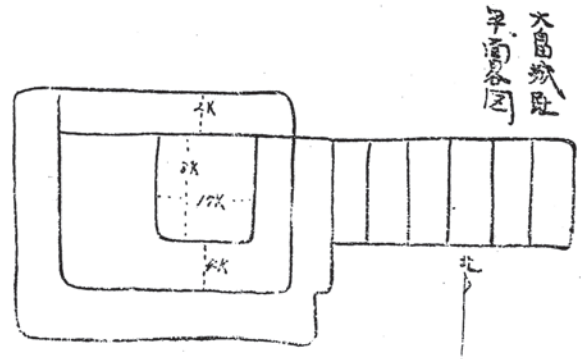
「東作誌」、「改訂岡山県遺跡地図」美作297、『美作町史』地区誌編・通史編

文献

「東作誌」、「改訂岡山県遺跡地図」美作297、『美作町史』地区誌編・通史編



大岨城（仮称）



大畠城略図（『英田郡史考』より）

98 北原城・矢櫃山城

きたはら やびつやま

所在地 美作市猪臥・北原

立地

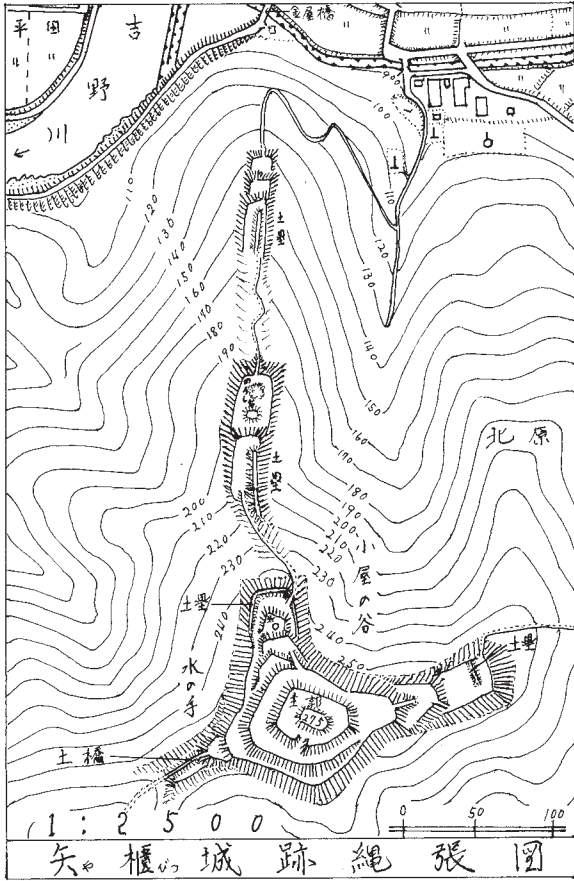
猪臥川右岸、吉野川左岸にあり、猪臥地区の北側にある独立峰。標高約二八一mの山頂付近に所在する。

縄張

縄張りをみると、山頂部に主郭を構え、その周囲に帯状に曲輪を配置する構造となっている。北側曲輪の先端には尾根筋を登ってくる攻め手を遮断するように土塁が配された。現在は登山道が土塁を一



北原城・矢櫃山城



城史

部破壊するものの堡塁の役割を果たしたと考えられる。東側の曲輪には土塁による仕切りがみられる。土塁などをを用いるものの虎口プランは発達していないことから、在地系縄張り技術の城郭と考えられる。

「古城之覚」は英田郡猪臥村の「北原之(城)」として、城主を「山名」とする。「美作鬘鏡」は城主を「同人(山名藏人)」、「美作鏡」は城主を「山名猪臥入道」とする。「東作誌」は北原村の「矢櫃山」として、金屋にあり、天正年中後藤左馬介在城とし、また猪臥村の「矢櫃山」として、本丸(三〇間四方)、腰郭(二〇間四方)、東に二丸(三〇間四方)、大手は南で坂路は約七町三〇間、城主は猪臥入道、地元民の伝承に、山名入道が開城してその跡へ江見次郎が入れ替わり、塚もあるが焼け落ちたというと記す。『英田郡史考』は「矢櫃城址」とする。

文献

「武家聞伝記」、「美作鬘鏡」、「東作誌」、「美作鏡」、「美作古城記」、「英田郡誌」、「英田郡史考」、「岡山県通史」英田18、『美作古城史』、『日本城郭大系』586・641、『改訂岡山県遺跡地図』美作296、『美作町史』地区誌編・通史編

99 友野城

所在地 美作市友野

立地

吉野川が北原地区で大きく湾曲する部分、国道一七九号線の天神橋南西にある小丘陵・天神山上に所在する。標高は約一一〇m。

『日本城郭大系』は丘城、郭・堀切・屋敷跡・土塁・五輪塔群がありとし、『改訂岡山県遺跡地図』は堀切・土塁・堅堀・曲輪が遺存とする。

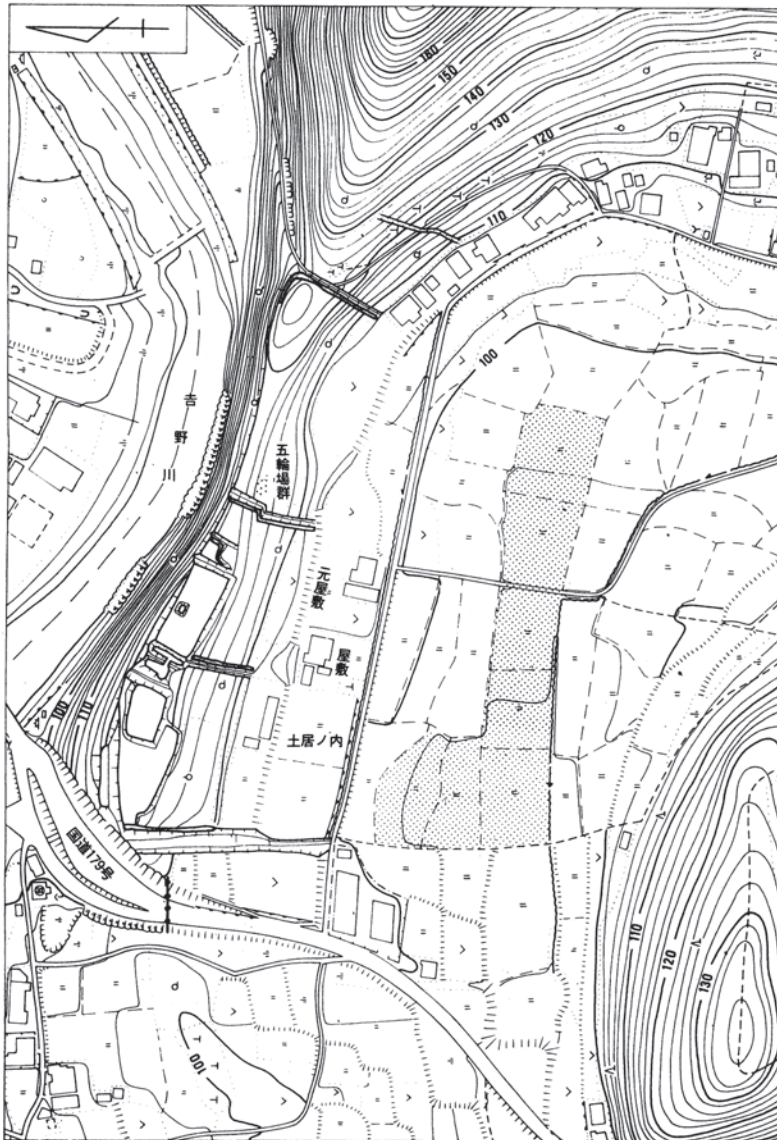
縄張

城史

慶長九年（一六〇四）の「^友供野村慶長検地帳」（『美作町史資料編』）には「供野ほり」といった地名がみえる。「江見家記」は「城福寺天神山ノ城」として江見久盛の弟久次（左馬介）を城主とし、「東作誌」は「天神山」あるいは「浄福寺」ともいうとして、上段（竪一五間、横二四間）、下段（長さ三二間、横五間）、東西に堀切あり、北は巖壁で吉野川の上を覆い、南を大手口とするも城主は江見左馬助久次、あるいは江見四郎元盛と記す。また同書で、三海田村に住む小坂田の系譜によれば、その祖但馬守・河内守は「友野城主」であったという。『英田郡史考』は「常福寺城址（天神山城）」とする。

友野城には城主の「さるはみ河内」と江見牛之助を両大将として在城していたが、浦上宗景の差し向けた大軍により落城、牛之助は小坂与三郎に討ち取られ、宗景は小三郎に感状を与えたという（小坂氏書上）。南麓には「土居ノ内」の地名や、当城関連の居住跡と推測されている友野遺跡がある。

「小坂氏書上」、「江見家記」、「東作誌」、「英田郡史考」、「美作古城史」、「日本城郭大系」605・619、「岡山県埋蔵文化財調査報告書」73、「改訂岡山県遺跡地図」美作235、「岡山の山城を歩く」92、「美作町史」地区誌編・通史編。



友野城調査図（『岡山県埋蔵文化財調査報告書』73より）



友野城

文献

文献

100 林野城・倉敷城

所在地 美作市林野

美作市指定史跡

立地

梶並川左岸の標高約二四九mの城山にある。梶並川と吉野川の合流点にも近く、林野・湯郷方面を一望する。約七〇〇m北西に三星城が所在する。

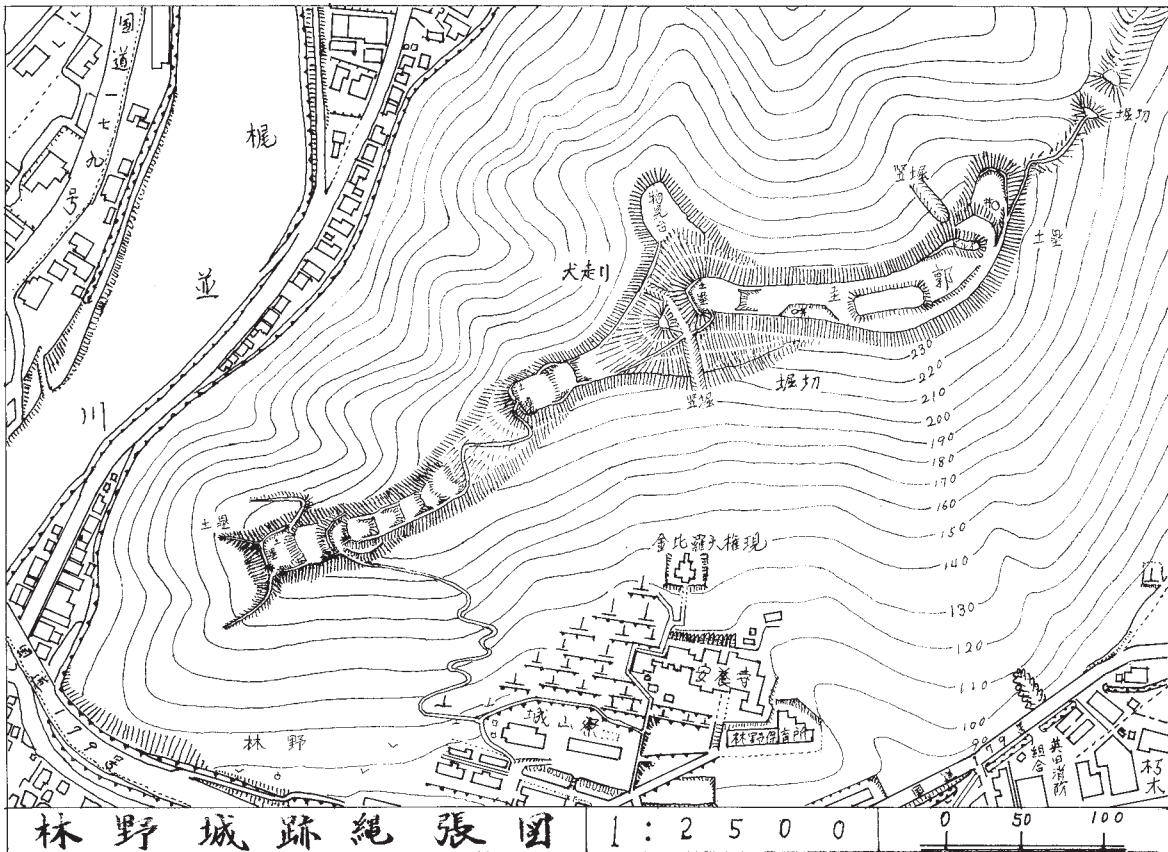
縄張

倉敷城は東西に長く伸びる山上に曲輪を連ねて築かれた山城である。山頂の主郭部は、中央に櫓台状の基壇を持つ主郭を配して、東西に曲輪が並ぶ配置となっている。東側には石塁が構えられ右端に虎口を設ける。しかしながら、虎口は単純な平入りであり、それに続く城道が下位曲輪を囲む土塁の上を通るなど、在地系縄張り技術の範囲に留まる。一方、西側にも土塁が構えられるが、明確な虎口がなく地形に沿って出入り口を設定したと考えられる。小早川氏・森氏段階まで使用された城郭ながら織豊系縄張り技術の特徴がほとんどみられない。主郭の北側や西側の尾根筋にも曲輪群が続くが、土塁などはみられるものの織豊系縄張り技術の特徴はほとんど確認することができない。

倉敷城は豊臣期宇喜多氏・小早川氏段階まで使用されたとされる。このことを裏付けるように、山頂ではコビキB類の瓦が表採される。反面、縄張りに関しては織豊系縄張り技術の特徴はほとんど確認できず戦国期の様相を色濃く残す。このような築城技術が抑制された様相からは、山城を構えるという軍事性の追求と同時に、本城に対



林野城・倉敷城



してむやみに突出した支城ができることを抑制したいとする、当主側の矛盾した要求を読み取ることができる。

「古城之覚」は英田郡倉敷村の「倉敷山」として、建武（一二三四～六）の頃山名伊豆守時氏譜代の侍が五六代も抱えていたとし、また天正（一五七三～九二）の初めの城主江見伊豆守久資は、毛利氏の攻撃に先立ち城を落ち、まもなく討ち果たされたとある。「美作鏡」は「倉敷山城」とし、城主を川副美作守・江見伊豆守とする。「東作誌」は「林野山古城」あるいは「鞍掛山」というとして、建武の頃山名伊豆守が持ち、のち川副美作守久盛が在城し、天正年中江見伊豆守久資が住む、今は林山となると記す。『英田郡誌』は鎌倉時代に後藤良兼が居城したとする。『日本城郭全集』は「倉敷山城」とし、頂上の最上段本丸で、西側に二の丸、東側に三の丸、山の三方は絶壁、東は深い堀切は隔てて峰続きとなり、本丸と二の丸跡には井戸があり、瓦が散乱とする。

康安元年（一二六一）七月、山名時氏の美作国侵攻にあたり二〇日余りの抵抗ののち山名方となった「林野」の城がみえる（「太平記」）。

出雲国の尼子氏は、備前国周匝（赤磐市周匝）の城山を攻撃したのち「英田郡倉敷村ノ三星ノ城」を一日で、さらに「栗井村ノ赤松之城」を攻め落として出雲国に引き取ったと言い伝えるとする（「備前記」）。しかし三星城（美作市明見・入田）の城主後藤勝基はまもなく尼子氏から離反、永禄三年（一五六〇）とみられる五月朔日には倉敷城主の江見久盛と三星山下の入田で合戦している（美作江見文書、「美作国諸家感状記」、「東作誌」）。

その後、経緯は不明だが永禄八年（一五六五）には倉敷城が落城、一〇月一八日に江見久盛は落城時の働きを賞し、小坂田勘兵衛に感状を与えている（「美作国諸家感状記」）。同一年三月二四日、江見久資は江見与助が「寄城」に戻った事を賞し、所得を与えている（「感状記」）。永禄十一年（一五六八）三月には、江見久資が「当城」

を取り戻したことを忠節として江見与助に所得を与えている（「美作国諸家感状記」）。同年二月九日、足利義昭側近の上野信恵から宇都宮相模守に、義昭は江見九郎次郎が「草三左」（草刈景継カ）に協力しているとの上申に感じ入られたとし、九郎次郎に帰城の実現するようにと伝えるべしと記している（草刈家証文）。

しかし元龜二年（一五七二）一二月、後藤勝元は「江見殿家跡」が中絶しているとし、江見氏の息女を引き立てるので出仕するようにと、小坂田氏ら倉敷江見氏の旧臣を誘い、そして同三年三月、小早川隆景が毛利方となっていた「倉敷城中」に宛て、三星城（美作市明見）の三丸の不慮に触れ、倉敷城之堅固を賞し、救援の派兵を報じている。また後藤勝基は江見右衛門太夫に、倉敷城での在番を慰勞し、所職等を与えられている（「美作国諸家感状記」）。これ以降、倉敷城の名は長く見られなくなる。

その後の倉敷城については、宇喜多氏から戸川肥後守秀安や岡市丞などに数輩を籠め置いた、あるいは御代官の岡市之丞・中島空之助が在城したとされる（「武家聞伝記」、「江見家記」）。岡市之丞と中島空助は共に戸川秀安の子達安の組頭である（「宇喜多秀家士帳」）。そして慶長五年（一六〇〇）八月、関ヶ原合戦に先立ち、宇喜多秀家は領国内の城の在番に対し人質の差出を求めており、その内に「倉敷四郎兵衛」として、明石四郎兵衛がみえる（新出沼元家文書）。宇喜多氏の没落後、慶長五年一二月からは小早川秀秋の家臣木下勝助・荻原龍浦らが城に置かれたとも、秀秋の年寄稲葉内匠頭通政が代官となったともされる（「武家聞伝記」、「江見家記」）。同八年から一三年の間は細野佐兵衛に預けられ、慶長中期より森対馬守可政・同采女可春・同宗兵衛三信の三代が城を抱えたという（「武家聞伝記」）。

遺物

瓦。

備考

『英田郡史考』は、森氏の館は今の安養寺、陣屋は小学校校庭として、倉敷城の中腹に館があったとする。

文献

『太平記』、「武家聞伝記」、「備前軍記」、「東作誌」、「美作鏡」、「美作古城記」、「美作略史」、「英田郡誌」、「英田郡史考」、「岡山県通史」英田15、「美作古城史」、「日本城郭全集」英田郡6、「日本城郭大系」624・640、「歴史散歩岡山の城」、「改訂岡山県遺跡地図」美作208、「岡山の山城を歩く」67、「美作町史」地区誌編・通史編、乗岡二〇〇九

101 鷹たか之の巢城す

所在地 美作市海田

立地

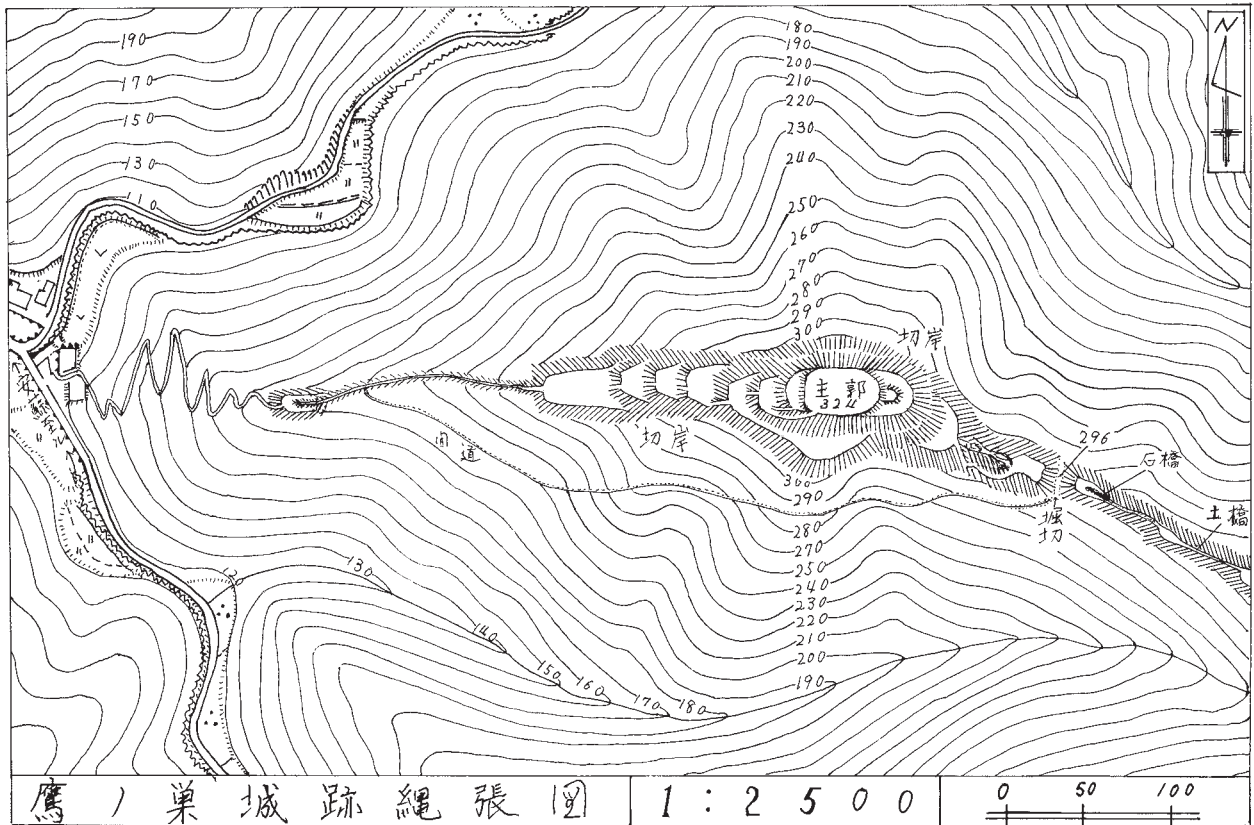
赤松山から北西に延伸する尾根上の標高三二七mのピーク上に所在する。海田川支流の舍利谷川の最上流である。国道三七四号線、樫村地区の信号を左折、榎地区の三叉路から市道「舍利谷」線を進む。左山裾に民家が点在しているが、その民家が途切れるあたりの前方の山裾に墓地がある。その脇道が登り口。



鷹之巢城

縄張

縄張りをみると、山頂に主郭を構えて地形に沿って周囲に曲輪を配する。東側の尾根筋には堀切がみられる。この地域に割拠した有力国衆の持城と考えられる。



城史

「古城之覚」は英田郡海田村の「鷹之巢」として、城主を江見次郎（後号越中）とする。「美作鬘鏡」と「美作鏡」は「鷹巢城」とする。「東作誌」は古城の「鷹巢山」とし、本丸（二〇間四方）、城主は江見次郎、後越中守、異本には江見四郎元盛とあるというと記す。『英田郡史考』は「鷹巢城」として、大字海田赤松二七三八番国有林、二七三九番公有林境界分水嶺にありとする。

永禄一一年（一五六八）のことか、花房職秀は一九歳で「作州たかのすと申す山城」の城主「多ミの次郎」といま一人を討ったという（「花房家記事」、「寛永諸家系図伝」）。

「武家聞伝記」、「美作鬘鏡」、「備前軍記」、「東作誌」、「美作鏡」、「美作古城記」、「美作略史」、「英田郡誌」、「英田郡史考」、「岡山県通史」英田22、「美作古城史」、「日本城郭大系」608、「改訂岡山県遺跡地図」美作31、「美作町史」地区誌編・通史編

文献

102 駿河館するが

所在地 美作市巨勢

立地

縄張

城史

下倉敷バス停の傍、民家の裏の小丘。未詳。

『日本城郭全集』に「駿河館」として、建久二年（一一九二）一月に駿河治部頼常が構えた館で、五代重経は三星城（美作市明見・入田）の城主後藤勝基に仕えたが、天正七年（一五七九）五月、後藤氏の滅亡により駿河右平治忠通は帰農したと記す。

文献

『日本城郭全集』英田郡8、「日本城郭大系」607

103 土居どい

所在地 美作市巨勢

立地

縄張

城史

未詳。

『英田郡史考』は「庁址」として、下倉敷神社との間約三町に「土居」という所あり、巨勢郷の郷司の政庁跡とする。

『英田郡史考』

104 長大寺ちやうだいじ

所在地 美作市三倉田

立地

縄張

城史

吉野川と梶並川の合流点の南西、標高一二五mの独立丘陵上に位置する。吉野川の対岸には倉敷城がある。山頂部は慰霊碑が築かれており大きく改変されている。

『英田郡史考』は「長大寺」として四八一番地にあり、元禄一三年（一七〇〇）の安養寺所蔵文書に老僧の墓のことを記し、地名に長大寺・山王・阿弥陀・荒神元などがあるとする。あるいは倉敷城攻撃の陣跡か。

文献

『英田郡史考』



長大寺

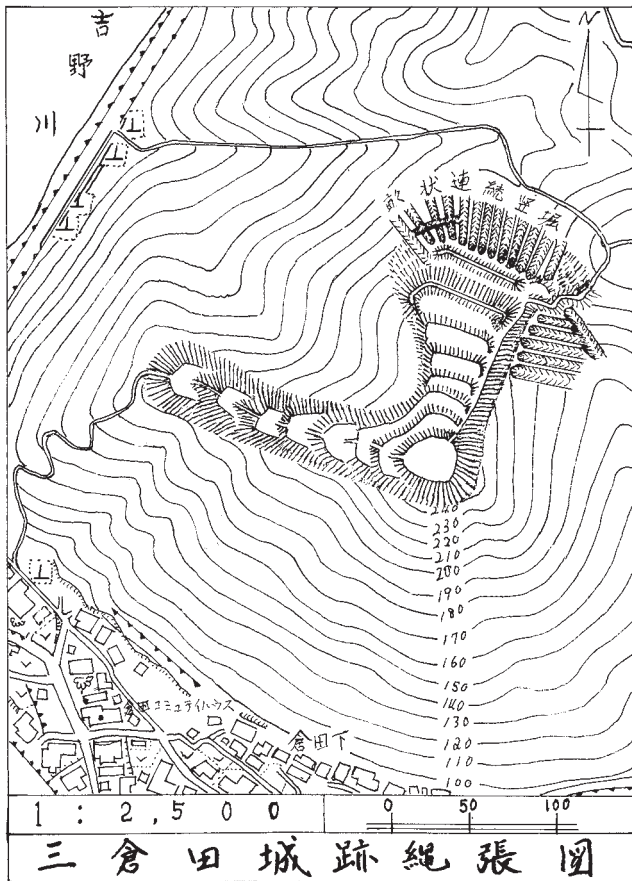
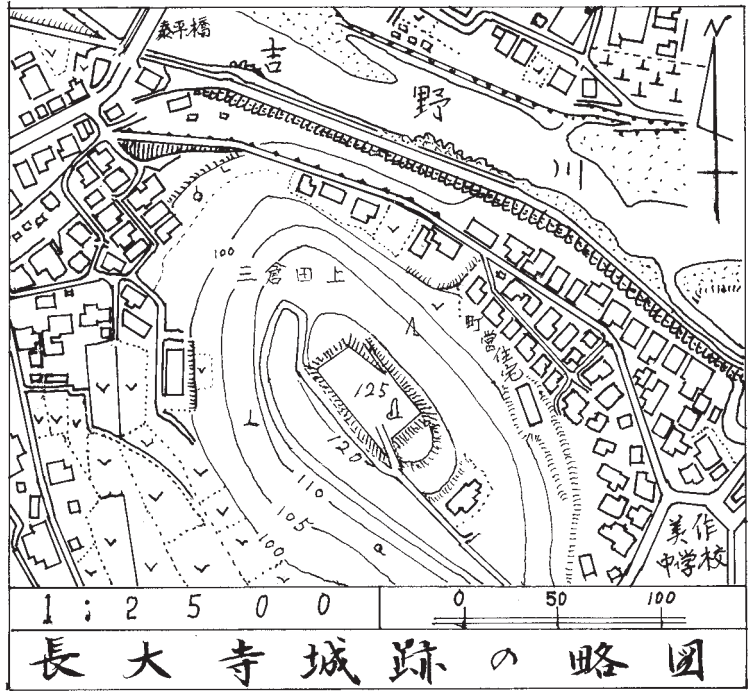
縄張

立地

105 三倉田城

所在地 美作市三倉田

三倉田地区を流れる吉野川左岸にあり、三倉田下集落の北側の山である。標高約二五〇mである。湯郷地区を一望できる。縄張りをみると、山頂に主郭を構え、北側の稜線を中心に曲輪を連ねたプランとなっている。北側には土塁と横堀・畝状空堀群を組み合わせた防禦ラインが築かれた。地形的に弱点となる北側に集約してこの方面からの侵入を遮断しようとする意図が感じられる。在地



文献

城史

『英田郡史考』、『美作古城史』、『日本城郭大系』636、『改訂岡山県遺跡地図』美作288、『美作町史』地区誌編・通史編

系縄張り技術としては技巧的な用法が確認されることから、築城主体はこの地域を支配した有力国衆と考えられる。対岸の湯郷温泉を掌握するために築かれたものとみられる。
『英田郡史考』は「三倉田城」として、広幡某が城主で康安(一二三六)の頃落城と記す。



三倉田城

106 勝間山城

所在地 美作市位田・岩見田

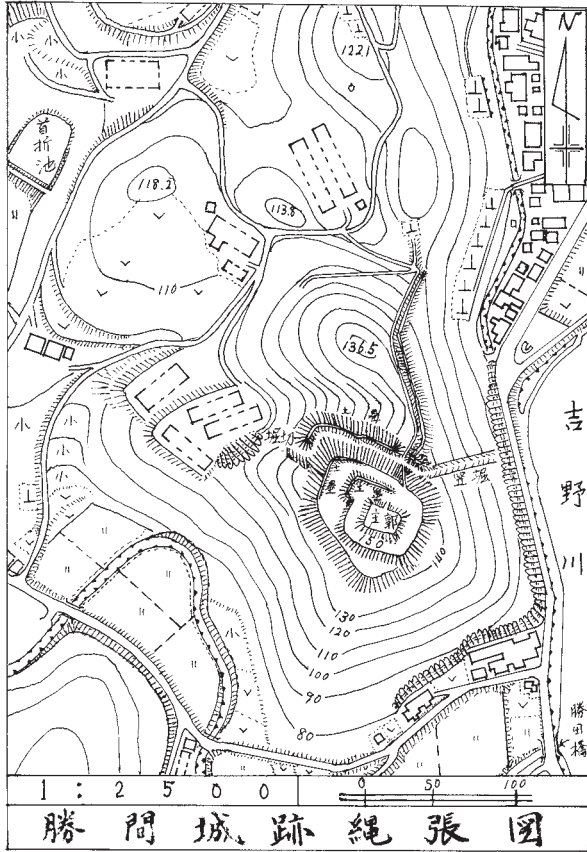
立地

県道三六二号線が位田地区から岩見田地区に至る際、最も吉野川に接する部分の西側の丘陵に該当する。標高は約一五〇m。国道三七四号線、巨勢地区から、位田大橋を渡り、鷲神社参道手前を左折。旧美作町堆肥センターから左手に進む。

縄張りをみると、山頂を削平し主郭と周りに曲輪を配したプラン



勝間山城



城史

である。曲輪の北西側には土塁が確認される。主郭には北側から回り込むように通路が設定され虎口を形成する。図をみた限りでは、この通路に向かって土塁が張り出しており横矢掛りを意識した可能性が考えられる。一方、北側からの侵入に対して強固な遮断線を築いた。コンパクトな主郭部に明確な虎口と横矢掛りが設定されている点を踏まえると、織豊系勢力による改修の可能性も考えられる。今後の精査により確認する必要がある。

「古城之覚」は英田郡位田村の「勝間山」として、城主不詳とする。位田村の助兵衛による書上（『美作古簡集註解』所収）には、伯父の和田甚助が後藤勝基・元政二代にわたり仕え、位田村など周辺地域を知行地として「勝間山と申端城」を預けられたと記す。「美作鏡」は城主を延原弾正とする。「東作誌」は勝南郡位田村の「勝間山」として、初め鳥貝山とされ、山の高さ三〇間、上の段（一〇間四方）、西が正面で坂道あり、後方には堀切あり、城主は延原弾少弼景光とする。天保国絵図に「勝間山古城跡」とある。『岡山県勝田郡志』、『日本城郭全集』は「勝間城」とする。

文献

「武家聞伝記」、「美作鬢鏡」、「備前軍記」、「東作誌」、「美作鏡」、「美作古城記」、「美作略史」、「岡山県勝田郡志」、「岡山県通史」勝田30、「日本城郭全集」補遺、「改訂岡山県遺跡地図」美作263、「美作町史」地区誌編・通史編、「戦国山城を攻略する」

107 山下屋敷

所在地 美作市長内

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は勝南郡長内村の「石橋」として、一の奥の石橋（長さ一間、幅四間）は、後藤勝元家臣の山下四郎三郎の屋敷前と記す。

文献

「東作誌」

108 塩垂山

所在地 美作市湯郷

立地

吉野川右岸、湯郷地区の集落北側にある標高二二一mの山である。

縄張

未詳。

城史

応仁元年（一四六七）六月、赤松氏の家臣宇野上野入道・太田三郎が赤松伊豆守被官粟井右京進の手引きで美作国に乱入し「南峽」（美作市南海）・「塩垂山」両所に陣を取ったが、山名掃部頭に三方四方から攻撃され播磨国へと落去したとある（「応仁別記」）。



塩垂山

文献

「応仁別記」、『美作略史』、『美作町史』 地区誌編

109 湯郷土居館

所在地 美作市湯郷

立地

吉野川右岸、湯郷地区の集落内に位置し、「ツイジ」「東門」「堀り」「かまへ」などの地名が残る。

縄張

未詳。

城史

長享二年（一四八八）一〇月、赤松政則は湯治として家臣とともに美作国に下向し「坪和新三郎宅」に、後藤則季は「現大寺」に居住、また「長興寺」を修築して政則の宿舎とする予定とある。また延徳二年（一四九〇）六月、「作州湯郷湯治」を終え播磨国の「赤松旧宅」へ帰ったとある。また明応元年（一四九三）一〇月、後藤修理亮が弟孫四郎に「勝田」の地で殺害され、同年二月には、「湯郷衆百人許」が豊田荘の百姓等の緩急をとがめ、出向してその長、内方太郎左衛門尉を討ち取ったとある（「蔭涼軒日録」）。

文献

『美作町史』 地区誌編・通史編

110 下大谷城

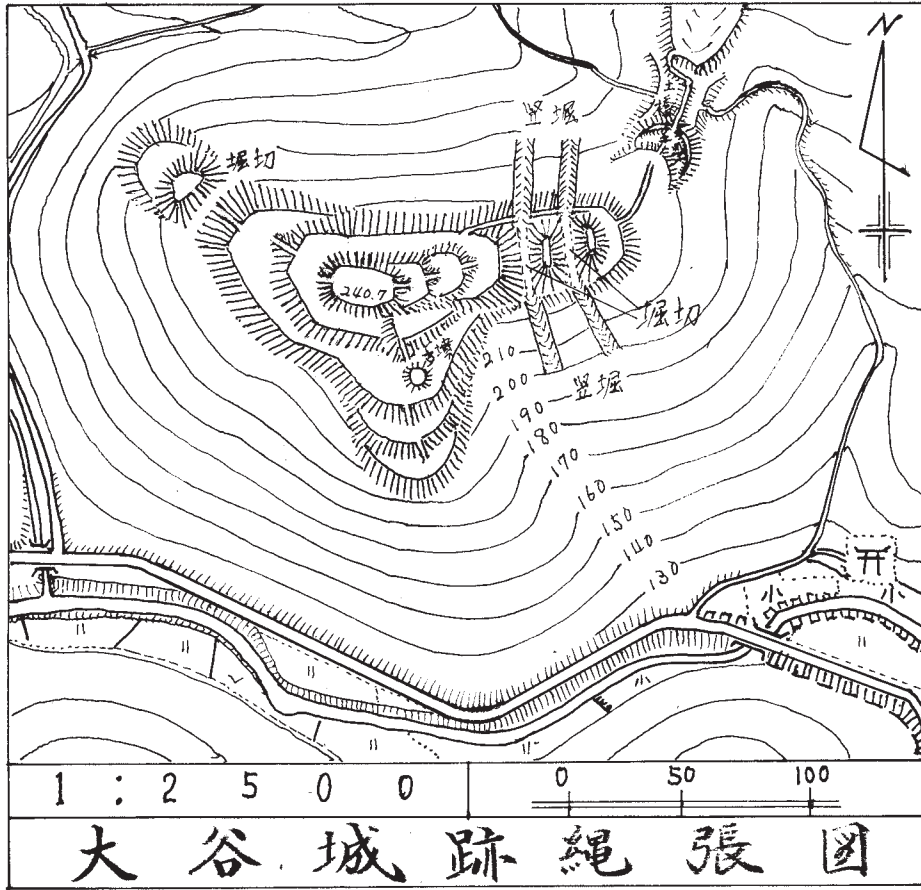
所在地 美作市下大谷

立地

下大谷地区と奥大谷地区との中間の標高約二三〇mの城山山頂に位置する。湯郷地区から下大谷・奥大谷地区を経て為本地区に至る山間道路の北側にある。

縄張

峠越えの山上に位置する。山頂に主郭を構え、周囲にも曲輪を配する。稜線には二本の堀切が確認される。比較的コンパクトな縄張り



城史

であることから、この地域に拠った有力な土豪層の持城と考えられる。

「古城之覚」は英田郡下大谷村の「下大谷」として、城主不詳とする。「東作誌」は勝南郡下大谷村の「古城」として、山は東に面し高さ約四町の坂路で険しく、本丸（縦二〇間、横一五間）、二丸（縦四間、横二間）、同様の小郭が三つあり西を囲む、東に堀切（幅

文献

三間、深さ二間）、別に堀切（幅二間、深一間）と記す。『日本城郭大系』は英田郡作東町下大谷に所在とするが誤りである。

「武家聞伝記」、「美作鬢鏡」、「東作誌」、「美作鏡」、「岡山県通史」勝田28、「日本城郭大系」583、「改訂岡山県遺跡地図」美作3、「美作町史」地区誌編・通史編

111 殿屋敷

所在地 美作市奥大谷



下大谷城

立地

奥大谷地区の南、標高三〇二mの独立峰から東に延伸する尾根付近に所在するとみられる。「殿屋敷」の地名が残る。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は勝南郡奥大谷村の「殿屋敷」として、大隅の地の奥にあり、東西約二五間、南北三〇間余り、由来不詳、県令などの古宅か、土塁のあとが明瞭と記す。

文献

「東作誌」、「美作町史」通史編

〔美作市〕作東町

112 尾総城・小房城・尾房城

所在地 美作市小房・勝田町久賀

立地

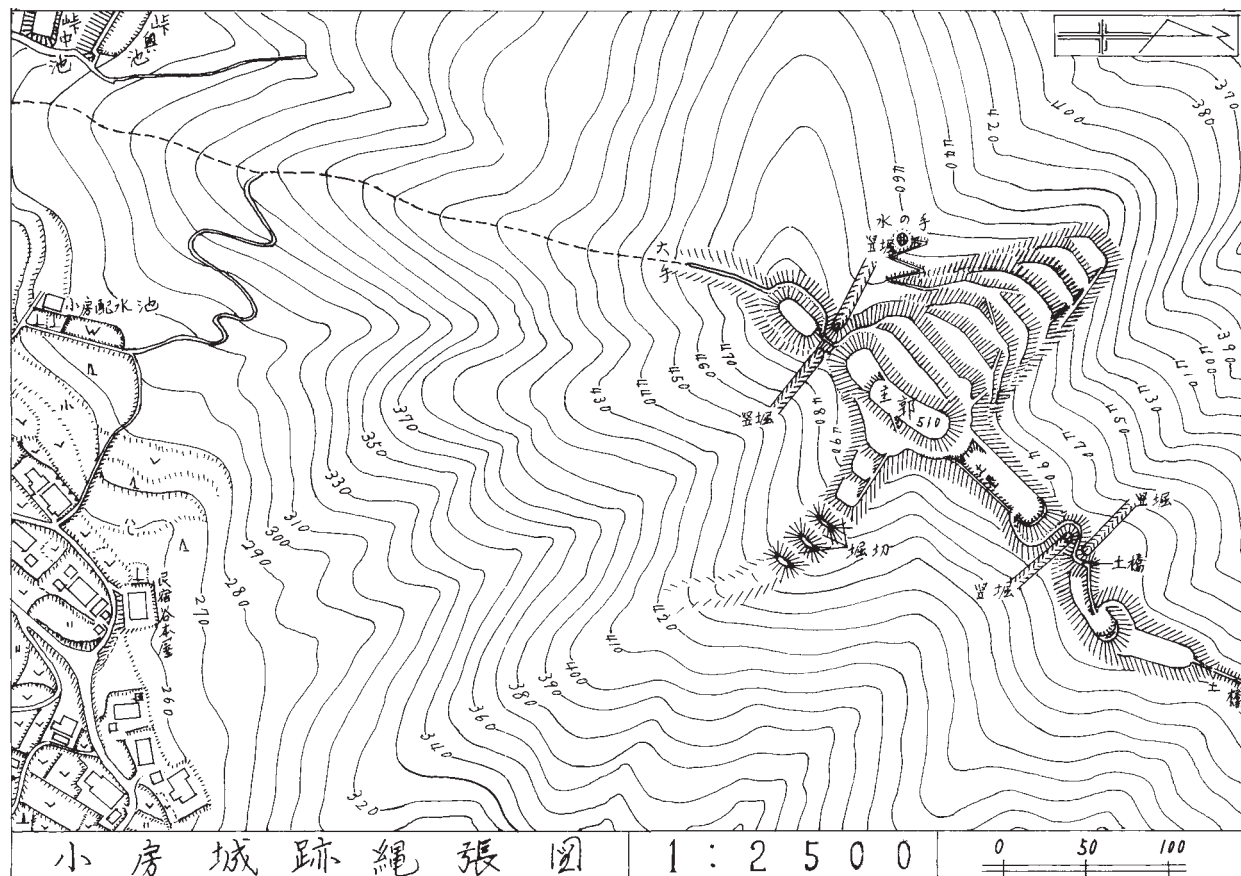
標高約六一〇mの小房山の山頂付近にある。西には梶並川流域が、東南には小房地区の集落が一望できる。国道四二九号線より、県道七号「智頭・勝田」線を久賀ダム方面へ。バス停の「久賀上」と「久賀ダム」の間に未舗装の林道がある。その林道を五mばかり進んだところに「小房城」の標柱がある。

縄張

小房山の山頂に主郭を構える。南東側と南西側、北東側に堀切がみられる。主郭から北東側の第二郭となる曲輪には土塁がみられる。この曲輪の北東隅に虎口が確認される。さらにその下に堅堀により通路を曲げた後で土塁を持つ下位曲輪に通じる。ここにも虎口らしき遺構がみられる。但し、いずれも地形に沿った平入りに留まる。城域は、在地系縄張り技術の特徴を示すが、北東側の土塁の用法などはその中でもやや技巧的な様相を見せる。在地の有力国衆により整備された持城と考えられる。

城史

正保書上五四城の一で、「古城之覚」は吉野郡小房村の「尾房之(城)」として、「建武頃は粟井か出城」で当時の城主粟井近江守景房の一家に粟井三郎・同与市、幕下に藤生新兵衛あり、山の高さ二町余りで岩險阻、永祿(一五五八〜七〇)の頃は福田孫八郎が城を抱え、鞍懸城の城主五島基政と不和で一年ばかり争い、播磨国平福城の城主別所日向守の仲裁で和睦した、また別に久賀村の「尾房」として、城主は有本宗兵衛、勝田北郡戸板村の平左衛門は五代の孫とする。



立地 縄張 城史 文献

113 殿屋敷

所在地 美作市小野

未詳。

『英田郡史考』に略図が掲載されている。
『英田郡史考』は「殿屋敷」として、昔の郷司の屋敷跡とする。
『英田郡史考』

文献

「美作鬢鏡」は「小房村ノ城」として城主不詳、久賀村の「尾房城」として城主を有本惣兵衛とする。「美作鏡」は小房村の「小房城」として、城主を有本惣兵衛・皆木与市、城山は勝南郡久賀村に跨るとする。「新免家侍帳」とされる文書には、「新免修理之介 小房城 備中守弟なり」とある。「東作誌」は「小房城」として、異本に宇野右近が居城、あるいは元弘年間から文安年間まで有本左衛門尉佐吉以下三代の居城ともいう、山へは約八町余りで西が大手、本丸（東西一〇間、横一七間）、本丸の北に「的場の段」という二の丸（縦二〇間、横八間）、東南に張り出した「太鼓櫓の段」という三の丸（縦三二間、横七間）、的場の段の下に張り出し古くは馬の売買の場所という「馬工郎の段」（縦一七間、横六間）、西南の砦の間に堀切ありとする。天保国絵図に「古城跡」とある。なお『勝田町誌』は「小房城（烏ヶ城）」と別名を併記している。

「武家聞伝記」、「美作鬢鏡」、「東作誌」、「東作誌」、「美作鏡」、「美作古城記」、「英田郡誌」、「英田郡史考」、「岡山県通史」英田4・勝田14、『美作古城史』、『日本城郭大系』658、『作東町の歴史』、『勝田町誌』、『歴史散歩岡山の城』、『勝田町の城址と構え跡』、『改訂岡山県遺跡地図』勝田9、『岡山の山城を歩く』95

立地 縄張 城史 文献

114 四乳山城

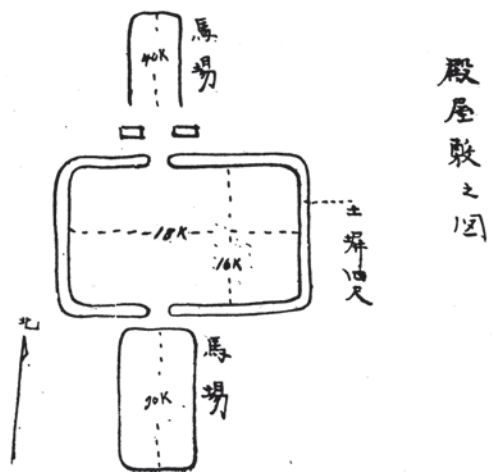
所在地 美作市小野

梶原地区と小野地区の中間、粟井川左岸にあり、北西に延伸する尾根上に位置する。西を国道四二九号線が通る。標高は約二三〇m。未詳。

「東作誌」は吉野郡小野村の「四乳山」として、今は芝山となる、城主不詳と記す。『美作古城史』は一夜陣の跡かとする。
『東作誌』、『美作古城史』、『日本城郭大系』646、『改訂岡山県遺跡地図』作東33



殿屋敷



殿屋敷略図（『英田郡史考』より）

115 中村城・粟井城・淡相城

所在地 美作市粟井中

立地

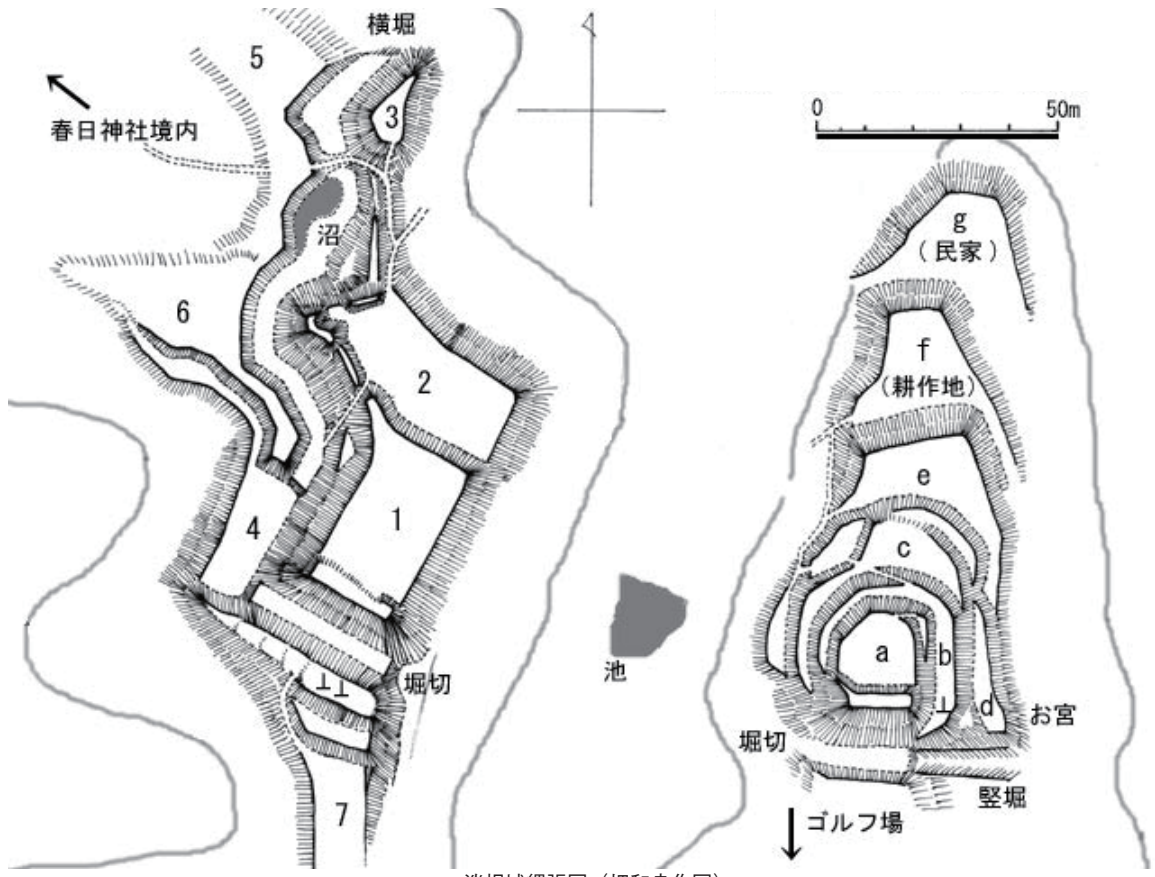
粟井川左岸にあり、粟井中地区を一望できる位置にある。春日神社の南の尾根上にあり、標高は約二〇〇mである。

縄張

畑和良氏の歴史サイト「落穂ひろい」によれば、南北三三m、東西二〇mほどの長方形を呈する曲輪1と、その北に置かれた曲輪2から成り、横堀を超えた北側、西側にも尾根平坦面5、6があるが自然地形とみられ、また曲輪1南方の堀切を越えた部分7も一部に墓地があるため後世の開墾の可能性を考慮する必要がある、城の東の小さな谷を挟んだ丘上にも城郭遺構が残り、南北一五m、東西一七mほどの主郭aを最南端に、北の尾根先端に向かって四つの曲輪が並び、主郭の周囲など要所を帯曲輪・犬走りで守備し、主郭南縁には土塁が築かれ、その外側は大型の堀切で尾根を断ち切っており、「東作誌」や「英田郡史考」が「東の丸」とするのは、この遺構を指すものと推測している。

城史

正保書上五四城の一で、「古城之覚」は吉野郡粟井村の「中村之(城)」として、菅家の一族を城主とするともに、赤松氏譜代の侍という粟井近江守景盛の前後五、六代が住む、山の高さ半町余り、本丸(二〇間四方)、二ノ丸(四〇間四方)、東の方に三角の丸(約二〇間)、平山城のため出城で敵を防いだという、用水多しとする。元禄一〇年(一六九七)とされる村々書上(『粟広村史』所収)には、中村の粟井城主は粟井近江之助とし、「山名伯耆守義氏」の美作国領有により「管家之嫡領併和の助盛」が当城に移り粟井某と称し、以降六、七代は赤松氏配下、または尼子晴久に属し、近江之助、宇喜多氏に属した聳の与一平(兵衛)、子の三郎平(兵衛)と続きのち浪

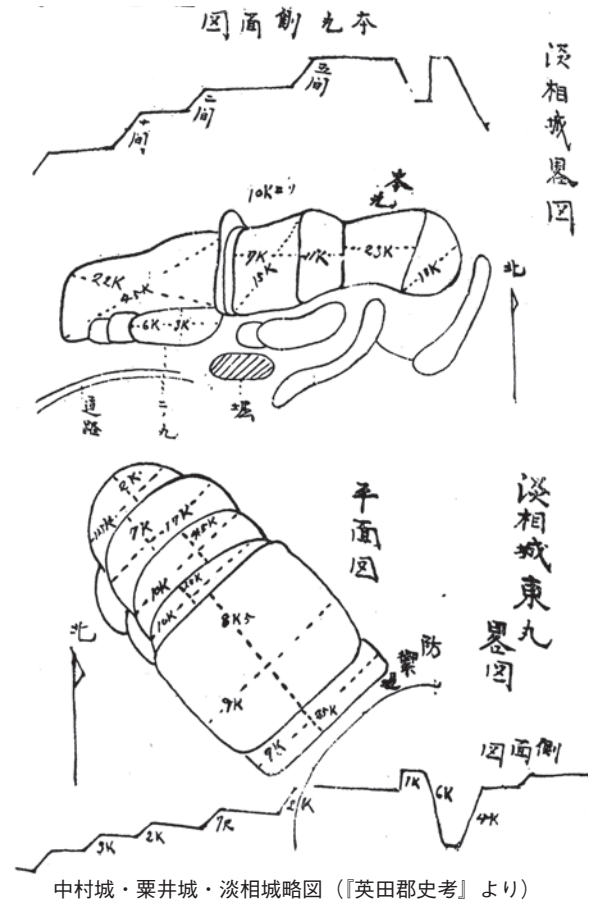


淡相城縄張図 (畑和良作図)

人したとする。「美作鬘鏡」は「粟井中村ノ城」、「美作鏡」は「淡相城」で城主を菅家一族の粟井近江之介と表記する。「東作誌」は

文献

「武家聞伝記」、「美作鬘鏡」、「東作誌」、「美作鏡」、「美作古城記」、「英田郡誌」、「英田郡史考」、「岡山県通史」英田3、「美作古城史」、「日本城郭全集」勝田郡1、「日本城郭大系」577、「作東町の歴史」、「改訂岡山県遺跡地図」作東6、「戦国山城を攻略する」。



中村城・粟井城・淡相城略図（『英田郡史考』より）

加えて本丸は上は約五間四方で五段あり、二丸は四段、上は一〇畳敷程度で、粟井和泉守（近江守）菅原景盛・同備前守休盛・同近江守晴盛三代の居城と記す。天保国絵図に「古城跡」とある。『英田郡誌』は別名を淡相城、中村城、粟井中村城、『英田郡史考』は「淡相城（中村城とも云ふ）」とする。『日本城郭全集』は「淡相山城」として、所在を勝田郡勝田町馬形とするが誤りである。

出雲国尼子氏は、備前国周匝の城山（赤磐市周匝）と三星城（美作市明見）を、さらに「粟井村ノ赤松之城」を攻め落として出雲国に引き取ったと言い伝えるとする（『備前記』）。

116 殿河内構

所在地 美作市五名

立地

未詳。

城史

「新免家侍帳」とされる文書には「江見出雲守 五名殿河内構」とある。「東作誌」は吉野郡五名村の「殿河内」として、郡司の屋敷跡と記す。

文献

「東作誌」

117 横山城・吉野城

所在地 美作市五名・沢田

立地

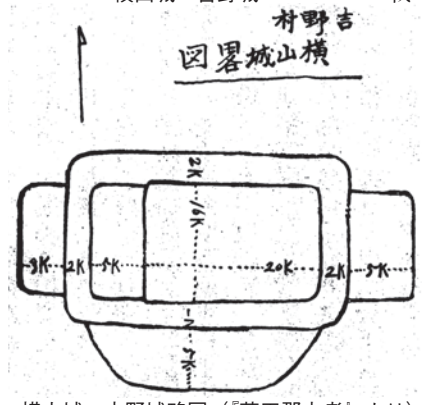
吉野川左岸にあり、県道五号線が西を通る。沢田地区と五名地区の中間にあり、吉野川に最も迫った尾根上に位置する。標高は約一九六m。

縄張

『英田郡史考』に略図が掲載



横山城・吉野城



横山城・吉野城略図（『英田郡史考』より）

城史

されている。

「東作誌」は吉野郡五名村の「東山城」、一名「吉野城」として、城主は坂部大炊介、横野大膳、一説に江見出雲守、上の段（約六〇間四方）、以下は壊して田としたため形を失う、坂部（酒部）大炊助政次は赤松氏の一族で新免家の士、弘治元年（一五五五）に尼子晴久のために大聖寺村境で戦死と記す。『作東町の歴史』には一名を河内城といい、五名の「城の腰」の地にあったとする。

康安元年（一三六一）七月、山名時氏の美作国侵攻、倉懸城攻囲の救援のため赤松則祐が兵を籠めた播磨・美作国境の四か城のうち「吉野」がみえる（『太平記』）。この城か。

文献

「太平記」、「東作誌」、「英田郡誌」、「英田郡史考」、「美作古城史」、「日本城郭大系」645、『作東町の歴史』、『改訂岡山県遺跡地図』作東40、『大原町史』地区誌編

118 吉野城下構よしの

所在地 美作市五名

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「新免家侍帳」とされる文書には、「江見平太 吉野城下構」とある。

文献

吉野城の比定地との関連でひとまずここに置く。
「東作誌」

119 郷城

所在地 美作市宮原

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

『英田郡史考』は宮原の「郷城」として、上古酋長の居所で山上に平坦な段二ヶ所あり、奈良時代以前の陶器の破片が多数残るとする。

文献

『英田郡史考』

120 豆田構まめだ

所在地 美作市豆田

立地

吉野川左岸にあり、豆田地区の南、北に延伸する尾根上に所在する。

縄張

未詳。

城史

「新免家侍帳」とされる文書には、「鮮貝次郎兵衛 豆田構」とあり、新免家の士、鮮貝次郎兵衛が住むとする。また「江見家記」の一節に「菅井次郎兵衛・同武三 豆田二住ス」とある。

文献

「江見家記」、「東作誌」、「美作古城史」、「日本城郭大系」634、『改訂岡山県遺跡地図』作東42

121 清水構しみず

所在地 美作市小ノ谷

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「新免家侍帳」とされる文書には、「渡辺又左衛門 小の谷清水構」とある。また「江見家記」の一節に「新免侍渡部亦右衛門（て） 小ノ谷ニ住ス」とある。「江見家記」、「東作記」

文献

122 殿屋敷との

所在地 美作市山手

立地

吉野川右岸にあり、山手地区の北、南向きの緩斜面に所在する。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は吉野郡山手村の「殿屋敷」として、約一二〇坪で今は竹囲となつてゐる、居主不明と記す。

文献

「東作誌」、「美作古城史」、「日本城郭大系」618、『改訂岡山県遺跡地図』作東122

123 山手城やまて

所在地 美作市山手

立地

吉野川右岸にあり、山手地区の北西、標高三四四・九mの山頂に位置する。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は吉野郡山手村の「山手古城」として、弘治年中（一五五五〜八）に粟井右近大夫が住むと記す。『英田郡史考』は位置不明とする。



山手城

文献

「東作誌」、「英田郡誌」、「英田郡史考」、「美作古城史」、「日本城郭大系」642、『改訂岡山県遺跡地図』作東35

124 湯川屋敷ゆかわ（仮称）

所在地 美作市瀬戸

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は英田郡瀬戸村の「屋敷跡」として、奥瀬戸にあり、湯川刑部が住む、時代や事跡は不詳と記す。

文献

「東作誌」

125 阿部屋敷あべ

所在地 美作市岩辺

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は英田郡岩辺村の「阿部屋敷」として、石川右近と子の「あべ」の屋敷といい、「石川あべ」は炉端で背をあぶっていると記す、

文献

芦河内某が隙間から鉄炮で撃ち殺したと記す。「東作誌」

126 いわべやま おっさか 岩辺山城・越坂山城

所在地 美作市岩辺・小ノ谷

立地

岩辺地区の吉野川左岸にあり、西にはすぐ岩辺集落が展開する。標高は約二七〇mで、吉野川上流域・下流域が一望できる。

縄張

吉野川が蛇行する岩辺集落の背後に位置する。山頂に主郭があり周囲に曲輪が配された。北東側に伸びる稜線の先端にも単郭の曲輪と土塁を配した橋頭堡のような別郭が確認される。分散した縄張りであり、複数の勢力が在番したものと考えられる。この地域の有力国衆江見氏に関連した土豪層が籠った持城と考えられる。

城史

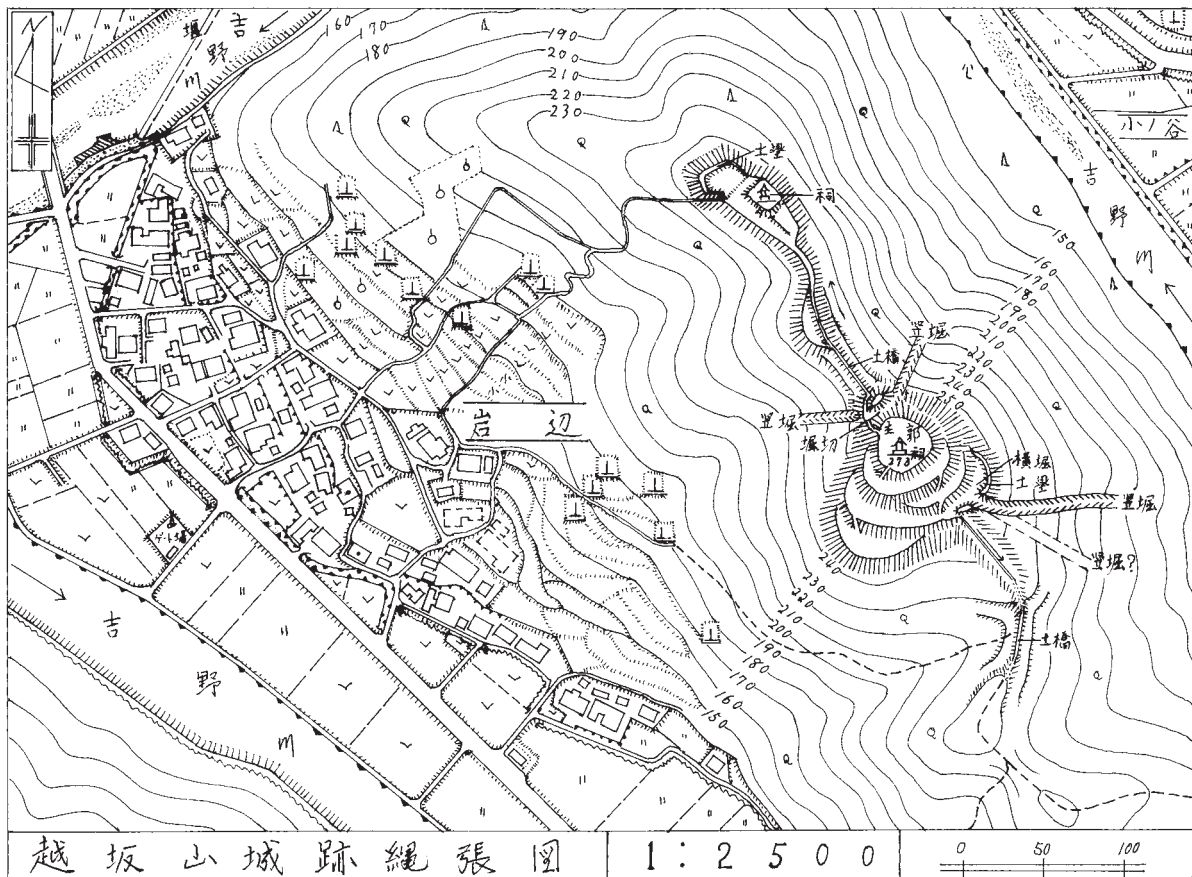
「江見家記」は「岩辺山之城」として、永禄年中（二五五八〜七〇）に江見新左衛門秀俊が居住していたが、所領をめぐる問題から新免氏が攻撃、秀俊は討ち取られ落城したとする。「東作誌」は英田郡岩辺村の「越坂山」として、山の嶺で平坦、背後が険しい本丸（二七間、二四間）、南に二丸（長さ三〇間、横二一間）、南に三丸（長さ四〇間、横四間）、本丸と二丸の境に堀切（幅一間半、長さ五五間）、大手は南で坂道は約二町余り、城主は江見新左衛門秀俊・伊賀守秀益父子と記す。「美作鏡」は岩辺村の「岩辺城」として、城主を江見伊賀とする。『英田郡史考』は「越坂城」「追坂城」、六七一番地にあるが、「作陽誌」の形状と異なるとする。『美作古城史』は「押坂」、「日本城郭大系」は「追坂山城」とも書くとする。

文献

「江見家記」、「東作誌」、「美作鏡」、「美作古城記」、「英田郡誌」、「英田郡史考」、「岡山県通史」英田24、「美作古城史」、「日



岩辺山城・越坂山城



本城郭大系 582、「改訂岡山県遺跡地図」作東31

127 岩戸城

所在地 美作市大内谷・大聖寺

立地
縄張

未詳。

城史

「東作誌」は英田郡大内谷村の「岩戸城」として、不動岩の上であり、登り道は六〇間余り、山嶺は平坦で左右に堀切（幅二間、長さ五間あるいは七間）、山は大聖山との境、城主は小鴨伯耆守（一説に遠藤）、また入道某という人物があったと記す。

文献

「東作誌」、『美作古城史』

128 土居殿屋敷

所在地 美作市鯉

立地
縄張

未詳。

城史

「東作誌」は英田郡鯉村の「土居殿屋敷」として、鯉村山下にあり、江見右馬助為行の養子となり土居秋仲から名前を改めた若狭守為秀の隠居所というと記す。

文献

「東作誌」

129 鳥坂山城・鳥越城

所在地 美作市鯉

立地

吉野川左岸にあり、北は鯉地区、南には吉田地区の集落が展開する。標高二〇五mの独立峰上に所在し、吉野川上流域・下流域、江見方面まで一望できる。

縄張

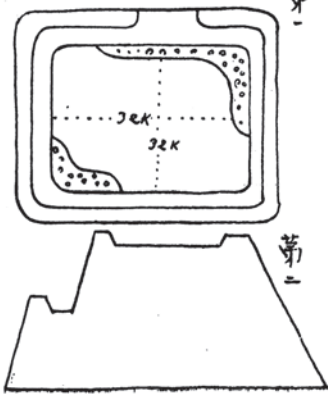
未詳。

城史

「東作誌」は英田郡鯉村の古城「鳥坂山」として、城主は江見氏歴代、本丸（二五間四方）うち土塁が北（高さ五尺、長さ一三間）と南（高さ六尺、長さ二三間）に、また井戸（直径二間）などあり、西に櫓台跡（東西一五間、南北六間）、下の山続きに「内仏屋布」（宝泉坊、東西一八間、南北一五間）、二丸（東西一二間、南北二〇間）、三丸（東西二四間、南北二二間）と記す。「美作鏡」は「鳥越城」、始め「江見ノ城」とい、城主は江見若狭守とする。「英田郡史考」は鳥越城（一名鳥坂城）、『美作古城史』は「鳥坂山城（鳥越城）」、『日本城郭大系』は鯉城とする。

文献

「東作誌」、「美作鏡」、「美作古城記」、「美作略史」、『英田郡史考』、『岡山県通史』英田23、『美作古城史』、『日本城郭大系』620、『改訂岡山県遺跡地図』作東7、『岡山の山城を歩く』102



鳥坂山城・鳥越城略図（『英田郡史考』より）



鳥坂山城・鳥越城

130 川端屋敷

所在地 美作市江見

立地
縄張

吉野川と山家川の合流地点、川崎集落内に所在する。
未詳。

城史

「東作誌」は英田郡川崎村の「川端屋敷」として、川端久左衛門の屋敷で、今も付近に堀、的場などの地名が残る、伝えでは関ヶ原陣の時、川端某が酒興で討死し、家臣の大川喜三郎が首を持ち江見に帰って死んだというと記す。

文献

「東作誌」、『美作古城史』、『日本城郭大系』589、『改訂岡山県遺跡地図』作東21

131 岡崎孫次郎屋敷

所在地 美作市原

立地
縄張

未詳。
未詳。

城史

「東作誌」は英田郡原村の「岡崎孫次郎屋敷」として、孫次郎は村の地侍で、耶蘇宗門で処罰され闕所となり屋敷は破却、跡へ安東与右衛門が入ると記す。

文献

「東作誌」

132 久保木城

所在地 美作市原

立地

原地区の久保木集落の南西に位置する山頂に所在する。標高は約二六五m。

縄張

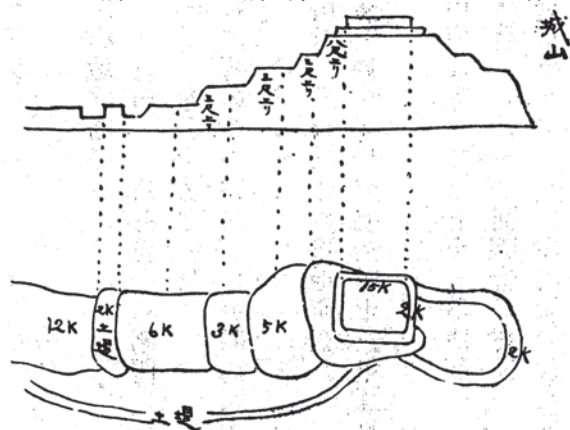
『英田郡史考』に略図が掲載されている。

城史

「東作誌」は英田郡原村の「古城」として、山の坂道は約四町、頂上は平坦で西に段あり、城主は安東一之丞と記し、別に安東氏系譜などでは久保木城の城名もみえるとする。『英田郡史考』は「久保木城」として、城主は安東肥前守頼信で永禄三年（一五六〇）尼子氏と戦い討死とする。『美作古城史』は「久保木城」と「原城」の項をそれぞれ立て、前者は本丸（一五間四方）、ほかに五間四方、四間四方、六間四方の三段があり、後者は城主を安東市之丞とする。

文献

「東作誌」、『英田郡史考』、『美作古城史』、『日本城郭大系』591、『改訂岡山県遺跡地図』作東52



久保木城略図（『英田郡史考』より）



久保木城

133 殿屋敷との

所在地 美作市原

立地
縄張

未詳。

城史

「東作誌」は英田郡原村の「屋敷跡」として、安東肥前守が住み、地名は「殿屋敷」という、谷間なりと記す。

文献

「東作誌」、「美作古城史」

134 日指城ひさし（仮称）

所在地 美作市日指

立地

日指地区の長城寺から約四〇〇m南西の丘陵上にある。標高は約二七〇m。

縄張

未詳。

城史

未詳。『改訂岡山県遺跡地図』にも城名の記載はない。

文献

『改訂岡山県遺跡地図』作東22

135 杉坂城すぎざか

所在地 美作市田原

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は英田郡田原村の古城として、杉ヶ坂の内鞍掛岩の上にあり、嶺は平坦で堀や砦の跡は見えない、伝えでは元弘の乱の後に醍醐天皇が隠岐国に赴く際、児島高德がここに来たと記す。『英田郡史考』は「杉坂城」として、杉坂史跡の北の嶺で、播磨・美作の境界にあり、平坦で堀の跡及び段があるとす。『美作古城史』は「田原城」とする。

文献

「東作誌」、「英田郡史考」、「美作古城史」、「日本城郭大系」612

136 土居山城・福城といやまふくのしろ

所在地 美作市土居

立地

山家川右岸で、姫新線美作土居駅のすぐ北東の尾根上に位置する。標高は約一九〇mで、土居地区など山家川流域を一望する。

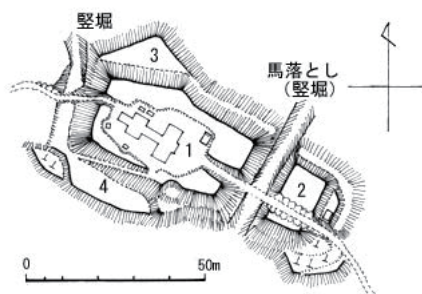
縄張

畑和良氏の歴史サイト「落穂ひろい」によれば、縄張りは単純で、東西四四m、南北二〇mと比較的大型の主郭と三つの附属郭からなり、主郭の東側には堀切があり、この堀切の東岸に南北一七m、東西一〇mほどの曲輪2があるが、神社参道の敷設で大きく損壊、曲輪の北から東にかけては、切岸形成時の自然発生か犬走状の帯地形がみられ、また主郭北西の出張り部分の下に腰曲輪3が、主郭南直下にも幅八mほどの帯曲輪4が設けられ、主郭西側は高さ六mの急峻な切岸で防御され、その下にも堀がみられる。北端は堅堀となつて下るが、南側は横堀状になつていて帯曲輪

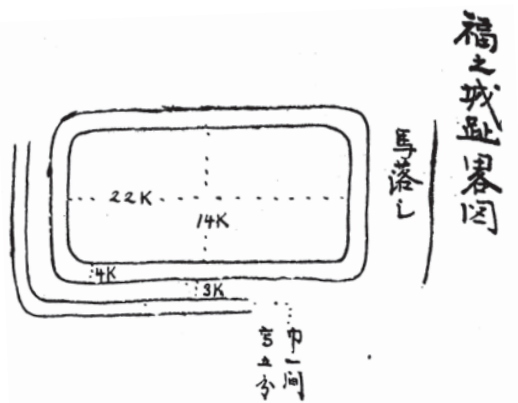


土居山城・福城

4に接続、堀を越えた西尾根続きは完全に自然地形で、だらだらとした傾斜面が続くのみとする。



福城縄張図 (畑和良作図)



土居山城・福城略図 (『英田郡史考』より)

城史

「古城之覚」は英田郡土居村の「土居山之(城)」として、城主を江見帯刀とする。「美作鬘鏡」は「土居福の城」、「美作鏡」は「土居福城」とする。「東作誌」は「福城」として、高さ一二間半、いささか堀切があるのみで、礎石や郭跡は分ならず、高陽の地で畑山となる、城主は元亀年中の人で宇喜多秀家に仕えた江見帯刀と記す。『英田郡史考』は「福之城」とする。

文献

「武家聞伝記」、「美作鬘鏡」、「東作誌」、「美作鏡」、「美作古城記」、「英田郡誌」、「英田郡史考」、「岡山県通史」英田16、「美作古城史」、「日本城郭大系」629、「改訂岡山県遺跡地図」作東68、「岡山の山城を歩く」96

137 景清屋敷

所在地 美作市竹田

立地

未詳。

城史

「東作誌」は英田郡竹田村の「景清屋敷」として、萱尾奥にあり、由来不詳、地下に金鶏があり、除夜に発声すると地元民が伝えると記す。

文献

「東作誌」

138 公文所

所在地 美作市竹田

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

『英田郡史考』は鎌倉時代公文所の遺跡とし、付近の墓地に同時代の五輪塔があると記す。

文献

「東作誌」

139 比丘ヶ城・天王山城

所在地 美作市上福原

立地

福原地区の山家川左岸にあり、すぐ北を国道一七九号線が通る。標高約一五四mの小丘陵・天王山上に位置する。山家川対岸の約

縄張

六〇〇m北東には大谷城がある。
『改訂岡山県遺跡地図』は、北東端に平坦面とその西側に二カ所の堀切、北側と南側に曲輪かとし、東側にも平坦部二カ所とする。

城史

「東作誌」は英田郡上福原村の「比丘ヶ城」として、天王山にあり、坂路約三三間の小山で堀切の跡があるのみで嶺は開墾して畑となる、城主不詳、あるいは松田伊賀守

とい、山の南麓は街道

であると記す。『英田郡史

考』は「天王山城」とし城

主の松田岩之丞は康安年間

(一三六一〜二)に山名山

名氏と戦い討死したと口碑

に伝えるとする。また『改

訂岡山県遺跡地図』は「松

田城」とする。

『美作古城史』は所在を美

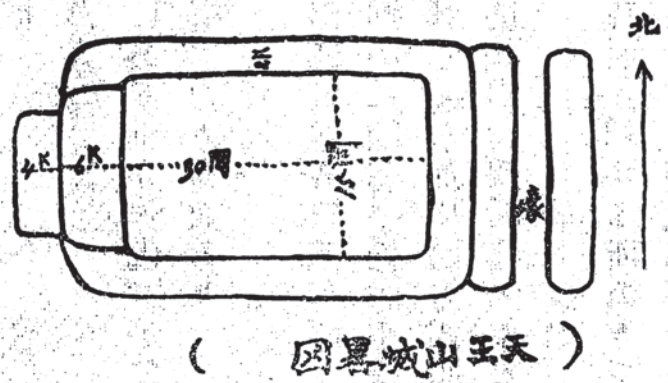
作町平福と誤っている。

「東作誌」、『英田郡史考』、

『美作古城史』、『日本城郭

大系』625、『改訂岡山県遺

跡地図』作東19



比丘ヶ城略図 (『英田郡史考』より)



比丘ヶ城

140 大谷城 (仮称)

所在地 美作市山城

山城地区の山家川右岸にあり、標高約二五〇mの独立峰上に所在す。杉坂峠に至る道の要衝に位置し、南東には比丘ヶ城がある。

『改訂岡山県遺跡地図』は、郭面・堀切が遺存とする。

未詳。

備考

『日本城郭大系』の載せる「大谷城」が資料的な出典とみられるが、先行文献にみえず、また所在地を「英田郡作東町下大谷」とする(こ)とから、下大谷城(旧英田郡美作町下大谷)の誤りかとも考えられ、城郭かどうか検討が必要である。

『改訂岡山県遺跡地図』作東20

文献

141 古屋敷

所在地 美作市山城

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

『英田郡史考』は「郷司庁址」として、垣内の地にあり、閩武・真野両郷司の庁址で、中世大川五地区、小川一四地区の支配所があったため、地元民は「古屋敷」と呼ぶとする。

『英田郡史考』

文献

142 大夫殿屋敷だいのぶどの

所在地 美作市白水

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は英田郡白水村の「大夫殿屋敷」として、地名が残るが由来不詳と記す。

文献

「東作誌」「英田郡史考」

143 角南城すなみなみ（仮称）

所在地 美作市角南

立地

角南地区の集落内にある角南神社付近の独立丘陵。標高は約二二〇mである。

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、谷に面した南向きの尾根上平坦面はゲートポール場として利用、背後にあたる北側斜面中段には犬走り状の段が残存とする。

城史

未詳。『改訂岡山県遺跡地図』にも城名の記載はない。

備考

城郭かどうか慎重な検討が必要である。

文献

『改訂岡山県遺跡地図』作東64



角南城（仮称）

144 小越城

所在地 美作市柿ヶ原

立地

角南地区の山家川左岸で、集落の西端の山林尾根上に位置する。標高は約二七〇m。

縄張

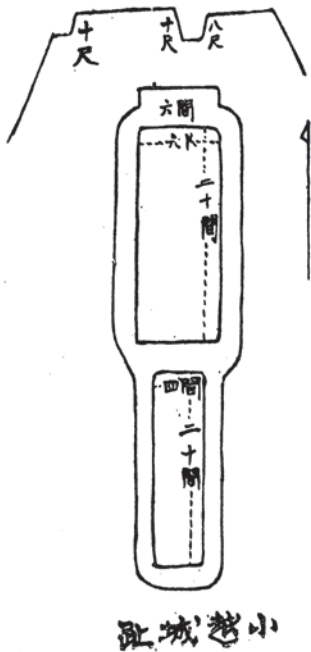
『英田郡史考』に略図が掲載されている。

城史

『英田郡史考』は「小越城」として城山の地にあり、城主不詳だが、尾越に住む香山氏が城主の末裔とい、天文年中（一五三二〜五五）に尼子氏のため落城との伝えがあるとす。『改訂岡山県遺跡地図』は「尾越城」とし、作東町角南にありとする。

文献

『英田郡史考』、『美作古城史』、『改訂岡山県遺跡地図』作東62



小越城略図（『英田郡史考』より）



小越城

145 柿ヶ原城

かき
はら

所在地
美作市柿ヶ原

立地

黒見山から北に延伸する尾根上に位置する。標高は約三四五mで、西に万善地区、東に鈴家地区を一望する。

縄張

『英田郡史考』に略図が掲載されている。

城史

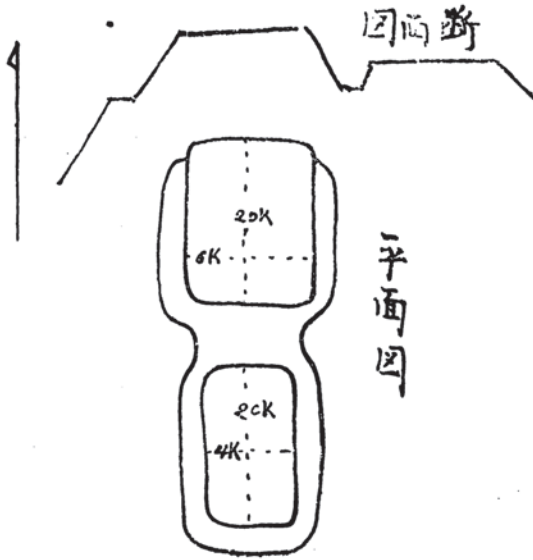
『英田郡史考』は、城主不詳だが赤松一族の在城中、正平年中（一三四六～七〇）に山名氏のため落城とする。

文献

『英田郡史考』、『美作古城史』、『日本城郭大系』587、『改訂岡山県遺跡地図』作東59



柿ヶ原城



柿ヶ原城略図（『英田郡史考』より）

146 平井屋敷（仮称）

ひら
い

所在地
美作市万善

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

『英田郡史考』は「浮田氏の女松姫宅址」として字空にあり、一九三坪の宅地で泉水跡という窪地あり、平井八左衛門は「備前浮田松」を妻にこの地に住み、近郷五〇町歩の田畑を所有したと伝えるところとする。

文献

『東作誌』『英田郡史考』

147 朝霧屋敷

あさ
ぎり

所在地
美作市国貞

立地

国貞地区の河会川右岸に位置し、国貞・万善地区を一望する。標高約二四〇mの緩斜面上に所在する。

縄張

未詳。屋敷とされるが城跡と思われる。

城史

『東作誌』は英田郡国貞村の「朝霧屋敷」として、伝えでは河会谷の侍「朝霧いそのかみ」が、天正（一五七三～九二）の初めに備前国天神山から延原弾正とともに美作国に移り住み国貞村に住んだが、延原氏は朝霧氏をつて押領した、朝霧は中尾とも書き、「いそのかみ」も字義不詳と記す。『英田郡史考』は字円山にありとし、「イソノカミ」は「伊勢守」かとする。

文献

『東作誌』、『英田郡史考』、『美作古城史』、『日本城郭大系』574、『改訂岡山県遺跡地図』作東55

148 あん どう
安東屋敷（仮称）

所在地 美作市鈴家

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は英田郡鈴家村の古跡として、安東兵衛国定がこの地に
住み、天正（一五七三〜九二）の末に水野六左衛門勝成を躰とした
が、諍いとなり勝成に斬り殺されたというと記す。

文献

「東作誌」

149 ささき
佐々木屋敷（仮称）

所在地 美作市鈴家

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

『英田郡史考』は「佐々木開隆の宅址」として、佐々木盛綱の子孫
開隆が医道の心得により天神山城主浦上宗景に仕え、落城ののち同
村に屋敷を構え開拓、豪農となったと記す。

文献

『英田郡史考』

〔美作市〕英田町

150 城尾城

所在地 美作市真神

立地

河会川右岸にあり、南北の流域を広く眺望する。標高約三六〇mの愛宕山山頂付近に所在する。

縄張

未詳。

城史

「古城之覚」は英田郡神田村の「城尾之（城）」として、城主を渋谷権王とする。「美作鬢鏡」と「美作鏡」は城主を「渋谷権之丞」とする。「東作誌」は神田村下分の「古城」として



城尾城

文献

「武家聞伝記」、「美作鬢鏡」、「作州記」、「東作誌」、「美作鏡」、「美作古城記」、「美作古城跡」、「英田郡史考」、「岡山県通史」英田19、「美作古城史」、「日本城郭大系」590・606、「改訂岡山県遺跡地図」英田37

151 横尾城

所在地 美作市横尾

立地

横尾川上流の右岸にあり、横尾集落の西約九〇〇m地点の山上に所在する。標高は約三二〇mである。

縄張

未詳。

城史

「古城之覚」は英田郡の「横尾之（城）」として、城主を山名一族とする。「美作鬢鏡」は新田村と所在地を誤っている。「東作誌」は「古城跡」として城主を尼子一族というと記す。

文献

「武家聞伝記」、「美作鬢鏡」、「作州記」、「東作誌」、「美作鏡」、「美作古城記」、「美作古城跡」、「英田郡誌」、「英田郡史考」、「岡山県通史」英田21、「美作古城史」、「日本城郭大系」644、「改訂岡山県遺跡地図」英田49

152 上山城・城山

所在地 美作市上山

立地

溯尾川右岸、県道四一四号線の東側の独立峰上に所在する。城山と呼ばれ、標高は約二九七mである。

縄張

未詳。

城史

「古城之覚」は英田郡上山村の「上山之（城）」として、城主を延原弾正少弼、備前天神山城主の浦上宗景家臣というとする。「東作誌」は上山村から分村し



上山城・城山

文献

た小川村の「高鉢山」として、城主は延原弾正、本丸（三〇間四方）、今は野山となり、山続きに茶屋ヶ峠という場所があり、また下屋敷とは二ノ丸（長さ三〇間、横約二〇間）のことで、今林山となる、古墓が多いが由来等不詳、北を正面とした城と記す。『英田郡史考』には河会村大字中川の「古城 高鉢山」とある。

『武家聞伝記』、「作州記」、「東作誌」、「美作鏡」、「美作古城記」、「美作古城跡」、「英田郡史考」、「岡山県通史」、「美作古城史」、「日本城郭大系」609、『改訂岡山県遺跡地図』英田47、『岡山の山城を歩く』86

153 下山城・井ノ内城

所在地 美作市下山

美作市指定史跡

立地

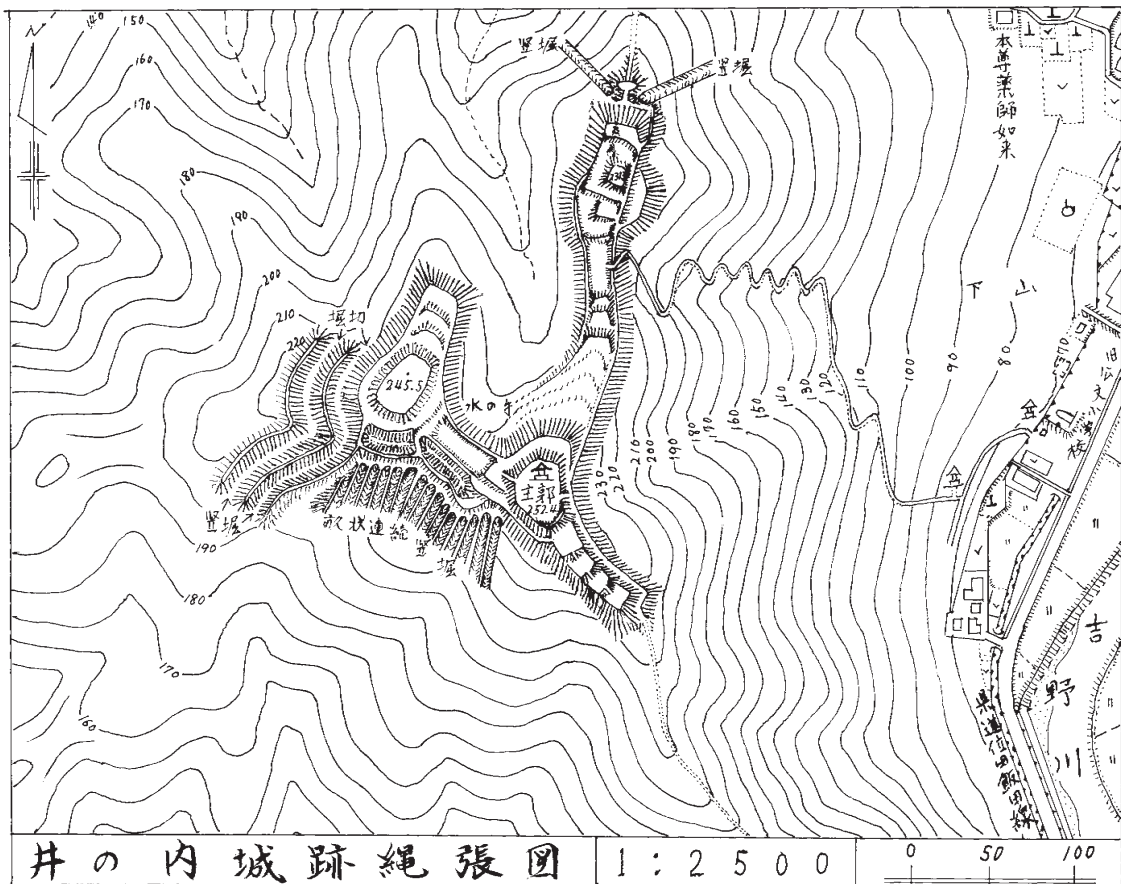
吉野川右岸にあり、県道三六二号線が下山地区と鳥淵地区を通る地点の西側にある。標高約二五二mの大仙山の山頂付近に所在する。国道三七四号線、安蘇地区の美作職業訓練校から下山簡易郵便局方面にある、下山コミュニティセンターの先五mに「井の内城」の標柱がある。

縄張

縄張りをみると主郭を含む三つのピークを占める曲輪群から構成された広い城域を持つ。南西側には尾根筋を遮断する堀切が配された。この堀切に続くかたちで



下山城・井ノ内城



城史

南側斜面に横堀と畝状空堀群を組み合わせた防塁型ラインが構えられた。複数の曲輪群を一体的に防禦しようとする目的で防塁型ラインなどが積極的に用いられたことから、複数の在番衆を統率する有力国衆の築城が考えられる。

正保書上五四城の一で、「古城之覚」は勝田南郡下山村の「下山之(城)」、別に英田郡下知村の「下山之(城)」として、いずれも城主未詳とある。「美作鏡」は「井ノ内城」で城主を下山筑後守とする。「東作誌」は勝南郡下山村の古城として、井の内の地にあり、本丸(三〇間四方、石築あり)、二丸(一五間四方)、西に二箇所の堀切(幅三間、深さ二間、長さ一一間)、南向きの城で今に石壁の遺跡あり、城主は下山筑後守信氏と記す。天保国絵図に「古城跡」とある。「美作古城記」は「井の内城」とし、『岡山県勝田郡志』は嘉吉元年(一四四一)山名持豊に従った北条氏吉が公文荘を与えられ当城を築城、子孫の清氏は天文一三年(一五四四)に後藤氏の攻撃を受け逃走、のち下山村に土着したとする。『美作古城史』は俗に大仙山と呼ぶとする。

文献

「武家聞伝記」、「美作鬢鏡」、「作州記」、「東作誌」、「美作鏡」、「美作古城記」、「美作古城跡」、「美作略史」、「岡山県通史」勝田32、「美作古城史」、「日本城郭大系」578、「改訂岡山県遺跡地図」英田7、「岡山の山城を歩く」70

154 谷口喜右衛門尉屋敷(仮称)

所在地 美作市英田青野

立地 縄張

未詳。

城史

「東作誌」は勝南郡青野村の「谷口喜右衛門尉墓」として、谷口喜右衛門尉は宇喜多家の家臣で公文郷二一村の司といい、屋敷は土居の「一の段」の地にありと記す。

文献

「東作誌」

西粟倉村

155 景清屋敷

所在地 西粟倉村影石

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は吉野郡影石村の「景清屋敷」として、悪七兵衛景清はこの村で生まれたといい、屋敷跡は荒神の森となるとする。

文献

「東作誌」、「英田郡史考」、「美作古城史」

156 船曳屋敷（仮称）

所在地 西粟倉村影石

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「新免家侍帳」とされる文書には、「船曳助十郎 影石関屋」とある。

文献

「東作誌」

157 塔尾城・堂尾城

所在地 西粟倉村影石

立地

吉野川左岸にあり、西粟倉中学校の約1km西の山上にある。標高は約六九一mで、西に吉野川流域、東に引谷川流域を一望する。付近に「寺山」「城ヶ谷」の地名がある。

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、頂上に約一三〇mの平坦部ありとする。

城史

「東作誌」は「堂尾城」一名「塔尾城」として、悪七兵衛景清が居るといふと記す。『英田郡史考』は「作陽誌」に見えるも実地不明とする。『日本城郭全集』は「堂尾城」、別名を「景清城」というとする。

延文五年（正平一五年、一三六〇）八月、山名時氏の因幡・美作両国での布陣に対し、赤松世貞・則祐が攻撃し降参した城のうち「景石・塔尾」がみえる（「太平記」）。

文献

「太平記」、「東作誌」、「美作略史」、「英田郡誌」、「英田郡史考」、「美作古城史」、「日本城郭全集」英田郡10、『日本城郭大系』616、『西粟倉村史』後編、『改訂岡山県遺跡地図』西粟倉18

158 景石城

所在地 西粟倉村長尾

立地

未詳。



塔尾城・堂尾城

縄張

未詳。

城史

『日本城郭全集』は、西粟倉村長尾の「景石城」とする。

延文五年（正平一五年。一三六〇）八月、山名時氏の因幡・美作両国での布陣に対し、赤松世貞・則祐が攻撃し降参した城のうち「景石・塔尾」がみえる（『太平記』）。

文献

『太平記』、『美作略史』、『日本城郭全集』補遺

159 公文所

所在地 西粟倉村長尾

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

『英田郡史考』は「公文所」として、公文所が置かれた所と記す。

文献

『英田郡史考』

160 黒山城・尼城・比丘尼ヶ城

所在地 西粟倉村長尾・美作市東吉田

立地

智頭急行西粟倉駅から約1km西の黒山山頂付近に所在する。西粟倉と東粟倉の境界に該当し、標高は約六六三mである。

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、山頂に平坦部が造成され、城跡の面影をとどめるとする。

城史

『東作誌』は吉野郡長尾村の「黒山城」として、上り一〇町余り段あり、春名新次郎が居し城跡は少し形が残るのみ、また同郡吉

田村の「古城」として、長尾村内の

引谷境にある高山で、米ヶ嶋とい

い、地元民は「尼城」と言い慣わし

ている、郭数不詳、吉田村の谷奥に

あると記す。『英田郡史考』は引谷

の東峰に「尼ヶ城」という城主不明

の城があり、黒山城と同一の城かと

し、別に「比丘尼ヶ城（一名黒山城）」

として、春名新治郎の居城で天文年

間に尼子晴久に攻め落とされたことから比丘尼ヶ城という、城主の

墳墓が引谷にあり「殿様墓」と称していると記す。なお『美作古城

史』は黒山城と別に「長尾城」が「日々谷界」にあり、地元説で尼

城というとして、尼子氏侵入当時の一夜城かとする。

『東作誌』、『英田郡誌』、『英田郡史考』、『美作古城史』、『日本城郭全集』

補遺、『日本城郭大系』594・621、『西粟倉村史』後編、『改訂岡山県

遺跡地図』西粟倉29・東粟倉8

161 佐淵城

所在地 西粟倉村長尾

立地

西粟倉小学校の約二〇〇m西の吉野川右岸にあり、標高約三七〇mの小丘陵上に位置する。西粟倉中心部を一望する。

縄張

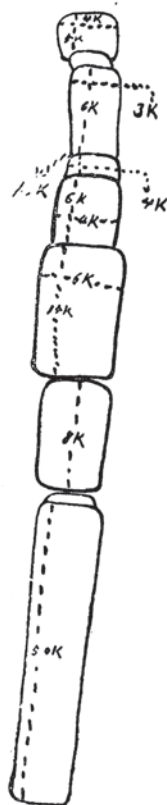
『改訂岡山県遺跡地図』は、川側に張り出した尾根を利用して築かれた山城で、主郭の後方には堀切二条が配され、さらにその外側に

平坦面が続いてのち尾根となる、主郭下方には犬走り巡る、堅堀は認められないとする。



黒山城・尼城・比丘尼ヶ城

佐淵城址畧圖



佐淵城畧圖（『英田郡史考』より）

城史

正保書上五四城の一つ、「古城之覚」は吉野郡長尾村の「佐淵之（城）」として、城主不詳とする。「美作鬢鏡」にはみえない。「東作誌」は山の尾崎、北に段と堀切あり草木が茂る、草刈太郎左衛門重継の弟与次郎あるいは須々木主計が居すと記す。天保国絵図にはそれらしい山の表現があるが古城の表記はない。『日本城郭全集』は「筏津の城」「長尾城」とも呼ばれているとする。須恵器・備前焼・鉄器。



佐淵城

文献

『武家聞伝記』、「美作鬢鏡」、「作州記」、「東作誌」、「美作鏡」、「美作古城記」、「美作古城跡」、「英田郡誌」、「岡山県通史」英田13、『英田郡史考』、『美作古城史』、『日本城郭全集』英田郡7、『日本城郭大系』600、『岡山県埋蔵文化財報告』14、『西粟倉村史』後編、『改訂岡山県遺跡地図』西粟倉23

備考

昭和五八年（一九八三）、地元団体による小型重機での削平を受けた。現在は城郭のほぼ全域が公園となっている。

遺物

須恵器・備前焼・鉄器。

162 船曳屋敷（仮称）

所在地 西粟倉村長尾

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「新免家侍帳」とされる文書には、「船曳弥野 長尾社礼」とある。

文献

「東作誌」

163 清水構・城山

所在地 西粟倉村知社

立地

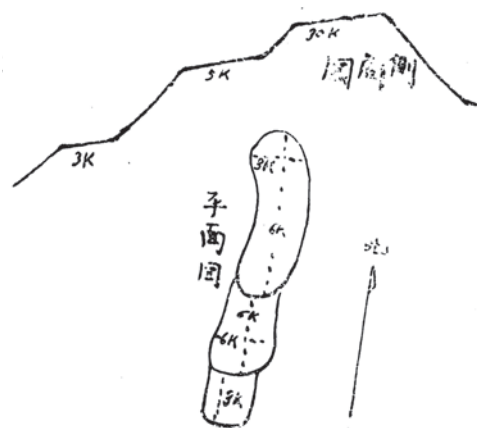
知社地区の集落西側の独立峰上にある。標高約四〇〇mの山頂付近に所在する。

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、平坦面ありとする。

城史

『東作誌』は吉野郡知社村の「城山」として、清水の構といい、康安元年（一一三六一）に山名時氏の家臣小林民部少輔長種が居す、山の高さ三〇〇間、本丸（長さ三〇間、



清水構畧図（『英田郡史考』より）

清水構畧図

遺物

横六間)、二丸(六間四方)、三丸(六間四方)、皿茶碗の破片が多くあると記す。『西粟倉村史』は城址の中腹に「太鼓松」というのがあり、これに太鼓を下げて事ある時に村人に知らせたという伝説があるが、現在は枯死してしまったとする。

文献

「東作誌」、『英田郡史考』、『美作古城史』、『日本城郭大系』603、『西粟倉村史』後編、『改訂岡山県遺跡地図』西粟倉33

164 御馬屋敷

所在地 西粟倉村知社

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は吉野郡知社村の「御馬屋敷」として、「竹ガナル」の地にあり、由来不詳と記す。

文献

「東作誌」

兵庫県佐用郡佐用町

(明治二十九年に吉野郡から兵庫県佐用郡に編入)

165 平井城 (仮称)

所在地 兵庫県佐用郡佐用町上石井

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は上石井村の「古城」として、平井の地にあり、西の山に少々堀切と段があるのみで、平井保昌が居すと伝え、里正の一族は皆その子孫というと記す。

文献

「東作誌」

166 構の段

所在地 兵庫県佐用郡佐用町上石井

立地

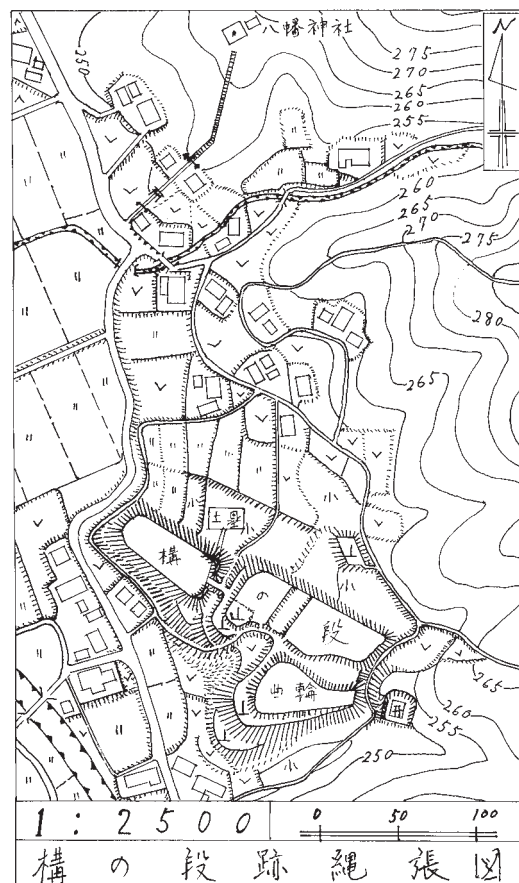
佐用川左岸にあり、上石井集落南方の丘陵上に所在する。標高は約二五〇mである。

縄張

集落に近接した丘陵の上に築かれた館城。方形の区画が三段連なる。北西の方形区画が主郭とみられる。土塁や堀切状の地形がみられるが、後世の改変が激しく遺構の評価は難しい。

城史

「東作誌」は青木村の「構の段」として、台山で高さ約六、七間、上の広さは東西二五間、南北一五間、山続きの尾崎を切り開いており、居主や由来等は不詳と記す。



文献

「東作誌」

167 荒神城 (仮称)

所在地 兵庫県佐用郡佐用町下石井

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は下石井下分の荒神の地に、下石井村上分・下分を領した人物が居たが、時代や名前は不詳、傍らに稲荷の小祠があり、「堀の畑」という地名もあると記す。

文献

「東作誌」

久米郡

〔津山市〕

久米町

〔美咲町〕

中央町

旭町

柵原町

久米南町

〔岡山市〕

御津郡建部町

〔津山市〕久米町

1 城山・仲仙道城山（仮称）

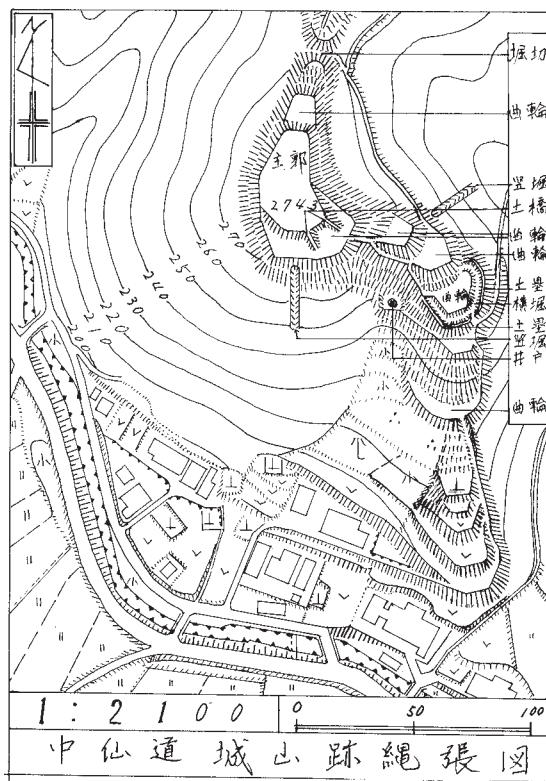
所在地 津山市宮部上

立地

宮部上地区仲仙道集落のすぐ北側にあり、宮部川左岸にあり、集落に向かって南に延伸する尾根の先端に位置し、標高は約二七〇mである。

縄張

集落背後に伸びる尾根筋の先端部を城域とする。上段の主郭部と南東側の橋頭堡的な第二郭から構成される。第二郭の先端の曲輪は周囲に横堀が配され



城山・仲仙道城山（仮称）

城史

るなど技巧的な面がみられる。宮部川流域に拠った有力土豪層の持城と考えられる。

『久米町史』は仮に「仲仙道城山」として宮部上、字仲仙道にあって、土地の人は単に「城山」と呼んでいるとする。

『久米町史』上巻、『岩屋城調査中間報告』、『改訂岡山県遺跡地図』久米2

文献

2 高味籠屋・高味城（仮称）

所在地 津山市宮部上

立地

中の谷山から北に延伸する尾根上にあり、東に田添集落を一望する。標高は約五一二mである。

縄張

未詳。

城史

『久米町史』は仮に「宮部高味」として宮部上、田添の集落の南、群山の中で一番高くそびえてよく目につく峯で標高は五二〇・五mあり、土地の人は「たかはち」と呼んでいると記す。

永禄九年（一五六六）九月、

小田草城（鏡野町馬場）の城主

斎藤実親は太田新九郎に「宮部

高味籠屋」を攻撃した功により

感状を与え所得を与えている

（『美作国諸家感状記』）。

『岩屋城調査中間報告』、『久米

町史』上巻、『改訂岡山県遺跡

地図』久米1

文献



高味籠屋・高味城（仮称）

3 日吉城(仮称)・日吉神社裏山(宮ノ上城)

所在地 津山市宮部

立地

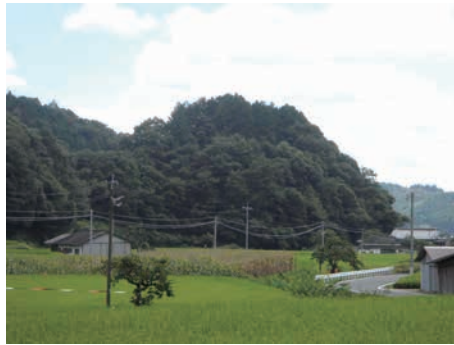
宮部川左岸に位置し、宮部上地区の日吉集落の中心地にある。日吉神社の北側山林部にあり、標高は約二〇〇mである。

縄張

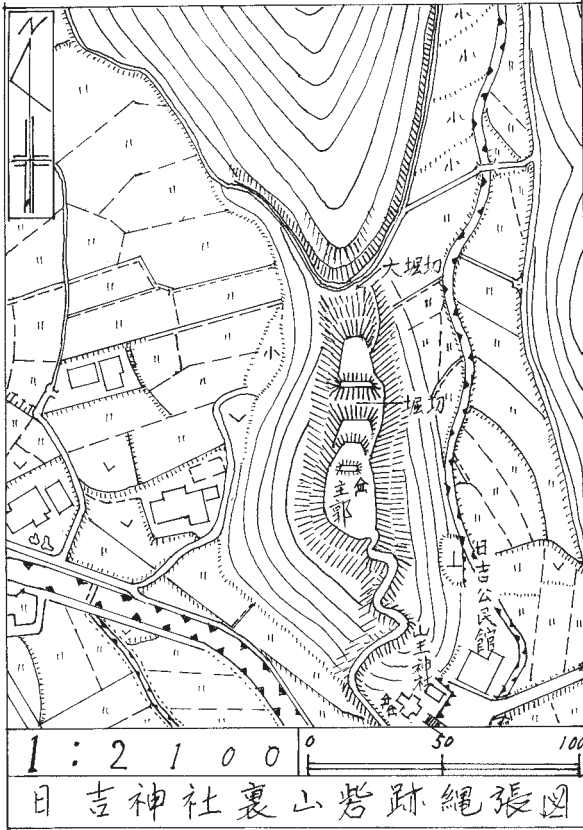
山王神社の背後に位置する。背後を堀切り尾根の先端を城域とする。

城史

『久米町史』は「日吉神社裏山」として宮部上の日吉地区にあり、日吉神社の拝殿の額に、嘉



日吉城(仮称)・日吉神社裏山(宮ノ上城)



日吉神社裏山岩跡縄張図

文献

吉年間、山名教清が岩屋城(津山市中北上)を築くにあたり、部将を派遣して城塞を築かせたの由来が記されていると記す。『改訂岡山県遺跡地図』は「宮ノ上城」とする。

久米 36

4 陣旗

所在地 津山市中北下

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

『久米郡誌』は目崎城(鏡野町下原・津山市領家)麓に平坦地があり、天文二三年(二五四)五月、尼子国久の家臣立原某が目崎城を攻撃し、大旗を翻して城に迫ったことから当地を「陣旗」と言うようになったと記す。また『日本城郭全集』は「陣旗砦」として、一般には「陣地」「立原砦」と呼ぶようになったとする。

文献

『久米郡誌』、『日本城郭全集』補遺

5 宗呂木

所在地 津山市中北下

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

『久米郡誌』は天文一三年（一五四四）五月、尼子国久の家臣立原某が目崎城（鏡野町下原・津山市領家）を攻撃したさい、目崎城兵が城を出て物論議した場所が「陣旗」東南の地にあり、現在は「宗呂木」と書くとする。『日本城郭全集』は「物論議砦」とする。

文献

『久米郡誌』、『日本城郭全集』補遺

6 河本城・構之城・亀山城・城山

所在地 津山市坪井下

立地

坪井郵便局から約三〇〇m北の小丘陵上に位置する。南に中国自動車道が、北に姫新線が通る。標高は約一六〇mである。

縄張

小山の上に築かれた丘城。現在主郭部は城山稲荷宮の社地となっている。小山の周囲を堀切・横堀を回して防禦を固める。基本的には単郭構造の縄張りであり、この地域の土豪層による築城と考えられる。

城史

元禄二年（一六八九）の書上（『美作古城史』所収）には、「坪井下村町ノ後の「古城主河本肥後殿」があり、浅山与市を「御城下屋敷」に呼び討取ったとある。「作陽誌」は、「河本堡」として、久米郡北分坪井下村にあり、山の高さ一〇〇丈余り、天文（一五三二～五五）の頃、河本肥後守が居城し、かつて浅山与市が城を攻めたが敗死しとし、また苦西郡の福岡山福泉寺（鏡野町河本）は肥後守の菩提道場とする。「美作鏡」は「河本城」とする。他に与市を岩屋城下住人、宇喜多直家の郷代官とし、城を「かまへの城」「構之城」とする記録もある。「甲

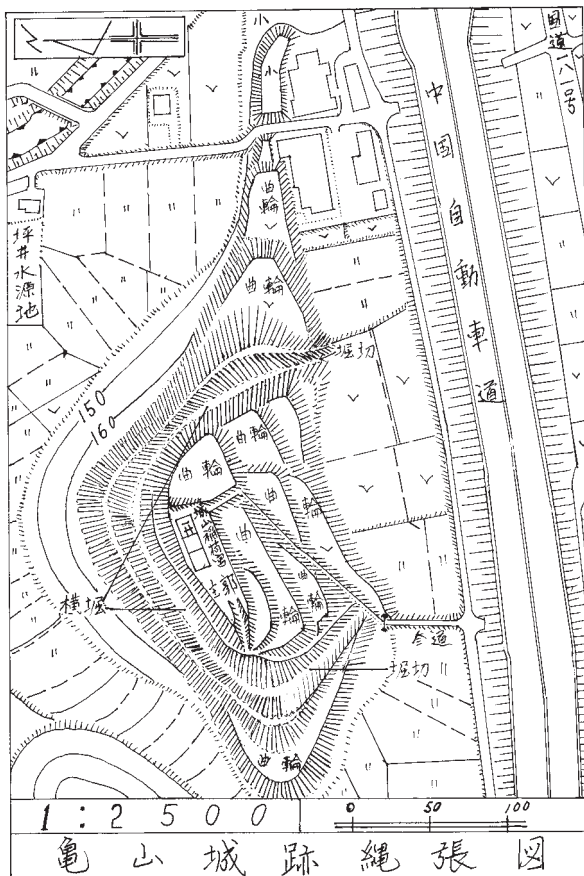


河本城・構之城・亀山城・城山

文献

元家譜（『美作古城史』所収）は、天正七年（一五七九）三月に宇喜多直家によって落城、肥後守は神代村（津山市神代）で敗死したとする。『久米郡誌』は「河本城」、または山之の姿が亀に似ていることから亀山城として、東西二町、南北一町、今は畑となり、城跡の側に稲荷の小祠ありとする。『日本城郭全集』は、頂上を本丸とし、二の丸、三の丸と三段で、本丸に小祠あり、城の背後を下った所に城の井戸があり、三方は谷、一方の峰続きは深い堀切を遺すとする。『出雲街道』は、河本城は地元では城山と呼ばれ、南麓には「構屋敷」の地名を残す場所があるとする。

『作陽誌』、『美作鏡』、『久米郡誌』、『大井西村誌』、『美作古城史』、『日本城郭全集』久米郡7、『日本城郭大系』792、『久米町史』上巻、『出雲街道』第三巻、『改訂岡山県遺跡地図』久米28、



7 長者屋敷

所在地 津山市坪井下

立地

未詳。

未詳。

城史

『大井西村誌』に「長者屋敷」として、河本城の北方、薬師堂の東南にあり、居住者不明だが大正末期に古銭を二三貫余を発掘したと記す。

文献

『大井西村誌』

8 寺城

所在地 津山市坪井下

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

『大井西村誌』に、岩屋城攻撃の陣地で、幻住寺から寺城に至る三三坊を陣に収容した地というと記す。

文献

『大井西村誌』

9 加治子山・寄合場

所在地 津山市坪井上

立地

福本川上流の左岸にあり、標高約四九一mの山頂付近に所在する。北の岩屋城に対面する位置にある。

縄張

未詳。

城史

「作陽誌」は「寄合場」として、久米郡北分坪井上村にあり、かつて備前の兵が岩屋城を攻めるにあたり同地に集まり評議したことに因むとする。

『久米郡誌』は「加治子山古戦場」として、坪井上の西南端に位置し高さ一四四〇尺、面積三反歩、周囲は

山林で昔の面影はない、天正九年（一五八一）六月二五日、毛利氏が岩屋城（津山市中北上）を攻めた際、山の頂上や付近に藁人形を並べたと伝えると記す。『久米町史』は「加治子山」を「寄合場」というとし、中村頼宗の本陣となったのち、宇喜多氏の岩屋城攻撃にあたっては部将達をこの山に集め城攻めを評議したので「寄合場」と呼ばれるようになったというと記す。『旭町史』は加治子山のすぐ左の三叉路が「寄合場」とする。『日本城郭全集』は「加治子山城」とする。

『久米郡誌』、『大井西村誌』、『日本城郭全集』久米郡4、『日本城郭大系』789、『岩屋城調査中間報告』、『久米町史』上巻、『旭町史』通史編、『改訂岡山県遺跡地図』久米31

文献



加治子山・寄合場

10

姿山すがた（仮称やま）

所在地 津山市坪井上

立地

喬松小学校の約四〇〇m西にあり、すぐ北に中国自動車道が通る。久米川右岸の標高約二〇〇mの小丘陵上にある。

縄張

丘陵上に単郭の曲輪が複数並ぶ縄張りとなっている。城域の北側は中国自動車道により破壊されている。現在、土塁囲みの単郭が三つ確認される。

城史

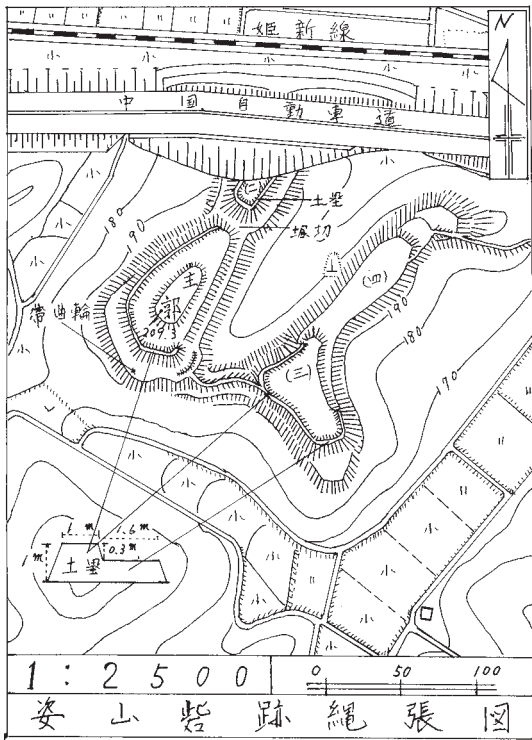
『久米町史』は大字坪井上、姿の地の小山を仮に「姿山」として、岩屋城（津山市中北上）攻めの際の赤松氏の本陣跡と記す。

文献

『久米町史』上巻、『改訂岡山県遺跡地図』久米26



姿山（仮称）



姿山砦跡縄張図

11

茶臼山ちやうす（仮称やま）

所在地 津山市坪井上

立地

喬松小学校の北、立野川を隔てた丘陵の突端に所在する。標高は約一九〇mである。北に中国自動車道がある。

縄張

主郭と周囲に帯郭を構えた単郭構造の縄張りである。

城史

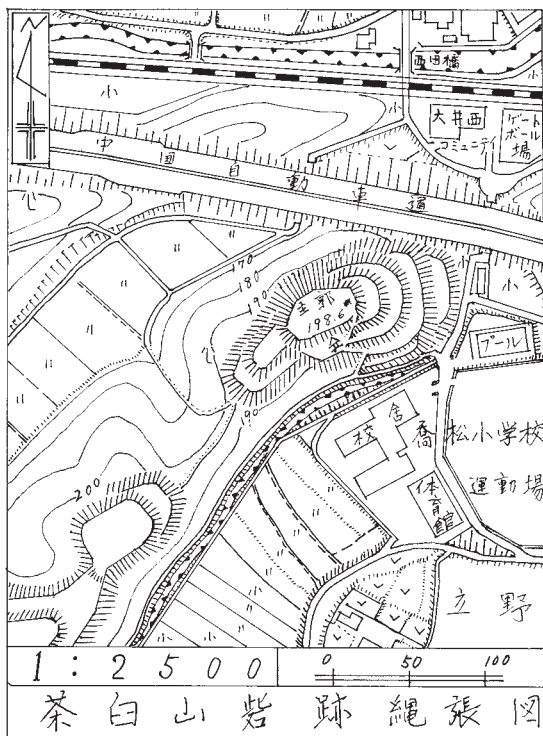
『久米郡誌』に「茶臼山古戦場」として、立野の地にあり、昔の城跡と伝え、坪井上の東端に位置し、周囲は樹木なく面積二反歩、永正十七年（一五二〇）一〇月に浦上村宗が本陣を構え小寺勢を討ったところとする。

文献

『美作略史』、『久米郡誌』、『大井西村誌』、『日本城郭全集』補遺、『岩屋城調査中間報告』



茶臼山



茶臼山砦跡縄張図

12 長者屋敷

所在地 津山市中北下

立地

縄張

未詳。

城史

『大井西村誌』に「長者屋敷」として、山根地区の鉄道に沿う畑で古井が残る、天文（一五三三〜五五）の頃に貞清四郎左衛門が住んだ屋敷跡と記す。

文献

『大井西村誌』

13 いそう城・磯尾城・敵見要害

所在地 津山市中北上

立地

後坪井集落で中国自動車道が姫新線と交差する地点のすぐ北西に位置する。標高約二〇〇mの小丘陵上にある。

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、六三×二七mの楕円形の平坦面があり、その南側に五つの郭面と推定される平坦面をもつとする。

城史

『作陽誌』は「以曾宇宮」として、久米郡北分中北上村に城跡あり、俗に「敵見要害」というと記す。『久米郡誌』は、坪井下尻の国道より一丁北、磯尾の山中にある城跡とする。『久米町史』は「磯尾宮」として、北の山地から伸びる片山という山の頂上から南の斜面にかけて構築され、南に近く川を隔てて出雲街道が通っているとす。

文献

『作陽誌』、『久米郡誌』、『大井西村誌』、『日本城郭全集』補遺、『岩屋城調査中間報告』、『日本城郭大系』71、『久米町史』上巻、『改訂岡山県遺跡地図』久米30

14 岩屋城

所在地 津山市中北上

岡山県指定史跡

立地

岩屋川と明谷川に東西を挟まれた標高約四八二mの岩屋山山頂を中心に所在する。久米川流域を一望する。国道一八一号線、中北上地区の岩屋谷口バス停を右折して進むと、「岩屋城登山口」の標柱や説明版が左手にある。

縄張

岩屋城は戦国期に毛利氏の拠点城郭となり激しい攻防戦が繰り広げられた山城である。中国国分げに際しては、高山城主草薙氏と並んで城主の中村氏が羽柴・宇喜多勢に激しく抵抗した。そのため、岩屋城の周囲に陣城が築かれるなど厳しい包囲戦を受けたことでも有名である。

岩屋城の縄張りをみると、山頂の主郭部は全体的に大きな曲輪で構成される一方で、土塁や横堀・畝状空堀群による外郭ラインや虎口プランの使用はみられない。要所に堀切を配することで幾つかの区域に分節されている。ただ、各区画が防禦と出撃に関して相互に連携するプランとはなっておらず、最も広い主郭部を中心に、地形に沿って複数の軍団



岩屋城

城史

が持ち場を受け持つ縄張りとなっている。一方、城域の北東側には、巨大な堀切と「てのくぼり」と呼ばれる巨大な畝状空堀群を組み合わせた防禦ラインが確認される。この部分にのみ突出して築かれており、堅堀もかなり大きなものとなっている点が目される。北側の尾根筋と北東側斜面に対して並々ならぬ防禦の意識を持って普請したものと考えられる。おそらく最終段階の羽柴・宇喜多勢による包囲への対処策として築かれたのではないだろうか。

正保書上五四城の一で、「古城之覚」は久米北郡坪井中北村の「岩屋山之城」とする。「作陽誌」は「岩屋城」として、中北上村にあり、麓から頂きに至る八町余りと記す。「美作鬢鏡」は「岩屋城」として城主不詳、「美作鏡」は城主を「大河原大和守」「天正九、浜口淡路守家職」とする。天保国絵図に「岩谷古城跡」とある。『日本城郭全集』は本丸のあった頂上をはじめ、すぐ下の二の丸、三の丸の跡にも雑木や熊笹が茂り、頂上から五、六m南側下に古井戸があり、土地の人は「城のいのち水」と伝えるとする。

嘉吉元年（一四四一）、山名教清が美作国に封ぜられた際に初めて築城され、応仁年中（一四六七〜九）に山名勢を逐った赤松政則が、後藤・大河原・小瀬・中村氏らを「国留守」として岩屋城に置いたという（「作陽誌」）。永正一七年（一五二〇）三月、備前国の浦上村宗が岩屋城にあった小寺・大河原氏を破り中村則久に守らせたと、七月には播磨国の赤松義村は則久を討つべく小寺藤三・大河原弾正を美作国に送り、対して則久は館から退き岩屋城へ籠城、一〇月には浦上村宗は中村氏の後詰のため美作国に入り「岩山」の南に布陣、将の宇喜多能家の勝利により攻城側の敵軍は潰滅、因幡・伯耆国に敗走し、村宗は小寺加賀守をはじめ数百人を斬首し三石に帰陣したとある（「大山寺文書」、「古代取集記録」、「宇喜多能家寿像画賛」、「作陽誌」）。天文九年（一五四〇）十一月三日には

「岩屋山下」で合戦があり、三浦次郎が南条治部らを討ち取っている（石見牧文書）。その後岩屋城に直接関わる史料は途絶えるものの、高田城（真庭市勝山）の城主三浦貞久の弟貞尚が岩屋城主となったといい、同時代史料にも尼子氏縁戚の大河原貞尚として現れることから、貞尚は尼子方として天文末年以降しばらく当城にあったと考えられる。

ところが美作国からの出雲尼子氏の勢力退潮によって、当城の城主も大河原氏から中村氏に変わったようである。さらに永禄五年（一五六二）以降、備前国から浦上宗景の侵攻を招くこととなった。美作国内の主体勢力は毛利氏を頼り一度は浦上勢を同国東部へと押し戻したが、同八年に再び宗景の侵攻を受け、浦上勢は院庄を経て次第に国の西部へと及び、国内勢は岩屋城で抵抗するに至った。そして同九年頃から岩屋衆は西進して神上城（真庭市樫東）、さらに同一〇年七月には篠向城（同市三崎・大庭）麓に出勢、「神森」で高田三浦氏の家臣中山三郎兵衛や牧左馬助、岩佐勘解由らと交戦している（「牧左馬助覚書」、「美作国諸家感状記」、「作陽誌」）。しかし城主の中村則治は宇喜多直家の調略で家臣の「芦田備後介秀家」らに殺害され、秀家は直家のもとに出奔したという（「作陽誌」）。この年とみられる十一月、浦上宗景の家老岡本氏秀は、岩屋城の降参について「然るべし」と報じている（美作総社文書）。その後「大河原大和守」なる人物が城主となったが、同一一年三月一日に「またもや家臣の「芦田備後守」に殺害された」とい、備後守は毛利氏から岩屋城を預かりその城主となったとされる（「岩屋古城覚」、「少林寺過去帳」など）。まもなく秀家は、直家の家老富川秀安らによりその凶悪を憎まれ誅殺されたとい、元亀二年（一五七二）以降、芦田秀家の跡職は芦田正家という人物が継いだ。しかし天正二年（一五七四）三月、おそらく宇喜多氏と浦上氏の対立を背景に、

岩屋城は宇喜多方の荒神山城（津山市種）の城主花房職秀と稲荷山城（美咲町原田・西幸）の城主原田貞佐の攻撃を受け一日で落城、芦田氏の一族も攻め崩されたという（「美作国諸家感状記」、「武家聞伝記」、「岩屋古城覚」など）。

芦田氏の跡には直家の叔母智という「浜口淡路守」「家職」が城主となったという。同七年の宇喜多氏と毛利氏の対立にあたっては直家の家老長船貞親が籠められ防戦したものの、同九年六月、岩屋城を囲んだ葛下城（鏡野町山城・中谷）の城主中村頼宗が、西浦城（同町養野）の城主大原主計に二四、五から四〇歳までの侍三二人を添え、同月二五日、風雨に乗じて夜討ちし岩屋城を落城させ家職は逃走、毛利輝元は中村頼宗に在城を命じたという（「閩閩録」、「藩中諸家古文書纂」美作立石家文書、木村文書、「武家聞伝記」、「美作国諸家感状記」、美作宮川家文書、「東作誌」、「拾遺感状録」、「山田家古文書」、「吉川家中并寺社文書」、「岩屋古城覚」、「作陽誌」）。そして同十二年正月、安国寺恵瓊は児玉元良らに対し、「高田・岩屋・宮山・高仙」の城へ国元からも退去を言い聞かせるように要請している（毛利家文書）。しかし頼宗は退去を拒否したらしく、同年三月から宇喜多勢による攻城が始められた。四月二日には「石蔵尾首」で双方が交戦、五月一九日には籠城勢が「岩屋城尾首」の「江原陣」を攻撃している（美作立石家文書、美作宮川家文書、「美作国諸家感状記」）。この時であるうか、中島本政は江原兵庫助の陣所において、先駆けて討死した瀬島宗四郎の首取りを防ぎ、岩屋城兵の伏兵を突き崩したという（「中島本政覚書」）。六月一〇日にも籠城勢が石蔵尾首へと出勢している（「美作感状記」）。また「岡豊前・長舟越中」らが大勢、城の「壁際」まで取り詰めた時、牧左馬助は城内から立ち向かってきた坂手勘之丞を討ち取り、褒美として感状を宇喜多秀家から与えられたという（「牧左馬助覚書」）。その後、備

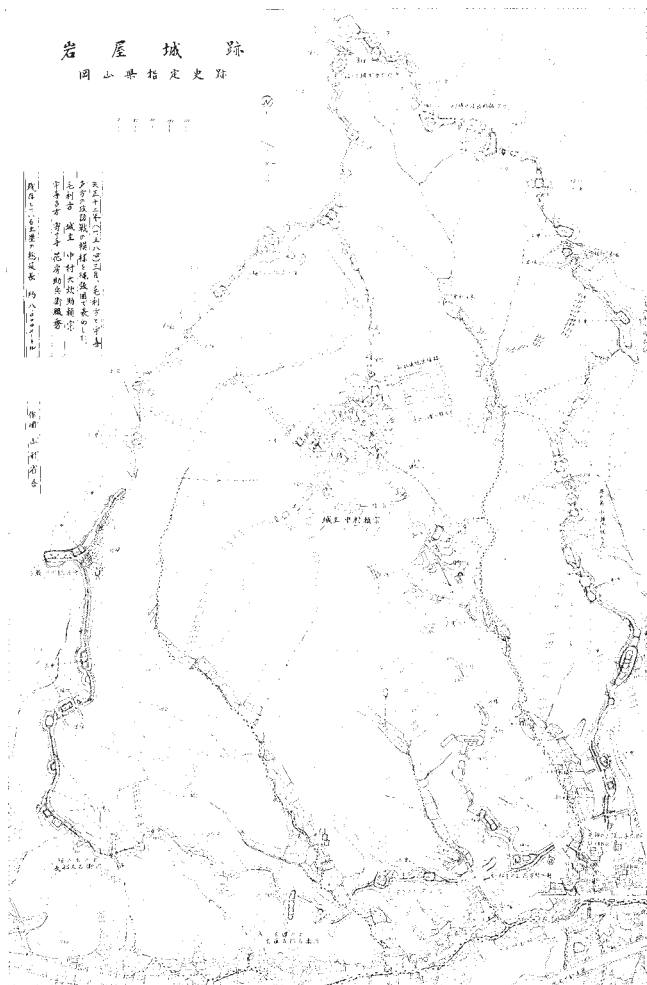
遺物

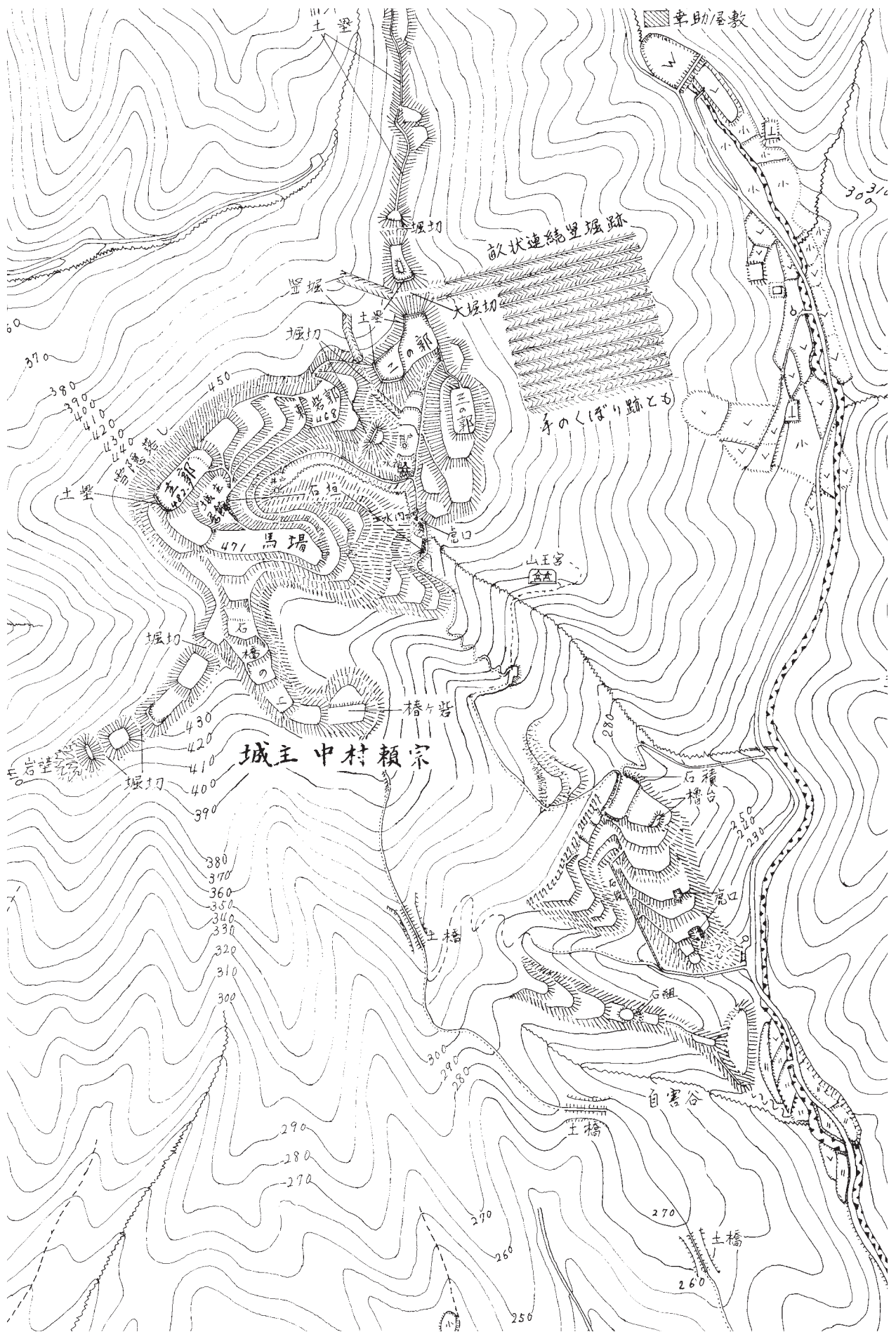
後国の鞆（広島県尾道市）にあった足利義昭の仲裁により七月一日に開城となり、城には宇喜多方の長船貞親が入った。貞親は配下の侍一八人に所領を配分したが、同一八年八月三日、城は廢城となり、焼き尽くされたという（「岩屋古城覚」など）。

須惠器・備前焼・瓦等

文献

「武家聞伝記」、「作陽誌」、「美作鬢鏡」、「備前軍記」、「天正年中美作国古城合戦記」、「美作鏡」、「美作略史」、「久米郡誌」、「岡山県通史」久米2、「大井西村誌」、「美作古城史」、「岡山の城と城址」、「日本城郭全集」久米郡2、「岩屋城調査中間報告」、「日本城郭大系」774、「久米町史」上巻、「岡山県史」編年史料、「歴史散歩岡山の城」、「改訂岡山県遺跡地図」久米7、「岡山の山城を歩く」65、池田二〇〇五、山形二〇〇七、「津山市の文化財」





15 赤木屋敷

所在地 津山市中北上

立地

未詳。

城史

延宝七年（一六七九）の「岩屋古城覚」（『美作古城史』所収）に、岩屋城下の家中屋敷としてみる。

文献

『美作古城史』、『久米町史』上巻

16 河本屋敷

所在地 津山市中北上

立地

岩屋城南麓、中北上地区岩谷集落の東側尾根上に位置する。

縄張

未詳。

城史

延宝七年（一六七九）の「岩屋古城覚」（『美作古城史』所収）に、岩屋城下の

家中屋敷としてみる。

文献

『美作古城史』、『久米町史』上巻



河本屋敷

17 大蔵又兵衛屋敷

所在地 津山市中北上

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

延宝七年（一六七九）の「岩屋古城覚」（『美作古城史』所収）に、岩屋城下の家中屋敷としてみる。

文献

『美作古城史』、『久米町史』上巻

18 怒本新右衛門屋敷

所在地 津山市中北上

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

延宝七年（一六七九）の「岩屋古城覚」（『美作古城史』所収）に、岩屋城下の家中屋敷としてみる。

文献

『美作古城史』、『久米町史』上巻

19 安田屋敷

所在地 津山市中北上

立地

岩屋城南麓、中北上地区岩谷集落内に位置する。

縄張

未詳。

城史

延宝七年（一六七九）の「岩屋古城覚」（『美作古城史』所収）に、岩屋城下の家中屋敷としてみる。『久米町史』は「保田屋敷」として、

この屋敷にあたるかとする。

文献

『美作古城史』、『岩屋城調査中間報告』、『久米町史』上巻

20 市三郎兵衛屋敷

所在地 津山市中北上

立地
縄張

未詳。

城史

延宝七年（一六七九）の「岩屋古城覚」（『美作古城史』所収）に、岩屋城下の家中屋敷としてみる。

文献

『美作古城史』、『久米町史』上巻

21 植木藤左衛門屋敷

所在地 津山市中北上

立地
縄張

未詳。

城史

延宝七年（一六七九）の「岩屋古城覚」（『美作古城史』所収）に、岩屋城下の家中屋敷としてみる。

文献

『美作古城史』、『久米町史』上巻

22 清水伊勢屋敷

所在地 津山市中北上

立地
縄張

未詳。

城史

延宝七年（一六七九）の「岩屋古城覚」（『美作古城史』所収）に、岩屋城下の家中屋敷としてみる。『久米町史』は岩屋城南麓の岩屋谷に「清水屋敷」がありとし、伝えられる清水伊勢または清水勘右衛門いずれかの屋敷かとする。

文献

「作陽誌」、『美作古城史』、『岩屋城調査中間報告』、『久米町史』上巻

23 長船越中屋敷

所在地 津山市中北上

立地
縄張

未詳。

城史

延宝七年（一六七九）の「岩屋古城覚」（『美作古城史』所収）に、岩屋城下の家中屋敷としてみる。

文献

『美作古城史』、『久米町史』上巻

24 新田屋敷

立地
縄張

未詳。

城史

延宝七年（一六七九）の「岩屋古城覚」（『美作古城史』所収）に、岩屋城下の家中屋敷としてみる。『久米町史』は岩屋城南麓の岩屋谷に「仁反田屋敷」がありとする。あるいは「新田屋敷」の訛伝か。『美作古城史』、『岩屋城調査中間報告』、『久米町史』上巻

文献

25 清水勘右衛門屋敷

所在地 津山市中北上

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

延宝七年（一六七九）の「岩屋古城覚」（『美作古城史』所収）に、岩屋城下の家中屋敷としてみる。『久米町史』は岩屋城南麓の岩屋谷に「清水屋敷」がありとし、伝えられる清水伊勢または清水勘右衛門いずれかの屋敷かとする。

文献

『美作古城史』、『岩屋城調査中間報告』、『久米町史』上巻

26 原田屋敷

所在地 津山市中北上

立地

岩屋城南麓、中北上地区岩谷集落の北西谷間に位置する。

縄張

未詳。

城史

延宝七年（一六七九）の「岩屋古城覚」（『美作古城史』所収）に、岩屋城下の家中屋敷としてみる。

文献

『美作古城史』、『岩屋城調査中間報告』、『久米町史』上巻

27 西尾屋敷

所在地 津山市中北上

立地

岩屋城南麓、中北上地区岩谷集落の旧出雲街道沿いに位置する。

縄張

未詳。

城史

『大井西村誌』に「西尾屋敷」として、西尾与九郎の屋敷跡で、今の西尾氏宅東方、現に五尺廻りの老樹が一株残ると記す。『久米町史』は出雲街道筋の岩屋集落に伝承地があるとする。

文献

『大井西村誌』、『久米町史』上巻



西尾屋敷

28 石蕨城

所在地 津山市中北上

立地

津山市と真庭市の境界に位置し、明谷川右岸の山上に所在する。標高は約三九〇mであり、東に岩屋城がある。

縄張

尾根筋にコの字状の土塁囲みを持つ曲輪とテラス状の平坦地を持つ主要部、その南西側にのびる平坦地から構成される。平坦地の西側先端部にはし字状の土塁があり虎口とみられる。

城史

延宝七年（一六七九）の「岩屋古城覚」（『美作古城史』所収）に、天正一二年（一五八四）の宇喜多勢による岩屋城の寄城として「戸川肥後守 石蕨」がみえ、「作陽誌」も「石蕨、一名贛城、戸川肥後」と記す。

天正一二年（一五八四）四月、岩屋城主の中村頼宗は「石蕨尾首」

での射伏せた立石右兵衛と、江原衆を討ち取った西尾左兵衛に、

また六月にも「岩尾蕨尾首」で敵中に紛れ鉄炮で射伏せた武本源

兵衛に感状を与えている（『美作感状記』、美作立石家文書）。

文献

「作陽誌」、『美作略史』、『美作古城史』、『岩屋城調査中間報告』、『久米町史』上巻、『改訂岡山県遺跡地図』久米8、池田二〇〇五、高田二〇〇五、山形二〇〇七、

29 井ノ奥城

所在地 津山市中北上

立地 岩屋川左岸にあり、高見山から北に延伸する尾根上に所在する。標高は約四六〇mであり、西に岩屋城がある。

縄張 『改訂岡山県遺跡地図』は平坦面が残存とする。

城史 延宝七年（一六七九）の「岩屋古城覚」（『美作古城史』所収）に、天正一二年（一五八四）の宇喜多勢による岩屋城の寄城として「小瀬修理大夫 井ノ奥」がみえ、「作陽誌」も「井奥、小瀬修理」と記す。

文献 「作陽誌」、『美作略史』、『美作古城史』、『岩屋城調査中間報告』、『久米町史』上巻、『改訂岡山県遺跡地図』久米6、山形二〇〇七

30 往還ノ上城

所在地 津山市中北上

立地 明谷川右岸にあり、久米川左岸にもあたる。原集落のすぐ北側の丘陵上にあり、標高は約二三〇mである。

縄張 羽柴・宇喜多勢による岩屋城包囲網の一角。削平による平坦面と堀切が確認される。平坦面から尾根を土塁状に加工した長城ラインが部分的にみられる。

城史 延宝七年（一六七九）の「岩屋古城覚」（『美作古城史』所収）に、天正一二年（一五八四）の宇喜多勢による岩屋城の寄城として「斎



往還ノ上城

文献

藤五郎左衛門 往還ノ上」がみえ、「作陽誌」も「往還上、斎藤五郎右衛門」と記す。

「作陽誌」、『美作略史』、『美作古城史』、『岩屋城調査中間報告』、『久米町史』上巻、『改訂岡山県遺跡地図』久米10・11、池田二〇〇五、高田二〇〇五、山形二〇〇七

31 楽万ノ上城

所在地 津山市中北上

立地

明谷川左岸にあり、楽万集落の約四〇〇m北の尾根上に位置する。標高は約二三〇mで、北に岩屋城がある。

縄張 羽柴・宇喜多勢による岩屋城包囲網の一角。東西に土塁と横堀による長城ラインが伸びる。西側に土塁と横堀で囲んだ主要部が配された。南東隅に折れの伴う櫓形虎口が確認される。長城ラインの東側にも方形の土塁囲みの堡壘が配された。土塁を利用して嘴状の虎口を持つ。羽柴氏など織豊系縄張り技術の特徴を随所に見せる。

城史 延宝七年（一六七九）の「岩屋古城覚」（『美作古城史』所収）に、天正一二年（一五八四）の宇喜多勢による岩屋城の寄城として「岡平内 楽万ノ上」がみえ、「作陽誌」も「楽万上、岡平内」と記す。

文献

「作陽誌」、『美作略史』、『美作古城史』、『岩屋城調査中間報告』、『久米町史』上巻、『改訂岡山県遺跡地図』久米12、池田二〇〇五、高田二〇〇五、山形二〇〇七、『戦国山城を攻略する』



楽万ノ上城

32 妙福寺ノ上城

所在地 津山市中北上

立地

妙福寺の約二〇〇m北西の尾根突端に所在する。岩屋川の右岸であり、標高は約二四〇mである。北側に岩屋城がある。

縄張

羽柴・宇喜多勢による岩屋城包囲網の一角。北側と南側に人為的な平坦地が確認される。南側の主要部は土塁囲みで南東隅に虎口を持つ。東側に平坦地があるが後世の改変を受けている。南東側に土塁と横堀による長城ラインがみられる。一方、北側の尾根には平坦地の先端に土塁による細長い通路があり、その先端に虎口が確認される。実戦に則した生々しい防禦遺構を残す陣城の好例となっている。

城史

延宝七年（一六七九）の「岩屋古城覚」（『美作古城史』所収）に、天正一二年（一五八四）の宇喜多勢による岩屋城の寄城として「花房助兵衛城有之妙福寺ノ上」がみえ、「作陽誌」も「岩屋寺上、花房助兵衛」と記す。

文献

「作陽誌」、『美作古城史』、『岩屋城調査中間報告』、『久米町史』上巻、『改訂岡山県遺跡地図』久米13、池田二〇〇五、高田二〇〇五、山形二〇〇七



妙福寺ノ上城

33 荒神ノ上城

所在地 津山市中北上

立地

妙福寺の約一五〇m北東の尾根突端に所在する。岩屋川の左岸であり、標高は約二四〇mである。北西に岩屋城がある。

縄張

天正一二年（一五八四）の岩屋城包囲戦において豊臣（羽柴）・宇喜多勢ら織豊系勢力により築かれた陣城の一つ。稜線に沿って土塁と空堀による包囲ラインを長城のように築き、ライン上に方形の曲輪を持つ陣所が三箇所設定される。陣所は墨線を土塁で固めた主郭の周囲に横堀を配して、一角に虎口を設けたプランとなっている。在地系城郭と比べると、臨時性の高い陣所であっても虎口を明確に設定する織豊系勢力の意識の違いをみることができる。この内、北側の陣所をみると、四方を横堀で囲まれた中で横堀の遮断効果を殺ぐことなく出入り口が弱点にならないように虎口プランが設定されたことが見て取れる。主郭から張出した出入り口が緩衝帯（虎口空間）を形づくる。その緩衝帯を介して横堀を土橋で跨いで外へ出るという虎口プランを創出した。緩衝帯を設けることで主郭に直達されず横堀の遮断効果を最低限殺ぐことなく虎口の設定が可能となっている。

城史

荒神上陣城は、度重なる戦場の中で織豊系城郭が技術的に進化する過渡期の様相を残すと共に、旧美作地域で最初に織豊系縄張り技術が導入された貴重な事例と評価される。

文献

延宝七年（一六七九）の「岩屋古城覚」（『美作古城史』所収）に、天正一二年（一五八四）の宇喜多勢による岩屋城の寄城として「浦上与九郎 荒神ノ上」がみえ、「作陽誌」も「荒神上、浦上与九郎」と記す。「作陽誌」、『美作略史』、『美作古城史』、『岩屋城調査中間報告』、『久米町史』上巻、『改訂岡山県遺跡地図』久米14、山形二〇〇七、『戦国山城を攻略する』



荒神ノ上城

34 与右衛門ノ上城

所在地 津山市中北上

立地

久米川左岸にあり、岩谷集落のすぐ北側の尾根上に所在する。標高は約二一〇mで、すぐ西には荒神ノ上城がある。

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、一辺二〇m四方の平坦面を形成、その北側では幅一・五m程の堀切状の溝が丘陵を切断とし、周辺での郭面等は未確認のため、砦等の小規模な施設の可能性を指摘する。また隣接して「一備谷城」を示し、荒神の上砦跡と一連のものかとする。

城史

延宝七年（一六七九）の「岩屋古城覚」（『美作古城史』所収）に、天正一二年（一五八四）の宇喜多勢による岩屋城の寄城として荒神ノ上城の下にある「杉原木工 与右衛門ノ上」がみえ、「作陽誌」も「荒神上、杉原木工」と記す。

文献

『作陽誌』、『美作古城史』、『改訂岡山県遺跡地図』久米14・15、『戦国山城を攻略する』

35 遣手場城

所在地 津山市中北上

立地

岩屋山から北に延伸する尾根上にあり、岩屋川の最上流に位置する。標高は約四五〇mで、南に岩屋城がある。

縄張

尾根に沿って北側に主郭部を構える。南側に堀切を介してコの字状の土塁囲みがみられる。羽柴・宇喜多勢による岩屋城包囲網の一角を占め、岩屋城から北に伸びる尾根筋を抑える位置にある。

城史

延宝七年（一六七九）の「岩屋古城覚」（『美作古城史』所収）に、天正一二年（一五八四）の宇喜多勢による岩屋城の寄城として「杉原下野守 はつて場」がみえ、「作陽誌」も「遣手場、杉原下野」と記す。

文献

『作陽誌』、『美作略史』、『美作古城史』、『岩屋城調査中間報告』、『久米町史』上巻、『改訂岡山県遺跡地図』久米3、池田二〇〇五、高田二〇〇五、山形二〇〇七

36 梅ヶ峠城

所在地 津山市中北上

立地

岩屋山から北にあたる中の谷山の山頂付近に所在し、標高は約四八〇mである。

縄張

山頂に三角状の曲輪を持つ。東側の隅部に虎口を持つ。周囲には平坦面がみられる。羽柴・宇喜多勢による岩屋城包囲網の一角を占める陣城である。

城史

延宝七年（一六七九）の「岩屋古城覚」（『美作古城史』所収）に、天正一二年（一五八四）の宇喜多勢による岩屋城の寄城として「江原兵庫助 梅ヶ峠」がみえ、「作陽誌」も「梅峠、江原兵庫」と記し、また別に上河内東谷上村の梅峠に陣跡があり、高さ二町三〇間、山上は平らで山の西南に道ありとするのもこの陣跡を指すか。

天正一二年（一五八四）五月、岩屋城主の中村頼宗は「岩屋尾首」

で防戦し槍を合わせた司藤市右衛門射に、さらに同地の「江原陣」敵陣」を攻撃し鉄砲で的を射伏せた立石右兵衛と武本源兵衛、討死した入江助次郎の兄又太郎に感状を与え、六月にも「岩屋尾首江原陣」へ忍び寄り放火した立石右兵衛に感状を与えている（『美作国諸家感状記』、『東作誌』、『美作立石家文書』）。

文献

「作陽誌」、「美作略史」、「美作古城史」、「岩屋城調査中間報告」、「久米町史」上巻、『改訂岡山県遺跡地図』久米4、池田二〇〇五、高田二〇〇五、山形二〇〇七

37 的場ノ峠城

所在地 津山市中北上

立地

岩屋川左岸にあり、岩屋山と高見山との中間にある標高三九〇mのピーク付近に所在する。北西に岩屋城がある。

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、平坦面（郭）が残存とする。

城史

延宝七年（一六七九）の「岩屋古城覚」（『美作古城史』所収）に、天正一二年（一五八四）の宇喜多勢による岩屋城の寄城として「長船越中 飯場ノ峠」がみえる。ただし「作陽誌」は「的場峠、河端右近」と記す。

文献

「作陽誌」、「美作略史」、「美作古城史」、「岩屋城調査中間報告」、「久米町史」上巻、山形二〇〇七

38 とちの木城

所在地 津山市中北上

立地

高見山から北に延伸する尾根上にあり、南に井ノ奥城、西に遣手場

縄張

城がある。標高は約五〇〇mである。『改訂岡山県遺跡地図』は、平坦面（郭か）等が残存とする。

城史

延宝七年（一六七九）の「岩屋古城覚」（『美作古城史』所収）に、天正一二年（一五八四）の宇喜多勢による岩屋城の寄城として「川端右近 とちの木」がみえる。ただし「作陽誌」は「柿木上、長船越中」と記す。「柿木」は「枳（枳）木」の誤記と考えられる。

文献

「作陽誌」、「美作略史」、「美作古城史」、「岩屋城調査中間報告」、「久米町史」上巻、山形二〇〇七

39 八幡塔城（仮称）

所在地 津山市中北上

立地

中北上地区の木原集落の約一〇〇m北にあたり、池の堰堤西部付近の緩斜面にある。標高は約一八〇mである。

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、東南部・西部・南側斜面に不明瞭な平坦面を確認、郭面の可能性もあるが、堀切・切岸等は不明瞭とする。

文献

『改訂岡山県遺跡地図』久米17



八幡塔城（仮称）

40とつせ年たなべ末城・田辺城

所在地 津山市中北上・宮部下

立地

久米川左岸、宮部川右岸にあたり、姫新線坪井駅から約七五〇m北東の丘陵頂上付近に所在する。標高は約二〇一mである。

縄張

東西に伸びる山上に堀切を入れることで城域をまとめている。主郭は土塁で囲みコンパクトに防禦する縄張りとなっている。図をみると土塁で囲まれた主郭に虎口が確認される。今後、慎重に精査して検証を行うべき事例である。

城史

『作陽誌』は「年末」として、山の南は久米郡北分中北上村に、北は宮部下村に属し城跡ありと記す。『久米町史』は「年末壘址」として、土地の人は岩屋城の見張り所の跡と言い伝え、また砦の守将は田辺某で、毛利氏の家臣中村氏が岩屋城を攻めた時、中村の軍勢のために砦は落ち、某は自害、副将の某も「野辺」という丘で抵抗して全員討死したとする。『改訂岡山県遺跡地図』は「田辺城」の俗称があるとする。

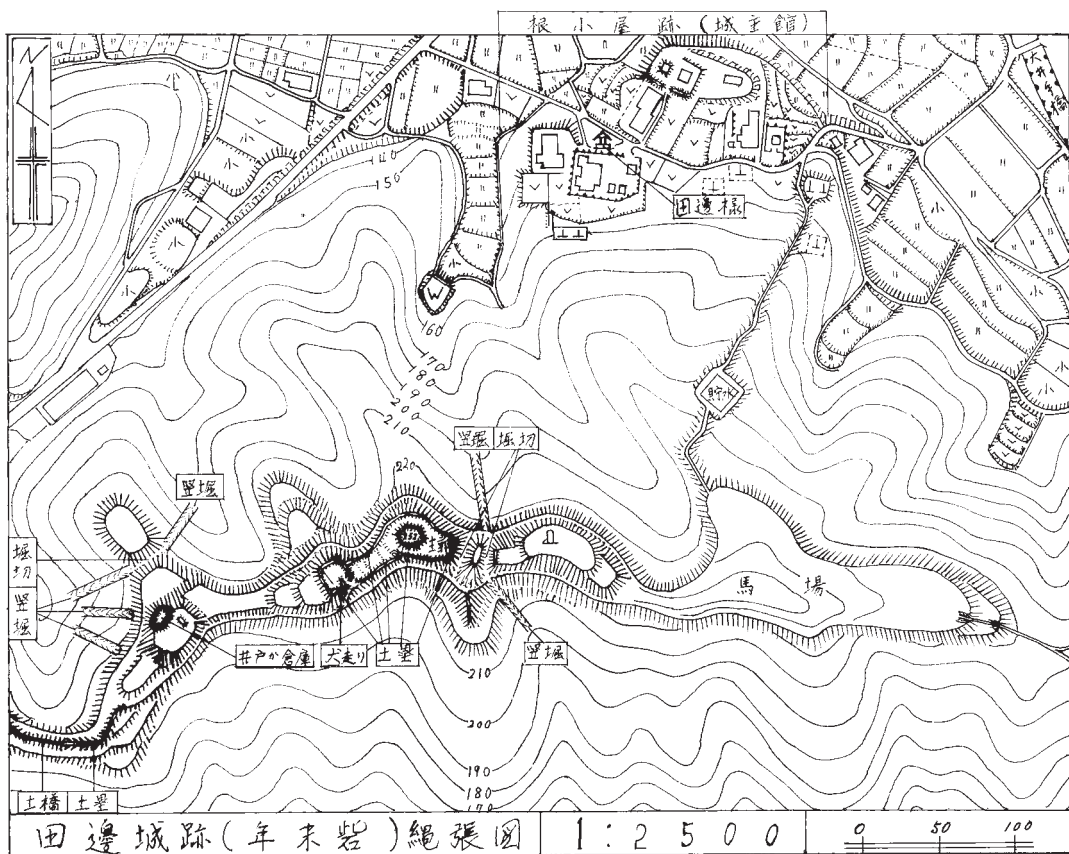
備考

平成一六年（二〇〇四）以降、事業者の開発によって山頂部分の曲輪・土塁等が大規模な改変を受けた。『作陽誌』、『久米郡誌』、『大井西村誌』、『岩屋城調査中間報告』、『日本城郭大系』812、『久米町史』上巻、『改訂岡山県遺跡地図』久米174

文献



年末城・田辺城



41 仏空殿・長者屋敷 ちやうじや

所在地 津山市久米川南

立地

縄張

未詳。

城史

『久米郡誌』に久米上の地にあり、俗に長者屋敷といい、久米部の屋敷跡で、山中に東西三〇間四尺、南北二〇間九尺、長方形の土地が残るとする。

文献

『久米郡誌』

42 鍋山城（仮称） なべやま

所在地 津山市神代

立地

神代川左岸にあり、神代地区の神西集落と南畝集落との中間に位置する。東に延伸してくる尾根の突端付近にある。標高は約一七〇m。

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、逆コの字型の土塁に囲まれた平坦面があるとする。

城史

『久米町史』に「塚谷二号遺構（鍋山遺構）」として、土地の人が鍋山と呼ぶ丘に土塁状のもので囲まれた遺構があるが何の遺構か不明、遺構の南方に鍋を造っていた所があると記す。

遺物

陶磁器。

文献

『久米町史』上巻、『改訂岡山県遺跡地図』久米207



鍋山城（仮称）

43 構城・川原屋敷 かまえじょうかわら

所在地 津山市神代

立地

縄張

県道一五九号線が神代地区神西集落付近を通る西側にあり、三和電子の東隣に位置する。標高は約一七〇mで、平地である。

神代集落の中に位置する館城である。西側に堀切があり、主郭部には土塁と周囲を囲む帯曲輪・横堀が確認される。南西側に方形の基壇状地形がみられる。集落に近い居館として機能したとみられるが、高台に土塁・横堀・堀切などを配するなど防禦性を強く意識したことが見て取れる。文献史料からこの館城に宇喜多秀家家臣の川原氏が居住したと確認されることから、この館城が織豊期を通して在地支配の拠点として機能したことをうかがわせる。



構城・川原屋敷

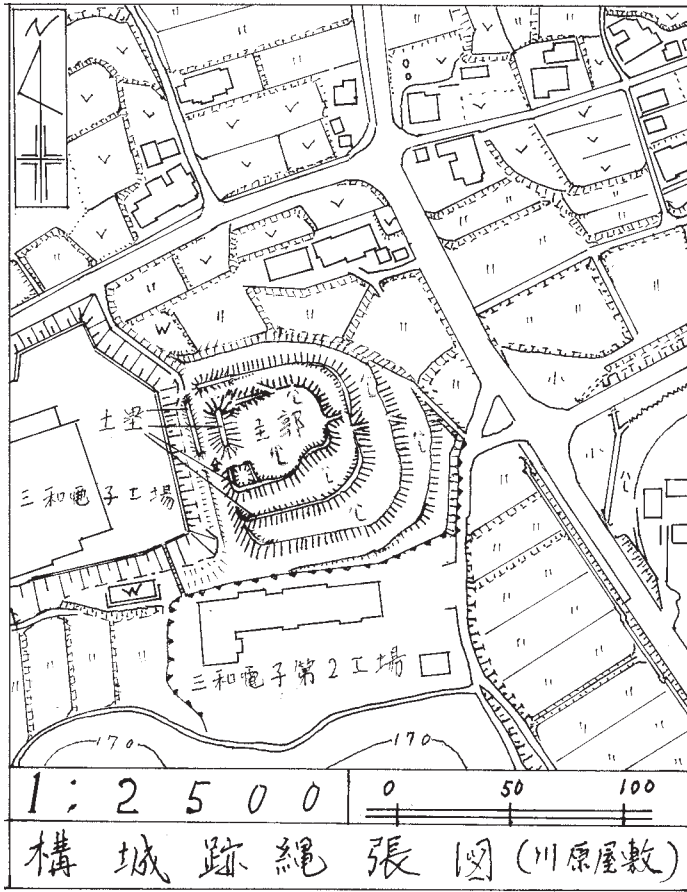
城史

「古城之覚」は久米北郡神代村の「構之（城）」として、城主を河原四兵衛とする。「作陽誌」は、「川原屋敷」として、宇喜多秀家の将川原四兵衛信基の屋敷で、四方に堀あり、村内の五輪山の側へ俗に「信基馬冷水」という池があると記す。『久米郡誌』は構の地にあり、四方に堀があり、屋敷の西北隅に構神社という稲荷の祠があったが明治四二年（一九〇九）に高津神社に合祀したといい、祠の後方から南にかけて林中に長さ二〇間、幅二間程の堀あり、屋敷の構は東西二〇〇間、南北一二〇間、段別七町歩とされているが、館跡は東

文 献

西三〇間、南北二〇間で大半が桑畑となる。『久米町史』は「川原屋敷（構城）」とし、丘の頂上を削平した平地と西北隅に土塁、西側に堀があるとする。

『武家聞伝記』、「作陽誌」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「久米郡誌」、「岡山県通史」久米1、「倭文志稿」、「美作古城史」、「日本城郭大系」79、「久米町史」上巻、「むかし神代」、「改訂岡山県遺跡地図」久米214



1 : 2 5 0 0 構城跡縄張図(川原屋敷)

44 砥岩城

所在地 津山市神代

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「倭文往来」は「神代村砥岩城」として、「河西四兵衛」を城主とする。構城の西に「戸岩」「戸岩屋敷」の地名があることから、構城と同一、あるいは隣接する施設とも考えられる。

文 献

「倭文往来」、「むかし神代」

45 成友屋敷（仮称）

所在地 津山市神代

立地

神代川右岸の神代地区成友集落内にあり、谷の北辺の山林部と接する部分に所在する。標高は約一八〇mである。

縄張

『久米町史』は「成友三号散布地」として、昭和四三年の現地踏査により柱穴痕六個を発見、住居跡ないし集落跡かとし、「改訂岡山県遺跡地図」は、かつて方形の溝の区画と柱穴を確認とする。

城史

未詳。

文 献

『むかし神代』、「改訂岡山県遺跡地図」久米365



成友屋敷（仮称）

46 江原兵庫助屋敷（仮称）

えばらひょうごのすけ

所在地 津山市戸脇

立地

戸脇地区の隠地集落内にあり、打穴下方面に至る道の南側平地に所在する。

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、付近は平坦で畑として利用とする。

城史

『作陽誌』は「江原兵庫助別墅」として、久米郡北分戸脇村にあり、敷地内に七人塚があると記す。別墅とは下屋敷、別荘の意。『久米郡誌』に「兵庫土居」の地にあり、今は桑園となり、中央に約二坪の塚あり、七人塚と呼び榎の古木があると記す。『久米町史』は大字戸脇の隠地にありとし、古老の話として、以前屋敷の周囲には木槿の木が植えめぐらされていたというというと記す。



江原兵庫助屋敷（仮称）

文献

『作陽誌』、『久米郡誌』、『倭文志稿』、『久米町史』上巻、『旭町史』通史編、『改訂岡山県遺跡地図』久米655

47 幡屋敷城（仮称）

所在地 津山市里公文

立地

公文川右岸にあり、秀実小学校の約五〇〇m北西に所在する。東から公文川下流域に迫り出す尾根の突端にあり、標高は約一七〇mである。

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、植林等で損壊



八幡屋敷城（仮称）

城史
文献

が著しいが、北側に堀切が残存とする。未詳。

『改訂岡山県遺跡地図』久米227

48 平福寺城・平福城

ひらふくじ

ひらふく

所在地 津山市里公文

立地

公文川右岸にあり、公文集落に向かって東に延伸する尾根上に位置する。標高は約二〇三mである。

縄張

集落に近い丘陵部に位置する丘城。単郭構造の縄張りで周囲に堀切・横堀と畝状空堀群を組み合わせた防禦ラインを持つ。在地系縄張り技術の中では技巧的な特徴を持つ事例である。

城史

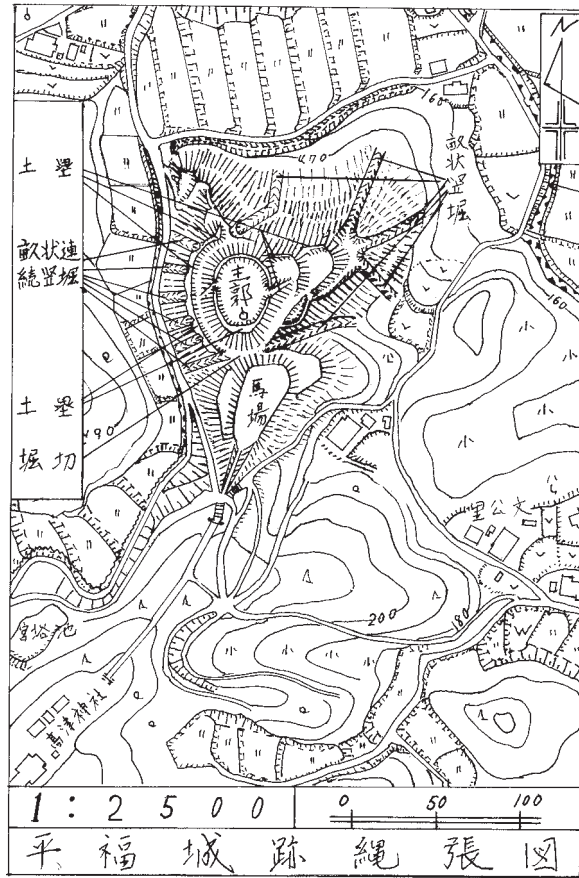
『古城之覚』は久米北郡公文村の「平福寺」として、城主を毛利左近尉とする。『作陽誌』は昔、毛利左近亮が村内に円宗寺城と「平福宮」を構え、苫西郡の目崎城主と争い、左近は敗死し、今も耕作地に「仮屋畑・戦幕」などの地名ありと記す。「美作鬢鏡」は「平福寺城」とし、城主を「毛利左近大夫」、「美作鏡」は城主を「毛利左近」とする。『久米郡誌』は「平福城」として、高津神社境内に接した十数歩の場所、山頂は平坦、周囲に城の形跡を残すとする。『日本城郭全集』は「平福城」とし、周囲に廃塀断礎の形跡が残り、背後を少し下った所に城の井戸があると記す。



平福寺城・平福城

文献

「武家聞伝記」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「久米郡誌」、「岡山県通史」久米3、「倭文志稿」、「美作古城史」、「日本城郭全集」補遺、「日本城郭大系」821、「久米町史」上巻、「改訂岡山県遺跡地図」久米219



49 円宗寺城

所在地 津山市里公文上

立地

里公文地区から旧旭町方面へ向かう谷の最奥部で、東側の谷を見下ろす尾根上にある。

縄張

図では複数の城域が記されている。それぞれ単郭構造である。人家にも近く後世の改変が考えられる地域であり、慎重に遺構の精査を行う必要がある。

城史

「古城之覚」は久米北郡公文村の「円宗寺」として、城主不詳とする。「作陽誌」は「円宗寺山」として、昔、毛利左近亮が村内にこの山と「平福宮」を構えたと記す。「日本城郭全集」は「円住寺山城」、「久米町史」は「円宗寺城」とする。



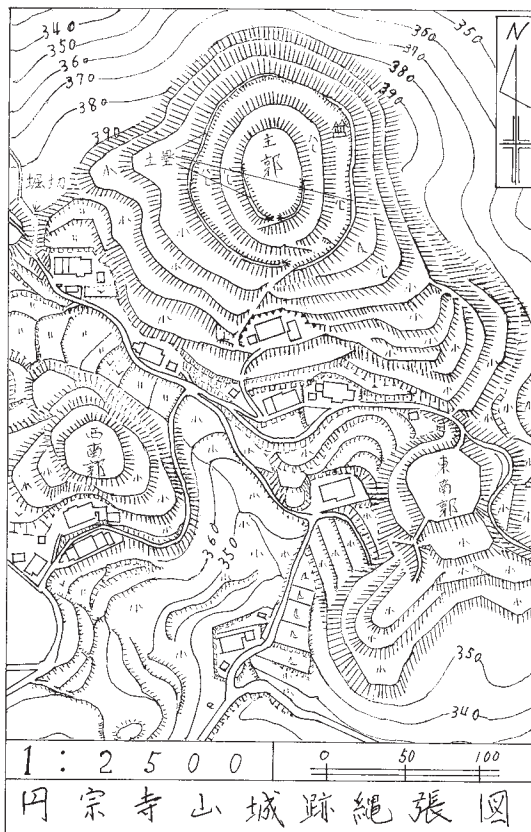
円宗寺城

備考

『改訂岡山県遺跡地図』の地図表示は誤りである。

文献

「武家聞伝記」、「作陽誌」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「岡山県通史」久米4、「倭文志稿」、「美作古城史」、「日本城郭全集」久米郡3、「日本城郭大系」781、「久米町史」上巻、「改訂岡山県遺跡地図」久米212



50

一丁田城（仮称）

所在地 津山市福田下

立地

県道四五五号線が八社集落を通る場所から約七〇〇m東の位置に所在する。標高は約二五〇mで、谷奥ながら比較的平地である。

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、頂上は比較的平坦とする。

未詳。

城史

『改訂岡山県遺跡地図』久米619



一丁田城（仮称）

52 高山城・江原城

所在地 津山市油木北・久米郡美咲町北

立地

倭文川最上流左岸にあたり、国道四二九号線が油木上地区を通る地点の北側の独立峰・高山山上に所在する。標高は約四三〇mである。

縄張

国道四二九号線、油木北バス停より、西に一〇m進むと「高山城址登山口」の標柱がある。その方向に進んで行くと登りきったあたりで道が四叉路となる。その内の西側の道を進む。

城史

倭文川と通谷川の分水嶺に位置する山城。縄張りは、山頂に主郭を配し南北に伸びる稜線に沿って曲輪が並ぶ複郭構造である。堀切を要所に配することで、散漫と続く曲輪を主郭・第二郭と分節して防禦する。なお、周囲の低位曲輪は後世の改変の可能性もあるので確認を要する。縄張り技術からは、戦国後期の遺構と考えられる。

立地

正保書上五四城の一で、「古城之覚」は久米北郡油木村の「高山之（城）」として、城主を和泉守佐次の曾孫江原兵庫親次とする。「作陽誌」は「江原堡」として、油木村と山手公文村に跨り、山の高さ一九〇間、周り一三九七間、江原兵庫助が構えたと記す。「美作鬢鏡」は城主を「江原兵庫」とする。天保国絵図に「高山古城跡」とある。『久米郡誌』は「江原城」、高山城ともいうとして、頂上は東西一二間、南北二〇間、今は愛宕の小祠が残るとする。『久米町史』は「高山城」として、油木上と北の境界線上、標高四三三・五mの高山山頂にあ



高山城・江原城

51 八幡長者屋敷（仮称）

所在地 津山市油木下

立地

未詳。

縄張

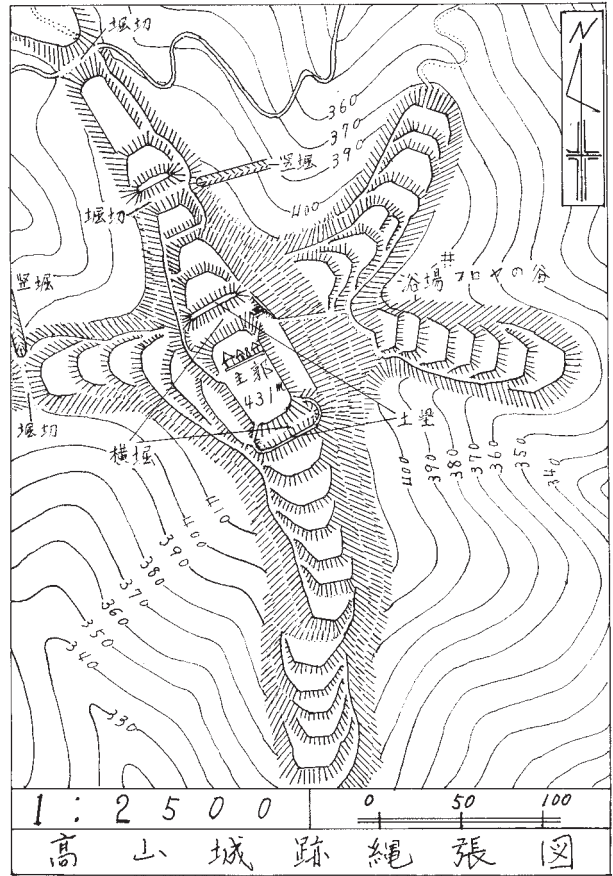
未詳。

城史

『天井西村誌』は、字八幡と呼ぶ丘陵上の平坦地を八幡長者の宅跡と伝えるというとする。

文献

『天井西村誌』



るとする。

備考

平成二十一年（一九九九）頃、地元管理組合が材木伐採のため作業道を建設、尾根上に連なる郭群が破壊され、道路は主郭にまで達している。

文献

「武家聞伝記」、「作陽誌」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「久米郡誌」、「岡山県通史」久米14、「倭文史稿」、「美作古城史」、「日本城郭全集」補遺、「日本城郭大系」806、「久米町史」上巻、「旭町史」通史編、「岡山県埋蔵文化財報告」30、「改訂岡山県遺跡地図」久米239・旭4

〔美咲町〕中央町

53 立万城

所在地 美咲町錦織

立地

倭文川畔の三保郵便局から約四〇〇m北の尾根先端に所在する。錦織地区の錦織西集落を通る県道七〇号線の西側にある。標高は約一三〇mである。

縄張

集落に近い尾根上に削平地が確認される。大半が後世の改変の可能性が高く、遺構としての評価は困難である。

城史

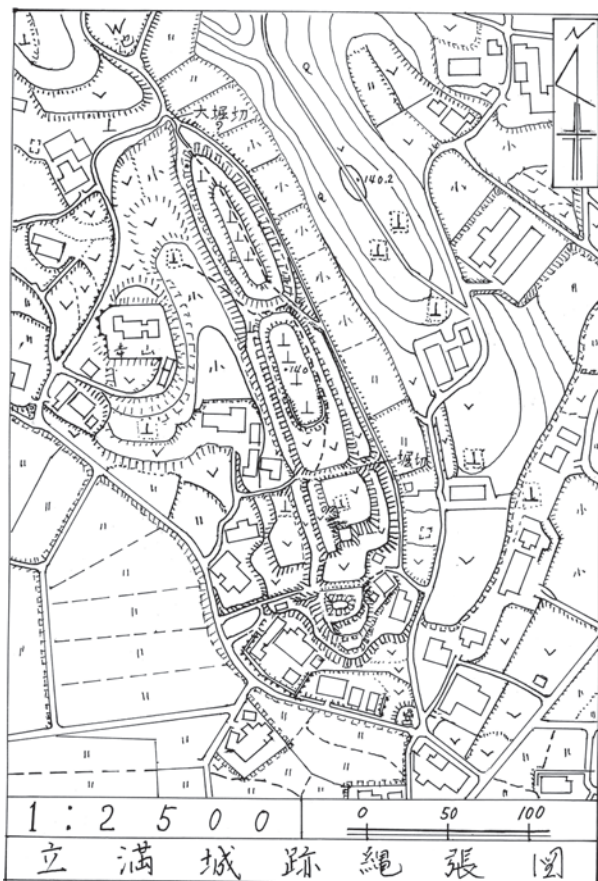
〔作陽誌〕は「錦織立万城」として、杉山宗三郎が住み、院庄で花房助兵衛の兵と戦い討死したと記す。〔久米郡誌〕は「立万城」として、錦織の北の立満の地にあり、高さ七、八間、今は開拓され圃となっている、杉山宗三郎為国が毛利氏に属して在城とする。〔日本城郭全集〕は錦織の北方、字立満にあり、高さ一五〇mの小丘にあり、今は畑となるとする。

文献

〔作陽誌〕、〔久米郡誌〕、〔美作古城史〕、〔日本城郭全集〕久米郡19、〔日本城郭大系〕828、〔改訂岡山県遺跡地図〕中央19



立万城



54 錦織屋敷

所在地 美咲町錦織

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

〔久米郡誌〕に、立満の東北にあたる高台で、昔秦氏が住んだとする。

文献

〔久米郡誌〕

55 天神山城

所在地 美咲町打穴下

立地

打穴下地区岡山集落の西、標高約二七八mの山上にあり、東は福田地区となる。打穴川流域のみならず、皿川流域を一望する。山頂に土塁を持つ主郭を構える。尾根に沿って西側に曲輪を連ねる。東側の尾根伝いに堀切が数本確認される。

縄張

城史

「古城之覚」は久米北郡下打穴村の「天神山之（城）」として、城主を吉川藏人広家とする。「作陽誌」は「天神山」として、下にある菅公の祠から名付けられ、かつて吉川左衛門尉広家が住み、また同村の細田の地もその居所と記す。「美作鏡」は城主を「吉川左衛門尉広家」とする。「久米郡誌」は「天神山城」とし、ある年開墾した時、古びた矢の根などが出たというとする。



天神山城

なお『日本城郭全集』は所在を中央町打穴西とする。

『武家聞伝記』、「作陽誌」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「久米郡誌」、「岡山県通史」久米12、『美作古城史』、『日本城郭全集』久米郡11、『日本城郭大系』811、『改訂岡山県遺跡地図』中央69

文献

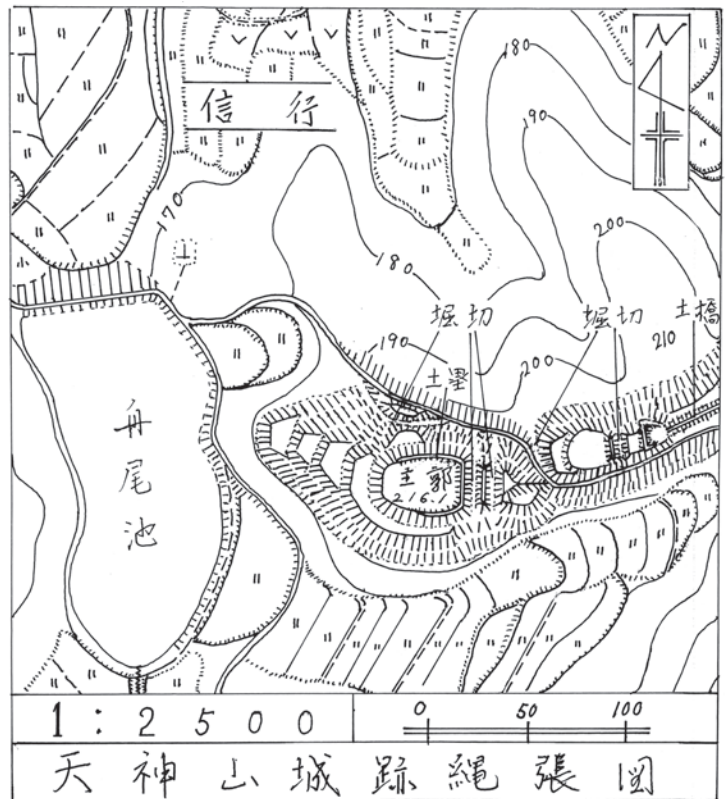
立地

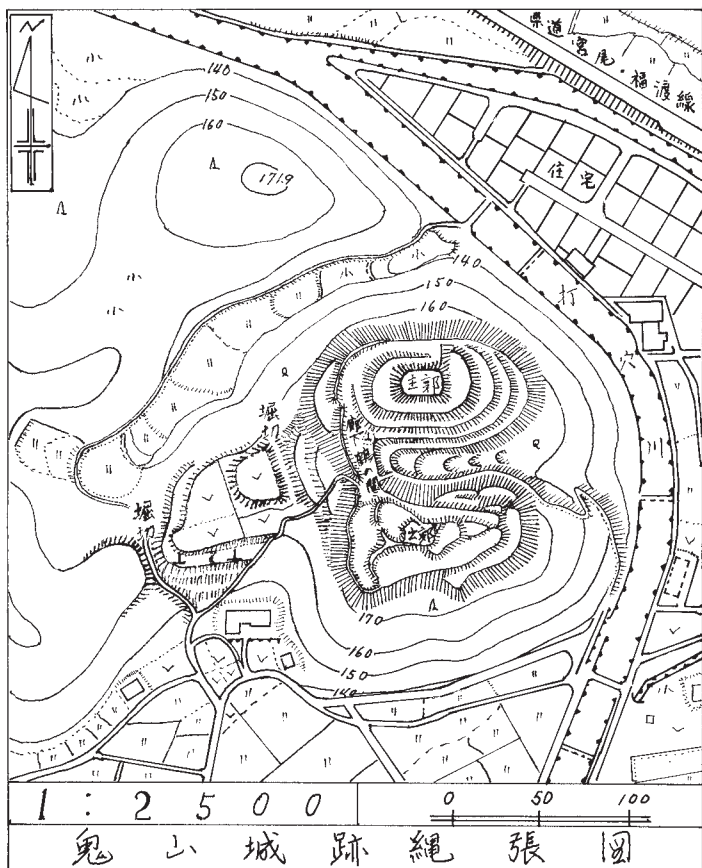
縄張

打穴中地区の打穴川左岸にあり、打穴川が東に大きく湾曲する部分で東に迫り出す丘陵上に位置する。標高は約一七〇mである。国道五三号線、美咲警察署三叉路を打穴中簡易郵便局方面の県道七一号「久米・建部」線、榊葉神社方面にある老人ホーム静香園より東の山手。打穴川左岸に位置する丘城。逆コの字の形状を持つ丘陵を城域に用いて整備する。二つのピークは曲輪として整備され周囲に帯曲輪を持つ。西側に続く稜線には遮断するために堀切が二本配されている。

56 鬼山城

所在地 美咲町打穴中





城史

なお、集落に近いことから開墾など構成の改変の可能性も考えられるため現状遺構の評価には慎重が求められる。規模から鑑みると、打穴川流域を広範囲に掌握した在地の土豪層の拠点城郭として整備された可能性が考えられる。

正保書上五四城の一で、「古城之覚」は久米北郡下打穴村の「鬼山之（城）」として、城主不詳とする。「作陽誌」は「鬼山」として、



鬼山城

文献

『久米郡誌』、『美作古城史』、『日本城郭全集』補遺、『改訂岡山県遺跡地図』中央196



城山

城史

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は頂部に一面、その南北両側に二つの平坦面をもち、頂部は一部石組などあり、堀切なしとする。

『久米郡誌』は「城山」として古城跡と言いつたえ、上打穴北との境にあつて稲荷の小祠がある、付近の「大門」という所は城山の正門というとする。『日本城郭全集』は「打穴城」とする。

立地

打穴川左岸にあり、有藤集落の北側の、東に迫り出した尾根上に所在する。標高は約二四〇mである。打穴川の対岸、南東に鳥越城がある。

57

城山

所在地 美咲町打穴里・打穴上

文献

『武家聞伝記』、『作陽誌』、『美作鬢鏡』、『美作鏡』、『岡山県通史』久米13、『美作古城史』、『日本城郭大系』788、『改訂岡山県遺跡地図』中央98、『岡山の山城を歩く』80

下打穴中村にあり、山上は平地で東西二五間、南北五〇間、一名を鬼城、鬼截山と記す。『美作古城史』は「或書」を引いて、福依三郎左衛門重信が正平一七年（一三六二）に築城したとし、また『三保村誌』に玉置玄蕃守の居城で、天正二年（一五七四）三月三日、高陣峰（美咲町両山寺）にあった尼子照平が攻撃、玄蕃守と照平は討死したとの伝承を載せるとする。

58 城屋敷

所在地 美咲町打穴里

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

『久米郡誌』は城屋敷として、今は稲荷の小祠ありとする。

文献

『久米郡誌』、『美作古城史』

59 鳥越山城

所在地 美咲町打穴上・打穴里

立地

打穴川右岸にあり、有藤集落の東側の独立峰上に所在する。標高は約二九五mである。打穴川の対岸、北西には城山がある。

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、上部は南北二八・八m、東西四二・九mの平坦面あり、南側に一段下がった所に南北九・九m、東西二八・三mの平坦面ありとする。

城史

「古城之覚」は久米北郡上打穴村の「鳥越之（城）」として、城主を「吉川一族」とする。「作陽誌」は「鳥越山堡」として、



鳥越山城

文献

山の高さ一〇〇丈余り、昔、打穴肥後前司菅原家次が居城と記す。『久米郡誌』は「鳥越山城」として、高さ一〇〇余丈、円錐形をして、頂上は東西三〇間、南北三〇間、山中所々に古墳があるとす。『武家聞伝記』、「作陽誌」、『美作鬢鏡』、『美作鏡』、『久米郡誌』、『岡山県通史』久米8、『美作古城史』、『日本城郭全集』久米郡12、『日本城郭大系』814、『改訂岡山県遺跡地図』中央197

60 是久山城

所在地 美咲町打穴西

立地

打穴西地区信行集落の舟尾池のすぐ東側の尾根上にある。標高は約二二〇mである。

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、東側に堀切三条、頂部平坦面は東と北側が土塁で囲まれる、鬼山城（美咲町打穴中）の出城かとする。

城史

「古城之覚」は久米南郡原田村・下打穴村境の「是久山」として、城主不詳とする。「美作鏡」にはみえない。

備考

『改訂岡山県遺跡地図』は是久山城の背後へ張り出す丘陵に平坦面や堅堀・土塁・石組井戸らしき遺構があり、城の関連施設かとする。

文献

『武家聞伝記』、『美作鬢鏡』、『岡山県通史』久米24、『日本城郭大系』796、『改訂岡山県遺跡地図』中央136・138

61

城山じょうやま

所在地 美咲町打穴北

立地

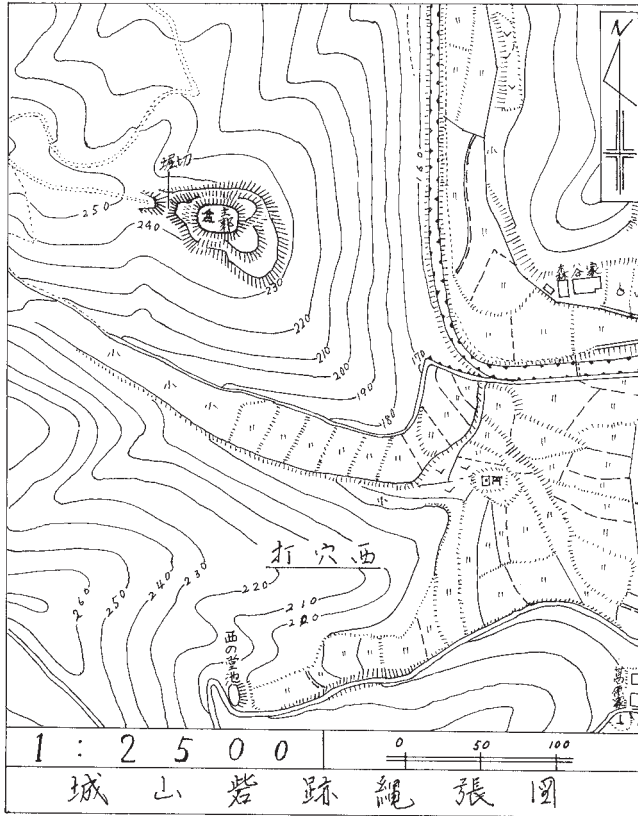
重永集落で打穴川が西に大きく湾曲する部分、東に迫り出した尾根上に位置する。標高は約二五〇mである。

縄張

打穴川の西岸に位置する丘城。背後に堀切を構えて先端部を城域として整備したものである。主郭は周囲に帯曲輪を持つが基本的には単郭構造と位置付けられる。打穴地域の村落に拠った土豪層の持城と考えられる。

城史文献

『日本城郭大系』801、『改訂岡山県遺跡地図』中央115



62

陣所じんしょ

所在地 美咲町新城

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

『久米郡誌』は日向の地であるとされるが遺跡不明で、日向の南に「太歳神」という山かと推定する。『日本城郭全集』は「新城陣」として、新庄山城の向い、新城川を隔てた東の山にありとし、また「太歳神の陣」として、新城陣の峰続きの「太歳神」と呼ぶ山の頂上は平坦とする。

文献

『久米郡誌』、『日本城郭全集』補遺

63

新庄山城しんじょうやま

所在地 美咲町新城

立地

新庄地区の新城川左岸にあり、日南集落に向かって北に延伸する尾根上に位置する。標高は約二四〇mである。

縄張

西側に堀切を配し、尾根の先端を城域とする。最高部が主郭となるが、数段に分かれるなど削平は良くない。堀切のある西側に向けて土塁が確認される。

城史

「古城之覚」は久米南郡原田東村の「新庄山」として、城主を赤松兵部少輔とする。「美作鬘鏡」と「美作鏡」は「新庄山城」とする。『久



新庄山城

立地

津山線小原駅から約五〇〇m北西、東に延伸する小さな尾根の突端に位置する。標高は約二二〇mで、西幸地区の水田地帯を一望できる。

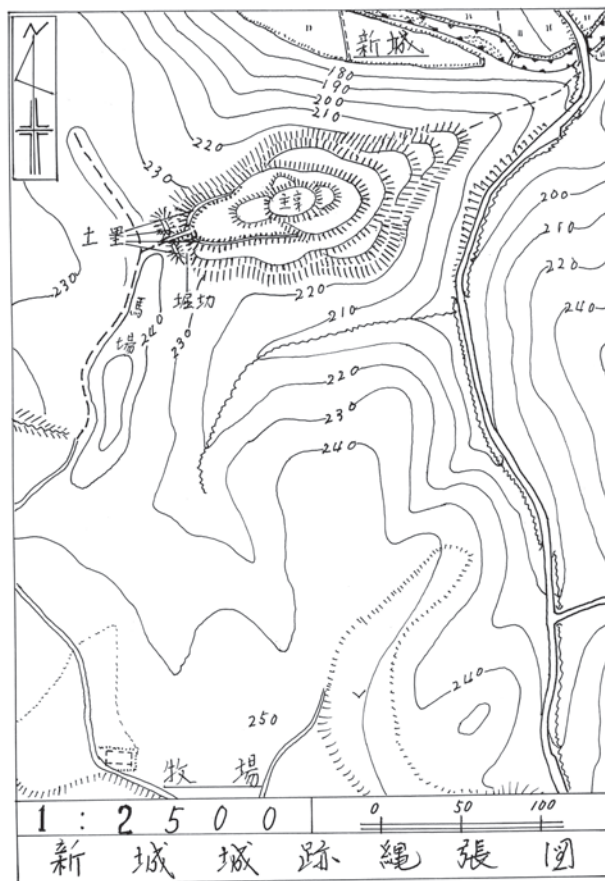
64 丸尾山城

所在地 美咲町西幸

文献

「武家聞伝記」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「久米郡誌」、「岡山県通史」久米23、「美作古城史」、「日本城郭全集」久米郡9、「日本城郭大系」802、「改訂岡山県遺跡地図」中央202

米郡誌』は、新城の西南の急峻な山で、頂上は平坦、土塁の跡も歴然と残るとする。『日本城郭全集』は城山の西は深い谷、北は峰続きを堀切で隔て、南の谷は深い杉林、正面の東は急峻で、頂上に本丸、二の丸、三の丸、馬場跡などが残るとする。



城史

「古城之覚」は久米南郡原田東村の「稲荷山」として、城主を原田三河守平



稲荷山城

縄張

集落に近い丘陵上に位置する。最高部が主郭となり東側に堀切を配する。曲輪は数段に分かれる。周囲の下位曲輪などは後世の改変の可能性があり注意を要する。

立地

65 稲荷山城

所在地 美咲町原田・西幸

文献

「作陽誌」、「久米郡誌」、「美作古城史」、「日本城郭全集」補遺、「日本城郭大系」823、「改訂岡山県遺跡地図」中央205

城史

『改訂岡山県遺跡地図』は、頂部平坦面は長さ一〇〇mで、東西側に約二〜三mの比高差あり、北側は二段の平坦面の造出し、井戸枠を確認、東端はわずかな平坦面ありとする。



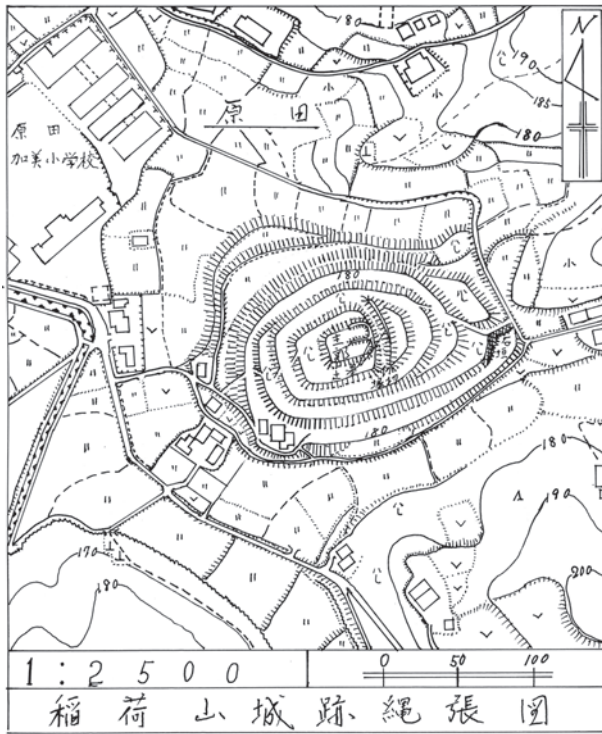
丸尾山城

縄張

文献

貞佐、二代目の原田弥右衛門の子は誕生寺住持長老とする。「作陽誌」は「稻荷山」として、南は西幸村、北は原田東村に属し、初め狐山といい、原田氏が代々住む、周囲の宅地は皆耕作地となるとし、同書所収の原田氏の系譜では保安五年（一一二四）に原田氏の祖平興方が「狐山」に抛り同地を開発したと記す。「美作鬘鏡」は城主を「原田三河守」とする。「久米郡誌」は「稻荷山城」として、山頂は密林だがその他は大部分耕作地になっているとする。「美作古城史」は加美小学校の東南にあたる藪木立とする。

「武家聞伝記」、「作陽誌」、「美作鬘鏡」、「美作鏡」、「美作略史」、「久米郡誌」、「岡山県通史」久米22、「美作古城史」、「日本城郭大系」773、「改訂岡山県遺跡地図」中央198、「岡山の山城を歩く」104



66

おおたに 大谷城

所在地 美咲町原田

立地

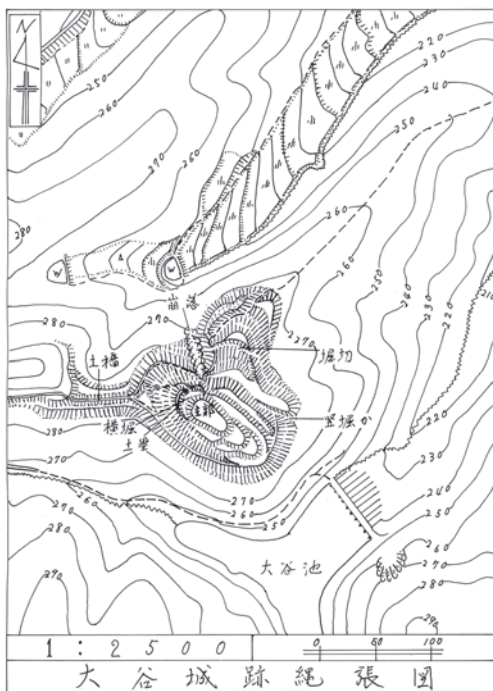
筒ノ宮山から北東に延伸する尾根上にあ
り、榎本集落に導水する池の北側山林部
に所在する。標高は約二九〇mである。

最高部に主郭を構え斜面に曲輪が連ね
るプランとなっている。

「古城之覚」は久米南郡原田西村の「大
谷」として、城主不詳とする。「作陽誌」

は原田氏の構えた城と記す。「久米郡誌」は原田の西北にあり、城、
堀の跡が明らかとする。

「武家聞伝記」、「作陽誌」、「美作鬘鏡」、「美作鏡」、「久米郡誌」、「岡
山県通史」久米21、「美作古城史」、「日本城郭大系」784、「改訂岡山
県遺跡地図」中央159



大谷城

文献

城史

縄張

67

高陣城こうじん

所在地 美咲町両山寺

立地

標高約六八九mの二上山山頂に位置するとされる。南東には両山寺が所在する。打穴川流域を一望する。

縄張

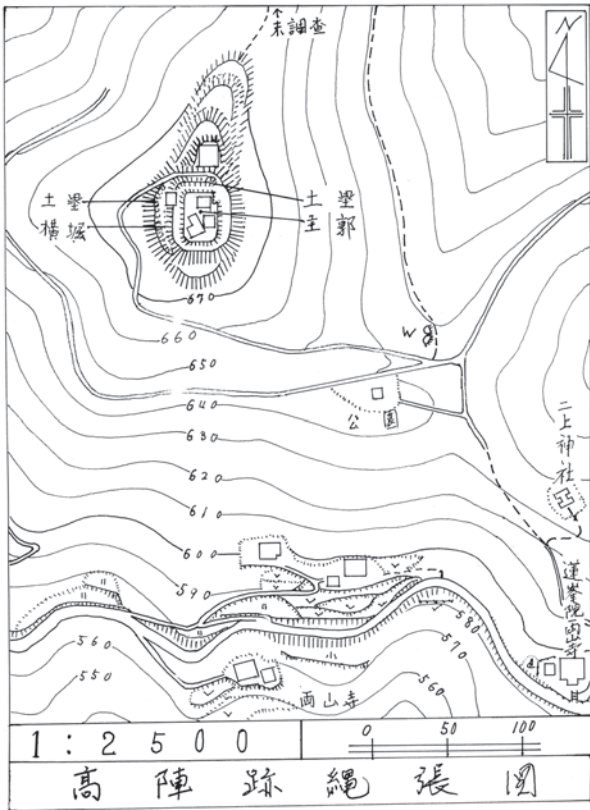
独立した二上山山頂を主郭として、複数の曲輪を持つ。西側が若干緩やかな斜面となっているため、横堀を配して防禦の強化を図る。

城史

「古城之覚」は久米北郡埴和村の「高陣之（城）」として、城主を「尼子一族」とする。「作陽誌」は「高陣」として、二上山の半峰で、上に尼子氏の陣所があることから



高陣城



文献

高陣という、東は播磨国、西は備中国、北は伯耆国、南は備前国が眺望できると記す。『久米郡誌』は「高陣峰」として、高陣城は二上山上の一峰で、西山寺旧記には太田某の居城とあるとする。『武家聞伝記』、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「久米郡誌」、「岡山県通史」久米6、『美作古城史』、『日本城郭大系』794、『改訂岡山県遺跡地図』中央188

68 白萩城

所在地 美咲町境・久米南町北庄

立地

高坊山から南に延伸する尾根のピーク上に位置する。境地区から久米南町の高坊集落に至る道が南部を通る。標高は約四九〇mである。



白萩城

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、平坦面は長三〇m、幅九mで、二×二間（六×六m）の建物跡が残り、南側には五重塔、宝篋印塔があるとする。

城史

文政一三年（一八三〇）の境村明細帳（『美作古城史』所収）に「城脇 白萩城、城主相知不申候」とある。『久米郡誌』に「白萩城」として、城跡の高さ八〇間、頂上は東西二〇間、南北三〇間、天正年中（一五七三〜九二）に本多時直が居城していたが、宇喜多氏の火攻めで落城とする。『日本城郭全集』は「白萩城」とする。

文献

『久米郡誌』、『美作古城史』、『日本城郭全集』補遺、『日本城郭大系』800、『改訂岡山県遺跡地図』中央233・久米南6

69

高土城こうつちじょう

所在地 美咲町境

立地

打穴川最上流の右岸にあり、境後集落の東にある独立峰上にある。標高は約四一〇mである。

縄張

未詳。

城史

「古城之覚」は久米北郡「堺村」の「高土之（城）」として、城主を「友長」とする。「作陽誌」は「高土山堡」として、山の北の高さ約七〇丈、東に堀あり、竹内民部少輔友長が築城と記す。文政一三年（一八三〇）の境村明細帳（『美作古城史』所収）に「高土城 杉山久政住居申伝ニ御座候」とある。『久米郡誌』は「高土城」とし、杉山新三郎為且が築き在城したが、のち宇喜多直家が落城したとする。『岡山県通史』は「高出城」とするのは誤植とみられる。

文献

「武家聞伝記」、「作陽誌」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「久米郡誌」、「岡山県通史」久米9、「美作古城史」、「日本城郭全集」久米郡6、「日本城郭大系」805、「改訂岡山県遺跡地図」中央229



高土城

70

城能城じょうのう

所在地 美咲町境・角石祖母

立地

角石祖母地区を流れる滝谷川左岸の独立峰上にある。南部を県道七〇号線が通る。標高は約三五〇mで、境地区を一望する。

縄張

最高部に主郭を構え、南側に曲輪を連ねる。北側に横堀を配する。

城史

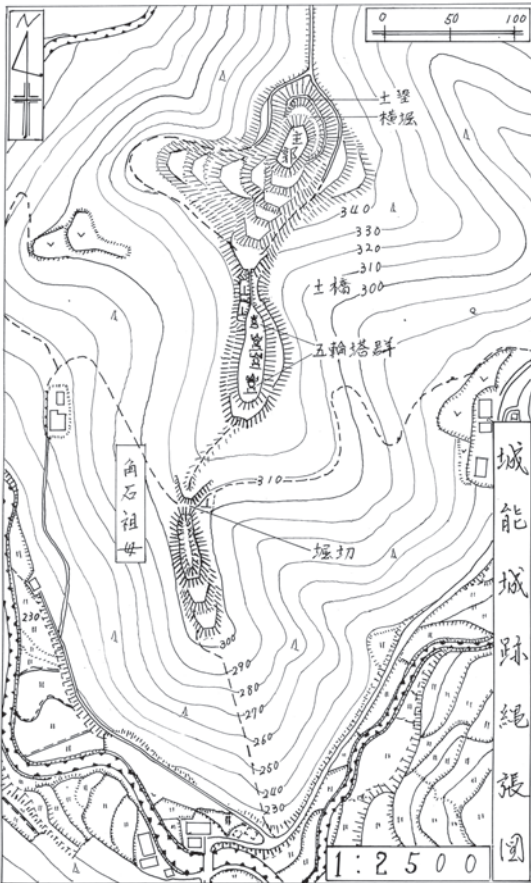
文政一三年（一八三〇）の境村明細帳（『美作古城史』所収）に「城能」として城主不詳とする。

文献

『美作古城史』『改訂岡山県遺跡地図』中央226



城能城



71

三 角 城

所在地 美咲町角石祖母

立 地

角石祖母地区を流れる滝谷川右岸、祖母前集落から東南へ延伸する尾根上に所在する。標高は約三四〇mである。地元では「三角城」と呼んでいる。

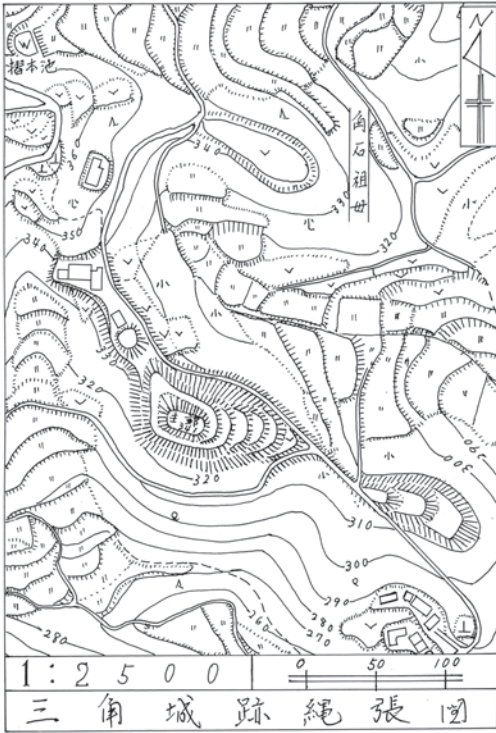
縄 張

尾根上に曲輪が確認される。周囲に帯曲輪が確認される。集落に近いことから後世に改変された部分もあり遺構の評価には注意を要する。

城 史

近年、山形省吾氏と大坪和西の篠原靖典氏が確認。

備 考



三角城

72 清水寺城（高田城）（仮称）

所在地 美咲町境・久米南町上粕

立 地

清水寺の約三〇〇m南西の尾根上にあり、北は境地区、南は上粕地区を一望する。標高は約四九〇mである。

縄 張

未詳。

城 史

『岡山県通史』は大坪和村境の「高出城」として城主を竹内友長あるいは竹内友長抱とする。さらに『日本城郭大系』は「高田城」として竹内友長が在城として『改訂岡山県遺跡地図』もこれを継承するが、城名自体は高土城に関する記事の訛伝とみられる。

文 献

『岡山県通史』久米9、『日本城郭大系』804、『改訂岡山県遺跡地図』中央234・久米南28



清水寺城（高田城）（仮称）

73 宮ノ嶋城（仮称）

所在地 美咲町境

立 地

宮ノ嶋集落から約四〇〇m西の山林部に所在する。標高は約三五〇mで、所在地は比較的緩斜面である。

縄 張

『改訂岡山県遺跡地図』は、三〜四面の平坦面と一条の堀切を確認、堀切は幅約四m、深さ〇・五〜〇・七mとする。

城 史

未詳。『改訂岡山県遺跡地図』にも城名の記載はない。

文 献

『改訂岡山県遺跡地図』中央227

74 金地城（仮称）

所在地 美咲町和田北

立地

和田北地区金地集落の約五〇〇m南西の独立峰上に所在する。大瀬川
の左岸にあり、標高は約三三九mである。

縄張

未詳。

城史

未詳。『改訂岡山県遺跡地図』にも城名の記載はない。

文献

『改訂岡山県遺跡地図』中央1

75 長箱城（仮称）

所在地 美咲町和田北

立地

和田北地区から栃原地区に至る県道三七三号線の南側の尾根上にあ
る。標高は約二七〇mである。

縄張

未詳。

城史

未詳。『改訂岡山県遺跡地図』にも城名の記載はない。

文献

『改訂岡山県遺跡地図』中央5



金地城（仮称）



長箱城（仮称）



茶白山城

76 茶白山城

所在地 美咲町大坪和西

立地

大坪和西地区の大坪和小学校の約二〇〇m東南にある独立峰上にあ
る。標高は約四七〇mで、交通の要衝である稲荷山が近隣に所在する。

縄張

山頂に複数の段を持つ主郭を構える。そして、北側の尾根に対して
連続堀切を入れ防禦を固める。主郭の周囲には帯曲輪を廻し北側と

城史

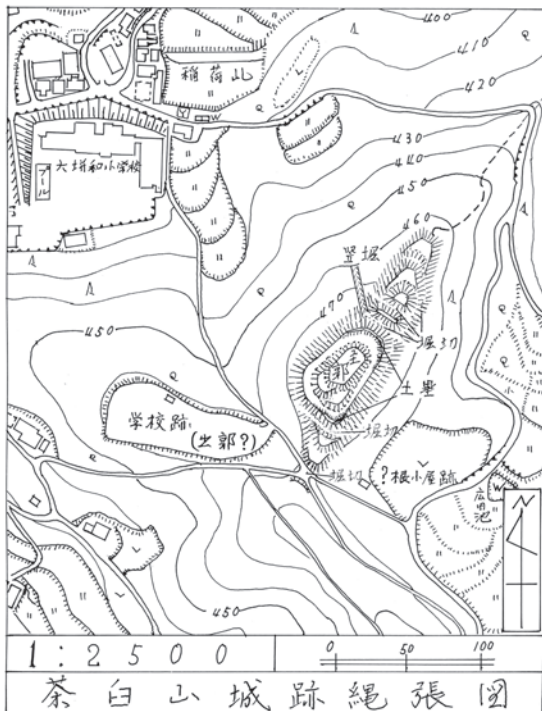
南東側に土塁が確認される。

文献

『作陽誌』は久米郡北分大坪和西村の「茶白山」として、広田にあ
りと記す。『久米郡誌』は「茶白山」として、山形が茶白に似るか
らこの名があり、昔宇喜多直家の兵が陣取りした古戦場とする。『日
本城郭全集』は「茶白山陣」とする。

文献

『作陽誌』、『久米郡誌』、『日本城郭全集』補遺、『美作古城史』、『改
訂岡山県遺跡地図』中央225



茶白山城跡縄張図

〔美咲町〕旭町

77 上屋敷

所在地 美咲町北

立地 通谷川の源流にあり、友重集落に向かって西から延伸する尾根の間に位置するとみられる。標高は約四二〇mである。

縄張 未詳。

城史

『久米郡誌』に、山手公文北の友重の地にあり、嘉吉元年（一四四二）に赤松次郎兵衛高則が住み、一町四方の屋敷を構えていたが、元禄一〇年（一六九七）一二月、火災で焼失したとする。

文献

『久米郡誌』、『旭町誌』資料編

78 萩丸城

所在地 美咲町北

立地 総合畜産センターの南側の丘陵地に所在する。大谷川右岸で、標高は約四三〇mである。

縄張 『改訂岡山県遺跡地図』は、虎口・土橋・切り落し・郭面など確認とする。

城史

『久米郡誌』は「萩丸城」とし、打木沢の地にあり、古河公方成氏の家臣佐和四郎が文明十一年（一四七九）に築城、永正元年（一五〇四）に両上杉の合戦で討死し廃城となったといい、城の三方は険峻な要害で、南の一路は平坦、「乗駟場」という馬場の跡が

文献

あるとする。『旭町史』は付近に「大屋敷」「懸乗場」、城の南端に「城ノ尾」の地名が残るとする。

『久米郡誌』、『倭文志稿』、『美作古城史』、『日本城郭全集』久米郡14、『日本城郭大系』809、『旭町史』通史編・資料編、『岡山

の山城を歩く』98、『改訂岡山県遺跡地図』旭3

79 侍屋敷

所在地 美咲町南

立地 通谷川右岸の向山集落から北西に向かって山を登る道筋の右手付近に位置するとみられる。標高は約四七〇mである。

縄張 未詳。

城史

『旭町史』に向山の「阿世美郷」の近くにあるが、今は植林や竹林に変わっていると記し、また「アセビ郷」として、京都の公卿が戦乱で落ち延び十数件の屋敷に住んだと伝え、周囲には古墓が散在し、近くに江原城の侍屋敷跡といわれる所もあるとする。

文献

『旭町史』通史編・資料編



萩丸城

80 長者屋敷

ちやうじゃ

所在地 美咲町南

通谷川右岸にあり、休札トンネルから約八〇〇m北にある、八柳集落から江草集落へと抜ける谷間付近に位置する。

未詳。

城史

縄張

立地

『作陽誌』は久米郡北分山手公文村の「長者屋敷」として、仏潭傍の地にあり、親孝行で貧しかった者が仏教への帰依により金鶏一雙を得、豪家となったことから長者屋敷と呼ばれたと記す。『久米郡誌』は山手公文南にありとする。『旭町史』は現在も地名と屋敷跡が残るとする。

文献

『作陽誌』、『久米郡誌』、『旭町史』地区誌編・資料編

81 城小屋

所在地 美咲町中

大谷川右岸、松田川左岸にあり、合流点の北側の丘陵地に所在する。標高は約四〇〇mである。

縄張

立地

城史

『旭町史』は「城小屋」として、城地区の頂上にあり、谷間には石垣を築いた約二坪の掘井戸あり、近くに的場という地



城小屋

文献

名もあるとする。『改訂岡山県遺跡地図』は、三浦氏の持城と伝えるとする。

『旭町史』通史編・資料編、『改訂岡山県遺跡地図』旭1

82 横岩城

よこいわ

所在地 美咲町中

大谷川左岸にあり、急峻な谷の東側尾根上に所在する。標高は約四三〇mである。

縄張

立地

『改訂岡山県遺跡地図』は、谷に向かう西側は急坂で、南西方向に伸びる尾根筋を造成し、平坦面を十数面造作しているとする。

城史

『旭町史』に「横岩城」として、大谷地区

から川沿いに林道を一・五kmばかり上った所の岩山屋頂上にあり、杉貞之丞が守り、嘉吉から天正年間まで存続したと伝わりとする。

文献

『旭町史』通史編、『改訂岡山県遺跡地図』旭2



横岩城

83 三宮城

さんのみや

所在地 美咲町西坪和・東坪和

通谷川左岸の丘陵地上にあり、永年寺や三宮八幡神社付近に所在する。標高は約三九〇mである。通谷川左岸の丘陵地上にあり、永年寺や三宮八幡神社付近に所在する。標高は約三九〇mである。

立地

縄張

未詳。

城史

「作陽誌」は「三宮」として、久米郡北分西垺和・東垺和境にあり、天正四年三月三日に安芸・備前の兵の合戦があり、毛利輝元の将村上左衛門尉久成が陣していたが花房・岡氏らに攻撃され久成は打ち取れたとする。『久米郡誌』は「三宮城」として、今の八幡神社の境内とある。

『日本城郭全集』は「宮山城」「三光山城」の別名をあげ、八幡神社が城の本丸跡で、周囲には堀切の跡が残り、その西北の平地が二の丸で一部は畑となり、本丸の東南の一段低くなった平坦地が三の丸で永年寺が、西南には馬場・出丸・見張所などの跡が広々とした平坦地にあるとする。

天正八年（一五八〇）か、「村上某ト云者ノ城」を包圍した宇喜多直家は、明朝に総攻撃を加え、村上氏は岡家利に討ち取られたという（『浦上宇喜多両家記』）。また直家の家臣馬場重介は、直家が村上勘兵衛を大将とする「三ノ宮ノ城」を一気に攻取ろうとした際、勘兵衛と城から突き出た六〇人の兵を「一之城戸」まで追い返したという（『馬場十郎右衛門奉公書』など）。さらに「三の城」戦いで城へ一番乗りをした戸川秀安の異父弟岡与八郎が討死したという（『戸川記』）。花房正成は攻撃の先手となり、首級を上げたという（『寛永諸家系図伝』）。ちなみに直家の家臣有松与兵衛は、「大将村上」の首を取ったものの、岡家利に奪い取られたという（『有松源五左衛門奉公書』）。



三宮城

文献

『寛永諸家系図伝』、「戸川記」「浦上宇喜多両家記」、「作陽誌」、「備前軍記」、「美作略史」、「久米郡誌」、「美作古城史」、「日本城郭全集」久米郡8、『日本城郭大系』797、『建部町史』通史編、『旭町史』通史編、『美作垺和郷戦乱記』、『改訂岡山県遺跡地図』旭10

84 城尾・城之尾

所在地 美咲町西垺和

立地

西垺和地区南集落から南西に延伸する舌状尾根の突端に位置する。標高は三二二mである。

縄張

未詳。

城史

「作陽誌」は「城尾」として、久米郡北分西垺和村の地名で城があり、築いた者は不詳で、後ろに堀があると記す。『旭町誌』は現在も「城之尾」の地名が残るとする。

文献

「作陽誌」、『旭町誌』資料編

85 氏平屋敷

所在地 美咲町中垺和

立地

間祢き山から南西へ延伸する丘陵上にあり、氏平集落に接する尾根の突端に位置する。標高は約四一〇mである。

縄張

未詳。

城史

「作陽誌」は「氏平屋敷」として、久米郡北分中垺和谷村にあり、宇喜多秀家の時、「邑之豪民」の「垺和氏平」があり、子孫は氏平を名字として今もあると記す。『久米郡誌』は、中垺和畝にありとする。

文献

「作陽誌」、『久米郡誌』、『旭町誌』資料編

所在地 美咲町里

立地

通谷川左岸、西川簡易水道浄水場の北側・城山山頂にある。標高は約三四四mで、南西約三〇〇mに丸山城が所在する。山の西側の深い谷は「城谷」と呼ばれている。

縄張

背後に堀切を配し尾根の先端を城域として整備する。最高部に主郭を配し南側斜面に曲輪を連ねる。その先端には堀切が確認される。主郭は南北側に土塁を配し防禦を固めた。

城史

正保書上五四城の一で、「古城之覚」は久米北郡里村の「中山手之(城)」として、城主を江原和泉守佐次とする。「作陽誌」は「中山手堡」として、中山手南村にあり、江原城ともいう、山頂へ二〇〇間ばかり、西北七〇間余りに急坂あり、山上には日照りでも涸れない井戸あり、永正(一五〇四〜二二)の末に江原和泉守佐次が倭文庄を領し初めて築城し、子の又四郎久清、孫の兵庫介親次が相次ぎ居城、のち宇喜多秀家の加封で親次が大庭郡篠向城(真庭市三崎・大庭)に移り、嗣子なく絶えたと記す。「美作鬢鏡」と「美作鏡」は城主を「江原一族」とする。天保国絵図に「古城跡」とある。『美作古城史』は常山城あるいは江原城と呼ぶとする。『日本城郭全集』は山上の平坦地は二段となり、下の段が広く二の丸、三の丸の跡と考えられるといい、上段の本丸跡にきれいな水の溜まる井戸があるとする。

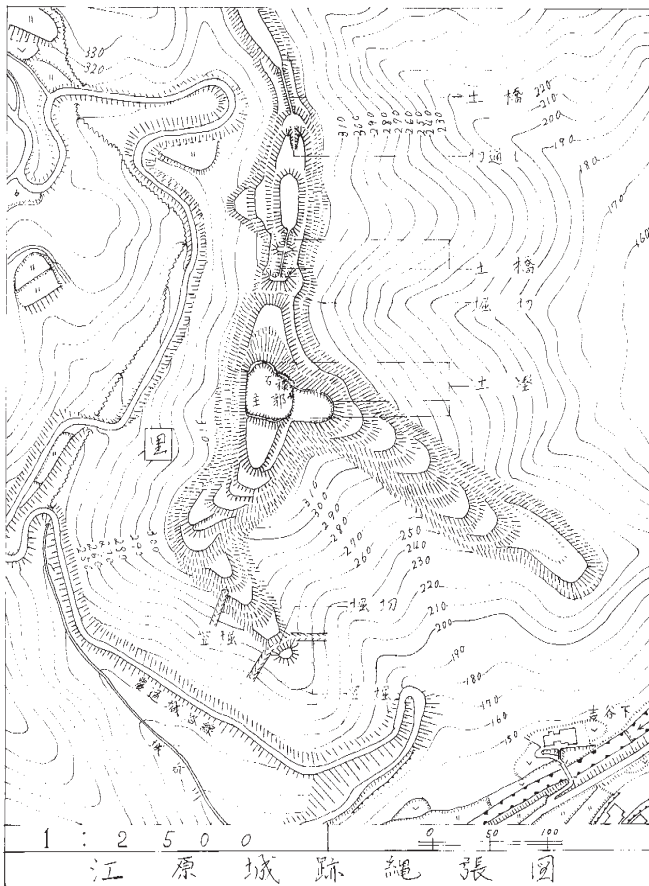


中山手城

文献

天正八年(一五八〇)二月、堺和の竹内為能は毛利方に与し、対して毛利氏は援兵を派遣、倭文の「城山」へ軍事行動を行ない、また同年三月、「城山」へ兵糧を籠めようとした宇喜多勢と、毛利方の成羽親成、栗原惣兵衛、高城(岡山市北区建部町和田南)の竹内氏が合戦している(「美作国諸家感状記」、「閩閩録」など)。

「武家聞伝記」、「作陽誌」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「美作略史」、「久米郡誌」、「岡山県通史」久米5、「倭文志稿」、「美作古城史」、「日本城郭全集」久米郡13、「日本城郭大系」780・815、「旭町史」通史編・資料編、「美作堺和郷戦乱記」、「改訂岡山県遺跡地図」旭6、「岡山の山城を歩く」83



87

丸山城まるやま

所在地 美咲町里

通谷川左岸、西川簡易水道浄水場の西側尾根上にある。標高は約三三〇mで、北東約三〇〇mに中山手城が所在する。

縄張

立地

城史

『旭町史』に「丸山城」として、里の七部田ななべにあり、江原城（中山手城）の西にあり、物見櫓や調練場の跡あり、面積は約四〇アールで現在は竹が生い茂る、通谷川を挟んで南岸にある三宮城と対峙して造られた砦かとする。

文献

『旭町史』通史編・資料編、『改訂岡山県遺跡地図』旭7



丸山城

89 一之瀬城・一瀬山城・大串城いちのせ いちのせやま おおくし

所在地 美咲町栃原

大瀬毘川右岸、南東に延伸する尾根の突端、標高約二四〇mのピーク・城山山上に所在する。

大串集落の北側の山に該当する。山の東側の谷を「城谷」という。

『改訂岡山県遺跡地図』は、堀切・石垣など遺存とする。

正保書上五四城の一で、「古城之覚」は久米北郡併和村の「一

之瀬之（城）」として、城主を竹内中務とする。「作陽誌」は「一瀬

山堡」として、中併和谷村にあり、麓の溪を一瀬といい、山頂へ

一二〇丈、上に妙見の祠あり、山の周り七町余り、竹内中務丞久盛

が居城と記す。天保国絵図に「一瀬ノ山」とのみある。『久米郡誌』

は「一瀬山城」として、大串城ともいい、麓から頂上まで約二〇〇

間、山腹に七箇所ななかほの堀があり、最も大きな堀は口径一間、奥行き四

間、深さ一間半、「樋の口」と称する所があり、そこに水を引いて

いたといい、城跡は三段で広さは四反歩、頂上の摩利支天の小祠は竹内家の守本尊で、毎年六月二三日に地区民が祭礼を行っているとする。『日本城郭全集』は「一之瀬城」として、麓からの最初の段

88

鳥首城とりくび（仮称）

所在地 美咲町栃原

大瀬毘川右岸、南側に延伸する標高約二二〇mの尾根突端に位置する。大瀬毘集落のすぐ東側に所在する。「鳥首」の地名がある。

『改訂岡山県遺跡地図』は、頂部に七〜一〇m四方の平坦面あり、尾根筋側は現在道路で切断とする。

未詳。『改訂岡山県遺跡地図』にも城名の記載はないが、「トリノクビ」の地にあり、烽火台などの小規模な施設かとする。

『改訂岡山県遺跡地図』旭14

立地

縄張

城史

文献

城史

縄張

立地



一之瀬城・一瀬山城・大串城

文
献

に当たり、三の丸と本丸の間の段に倉庫敷があるとす。

- 「武家聞伝記」、「作陽誌」、「美作餐鏡」、「美作鏡」、「久米郡誌」、「岡山県通史」久米7、「美作古城史」、「日本城郭全集」久米郡1、「日本柔術の源流竹内流」、「日本城郭大系」772、「建部町史」通史編、「美作併和郷戦乱記」、「改訂岡山県遺跡地図」旭17、「岡山の山城を歩く」

81

〔美咲町〕 柵原町

90 倉見屋敷くらみ（仮称）

所在地 美咲町安井

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

〔東作誌〕は勝南郡倉見村の古跡として、「倉見の権三ゴンサ」という長者の屋敷跡があると記す。

文献

〔東作誌〕

91 屋敷

所在地 美咲町塩気

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

〔東作誌〕に、勝南郡塩気村の「屋敷跡」として、「ウ子の台」の地にあり、居主不詳と記す。

文献

〔東作誌〕

92 長者屋敷ちやうじゃ

所在地 美咲町塩気

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

〔東作誌〕は勝南郡上間村の「長者屋敷」として、「岡ガ坂」の地にあり、昔、「岡ノ入道」という長者が住んだ屋敷といい、構が二段、上段（長さ一八間、横六間）、下段（長さ五二間、横一六間）と記す。

文献

〔東作誌〕

93 上間城うわま

所在地 美咲町百々・上間

上間地区に向かって東から迫り出してくる尾根上に位置する。標高は約二二〇mである。

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

〔古城之覚〕は英田郡百々村の「上間之（城）」として、金室城（美咲町行信）の「行信抱」とする。〔東作誌〕は「高尾山」として、上間村にかかり、城主を浦上左馬之助、本丸（長さ一八間、横一六間）、二丸（長さ三〇間、横六間）、南ノ丸（長さ一八間、横四間）、堀切（深さ七尺）、外通りに堀切（深一間、長さ一〇間、横に間）ありと記す。

文献

〔武家聞伝記〕、「美作鬢鏡」、「東作誌」、「美作鏡」、「美作古城記」、「岡山県勝田郡志」、「岡山県通史」勝田33、「美作古城史」、「日本城郭大系」779、『改訂岡山県遺跡地図』柵原40



上間城

94

成安城

所在地 美咲町百々

立地

百々地区郷集落に向かって南から迫り出してくる尾根上に位置する。標高は約一六〇mである。

縄張

未詳。
「東作誌」にはみえない。「日本城郭大系」は草刈某の居城とする。

文献

『岡山県通史』勝田36、『日本城郭大系』816、『改訂岡山県遺跡地図』柵原26



成安城

城史

「とする。」

正保書上五四城の一で、「古城之覚」は英田郡行延村の「金ふる」として、城主を浦山左馬助行信、別に「金室」として城主不詳とする。元禄二年

(二六八九)の書上(『美作古城史』所収)に、城主は浦上左馬丞、本丸(長さ一〇間、横一五間)、外に一間半の土塁あり、

二丸(長さ一四間、横一間)、三丸(長さ一〇間、横八間)、三丸には「弓とり場屋敷」(長さ一〇間、横八間)が、山の西に堀切(幅



金室城

95 金室城・金風呂城

所在地 美咲町行信

立地

柵原東小学校の約三〇〇m北に該当する独立丘陵上に所在する。標高は約一五八mである。乙和気川左岸に該当する。

縄張

集落背後の独立丘陵に位置し、東側の主郭と西側の別郭から構成される。主郭には西側に向けて土塁が配され、主郭と別郭の間に堀切がみられる。『改訂岡山県遺跡地図』では、「高二・五mの土塁が四〇m以上西側に遺存。この土塁から西側は高約五m、幅約四mの堀切となる。これより西側も平坦面があり、西端はなだらかに下が



文献

「東作誌」、『改訂岡山県遺跡地図』 柵原 54



城ノ尾山城

文献

三間、深さ一間半)、山内に井戸(約一間四方、深さ不詳)とある。「美作鬘鏡」は「金室城」として城主不詳、別に「金風呂城」として城主を浦山左馬助行重とする。「美作鏡」は「金室城」のみで城主を浦山左馬介行重とする。「東作誌」は「金風呂山」あるいは「金室」というとする。天保国絵図に「金室古城山」とある。「美作古城記」は本丸(二八間、横一五間)、二丸(二四間、横一一間)、三丸(一〇間、横八間)、衛場(二〇間、横五間)、西方に堀切あり、南が大手とし、永正(一五〇四〜二二)の頃から浦上左馬介行重が在城、大永年中(一五二二〜八)に三星城(美作市明見・入田)の城主・後藤勝政が鶴殿重内を遣わした際、些細な誤解から重内が討ち果たされたことから、勝政は城を攻囲、同三年(一五二三)三月二十七日に行重を始め討死し金室城は没落したと記す。

「武家聞伝記」、「美作鬘鏡」、「東作誌」、「美作鏡」、「美作古城記」、「美作略史」、「岡山県通史」勝田35、「美作古城史」、「日本城郭大系」790、「柵原町史」、「改訂岡山県遺跡地図」柵原30、「岡山の山城を歩く」100

96 城ノ尾山城

所在地 美咲町藤田上

立地

藤田八幡神社から連石神社方面に行く道路の南側に位置する。標高約二〇〇mの尾根上にあり、東に城跡が連続する。

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、尾根先端、高一m、長二〇mの土塁が遺存、郭面の下には犬走りが巡る、堀切はないとする。

城史

「東作誌」は勝南郡藤田下村の古城「城ノ尾山」として、城主不詳、本丸(二五間四方)、二丸(七間四方)、射場イバアツチ跡があると記す。

文献

「東作誌」、『改訂岡山県遺跡地図』 柵原 54



城ノ尾山城

97 藤田西城(仮称)

所在地 美咲町藤田上

立地

藤田八幡神社から連石神社方面に行く道路の南側に位置する。標高約二一〇mの尾根上にあり、東西に城跡が所在する。

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、三〇m程の平坦面あり。現状では堀切等は認められないとする。

城史

未詳。『改訂岡山県遺跡地図』にも城名の記載はない。

文献

56 『改訂岡山県遺跡地図』 柵原



藤田西城 (仮称)

98 藤田東城（仮称）

所在地 美咲町藤田上

立地

藤田八幡神社から連石神社方面に行く道路の南側に位置する。標高約一八〇mの尾根上にあり、西に城跡が連続する。

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、尾根筋を断ち切るように不自然な段あり、犬走り状の施設も巡るとする。

城史

未詳。『改訂岡山県遺跡地図』にも城名の記載はない。

文献

『改訂岡山県遺跡地図』 柵原 58

99 弾正屋敷

所在地 美咲町藤田上

立地

藤田上地区の上藤田集落にあり、県道三七九号線の西側、和気川左岸に該当する。和気郵便局の約一五〇m西の山沿い道脇に所在する。

縄張

未詳。

城史

『東作誌』は勝南郡藤田上村の「弾正屋敷」として、地藏堂の地にあり、浦上宗景の家臣日笠弾正の住居といい、

長さ一三間、横一一間と記す。

文献

『東作誌』、『美作古城史』、『日本城郭大系』 808、『改訂岡山県遺跡地図』 柵原 60



弾正屋敷

100 一村屋敷（仮称）

所在地 美咲町藤田上

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

『東作誌』は、勝南郡藤田上村の「一村長者」として、栗尾の一村の地にあり、昔、一村右衛門が住む、時代不詳と記す。

文献

『東作誌』

101 藤田屋敷

所在地 美咲町藤田上

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

『東作誌』は、勝南郡藤田上村の「藤田屋敷」として、丸山の地にあり、藤田八郎左衛門の屋敷、八郎左衛門は宇喜多氏に仕え、松尾村の難波藤介に討たれ、城尾坂の地に古墓の塚ありと記す。

文献

『東作誌』、『美作古城史』、『日本城郭大系』 820

102 矢の藤屋敷（仮称）

所在地 美咲町連石

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「東作誌」は勝南郡連石村の「長者屋敷」として、矢の藤の地にあり、昔「矢の藤刑部」という富裕の長者あり、時代不詳と記す。

文献

「東作誌」

103 鷺山城

所在地 美咲町飯岡

立地

吉井川左岸、飯岡地区の集落北側にある標高約二二八日の独立峰・鷺山山頂付近に所在する。

縄張

独立峰の山頂に主郭を構え、尾根伝いに曲輪を配した縄張りとなっている。北東側に堅堀に続く堀切が確認される。

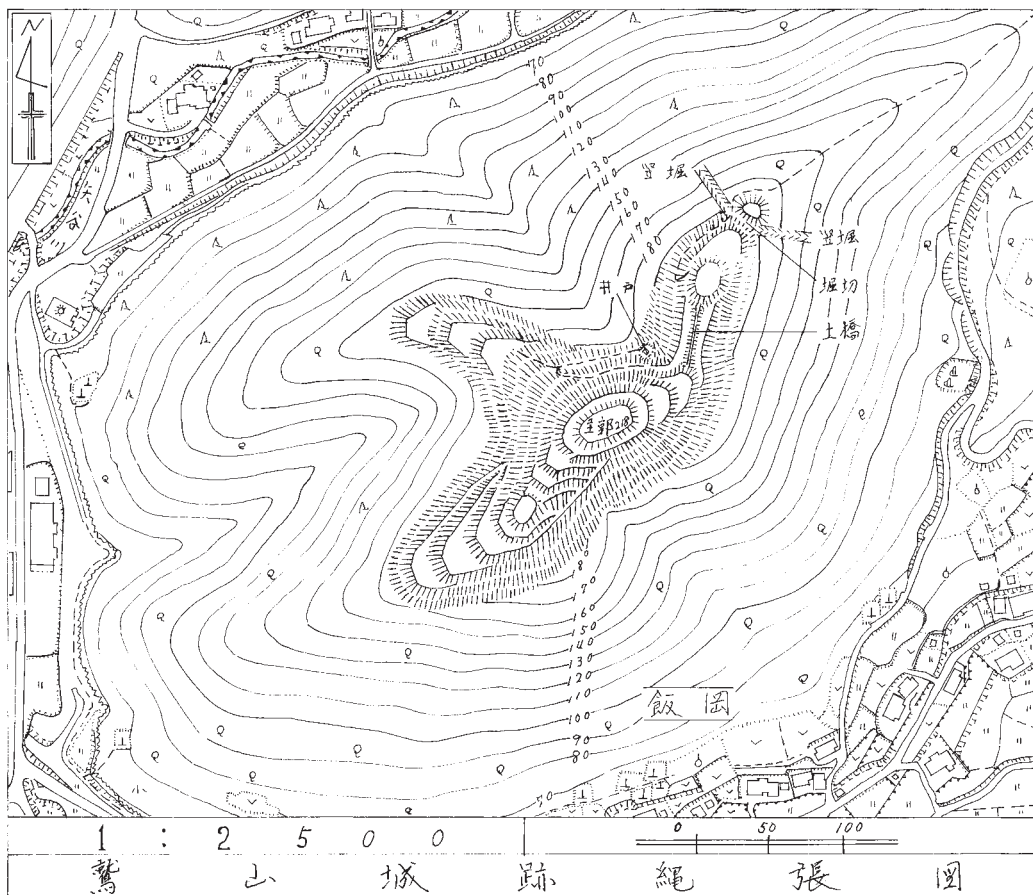
城史

正保書上五四城の一で、「古城之覚」は英田郡飯岡村の「鷺山之（城）」として、城主を星香藤内、別に勝田南郡「鷺山」として城主を江見二郎とする。「美作鬢鏡」は城主を江見次郎、「美作鬢鏡」は星香藤内・江見次郎の兩人とする。「東作誌」は古城の「鷺山」として、山の高さ四〇間、本丸、井戸ありと記す。「備前記」は星賀藤内について「鷺山ノ城主」で、城は「周匝ノ城」（赤磐市周匝）と同時に攻め落とされたともいうとする。天保国絵図に「鷺山古城跡」とある。永正一七年（一五二〇）七月、宇喜多能家は「作之飯岡原」で勝利し、敵軍は川で数十人が溺死、能家は首級を挙げたとする（「宇

文献

喜多能家寿像画賛」。

「武家聞伝記」、「備前記」、「美作鬢鏡」、「備前軍記」、「東作誌」、「美作古城記」、「美作鏡」、「美作略史」、「岡山県勝田郡志」、「岡山県通史」勝田31、「美作古城史」、「日本城郭大系」830、「柵原町史」、「改訂岡山県遺跡地図」柵原67、「岡山の山城を歩く」89



104 城ヶ山

所在地 美咲町小瀬

立地

吉井川右岸、小瀬集落の西側の独立峰・城ヶ山頂上付近に所在する。標高は約四〇六mである。

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、南北約三七m、東西約一五mの郭面あり、下方に幅約二・五mの平坦面が取り囲み、さらに三〜八m下に幅約五mの帯曲輪とみられる平坦面が巡り、南北両側は急峻であるが、東側に一、西側には帯曲輪の下に一〜二の平坦面があると考えられるとする。

城史

未詳。『改訂岡山県遺跡地図』にも城名の記載はない。

文献

『改訂岡山県遺跡地図』 柵原45



城ヶ山

105 藤原城（仮称）

所在地 美咲町藤原

立地

吉井川右岸、藤原地区の集落西端の山林部と接する位置にある。標高は約九〇m。未詳。

縄張

未詳。『改訂岡山県遺跡地図』にも城名の記載はない。

城史

文献

『改訂岡山県遺跡地図』 柵原50



藤原城（仮称）

106 山上城・山之上城・白尾山城

所在地 美咲町高城

立地

高城地区友次集落の緩斜面上にある。標高は約一九〇mで、東には藤原地区・吉ヶ原地区など吉井川流域部を一望できる。未詳。

縄張

城史

「古城之覚」は久米南郡山上村の「山上」として、城主不詳とする。「作陽誌」は「白尾山」として、山上・久木・栗子三村の境とする。「美作鏡」は「白尾山城」とする。『久米郡誌』は山之上の「白尾城」として、山上平坦な所が城跡で、平賀源内の居城とする『美作古城史』は「白尾城」として、平賀氏の子孫の談として、備前山方の山鳥城から平賀多良五郎がこの地に落居したとする。『日本城郭全集』は「白尾城」とする。

文献

「武家聞伝記」、「作陽誌」、「美作鏡」、「久米郡誌」、「岡山県通史」久米36、『美作古城史』、『日本城郭全集』補遺、『日本城郭大系』799・825、『改訂岡山県遺跡地図』 柵原48



山上城・山之上城・白尾山城

107

姥ヶ城うば

所在地 美咲町羽仁

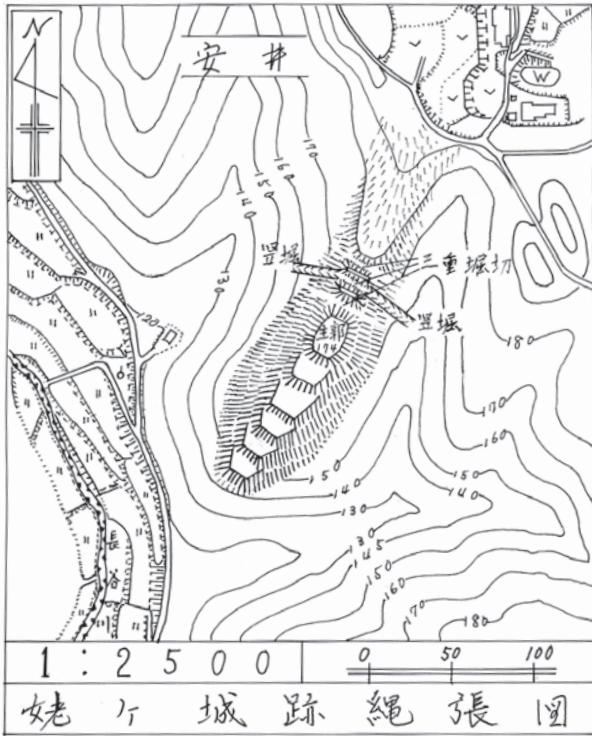
立地

羽仁地区の集落北東部の尾根上に所在する。乙和気川の右岸にあり、標高は約一六〇mである。背後に堀切を入れて尾根の先端に複数の曲輪を配して城域とする。

縄張

城史

古城之覚(ママ)は英田郡羽仁村の「姥ヶ(城)」として、城主を難波九郎左衛門尉とする。「東作誌」は勝南郡羽仁村の「姥ヶ城」



姥ヶ城

文献

として、長谷奥にあり、一方は書副村の内で、躑躅尾とするものと同じ、比丘尼の持城で、本丸(長さ一八間、横八間)、二丸(長さ二〇間、横二間)、三丸(長さ六間、横二間)、北に堀切(長さ一四間、横四間、深さ七尺)、外に堀切(長さ八間、横二間、深さ四尺)ありと記す。また書副村の項には「古城 躑躅尾山」として、城主不詳、絶頂に一〇間余り四方が平坦で、一名比丘尼城ともいうと記す。

『武家聞伝記』、「美作鬢鏡」、「東作誌」、「美作鏡」、「美作古城記」、「岡山県通史」勝田34、「美作古城史」、「日本城郭大系」778、「改訂岡山県遺跡地図」柵原23

108 鴛淵山城おし ぶち やま

所在地 美咲町羽仁

立地

吉井川左岸にあり、羽仁橋の上流約四五〇m地点にある谷北側の尾根上に位置する。標高は約一九〇mである。

縄張

最高部に主郭を配して数段の曲輪で主郭部を形成する。縁辺部には土塁が確認される。さらに南側斜面にも曲輪が続く。

城史

「東作誌」は勝南郡羽仁村の「古城」とし、ナブ谷にあり、城主は難波九郎左衛門、本丸(長さ三〇間、横九間)、北の二の丸(長さ一一間、横八間)、西の二丸(長さ六間、横五間)、東に三丸(長



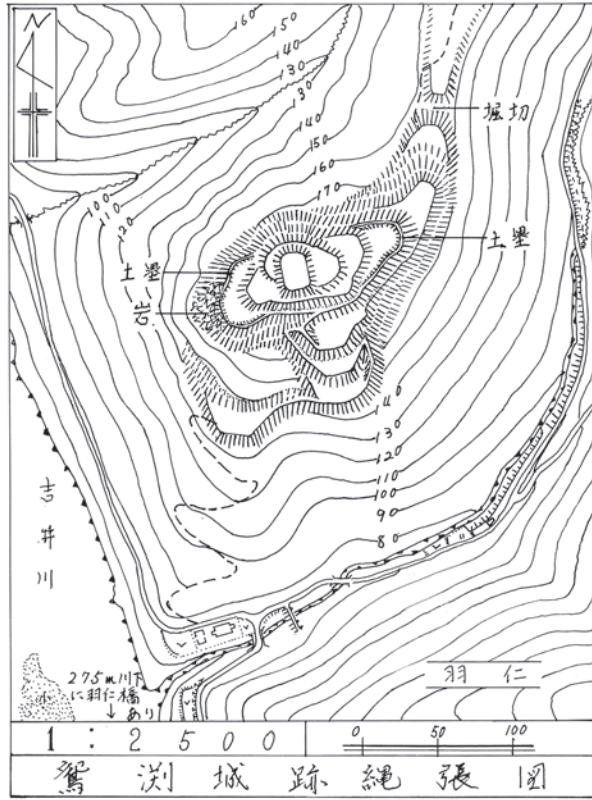
鴛淵山城

立地

吉井川右岸の大戸下地区原集落に、西側から迫り出してくる尾根のピーク上に所在する。標高約二三〇mで、吉井川対岸の周佐地区を

109 ととめき山城・轟ノ城

所在地 美咲町大戸下



文献

さ一〇間、横六間)、門屋敷(長さ二二間、横七間)、矢倉屋敷(長さ一二間、横五間)、二ノ門屋敷(長さ一二間、横四間)ありと記す。応仁四年(一四六七)正月、「美作国鴛淵山」での合戦で、備前国の領主難波行豊の兄九郎左衛門を始めとした十余人が討死し、赤松政則より感状を与えられたとある(「備前難波文書」)。「東作誌」、「美作略史」、「美作古城史」、「日本城郭大系」787、「柵原町史」、「改訂岡山県遺跡地図」柵原1、「岡山の山城を歩く」101

縄張

一望する。

『改訂岡山県遺跡地図』には、東西方向に延びた尾根上に東西二か所の平坦面があり、東側平坦面では東端に長さ五〜一五mの郭面が四か所造り出され、中央に長さ二〇m、幅四〇m以上の広い郭面。北側の一部には犬走り遺存。西端には高四〜五m、幅三m程度の堀切と土塁が巡る。



ととめき山城・轟ノ城

西側平坦面は郭面か不明だが、西端に大形の角礫が一〇〇個近く表出とする。

城史

「古城之覚」は久米南郡大戸村の「ととめき山」として、赤松一族が抱えるとする。「作陽誌」は「轟山」として、一に弾正山ともいい、入江弾正があつたと記す。「美作鬢鏡」は「ト、メキシ山城」、「美作鏡」は「轟ノ城」とする。「久米郡誌」は「轟城」として、山頂に城跡があり、入江弾正の居城で一名「弾正山」と呼んでいるとする。「改訂岡山県遺跡地図」は「大戸山轟城」とする。

「武家聞伝記」、「作陽誌」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「久米郡誌」、「岡山県通史」久米37、「美作古城史」、「日本城郭大系」813、「改訂岡山県遺跡地図」柵原16

文献

久米南町

110 真盛屋敷・実盛屋敷

所在地 久米南町北庄

立地 未詳。

縄張 未詳。

城史

「作陽誌」は「真盛屋敷」として、久米郡南分北庄山下村にあり、真盛については不詳と記す。『久米郡誌』は実盛にあり、口碑では

真盛は原田氏の従士というとする。

文献

「作陽誌」、『久米郡誌』、『美作古城史』

111 津野田屋敷

所在地 久米南町北庄

立地 未詳。

縄張 未詳。

城史

「作陽誌」は「角田越中守墓」として、久米郡南分北庄山手上村にあり、越中守は浦上宗景の家臣というと記す。『久米郡誌』は「津野田屋敷」として、菊丸野上の地にあり、後年屋敷跡を畑とし津野畑とい

い、その南約一町の広畑に墓の宝篋印塔があるとす。

文献

「作陽誌」、『久米郡誌』、『美作古城史』

112 御所屋敷・本丸

所在地 久米南町里方

立地

誕生寺の約三〇〇m北東の小丘陵上にある。誕生寺門前付近を一望する。

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、祠の北側に石組の井戸、犬走り、郭面、竪堀とみられる遺構を認め、頂上部は耕地化とする。

城史

「作陽誌」は「御所屋敷」として、久米郡南分北庄里方村にあり、誕生寺の東北約二町、法然の父漆間時国の屋敷であると記す。『美作略史』は、「御所屋敷」の他に「本丸」というとし、『久米郡誌』も「本丸城」または「御所屋敷」として、誕生寺の東北約二町、本丸の地にあるとする。なお『日本城郭全集』は「本丸城」、別名を「御所屋敷」として、誕生寺境内にあり、その山門を大手門として紹介している。

文献

「作陽誌」、『美作略史』、『久米郡誌』、『美作古城史』、『日本城郭全集』久米郡18、『日本城郭大系』822、『改訂岡山県遺跡地図』久米南13



御所屋敷・本丸

113 原田監物屋敷（仮称）

所在地 久米南町里方

北庄地区行友集落の北西山林部にあり、標高は約二八〇mである。誕生寺川支流の片目川上流部に位置する。

未詳。

立地

「作陽誌」は「原田監物故宮」として、久米郡南分北庄里方村にあり、原田監物が住むとする。『久米郡誌』は本丸城（久米南町里方）の北約一町にあるとする。『美作古城史』は久米南町北庄里方の「原田故宮」として、原田監物忠光の屋敷跡とする。

縄張

「作陽誌」、「久米郡誌」、「美作古城史」、「日本城郭全集」久米郡15、『日本城郭大系』818、『改訂岡山県遺跡地図』久米南4

114 奥谷城

所在地 久米南町南庄

清水寺から南庄地区の山ノ坊集落方面にかけて東に延伸する尾根上にあり、標高は約三六〇mである。久米南町南庄地区と美咲町境地区をつなぐ広域農道が、北庄地区森国集落にかけて北に大きく湾曲する部分の南側に位置する。

立地

縄張

「古城之覚」は久米南郡南庄村の「奥谷」として、城主不詳とする。「作陽誌」は「奥谷堡」として、高さ九〇間、山上は



奥谷城

東西一三〇間、南北二四〇間で、何人が住むか不明とする。『久米郡誌』

は三〇〇余尺の狐峯で、南を除く三面は急峻、南は堀が二つと三段があり、本丸（二〇間、八間）があり、城主は滝川河内守藤原久高で、大將軍城（久米郡久米南町南庄）の城主との戦いで没落したとする。

「武家聞伝記」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「久米郡誌」、「岡山県通史」久米25、『美作古城史』、『日本城郭全集』補遺、『日本城郭大系』786、『改訂岡山県遺跡地図』久米南31

文献

未詳。

立地

115 構屋敷

所在地 久米南町南庄

未詳。

未詳。

『久米郡誌』は構の地にあり、大將軍城（久米郡久米南町南庄）の城主の部将某が守る城跡と言いつづられているとする。

『久米郡誌』

文献

縄張

立地

116 大將軍城

所在地 久米南町南庄

南庄地区の中筋集落に東に向かって迫り出してくる尾根上にある。標高は約二五九mで、約五〇〇m東に奥谷城がある。

未詳。

『久米郡誌』は大將軍の地にあり、山の高さわずか一〇〇余尺、頂上が本丸跡（約一段歩）で、南に三段、周囲に幅一間余りの堀があり、

立地

縄張

城史

文 献

城主は奥谷城主滝川久高と畑の平での遭遇戦で敗れ没落したとする。『美作古城史』は近時耕地整理のため全部田となり旧状は認められな
いとす。『久米郡誌』、『美作古城史』、『日本城郭全集』久米郡10、『日本城郭大系』803、『改訂岡山県遺跡地図』久米南30



大将軍城

117 吹上城

所在地 久米南町南庄

立 地

未詳。

縄 張

未詳。

城 史

『久米郡誌』は吹上の地にあり、山頂の平坦部中央に城山と刻んだ石と愛宿金刀比羅宮の碑があり、大正七年耕地整理のため水田となつたとある。『日本城郭全集』は「吹上城」とする。

文 献

『久米郡誌』、『日本城郭全集』補遺

118 秋小屋城・本丸城

所在地 久米南町塩之内

立 地

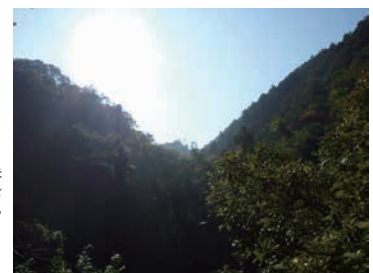
久米南町泰山寺地区にある泰山寺周辺の山林部に所在する。泰山寺のすぐ南側に位置し、標高は約三〇〇mである。

縄 張

『改訂岡山県遺跡地図』は、頂上は開墾され、林と水田になっており、堀切・土塁等、斜面の遺構は確認できないとする。

城 史

『作陽誌』は「秋小屋故営」として、久米郡南分下弓削村にあり、高さ一三〇間、小坂宇兵衛（註）があり、もと与三郎を称し浦上宗景に仕え、備前国から移って山手村の小松尾（久米南町下二ヶ）と当城にありと記す。『日本城郭全集』は「本丸城」、「秋



秋小屋城・本丸城

の故営」ともいうとし、頂上の平坦地は四角形をなし、南方は二段に分かれて上が本丸、下が二の丸・三の丸、東方には築地、門跡、堀跡などが明確に残るとする。『建部町史』は下弓削の字本丸にありとする。

文 献

『作陽誌』、『美作略史』、『美作古城史』、『弓削町史』、『日本城郭全集』久米郡17、『日本城郭大系』770、『建部町史』通史編、『改訂岡山県遺跡地図』久米南48

119 横部屋敷

所在地 久米南町羽出木

立 地

未詳。

縄 張

未詳。

城 史

『久米郡誌』は、羽出木の門の地に「横部屋敷」ありとし、花房職之の妹婿横部治郎左衛門が、大清水城主宗間某の隠家に乗っ取って住んだというが、今は山林となるとする。

文 献

『久米郡誌』、『美作古城史』

120 長者屋敷

所在地 久米南町松

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

『久米郡誌』は、長者ヶ成の山頂にありとし、屋敷は東南に面して東西四〇間、南北二五間、その西に本宅跡、東に築山泉水の跡あり、前の谷から三間幅の登路があり、弓削部長者師古が住むとする。

文献

『久米郡誌』

121 樋の元城

所在地 久米南町上弓削

立地

県道五二号線が国道五三号線と合流する部分の南東部、塩之内川の左岸に位置する。塩之内川・県道五二号線方面に向かって南から延申してくる緩やかな尾根の突端部にあり、標高は約一六〇mである。

縄張

未詳。

城史

『久米郡誌』は「樋の元城」として、瀬戸の地にあり、伝説に樋元運平が砦を構えていたといい、年代や事跡不詳。

文献

『久米郡誌』、『美作古城史』、『日本城郭全集』久米郡16、『日本城郭大系』819、『改訂岡山県遺跡地図』久米南47



樋の元城

122 上原陣

所在地 久米南町下弓削

立地

弓削高校から約五〇〇m南にある、北に迫り出してくる尾根上にある。

標高は約一六〇mである。

縄張

未詳。

城史

「作陽誌」は「上原墓」として、久米郡南分下弓削村にあり、出雲尼子氏の将上原某が蓮華寺・小松城を攻撃したが敗死し、陣所は沖原の地であると記す。

文献

「作陽誌」、『久米郡誌』、『美作古城史』、『日本城郭全集』補遺、『日本城郭大系』776、『改訂岡山県遺跡地図』久米南45



上原陣

123 将監山城

所在地 久米南町上二ヶ

立地

仏教寺から約四〇〇m北の尾根上に位置する。標高は約三〇〇mである。

縄張

未詳。

城史

明治二八年（一八九五）の道別神社書上（『美作古城史』所収）に、赤松円心の家臣梶村将監が居城し、「殿様林」「シヨウガン山」といい、草木城（久米南町下二ヶ）の城主赤松氏により落城したとある。

文献

『美作古城史』、『日本城郭大系』798、『改訂岡山県遺跡地図』久米南40

所在地 久米南町上二ヶ

久米南町指定史跡

立地

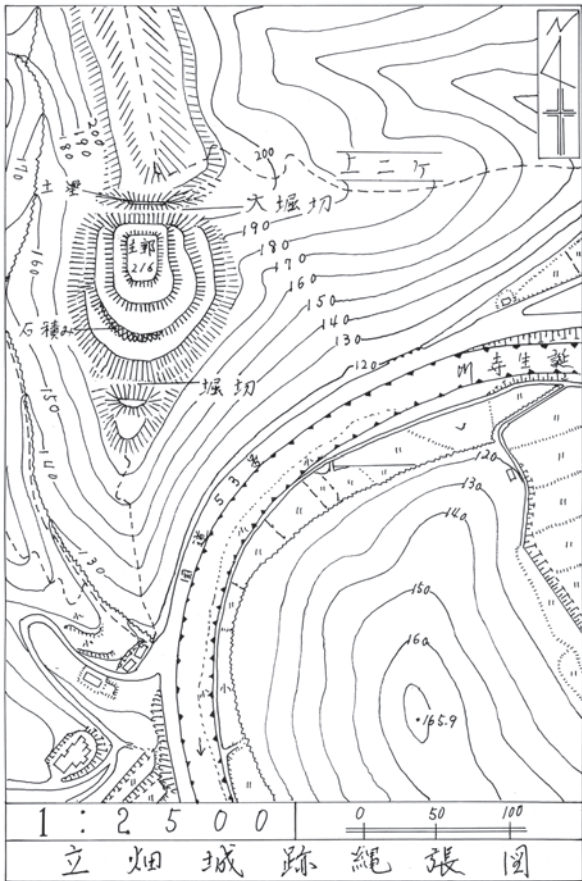
国道五三号線の西側、誕生寺川右岸で、弓削橋から約四〇〇m西にある。南に延伸する標高約二二〇mの尾根先端に位置する。立畑山山頂。

縄張

尾根に堀切を配し先端を城域として整備する。最高部を主郭として帯曲輪を連ねる。

城史

「古城之覚」は久米南郡上二ヶ村の「立畑」として、城主不詳



立畑城

文献

とする。「作陽誌」は「立畑山」として、山上に陣跡ありと記す。「久米郡誌」は、立畑山にあつて高さ約五〇〇尺、山上の約七畝が六段となつており、本丸は中央の最高部、東に堀があり、東の中腹に「倉屋敷」（約四〇坪）がある、宇喜多氏将士の屯営のあとかとする。「武家聞伝記」、「作陽誌」、「美作鬘鏡」、「美作鏡」、「久米郡誌」、「岡山県通史」久米26、「美作古城史」、「日本城郭大系」807、「改訂岡山県遺跡地図」久米南42、「久米南町の文化財」

125 れんげ
蓮華寺城・連下地城

所在地 久米南町下二ヶ・全間

立地

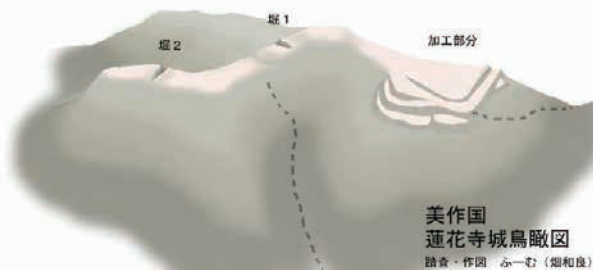
全間川右岸で、別所集落の北側にある独立峰上に位置する。標高は約三〇四mであり、全間川流域を一望する。

縄張

畑和良氏の歴史サイト「落穂ひろい」によれば、自然の尾根に補助的な設備を施したのみの大変簡略な縄張り。典型的な臨戦用の陣地、陣城と呼ばれるものに類する遺構とし、東端の加工された空間、中央～西端の堀切で区画された自然平坦面という二重構造がみられるとする。

城史

「古城之覚」は久米南郡下二ヶ村の「連下地」として、城主を難波十郎左衛門とする。「作陽誌」は「蓮花寺」として、菅納・沼元・三浦氏らが「蓮華寺山」拠り、小坂右兵衛と浦上宗



蓮華寺城・連下地城鳥瞰図 (畑和良作図)

127 草木城

所在地 久米南町下二ヶ

立地

国道五三号線の西側にあり、誕生寺川の右岸の山間部にある。標高約二〇〇mで、約三〇〇m北には谷を挟んで大西構がある。

背後に堀切を入れ尾根の先端を城域とする。最高部に主郭を構えて斜面に曲輪を連ねるプランとなっている。

城史

正保書上五四城の一で、「古城之覚」



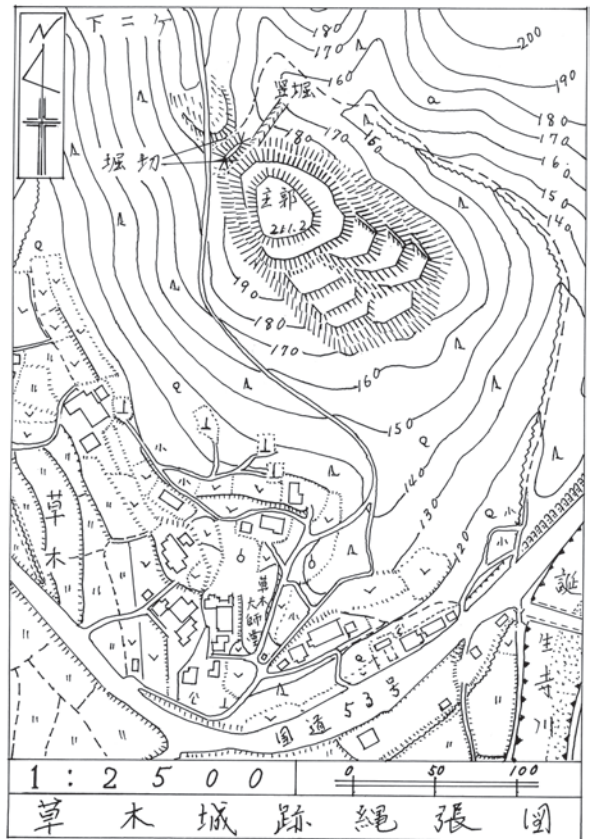
草木城

は久米南郡下二ヶ村の「草木」として、城主を赤松孫次郎とする。元禄二年（一六八九）の「下神目村書上」（『美作古城史』所収）には、伊勢畑城（岡山市北区建部町下神目）の赤松上野守家盛が没したのち、赤松孫次郎則勝が出雲国尼子氏の押さえとして播磨国から来て「草木之城」にあつたとする。「美作鏡」は城主を赤松左衛門家盛・赤松孫五郎則勝の二人とする。天保国絵図に「草木古城跡」とある。『久米郡誌』は、草木の地にあり、頂上に本丸跡、南面に数段、北に堀切があるなどとする。『日本城郭全集』は「草木城」とし、山頂は数段に区切られ、最上段の本丸は周囲約三〇〇m、ほぼ円形で中央に城主赤松氏を祀る小祠が二つ並び、周囲は石垣と土塁の痕跡がある、東と西は絶壁で、南に二の丸、三の丸、馬場、食糧庫などの跡が数段あり、北側に深い堀跡があるとする。

延文五年（正平一五年。一三六〇）八月、山名時氏の因幡・美作両国での布陣に対し、赤松世貞・則祐が攻撃し降参した城のうちに「草木」がみえる（『太平記』）。あるいはこの城か。

文献

「太平記」、「武家聞伝記」、「美作鬘鏡」、「美作鏡」、「久米郡誌」、「岡山県通史」久米28、「美作古城史」、「弓削町史」、「日本城郭全集」久米郡5、「日本城郭大系」793、「建部町史」通史編、「改訂岡山県遺跡地図」久米南76



128 草木西城（仮称）

所在地 久米南町下二ヶ

立地

誕生寺川右岸、国道五三号線の西側に位置し、標高約二四〇mの尾根上に所在する。約四〇〇m東に草木城がある。

縄張

未詳。

城史

未詳。『改訂岡山県遺跡地図』にも城名の記載はない。

文献

『改訂岡山県遺跡地図』久米南75

129 小松城

所在地 久米南町下二ヶ・下弓削

立地

上二ヶ地区の全間川右岸にある小丸山山頂付近に位置する。標高は約三一六mである。

縄張

未詳。

城史

「古城之覚」は久米南郡下二ヶ村の「小松」として、城主を沼本新右衛門とする。「作陽誌」は「小松山」として、沼元与太郎久家の家臣河島彦右衛門・北島弥右衛門が居城、『久米郡誌』は、下二ヶの東端全間境にあり、高さ約五〇〇尺、東に堀があり、最高部に本丸が残るとする。



小松城

文献

浦上氏と宇喜多氏の対立により、浦上勢は天正三年（一五七五）七月八日、宇喜多方の沼元彦右衛門尉らの拠る「小松城」の岸涯まで取り詰め、二・三丸まで切り入られたが、沼元与太郎はこれを退け、二人は宇喜多直家から太刀と馬を与えられている（新出沼元家文書）。
「武家聞伝記」、「作陽誌」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「久米郡誌」、「岡山県通史」久米30、『美作古城史』、『弓削町史』、『日本城郭大系』795、岸田一九九二、『建部町史』通史編、『改訂岡山県遺跡地図』久米南96

130 小松尾城

所在地 久米南町下二ヶ

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

「作陽誌」は「小松尾」として小坂与三郎のち右兵衛が居城と記す。『久米郡誌』には下二ヶ山手にあり、小坂与三郎が守るとする。

文献

「作陽誌」、「久米郡誌」

131 沼元構・沼元城・本丸城

所在地 久米南町西畑

立地

誕生寺川左岸にあり、宮地地区の西側、JR津山線を隔てた西畑山の南西中腹に所在する。標高約一六〇mである。

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、小郭二面と主郭が存在する。また東方向に広がる平坦面も城の一連の施設の可能性があると考えられるとする。

城史

「作陽誌」は「沼元故宮」として、久米郡南分下二箇宮地村にあり、沼元新左衛門（つなみ）があり、のち備中国で戦死したと記す。『久米郡誌』は「本丸城」として、宮地の西部にあつて高さ三〇〇尺、山上の周囲約五町、宅地は回字形で、東に本丸、西に二の丸の跡あり、土塁や堀跡もあるがほとんど畑となり、わずかに西北部が山林とする。

永祿八年（一五六五）八月、宇喜多直家は備前国の侍、難波三郎右衛門尉に宛てて、「沼元構」を取り詰めれば、備中国の三村家親は救援のため出勢してくるだろうから、一戦をもって両国の合戦を決着したいなどと書き送っている（岡山県立博物館所蔵文書）。

備考

『改訂岡山県遺跡地図』には城名の記載がない。



沼元構・沼元城・本丸城

文献

『作陽誌』、『久米郡誌』、『美作古城史』、『建部町史』 通史編、『改訂岡山県遺跡地図』 久米南80

132 上の殿城・上殿城

所在地 糸南町・岡山市建部町三明寺

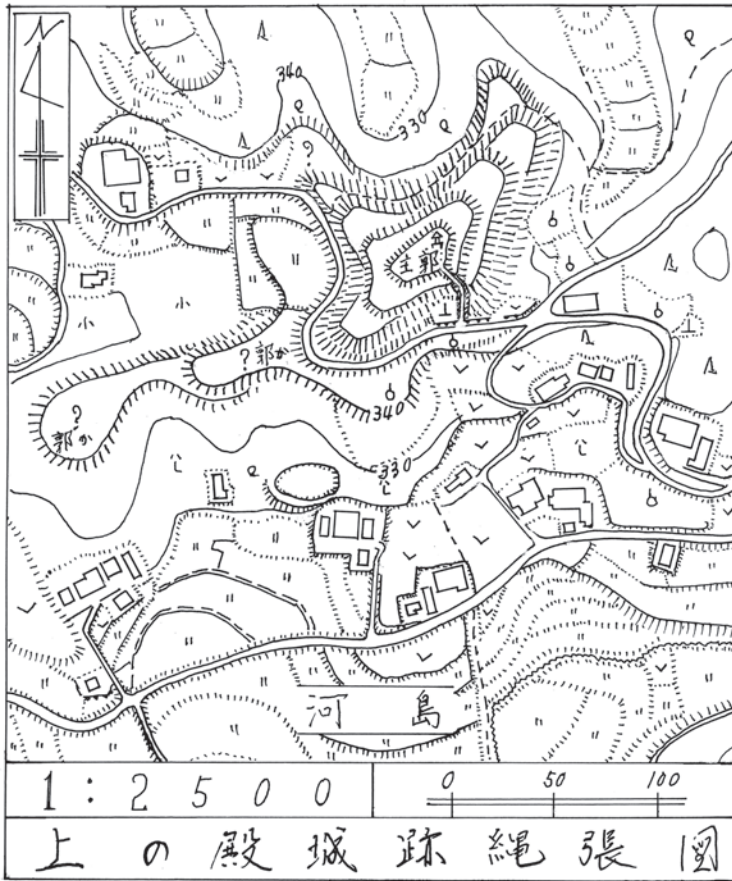
久米南町指定史跡

立地

中羽地区河島集落に向かって南に延伸する尾根の突端に位置する。標高は約三五〇mで、角石谷方面への交通の要衝に該当する。

縄張

集落に伸びる尾根に城域を構えたものであり、最高部に主郭を構え周囲に曲輪を連ねるプランとなっている。



城史

『久米郡誌』に「上の殿城」とし、河島の地にあり、山頂に城跡があり、阿波国河島城主河島左近将監惟家が永禄六年（一五六三）に毛利輝元に従い尼子氏を攻めるため当地に居住、同一〇年二月に一族中の反逆者により落城などとする。なお『久米南町の文化財』は「上殿城」とする。

文献

『久米郡誌』、『美作古城史』、『日本城郭大系』775、『久米南町の文化財』、『改訂岡山県遺跡地図』久米南38

133 龍王山城

所在地 久米南町下羽

久米南町指定史跡

立地

下羽地区長谷集落の北側にある独立峰・竜王山山頂付近に所在する。標高は約三六七mである。

縄張

龍王山山頂を主郭とし周囲に曲輪が確認される。主郭の北側から西側、南側にかけて横堀を廻す。南側では張出し部分がみられる。

城史

「古城之覚」は久米南郡下羽村の「龍王山」として、城主を岸備前守とする。「作陽誌」は「龍王山」として、城跡があり四方に堀切があり、かつて貴志修理



上の殿城・上殿城

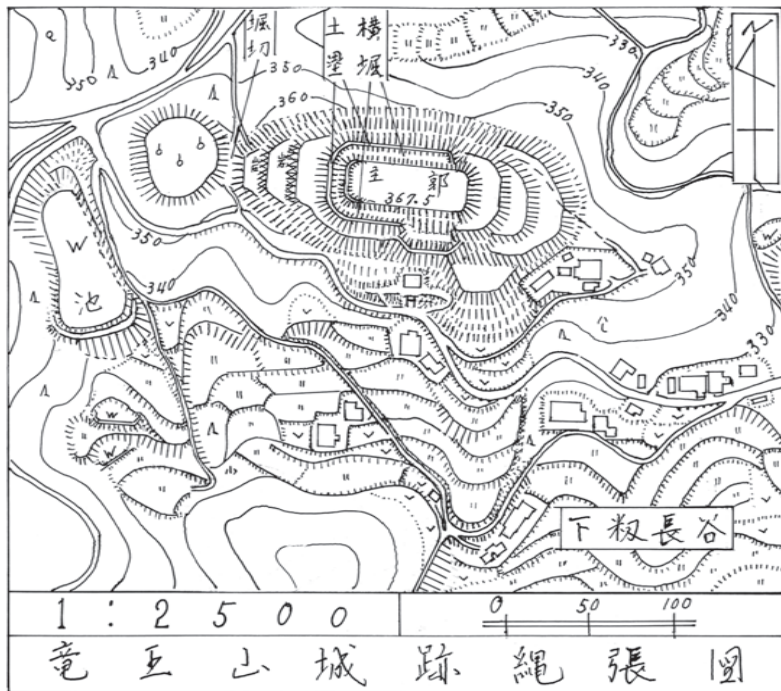


龍王山城

文献

進（または備前守）氏秀があり、氏秀は元龜年中（一五七〇〜三）に高城（岡山市北区建部町和田南）で宇喜多直家と戦い敗死したと記す。『久米郡誌』は龍王山にあり、山頂に本丸（東西四〇間、南北一七間）あり、周囲に堀がめぐり、南は三段、東は五段にあっており（全広東西四五〇間、南北二二〇間）、今は鬱蒼とした深林であるとする。

103 武家聞伝記、「作陽誌」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「久米郡誌」、「岡山通史」久米31、「美作古城史」、「日本城郭大系」827、「建部町史」通史編、「改訂岡山県遺跡地図」久米南53・54、「岡山の山城を歩く」



134 高田屋敷

所在地 久米南町上神目

立地
縄張

未詳。

城史

「作陽誌」は「高田屋敷」として、久米郡南分上神目村にあり、高田長門守が居住して以降、代々の屋敷で、子孫は神目の地に広がり、先祖の居所を高田構屋敷というと記す。『久米郡誌』は「高田構屋敷」として、田圃の中にあつて宅地は畑、堀跡は水田となつていいるとする。

文献

「作陽誌」、「久米郡誌」、「美作古城史」

135 安盛城

所在地 久米南町上神目

久米南町指定史跡

立地

下二ヶ地区の中田川左岸にあり、急峻な尾根上にある。標高は約二三〇mである。

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、頂上に平坦面ありとする。

城史

「古城之覚」は久米南郡上神目原村の「安盛」として、城主不詳とする。「作陽誌」は「安盛故宮」として、上神目村にあり、赤松孫五郎が有りと記し、「美作鏡」も城主を赤松孫五郎則勝とする。『久米郡誌』は上神目



安盛城

立地
縄張

未詳。
未詳。

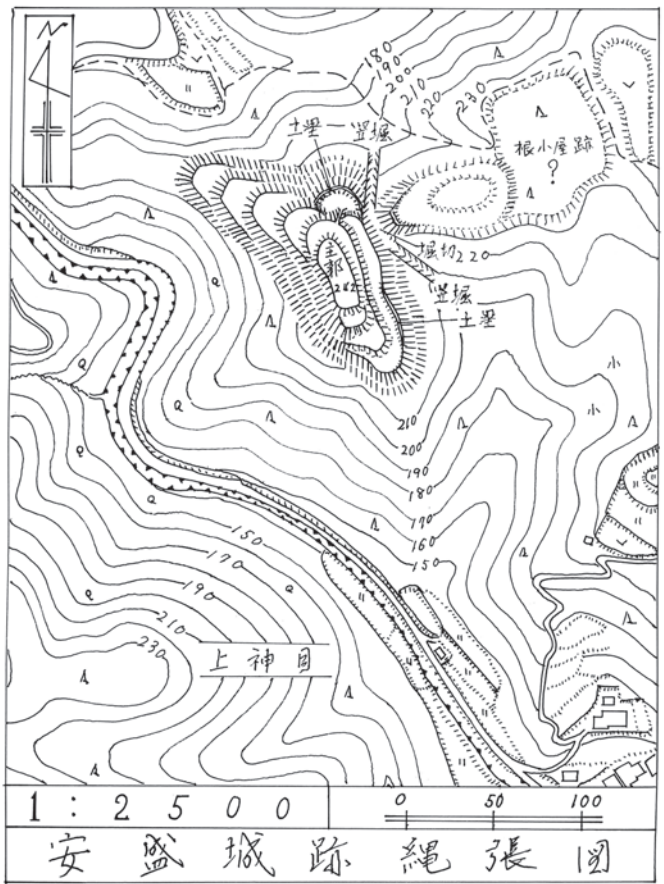
136

三村屋敷

所在地 久米南町神目中

文献

の字安盛にあり、高さ四五〇尺、わずかに東面を除く三面とも峻険な絶壁で麓には川をめぐらせているとする。
「武家聞伝記」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「岡山県通史」久米35、「美作古城史」、「日本城郭大系」824、「久米南町の文化財」、「改訂岡山県遺跡地図」久米南39、「岡山の山城を歩く」91



文献

『武家聞伝記』、「作陽誌」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「久米郡誌」、「岡山県通史」久米27、「美作古城史」、「日本城郭大系」782・783、「建部町史」通史編、「久米南町の文化財」、「改訂岡山県遺跡地図」久米南97、「岡山の山城を歩く」105

城史

「古城之覚」は久米南郡下二ヶ山手村の「大上之(城)」として、城主不詳とする。「作陽誌」は「大植故宮」として、山の東に「米穴」という岩窟ありと記す。『久米郡誌』は、山手の東部にあり全間川に臨む、東北の二面は峻険で山頂の城跡は数段となっているとする。『日本城郭大系』は永祿・元亀(一五五八〜七三)の頃、沼元久家が在城とする。



大上城・大植城

縄張

立地

137 大上城・大植城

所在地 久米南町山手

久米南町指定史跡

文献

『久米郡誌』は、字縄手にあり、成羽城(高梁市成羽町下原)の城主三村家親が寓居を構えていたところとする。『久米郡誌』

城史

138 右近屋敷・左近屋敷

所在地 久米南町安ヶ嶋

立地

未詳。

縄張

未詳。

城史

『久米郡誌』に安ヶ嶋の東に右近屋敷があり、付近に七人塚や右近の墓あり、西に左近屋敷があるとす。

文献

『久米郡誌』

〔岡山市〕 御津郡建部町

139 鶴田城・城山

所在地 岡山市北区建部町鶴田

立地

旭川左岸にあり、旭川と滝谷川との合流地点、鶴田集落北東の城山山頂に位置する。標高約二六三mである。国道五三号線、建部町鶴田地区の豊楽寺の先、県道三〇号「落合・建部」線の大蔵方面に右折し、一kmほど上がった右手の山。

縄張

山頂に主郭を構え地形に沿って曲輪が並ぶ縄張りとなっている。北側の尾根筋に堅堀と堀切が配され遮断する役割を果たす。主郭と西側の曲輪には石垣が確認される。井戸跡があるが、明確な虎口の遺構はみられない。

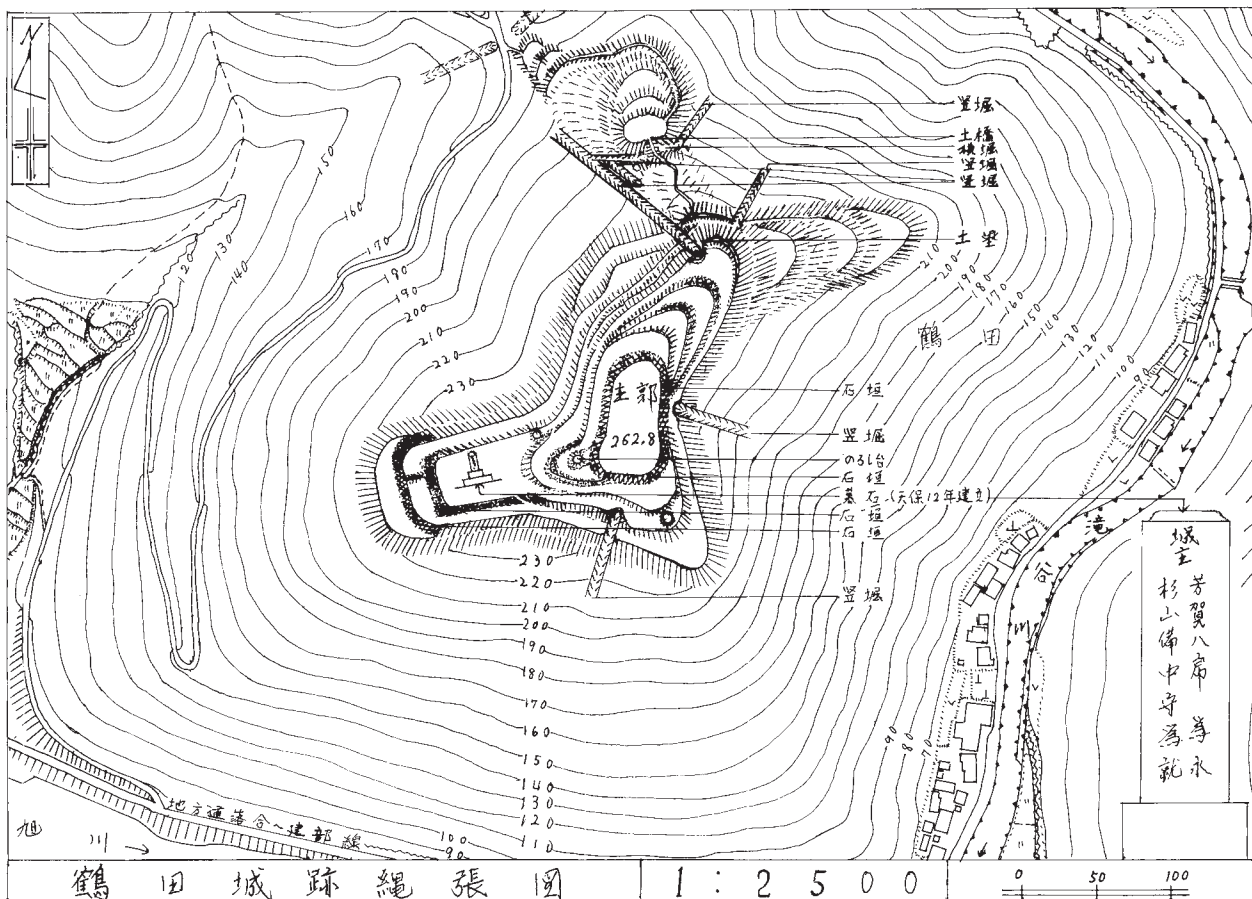
現在、城域は竹林などになっており後世の改変の可能性も考えられるが旭川水系を北上する宇喜多氏段階による改修の可能性も検討する必要がある。

城史

「古城之覚」は久米北郡和田南村の「鶴田之（城）」として、城主を塀和八郎為長とする。「作陽誌」は「鶴田堡」として、和田南村にあり、山の周り二〇町、城主を塀和八郎為長といい、一説に元の城名を「鶴鳴」として閉国大夫重実が築城、代々居城したと記す。「美作鬘鏡」



鶴田城・城山



と「美作鏡」は城主を「埴和八郎」とする。天保国絵図に「埴和古城跡」とある。

嘉吉元年（一四四二）八月、播磨国の赤松勢が「埴和右京亮城」を攻撃し、城衆は自ら城に放火し退散、右京亮は城に向かったが辿り着けず、他所にあるという（「建内記」）。あるいはこの城か。天正八年（一五八〇）閏三月、小早川隆景と吉川元春は、宇喜多直家が「埴和表」に出勢との情報に梅森城（真庭市上山）に陣替している（「閩閩録」）。

「武家聞伝記」、「作陽誌」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「久米郡誌」、「岡山県通史」久米11、「美作古城史」、「日本城郭全集」御津郡5、「日本城郭大系」122、「建部町史」通史編・地区誌・史料編、「美作埴和郷戦乱記」、「改訂岡山県遺跡地図」建部9、「岡山の山城を歩く」77

文献

140 石丸屋敷

所在地 岡山市北区建部町和田南

長尾上集落の北、高倉山から南に延伸する丘陵の緩斜面上に所在する。標高は約四四〇mである。

『改訂岡山県遺跡地図』は、北東と北西側に土塁があり、南に立地する高城と関連するかとする。

「作陽誌」は和田村の石丸に杉山備中守為就の墓があり、その孫竹内五郎左衛門久次は石丸に旧宅があるとす。文政一一年（一八二八）の「日下開山竹内系図江戸書上写」（『美作古城史』所収）鶴田城の城主杉山備中守為就が落城後に「石丸屋敷」に住み同所を没したとある。

須恵器・土師器。

『美作古城史』、『改訂岡山県遺跡地図』建部4

備考

141 高城・高山城

所在地 岡山市北区建部町和田南

立地

滝谷川右岸にあり、大地地区の北側にある高城山山頂に所在する。標高は三三六・九mである。

南北に二つの城域から成る。それぞれの単位で独自に機能できるようになっており、二つの単郭構造の山城が併存する形になっている。

南側の城域は土塁囲みの主郭と第二郭、及び帯曲輪から主郭部が構成される。主郭は北東側の曲輪は土塁で四周を囲む。南側の第二郭と東側の下位曲輪も土塁で囲むと共に石垣が用いられた。南側の尾根筋に向けて曲輪の塁線に土塁が構えられた。北側の尾根筋に対しては三本の連続堀切を配して遮断する。そして堀切と連動させる形で西側斜面に畝状空堀群を築き、西側斜面からの侵入に対して防禦の意識が強く反映された縄張りと呼べる。一方、北側の城域については、土塁囲みの主郭部が中央を占め、周囲に帯曲輪や下位曲輪が続く。主郭部の土塁は直線的に仕上げられ横矢のような折れがみられる。後に主郭部のみ改修された可能性が考えられる。

正保書上五四城の一で、「古城之覚」は久米北郡角石畝村の「高山之（城）」として、城主を竹内源十郎とする。「作陽誌」は「高城堡」として、和田南村にあり、周り三〇町ばかり、かつて竹内善十郎為能・貴志備前守氏秀らが把つて毛利輝元に属し、のち宇喜多直家が落城させた、塚尾・阿古倍・石休の地に陣所跡があると記す。また籠城

縄張

城史



高城・高山城

142 松端山・松ヶ端

所在地 岡山市北区建部町三明寺

立地

『改訂岡山県遺跡地図』では、鶴田城（岡山市北区建部町和田南）に対して、滝谷川を挟んで対面する山から、さらに北東に峰続きとなる標高約三七〇mの松端山山頂に所在すると記載する。ただし『美作埴和郷戦乱記』では、標高三七二mの山頂そのものを「松端山」、別名を「松ヶ鼻」とする。また別に「松ヶ端」の地名が残るとも記載する。

縄張

『建部町史』は土塁の跡が残るとし、『美作埴和郷戦乱記』は、土塁の跡が残るとする。また尾崎聡氏も「矮小な築地と塹壕が残っているのみ」とする。

城史

『作陽誌』は、松端山に備前国の兵が陣して鶴田城（岡山市北区建部町鶴田）を攻撃したと記す。『久米郡誌』に「松端山」とある。『日本城郭全集』は「松端山陣」とし、天正八年（一八五〇）三月に宇喜多直家の家臣明石飛驒守行雄が高城（岡山市北区建部町和田南）と鶴田城（同建部町鶴田）攻撃のために陣したと記す。『建部町史』は「松端山本陣跡」、別名「蕨尾城」とし、永禄七年（一五六四）、浦上宗景が毛利方の竹内為就が拠る鶴田城を攻撃するために本陣を置いたものの、鶴田城方の川口土佐守の夜討で退いたとするが、出典未詳である。



松端山・松ヶ端

文献

『作陽誌』、『美作略史』、『久米郡誌』、『日本城郭全集』補遺、『建部町史』通史編・地区誌・史料編、『美作埴和郷戦乱記』、『改訂岡山県遺跡地図』建部11、尾崎二〇〇三

143 蕨尾山

所在地 岡山市北区建部町三明寺

立地

天王山あるいは松端山から北西に延伸する尾根上に位置する。標高は約三四〇mである。「蕨尾」の地名が残る。

縄張

先端に単郭の曲輪を構え周囲に直線的な土塁を配する。西側に虎口を構える。北西側と北東側墨線に横矢掛かりがみられる。縄張りからは在地系縄張り技術よりも織豊系縄張り技術を習得している勢力が関与した可能性が考えられる。伝承にあるように、宇喜多勢の陣城である可能性が高い。

城史

『作陽誌』は「蕨尾山」として、三明寺村にあり、宇喜多氏の将明石飛驒守が高城（岡山市北区建部町和田南）攻撃に陣したと記す。『久米郡誌』に「蕨尾山」とあり、また『建部町史』は松端山の別名として「蕨尾城」を挙げるとともに、松端山本陣跡の付近に蕨尾山陣屋跡があるともしている。

文献

天正八年（一五八〇）、三月一七日、杉山又三郎は「明石飛驒守陣所」に夜討し、小早川隆景から感状を与えられている（『美作国諸家感状記』）。『作陽誌』、『美作略史』、『久米郡誌』、『建部町史』通史編・地区誌・史料編、『美作埴和郷戦乱記』



蕨尾山

144 伊勢畑城・旗ヶ瀬城

立地

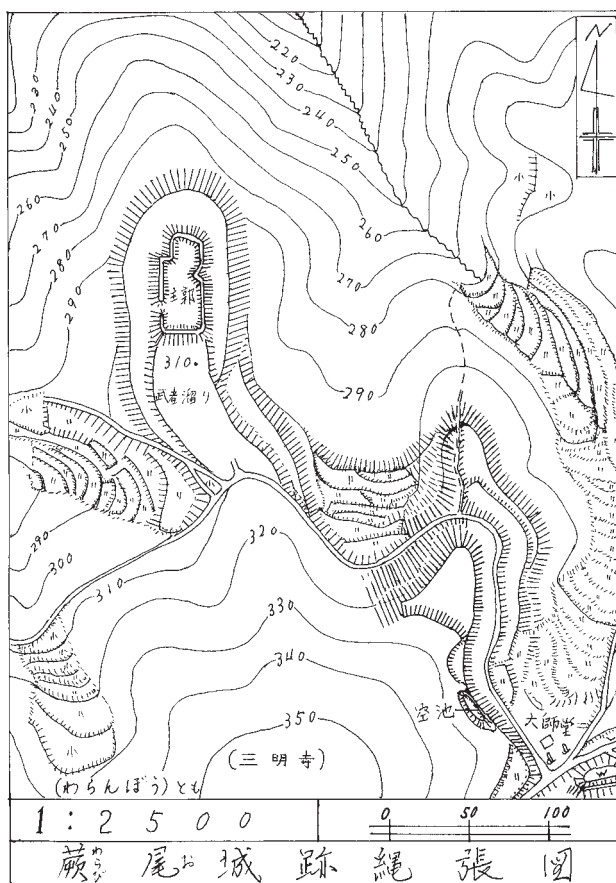
誕生寺川右岸にあり、志呂神社の東、野伏尾川右岸にある標高約二五〇mの山上に所在する。地元では「旗ヶ瀬城」と呼ぶことが多い。

縄張

山頂に主郭部を設定し直線的な土塁ラインによって城域を画している。主郭は土塁で囲まれ周囲に帯曲輪が廻らされる。主郭南西側に虎口が見られる。



伊勢畑城・旗ヶ瀬城



所在地 岡山市北区建部町下神目

城史

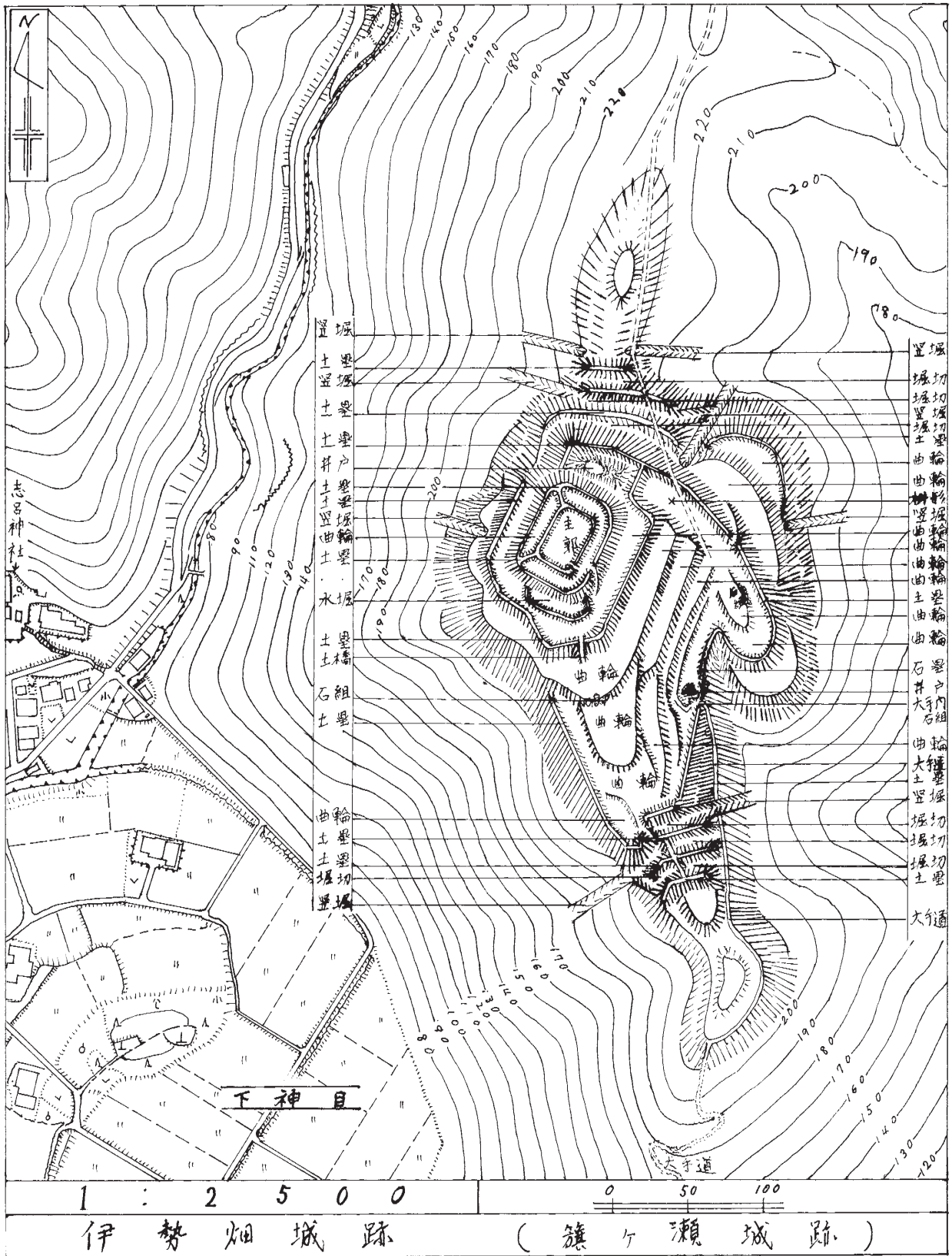
第二郭にあたる帯曲輪にも土塁が廻り南西側に虎口が確認できる。さらにその外周部にも直線的な土塁ラインによって城域が区画されている。さらに主郭部の周囲には何段にも緩やかな下位曲輪が広がる。両端には稜線に沿って土塁ラインが走り土塁のように両側を防禦する縄張りとなっている。伊勢畑城は、周囲の丘城などと比べて規模が大きく随所に技巧的な縄張りを確認することができる。この地域の拠点城郭として整備された可能性が考えられる。

正保書上五四城の一で、「古城之覚」は久米南郡下神目原村の「伊勢畑」として、城主を赤松上野守とする。元禄二年（一六八九）の「下神目村書上」（『美作古城史』所収）は、赤松左衛門尉家盛は「伊勢旗」にあり、のち上野守家盛というとする。天保国絵図に「伊勢畑古城跡」とある。『久米郡誌』は常山にあり、山上は東西約二町、南北一町四〇間、面積は約二町、最高所は本丸（周囲七〇間途方）で回字形をなし、外郭は幾段も重なり、いずれも土塁をめぐらせ、その他を堀切とし、東北の峰に深い堀を三重に設ける、もと志呂神社の社地で、嘉吉年中（一四四一〜四）に「伊勢国長野の一党」が遷座、城郭を構えて伊勢畑城とし、延徳（一四八九〜九二）の頃には一族の「伊勢守藤原兼光」が城主にあつたとする。

永正元年（一五〇四）六月、「伊勢ヶ旗」の城主「赤松左衛門尉家盛」が豊楽寺（岡山市北区建部町豊楽寺）を再建し、薬師如来像などを入仏したとされる（豊楽寺文書）。

「武家聞伝記」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「久米郡誌」、「岡山県通史」久米32、『美作古城史』、『日本城郭大系』100、『建部町史』通史編・地区誌・史料編、『改訂岡山県遺跡地図』建部41

文献



145 おろし
しもかせ 下風城・中尾山城・尾城 なかのおやま
おじろ

所在地 岡山市北区建部町下神目

立地

誕生寺川右岸にあり、志呂神社の西側山上に所在する。標高は約二二〇mである。

縄張

丘陵の先端部に位置する方形の丘城。主郭は方形で周囲に土塁を廻らせる。周囲の下位曲輪にも多くの塁線が土塁で区画されており、四隅に虎口らしい開口部が確認される。さらにその外側にも帯曲輪を土塁で固めた下位曲輪が廻る。

下風城の縄張りは全体的にみて技巧的な用法が確認できる。この地域を掌握した土豪層の持城とみられるが、広域範囲に展開した広域大名権力の番城の可能性も考えられる。

城史

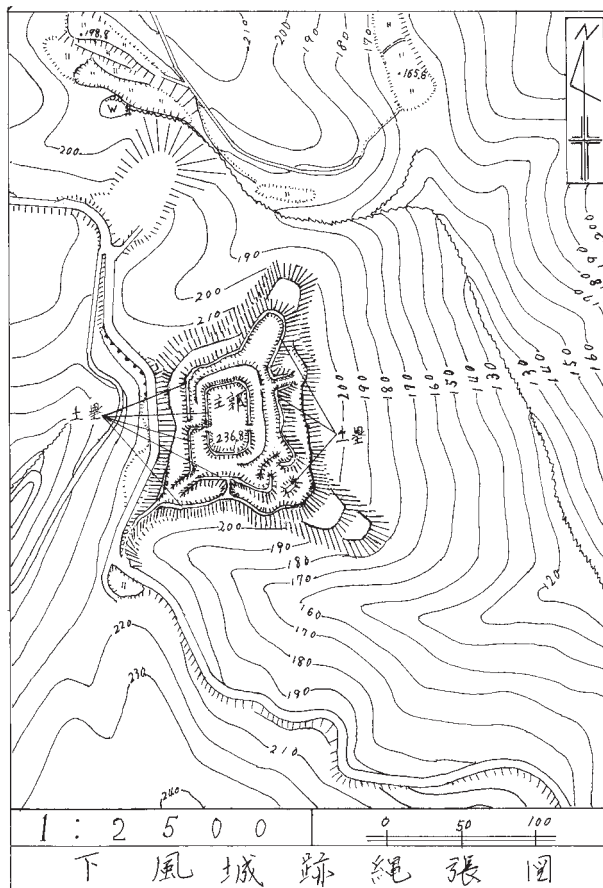
「古城之覚」は久米南郡下神目原村の「おしろ」として、城主不詳とする。元禄二年（一六八九）の書上（『美作古城史』所収）は、「中ノ尾と申古城山」として城主不詳、城中に水なく、「おろしの城」ともいうとする。「美作鬢鏡」は「下風ノ城」、「美作鏡」は「下風城」とする。「久米郡誌」は「下風城」、中尾山城また尾城として、字尾城にあり、山頂に東西南北とも約一町五〇間くらいの広い段で、土塁・堀の跡があるとす。『日本城郭大系』は赤松氏に関係あるかとする。

文献

「武家聞伝記」、「美作鬢鏡」、「美作鏡」、「久米郡誌」、「岡山県通史」久米34、「美作古城史」、「日本城郭大系」116、「建部町史」地区誌・史料編、「改訂岡山県遺跡地図」建部22



下風城・中尾山城・尾城



146 鷹栖城 たかのす

所在地 岡山市北区建部町下神目

立地

誕生寺川左岸、下神目上集落の東側にある丘陵先端に位置する。標高は約二〇〇mである。

縄張

集落に近い背後の丘陵の先端部に位置する丘城。背後に堀切などはみられず、先端部に数段の曲輪を構えるプランとなっている。村落単位に割拠する土豪層が背後の高台に構えた館城と考えられる。

城史

元禄二年（一六八九）の「下神目村書上」（『美作古城史』所収）は、「鷹栖と申古城山」



鷹栖城

立地

誕生寺川右岸、野伏尾川右岸にあり、志呂神社から南西に延伸する丘陵の突端に所在する。すぐ東で野伏尾川に接する。標高は約

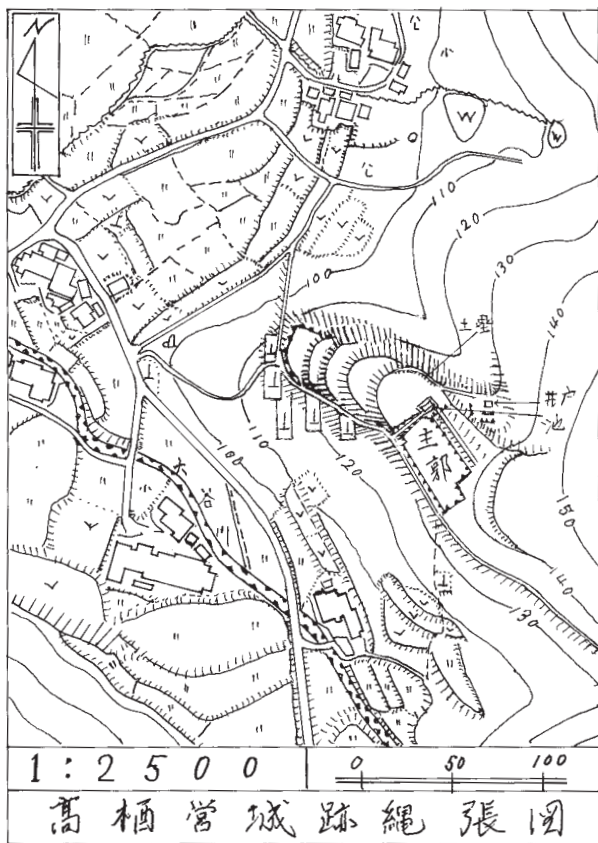
147 伏山城

所在地 岡山市北区建部町下神目

文献

『久米郡誌』、『美作古城史』、『日本城郭大系』120、『建部町史』通史編・地区誌・史料編、『改訂岡山県遺跡地図』建部91

として、伊勢畑城（岡山市北区建部町下神目）の城主赤松左衛門尉（のち上野守）家盛の家臣菅左近将監、その子豊前守が相続して居城、子五郎右衛門の時に赤松氏は亡び、浦上宗景に領地を召し上げられ小身となったなどとする。『久米郡誌』は「高栖宮跡」として、鷹巢の地にあり、山上に段が二つ、西に三段あるとする。



文献

『武家聞伝記』、『美作鬢鏡』、『美作鏡』、『岡山県通史』久米33、『美作古城史』、『日本城郭大系』138、『建部町史』地区誌・史料編『改訂岡山県遺跡地図』建部39

城史

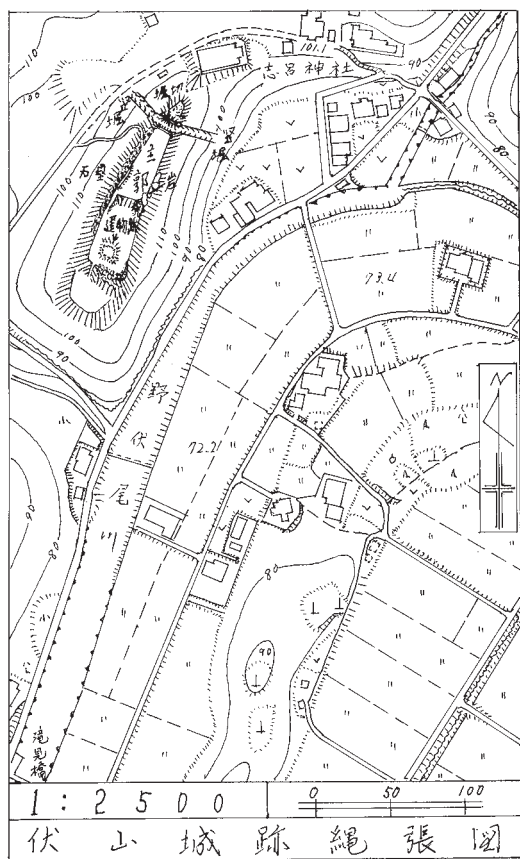
崖の上に立地し北側に堀切を構える。三段の曲輪に分かれる。野伏尾川流域に割拠した土豪層の持城と考えられる。

縄張

一三〇mである。



伏山城



補遺

美作国周縁の城館

〔備前市〕和気郡吉永町

1 飯盛山城

所在地 備前市吉永町多麻

立地

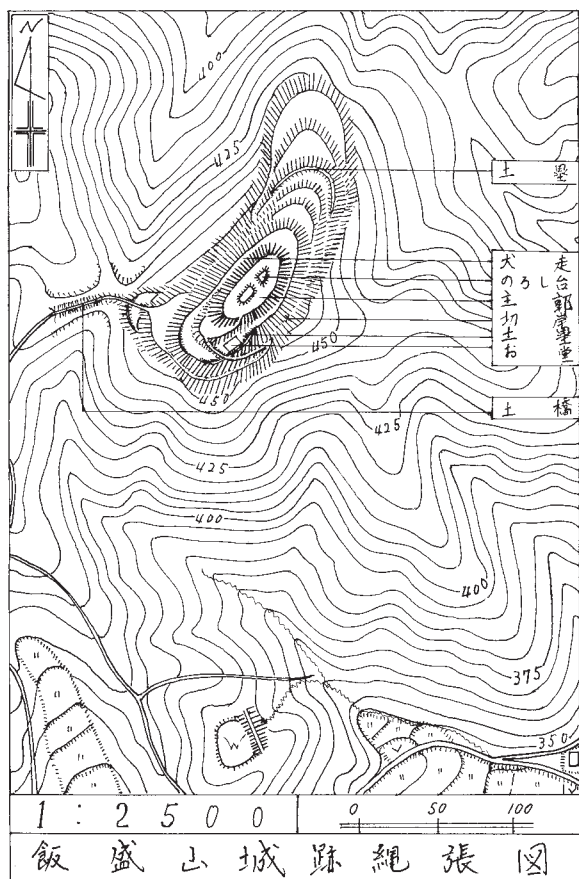
八塔寺ふるさと村の北、標高四七九mの山頂に位置する。県道九〇号線の三国より、八塔寺ふるさと村方面を進む。備前バス終点の広場に「八塔寺ふるさと村」の案内板がある。それを右折した一〇〇m先。

縄張

山頂に単郭の主郭を持つ。主郭の周囲には帯曲輪がみられる。北側の尾根筋に沿って曲輪が確認される。

城史

「備前記」は、和気郡八塔寺村に「飯盛山」という高山があるとして、「佐用郡高月ノ城」（兵庫県佐用郡佐用町）攻撃の時に「毛利家ノ衆」



備考

が陣所としたと伝わりと記す。「備陽国誌」「吉備温故秘録」は滝谷村にありとするのみ。「和気郡誌」は頂上は平坦で東西五八間、南北四五間、赤松氏の家臣栗作十郎が扼守と記す。「日本城郭全集」は「飯森山城」として、頂上はやや平坦で東西一六〇m、南北八二m、本丸、二の丸、三の丸の区画が明確に見られ、赤松氏の家臣栗則高の居城と伝えたと記す。「改訂岡山県遺跡地図」は城名をはじめ詳細不明とする。「吉永町史」は飯盛山城として、「備前軍記」が載せる永正一六年（一五一九）、小塩城（置塩城、兵庫県姫路市）の城主赤松氏による三石城（備前市三石）攻撃の際に栗作十郎が構えた八塔寺の陣に比定している。

文献

「備前記」、「備陽国誌」、「吉備温故秘録」、「和気郡誌」、「岡山県通史」和気郡9、「日本城郭全集」補遺、「日本城郭大系」3、「新版岡山の山城を歩く」16、「改訂岡山県遺跡地図」吉永1、「吉永町史」通史編Ⅱ

〔真庭市〕 上房郡北房町

2 山王城

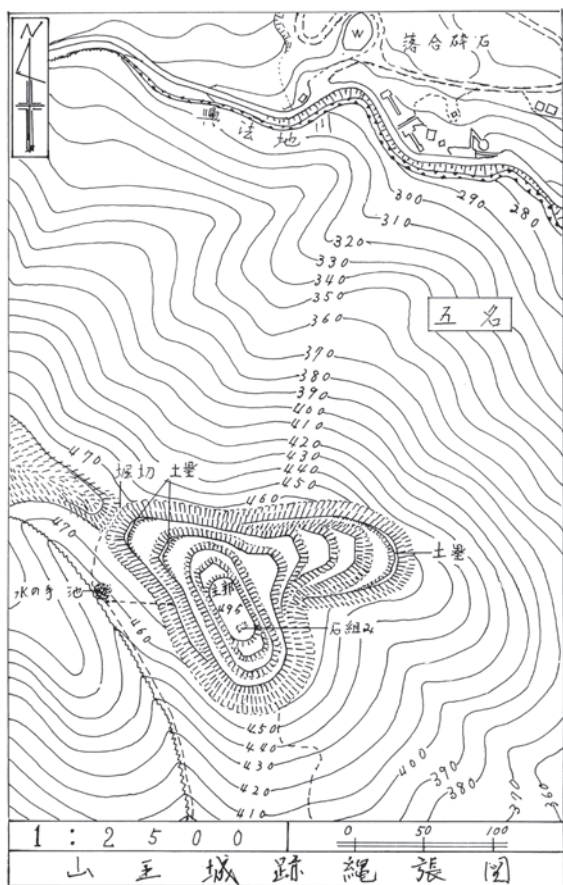
所在地 真庭市五名

立地

興法寺集落の北西、山王山から東に延伸する尾根先端に所在する。標高五〇三mである。

縄張

『日本城郭全集』は後ろの峰とは深い堀切りで遮断とし、『改訂岡山県遺跡地図』は主郭に本丸・二の丸・三の丸があり、周囲に馬場を廻らし、東郭は斜面に五つの曲輪、西郭は二つの曲輪と堀切、土塁二ヶ所があるとする。



城史

『西国太平記』は元亀元年（一五七〇）、尼子氏は植木下総守秀資の拠る「此口部城」（丸山城か、真庭市下皆部）をその「南口」と「山王山の城」から攻撃、翌日、尼子氏と植木氏は誓紙を交わしたなどとするが、年次および事実関係については検討が必要である。享保二年（一七一七）の『備中地誌』は、五名山田村の「山王古城」と記す。『日本城郭全集』は「山王城」とする。

天正二年（一五七四）一月に三村元親が毛利氏から離反した際、庄勝資は「山王」へ拠り佐井田城（真庭市下中津井）の「三村兵部之丞」を松山城に逐ったとされる（『備中兵乱記』）。また同七年の十一月か、宇喜多氏に服属する鈴木孫右衛門が「山王尾（尾頸）」で首三つを討ち取っている（『美作国諸家感状記』）。

文献

『西国太平記』、『備中地誌』、『岡山県通史』上房郡28、『日本城郭全集』上房郡5、『日本城郭大系』380、『北房町史』通史編上、『改訂岡山県遺跡地図』北房55

3 佐井田城・斉田城・才田城・城山

所在地 真庭市下中津井

立地

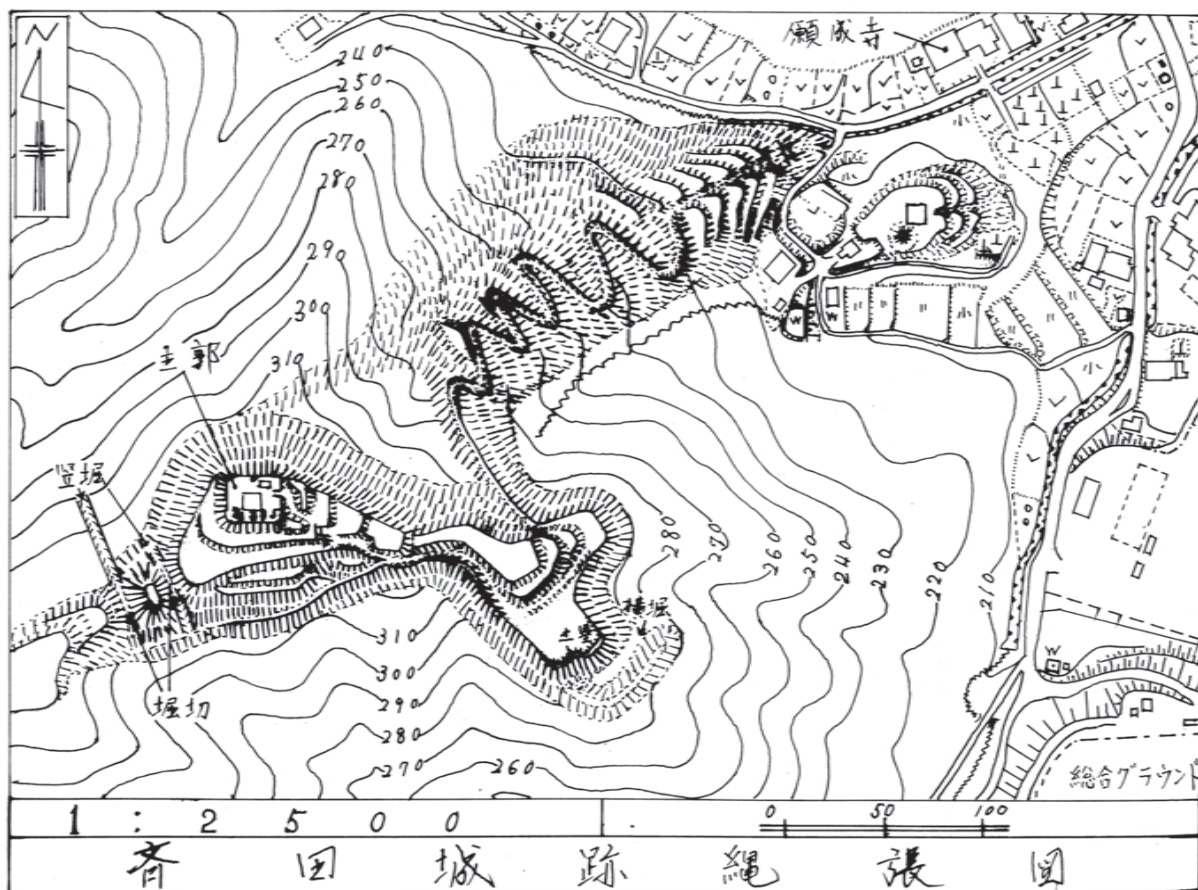
中津井川右岸にあり、才田集落の西南、斎田山から東に延伸する尾根上に位置する。標高三四〇mである。国道三三三号線に「佐井田城」の説明版があり、町民運動公園方面に進むと、直進と左手に分かれるので、左手に折れると右手山すそに「城山稻荷」の石の鳥居がある。



佐井田城・斉田城・才田城・城山

『日本城郭全集』は最上段が本丸で、周囲に堀の跡が残り、谷を隔てた山は出丸となるとする。『改訂岡山県遺跡地図』は、主郭、東郭（かさ丸）、西郭、水手、虎口、堀切、土塁、曲輪かになるとする。『西国太平記』は「斎田城」として、少なくとも天文期（一五三二～五五）以降、庄氏の一族植木下総守秀長の居城で、秀長は永禄一一年（一五六八）に備前国の宇喜多氏に服属し三村氏らと抗争、子の下総守秀資は「此口部城」（丸山城か、真庭市下皆部）に拠り、当城には元亀二年（一五七二）には尼子氏の検使・大加駿河守が入城したなどとするが、いずれも年次および事実関係については検討が必要である。享保二年（一七一七）の「備中地誌」は、中津井村の「佐井田山古城 三村元祐」と記す。『日本城郭全集』は「才田城」とする。

元亀二年（一五七二）九月四日、毛利勢の攻城に対して浦上宗景・宇喜多直家は後詰を行い交戦、毛利方の庄元資（元祐）が討死するなどし、毛利勢は敗軍した（「桂炭田覚書」、「浦上宇喜多両家記」、「黒田御用記」、鳥山文書、備前河口文書、「黄薇古簡集」、備前難波文書、備前片山文書、「花房家記事」、備前正宗文庫所蔵文書、「寛永諸家系図伝」など）。天正二年（一五七四）一月に松山城（高梁市）の三村元親が毛利氏から離反した際、庄勝資は「山王」（真庭市五名）へ拠り佐井田城の「三村兵部之丞」を松山城に逐ったとされる（「備中兵乱記」）。同七年の宇喜多氏と毛利氏の対立にあたっては一〇月に毛利勢が籠城し、宇喜多勢の拠る四畝城（真庭市上水田）と対峙、交戦を繰り返している（熊谷家文書、岡山県立博物館所蔵文書、「関閩録」、「渡辺家文書」など）。特に十一月十日に入城した熊谷就真は「かさの丸」に在番、毛利氏に対して「当城かこい板・帆筵以下」の調達を要請しているのは注目される（「関閩録」）。同年十二月には宇喜多氏に服属する鈴木孫右衛門が「佐井田近辺」で首二つを討ち取つ



文 献

ている（美作国諸家感状記）。翌八年になって、当城で在番していた前原左衛門尉太夫と熊谷玄蕃の両人は、毛利氏から備前国の福山城（吉備中央町）への移動が命じられたが難色を示している（「桂岷円覚書」）。

「桂岷円覚書」、「西国太平記」、「浦上宇喜多両家記」、「備中地誌」、「備前軍記」、「岡山県通史」上房郡20、「中津井誌」、「日本城郭全集」上房郡3、「日本城郭大系」377、「北房町史」通史編上、「新版岡山の山城を歩く」52、「改訂岡山県遺跡地図」北房51

4 高 釣 部 城

所在地 真庭市上皆部

立 地

備中川左岸にあり、高鶴部集落東の高釣部山から延伸する丘陵上に位置する。標高約三三〇mである。

縄 張

『日本城郭全集』は山頂は平坦で、本丸、二の丸の跡、峰続きには深い堀切りがあり、水源の跡も残るとする。『改訂岡山県遺跡地図』は、本丸と数段の帯曲輪、北曲輪、南曲輪、大手曲輪、堀



高釣部城

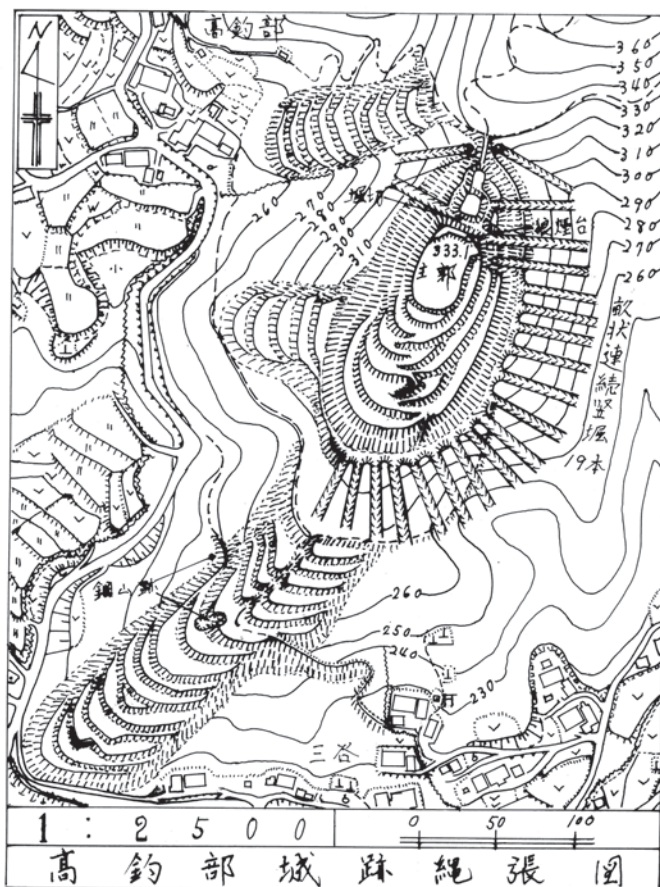
切、土塁などからなり、畝状堅堀が二〇本ありとする。

城 史

享保二年（一七一七）の「備中地誌」は、上皆部村の「高釣部山庄三治郎勝祐」と記す。『日本城郭全集』は「高釣部城」とする。

文 献

「西国太平記」、「備中地誌」、「岡山県通史」上房郡22、「日本城郭全集」上房郡8、「日本城郭大系」385、「岡山県文化財総合調査報告」24、「北房町史」通史編上、「改訂岡山県遺跡地図」北房20



〔美咲町〕久米郡旭町

5 江^え与^よ味^み城

所在地 美咲町江与味

立地

曾母谷川左岸にあり、原集落の北、江与味八幡宮の背後に位置する。標高二三〇mである。近くに「馬のりば」「矢びつ」「城ノ後」等の地名が残るとされる。

縄張

『改訂岡山県遺跡地図』は、特に北・東側は急峻で、堀切・堅堀などが確認され、多数の郭面が造成されているとする。

城史

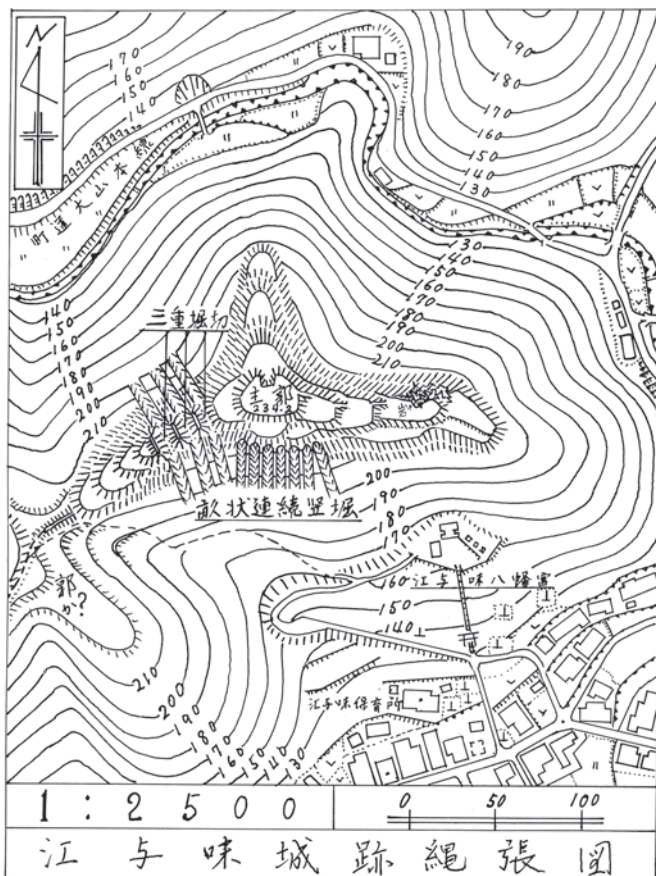
『備陽国誌』は、津高郡江与味村の「古城」として、城主不詳とし、「吉備温故秘録」もこれを継承するが、農民の言い伝えとして大野修理の居城を記している。『御津郡誌』は「江与味村城址」として、八幡宮後の山にあり草木が繁茂、城跡は認め難いが山頂は平坦で通路に堀の跡あり、城主は不詳だが新山から美作への通路であることから天正時代（一五七三～一五九三）の城跡だろうと推測する。

文献

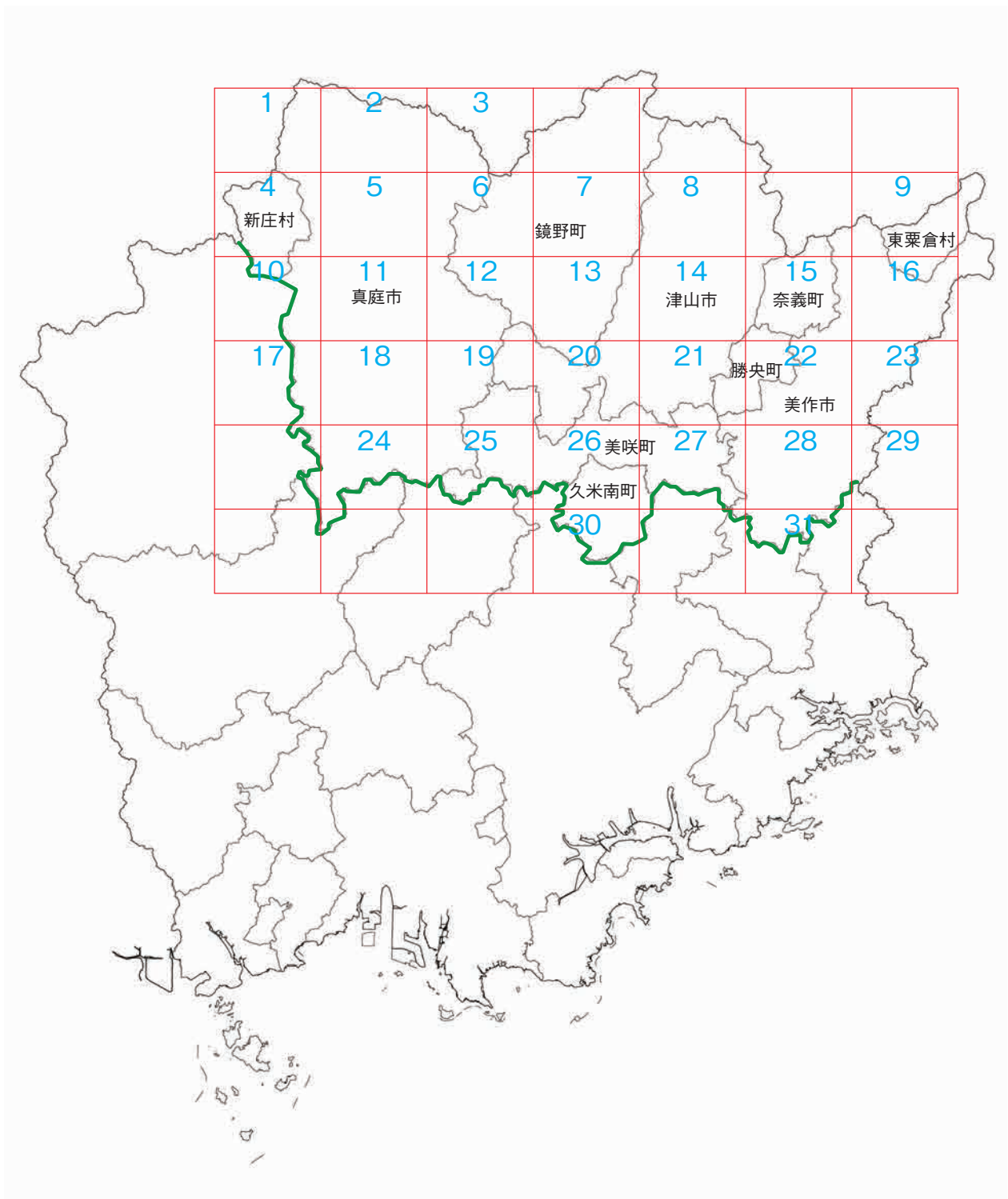
『備陽国誌』、『吉備温故秘録』、『東備郡村誌』、『御津郡誌』、『岡山県通史』御津郡49、『旭町史』地区誌編・通史編、『改訂岡山県遺跡地図』旭19

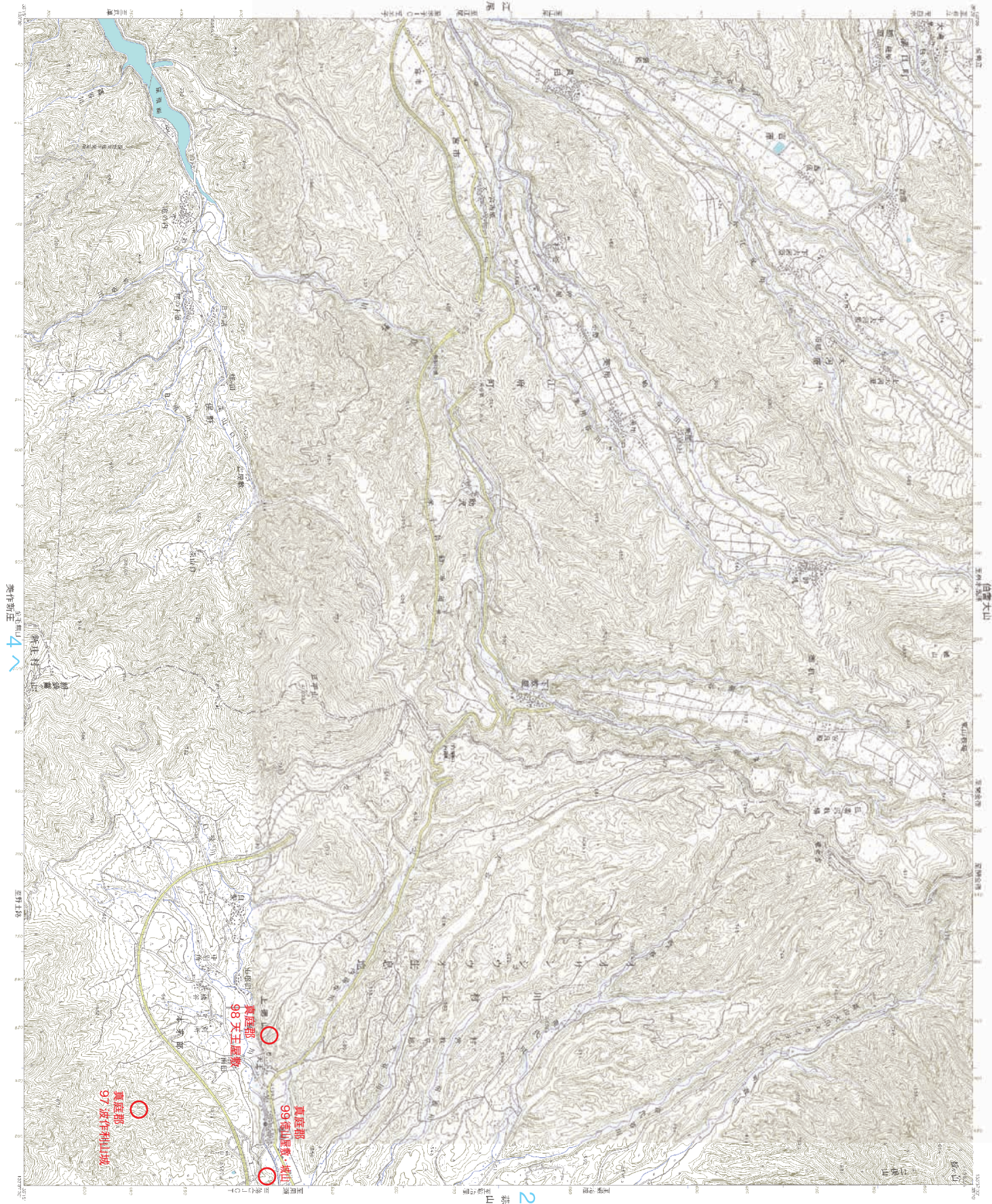


江与味城



城館分布図

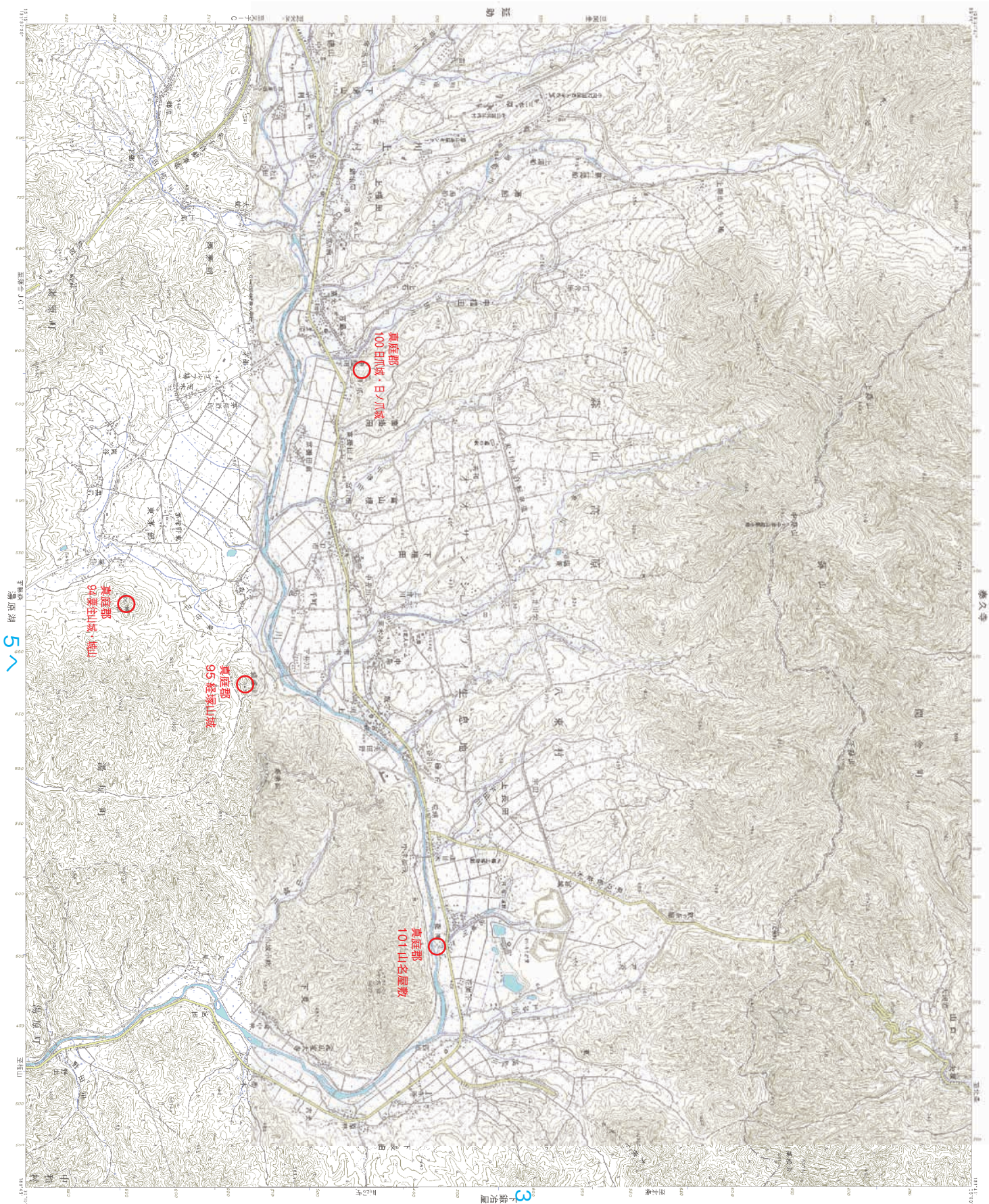




栗作新庄 4

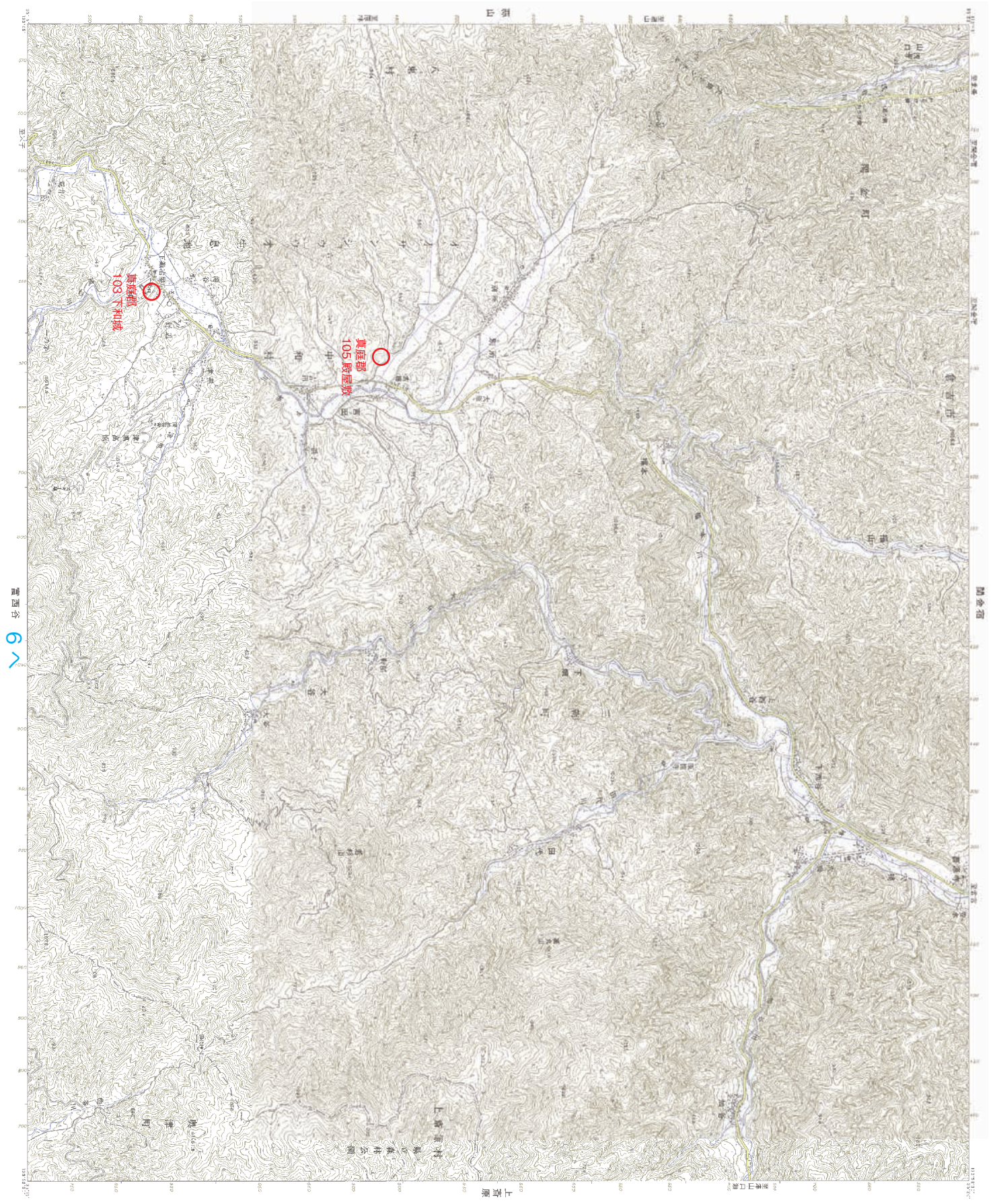
2

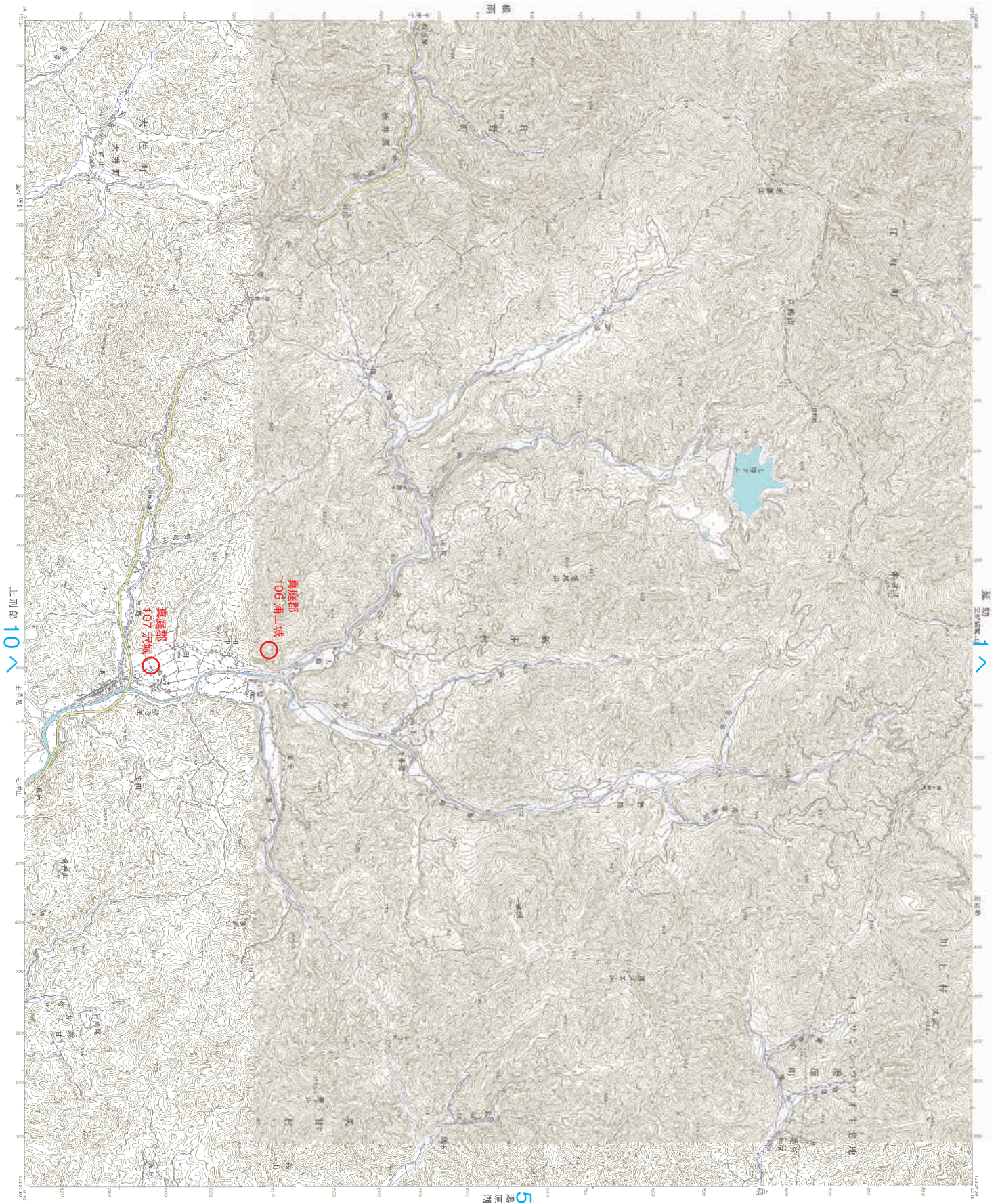
1 >



5 >

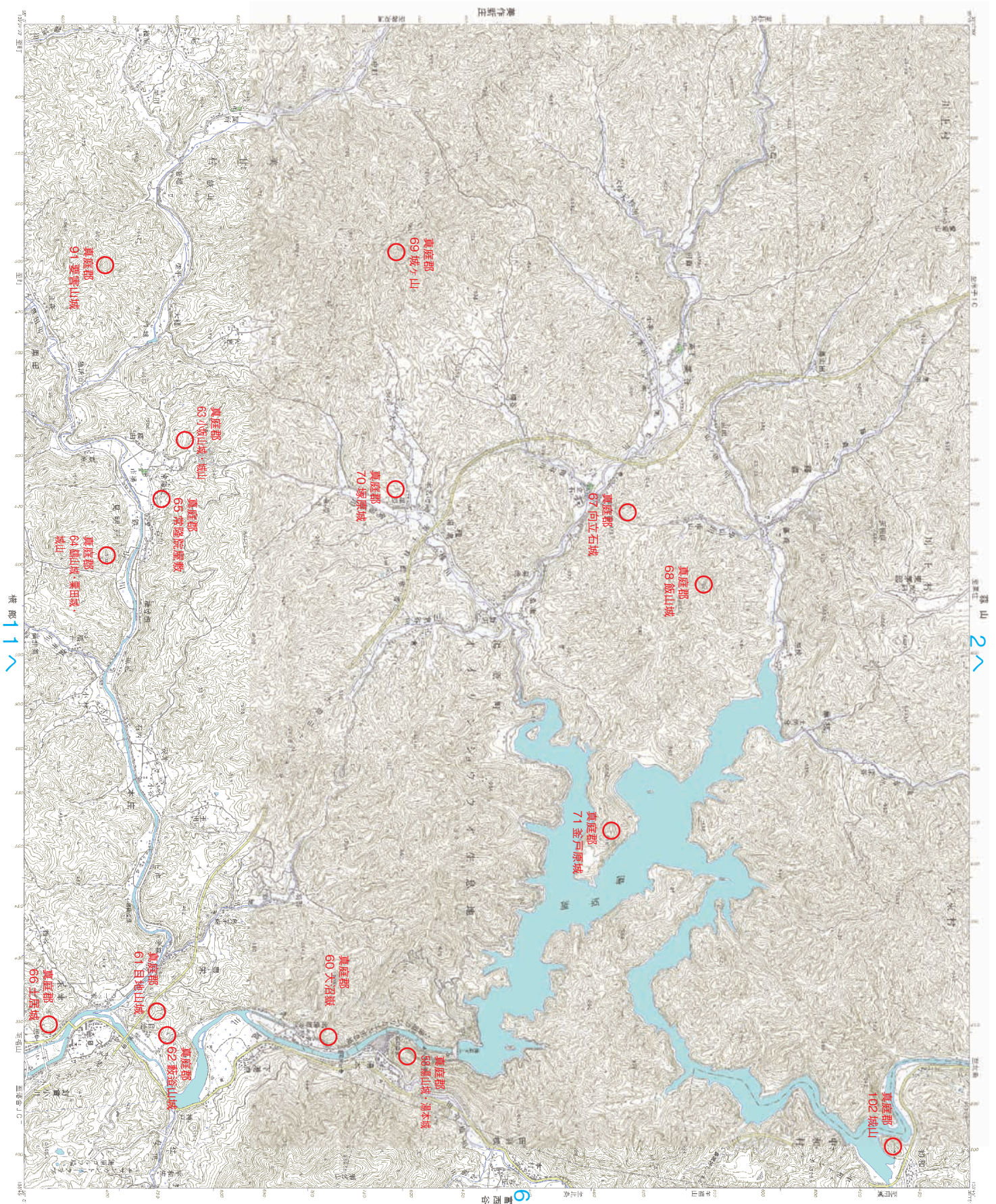
3 >





上刑部 10

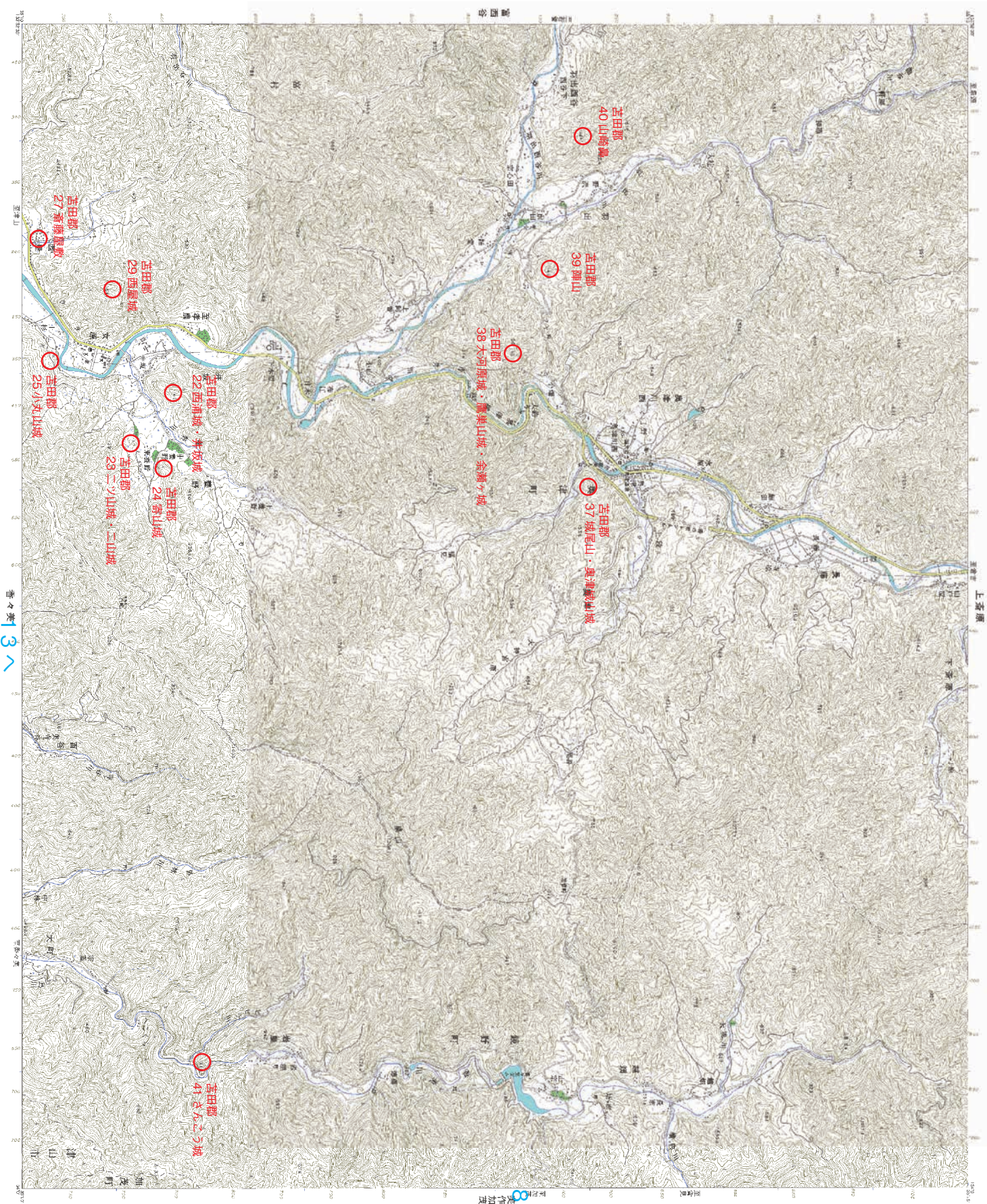
1

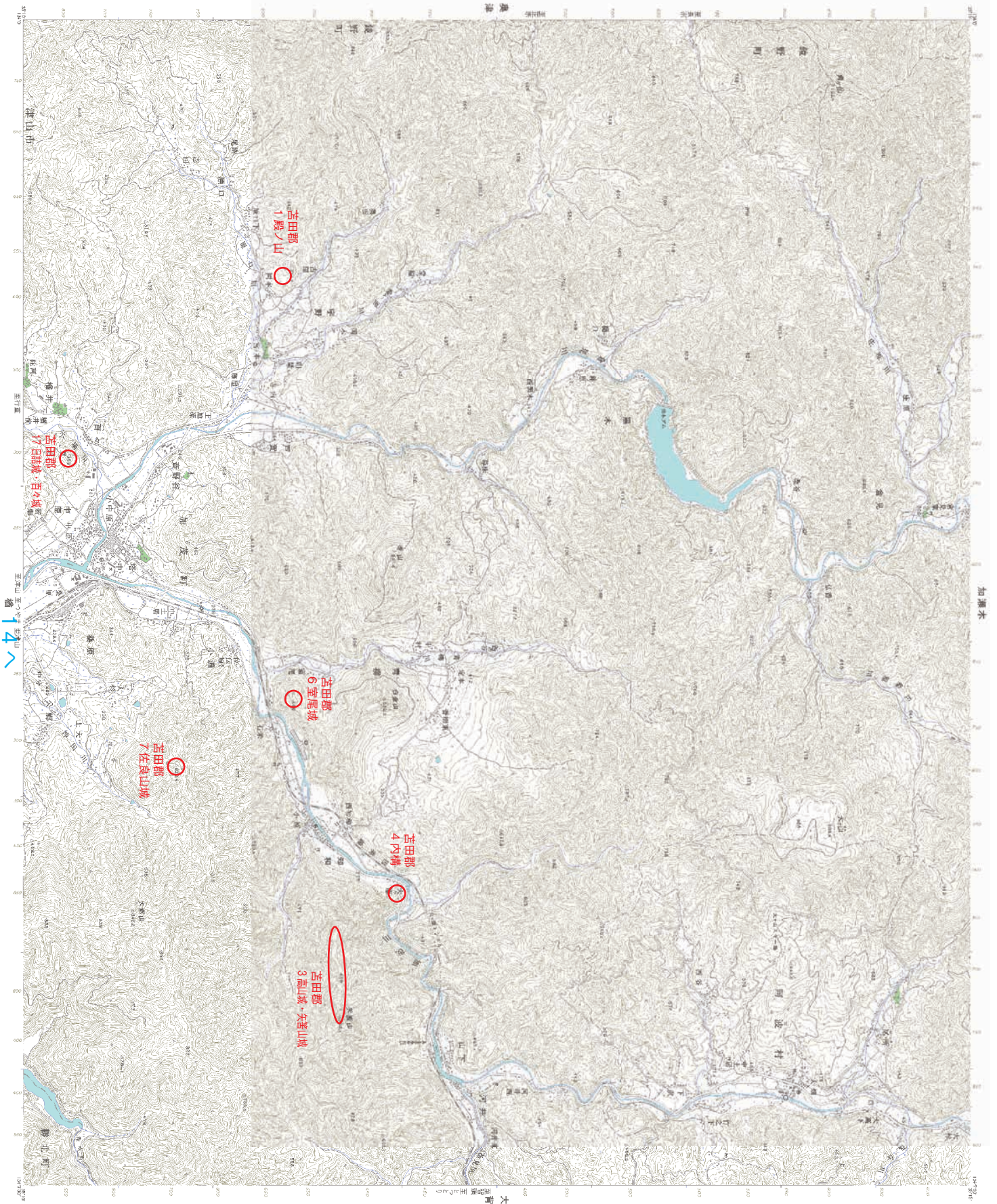




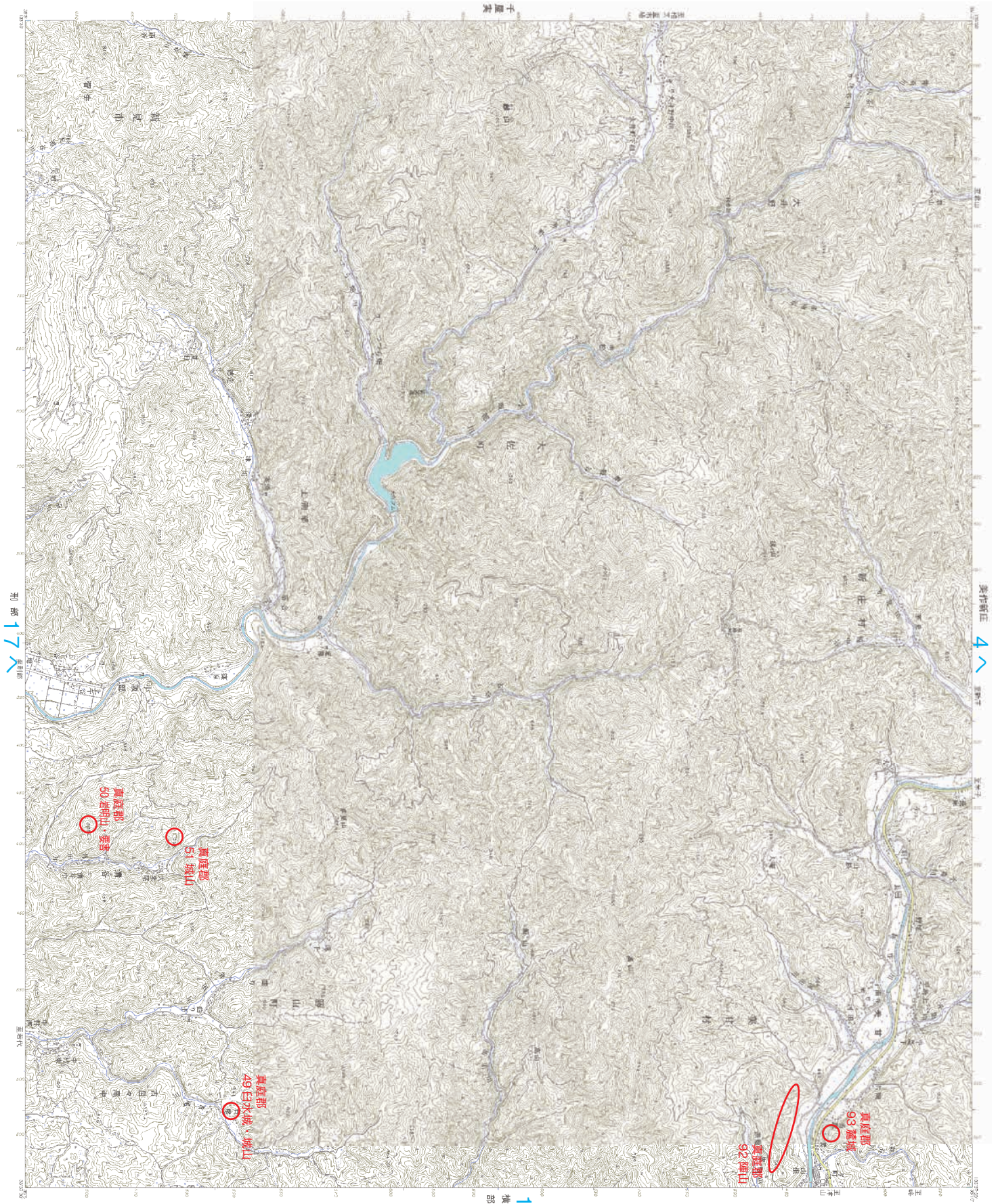
下段左側 3A

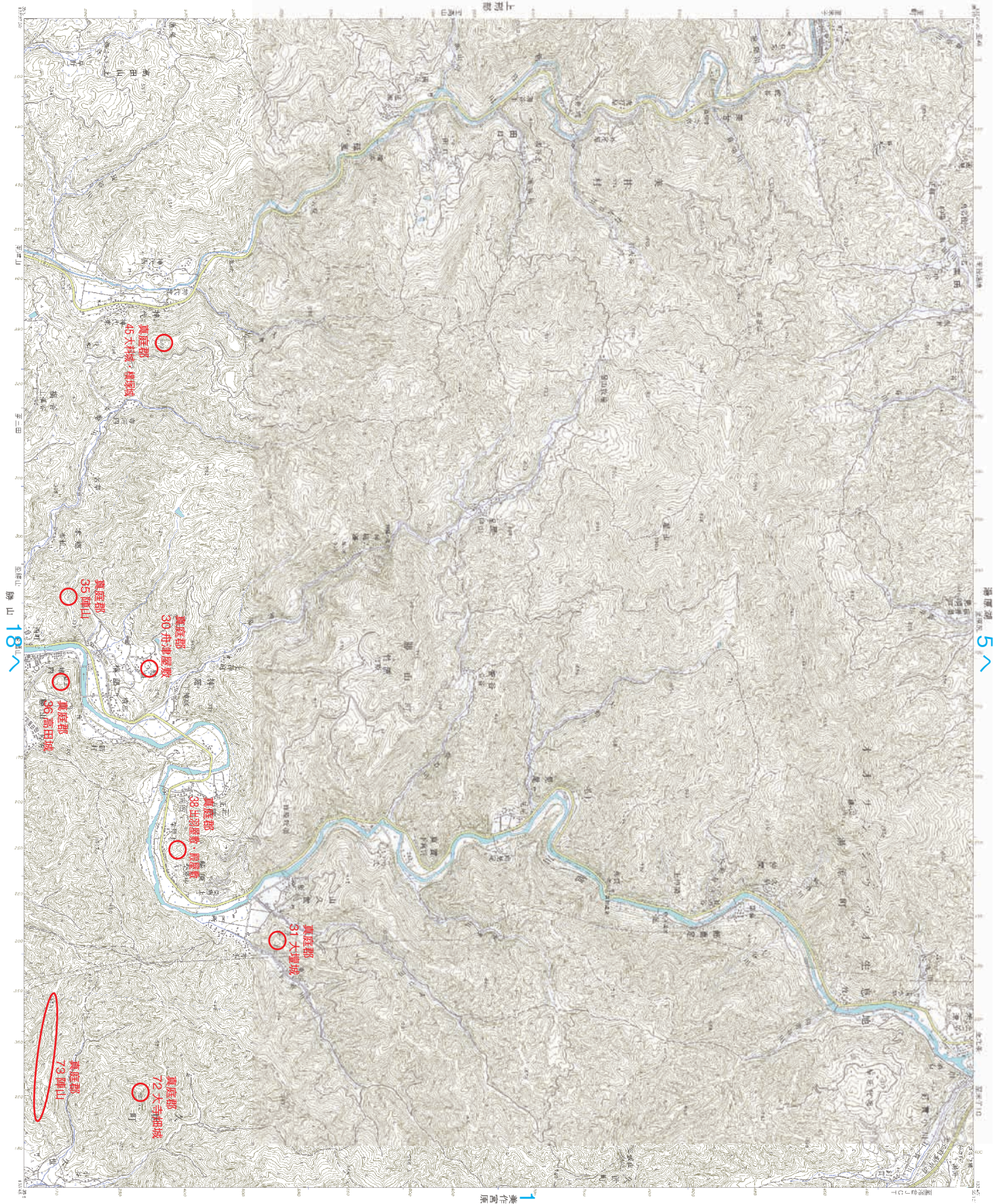
上段右側 2A





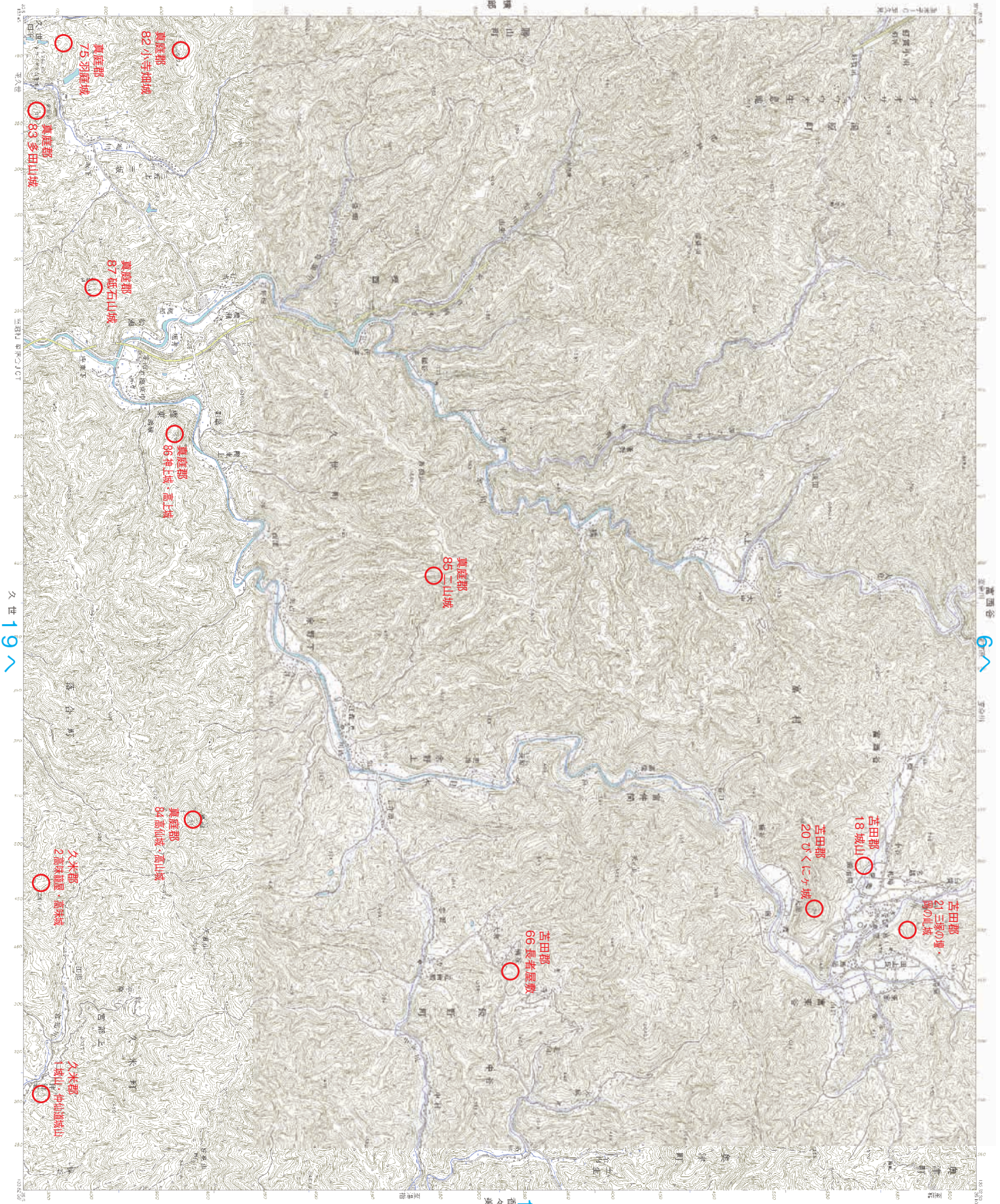




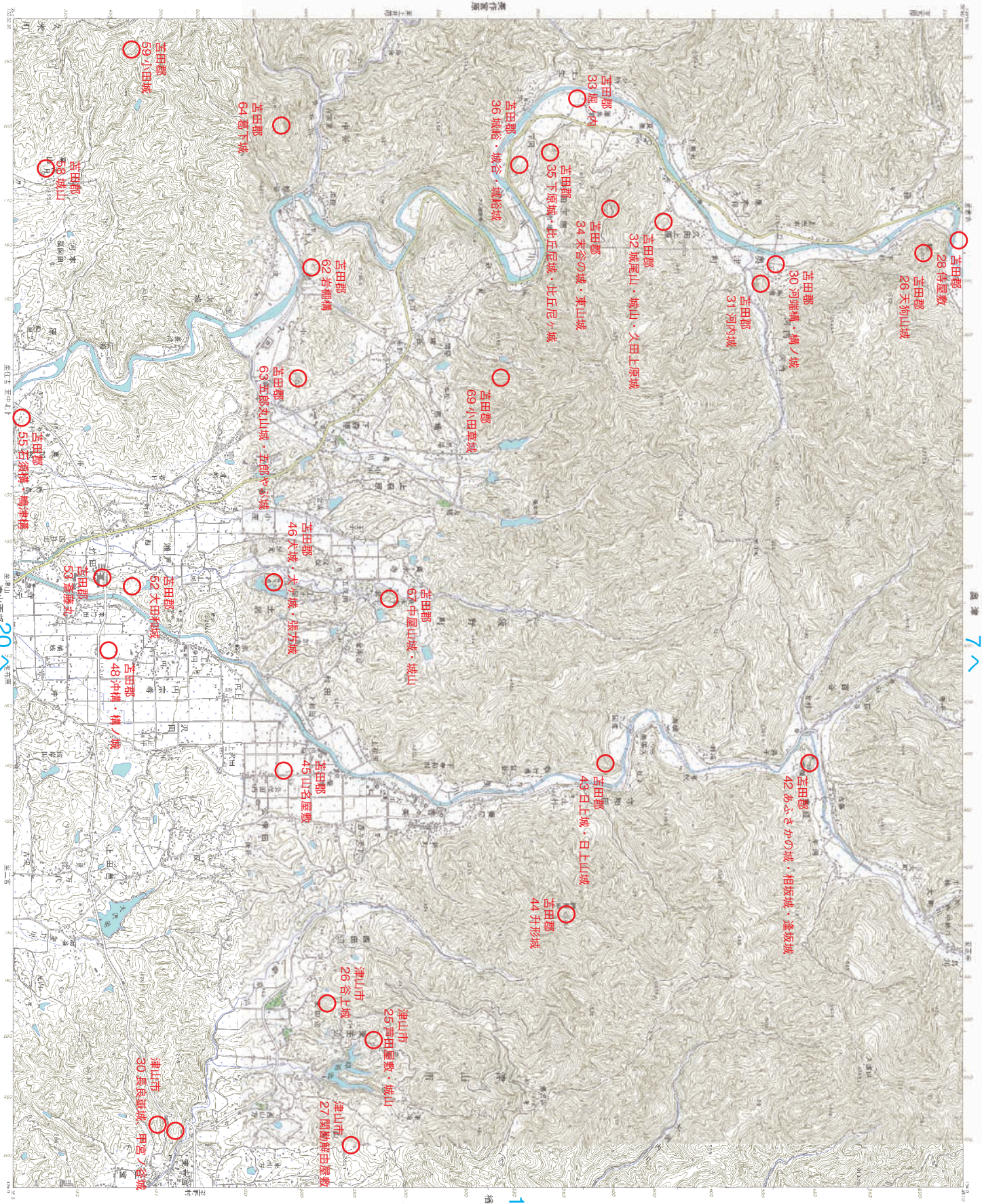


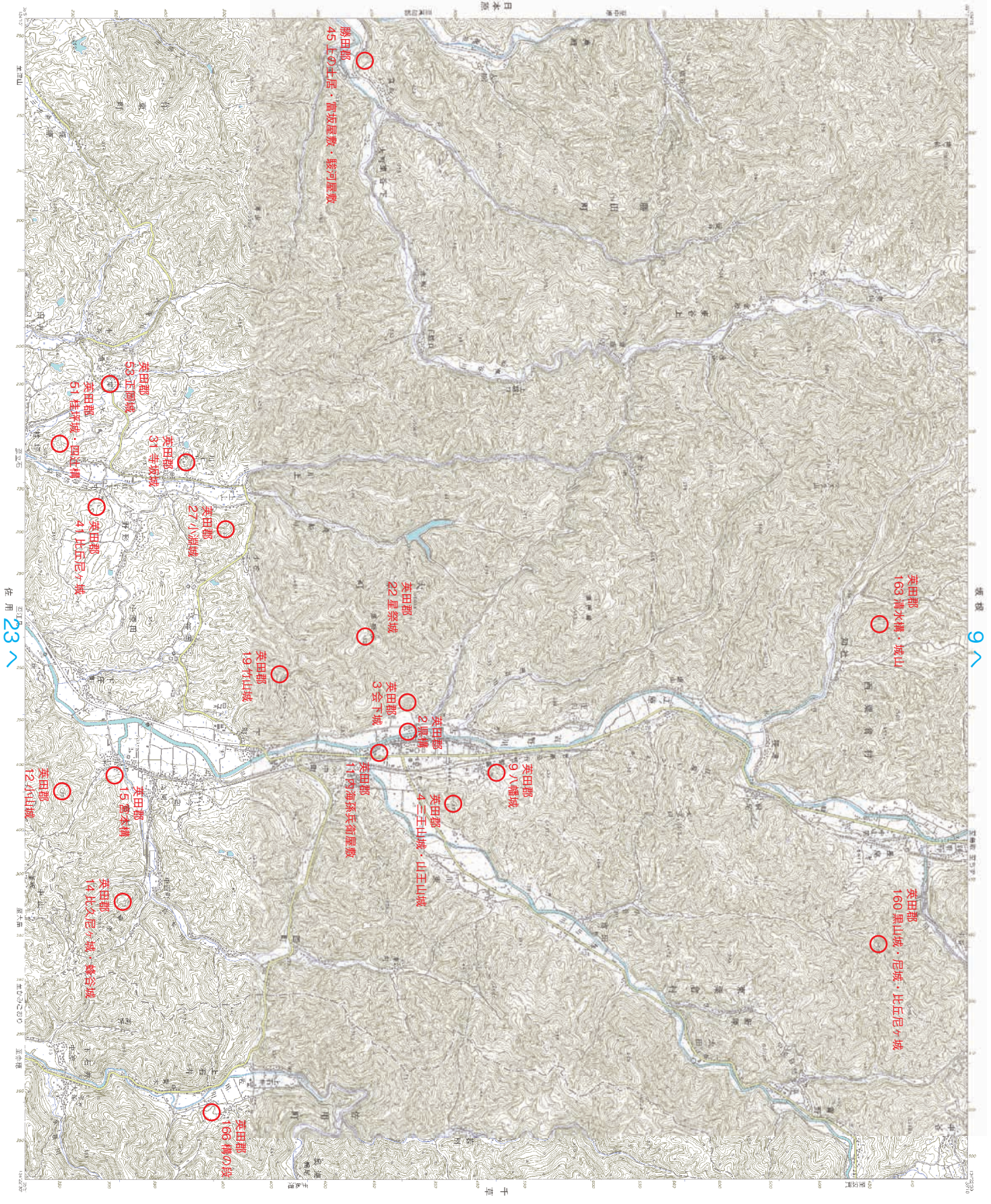
11

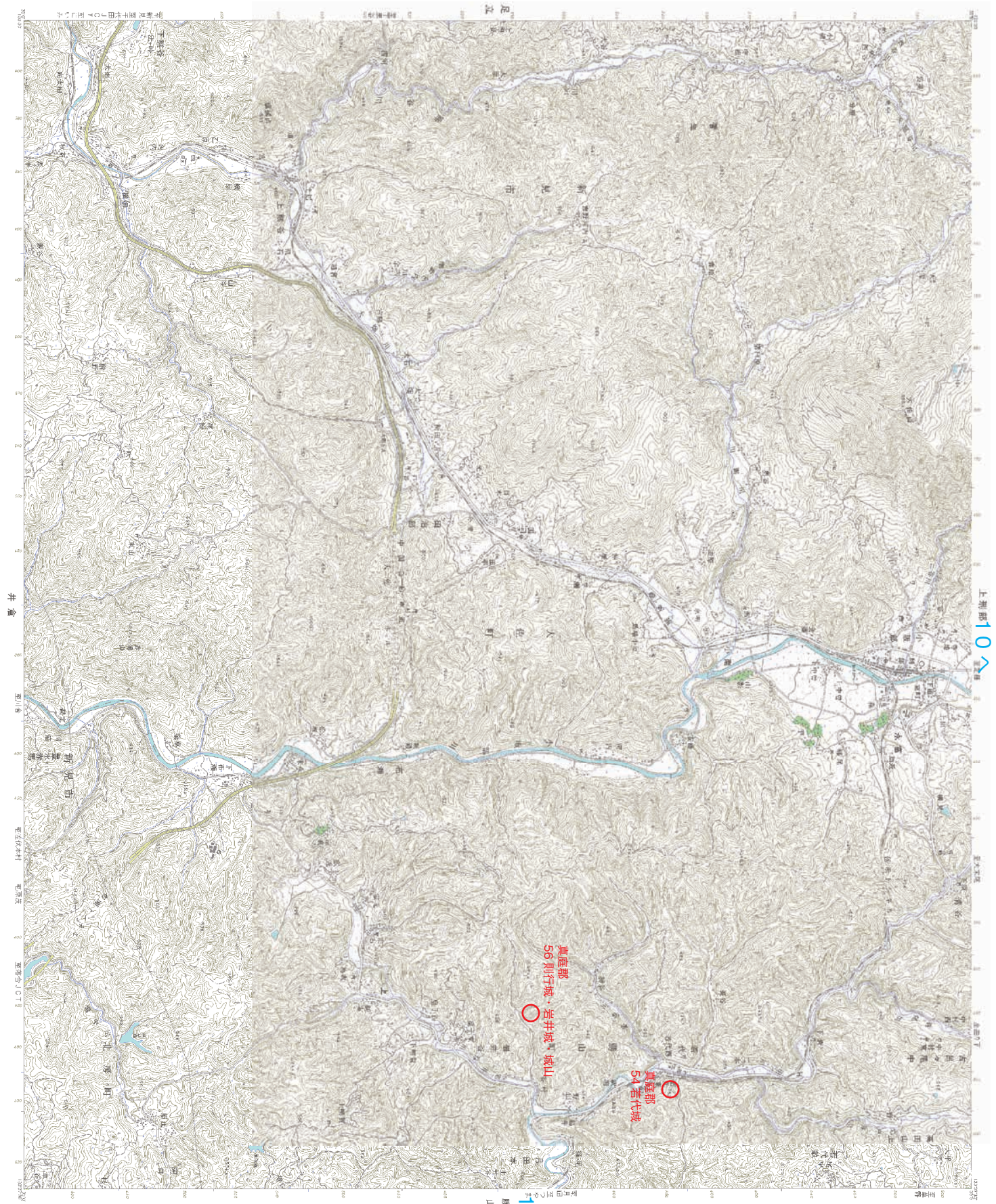
13

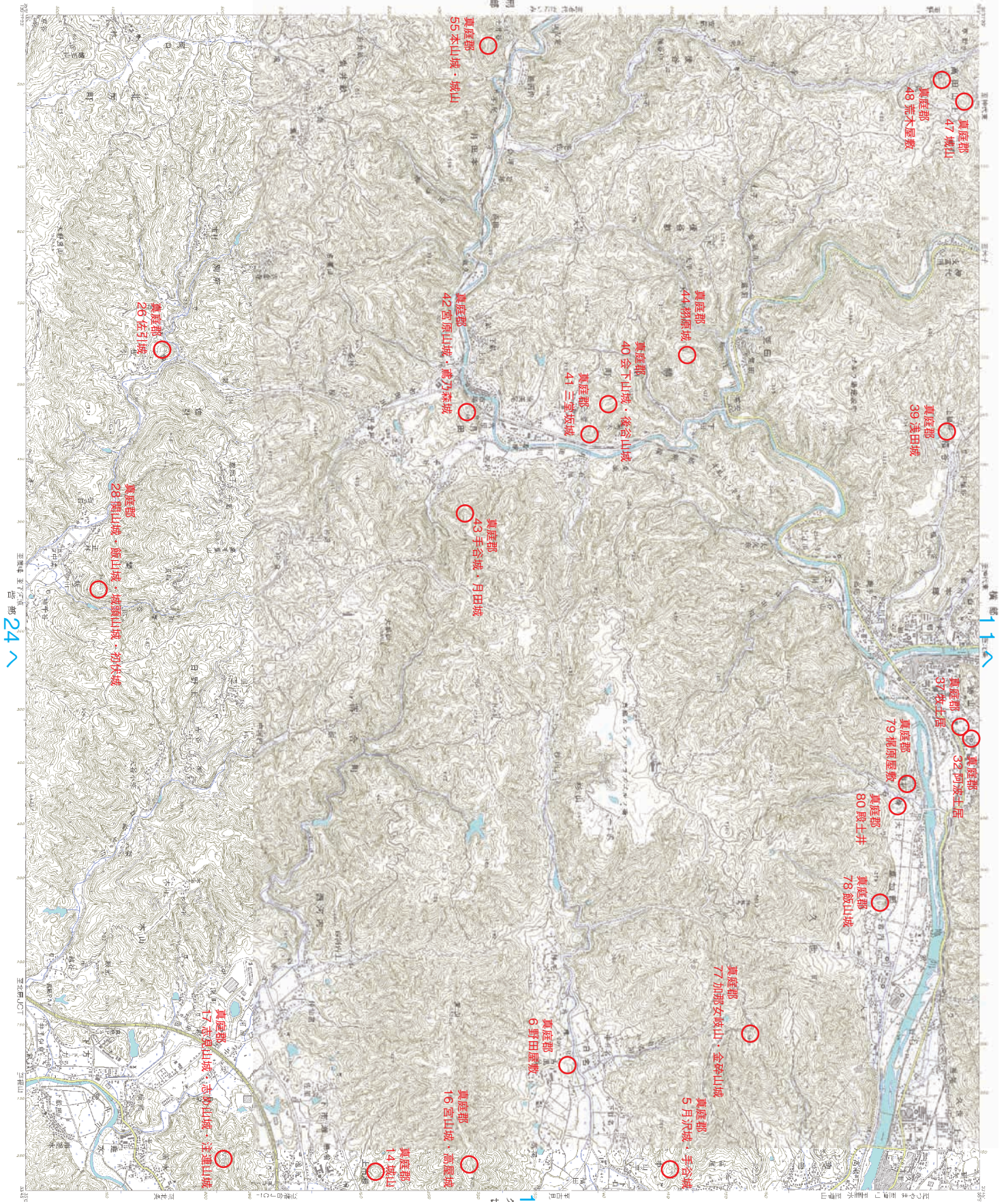


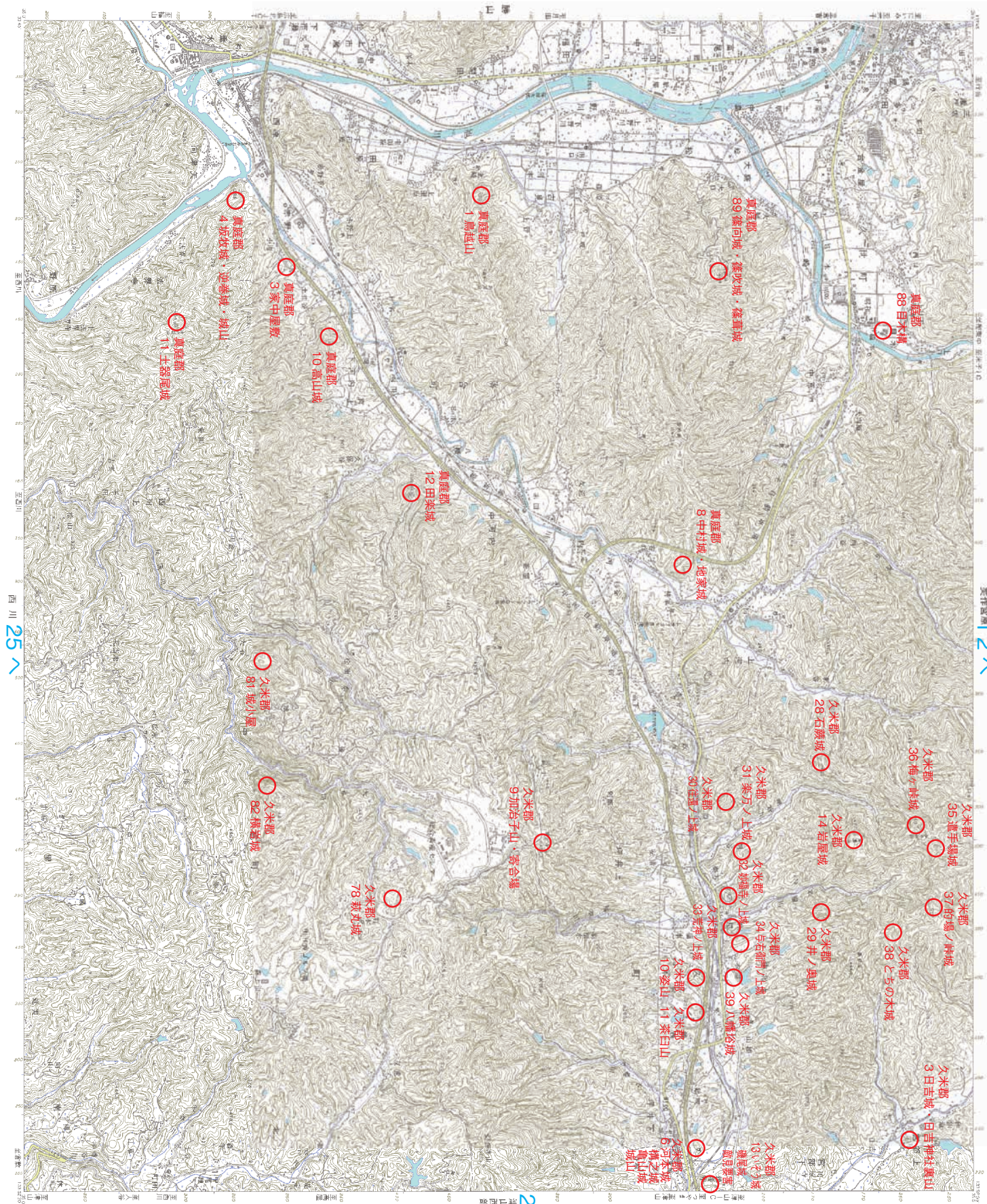
久世 19

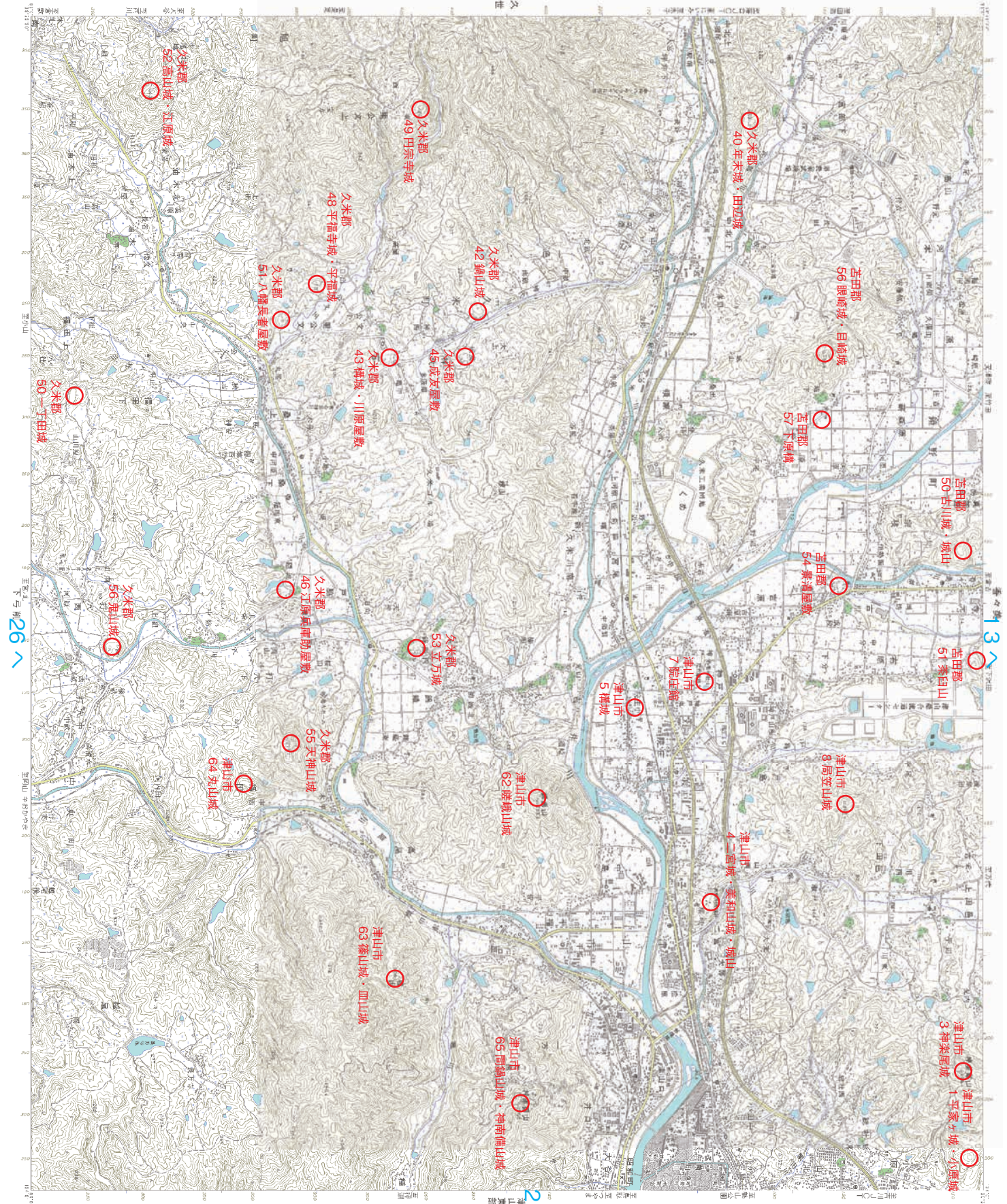


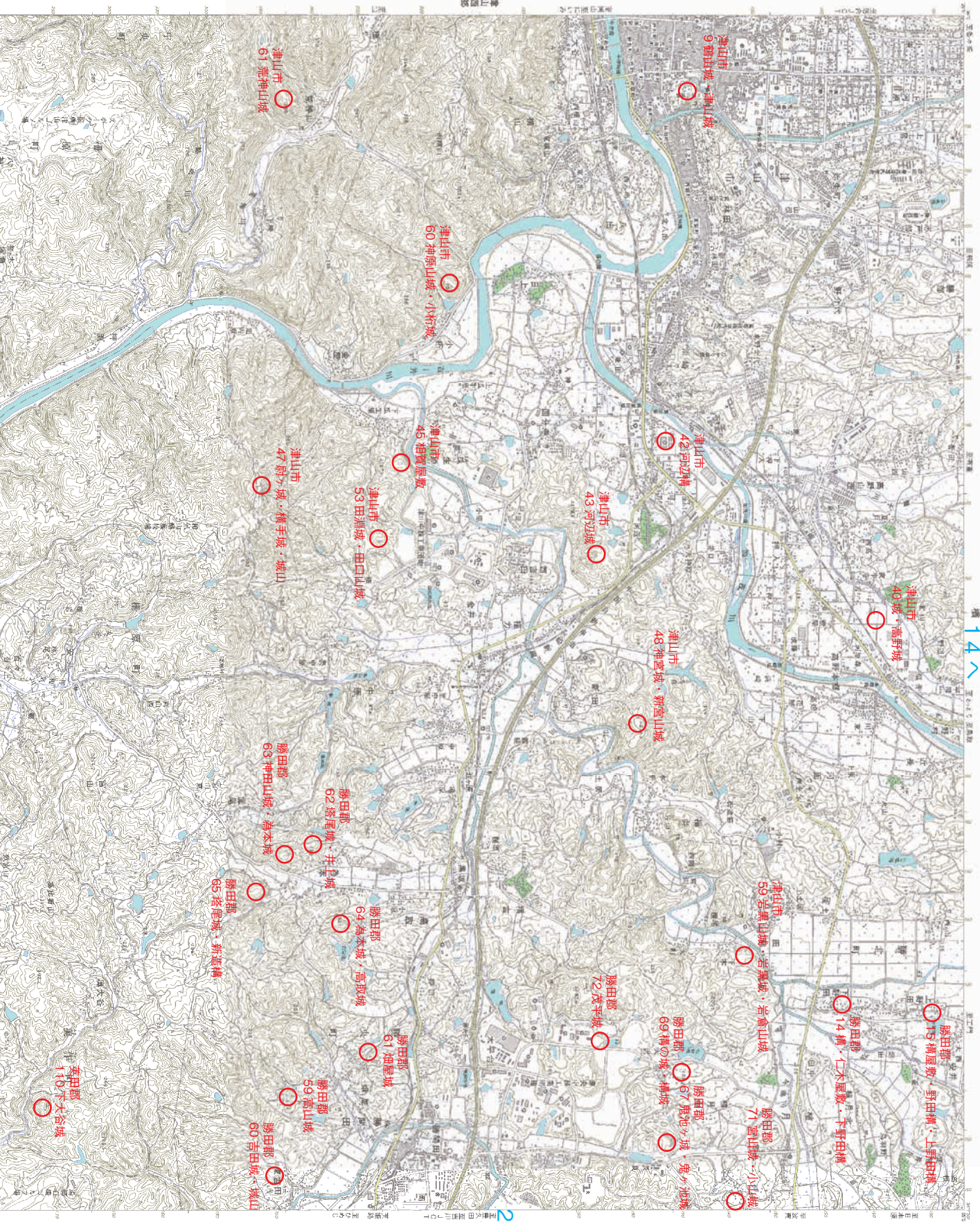


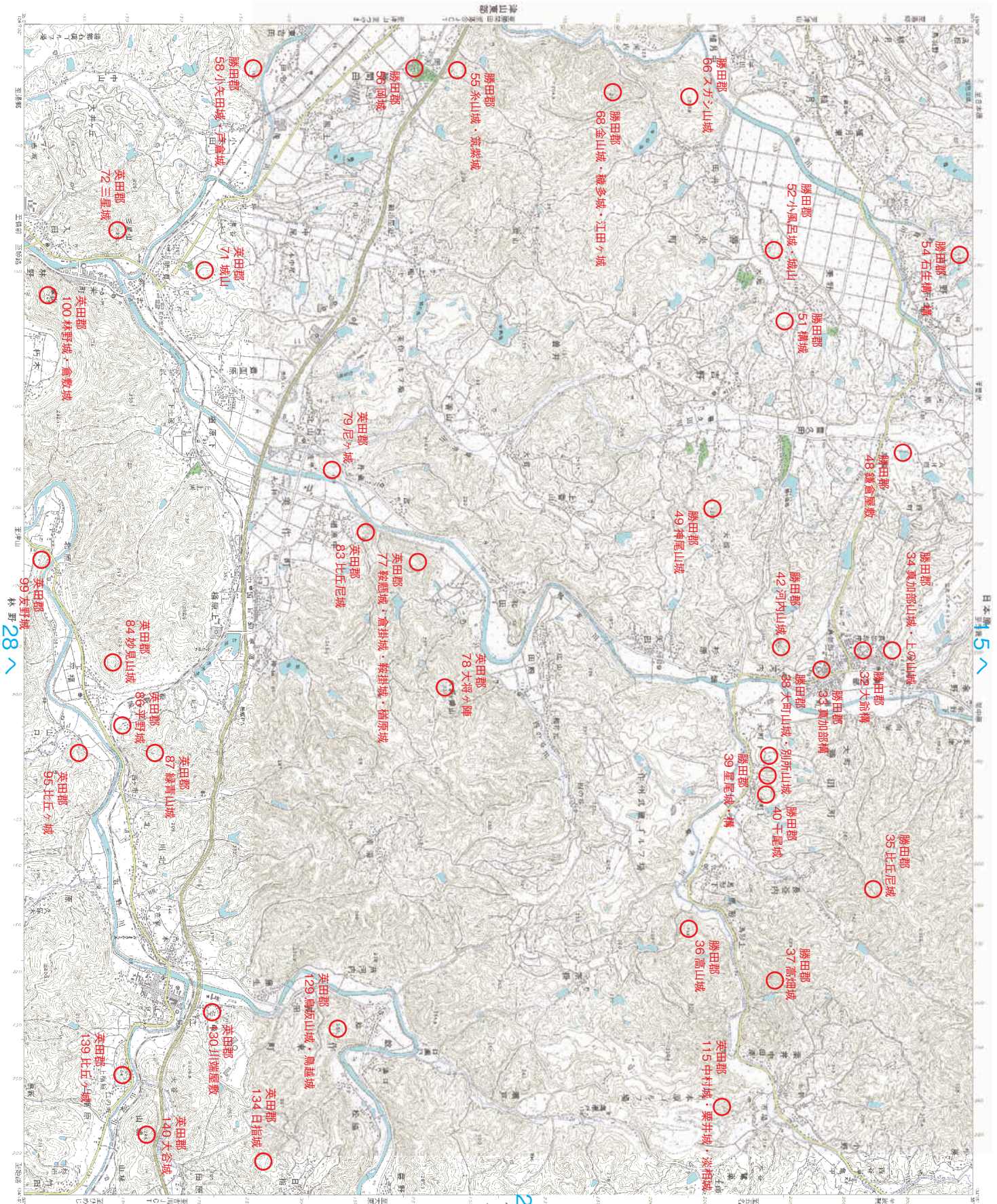


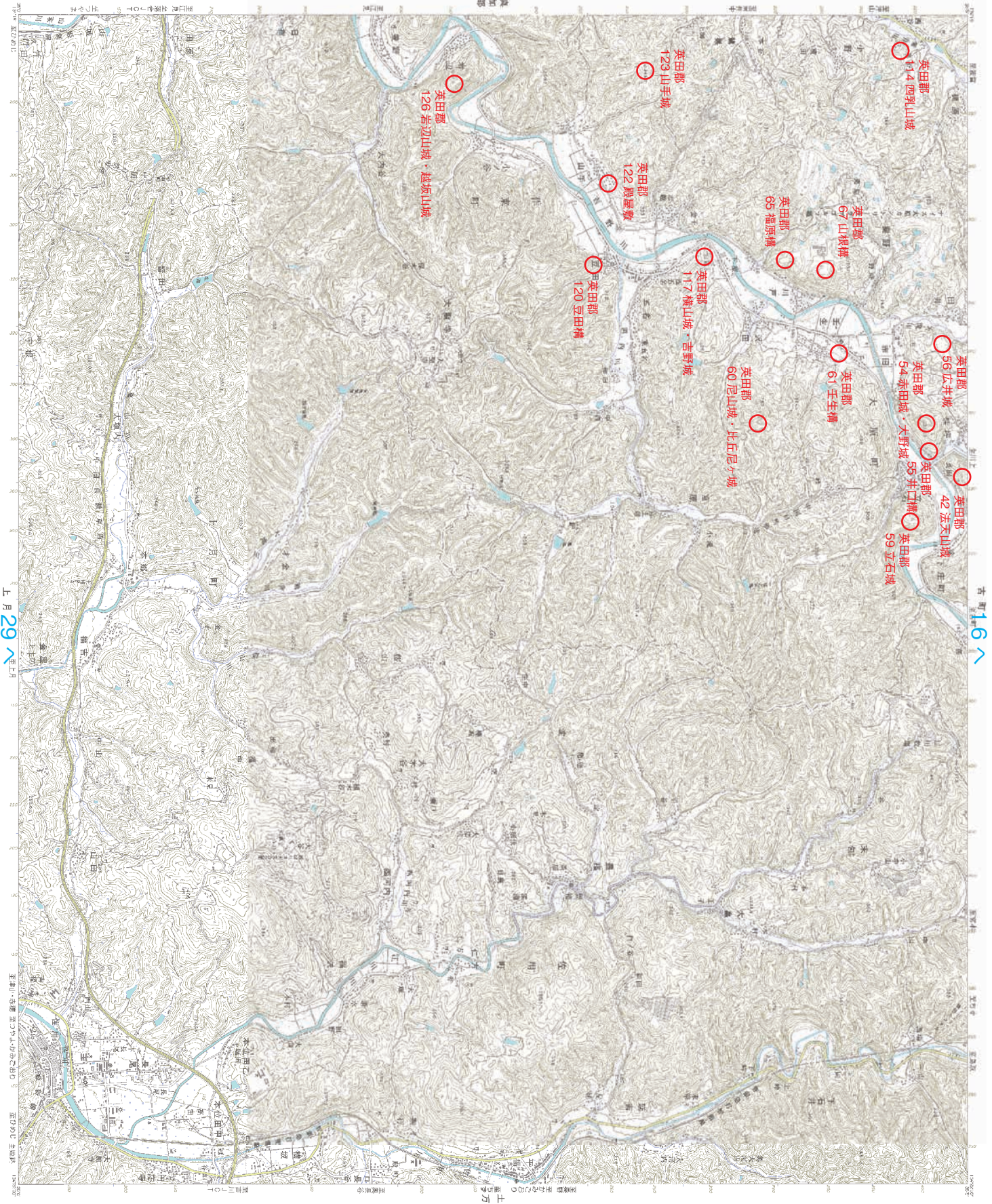


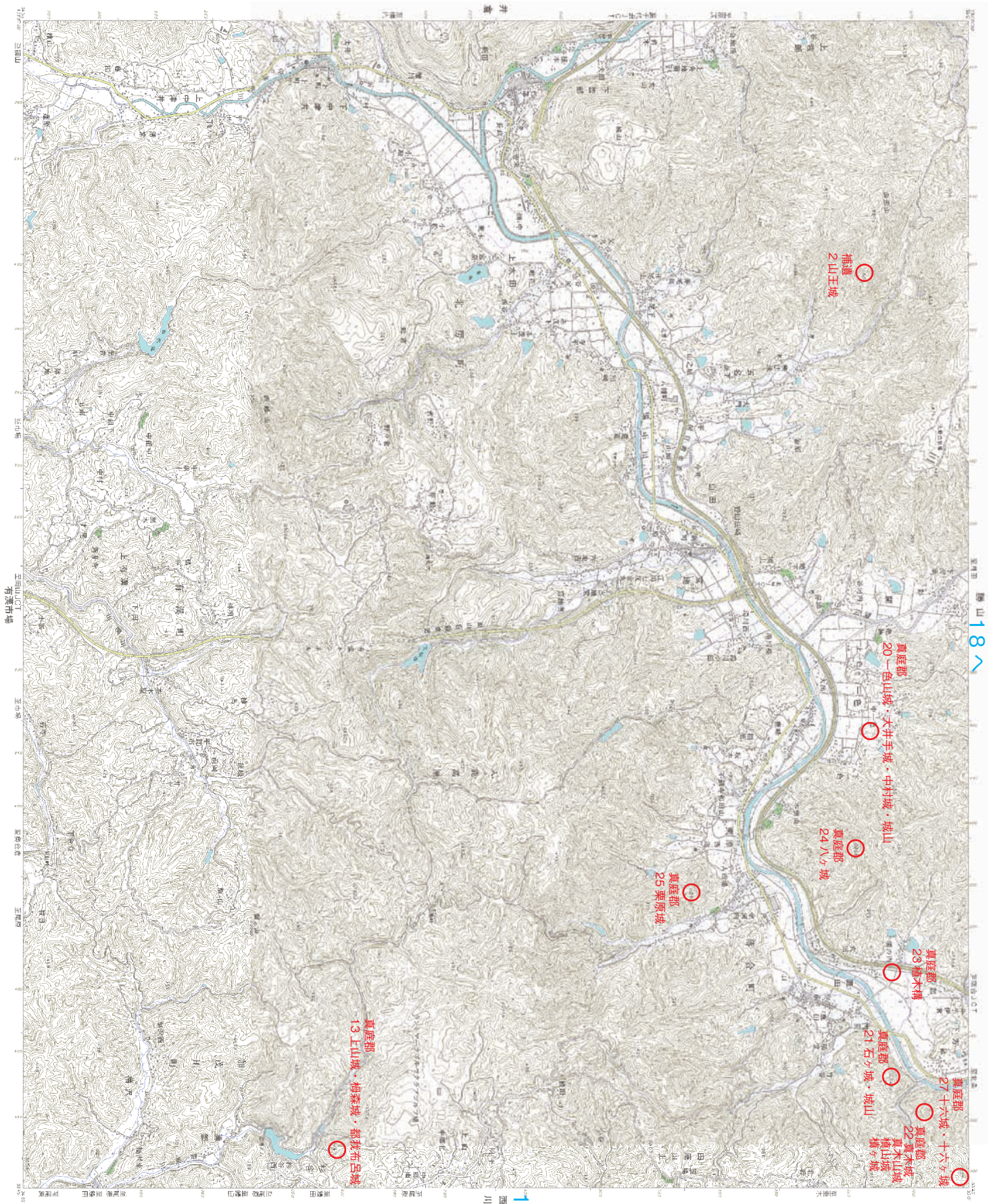






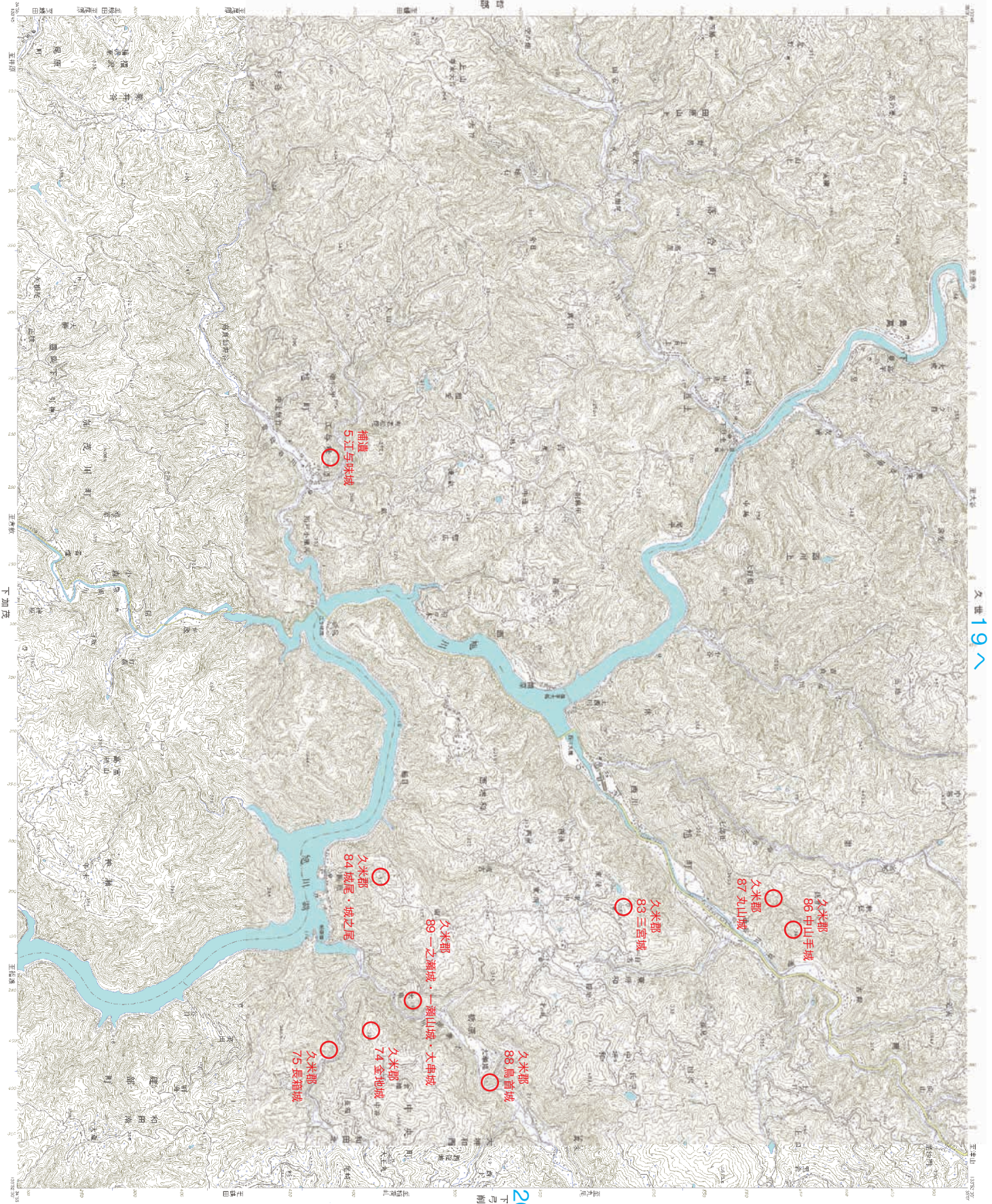




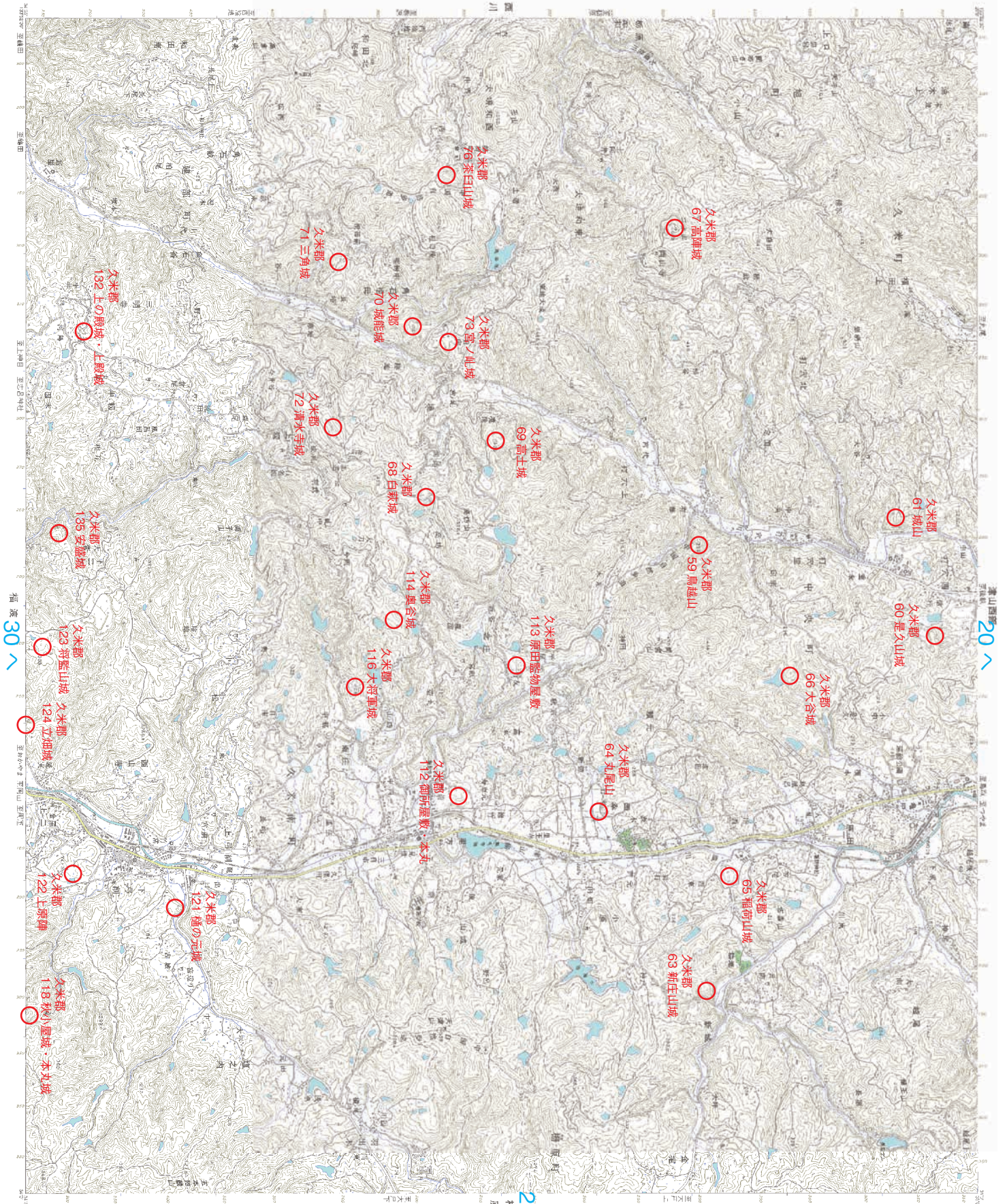


18

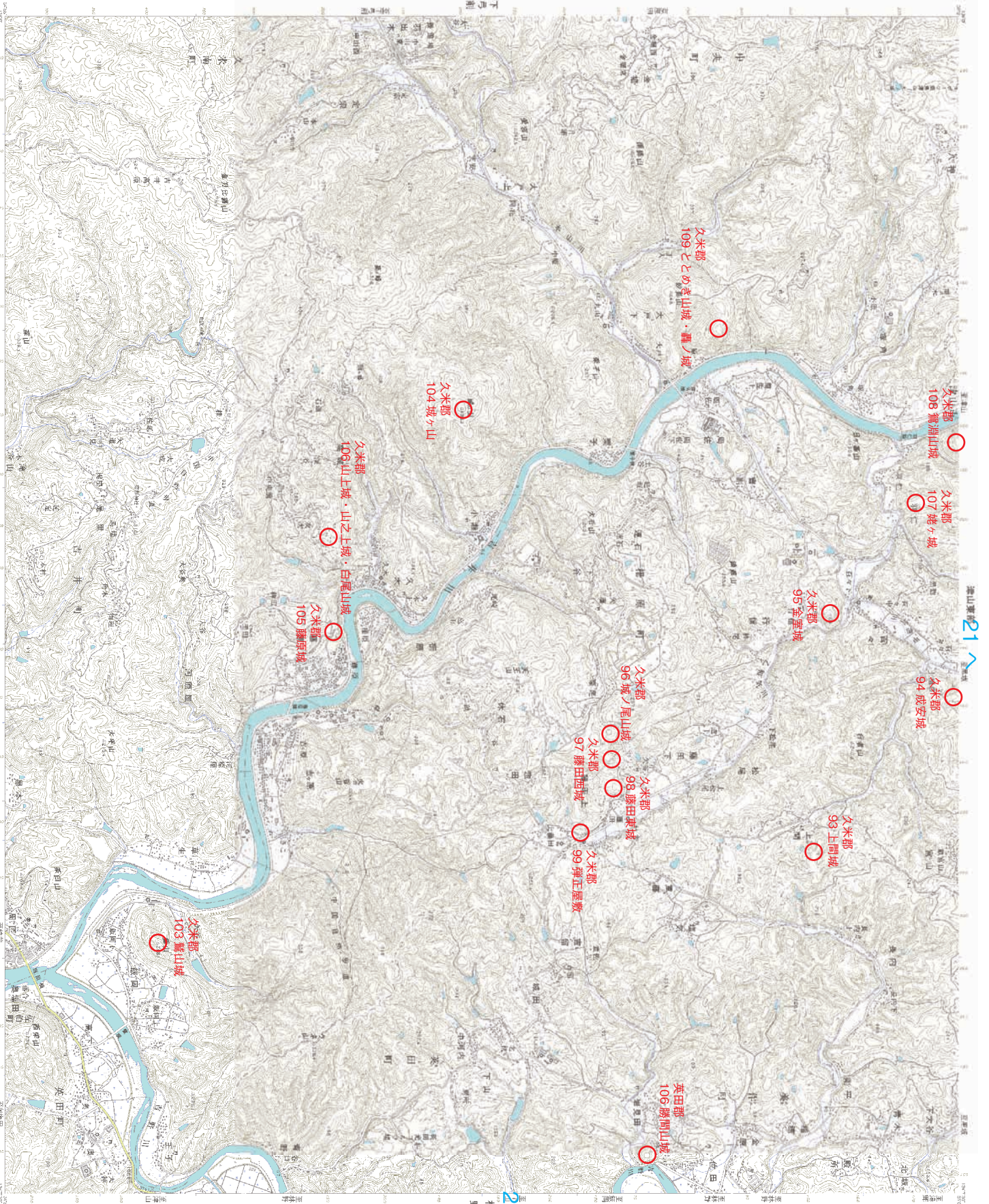
19



25

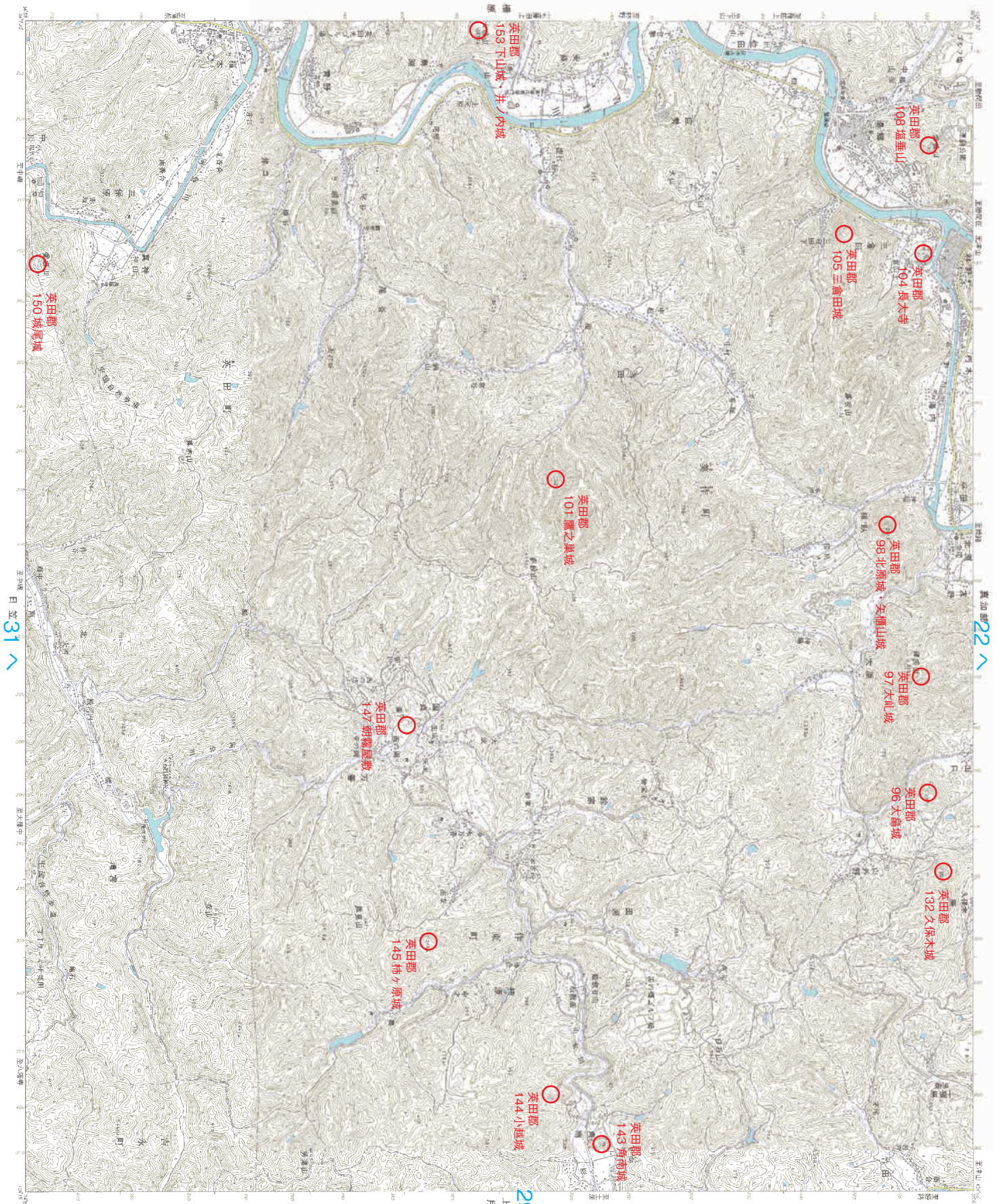


30



21

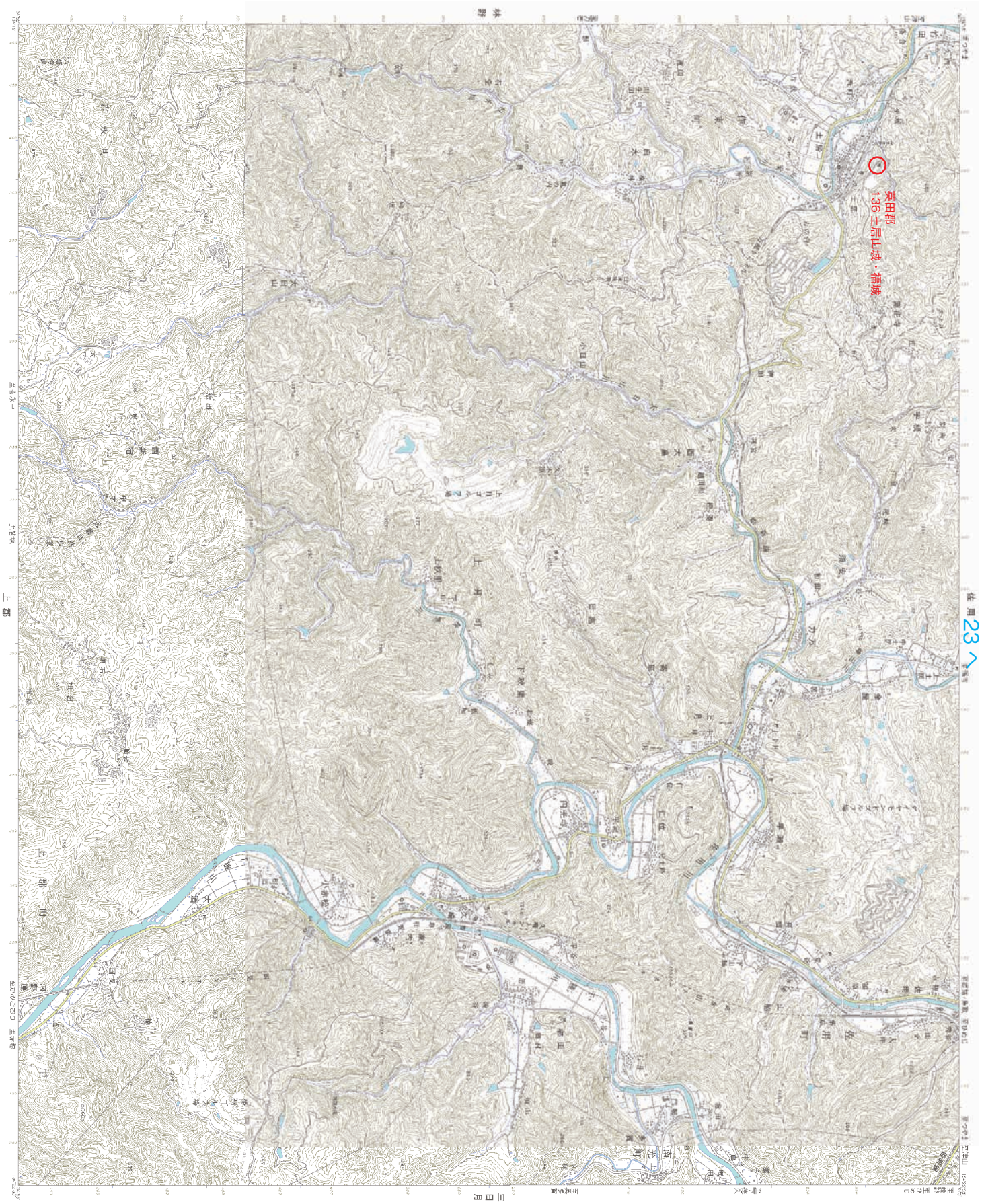
27 ^

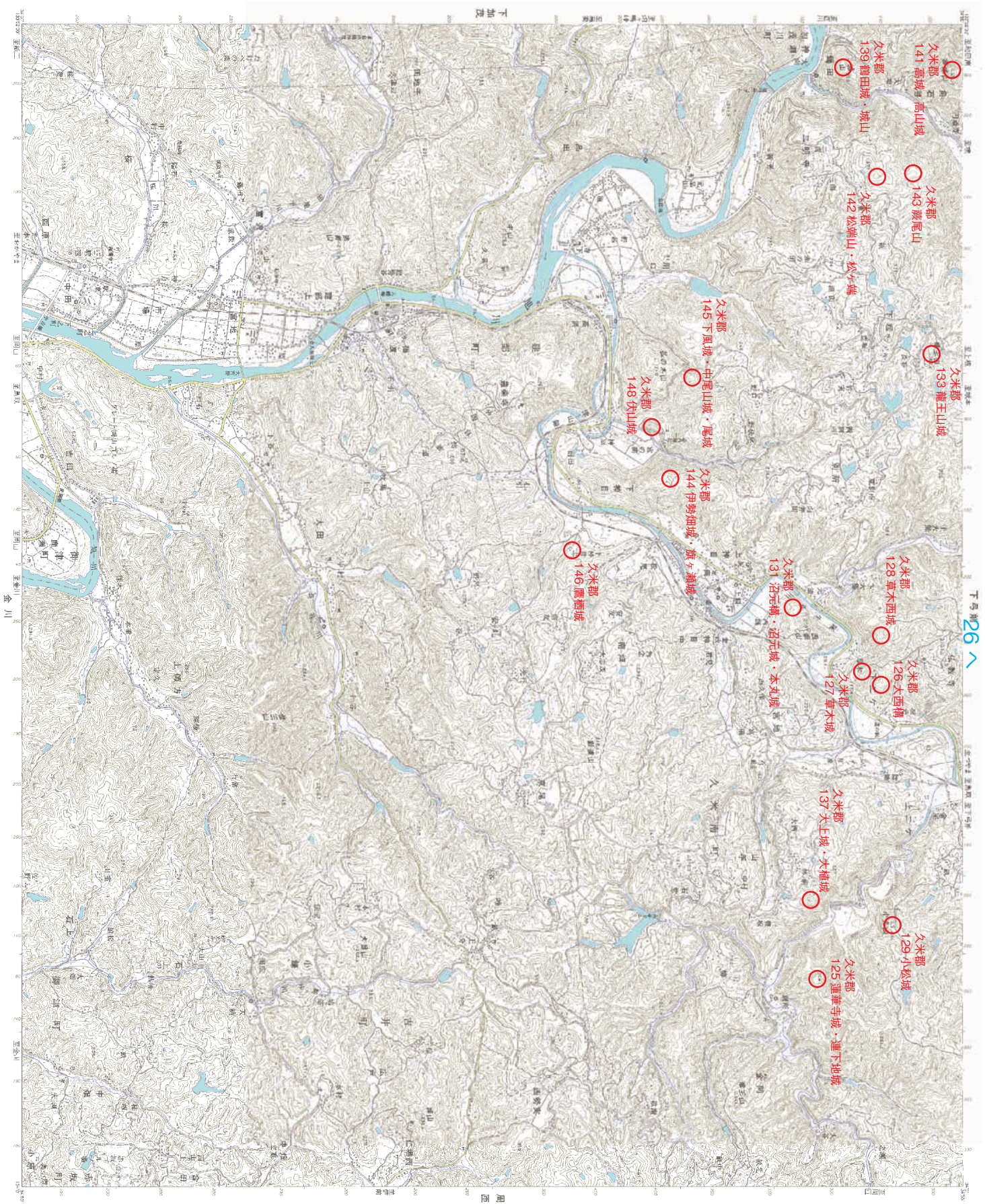


22 ^

29 ^

31 ^







第二章

美作国城館の概説

に、資料操作を介して歴史研究の資料として活用することを特徴とする。これにより、地域の調査成果を学術研究に昇華させる役割を果たしてきた。

今日、一六世紀の城郭の変遷過程については諸分野から高い関心を集めている。その中で、美作地域などの境目領域に築かれた城郭遺跡は、当時の城郭の構造や年代観、及び当時の社会像を知る上で、その資料的価値は高い。また、一六世紀後半に多くの勢力が没落した備前・備中・美作地域ではまとまった文献史料が残っていない。そのため、これらの城郭遺跡は当時の地域社会を知る上で、有効な「史料」となると見込まれる。

2 戦国・織豊期の城郭の展開について

城郭遺跡を歴史研究の史料として活用するにあたっては、基礎作業として考古学的手法を用いた調査と資料操作が必要である。具体的には、現況遺構の図化(縄張り図作成)を行い、集めた資料群について模式的理解(特徴を見出した上でのモデル化)と形式組列(その特徴がどのように変化してゆくかを並べる)からおよその年代比定を試みる。千田嘉博氏はこれらの作業過程を示した上で、実際に織豊系城郭の虎口プランの編年案を提示しおおよその年代指標を導くこと³⁾で、城郭遺跡から戦国から近世社会の劇的な変化を論じた。

全国に無数に残る城郭について縄張りからおおまかに分類すると、二つの系譜と五つのグループに大別できる(北海道のチャシ、沖繩のグスクを除く)。

まず、村田修三氏により、**①**居住空間を伴う平地居館から館城、丘城へと展開する系譜と、**②**居住空間よりも要害性を重視した山城(比高差のある丘城を含む)の系譜が示された⁴⁾。

①の系譜では、平地居館は中世を通して土豪層・地頭クラスの居館から守護館まで様々な築城主体により各地で膨大な数が再生産された。そして、地域紛争の激化に伴い、防禦をより高めるために平地居館から土塁や多重の空堀などを用いた館城や丘城へと展開した。但し、平地居館や館城・丘城は再生産による開発行為や後世の改変により大半が破壊され、今日ではわずかな数が残るに過ぎない。

①については次節にて、美作地域などに残る「構」と呼ばれる事例を取り上げて確認したい。

一方、**②**の系譜は、居住空間を離れて山上の要害の地に陣所を張ることから始まったと考えられる。南北朝期までは、一時的な籠城を目的に高山や山岳寺院などに堀切や空堀などの阻塞を築き城郭施設が営まれた。そして、応仁の乱前後の一五世紀後半頃に、山上に戦闘機能を専有する防禦施設を築き恒常的に維持する動きが生まれる。山城の創出は、**①**の系譜と異なり、居住空間と別に、純軍事的な施設を恒常的に使用する新たな現象と評価される。実際、単純な曲輪を創出するだけでも、山の上で普請・作事を行い在番衆を籠め維持管理するには築城主体にそれ相応の力量が問われる。その意味で山城の創出は、築城主体に軍事的意識の覚醒をもたらす新たな展開と位置付けられる。

戦国後期(一六世紀半ば)には、生産力向上によりそれらの作業量を満たすだけの経済的裏付けが整ったことから、様々な築城主体により無数の山城が築かれた。そして、山城への籠城体制が常態化するにつれて、従来は**①**の系譜にあった居住空間や政務空間の系譜が次第に戦闘機能が専有する山城に統合された。その結果、修築が頻繁に行われ、空堀(豎堀・横堀)や土塁、石垣による防禦の工夫する意識が高まったものと考えられる。その過程で、築城主体である権力体や地域間での縄張りの技術的格差や独自性が生み出された。

このような通史的理解に基づいて、各地で大名領国などの共通項と縄張り技術の関係性を中心に、縄張り技術の分布が検証された。今日も、猶、様々に検証が進められているが、大きく五つのタイプに分けると理解しやすい。

ひとつは、在地系城郭のグループである。曲輪の創出や堀切、空堀、土塁などが単発的に使用された段階を経て、全国的に、城内の各曲輪の機能充実よりも塁線の強化や城域の外周部を堅固に防禦することを指向する。地域ごとに土塁・横堀・畝状空堀群などを組み合わせさせた防塁型ラインが創出され、様々な技法で城域外周部を囲い込む縄張りプランが主流を占めた。

多くの築城主体が塁線や外周部の強化について試行錯誤するのに対して、各曲

付表 「織豊系城郭虎口変遷案」

「—」は「腕」又は「腕」の形跡を示す。
 城名は指標とした城郭である。()は大凡の推定年代である。

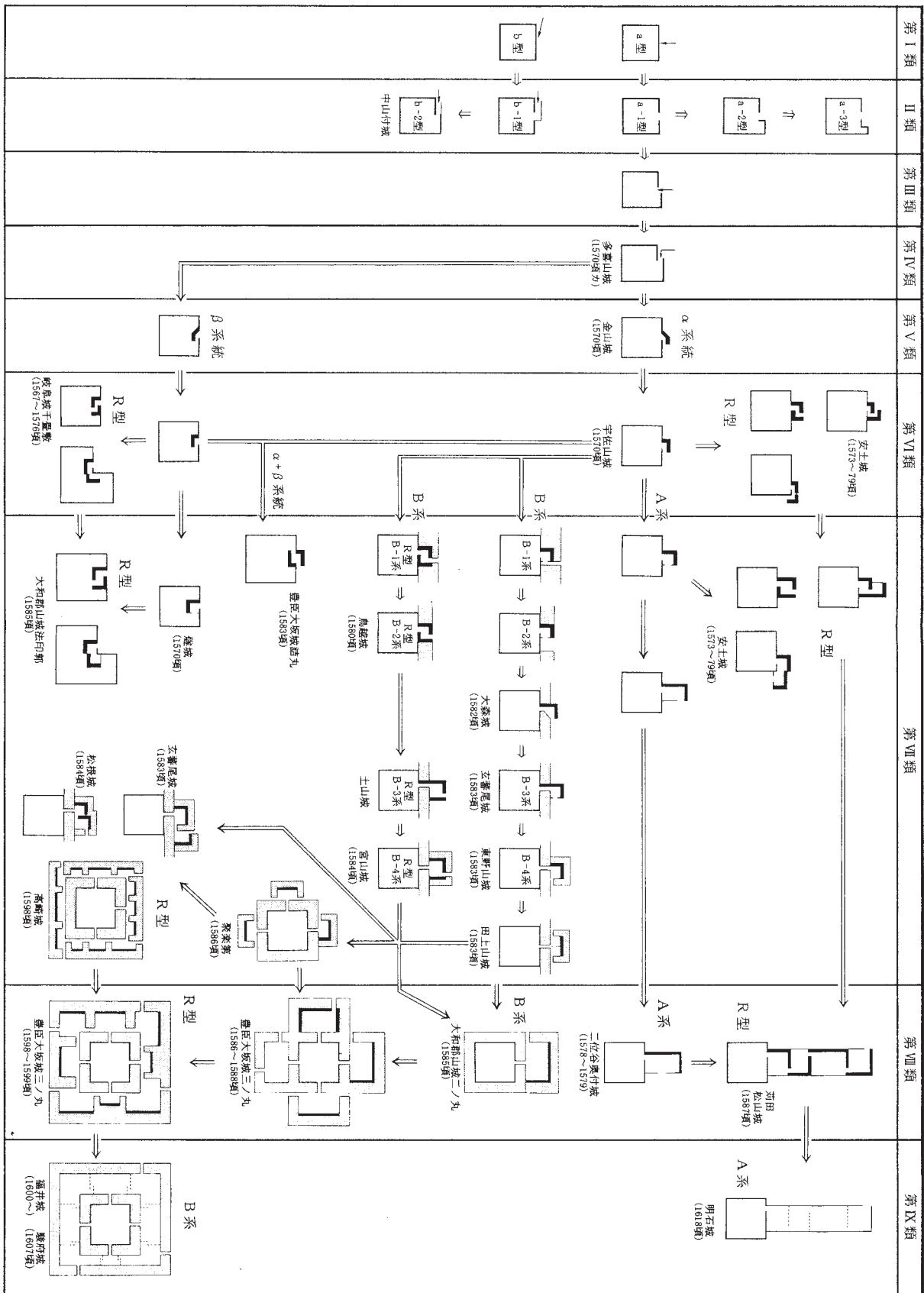
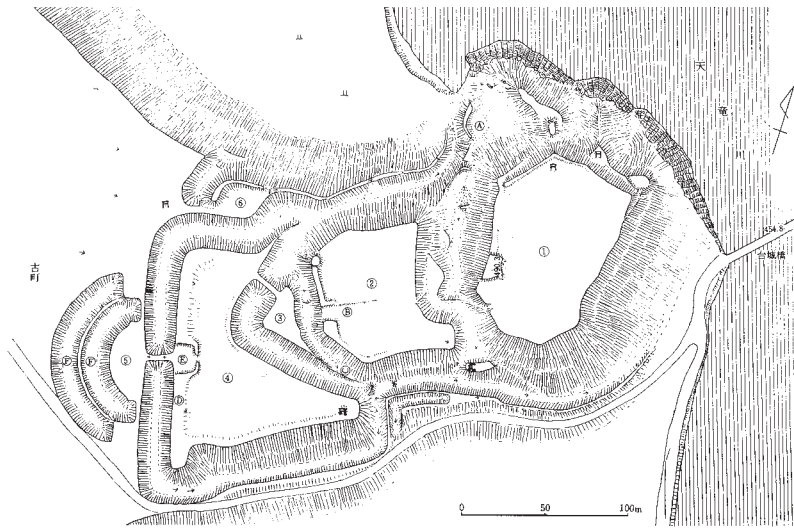


図2 織豊系城郭の虎口プラン変遷案 [木島 2000] より転載

輪の塁線を切岸・土塁・横堀・石垣塁線などで固めた上で、弱点となる開口部を如何に強化するかを試行錯誤し、独自の虎口プランを創出した勢力が、織田・豊臣（羽柴）氏、後北条氏、武田氏である。

第一に、織田・豊臣（羽柴）氏は、開口部の防禦について、L状石塁（土塁）を押し出し枳形虎口・馬出しを創出することで回答を出した。これにより、主郭への求心性を高め、枳形虎口・馬出しを連続し拡張させることで曲輪を再生産する仕組みを創出した「図2」。このグループは織豊系城郭（織豊系縄張り技術で改修・新規築城した城郭）と呼ばれている。

第二に、台地状地形が多く見られる関東・甲信において、同様の課題に回答を出した勢力が後北条氏や武田氏である。



大島城図（本田昇作図、1974年4月調査）

図3 武田氏系城郭の丸馬出し（大島城） 本田 昇 調査作図
村田修三編『中世城郭事典』二（新人物往来社、1987年）より転載

武田氏は、横堀で周囲を囲まれた主郭から、対岸に土橋状に通路を押し出して堡塁を構え、側面から放射状に出入り口を配する丸馬出しを創出した。この丸馬出しを基調とするグループを武田氏系城郭とする「図3」。

一方、後北条氏は、横堀で周囲を囲まれた主郭から、対岸の帯曲輪に堡塁となる空間を造り土橋で通路を設ける角馬出しを創出し



図4 後北条氏系城郭の角馬出し（滝山城）西股総生調査作図
東京都の中世城館主要城館編（東京都教育委員会・2006年）より転載

この角馬出しを基調とするグループを後北条氏系城郭とする「図4」。

そして、第三に、織田・豊臣政権の統一により、安土城・大坂城・肥前名護屋城など大型化した拠点城郭として広がった「近世城郭」のグループがある。

なお、武田氏系城郭・後北条氏系城郭のない西日本では、各地の城郭遺跡は、織豊系城郭かそうでない在地系城郭かに大きく二分される。よって織豊系城郭の縄張り技術の見極めさえできれば、おおよその城郭の縄張り技術は理解できると思われる。⑧の系譜については、次節の後半部で美作地域に残る在地系城郭と織豊系城郭の事例から確認したい。

美作の山城・丘城・館城

1 戦国・織豊期の美作国と城郭遺跡

個別事例を概観する前に、上記の城郭遺跡のおおまかな分類と年代観をもとに、

戦国・織豊期（一六世紀後半）美作国の動きと城郭遺跡について概観する。

戦国・織豊期（一六世紀後半）の美作地域をみると、永祿以前と元龜・天正期で大きく様相が変わる。

一六世紀前半までは、尼子氏や赤松氏・浦上氏など守護・守護代出身勢力が地域に割拠した領主（国衆・土豪層）を掌握することで勢力を競い合った。この時期には各勢力は居住空間の伴う平地居館や館城・丘城を構えて各地に割拠したのと思われる。そして守護・守護代勢力の軍役に応じて有力者の居館や山上の詰城など拠点城郭に在番したものと思われる。

一方、元龜・天正期になると、西国の毛利氏や東海・畿内近国の織田氏が大小の国衆を併呑し勢力を伸ばす。美作地域は両勢力の境目となり、天正初期までに備前国の浦上氏や美作国の後藤氏・三浦氏、備中の三村氏が没落する。その一方で、宇喜多氏をはじめ草薙氏・中村氏など新興勢力が毛利氏や織田氏への帰属を通して地域の掌握を深める。最終的に天正一〇年（一五八二）から毛利氏・豊臣（羽柴）氏間で休戦・中国国分け交渉により宇喜多氏領国が確定するが、その際も入部する宇喜多氏に対し土着性を強めた毛利方勢力は激しく抵抗した。

このような状況の変化に対して、国衆や土豪層は自らの存在基盤を賭けて力量に応じた山城・丘城を築き、長期間立て籠る傾向を強める。このことが、毛利氏や織田氏・豊臣（羽柴）氏の拠点城郭も含めてこの時期に多数の城館が整備された背景にあると考える。

特に、天正中・後期から中国国分けまでをピークに在地系城郭（曲輪・土塁・空堀など既存の縄張り技術を用いた城郭）は高度に発達する。これに対して、中国国分け以降、抵抗する美作国衆鎮圧のために豊臣（羽柴）・宇喜多勢が築いた陣城を端緒に、織豊系縄張り技術で改修・新規築城した城郭（織豊系城郭）が整備された。美作地域にとっては天正一二年（一五八四）の岩屋城包圍戦が新旧縄張り技術の転換を示す象徴的な出来事となったと考えられる。

以下、これらの概観を踏まえた上で個別事例をみていきたい。

2 地域と館城―構について―

「美作の城館」を考える際には、山城のみならず、平地や段丘、丘陵地に残る「構」と呼ばれる館城や丘城にも注目したい。これらの館城・丘城について、平野部の沖構、段丘上の石須構、そして低位丘陵に位置する河原山城の三つの事例をあげる。

沖構 [図5]

吉井川支流香々美川沿いの平野に位置する館城である。近隣には下原構など同様の事例が確認される。しかし、その多くが耕地整理などで現状がわからない中で、遺構が残る残す数少ない事例である。

沖構は南北一二〇m、東西五〇mほどの長方形の区画が主郭とされる。周囲に比べてやや微高地となっている。現在、堀跡は北側から東側にかけて残る。それ以外の堀跡は耕地整理などで消滅しているが明治期の地籍図から周囲を堀が廻っていたことがわかっている。平地居館に対して、より防御性を高めた館城と評価される。

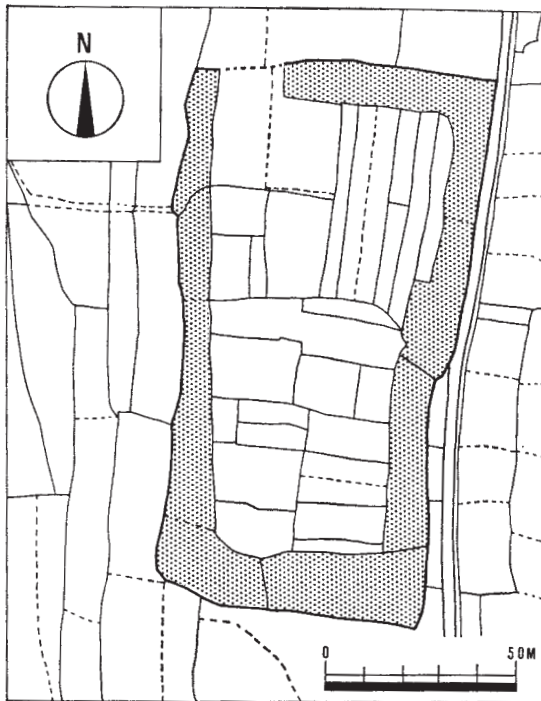


図5 沖構図 日本城郭体系 13 広島・岡山（新人物往来社、1980）より転載

沖構の城主はよくわかっていない。文献史料からは、永祿期には宇喜多勢の芦田右馬允が立て籠り毛利勢と戦ったとされる。その後、中国国分けに抵抗する国衆・土豪が立て籠り、宇喜多勢に抗戦している。平地の館城であるが、危急の際に籠城する拠点となるなど、彼らの中心的役割を担う勢力の持城だったことがうかがえる。

香々美川流域は、神楽尾城や升形城、岩屋城など毛利方の拠点城郭に近接しており、流域の国衆・土豪は在番衆として動員されたものとみられる。その一方で、周辺の山地や丘城をはじめ、河川に近い平野部にも館城が多く分布する。それぞれの城郭遺跡は相対的にみて恒常性が高い。彼らが上位権力の在番に参加する一方で自分たちの生活圏は自力で守っていたことが見て取れる。沖構の遺構の検証と周辺の城郭分布状況を重ね合わせることで、この地域の国衆・土豪層の存在形



図6 石須構図 畑 和良 調査作図

態を読み取ることができ。

石須構 [図6]

鏡野町真加部地区に位置する館城。沖構が平野部の館城とすると、石須構は段丘の先端部に築かれたタイプとなる。周囲が宅地や田畑として開発された中で「構」と呼ばれる館城の形状が良好に残った城郭遺跡であった。ところが、近年、土塁が破壊され堀が埋められた。良好に遺構を残していたにも関わらず、史跡として保全策が講じられていなかった点は極めて残念である。

幸い破壊前に縄張り調査が行われている。石須構は北側に空堀を配してほぼ四〇m四方の主郭を切りだした形になっている。主郭からみて上方にあたる北側に対して土塁を構えた。但し「作陽誌」では四方に土塁を廻すとある。

築城主体などは不明であるが、南方に平野部を一望する高台に立地しており、周辺の村落を支配した土豪層の館城であった可能性が高い。石須構と同様の規模の館城は河内構など各地に確認される。周囲の勢力を糾合した沖構よりも一回り小さく、半町歩程度が一般的な規模だったとみられる。

河原山城 [図7]

津山市市場地区に位置する丘陵の一角に築かれた館城。本丸城・国司尾館と共に三つの館城が密集して分布する。近くに烏帽子形城が位置する。本丸城・国司尾館に対して河原山城は全体が良好に残されており館城を知る貴重な事例となっている。幸い、いずれも市指定史跡となっている。

三つの館城の内、河原山城をみると、土塁を持つ主郭がありその廻りを横堀で囲繞する。立地的には丘城とも言える様相を示す。

中心となる主郭は六〇〜七〇m四方の正方形の区画となっている。北側から西側にかけて土塁と横堀がみられる。東側にも土塁が部分的にみられる。横堀を挟んで北側にも削平の良くない曲輪が確認される。

河原山城の主郭はさらに三つの空間に分節する。その内、北東の曲輪Ⅲが高所

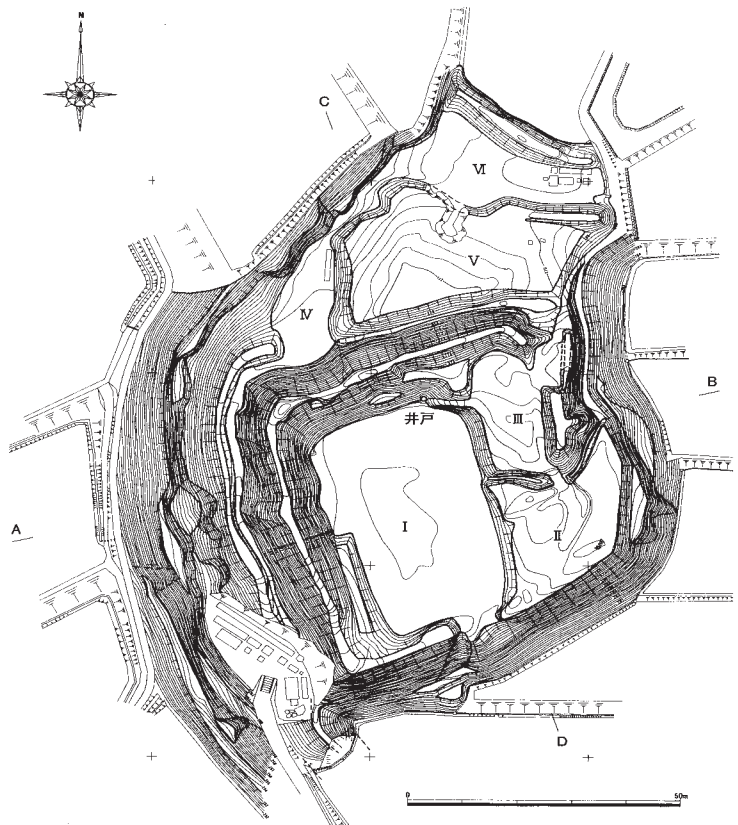


図7 河原山城図 勝北町埋蔵文化財発掘調査報告1『西村古墳群』(勝北町教育委員会、2000年)より転載

を占め北東隅に横矢掛かりを伴う櫓形虎口が確認される。曲輪Ⅰ・Ⅱが下位曲輪にあたる。曲輪Ⅰの南側にも平入り虎口が確認される。

外観をみると、河原山城は沖構や石須構のように方形の館城である。しかしながら主郭の内側はさらに分節され、曲輪Ⅲに枡形虎口が配されるなど、織豊系縄張り技術の特徴を示す。おそらく主郭内部は後世に宇喜多氏など織豊系勢力による改修が入り陣城とした可能性が考えられる。中国国分け後の掃討戦に際して勝北地域掌握のために築かれた陣城とする可能性が高い。

これらの改修を除くと周囲は在来の館城の形状を残す。隣接する本丸城・国司尾館と共に複数の館城が密集する分布を示しており、村落単位の土豪層が横並びに割拠する様相を示す貴重な城郭遺跡と言える。

以上、沖構と石須構、河原山城の三つの館城の事例を紹介することで、平地居館から館城・丘城の系譜について概観した。

これらのタイプは、方形の主郭があり、その周囲を横堀が区画するという縄張りが一般的だったとみられる。方形区画を保持したまま防禦を高めることで、館城や丘城へ移行した様相が見て取れる。

往時は平野部を一望する段丘や丘陵上にこうした平地居館がいくつも点在していたと思われる。これらの事例はたいていは単郭構造に留まるが、上位権力の拠点城郭への軍役を果たす分抑制された可能性が考えられる。この他、館城と近隣の村落との位置関係から、村落内における築城主体の自立性などを読み解く手がかりともなる。

一見すると、単純な縄張りで重要なものにはみえないかもしれないが、これらの館城も、地籍図による復元的考察も含め類例を可能な限り集めることで、「地域史研究と在地構造分析」を読み解く「史料」となることを指摘しておきたい。

3 戦国後期の拠点城郭

一六世紀後半以降、激しい所領拡充競争で台頭した広域大名権力(戦国大名)は、土豪・国衆を傘下に編入し領国を広げていった。前時代の支配層よりも土地・領民を深く掌握し、数郡・国規模の総力戦を行うようになった。彼らは領国内に多数の拠点城郭を設定し絶えず軍事行動を展開した。

美作地域では、尼子氏滅亡後に進出した毛利氏が天正年間に拠点城郭を整備していった。代表的な事例として神楽尾城・高山城・岩屋城を取り上げる。

神楽尾城 [図8]

毛利氏は、尼子氏を降伏させた後、美作国中部に進出し拠点城郭を整備した。そのひとつが神楽尾城である。

縄張りをみると、美作総社宮の後背、神楽尾山山頂が主郭となり、南西側の武者溜・馬場、堀切を挟んで三の丸地区、そして南東側に独立した別郭としての二

美作国 神楽尾城

岡山県津山市田邑・総社神楽尾山

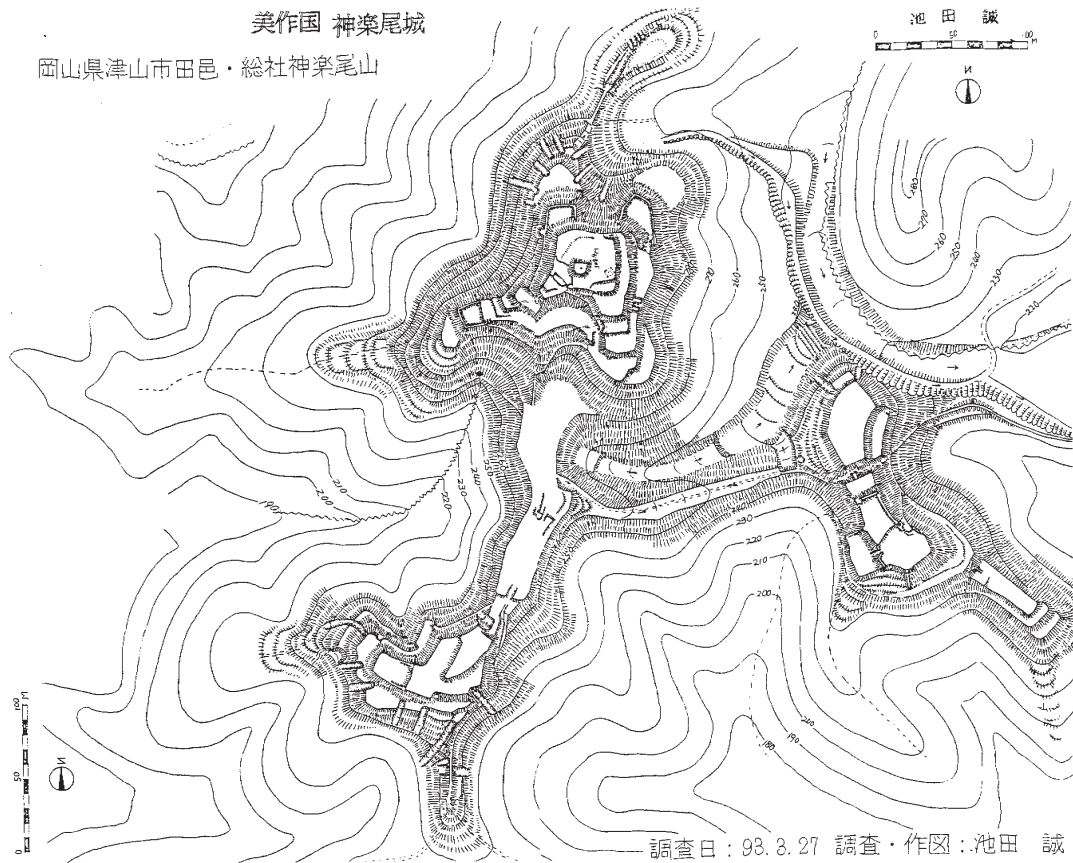


図8 神楽尾城図 [池田 1994] より転載

の丸から構成される。

山頂の主郭（本丸）は、一辺四〇m程度のほぼ方形の区画で地形に沿って帯曲輪が配された。主郭直下の北側の二つの曲輪と西側曲輪には、縁辺部に土塁が配された。それぞれ尾根伝いの侵入に対して堡塁を構えて防禦する意識が強く現れた用法と評価される。このようなコの字型に土塁を配する用法は毛利氏、及びその関連勢力の持ち城によくみられる。但し、土塁上には虎口は設定されておらず、外周部を強化する堡塁として築かれたことがわかる。

主郭（本丸）の南側にある武者溜・馬場は城内で最も広い空間である。南側正面に平入りの虎口が設定されている。馬蹄状地形を挟んで三の丸が位置する。城道は三の丸の東脇を通過してこの虎口に到達するようになっており、三の丸が城道を制する役割を果たす。三の丸の南側斜面には帯曲輪と畝状空堀群による遮断線が設定された。

一方、武者溜・馬場の東側には平入りの虎口があり二の丸へ通じる。二の丸地区は中央の堀切を挟んで北側の主郭部と南側の土塁を配した曲輪群に分かれる。二の丸地区はこの区域だけで縄張りは完結しており、主郭部（本丸）や武者溜・馬場、三の丸との連携はほとんど見られない。神楽尾城の中で、独立した一城別郭となっている。

神楽尾城の特徴を整理すると、土塁による堡塁や畝状空堀群などを弱点となる尾根筋にピンポイントで用いたように、外郭部を如何に防禦するかに関心があつたことが見て取れる。その一方で、土木普請により虎口プランを設定しないなど、外郭ラインとは相対的に虎口に対する意識が弱いことが見て取れる。そのため、曲輪配置をみても、二の丸、三の丸に対する主郭（本丸）への求心性はそれほど高くない。地形の高低差により主郭（本丸）の優位性を保ちつつ、複数の軍団がそれぞれの受持ちに駐屯することで、相対的に広い城域が形成されたことがわかる。

高山（矢筈山）城 [図9]

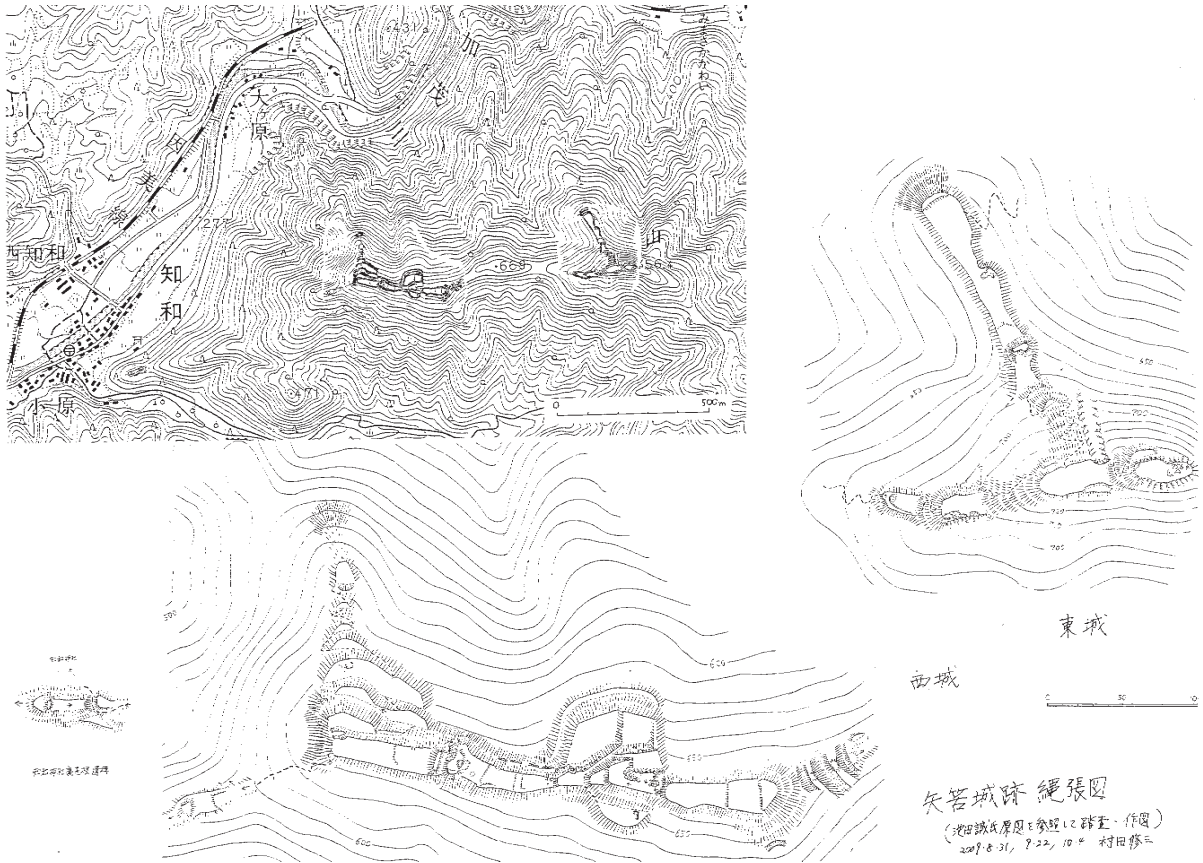


図9 高山(矢筈山)城図 村田修三 調査作図

高山(矢筈山)城は、毛利氏が進出した因幡と美作を連絡する拠点として整備された山城である。永祿年間以降、草薙氏が城主として入部しこの地域を掌握する。草薙氏は毛利方の城主として加茂川流域を支配下に置き、中国国分けには中村氏と共に宇喜多勢と最後まで抗戦するなど、美作国東部の有力国衆として台頭した。

城域は矢筈山山上の「東城」と西側の曲輪群「西城」に分けられる。両者の間をつなぐ曲輪や防塁型ラインはなく、二つの山城が並列した配置となっている。東城は矢筈山山頂を中心に曲輪を配した山城となっている。山頂は岩盤であり削平もそれほどではない。北西尾根筋や西側尾根筋上にある曲輪の先端部には土塁が堡壘状に配された。但し、土塁に付随して虎口は設定されていない。

一方、西城は東側に三重堀切を入れて西側の稜線に曲輪を配置した縄張りとなっている。東側の三段に分かれた曲輪が主郭とみられる。主郭をはじめ主要部には石列や石垣の使用が確認される。中央部に広い空間があり居住空間が設定されていた可能性が考えられる。中央西寄りには岩盤を援用した土塁と堀切が一体になった防禦ラインが設定されている。そして西側には地形に沿って下位曲輪群が続く。

高山城の縄張りからは、西城の方が石垣を使用するなど技法的に後発の可能性が考えられる。最終期には岩盤の多い東城を詰城とし、西城を本城として使い分けていたものとみられる。当初は毛利氏が設定した番城として矢筈山頂を中心に複数の軍団が駐留する曲輪配置であったのが、草薙氏が次第に加茂川流域に影響を伸ばし村落との結びつきを深めることで、西側に居住空間などを設定し機能の充実を図ったものと推察される。

城域が複数の地区に分かれるあり方は、広域大名権力の拠点城郭にはよくみられる特徴である。しかしながら、縄張り技術にみる東城と西城の差異は、その後の土着化を進めた草薙氏の動向を示すものと考えられる。よって、高山城は戦国後期の毛利氏の美作進出とそれに応じた国衆・土豪層の台頭を検証する「物的」史料と評価される。

岩屋城 [図10]

岩屋城は美作国の分水嶺に近い久米川上流に位置する山城である。戦国期は毛利氏の拠点城郭となり激しい攻防戦が繰り広げられた。天正一二(一五八四)年には中国国分けに対して城主の中村氏が籠城し激しく抵抗した。そのため豊臣(羽柴)・宇喜多勢により周囲に陣城が築かれ厳しい包圍戦を受けたことでも有名である。^{⑥)}

岩屋城の縄張りをみると、山頂の主郭部は大きな曲輪が複数並ぶ形で構成されており、土塁や横堀・畝状空堀群などの防塁型ラインや技巧的な虎口プランはみられない。要所には堀切を配して幾つかの区域に分節する。但し、それぞれの区域は互いに連携するような縄張りではなく、主郭部を頂点にして地形に沿って複数の軍団が持ち場を受け持つ体制であったと考えられる。

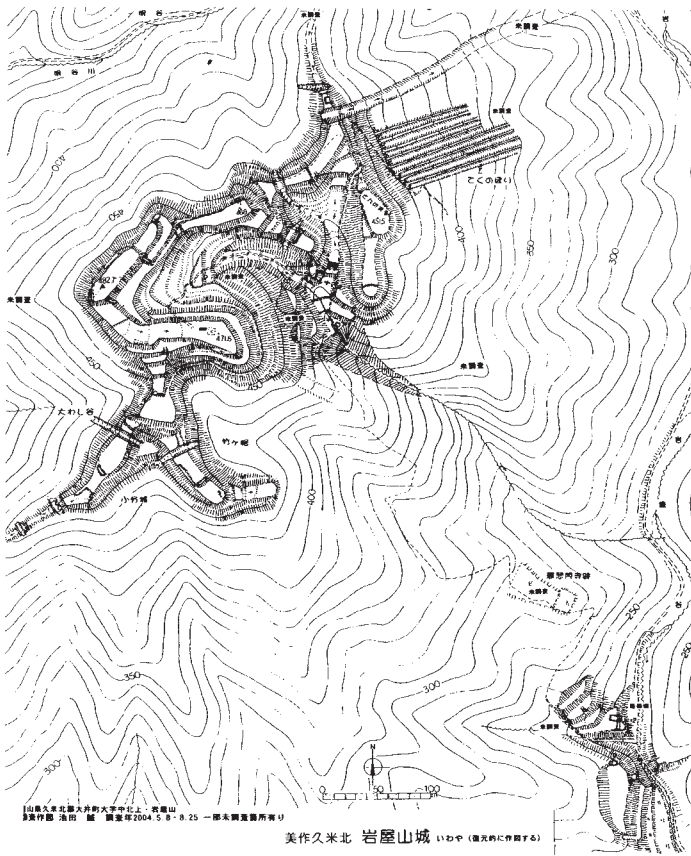


図10 岩屋城図 [池田2005] より転載

これに対して、北東側には巨大な堀切と「てのくぼり」と呼ばれる巨大な畝状空堀群を組み合わせた防禦ラインが確認される。この部分にのみ突出して築かれており、堅堀もかなり大きなものとなっている点が注目される。岩屋城において北側の尾根筋と北東側斜面の防禦に並々ならぬ意識を持ったことがわかる。おそらく最終段階の豊臣(羽柴)・宇喜多勢による包圍への対処策として築かれたものと考えられる。

以上、毛利氏が関与した三つの拠点城郭を概観した。共通する特徴として、主郭を頂点に地形に沿って複数の曲輪群が並列することで広い城域を形成していること、そして、土塁による堡塁や防塁型ラインなど外郭ラインの防禦には意識が高い反面、主郭への求心性や、虎口への意識が低いなどの特徴がみられる。いずれも先述の在地系城郭の特徴を示す。また、毛利方で共通した縄張り技術を持っていないことも確認できる。

これらの拠点城郭は城域が広いものが多く、在番衆が常駐するなど恒常的に維持するためには、かなりの負担が伴ったことは想像に難くない。それでも実際には在地諸勢力に動員をかけ、後方からの補給などを通して維持管理を行っている。広域大名権力が領国を支えた源泉についてははっきりしない部分も多くあるが、今日残るこれらの城郭遺跡から、少なくとも、毛利氏が曲がりなりにも広域作戦を持続するだけの動員力と経済力を持ち合わせていたことが見て取れる。

4 織豊系城郭の登場

毛利氏に対して、東海・畿内近国から台頭した織田氏・豊臣(羽柴)氏は、切岸や土塁、石垣などにより塁線の強化を図り、技巧的な虎口プランを積極的に用いた織豊系縄張り技術と呼ばれる独自の縄張り技術を生み出した。

宇喜多氏の毛利方からの離反を契機に進出してきた織田氏・豊臣(羽柴)氏が、美作地域で本格的に築城を始めたのは天正一二年(一五八四)の岩屋城攻めと考えられる。ここでは、代表例として、陣城の中で技巧的な荒神上陣城と、宇喜多

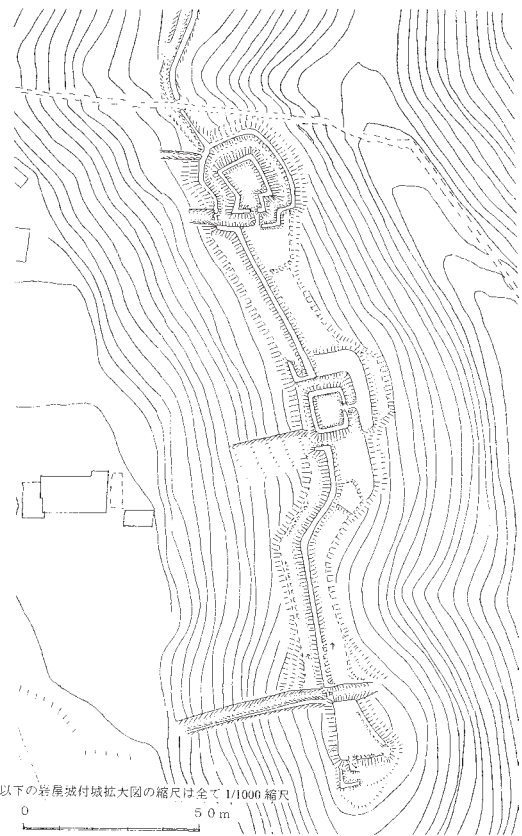


図11 荒神上陣城図 高田徹 調査作図、[高田二〇〇五]より転載

氏領国の支城として整備された荒神山城、宇喜多氏か小早川氏のいずれかが整備したとみられる岩尾山（医王山）城を取り上げる。

荒神上陣城 [図11]

荒神上陣城は、岩屋城包囲戦において豊臣（羽柴）・宇喜多勢ら織豊系勢力が築いた陣城の中で技巧的なプランを持つ。

尾根に沿って土塁と空堀による包囲ラインを長城のように築き、ライン上に方形の曲輪を持つ陣所が三箇所設定された。それぞれの陣所は、土塁囲みの主郭の周囲に横堀を配し、一角に虎口を設けたプランとなっている。既にみた在り地系城郭では固定した虎口が設定されていなかったのとは対称的である。例え一過性の陣所であっても虎口を明確に設定する織豊系勢力の意識をみる事ができる。

この内、北側陣所の虎口プランをみると、四方を横堀で囲まれた中で横堀の遮断効果を殺ぐことなく有効な出入り口を構える工夫が確認される。木島孝之氏の「織豊系城郭における虎口プラン変遷案」を参考にすると、横堀に対して南側に土塁を「」状に押し出すことで、主郭から張出した出入り口が緩衝帯（虎口空間）

を形づくる。緩衝帯の先に土橋を設けて横堀を跨いで外へ出るといふ虎口プランがみられる。「」状土塁による緩衝帯を設けることで主郭に直到されず横堀の遮断効果を最低限殺ぐことなく虎口が設定されている。これは、千田嘉博の「織豊系城郭編年表」の第4類型4B1の虎口プランと同じ構造である。千田の編年研究にみると、およそ一五八〇年代以降に登場しており、年代観とも矛盾がない。そして、この時期の織豊系縄張り技術は、戦場での拠点城郭や陣城普請の経験を重ねながら急激に発達した。樹形虎口などの創出過程で見出された「状土塁土塁」を如何に前線に押し出して防衛性の高い出入り口を設定するかを模索した。荒神上陣城にみられるような虎口に対する意識が、技巧的な虎口プランの発達を促し、「状土塁（土塁）」を連続させることで新たな曲輪の創出をパターン化する道が開かれた。荒神上陣城は、度重なる戦場の中で織豊系城郭が技術的に進化するその真つ最中の様相を残すと共に、旧美作地域で最初に織豊系縄張り技術が導入された貴重な事例と評価される。

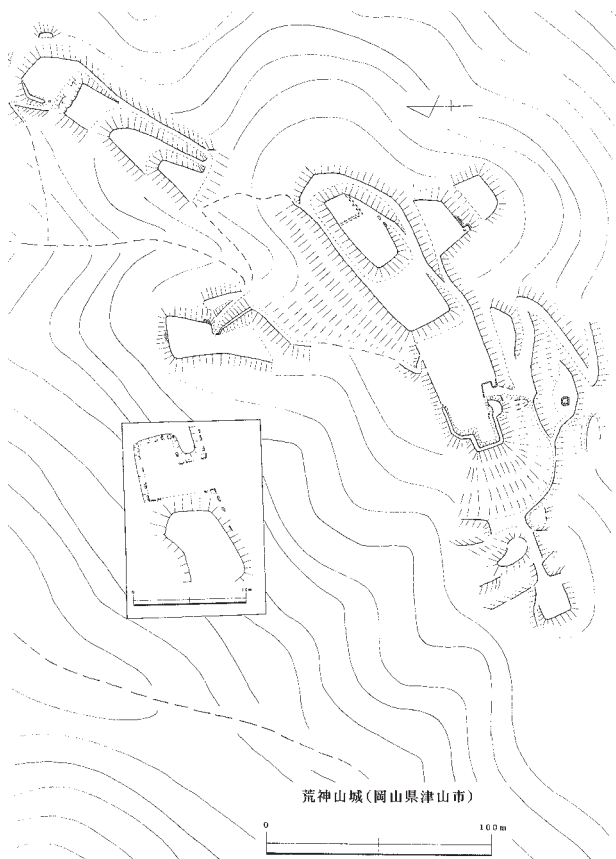


図12 荒神山城図 山下晃誉 調査作図

荒神山城 [図12]

荒神山城は備前から進出した宇喜多氏が築いた山城である。花房職秀が入部し、文祿三年（一五九四）に宇喜多家を退去するまで城主であったとする。職秀の退去後廢城となったとするが宇喜多氏改易まで機能したものと考えられる。

全体的に直線的な塁線で曲輪が連なる。石垣が部分的な使用に留まるが、随所に枳形虎口や食違い虎口を積極的に用いる。

荒神山山頂の主郭は北西隅に基壇がある以外は目立った特徴は見出せない。コビキA類の古瓦が多数みられることから瓦葺きの建造物があったことがわかる。山上に居住・政務空間があったことをうかがわせる。

主郭部の西側に配された第二郭は西端に凸状の張出しと土塁ラインを持ち、西側尾根筋からの侵入に対して堡塁の役割を果たす。そして、縄張り図では表記されていないが、南側には内枳形虎口と外枳形虎口を組み合わせた複雑な虎口プランを構える。そして、北側にも食違い虎口を構える。この第二郭が外部に出る城



岩尾山城図（八巻孝夫作図、1985年5月調査、津山市都市計画課、1:3000 昭和44年）を基にして作製
 図13 岩尾山（医王山）城図 八巻孝夫調査作図、村田修三編『中世城郭事典』三（新人物往来社・1987）より転載

道の起点となり、防禦の足場としての役割を果たす。

さらに、北側尾根筋や北東側に伸びる尾根筋にも曲輪が配された。そして北東側の曲輪には櫓台と土塁を配して枳形虎口が設定されている。

以上のように、荒神山城は毛利方の在地系城郭とは明らかに縄張り技術の発想が異なることがわかる。明確な虎口を設定することで主郭への求心性を高め、櫓台や上位曲輪からの横矢掛かりを効果的に組み合わせた食違い虎口や枳形虎口を積極的に用いるなど、明らかに織豊系縄張り技術の特徴を示す。これらの技術は、宇喜多氏が豊臣政権に帰属してから積極的に改修を加えた結果と考えられる。

荒神山城は織豊系勢力による美作国統治のはじまりを象徴する城郭である。さらに森氏時代には津山が中心となり廢絶したことから、宇喜多氏時代（或いは小早川氏時代も含む）の様相を残す貴重な事例と位置づけられる。

岩尾山（医王山）城 [図13]

岩尾山（医王山）城は、加茂川水系に面した山上に位置する。因幡へ通じる交通路を抑える目的から拠点化されたとみられる。天正後期の毛利勢と宇喜多勢の激しい攻防戦は同時代の文献史料から詳細が読み取れることもあり、これまで度々取り上げられている。

岩尾山（医王山）城は、北側の山頂部と南側のもうひとつのピークを中心に南北に長い城域を持つ。北側の背後の尾根筋に連続堀切を入れて遮断するとともに、南面に放射状の畝状空堀群を入れて堅固に防禦する。これだけみると戦国期の在地系城郭の特徴を如実に示したものと言える。

しかし、現地にて虎口廻りを中心に観察すると、織豊系縄張り技術による改修を幾つか確認することができる。これらの改修は主郭と南側のピークにピンポイントで加えられている。まず、主郭部では、岩盤を利用した西側石塁と北東側の石塁が図ではハの字になっているが、実際は食違いになっており、西側の石塁角でひと折れして中へ入れる食違い虎口となっている。一方、南側では曲輪の中央に配された石列と対応して石垣で枳形虎口が確認される。

岩尾山（医王山）城の場合は、既存の縄張りに対して、虎口部分にピンポイントで改修し主郭への求心性を高めることで織豊系城郭に再編成したことがわかる。これを裏付けるように、山頂の表採瓦による分析でもコピキB類が採集されており、宇喜多氏・小早川氏段階に瓦葺き建物があつたことがわかる⁽⁹⁾。

以上のことから、岩尾山（医王山）城は、宇喜多氏・小早川氏段階まで支城として活用されていたことが推定される。このことから、津山築城以前の宇喜多・小早川氏段階には、この地域が因幡方面に対する押えとして重視されたことが見て取れる。

岩尾山（医王山）城のように、部分的に織豊系勢力による改修の手が加わった事例は幾つか確認される。全体には戦国期の在地系城郭の様相を残すので見落としがちであるが、織豊系縄張り技術の規則性が認識することで、城郭遺跡の見直しから新たな見解の提出が期待される。

以上、三つの事例から、織豊系城郭において虎口プランの見極めの重要さが理解できると思われる。これまでの在地系城郭とは異なる縄張り技術―直線的な塁線や石垣で防禦を固め、榊形虎口など技巧的な虎口プランを積極的に用いて主郭への求心性を高めるプラン―が豊臣政権に組み込まれることで導入されたことが見て取れる。城郭遺跡の適切な評価により、この地域で城郭遺跡の年代観を見極める上でのおおよその指標を得ることができる。そして、城郭遺跡から歴史像の再検証が可能になる。

美作の城館から戦国・織豊期の在地構造を読み解く

最後に、「城郭跡を地域史と在地構造分析の史料として活用する」縄張り研究の有効性を喚起する事例として、美作市の三星城「図14」を挙げる。

三星城は梶並川と滝川の合流点に近い三星山に築かれた。有力国衆の後藤氏が戦国後期に台頭し居城とする。後藤氏は吉野川流域に勢力を伸ばすが、天正七年（一五七九）に宇喜多氏に三星城を落とされ滅亡する。この際に廃城になったと

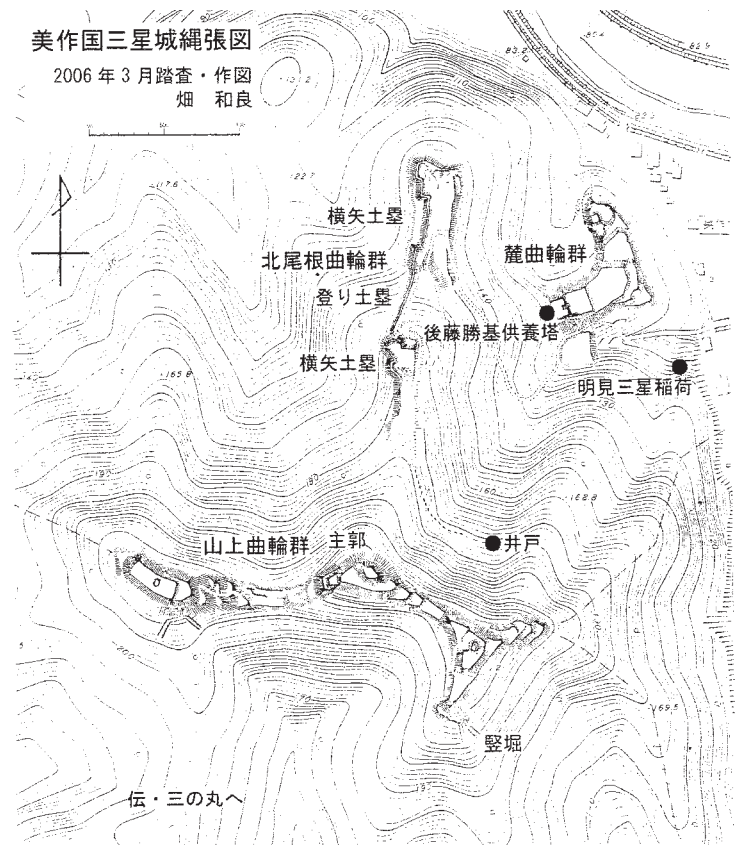


図14 三星城図 畑和良調査作図、[畑二〇〇六]より転載

されてきた。

確かに現地をみると、三星山に主郭を置き東西に曲輪を連ねる単調な縄張りである。全体的に岩盤質のため積極的な普請は難しく、東西の稜線に曲輪が並ぶ配置となっている。山上部をみる限りでは典型的な在地系城郭と評価できる。

ところが、北側尾根筋に目を転じると長大な土塁ラインの存在が目される。詳細にみると、土塁ラインは北側尾根筋上方の曲輪からはじまり、複雑に折れて虎口を創出する。そして、分岐した土塁が登り土塁となって斜面を下る。この登り土塁は東側に沿って堅堀を備えており、城道として機能したものとみられる。同様の登り土塁は天正一五年（一五八七）に豊臣政権の支援で小早川隆景が改修した筑前立花山城にもみられる⁽¹⁰⁾。

登り土塁はそのまま尾根の西側を固める土塁ラインへと続く。このラインの途

中には横矢掛かりになる折れが確認される。そして、ラインの先端で櫓台を伴い北東隅に虎口を形成する。そして、そのまま北東側斜面に下って途切れる。

この長大な土塁ラインは、縄張り技術としては決して洗練されたものではないが、登り土塁や横矢掛かりを備えるなど織豊系城郭の技法が確認される。よって、縄張り技術から見た場合、三星城は後藤氏の後に美作国を領国に加えた宇喜多氏が、三星山を詰めとして、麓曲輪群の背後の尾根筋に織豊系縄張り技術による外郭ラインを整備したと評価できる。

三星城が宇喜多氏の支城として機能したと言う予見をもとに、あらためて三星城に関連する宇喜多氏の史料をみると、慶長三年（一五九八）に明石掃部頭が宇喜多秀家から「山之内」九六一〇石を預け置かれ、掃部頭組の明石四郎兵衛尉も同年に「三星城領」として一〇〇〇石を加増されたことが確認される⁽¹⁾。

このように、既存の城郭遺跡の年代比定（文献史料から導いた廃絶年代）について、実際の城郭遺跡の縄張り分析から織豊期の改修を読み解き、宇喜多氏最末期にも三星城が支城として機能し続けていたことを確認することができた。

ここでは、既に縄張り調査が行われた三星城を取り上げたが、美作の城館を含めて岡山県下の城郭遺跡は、縄張り調査と遺構の評価が十分でないものが多い。三星城ひとつからでも、廃絶年代が天正前期から慶長期まで下がるなどこの地域の歴史を再検証する視点を提供できた。今後、他の城郭についても縄張り調査を進めることで新たな見地が得られる可能性は十分にあるだろう。

おわりに

以上、散漫な内容に留まったが、縄張り研究を中心とする城郭研究の視点から、美作国の山城・丘城及び館城について概観した。加えて、城郭遺跡の縄張りに注目し「城郭跡を地域史と在地構造分析の史料として活用する」視点の有効性についても示すことができた。

『美作国の山城』を契機に、今後、岡山県下の悉皆調査事業を通して山形氏が現地を歩いて確認、調査した各事例を含めて精査を行うことで、城郭遺跡から岡山県の地域史研究に新たな視点が提供されることを期待して止まない。

参考文献

- 池田 誠 「美作国における中世城郭の一考察―縄張り研究の視点からみた天正期津山盆地の政治状況―」『中世城郭研究』第八号 一九九四年
- 同 「美作岩屋城攻囲戦での陣城群」『戦乱の空間』第四号 二〇〇五年
- 木島孝之 「中・近世城郭の調査方法―特に山城について―」
福岡県管内市町村文化財行政担当研修会レジュメ 一九九九年
- 同 「織豊系城郭における虎口プラン変遷案作成の試み」
『愛城研報告』第五号 二〇〇〇年
- 千田嘉博 「織豊系城郭の構造」『史林』第七〇号第二巻 一九八七年
- 同 「織豊系城郭の形成」東京大学出版会 二〇〇一年
- 高田 徹 「織豊期を中心とした臨戦下の城郭」
第二二回全国城郭研究者セミナー「陣城・臨時築城をめぐる」二〇〇五年
- 乗岡 実 「中世山城の瓦三題―山城の近世化と天正の瓦師たち―」
『吉備されど吉備』二〇〇〇年
- 同 「宇喜多氏の城郭群の瓦と石垣―岡山城支城群の諸様相―」
『吉備地方文化研究』第一八号 二〇〇八年
- 同 「岡山県下のコビキBの瓦を伴う城郭群」
『西国城館論集I』二〇〇九年
- 畑 和良 「美作の山城の実年代について」
『美作の山城連絡協議会講演資料』二〇〇六年
- 同 「城郭分布よりみた地域と権力」―備前国赤坂郡の事例から―
『城郭談話会一月例会報告』二〇〇六年
- 平岡正宏 「医王山城採集の瓦」『年報津山弥生の里』第四号 一九九七年

村田修三「城跡調査と戦国史研究」

一九七九年日本史研究会大会報告『日本史研究』二二一号 一九八〇年

同 「中世の城館」『講座日本技術の社会史』6 土木

日本評論社 一九八四年

村田修三編『中世城郭事典』3 新人物往来社、一九八七年

久世町史編纂委員会編『久世町史 資料編』第一巻編年資料

久世町教育委員会 二〇〇四年

村田修三氏、畑和良氏、山下晃誉氏からは調査された縄張り図の掲載をご快諾いただきました。末尾ながら感謝いたします。

〔註〕

(1) 岡山県における縄張り研究の成果は八〇年代後半から、池田誠氏、光畑克己氏、尾崎聡氏らが精力的に現地調査を進めた。近年では畑和良氏が悉皆的な調査成果を提出している。美作地域の城館について参照した先行研究は次のとおり。

村田修三編『中世城郭事典』三(新人物往来社、一九八七年)

池田 誠「美作国における中世城郭の一考察―縄張り研究の視点からみた天正期津山

盆地の政治状況―」(『中世城郭研究』第八号、一九九四年)

畑 和良「美作の山城の実年代について」(『美作の山城連絡協議会講演資料』、

二〇〇六年)

同 「城郭分布よりみた地域と権力―備前国赤坂郡の事例から―」(『城郭談

話会一月例会報告』二〇〇六年)

(2) 村田修三「城跡調査と戦国史研究」(一九七九年日本史研究会大会報告『日本史研究』二二一号、一九八〇年)

(3) 戦国史研究の視点から城郭遺跡を「史料」として活用することを強く意識した村田修三氏に対して、千田嘉博氏は歴史考古学の研究手法を導入することで縄張り研究の方法論を整備した。

千田嘉博「織豊系城郭の構造」(『史林』第七〇号第二巻) 一九八七年

同 「織豊系城郭の形成」東京大学出版会 二〇〇一年

(4) 二つの系譜については、村田修三「中世の城館」『講座日本技術の社会史』6 土木(日本評論社、一九八四年)、木島孝之「中・近世城郭の調査方法特に山城について」(福岡県管内市町村文化財行政担当者研修会レジュメ、一九九九年)を参照した。

(5) 武田氏、後北条氏の縄張り技術の特徴は木島孝之氏からご教示いただいた。織田氏と同盟関係にあった徳川氏は、織田氏の織豊系縄張り技術を導入しつつも在地色を強く保持した勢力として独特の展開を遂げた勢力と位置付けられている。旧武田領の併呑、関東移封などを通して武田氏や後北条氏の縄張り技術を取り入れ、近世初頭に真田の丸馬出しを持つ城郭を多数築いたとされる。

(6) 岩屋城の攻城戦と陣城市群については、池田 誠「美作岩屋城攻囲戦での陣城市群」(『戦乱の空間』第四号、二〇〇五年)に詳しい。

(7) 織豊系城郭の虎口プランに着目し、折れと虎口空間の組み合わせから形式組列を行い、織豊系城郭・近世城郭への発達モデルを提示したのが千田嘉博氏である。これに対して木島孝之氏は虎口プランを形成する「状石塁(土塁)にみられる虎口前方へ石塁ラインを押し出す「運動」性に着目して発達モデルを提示している。前掲「千田一九八七」論文と木島孝之「織豊系城郭における虎口プラン変遷案作成の試み」(『愛城研報告』第五号、二〇〇〇年)を参照されたい。

(8) 歴史考古学の分野では、乗岡実氏が採集瓦の調査研究から宇喜多領、池田領の本城・支城体制を論じている。

乗岡 実「中世山城の瓦三題―山城の近世化と天正の瓦師たち―」(『吉備されど吉備』、二〇〇〇年)

同 「宇喜多氏の城郭群の瓦と石垣―岡山城支城群の諸様相―」(『吉備地方文化

研究』第一八号、二〇〇八年)

同 「岡山県下のコピキBの瓦を伴う城郭群」(『西国城館論集I』、二〇〇九年)

）がある。

(9) 平岡正宏「医王山城採集の瓦」(『年報津山弥生の里』第四号、一九九七年)

(10) 木島孝之「筑前立花山城跡が語る朝鮮出兵の道程」

(『城館史料学』創刊号、二〇〇三年)

(11) 三星城は二〇一〇年春に現地踏査を行った。畑和良氏作成の縄張り図を参照した。

「三星城領」のある「宇喜多秀家土帳」については森俊弘氏からご教示をいただいた。なお、戦国・織豊期の美作地域については、『久世町史 資料編』第一巻編年

資料(久世町教育委員会、二〇〇四年)を参考にさせていただいた。

第三章

美作国の中世山城をもとめて

美作の中世山城をもとめて

一 歩いて、見て、描く

― 二七歳の教育長が得た「課題」



語り 山形省吾（城郭研究者）

山形敏子（夫人）

聞き手 前原茂雄（九州大学）

森 俊弘（岡山地方史研究会）

（二〇一〇年四月四日 津山市・山形家にて）

山形省吾（やまがた・しょうご）

大正一五年（一九二六）、岡山県真庭郡美甘村当政（現真庭市）出身。小学校を卒業後、父の代から始めた石工を継ぐも、教育委員となり、若二十七歳で美甘村教育長に就任。考古学者・近藤義郎氏らと村内の発掘調査を行うかたわら、農業振興のため、連日連夜村内の各地区を回り新しい農業技術を指導。のち大阪にて就職、退職後、郷里美甘そして津山に戻り、中世山城の調査・研究に没頭。三五〇を超える中世山城を調査し、記録作業を行う。八四歳を超える現在も積極的に調査・作図を続け、山城の普及・保護活動にも使命感をもって取り組んでいる。

前原・森 おはようございます。

前原 今日は山形さんに、美作地方の中世山城に興味を抱かれた経緯や調査の方法、苦労話、またこれから将来に向けての様々な思いを、ざつくばらんにお伺いしようと思っっています。どうぞよろしくお願ひします。

山形 こちらこそ、よろしくお願ひします。

前原 それにしても、山形さんは随分若い時に美甘村の教育長に就任されていますよね。何歳の時ですか。

山形 二七歳の時。あん時は他にそんなはおらんかった。朝日、毎日、読売の三大新聞には、全部三面記事のトップで採り上げられた。

前原 そうですか。どういう経緯から教育長になられたんですか。

山形 最初は親が始めた石屋を継いでやりようった。そのうち、教育委員の選挙に出て、次点で落ちたなあ。そしたら、上位者が教育長になったんで、欠員が出て、繰上げ当選ということになった。そしたら、すぐに教育長が辞めてしまった。経済観念があったからでしょう（笑）。教育長は日勤で、出張旅費なんか少ない。会合もたくさんあったりしましたし。

森 持ち出しが多かったということですね。

山形 そう、まともな者はやっとなれん（笑）。苦労したな。後任には私が出たんだが、若いし、新聞に採り上げられたから張り切りましてな。「前へ、前へ」という感じでした。やっぱりうれしかったんじや。あれだけ新聞に出されてなあ、舞い上がらんもんはおらんで、おそらく、じゃけえ、一生懸命じゃ。

前原 教育長時代にはどのような活動をされていましたか。

山形 夜の一二時より前に家に帰ることはなかったな。美甘には四〇いくつの集落がある。そこを一日一集落訪ねて行って、晩に土地の人と会合をする。その準

備やまとめをせにやあいけんけえ、早うは帰れんかった。

敏子夫人 そうそう、夜中の一二時にもなつてなあ。

山形 十羽養鶏や栗の接木、保温折衷苗代なんかを普及して回った。「農業を知らない」石屋の省ちゃんが、何を言うるんなら」いうて、聞いてくれん人もいっぱいおった。でも、教育長をやつとつた昭和二七年（一九五二）から三二年いうのはまだまだ食糧難の時代でな。少しでもよりよい暮らしをして家庭が幸せになつてもらうためには、新しい方法をちよつとずつでも広めていくよりなかつた。「お蔭で、ええ栗ができたで」いうて持ってきてもろうた時はうれしかったな。うまくいくことがわかつたら、いっぺんに村中に広まつた。

前原 そういう仕事も当時は教育長の役割だったのですね。また、発掘調査もされていきますよな。

山形 考古学の近藤義郎先生（故人・岡山大学名誉教授）がよう来たな。大学の先生というのは八月が休みでしょう。僕は石屋だから、八月が一番忙しいわけ。忙しい時に来て、「山形さん、ここを掘れ、ここを掘れ」と言いだすもんじゃけえ、弱つた（笑）。また、僕は馬鹿力がありますけえ、トレンチを入れるのが早いんじゃない。それで、近藤先生が便利よう使うたんだらう（笑）。宇南寺のたたら製鉄遺跡の時もそう。僕が「陶棺じゃ」と言つて、一緒に掘つてみたんじゃない。そしたら、陶棺じゃのうて、たたら製鉄の基礎だった。あれが出たのは初めてだったそうですなあ。報告書ができた時に、近藤先生に、「先生なあ、ここに山形省吾いうもんと一緒に掘つたと書いてくれたら何も言やあせんが、一言も書いとらん。先生、一生負目じゃで（笑）」と言つたら、先生は「そうは言うなえなあ。それだきやあ負目を感じとるけえ、今後便宜を図るけえ」と言うてなあ（笑）。

前原 その後、何か便宜を図つてもらうようなことはありましたか。

山形 ありやあせん、ひとつつも（笑）。

前原 そうですか（笑）。他にはどういふ発掘をされましたか。

山形 住居跡を探そうということになつてな。「あっち掘れわんわん、こっち掘れわんわん」で（笑）、洪積世段丘を掘りまくつたなあ。せえでも、出てこん。

ひとつつも。いっつも近藤先生と一緒に、「あっちを歩き、こっちを歩き」だった。わしがえかつたんだらうなあ（笑）。（近藤先生は）休みになるたんびに来てなあ。これ（敏子夫人）も悪い顔はすりやあせんしなあ。これはよう協力してくれとるわい。

森 山形さんからすると、近藤義郎先生はどんな感じの人ですか。

山形 ざつくばらんで、何でも言う人でなあ。

敏子夫人 近藤先生は、本当は自分の方が、歳がひとつ上なんだけど、「ひとつ下だ」と言うてな。

山形 そうやって、人をおだてるんだ。あれが近藤流の持ち上げ方でなあ。若い教育長だからといって、馬鹿にするようなところは全然なかつた。

前原 奥さんも随分知つておられるということは、近藤先生は山形さんのお宅にもおいでだったのですか。

山形 先生は随分酒が好きですけんなあ（笑）。せえじゃけえ、帰る時には必ず五年ものとか七年ものとかいう梅酒を造つて持たせようつた。来るたんびに土産として持つて帰らしようつたけえな。また、これ（敏子夫人）が喜んで造りようつたんじゃ。それで、あの先生が言うてくれたのが、「山形さん、ひとつ中世のたたら製鉄をやれえ」ということだった。それで考え始めたんじゃない。

前原 なるほど、近藤先生が課題を出されたのですね。教育長を辞めて大阪に出られてからも、継続して考えるようなことはあつたのですか。

山形 いや、まったくのブランクです。最初は運送会社だったんだけどな、そのうち転職して車のボディ・カヴァーや幌を中心に製造・販売する会社に移つた。僕は営業で全国あちこちした。これ（敏子夫人）も一緒に会社でデザインを担当していて、試作品を全部作つていた。どこに行つても方言が抜けんけえ、かえつて信用してもらつて、営業はうまくいったですなあ。

敏子夫人 美甘言葉が抜けんけえなあ。いまだにそう。

山形 支店があるんで、いろいろ史跡も見て回つた。今もういっぺん回つてみたと思よりります。

前原 山形さんは、やはり小さい頃から歴史が好きなんですか。

山形 好きなんでしょうなあ。何か興味を持つもんを誰かが持ってきてくれたら、食いつく感じじゃなかったかなあ。珍しいものに食いつくという人間の心理があるでしょう。それをもとに、新しいものを創りたがる



という心理が、他人よりちょっと強かったという感じかなあ。ころくに勉強しとらんけえ、大学の先生なんかから教えてもらいうのがありがたい。だから、就実大学でやつとる岡山中世研究会に今でも行く。勉強せざるをえない。基本ができてないけえ。せえでも、前原さんや森さんなんかは、しっかりとした研究を土台に発表される。おふたりの勤勉さにはほんとと感心しとるんよ。それが僕にはできませんなあ。「わしにはどがいしたらしつかりしたものができるかなあ」と考えてみた時、やつぱりしつかりと歩いて、見て、図面を確実に描いて出していくことが、僕の力になるんだなと思っていきます。でもたたら製鉄は、これぐらい難しいもんないねえ。

森 城より難しいですか。

山形 難しい。城は証拠がありますがな。ところがたたら製鉄だけは、村下（むらげ）が証拠をみな消して歩いとりますがな。自分の技術を盗まれないとした意識が高かったんだと思うんだけど。たたらのは実際に見るのが一番勉強になるね。出雲の横田や吉田にも何回も足を運びました。それを勉強しているうちに、尼子氏に最初に興味をもったわけな。尼子経久あたりが、その辺りを全部自分のものにして支配してね。そう考えているうちに、「武将というものは、いったいどういう人種なんだろう」と思い始めてなあ。研究というほどでもないが、それから、それに足をつっこんでいきゃあいくほどおもしろいな。

森 退職されて、大阪から美甘に戻ってきてからの、山城調査に取り掛かる直接

のきっかけというのは何なのでしょか。

山形 やつぱり、きっかけはあくまでたたら製鉄。近藤先生にも勧められとったけえなあ。美甘に戻ってから、先生は来ようとしたし。菅谷の塚ヶ成古墳の発掘やらで。当時の教育長は「近藤先生みたいな偉い先生を発掘にはよう呼ばん」と言っていたが、僕が先生に電話したら、「ほん、ほん行くけえ」みたいなもんじゃ（笑）。やつぱり若い頃の梅酒が効いとるわなあ（笑）。そして、先生は「塚ヶ成古墳発掘の報告書は、山形君、君が書けえ」いうてな（笑）。で、きんのがわかつとって言うんじゃけえ（笑）。

前原 若い頃の負い目からそう言ったのですかね（笑）。

山形 そうだろうなあ（笑）。調子のええ人であ。一生わしを使いまくったわ（笑）。久世や沼（津山市）の調査の時も引つ張り回されたわ。

前原 たたら製鉄への興味を出発点にして、城や武将などに徐々に関心が広がってきたわけですね。

山形 そうそう。出雲の横田辺りに行くと、「河副美作守」といった看板まである。そういえば美作にも河副といった姓があるしな。それに尼子の家臣で綾部（津山市）に土着した多胡氏みたいななんもおるしな。だんだん美作と結びついてきた。それで、わしは大それたことを考えとってな。戦国武将を研究して、ひとつ小説を書いたろうかなと思うて（笑）。それでな、書きかけたんよ。そがいしてみりゃあ、「研究が足らんけえ、どがいにも話にならんあ」いうことに気がついて。それで研究しかけたんが、本当は強かったなあ。あれから深みにはまったような気がするわ。横田に行くと、たたら製鉄跡の周囲に城が多いんだ。「何でこれほど多いんかなあ」と思うて。深みにはまっていけばいくほど、おもしろうなってくるんじやなあ。武将というのは、僕はあんまり好きじゃあない。どつちかといえば、嫌いなんじや。庶民をいじめた方じゃからね。何でそれほど庶民をいじめたんだろうか、妙味は何なんだろうかと思うてな。欲そのものだね。だから気になる。

前原 そうなると、自分の古里の岡山県の城郭も気になってくるわけですね。

山形 おう、あるがな、あるがな、城が（笑）。最初は岡山県じゅうの山城を歩

いて回って、できりゃあ、全部縄張り図にでも残しておきたいなと思ってた。そうすりゃあ、「後のもの便利がええんじゃないだろうか」と思うて。最初に、どのくらいの数、どんなもんがあるかと調べていくうちに、次々にあちこち行つた。備中の笠岡や真鍋島の方にも行つたりした。県内だと、何百とあるわけじゃがな。そこで、僕の寿命を計算してみたわけ(笑)。とてもじゃないが、こないな様をしようつたら、何にもならん。それで、さつと頭を切り替えて、美作の国だけにすることにした。この頃は、美作じゅうも全部は難しいなあと思ゆるけど。

前原 でも、最初に美作国内に限定した時には、「美作国くらいだったらできるだろう」という予測があつたのですか。

山形 そうそう、できるだろうと思うとつた。けど、実際はすごいねえ、数が。数もそうだし、前原先生や森さんにはわかつてもらえらると思うけど、ひとつの城に入り込んでくる武将や勢力のことを調べるだけでも、大変なエネルギーがいる。

二 「勇士」ふたたび

— 動き出した「課題」 —

前原 美甘に戻つてから、すぐに調査を始められたわけではないんですか。

山形 そうです。調べ始めたのは平成二年(一九九〇)頃からですけえな。

前原 調査をする目的を持った上で、一番最初に登つた城はどこなんですか。

山形 麓城(旧美甘村)です。うちの家(旧美甘村当政集落)の、ほん裏ですわ。思い出のあるところであ。上の方は自然薯が掘れるんですわ。それで篠竹を伐りに上がりようつた。小学生ぐらいの時にはなあ。てっぺんまで垂直に上がって行くんじゃないけえ。すごいところだつた。でも道ができとつたなあ。

敏子夫人 「城山」言ようつたな。

山形 篠竹を束にして、エボ(節)のところを括つてなあ、ソリのようにするわけ。それで、それに跨つてなあ、滑り降りるわけだわ(笑)。よう怪我もせず、

下まで降りようつたなあ思うてな(笑)。垂直じゃからねえ。下の方に成るい(平らな)ところがあつて、道路までは飛び出さんわけだ。今は考えただけでぞつとする(笑)。ようやりようつたなあ、思うて。それを何回もやつとるんだからなあ。私含めて三人ほど悪いのがおつてなあ。「三勇士」いうて言ようつた(笑)。悪さばあしようつた。学校にも行かずにな(笑)。それで親に怒られたら、山に隠れてなあ、二日でも三日でも籠りよつた(笑)。親は探しもしやあせん(笑)。

前原 山城に籠城されていたわけですね(笑)。

山形 そうそう(笑)。「三勇士」は上級生とばかり喧嘩をしようつた。しょつちゅう負けるけど。下級生や女の子を絶対にいじめることはなかつた。

前原 確かに「勇士」ですね。

山形 「城山」ではそれが一番思い出にあるなあ。

前原 子どもの頃に、麓城が城跡だということは聞かれていたんですか。

山形 「城山じゃ」いうことだけ聞いてつた。「麓城」みたいなことは絶対に言ようらんかつたからな。城跡が上がつても、城跡の形態なんかは全然気づきませんでした(笑)。「城山」にはいろいろ思い出があるからなあ。美甘に戻つて、調査するために最初に上がったのは「城山」だつた。それに「城山」では、道ができ壊すのもやつとる。それを見て、「これはいかなあ、描いとかにやあ絶対にいけん」と思うた。

前原 なるほど。それ以来、登るだけでなく、だんだんと縄張り図を作成されるようになったわけですね。最初の頃はどやうやって勉強されたのですか。

山形 始めの頃の図面は全然だめなんです。最初はほとんど村田修三編『図説中世城郭事典』(新人物往来社、一九八七年刊)、千田嘉博・小島道裕・前川要著『城館調査ハンドブック』(新人物往来社、一九九三年刊)で勉強させてもらうた。本気で勉強せんもんだから(笑)、まずいところがあつて、書き換えの繰り返しです。

前原 新しい遺構を見つけたら描き足していけるわけですね。

山形 うん、それもあるし、減していったり。これは描いてはいけないところだつ

たとか、想像であったとか。教科書を読むと「想像を描いてはいけん」と書いてあるから、始末が悪い(笑)。守らんと(笑)。

前原 最初の頃は、自然の地形なのか遺構なのか判断できずに苦労されたこともあるんじゃないですか。

山形 ありますなあ。それでもだんだん歩きよくなるうちになあ、「これは人の手が加わつとるな、これは自然の地形を利用した構えになつとるな」とわかるようになる。一口に「三五〇城の図面を描いた」と言うても、一回登れば描けるいうもんではないですからなあ。岩屋城(旧久米町)なんかは、何十回と足を運んでようやく描ける。

前原 山城を歩いて楽しむという人はとても多いですよ。しかし同時に、縄張り図を描いて後世に残すという作業は誰でも行っているわけではありません。山形さんは最初から縄張り図を描く心積もりだったのですか。

山形 図面を描かにはあ、残りようがない。発掘ができません。その形ものは風雨にさらされて、次々に崩れていきよう。道を作ったりして、人間によって崩されていくこともある。早めにきちつと図面を描いておくと、ここに何があったかわかんようになってしまふ。だから、「それだけはやっておきたいなあ」と思っていました。最初からそこまで考えていたわけではないけど、すぐにそれに気がついたね。縄張り図いろいろの描き方があって、どんな風に表現するのかいうのは、その人その人の工夫が大変あるようすなあ。「どのように表現したら、現実のものがみんなにわかりやすう紙面の上で見えるだろうか」ということが、この頃わかってきて、一生懸命やりようるんじゃけど。

前原 そういう気持ちだが、図面の描き直しということにもつながっていくんですね。

山形 描き直しいうても大変ですよ。岩屋城なんかでも、一枚描き上げるのに、最低五日ですけえなあ。そりやもう、まんじりともせず、一生懸命描きようらにゃあ。休み休みだったたら一週間はかかるなあ。最初の頃だったたら、十何日かかりようったなあ。

森 最初の頃は筆で描かれていたんですよ。

山形 そうそう。和紙の上にな。描き間違えたら、その一枚はボツですわ。今でも和紙にまとめたもんもあるんで。新見の和紙に描いとる。「和紙に描いて残したろう」いうのが当初の目的だからなあ。出版できりやあ別だが、できんかったら、当面は息子に残しておいて、その後は図書館にでも寄附するつもり。

前原 作図されるだけでなく、歴史的背景の解説も書かれておられますよ。人物を調べたり、資料を探す時にはどうされていますか。

山形 まあ、図書館じゃわな。でも『勝山町史』みたいに、変なことを書いとるもんもあるんよ。そういうのは困る(笑)。石屋を一生懸命やつとる頃、森本清さん(故人・『勝山町史』執筆者)が着物にもんべを履いて来てなあ。忙しい時に限ってやつて来て、昔の話をして帰る。「大風呂敷を広げてから」思うて聞いとつた(笑)。言やあせんけどなあ(笑)。だから、森本さんへの重みが全然感じられんのんじゃ。

前原 『湯原町史』を書かれた人ですよ。

森 それから『勝山町史』や『新庄村史』も書いておられます。

山形 そりやあ、前原先生辺りが見たら、こつびどう怒るような無茶が書いてあるんじゃけえ(笑)。あの人はよう喋るんじゃ(笑)。わしもつい聞きようつたけえ。変な智恵が付いてしもうた(笑)。すばらしい人だったけど、書いたものには間違いが多いなあ(笑)。その点、森さんの書かれた『久世町史』や『鏡野町史』はよろしいなあ。大変助かつとります。

森 いえいえ(笑)。



三 二本杖で歩き、ペンで描く

― 山城調査のあとさき

前原 ところで、調査前の準備としては、どのようなことをされるのですか。

山形 一番堪えるのは、二五〇〇分の一の地形図(都市計画図)を買うのがね。津山市では一枚五〇〇円ですから。最近、津山市も使いやすいうようにA3にコピーしてくれるんですが、それでも五〇〇円(笑)。真庭市はありがたいことに安いんです。それに、ものすごい便宜を図ってくれるしね。真庭市ほどありがたいところはない。

森 すみません。ありがとうございます。

前原 津山市や真庭市以外はどうですか。

山形 二五〇〇分の一のええ地図が手に入らないですなあ。一〇〇〇〇分の一の地形図を拡大したものをもらうが、図面が雑だしなあ。勝田町はまだ地図がいけんな。久米南町もちょっと悪いな。旧英田町(美作市)、旧旭町(美咲町)がこの頃ようになった。二五〇〇分の一の地図がよくなってくれたら、すぐに調査できるけどねえ。

前原 確かに、基礎になる地図がしっかりとっていると、調査する際の情報量や記録する際の精密さが全然違いますもんね。それにしても、一枚五〇〇円だとすると、いろいろな場所の地形図を取り揃えるならば、相当の金額になりますよね。

山形 いやいや、相当どころではない(笑)。すごいですよ。四枚くらい合わせてひとつの城の図面が成り立つこともあります。城の端っただけが載っているとあった地図もあるし。それには、よくにくたびれた。そうすると、城ひとつだけの図面を作るのに、二〇〇〇円でしょう。情けないような気がしようした。それらの地図をつないで一枚にして、調査に出かけるわけですから。たまったもんじゃないですわな(笑)。こういうことはみんなには言っていないけどね。今日は「苦労話を話せ」ということなんで、喋つとります(笑)。

前原 調査に行くまでの段階で、目には見えない大変な準備をしないと行かないということですね。ところで、調査に行かれる時はどんなものを持って行かれるのですか。

山形 鉛筆とナイフと、鋸も。メジャーも。いろんなものを全部持って行っている。ナイフはいろんなことに役に立つ。箸を忘れたら箸を作ったり。鉛筆を削る時もそう。それから杖が握りにくかったら削って調整する。ナイフはどうしてもいるようですね。

前原 やはり杖があつたほうがよいのですか。

山形 僕はねえ、二本杖で行くんです。というんが、年を取ったら、すねん坊主(脛)が痛くなる。それをカヴァーするには、絶対ストックが要る。専用のものを二組持つとります。桜と椿の木のものを持つとります。自分で山に行つて伐つて作りました。桜と椿は、しわい(硬い)からええんです。

前原 他にはどのような準備をされますか。調査当日はどんなことをされますか。

山形 地区ごとにまとめたノートがあるわな。そこに詳しい人の名前も書いておる。その人に連絡してみても、都合がええようなら一緒に登るし、悪けりゃあ自分だけで登る。午前中で終わるようなら、昼までに帰ってくるし、「今日は長うかかりそうじゃなあ」思う時は弁当を持って行く。雪の中で弁当食べるのはかなわんなあ。立てって食べる。立ち食いじゃあ(笑)。写真はほとんど撮らんね。あまり上手じゃないから。とにかく歩き回るね。歩き回って、疲れてきたら帰ってくるといった感じかな。続けて行くことはないな。一日狭間(一日おき)に行く方が体が楽なんじゃ。連続で行つたら、前の日の疲れが残つとるけえな。そりゃあねえ、どない言うても、八四歳の体力いうたら限界があるですよ(笑)。走らんが全然スピードが出んもんね。外反母趾があるしね。自分のペースでいかにゃあ長持ちせん(笑)。

前原 あまり知られていない城跡を調査する場合、どういう情報に基づいて出かけるのですか。

山形 村や町に行つたら、次々に聞いて歩きますけんあ。それで目星を付ける。

前原 すでに縄張り図が作られている城に登る時は、それを基本にして調査するのですか。それとも、先入観なしで登るのですか。

山形 縄張り図がすでにある場合は、それを基本にして登ります。

前原 では、その上で確認をし、違うところや補足すべき点を探していくという手法ですね。

山形 その縄張り図が正確かどうかということを確認するところから始めます。しかし、正確に描くというのはよっぽどタフでないとき

ん。篠竹がびつしり生えて、イガイガがいっぱいあるところを掻き分けて、喧嘩しながら行くんじゃないか(笑)。だいぶ怪我しながらということになるな。

前原 城跡には、城の遺構だけでなく、磐座や炭焼き跡などいろいろな遺構がありますよね。

山形 そうそう、それがわかってくるようになってくると、大変おもしろくなってくる。それでも、自分なりにそれなりに描けるようになるには、二〇年はかかったんじゃないかなあ。自分だけで本を読んでやっていくということは、時間がかかるとのことじゃ。つくづく思うでな。

前原 話が少し逸れるようですが、城跡を見たら、だいたい誰が作ったかわかりますか。何か技術が共通するところがありますか。

山形 それはわかるなあ。城主が転々と移動して行ったのを追いかけると、技術はほとんど同じじゃけえな。

前原 ということは、それぞれの城主が特徴をもった築城技術をしているということですね。そうしたことがわかるわけですね。

山形 わかるなあ(笑)。そういうのがわかると、ひとりで喜んじる(笑)。江原氏なんかはわかる。人夫を自分の領地から連れて行つとるわなあ。それで築城させとる。



森 沼元氏ではないですか。

山形 沼元だったかなあ。自分の領地から人夫を連れて行つたら、あとで殺さなくてもええ。秘密を喋らんから。人夫代は出しとるだろうな。人夫代を出さんとええ仕事はせんから(笑)。

森 なるほど(笑)。ところで、話を戻しますが、実際に、城跡ではどんな風に調査されて、家に帰ってからどのようにならめられるかなど、具体的にお聞きできればと思います。

山形 山城に上がった時、最初はラフスケッチでな。方眼紙に描いていく。

森 その際に、だいたいの長さの目安はあるんですか。方眼にどれぐらいで、とか。

山形 いや、ないです。だいたいでね。長さのおおよそは書き込みます。現地ではラフスケッチする時は、描くのに必死なんですよね。城跡の各部分をそれぞれラフスケッチしたのを、あとで集めて、スケッチブックにまとめ直して描くといった感じですよ。その上で、さらに正式な縄張り図を描く際に、距離や高さなどを地形図に沿って正確に落としていくといったやり方です。

前原 こうした縄張り図に書き込んである地名などは、現地の方に聞き取りされた結果なのですか。

山形 そうそう。最近は「伝」という文字を頭に付けて書くようにしてらるんですがなあ。

前原 スケッチブックに「済」という文字があるのは、もう正式な縄張り図に清書し終えたということですか。

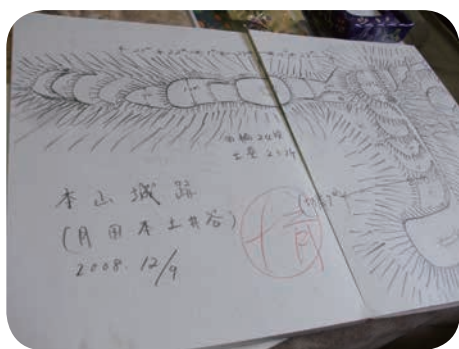
山形 そうそう。

前原 ラフスケッチには長さが書いてありますね。

山形 だいたい正確です。

森 歩測ですか。

山形 歩測です。最初の頃はいちいち測りよつ



たんじゃ。メジャーを持って行つとるから。でも、そのうち、メジャーを使つて測つとるものと、測つとらんもんとを比較しても、ほとんど変わらんことに気がついてきた。正確なんじゃ。「こりやもう、メジャー使わんでも世話あないなあ」と思うてな。

前原 ということは、もう歩測だけで、ある程度正確な長さが算出できるということですね。

森 すごいですね。スケッチブックには寸法を描いていないものもありますが、そういうものでも、ある程度寸法がわかるような表記をされているということですね。

山形 そうそう。それに、目で見て、歩いてみて、「だいたいこのくらいの長さか」と思つて、実際にメジャーで測つてみたら、まず変わらんですな。

前原 そういった自信が付いたということですね。

山形 時たまはメジャーで測りようるけどな。肝心なところとかは。二五〇〇分の一の地形図で、山の稜線がはっきり描いてある場合は、今はだいたい正しく描き込めるような気がするなあ。それから、覚えとる間にまとめるなあ。頭に残つておるうちに図面を描かんといけん。忘れてからでは、また山に走らにやいかん(笑)。

前原 ということは、帰つてきたらその日のうちか、翌日にはまよめの作業に入るわけですね。

山形 そうそう。熱心にやるという意味では、若い頃とは全く変わつとらんね。教育長やつとった時と同じだ。やるとなつたら根を詰めるからね。わが身はあまりかまわんで(笑)。それが元気な素かもしれん。

前原 それだけ根を詰めて作業をされていたら、奥さんも気を遣うといったことがあるのではないですか。

山形 お茶を入れてくれたり、うまいコーヒーを入れてくれる(笑)。催促するよやなのう、おい(笑)。いや、これ(敏子夫人)の協力は強いはずぞ。山から下りてきたら、洗濯してくれるしなあ。前は一緒に登りようつたんじゃ。わしよ

り早う登りようつたけえな。わしはねつちりねつちり上がる方で、これはすすつ、すすつ上がる方じゃけえ。

前原 ということは、ある意味で、奥さんとの共同作業と言つても過言ではないですね。

山形 そりやあもう、あれ(敏子夫人)がおらんんだら、わしやあ、とてもじゃないけど、そりやあ、やれん。そりやあ、あれにやあ苦勞させとるけえなあ。あれにやあ大きなことは言えんで(笑)。でもなあ、調査から帰つてきて、机に向こうて縄張り図を描き始めると、のぼせしもうてなあ。困るんじゃ(笑)。「今日はここまで」いう区切りがない。時間の観念が全然のうなつてしまふ。でもまあ、だんだん験の方がなあ、親戚筋がだんだん濃ゆう濃ゆうなつてくる(笑)。

前原 では、親戚に導かれた時が作業の止め時ということですか(笑)。

山形 そう、すぐ寝てしまふ。そして朝起きて朝食を摂つたら、すぐに図面を描くか城に登るか。それ以外に時間の持て余しようがない。僕は酒や煙草は全然やらんしね。散髪も自分でする。とにかく無駄な金は使わんようにして、これ(山城研究)に金を集中しとる。山城に行くガソリン代とかもあるしね。なのに、最初の頃は、図面を描くロットルペン(ロットリング)を折るのに、わしやあ、よくにくたびれたで(笑)。あれ、高いんだわ(笑)。なあ、めつちやくちや高い。一〇本や二〇本じゃないぞ、折つたのは。あれは一本、二五〇〇円くらいするからねえ。それが、ちよつと引つ掛かるとポコツ、ポコツと折れる。じゃけえ、ムカつくの何の(笑)。

四 城を訪ねて、ひとに会う

— 調査余談あれこれ

前原 山城の調査にはシーズンがあると云う人もいますが、やつぱりマムシが出るよやな時期



には行かないんですか。

山形 いやいや。年がら年中行つとる(笑)。マムシを踏んづけてもどういこうとはない。矢筈(高山城・旧加茂町)に登りよる時にな、「あんた変なもん踏んどるで」いうて言われたけえ、見たらマムシだつてなあ。「踏んどるわい」言うて(笑)。それで棒でポイントと放つてな(笑)。また、三倉田城(旧美作町)に登つた時にな、じっと見ていたら、怪しいものがおつた。「こりゃ山ウサギだな」と思つたら、その山ウサギの向こうに熊がおつた。「はあい、はいつ」と大声を出したら、熊とウサギが一緒になつて逃げてなあ(笑)。「おう、見た見た」いう感じじゃ。でも、あれはウサギを最初に見たからよかつたんじゃ。いきなり熊に出遭うとつたら、向かつて来られとつたじゃろうな。大きな声をしたら、向こうも逃げるんだ。それから鈴を付けて山に登るようにしようる。

前原 熊に出遭うのは大変珍しいですねえ。

山形 珍しい、珍しい。初めてだった。熊に爪と牙がなけりやあなあ、組んで相撲を取つちやるんじゃが(笑)。相手は手も何も知りやあせんけえなあ(笑)。こつちはずくい投げとか巴投げとか知つとる(笑)。あと、猪は横柄なもんでな。子持ちだったら別だけど、向かつて来るようなことはない。こいつには何回も出遭うとるけど、「おまえ、何しに来たんなら」いう顔もじゃあせん(笑)。わしを無視して、すつすつ、すつすつ行つてしまふ。驚いてくれるのは鹿。こいつはずごい。群れから外れた鹿が、群れに戻るのを何回か見たことがある。すごいね、あのスピードは。アップダウン関係ないね。どこでも走る。すばらしいな、あの躍動感。網膜に焼き付いていゝ。鹿の角を持つて帰ることはある。発掘調査の時にな、このヘラが一番ええんじゃ。

前原 まだこれからも発掘するつもりですか(笑)。



山形 いやいや(笑)。近藤仕込じゃけえ、いつ発掘することになるやらわからんけえな(笑)。

前原 忙しい時に言ってくるかもしれないね(笑)。

山形 近藤先生はもう言うて来まあ(笑)。遠いところに行つとるからな(笑)。

前原 他には何かおもしろい出会いはありますか。

山形 そうじゃな。「ちよつとうちに泊まつて」いうのは後家さんが多いから注意せにやあいけん(笑)。三人くらいおばさんがおつてなあ、「あんたんとこに泊めてあげて、明日ゆつくり調査されりやあええが」とか言われる。「簡単に言うなあ」と言うて聞いとつたら、「ええんじゃ、この人の家はこの人ひとりしかおりやあせんのかんじゃけえ」いうてな(笑)。隣近所の人言うんじゃけえな。どういふことか、わしもようわからん(笑)。

前原 それは大変悩ましい話ですね(笑)。山形さんは泊まりで調査されることはあるのですか。

山形 泊まりで調査ということは絶対ないな。日帰りでも、だいたい遠くまで行くからね。朝思いついて、山口の津和野城まで家内と行くこともあつたからな。息子や家内とも、あちこちよう行つたで。

前原 調査に行かれると、いろんな人に出会いますか。

山形 そりゃあ、いろいろな人に出会えるで。是久(旧中央町)に大谷城というのがあつてな。ええ道がわからず悪いところを歩いとつた。そしたら、奥さんがおつてな。「大谷城いふのに登りようるんじゃ」と言うたら、「それなら大谷池の上にあるんがそうじゃろう」と言う。「そんなら奥さん、紙に道筋を書いてくれえな」と言うたら、奥さんが、「書くいうても目印も何もないけえ、私が連れて行つてあげますらあ」と言うて、連れて行つてくれた。ちよど松茸が生える時期でなあ。「奥さん、松茸は生えますか」と聞いたら、「松茸は生えようりやあしません」言うてな(笑)。「いや、『行つても大丈夫かな』という意味だ」と言うて、奥さんは「私と一緒に行つたら大丈夫だ」と言う。テコテコテコ早う歩いて、元気なおばさんじゃ。「こつから先がそうですけえなあ」と言つたら、途中から

奥さんはおらんようになってしまった。松茸を探しとったようじゃな(笑)。
前原 しかし、ありがたいですね。連れて行ってくださるとは。

山形 いやあ、「足が達者なら連れて行ってやる」いう者はなんぼでもおる。そうかと思えば、山城の頂上に、家にあった五輪塔を勝手に持って上がったおらんもおる。「そりゃあお父さん、いけんぞ」言うたな(笑)。北房の高釣部城(旧北房町)だったな。「五輪塔は下ろさなきゃあおえんで」言うといた(笑)。

前原 山形さんが初めて行くような場所で、土地の人から不審がられるようなこととはないですか。

山形 不思議がられているのはいつつもだ。一番不思議がつとるのは犬でな(笑)。よう吠える。あれは始末が悪い。ほんに嘔み付くけえな(笑)。警戒する人はおらんなあ。こないだ栗原の八ヶ城(旧落合町)に行った時に、おばさんが「あんたどこへ行きようるん」いうて聞くけえ、「わしやあ山の上に城跡があるいうて聞いて来とるんじゃけど、奥さんご存知ないかな」と言うたら、「そりゃあまあ、知つとるけど。あんたその城跡に何しに行くん。山を買うんか」言うてな(笑)。「わしやあ、城跡を調べに来とるんじゃがな」言うたら、奥さんは「ふん、そんなら、うちに泊まって調査すりゃあええがな」言うてな(笑)。話が全然違ってきた。かなわんわい(笑)。「山を買うんじゃないか」という不審はわりと聞くなあ。あと、松茸の時はもう寄り付かんけえな。山に入ったら、絶対に泥棒扱いにされる。

前原 調査をしていると、系図や古文書を見せてくれる人もありますか。

山形 あるある。古文書もあります。そうかと思えば、「籠いっばいにあったが焼いてしまった」という話も聞いた。「焼いたらいけませんぞ」と言ったら、「もうちょっと早う来りゃあ、ええのに」と言われたこと



もある(笑)。調査に行くと、土地の人が、昔の話なんかよくしてくれる。「うちに泊まってゆっくり調査しなさい」と言うてくれる人もけっこうあるんで。怖いおばさんもおるけどな(笑)。

前原 地元の方が場所を間違えて教えるということもあるんですか。

山形 あるある。間違えるいうんとはちよつと違うけどなあ、注連山城(旧落合町)に登った時は大変だったなあ。地元の教育委員会に行って、「どっから登るんが一番ええでしょう」いうて聞いたたら、馬鹿正直に一番急な道を教えてくれた(笑)。あとで調べたら、他に楽なええ道があるんで(笑)。教えてもらうた道は、どうらいとこでえ(笑)。「まあ、よう、こがいなところを教えてくれたなあ」思うてな(笑)。準備の足らなさで、わしが悪いんじゃけどな。教えてくれた人もよう知らんかったんじやろう。知つとる山は教えてくれてもええけどな、知らん山は「知らん」と言うてくれた方がええ(笑)。それに自分自身が思い込んで別の山に登ることもあるしな。いつまで経つても下りてこんから、山の下でこれ(敏子夫人)が大きな声で呼びよることもあるしな(笑)。全然違う山に登つとった(笑)。寺畑城(旧久世町)に登った時も谷の反対側の方の山に登ってしまった。山久世の方が見えたけえ、違う思った。まあ、間違つたら間違つたで、考えることはあるけどな。上がつとつてよかつた。というのが、三浦氏が尼子氏に兵糧攻めに遭つた時に、牧氏が山久世から兵糧を運んで行ったというが、それが上がつてみてよわかかつた。山続きじゃけえね。あそこからだつたら俵を運ぶのは楽だわ。まあ、間違えて登つたけど、タダでは下りてこんかつたわい。完全にタダだつたいうのもあるで(笑)。何回かやつとるけえ(笑)。

前原 城跡だと言われて登ってみたが、「どう見ても城跡ではないな」というようなところもありますか。

山形 香炉寺山城(勝央町)。どないしても遺構がわからん。ありゃあ、痛かつたわあ。香炉寺山城といええ、怪我をした。木の上を伝わつとつたら、木の皮が剥けて滑つて、落ちたところがまた倒木のあるところな。打身はあつたが、後遺症がないからよかつた。山王山城(旧北房町)でもそう。枯れ木にさばつて、

木が折れて、でえんと下に落ちた。すごい急なんだけえなあ。左の杖が引っ掛って、肩がねじれとんだろうな。ゲートボールに差し支えていけん(笑)。

敏子夫人 毎日薬を塗つとるけんな。

山形 今はほとんどええな。ものを持ち上げたらちよつと痛い。枯れ木

と生木の区別がつかんようなのは、注意がいるな。

前原 奥さんも、山形さんが遅く帰ってくるのがあつたら心配されるんじゃないですか。

敏子夫人 そう遅くなることはないですなあ。

山形 前、こいつ(敏子夫人)と一緒に篠向城(旧久世町)を歩きようって、こいつの目の前から消えたことがある(笑)。

敏子夫人 下の道のところまで落ちとるんで(笑)。それで帽子だけが残つとる(笑)。目の先を歩いていたら、人間がポロンとおらんようになってびっくりしたわ(笑)。

山形 鏡野の何とかいう城でも、枯れ木にさばりようつたら、下に落ちてな。落ちたところがよかつたわ。ザボンと(笑)。大井手を通つとつてなあ。その中に落ちた。それじゃけえ、怪我も何もない。冷たいだけ(笑)。水いうもんはええもんだな。怪我がないけえ。だいぶん高いところから落ちたんだが。

前原 ということは、山城では大きな怪我はされていないのですね。

山形 まあ、受身ができとんだらうなあ。若い頃から柔道、剣道、相撲。やらんやつがないくらいやつとるけえ。美甘におる時に、あの赤柴部隊の生き残りの柔剣術の先生がおつてな。その人に習うたんじゃ。相撲は岡山県で一番になったことがあるしな。

前原 大変なもんですねえ。それなら熊と対決できるかもしれない(笑)。山に入っ



たら、冬場とか早く日が暮れることがありますよね。

山形 そうそう。よう昔の人が言うようつた。「阿呆が山の上で日を暮らす」いうてな。山の上は明るいけど、下に降りてみたら真っ暗だった、いうやつな。そういうのは気をつけて、ほとんどないです。

前原 美作地方で「あそこは登りにくいなあ」という城はありますか。

山形 やっぱり矢筈(高山・旧加茂町)じゃないですか。標高が高いけえ、行きにくい。普通の人なら充分登れるが、もう年を取つとるけえな。もう矢筈に行くのはたいぎいんじゃ(笑)。ものすごくすばらしい城じゃけどね。みんなと一緒に上がつても、どうしても何十メートルか遅れて上がるようになる。みんなが休憩をしている時に追い付くが、追い付く頃にはみんなは休憩が終わつてまた歩き出す(笑)。わしゃあ、休憩できずに、じわじわ上がつて行くようになる。全然休憩なしで上がらにゃあいけん(笑)。みんなと一緒に上ると大変なんじゃ。それで、みんなと一緒に登るんはたいぎなんじゃ。自分のペースで登るとね、何日でも続けて行くことができる。

前原 ということは、みんなと一緒に城跡を見に行ったり、調査するというのはしんどいということですか。

山形 そうな。今はひとり登る方が、気も楽だし、体も楽だな。休みたい時に休んで、それでいけにゃあ、次の日に来りゃあええんじゃけえな。全然焦ることはない。でもなあ、親切な人がおつて、一緒に山に連れて行ってくれるのはうれしい。案内してくれるのはなあ。

五 山城の「全部」を未来に活かす

— 普及と保存活動

前原 山形さんが長年にわたつて美作の中世山城調査をされてこられて、今一番感じておられることは何でしょうか。そして、これから先、どのように遺構を活かしていったらよいと思われませんか。後進の方や、そして若い人々に対してはい

かがですか。

山形 ああ、そうだねえ。やっぱ「物を大切に、古里を大切に作る人いうんがおつて城跡が残っている」、そして、「自分ところに苦労した先祖がこれほどいたんだ」ということをね、はつきりと知ってもらいたいという気があるですなあ。それはあの、すごいですよ。弊履のごとく人の命が捨てられた時代にね、作った城跡が歴然と残っておるわけですけえな。この城を讃えるという意味よりか、「こういうものがなぜ作られて、これをどういう人間が命を懸けて作って、こういうものがなぜ残ってきたんだろう」という、その気がやっぱり強うてねえ。だから、僕が一番喜んで飛んで行くのは、子どもが山城を研究したいということ（要請）があった時ですな。ひとつの例を挙げると、山王山城（旧大原町）なんかは、（案内したあと）山城の冊子を子ども自身が作って送ってくれたんです。もうびっくりしてね。まあすばらしい感覚だなあと想着て。山に登る時は、「（服に）ダニが上がりよるぞ」とか大騒ぎしながらね（笑）。せえでも、あつちい歩き、こつちい歩きして質問したり、いろいろ話しうして。

前原 小学生ですか。

山形 六年生です。卒業記念に登るということで。冊子を作るという目的はその時には知らなくて、帰ってから作って送ってきてくれた。びっくりした。

前原 なるほど。そういう若い世代の人に興味を持ってもらったり、関心が受け継がれていくことが一番うれしいということですね。

山形 そうそう。うれしい。子どもが城跡に登りたいということがあれば、呼んでもらえればどこでもすぐに飛んで行きますけえ。つまり説明じゃけどな、遠慮なしに行つて、させてもらうことにしとるんです（笑）。史跡の大切さを話します。どのようにしたらわかりやすい話せるだろうかと、そればかりを考えてますね。難しく話してもいけませんけえな。

前原 なるほど、そうですね。ところで、よく山城ブームといいますが、城や武将だけを祭り上げるような風潮も一部にありますね、それについてはどうですか。山形 それはあまり好みじゃない。けどまあ、それを利用して、関心が向いてく

れりやあええけどね。「いかに百姓が城を作ったりするのに苦しかったか、略奪していく奴にいかにか戦うたか」ということを知ってもらいたい。「歴史の表面に出てこない潜在的なものを知ってほしいなあ」という考えがあるんでね。武将だけじゃのうて、「全部」を見てほしい。本当にじゃなあ、百姓なんかがどのくらい苦労して作ったことか。篠向城（旧久世町）の磐座なんか見たら、ほんと涙が出るよな。どれくらい苦労して山を削つてあれだけのものを作つたろうか。垂直に岩を削つて、一メートルくらいの幅しか残っていない。それが土塁みたいな形になっているが、土塁じゃなく削つた岩が残っている。それが戦国時代なんだ。そうした苦労の姿は必ず見てほしいし、何とか表わす方法はないだろうか。僕はここ（机）から縄張り図しかよう描かんの、それしかできんけどね。

前原 「全部」ですか。なるほど。城主にだけ注目するということはあまりよくないということですか。

山形 いやいや、よくないというわけではない。それもあつてもええんで。けど、本当はそういうところ（百姓たちの苦労）を見てもらいたい。そりゃあ苦労しとると思うで。鋏にしても、つるはしがあつたかどうか。鉄の棒はあつたでしょうけどな。石を削るのは先が鉄でできとらにゃあいけまいが、先がすぐちびて（なくなつて）しまう。こりゃ大変な仕事で。何日もかかると。前原先生にしても森さんにしても、道路の岩を実際に掘つて取り除いた、というような経験はないでしょう。

前原・森 ないですねえ。

山形 僕は実際にあるからね。せえで、現代の道具をもつてしても、「あのくらい（日数が）かかる」というのがおよそわかるからね。実際に生で経験しとるから、「（昔は）どのくらいしんどいか」ということがね、わかる。基本は木製で、先つちよだけ鉄を付けた道具が多かつたと思う。そういう道具を使つて、岩を掘るんですからなあ。あの横堀というのは絶対いうてええぐらい岩にぶつかるんですからなあ。土だけをどかして作るというのは数少ない。どれだけ大変か。矢筈（高山城・旧加茂町）なんかもだいたいぶん岩を削つとるよな。

前原 ところで、先ほど、山王山城に登った子どもたちの話がありました。次代を担う子どもにも山城に興味を持ってもらうためにはどのような方法が有効だとお考えですか。

山形 そうなあ、やっぱり学校で教えてもらわなきゃあ、どうにもならんね、こりゃ(笑)。学校の先生に関心を持ってもらわんとね。現代の先生は転勤族が多くなつて、郷土意識いうもんが稀薄であるということがいえる。そういうことは、すでに先生になってからじゃあだめで、大学における時分から教育してもらわんと困る。「自分が赴任した地域の歴史を、生の教材にして教える」というようなことがあってもええんじやないかと思うけどな。わしは高邁な理屈はわからんけどな(笑)。

前原 いえいえ、元教育長さんですので、ご発言はもつともです(笑)。

山形 それから、保護者の方も、先生に関心を持ってもらうように働きかけんといけんわな。

前原 そういう意味では、各地区に山城の保存会ができたり、美作の中世山城連絡協議会ができたことはとてもよい動きといえませんか。

山形 とてもええですなあ。山城に子どもたちを連れて上がるように、実際に学校に頼みに行ったりしたところもありますな。僕は美甘から津山市の方に移って暮らし始めた時に、神楽尾(津山市)や医王山(岩尾山城・津山市)の方がどうらい一生懸命活動しようるのを見てびっくりしたけえな。一方で、活動がない、遅れた地域にも気がつくな。ええ城があるところもいっぱいあるんじやが、惜しいな。

前原 保存会のみなさんは城跡の草刈りをされたり、道を整備されたり、地道だがとても大切な活動をされていますね。数多くの山城を登ってこられた経験から、城跡の保存という点で、どのような提案がありますか。

山形 美甘に高山という城があるんだ。そこに子どもを連れてよくキャンプに行っていた。一番てっぺんが鬼芝というか、山芝というか、それが一面に蔓延つてとつてね。裸足で遊んで歩ける。その山のイメージがいまだに根強く頭に残っている。丈も低いしね。城跡を鬼芝で覆わせたら、強いし、絶対に長持ちする。

それをやってくれんかなあ思うて(笑)。白旗城(兵庫県上郡町)に登った時にも感じたが、あそこも鬼芝で覆われとんです。すばらしいと思いました。鬼芝を中心にして保存を考えてくれれば、大変ありがたいと思います。

前原 城跡に桜を植えるといったところも多いですよ。

山形 多いではない、ほとんどじゃ(笑)。木は植えたらいいけん。植えとるものは伐ったほうがええ。

森 その点は、どうでしょうか。議論があるところだと思いますが。

山形 いや、木はどうもいけん。風が吹いて倒れたりしたら、根こそぎ土が持っていかれる。土に大きな穴が開いてしまう。土壘なんか惨めなもんじやなあ。二〇年も三〇年も経ってみなさい、「ここに遺構として、もともと穴があつたんじやな」といった感じで判別がつきにくくなる。なるだけ遺構の形が変わらんようにせにやあいけん。鬼芝だつたら背丈が低いし、根も深く張らんからちようどええ。鬼芝にして、時々背丈が大きくなったのを鎌で刈るくらいがええんじや、と思うとる。

森 なるほど。一方で、道を整備しすぎているところもありますよ。

山形 そうそう。道は人がよう通れるくらいでええ。建物を作るのもよくない。木柵なんか「こういうのがあつたんだぞ」と見せたい気持ちはいくさんあるけど、おえんな。あつても、ごくごく一部分でええんだ。城跡にセメントなんかを使う整備もおえんで(笑)。また、土を削ったらアウトじゃけえな(笑)。

前原 保存や普及のためとはいえ、過剰な整備をしてはならない。遺構を一切壊さない形を最優先すべきだというお考えですね。

山形 そうですなあ。使うとしても、自然のものじゃないといけん。それから、僕は山城に上がる時は邪魔になる木なんかがあつたら、除けて歩いとります。

前原 山形さんは調査のために城跡に行かれる際も、のちのち登る人のことを考えて木を除かれていますか。

山形 そうそう。できるだけ通りやすうしところかなと思えますな。片付けながら上がります。こないだ連れと一緒に篠向(旧久世町)に上がりようつて、連れ

から「山形さん、もうええかげんにして登ろうや、こりやかなわんで」言われてなあ（笑）。風が吹いたり、雪の重みで枝が折れたりして、道がだいぶん荒れとったんだわ。「車で上がるのに難儀するだろうな」思つて、ひとつひとつ除いて上がりようだったんじゃ。連れのもんが、「もう時間がかかってかないませんけえ、私が別の日に来て除けますけえ、上がりましょう」言つてな（笑）。まあ、できるだけそうしようります。そういうことは自然に身に付かやあ、なかなかできないことだ。

前原 「山城を見たいから登る」という気持ちだけではできないことですね。

山形 そうそう。みんながそういう気持ちを持って、少しでも山をきれいにしていくことが大事ですな。それから、おかしな整備をしたり、自分勝手に遺構を壊しようるもんには口を出して注意する。「おっさん、そりやあおえんで」言つてな。そりやあ、壊されるの見たら、堪らんもん。

前原 なるほど。一方、山形さんから見て、遺構の状態もよく、国指定史跡としても充分通用すると思われのはどこですか。

山形 はい、岩屋城（旧久米町）。即座に言います、岩屋城。それからあれがええでな、篠向。規模は大きいしね。僕がまだ調査してないところがたくさんあるしね。少なくとも篠向は県指定に早くせんと。ただ、無線アンテナがたくさん建設されよう。ありやあいけんで。止めさせんと。

前原 そういう面を含めて、行政に期待するところはありますか。

山形 役所に期待するところやこう、ひとつもありません（笑）。期待するのは森さんとこだけじゃ。まあ、もちろん、本を出してくれるんじゃけえ、その点についてあ津山市はありがたいで（笑）。それはもう、すごいなあ思つてる。保存や整備については、城跡に登る道くらいは整備してもらいたいなあ。三五〇以上あるけえ、全部は無理かもしれんけど、ひとつでもふたつでもそうした整備は増やしてほしい。役所にはそういうことを願いたいなあ。ちよつとした登り口ぐらいでええんじゃ。小さい道でええんじゃ、史跡を壊さんようになあ。説明板やこういらん。「某城登り口」という道標みたいなもんがありがあええんじゃ。そ

れだあけで城が好きなもの登って行く。少しでもみんなに山城に登ってもらいたい。もつと贅沢を言えば、土橋なら土橋に見えるように、堀切なら堀切に見えるように、一箇所でもええから、きれいに草を刈つたりしていたら、みんなが見てわかりやすうなる。そういうことにも役所は

力を入れてくれりやあ、なおええな。毎年いうたら予算が大変でしょうけどな（笑）。

前原 そのためには、まず、「どのような城が、どこにあるのか」という初歩的なことを認知してもらわないといけませんよ。そういう意味では、『美作国の山城』の発刊は大きな第一歩になるのではないのでしょうか。

山形 そうですね。「知ってもらおう」ということほど、大事なもんはありませんな。

六 山城で遊び、考える

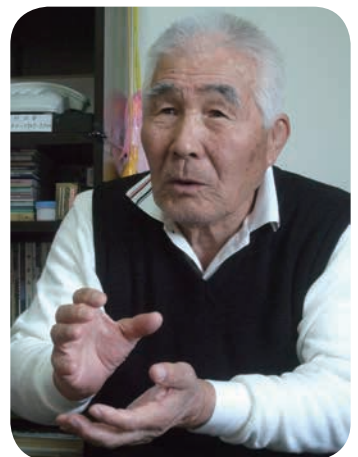
— 『美作国の山城』で伝えたいこと

前原 山形さんは、以前から、ご自身の成果を出版という形で世に聞きたいというお気持ちはあったのですか。

山形 ある、ある。でも、みんなが認めてくれてね、「出してやろう」ということにならんと。個人ではとでも出せんからね。ある出版社なんかは、この頃「いつでもええよ」と言うくれた。それなら安心だなあ」と思つて。

前原 それは、縄張り図や解説のうち、よいものだけを載せるという形になるのですか。

山形 いや、全部のものを載せるということです。大部なものになるけど、シリー



ズということだね。

森 いいことですねえ。今回の『美作国の山城』で山形さんの図面を採り上げる数は二〇〇余ですが、すでに三五〇を超える城を調査された縄張り図の作成状況はどんなもんですか。

山形 まあ、ぼちぼち進みますけどなあ。

前原 今回は収録されませんが、城郭の解説をすでに書かれているものもかなりありますよね。

山形 そうしたものを含めて、別の形で出版することになると思います。森さん辺りがみたら、「違うとる」いうようなところがあると思うんですけどね。わしん力じゃあこのくらいしかできんけえなあ(笑)。

森 いえいえ、滅相もない。

山形 曖昧な解説は書かんことにしとる。間違いを書くくらいなら、書かんほうがましだと思っとるからな。『作陽誌』は、僕は信用しとるから、それにあるものは全面的に書くのかなと思っとる。『作陽誌』の中でも、明らかにおかしいところは糺さないといいけませんな。

前原 『美作国の山城』では、森さんや中西義昌さんが解説を書かれているので、参考にされたらよいと思います。

山形 今回、『美作国の山城』を作る過程で、一例として、医王山(岩尾山城・津山市)の組見本を見せてもらいましたけど、すばらしいのが出来ゆうりますなあ。あれを見せてもらう時には、僕は背筋が寒くなりました。感激しましたなあ。涙が出たもん。机の上に飾って拝みようるんじゃもん(笑)。自分の縄張り図を世に残すええ機会だと思つて、ありがたかったです。学歴もない、ド素人の作業を認めてもらつて、出版してくれるというのは、僕自身、本当にありがたいですな。

前原 確かに、公的機関が発刊する書籍において、一個人の図面を中心に載せるということは珍しいと思います。したがって、そのことだけを捉えて批判を言う人も出てくるかもしれません。また、心無い人の中には、「学者ではない」とい

う理由だけで、低く見たり、馬鹿にするといった風潮もいまだにないわけではありません。でも、実際の図面を見て、学術的にきちんと評価しないといけませんよね。その上で、よいものならば、後世の方もきちんと活かす形になるはずですよ。山形 前原さんが評価して下さいたら、わしやあ、これくらいありがたいことはない(笑)。

前原 いえいえ、とんでもない(笑)。

山形 そうですね。だからこそ、それ(発刊)を津山市がするというのがすごい。それにスタッフがええわな(笑)。

森 いえいえ(笑)。

前原 今回、本を作るにあたって、「これも入れたい、あれも入れたい」という図面があるのではないですか。

山形 それはありますけどな。まあ、作業する時間もないし、体が続かん(笑)。前原 『美作国の山城』には、山形さんの縄張り図がたくさん収録されるわけですが、どういうところに力点を置いて読者に見て頂きたいと思えますか。

山形 ああ、そうだな。宗教、とくに神さんと城跡というのは、かなり密接に関係を持つておったなということですかね。これは城山を保存・保護するためか、信仰のためかわからんのんじゃけどな。必ず城跡の上には何らかの神を祀っている場合が多い。

前原 それは仏さんではなく、やはり神さんですか。

山形 神さんです。五輪塔を上げていくというのはほとんど稀だね(笑)。ほとんどは祠です。愛宕さん、妙見さんも多い。お大師さん、それから役行者が上がるしね。そういうのが多いですな。

前原 城跡と宗教との関連に注目すべきというご指摘ですね。いつ勸請したかわからない場合が多いので、一概に評価することは難しいとは思いますが、城跡に祠が多いという事実をご指摘されているのだと思います。他に注目して頂きたいことはありますか。

山形 堅堀の役割ですね。なぜ堅堀を作ったのか。緩斜面だから作ったのだとも

いえる。いい例が、美作市（旧大原町）の山王山城と竹山城。山王山城は緩斜面が多く守りにくいから、堅堀がやたらにある。一方、近いところにある竹山城は峻険な山にあるが、堅堀なんかはなくて無味乾燥。こうした対比がおもしろい。そういうところには注目してもらいたいな。

前原 美作国と他の国の山城の違いはどうか。また美作国の山城でも、東と西、北と南といった地域性の違いについては如何ですか。

山形 他の国のことはようわからんが、美作と備前の境については、例えば旧落合町の上山城（梅森城）、旧建部町の鶴田城。規模が大変大きいんです。それに守りもひじょうに多彩にできている。そういう意味で、境目の城というのは、備前側はようわからんけど、美作の方はすごいな。それに比べて、旧川上村、旧八束村、旧中和村は城跡が少なく、伯耆との境については美作側の守りが弱い。何でだろうか。備中と伯耆との境は城跡が随分多い。規模や内容とかは調べてないからわからんが、数からいうたら、伯耆側も備中側も多い。それから、備中と美作との境については、備中側の城が随分いいんです。そのわりに、美作側が悪いのは何でじゃろう。

前原 因幡国と美作国、播磨国と美作国との関係ではどのようなことがいえますか。

山形 因幡と美作との間は問題なんだ。矢筈（高山城・旧加茂町）を作った草薙氏が目立つくらいなんだが、美作側では、那岐山を中心にして無数にある。あそこは、僕はようせん。岩屋城（旧久米町）も周辺の城を調査するのに時間がかかった。やりかけたら、どんどんやるんだが、那岐山の周辺だけはとて手が出ん。小さい領主がたくさんおる。『七人の侍』の映画に出てくる、村を襲う野武士集団を思い出して、無意識的にも嫌がっているのかもしれない（笑）。単純な考えで、学術的ではないけどな（笑）。だから、那岐山周辺の山城については、ようわからんでも、本当は（城跡に）上がってみて、研究したいなあ思うとる。播磨との境は、赤松氏が正式に守護の肩書きを持って入ってきているから、わりとスムーズなんじゃないかな。赤松氏との関係、親戚筋という家も多いからな。あっち行っても、

こっち行っても赤松氏。赤松氏の悪口言うたら、ド突かれるんじゃないかという（笑）、そんな人が多いな。是久山城（旧中央町）の近くなんかでも赤松氏は多いわな。久米の一部には毛利の親戚筋がおったりしてな。うっかり、毛利の悪口は言われりやあせん（笑）。

前原 やっぱり悪口を言うと、文句を言って来たりする人はいますか（笑）。本当は悪口ではなく、学問的に裏付けられた説明をされていると思うのですが。

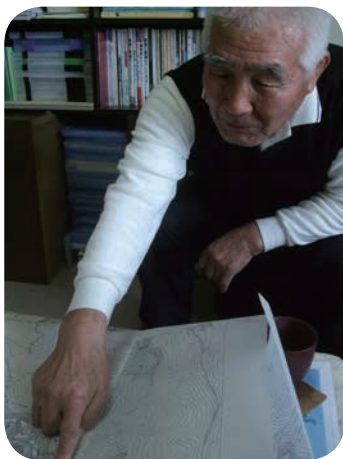
山形 おるおる。いっぱい。ムスツとして、物も言わんようになる（笑）。やっぱりその土地に行つて、うっかりしたことは言わりやあせんで。赤松さんは赤松さんで褒めてな、毛利さんは毛利さんで褒めて（笑）。菅家党もいろいろあるで（笑）。

前原 それは大変悩ましいですね（笑）。冷静に学術的な説明を行つても、心無い方から批判されることはあるものです。さて、一方、美作地方以外の読者にはどのようなことを伝えたいですか。

山形 そうですなあ、やはり「美作には三五〇、四〇〇、そして五〇〇近い城があるんだ」ということですな。それは声を大にして言いたい。そして、「今のところ、縄張り図は二〇〇くらいができていて」ということ、また、「研究はこの段階まで進んでいる」といったことも伝えたいですな。これから先、自分が描く縄張り図は少しなものも描けるはず。昔描いたもので直したいのは山ほどあるけどな（笑）。そこまですりょうたらかなわん（笑）。自分が調査した三五〇の城だけはきちんとした縄張り図を描き上げたいですな。

前原 なるほど。一方、本当は、山形さんだけが頑張るのではなく、そのお仕事を新しい世代の人たちが引き継いでいくことも大切ですよな。

山形さんの図面を叩き台にして、「山形さんよりも、もっとええ図面を描



「いちゃろう」という若い人が出てくるというのも期待される場所ではないですか。

山形 こりやまたええこっちゃ、そりやもう（笑）。そういう人が出てきてくれるとうれしいねえ。でも、若い人いうても、こがいに金にもならん仕事をするのは定年にならにやあできんだるうなあ（笑）。わしやあ、思うとったもん。「定年になるまで仕事はそこそこにして、体を保つといて、定年からは絶対遊んだるぞ」いうてな（笑）。せえで、遊ぶんが、これじゃ。城じゃ（笑）。

前原 遊んでいるわりには、随分根を詰めておられるようですが（笑）。

山形 いやいや、本人はどうらい楽しいんで（笑）。誰やらが言うつた。「山形が城に上がつとるのを見てみい。走り回りようらあ」いうてな（笑）。最近はずらんけど、最初の頃は走り回りようつた。図面を描きようりやあねえ、「ここはもういつペン見とかんと描けんあ」いうところがようけ出てくる。そしたら城に飛んで行きようるん。まあ、僕より若い人といえねえ、岡山の古代吉備文化財センターの宇垣匡雅さんなんかね、だいぶん調べてくれとる。参考になるんがものすごい多かつた。位置が書いてあるんがええわなあ。位置がわかつたら、こつちも探す（そして登る）けん。あれでどんだけ助かつたか。また、畑和良さんなんかねえ、そういう一翼を担ってくれるんじやないかと希望を持つとるんじやけどね。畑さんには備前なら備前を担当してもらつて、備中に誰か仲間でも募つてもらつて、何とかそれらを集めて岡山県全体の城郭について縄張り図を作りたいんだけどね。若い人には、しつかり山に登ってほしい。「山形はこころをまだ見てなかつたぞ」いうように、どどん僕の図面に書き足したり、直してもらいたいね。僕の図面が叩き台になるということは、言い換えれば教科書にもなるということだから、とてもうれしいねえ。ありがたい話だ。

前原 『美作国の山城』という書物が、書き込みの多い本になればいいですよ。そういう意味では、研究成果としては、完成形というよりも、まだまだ発展途上の、可能性を含んだ書籍と位置づけてもらいたいと思います。それにしても、お話がおもしろいものですから、今日はついつい長時間にわたつて、お話を伺うこ

とになりました。貴重なお話を本当にありがとうございました。奥さんにも大変お世話になりました。

森 大変ありがとうございました。お疲れさまでした。

山形 いやいや、こちらこそ。今まで三五〇ほどの城跡を調査したけど、今度、『美作国の山城』を作るにあつて、「実際には、美作に五〇〇以上の山城がある」と聞いて、ように往生してしもうて（笑）。

前原 聞いたからには気持ちが悪くて、うずうずしますか（笑）。

山形 そうそう、「まだ死なれんぞ」いう気になつて困りようる（笑）。

〔註〕この聞き書きは、当日の五時間余に及ぶ録音記録から前原が筆耕したものであり、発言内容や雰囲気などについてはできるだけ忠実に載録することに努めた。なお、その際、発言順序の入れ替えについては前原の判断で適宜編集を行い、地名・用語の補訂などについても最小限の加筆を行っていることをお断りしておく。また、山形氏が語る美言葉は、ごく一部関西弁が挿入されるものの、現代の方言資料として大変貴重なため、人柄を正しく伝える目的とともに、できるだけそのまま載録するよう留意した。

「聞き書き」を終えて

山形省吾氏と美作城郭史研究

前原 茂雄

山形省吾氏は市井の人である。いわゆる学術研究者と呼ばれる存在ではなく、高等教育に従事する教育者でもない。あくまで在野の立場を貫きながら、美作国における膨大な数の中世山城を独学で調査し、記録作業を行った。その成果の集大成ともいえるものが『美作国の山城』所収の縄張り図である。もとより、縄張り図の当否や今後の研究への活用法などについては議論もあつてしかるべきだが、多様な美作の中世城郭を概観するための基礎となるべきすぐれた労作であり、美作中世史研究はもとより、岡山県の地域史研究にとつても重大な意義をもつ業績といえよう。一方、そのような縄張り図がどのような思想によつて規定され、作成されているものであるかということについては、充分検討しておく必要がある。

山形氏が山城調査に関心をもつた直接の契機は後述するとして、その前提となる思想については、戦後における二つの実践が大きく影響を与えていると考えられる。山形氏は終戦前に海軍に召集され、終戦時には美甘村で自宅待機という状態であった。当時の多くの日本人がそうであったように、軍国思想を全面的に享受し、敗戦を疑うことすらなかったという。一方、終戦後は、家業の石工を継ぎながら、アメリカに緒を發する4日クラブの運動に共鳴し、多くの青年たちとともによりよい農村・農業を構築するための活動を学んでいた。二七歳という異例の若さで美甘村教育長に就任したのち、山形氏は連日連夜、美甘村内の集落を回り、地区住民らと討議を重ねたという。十羽養鶏や保温折衷苗代、栗の接木といった実践的な農業技術を新たに普及させることによつて、戦後山間部ではまだ色濃く残存していた食糧難を回復させ、農村の精神的な疲弊をも解消させるべく奔走した。4日クラブで学んだ理論の実践である。当然、当時の保守的な農村部では

世代間の対立や異業種に対する反発などが強く、進歩的で若い教育長への風当たりはきわめて大きかった。その中にあつても、「前へ前へ」という生来のヴァイタリティーで、少しでも「よりよい暮らし」を実現させていくための労を惜しまなかつた。日給であつた教育長の僅かな手当だけではとても務まらない活動であり、使命感と社会奉仕的な発想が根底にない限り、なしえぬことであつたらう。

一方、教育長時代には大きな出会いがあつた。当時岡山大学助手であつた近藤義郎氏が宇南寺のたたら製鉄遺跡の発掘のため美甘村を来訪したのである。当時の近藤氏はほぼ同時期に、著名な月の輪古墳（旧柵原町）の発掘も手がけていた。月の輪古墳の発掘は、専門の研究者だけでなく、地域の住民にも発掘調査の協力を仰ぎ、連日連夜の報告会を通じて「ともに歴史を学ぶ」という実践をなし、のちに、戦後歴史学における「国民的歴史学運動」の金字塔とも評価された。近藤氏は強烈な個性と深い探究心で岡山県各地の発掘を主導したが、その近藤氏との度重なる交流こそ、山形氏の幼い頃からの史的探究心をより刺激したことは間違いない。また、「国民的歴史学運動」の渦中にあつた近藤氏と密接に交流すること、歴史教育や史跡保存、その活用する方法についても、当然考えを巡らす端緒になつたことであらう。敗戦によつて、その戦争責任の所在について深く考慮していた山形氏は、民衆に力点を置いた歴史の掘り起こしに共感していたという。自らの手で地下を発掘することにより、たたら製鉄遺構という民衆の生業活動の一端を明らかにしていく興奮は、のちの山城調査の活動にも通底するものであつたらう。

すなわち、戦後における山形氏は、「よりよい農村を作る」といった思想を、声高に主義主張を唱えるのではなく、人々と対話することで、あくまで実践的な活動の中にこそ深化させていった。物心ともに郷里の豊かさを達成していくための使命感と社会的奉仕の精神を併せ持ち、醸成させていったのである。また、「国民的歴史学運動」の実践者である近藤氏と交流することで、民衆史研究の意義と歴史教育、史跡保存・活用の思想を学んだ。この二つの思想と実践を、当時、山形氏がどの程度まで意識的に自らのものとしていたかについては不分明である

が、このことは、のちの山城調査・研究の思想と実践において、きわめて共通した形をとって再現されていくのである。そしてこの二つの方向性は、それぞれに分ちがたい連関の中にあつたのである。

美甘村から大阪に出て就職し、六〇歳を超えて郷里・美甘に戻ってきた時には、たたら製鉄の研究に打ち込むつもりだった。もとより、山形氏が語るように、中世のたたら製鉄について研究するよう近藤氏に示唆を与えられたことに端を発するが、もともと製鉄遺跡を自らの手で発掘した経験も、関心の継続を支えていたのであろう。中国地方のたたら製鉄の中心地である出雲地方の吉田や横田に足繁く通い、製作法を実践的に学んだ。と同時に、製鉄業の利権に接近する中世領主層の動向や、周囲に所在する数多くの山城に関心が広がっていく。これが、山形氏による山城研究の直接の契機となつた。

当初は岡山県全体をその調査対象とするつもりであつたが、早い段階から美作地方に限定したという。郷里・美甘村の麓城（城山）から調査を始めたが、その際、きわめて重要なことは、山形氏が当初から記録保存という発想を意識的に保持して調査を行ったことである。一般の歴史愛好家や山城愛好家の場合、登山そのものや、遺構を確認する楽しみに特化する傾向がまま見られるが、山形氏の場合、それだけに止まらなかつた。もとより、幼少期からの思い出深い麓城の形状改変に心を痛めたという理由もあろう。しかし、一方で、若き日の発掘調査従事者の経験から、史跡の改変に備えてできるだけ正確な記録保存を行うべきだという思想を、それまでに充分体得していたことも忘れてはならない。また、記録保存の目的を語る際、山形氏が表現した「後のものの便利がええんじゃないだろうかな」という考え方は、史跡を個人の一時的な楽しみの対象として捉えるだけでなく、地域社会に普遍的かつ永続的な価値をもつものと認めた上で、正しく伝承することに意義を見出したものとして特筆される。この姿勢は、記録保存の側面だけでなく、調査や登山の際に倒木などを除外し、登山道ができるだけきれいな状態にしておくという山形氏の良心的行為とも共通する。すなわち、山城という史跡を地域社会の重要な遺産と考え、記録と形状の両面から後世に正しく引き継

いでいこうという姿勢の表れなのである。

また、山城を地域社会の遺産と考える山形氏の発想の根底には、戦後歴史学が追究してきた民衆史的視点が色濃く反映している。山形氏は再三再四、領主層への嫌悪感を吐露する。領主層を「庶民をいじめた側」とし、武将や武士団のみを採り上げて顕彰する風潮を「好みではない」とする。そして、山城を調査・研究する最大の目的を「自分たちの地域の人々がいかに苦勞して城跡を作り上げたか」ということを明らかにすることだと捉える。加えて、「城をいかに現在の形まで残してきたか」ということにも思いを寄せる。つまり、山城遺構を「地域の民衆が苦勞して作り上げた結晶」として位置付け、それを史跡として継承してきた近世・近現代の人々の心性についても十分な留意がなされるべきとの主張である。いわば、美作の山城を領主層の史跡としてだけではなく、「民衆の史跡」と捉えなおしたところに山形氏の特徴がある。そのことは、「歴史の表面に出てこない、潜在的なものを知ってほしい」という山形氏の表現に端的であろう。遺構を実質的に作った人々、史跡として守り続けてきた人々への尊敬の念が痛切に伝わる。評価の当否は別として、山城遺構に宗教施設が多いという事実をあえて強調したことなども、そうした史跡保護の継承性に思いを寄せた帰結であろう。しかしここで重要なことは、民衆からの視点を第一義としつつも、一方的に民衆の視点からだけ史跡を捉えるのではなく、築城主体である領主層にも十分な目配りを行うべきという、山形氏の表現によるところの、「全部を見てほしい」という考えである。一方的に民衆を弱者と捉えず、領主と民衆を相対的に評価する視点は、戦後歴史学以来、民衆史研究の重要な命題であつた。

一方、山形氏の思想と行動の先には、山城遺構の普及と保護問題がある。前述のような「後のものの便利がええんじゃないだろうかな」という調査・普及活動に対する積極的な取り組みは、食糧増産を目指す4日クラブの活動を背景に、連日連夜、美甘村を駆け回った若き日の姿と重なる。社会奉仕と使命感を支えられた行動に、年月の隔絶や老若の違いはなかつた。各種の講演会や、登城案内、子どもへの興味喚起など、山形氏の旺盛な普及活動を支えているのは、「山城を知っ

てほしい」という、ごく明快な思想である。もとより、その背景にあるのは、「山城を作った民衆の苦勞を知ってほしい」という考え方であろう。多くの人々と対話することで「ともに歴史を学ぶ」姿勢を貫いた近藤義郎氏との交流の影響が、ここにも垣間見える。また、山形氏の普及活動には、史跡の損壊や改変を防止し注意を喚起する、という役割も大きい。「壊されるの見たら、堪らんもん」という山形氏の言葉は象徴的である。山城遺構は一般に奥深い山林部にあることが多く、一方美作地方において「構」と称する領主居館は、多くの場合、集落内や耕地内に所在する。いずれも、気づかれぬままに荒廃し消滅する危機をつねに孕んでいる。山城遺構がどこにあるか「知ってもらおう」という地道な活動が、実はもっとも効果的な保護思想なのかもしれない。その上で、「少しでもみんなに山城に登ってもらいたい」という目的のためにも、整備の問題に考えが及ぶ。史跡を壊さない形での登山道整備を行政に訴える一方で、植樹の禁止、樹木の伐採、代替植生として鬼芝の普及を提唱する。賛否には議論があるとしても、実践的な経験に裏付けられた発想であり、一考に値するであろう。山城遺構を累々と保存してきた先人たちへの尊敬の念を持ちつつ、歴史を生きる現代人として、後世に向けてそれを正しく引き継ぐ役割を、使命感をもって自任しているともいえよう。

とはいえ、それらを下支えしているのは、やはり、つねに継続している山城調査である。八〇歳を超える高齢であっても、なお、新しい山城遺構の調査と記録化作業を積み重ね、一方で既存調査の縄張り図を改善していくための調査にも余念がない。後世の研究に耐えうるよう、自ら作成した縄張り図に修正の筆を入れ続けているのである。少しでも新しい遺構を記録し、よりよい形で後世に伝えていこうとする使命感のようなものがある。しかし、それは決して鬼気迫った焦燥感と同義ではない。一方で、山形氏にはそれを「遊び」と捉える余裕もある。公的機関や専門の研究者が行う時間の限られた調査では決して獲得できない、在野の研究者だからこそ生じうるそうした余裕こそが、山形氏の息の長い活動を支えているのであろう。

繰り返す言う。山形省吾氏は市井の人である。遺構を「しっかりと歩いて、見

て、図面を確実に描いて出していくことが僕の力になる」と率直に語る山形氏の思想と行動には気負いが無い。とはいえ、戦後民主主義の思想を実践の中で体得し、戦後歴史学を間接的に享受した上で、市井の立場から現代まで支え続けた人の性根が、穏やかに、しかし明確に刻み込まれている。山形氏が作成した縄張り図はいつか乗り越えられるだろう。また、乗り越えられなければならない。しかし、その時こそ、美作城郭史研究が大きく前進する時でもある。山形氏が描いた縄張り図、その一本一本の線は、二本杖で登山をし、遺構を歩き、後世に守り伝えるための熱意に突き動かされて鉛筆を走らせた筋であり、汗が生み出した結晶の筋でもある。その結晶の意義を正しく理解し、その上で学術的に相対化することこそ、新しい世代がなすべき第一の課題となろう。

付

編

主要参考文献および解題

〔日本城郭大系〕、『岡山県の地名』、『岡山の古文書』などをもとに作成

花房家記事 花房氏に関する資料のいくつかをまとめた文献。うち江戸幕府の「寛

永諸家系図伝」編纂の下命にあたり家中で交わされた書状や覚書は参考になり、その部分については『久世町史』資料編第一巻および『吉備地方文化研究』第一四、五号で翻刻・紹介されている。

武家聞伝記 津山藩藩士・木村昌明が延宝五年（一六七七）から元禄一〇年にかけて編集した書籍で、美作国に関する記事を頭に森家の事歴・軍記・雑録等、津山藩の総合的資料集の性格をもつ。後に森家が「森家先代実録」の編纂にあたり多く依拠。池田家文庫に写本があり、未刊。

安西軍策 著者・成立年代とも不詳の軍記物語であるが、「陰徳記」の祖本に位置づけられることから、成立はそれ以前となる。毛利氏を中心に中国地方内外の戦乱を記す。『改定史籍集覧』所収、また同所を復刻した『安西軍策』がある。**陰徳記** 著者は周防国岩国（山口県岩国市）の吉川家の家臣香川正矩で、「安西軍策」の本文を承け、毛利氏を中心に中国地方内外の戦乱をより詳細に記す。『陰徳記』として翻刻されている。

戸川記 備前国庭瀬藩の戸川源兵衛が諸史料や聞き書きなどをもとに記した書籍で、主に宇喜多家旧臣の戸川家に関する記事が中心となっている。『改訂史籍集覧』第二五冊、『翁草』、『日本随筆大成』所収。

浦上宇喜多両家記 「戸川記」と同じく戸川源兵衛が延宝七年（一六七九）に記した書籍で、主に宇喜多家およびその家中に関する記事が中心となっている。『金沢の宇喜多家史料』所収。

作陽誌 美作国の官撰地誌。津山藩家老の長尾勝明が元禄二年（一六八九）に藩命で着手、うち西六郡は同四年に脱稿し、藩主に献じられた。東六郡は未完。各郡ごとに県邑・山川・神社・寺院・古跡の項を立て、さらに郷庄保に分けて記す。『新訂作陽誌』所収。

陰徳太平記 香川次男の正矩宣阿が「陰徳記」を増補し、元禄八年（一六九五）に完成、享保二年（一七一七）に刊行された。戦国期の毛利氏を中心に諸家の興亡などを記す。『正徳二年版本陰徳太平記』として翻刻され、岡山県地域関連記事の抜粋が『新編吉備叢書』第二巻に所収。

美作鬢鏡 「懐中鬢鏡」とも。林盛龍軒が享保二年（一七一七）に刊行。領主別に陣屋所在地・総石高・村名・村高・庄屋名を掲げるほか、津山城下の町役人名、また「国中古城井城主附」として旧郡単位に古城名と城主名を列記する。『吉備群書集成』第一輯所収。

作州記 津山松平藩士・津田重倫が享保一〇年（一七二五）に編纂。地誌的事項のほか、津山藩藩時代の法制や税制などの史料を幅広く収録。『吉備群書集成』第二輯所収。

閔閔録 萩藩主毛利吉元が家臣永田源兵衛に命じ、藩士諸家の所蔵文書を書き上げさせ編纂したもので、享保一〇年（一七二五）に完成。同時代史料を収めており史料的价值は高い。『萩藩閔閔録』全五巻がある。

備前軍記 岡山藩士・土肥経平が安永三年（一七七四）に記した軍記物語。約一六〇年間にわたる赤松・山名・浦上・松田・宇喜多氏らの興亡を叙述する。『吉備群書集成』第三輯所収、また本文を現代語訳した『新釈備前軍記』がある。

美作古城記 「美作国古城記」とも。著者・成立年代とも不詳だが、「作陽誌」の引用がみられ、元禄四年（一六九一）以降の成立か。吉野・英田・勝南・勝北・西北条・西々条六郡の古城について位置・縄張・城主・合戦の様子をまとめる。『吉備叢書』第四巻、『新編吉備叢書』第一巻所収。

山陽道美作国古城跡 一般に「美作国古城跡」。著者不詳。正保二年（一六四五）に成立した古城の覚を延享元年（一七四四）に写しさらに後筆を加えたもの。「太平記」に出る古城をはじめ国内各郡の項からなる。『吉備群書集成』第一輯所収。

美作風土略 「美作風土記」「美作国風土記」とも。著者・成立年代とも未詳であるが、成立は奥書にある宝暦十二年（一七六二）か。美作国の総説ののち郡別に社寺・名所旧跡などをあげ説明する。『吉備群書集成』第二輯。

東作誌 「追補作陽誌」とも。津山松平藩士・正木輝雄が文化二二年（一八一五）に編纂した美作国東六郡の地誌。各郡を郷庄保に分け、さらに村単位に記述する。『美作誌』前編、『新訂作陽誌』四〇八所収。

美作太平記 菅原保実が文化〳文政年間に記した軍記物語。美作の在地国人の興亡についても詳しいが、史料として用いるには特に検討が必要である。『吉備文庫』第一・二・四輯、『新編吉備叢書』第一巻所収、また本文を現代語訳した『新釈美作太平記』がある。

白玉拾 菅原保実が文化〳天保期に編纂した、地域の歴史から文化、生活にいたる資料集。奈義町教育委員会が『白玉拾』として翻刻。

天正年中美作国古城合戦記 奥書にみえる天保二年（一八三一）以前に成立。美作国内の岩屋・神楽尾・高山・高屋（室尾）・横田の五域にまつわる説話を記す。

大部分の説話は「武家聞伝記」にもみえるが参照関係は未詳。『吉備群書集成』第三輔所収。

美作鏡 福島政民が嘉永五年（一八五二）に刊行した小型本。郡別に村高・村名・津山城下への距離などを掲げたのち、郷・神社・古跡・古城・人物など簡略に記す。『吉備群書集成』第二輯所収（抄録）。岡山県立図書館HP「デジタル岡山大百科」で閲覧可能。

矢吹正則『美作略史』一之巻〳四之巻 稲田佐兵衛 一八八一

岡山県勝田郡役所編『岡山県勝田郡誌』同郡役所 一九二二

英田郡編『英田郡誌』英田郡役所 一九二二

久米郡教育会編『久米郡誌』久米郡教育会 一九二二

真庭郡編『真庭郡誌』真庭郡役所 一九二二

権田甚四郎『勝間田町誌』私家版 一九二七

苦田郡教育会編『苦田郡誌』苦田郡教育会 一九二七

椎口松玲『英田郡史考』小林皓二 一九二八

早田玄洞『史上の吉備』上・下編 山陽新報社 一九二六〳八

永山卯三郎『岡山県通史』岡山県通史刊行会 一九三〇
吉備群書集成刊行会編『吉備群書集成』第一〳一〇輯 吉備群書集成刊行会 一九三〇〳二

片岡竹市『月田郷土史』月田尋常高等小学校 一九三〇

石井常太郎編『久世町誌』久世町誌刊行後援会 一九三二

美川尋常高等小学校編『美川村郷土誌』同校 一九三六

矢吹金一郎編『美作古簡集註解』対岳楼書房 一九三六

寺阪五夫『勝加茂村史』私家版 一九五一

椎口松玲編『勝田郡豊国村誌』豊国村 一九五二

寺阪五夫『倭文志稿』私家版 一九五二

高柳美作編『大井西村誌』静和荘 一九五三

藤井 駿・水野恭一郎編『岡山県古文書集』第一〳四輯 共同印刷製本・瀬戸内

海総合研究会・山陽図書出版・思文閣出版 一九五三〳八一

森本清編『湯原町史』前編 湯原町 一九五三

谷口一巳編『英田郡栗広村史』栗広村役場 一九五四

尾崎蘭青『落合町史』落合町教育委員会 一九五四

丸山弓削平（肇）『弓削町史』岡山県久米郡弓削町役場 一九五四

寺阪五夫『美作古城史』私家版 一九五五〳八

田中千秋『三星城の合戦』私家版 一九五六

寺阪五夫編『新野村史』新野郷土史研究会 一九五七

国政寛編『勝田郡誌』勝田郡誌刊行会 一九五八

寺阪五夫編『美作高円史』岡本友一 一九五八

鏡野町学校教育研修所編『鏡野の歴史史料集1 研修紀要』同研修所 一九五九

寺阪五夫編『勝加茂史』旧勝加茂村閉村処理委員会 一九五九

寺阪五夫編『郷の村誌』郷村史編纂会 一九六〇

尾崎蘭青『富原村史』富原公有林保護料管理委員会 一九六一

鏡野町学校教育研修所編『わたしたちの郷土・鏡野の歴史』鏡野町 一九六二

二川村史刊行会編『二川村史』二川村史刊行会 一九六五
 美作町史編纂委員会編『美作町史編纂中間報告書』美作町教育委員会 一九六五
 森本清九編『新庄村史』前編 新庄村教育委員会 一九六六
 山崎節治編『富村郷土史』富村教育委員会 一九六六
 作東町の歴史編纂委員会編『作東町の歴史』作東町 一九六七
 大類伸監修『日本城郭全集』一〇 人物往来社 一九六七
 大類伸監修『日本城郭全集』一五 人物往来社 一九六八
 藤井駿・市川俊介『岡山の城と城址』日本文教出版株式会社 一九六八
 岡山県教育委員会編『岡山県埋蔵文化財報告一』岡山県教育委員会 一九七一
 岡山県教育委員会編『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告三中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』岡山県教育委員会文化課 一九七三
 平山登一『郷土の武将草薙氏興亡記―矢筈山をめぐる郷土史―』加茂郷土史研究会 一九七三
 津山市立共和中学校郷土クラブ編『郷土の研究』同クラブ 一九七三
 勝山町史編纂委員会編『勝山町史』前編 勝山町 一九七四
 津山市教育委員会編『史跡院庄館址 発掘調査略報』津山市教育委員会 一九七四
 津山市教育委員会編『史跡院庄館跡発掘調査報告』津山市教育委員会 一九七四
 美甘村誌編纂委員会編『村誌美甘』上巻 美甘村 一九七四
 勝田町誌編纂委員会編『勝田町誌』勝田町教育委員会 一九七五
 加茂町史編纂委員会編『加茂町史』加茂町 一九七五
 久世町史編纂委員会編『久世町史』久世町教育委員会 一九七五
 中和村史編纂委員会編『中和村史』中和村 一九七五
 久米町文化財保護委員会『岩屋城調査中間報告』久米町教育委員会 一九七六
 山磨康平・下沢公明『勝史町中核工業団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』勝史町教育委員会 一九七六

津山市史編さん委員会編『津山市史』第二巻・中世 津山市 一九七七
 西栗倉村史編纂委員会編『西栗倉村史』前編・後編 西栗倉村 一九七七、八四
 中尾泰二編著『広戸村誌』岡山県勝田郡勝北町広戸村誌発刊委員会 一九七七
 植月一夫訳『新訳三星軍伝記』山陽チェン製作所 一九七八
 考古学研究会編『考古学研究』第一〇三号 一九七九
 用田政晴『美作における中世山城について』
 竹内治一『私説美作略史』私家版 一九七九
 新編・作東町の歴史編纂室編『新編作東町の歴史』作東町の歴史事務局 一九七九
 竹内流編纂委員会『日本柔術の源流 竹内流』日貿出版社 一九七九
 東栗倉村編『東栗倉村史』東栗倉村 一九七九
 柿誌編さん委員会編『柿誌』柿誌編さん委員会 一九八〇
 川上村史編纂委員会編『川上村史』川上村役場 一九八〇
 奈義町誌編纂委員会編『奈義町誌』奈義町 一九八〇
 児玉幸多・坪井清足監修、平井聖・村井益男・村田修三・葛原克人編集『日本城郭大系』第13巻 広島・岡山 新人物往来社 一九八〇
 津山市教育委員会編『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第七集 史跡院庄館跡』津山市教育委員会 一九八一
 久米南町誌編纂委員会編『久米南町誌』久米南町 一九八二
 八束村史編纂委員会編『八束村史』八束村 一九八二
 中村安孝編『月刊歴史手帳』三月号 名著出版 一九八三
 三好基之『美作の国人たち』
 鏡野町教育委員会編『鏡野町埋蔵文化財発掘調査報告第一集竹田遺跡発掘調査報告竹田墳墓群』同委員会 一九八四
 久米町史編纂委員会編『久米町史』上巻 久米町教育委員会 一九八四
 勝史町誌発刊委員会編『勝史町誌』勝史町 一九八四
 岡山地方史研究会編『岡山地方史研究』第五五号 一九八七

田口義之「美作三星城主後藤勝基に就いて」

神楽尾城跡保存会『神楽尾』同会 第一号〜 一九八七〜

村田修三編『図説中世城郭事典』第三卷 新人物往来社 一九八七

牧 祥三『美作地侍戦国史考―岡山県・美作・真庭郡牧一族の史料に拠りつつ―』

私家版 一九八七

柵原町史編纂委員会編『柵原町史』柵原町 一九八七

岡山県史編纂委員会編『岡山県史 第四卷 中世Ⅰ』岡山県 一九八八

中野美智子『岡山の古文献』日本文教出版 一九八八

平凡社地方資料センター『岡山県の地名』平凡社 一九八八

岡山県史編纂委員会編『岡山県史 第一九卷 編年史料』岡山県 一九八九

畑 輝忠『佐良山地域の歴史を探ろう』私家版 一九八九

富村史編纂委員会編『富村史』富村 一九八九

近藤義郎責任編集『図説岡山県の歴史』河出書房新社 一九九〇

岡山県史編纂委員会編『岡山県史 第五卷 中世Ⅱ』岡山県 一九九一

勝北町教育委員会・勝北町誌編纂委員会編『勝北町誌』勝北町 一九九一

熊山町史編纂委員会編『熊山町史調査報告』第四号 一九九二

岸田裕之「小瀬木平松家のこと付、「新出沼元家文書」の紹介と中世河

川水運の視座」

津山市教育委員会編『津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第四二集 史跡美和山古

墳群保存整備事業報告書』津山市教育委員会 一九九二

花房 祐『かりがねの行方』私家版 一九九三

就実女子大学近世文書解読研究部編『備前記 全』備前史料研究会 一九九三

岡山県歴史人物事典編纂委員会『岡山県歴史人物事典』山陽新聞社 一九九四

中世城郭研究会編『中世城郭研究』第八号 一九九四

池田 誠「美作国における中世城郭の一考察―縄張研究の視点からみた

天正期津山盆地の政治状況―」

岸田裕之・長谷川博史『岡山県地域の戦国時代史研究』広島大学文学部編『広島

大学文学部紀要』五五 特集号二 同部 一九九五

富阪 晃『歴史散歩 岡山の城』山陽新聞社 一九九五

建部町編『建部町史』通史編 建部町 一九九五

宮沢靖彦『津山市広野の歴史散歩―文化財と解説―』私家版 一九九五

竹久順一『美作国府館構城下町の検証』私家版 一九九五

英田町史編纂委員会編『英田町史』英田町 一九九六

勝田町教育委員会・勝田町文化財保護委員会『勝田町の城址と構え跡』同委員会

一九九六

勝北町教育委員会・勝北町文化財保護委員会編『勝北町の文化財と石造美術』同

委員会 一九九六

皆木欣歌『美作中世史研究』私家版 一九九六〜

岡山県古代吉備文化センター編『発掘された久田の埋蔵文化財Ⅰよみがえる久田

の歴史』同センター 一九九七

湯原町文化財専門委員会編『湯原町の文化財』湯原町教育委員会 一九九七

津山郷土博物館『博物館だより』No.一九 一九九八

湊 哲夫「二つの院庄―館跡と構城跡―」

落合町史編集委員会編『落合町史』地区誌編・通史編 落合町 一九九九〜

二〇〇四

神楽尾城保存協力会編『神楽尾―神楽尾城跡保存協力会10周年記念誌―』同会

一九九九

久世町教育委員会編『真庭市埋蔵文化財調査報告3 羽庭城』久世町教育委員会

一九九九

小谷善守『出雲街道』第一巻〜 津山朝日新聞社 二〇〇〇〜

奥津町文化財保護委員会編『奥津町の文化財町指定重要文化財』同委員会

二〇〇〇

古代吉備国を語る会編『吉備されど吉備』古代吉備国を語る会 二〇〇〇

乗岡 実「中世山城の瓦三題―山城の近世化と天正の瓦師たち―」

岡山県古代吉備文化財センター編『勝北町埋蔵文化財発掘調査報告1 西村古墳

群』勝北町教育委員会 二〇〇〇

長谷川博史『戦国大名尼子氏の研究』吉川弘文館 二〇〇〇

三好基之『中世をたどる』私家版 二〇〇一

岡山県古代吉備文化センター編『発掘された久田の埋蔵文化財Ⅱ久田原遺跡と久

田掘ノ内遺跡』同センター 二〇〇一

神代のむかしを語る会編『むかし神代』久米町神代自治会 二〇〇一

田中修實『余滴中世の吉備』吉備人出版 二〇〇一

岡山県古代吉備文化財センター編『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告一六六下湯原

B遺跡敷浴山城跡』岡山県教育委員会 二〇〇二

森本基嗣『岡山の山城を歩く』吉備人出版 二〇〇二

岡山学院大学・岡山短期大学編『岡山学院大学・岡山短期大学紀要』二五号

二〇〇二

尾崎 聡「土居考―歴史的・民俗的景観図作成の試み その③―」

小川博毅『美作埴和郷戦乱記』吉備人出版 二〇〇二

岡山学院大学・岡山短期大学編『岡山学院大学・岡山短期大学紀要』二六号

二〇〇三

尾崎 聡「城山考（その①里山に残された城山、歴史遺産と環境倫理）

―歴史的・民俗的景観図作成の試み その④―」

岡山県古代吉備文化財センター編『改訂 岡山県遺跡地図』岡山県教育委員会

二〇〇三

岡山県古代吉備文化財センター編『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告一七〇河内構

遺跡河内城跡河内遺跡ナル林遺跡久田上原城跡北条高下遺跡峪畑遺跡』岡山県

教育委員会 二〇〇三

岡山県古代吉備文化財センター編『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告一七六小坂向

城山城跡 ヒロダン・小坂向遺跡』岡山県教育委員会 二〇〇三

岡山地方史研究会編『岡山地方史研究』一〇〇号 二〇〇三

渡邊大門「『新訂作陽誌』所収赤松晴政（性熙）発給文書について」

勝山町文化財保護審議会編『勝山町の文化財』勝山町教育委員会二〇〇三

倉敷市総務局総務部市史編さん室編『倉敷の歴史』第十三号 二〇〇三

横山 定「亀山家伝来の美作国高野郷中嶋氏受給文書」

戦国史研究会編『戦国史研究』四五号 二〇〇三

渡邊大門「『豊楽寺文書』所収某祐定寄進状をめぐって」

中和村文化財保護委員会編『中和の文化財』中和村教育委員会 二〇〇三

奈義町教育委員会編『奈義町の文化財』同委員会 二〇〇三

備陽史探訪会編『山城誌』一七号 二〇〇三

田口義之「美作後藤氏の盛衰」

森本基嗣『新版岡山の山城を歩く』吉備人出版 二〇〇四

苦田ダム水没地域民俗調査団編『奥津町の民俗』奥津町・苦田ダム水没地域民俗

調査委員会 二〇〇四

落合町教育委員会編『落合町埋蔵文化財発掘調査報告4郡遺跡・須の内遺跡・古

市場遺跡―県営ほ場整備事業（担い手育成型）鹿田地区に伴う発掘調査―』同

委員会 二〇〇四

就実大学吉備地方文化研究所編『吉備地方文化研究』第十四号 二〇〇四

森 俊弘「史料紹介・弓斎叢書「花房家記事」」

久世町史資料編纂委員会編『久世町史』資料編第一巻編年資料 久世町教育委

員会 二〇〇四

戦乱の空間編集会編『戦乱の空間』第三号 二〇〇四

池田誠「毛利系城郭到達点―美作矢筈山城の研究から―」

岡山学院大学・岡山短期大学編『岡山学院大学・岡山短期大学紀要』二七号

二〇〇四

尾崎 聡「土居の景観（土居の伝承と地中から出現した土居）―歴史的・

民俗的景観図作成の試み その⑤―」

竹久順一「美作の風土 古道と宿場集落―その特性を究明する―」私家版

二〇〇四

岡山県古代吉備文化財センター編『よみがえる久田の歴史 久田原遺跡・久田堀ノ内遺跡・夏栗遺跡とその周辺』同センター 二〇〇四

岡山県古代吉備文化財センター編『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告一九二第一』

三分冊久田堀ノ内遺跡』国土交通省苫田ダム工事事務所二〇〇五

奥津町史編纂委員会編『奥津町史』通史編 奥津町 二〇〇五

就実大学吉備地方文化研究所編『吉備地方文化研究』第一五号 就実大学吉備地

方文化研究所 二〇〇五

湊 哲夫「二つの院庄―館跡と構城跡―(報告要旨)」

伊藤 晃「美作国久田庄の発掘調査(報告要旨)」

森 俊弘「『高松小島氏旧記ノ写』―覚書記事から垣間見る岡山県地域の戦国時代史―」

第二回全国城郭研究者セミナー「陣城・臨時築城をめぐる」二〇〇五

高田 徹「織豊期を中心とした臨戦下の城郭」

戦乱の空間編集会編『戦乱の空間』第四号 二〇〇五

池田誠「美作岩屋城攻囲戦での陣城群」

津山郷土博物館『博物館だより』No.四六 二〇〇五

湊 哲夫「二つの院庄再論―館跡と構城跡―」

蒜山文化財保護委員会編『蒜山の文化財』蒜山教育事務組合教育委員会

二〇〇五

織豊期城郭研究会編『森宏之君追悼城郭論集』同会 二〇〇五

出宮徳尚「戦国城郭の支城の縄張り形態考―備前国宇喜多氏の支城形成

のコンセプト―」

岡山学院大学・岡山短期大学編『岡山学院大学・岡山短期大学紀要』二九号

二〇〇六

尾崎 聡「歴史的・民俗的景観を記述することの人間存在論的意味につ

いて―歴史的・民俗的景観図作成の試み その⑦―」

就実大学吉備地方文化研究所編『吉備地方文化研究』第一六号 就実大学吉備地

方文化研究所 二〇〇六

榎原雅治「美作国埴和庄と埴和氏」

浅野克巳翻刻・編『白玉拾』奈義町教育委員会 二〇〇六

吉永町史刊行委員会編『吉永町史』通史編Ⅱ 備前市 二〇〇六

就実大学吉備地方文化研究所編『吉備地方文化研究』第一七号 就実大学吉備地

方文化研究所 二〇〇七

榎原雅治「前田育徳会所蔵『飯尾文書』所収の美作三浦氏関係文書」

NITドコモ中国受信施設建設埋蔵文化財調査委員会編『篠向城 NITドコモ

中国受信施設建設事業に伴う発掘調査報告』同委員会 二〇〇七

美作町史編集委員会編『美作町史』通史編 美作市 二〇〇七

就実大学吉備地方文化研究所編『吉備地方文化研究』第一七号 二〇〇七

山形省吾「美作国の山城調査と岩屋城跡の小分城調査」

株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ中国・美作市教育委員会編『赤田城(埴高城)』

同社・同委員会 二〇〇八

久世デジタル中継局建設事業埋蔵文化財調査委員会編『篠向城 久世デジタル中

継局建設事業に伴う発掘調査』同委員会 二〇〇八

太田健一監修『図説新見・高梁・真庭の歴史』郷土出版社 二〇〇八

上原兼善監修『図説美作の歴史』郷土出版社 二〇〇八

岸本克彦編『美作大学・美作短期大学地域生活科学研究所所報』第五号 美作

大学・美作短期大学地域生活科学研究所 二〇〇八

渡邊大門「美作地域における奉公衆の研究」

美作地域史研究会編『美作地域史研究』創刊号 二〇〇八

森 俊弘「史料紹介「江見家記」の翻刻と解説」

岡山地方史研究会編『岡山地方史研究』一一九号 二〇〇九

渡邊大門「美作地域における奉公衆の研究」

鏡野町史編集委員会・鏡野町教育委員会編『鏡野町史』通史編 鏡野町

二〇〇九

峰岸純夫・萩原三雄編『戦国時代の城―遺跡の年代を考える―』高志書院

二〇〇九

中国・四国地区城館調査検討会編『西国城館論集Ⅰ―河瀬正利先生追悼号―』同
会 二〇〇九

乗岡 実「岡山県下のコピキBの瓦を伴う城郭群」二〇〇九

歴史文化財顕彰記念誌編集部編『二宮の「まちづくり」歴史文化財顕彰記念誌温

故知新』二宮歴史文化財顕彰会 二〇〇九

湊 哲夫「古代の二宮地域」

渡邊大門「中世の二宮地域」

美作一宮公民館学級講座『美作一宮郷土の遺産』同会 二〇〇九

真庭市教育委員会編『真庭市埋蔵文化財調査報告3 高田城・田楽城 地上デジ

タルテレビ放送施設建設工事に伴う発掘調査』真庭市教育委員会 二〇一〇

森本基嗣『戦国山城を攻略する キャッスリング入門』吉備人出版 二〇一〇

鏡野町教育委員会・鏡野町文化財保護審議会編『鏡野町の文化財』鏡野町教育委

員会 二〇一〇

高宮 惇『枳形・日上山城と香々美村の暮らし』私家版 二〇一〇

畑 和良 歴史サイト「落穂ひろい」掲載論考 [http://homepage2.nifty.com/](http://homepage2.nifty.com/OTIBO_PAGE/index.htm)

OTIBO_PAGE/index.htm

掲載山城一覧

津山市

〔旧苦田郡域〕

1 平家ヶ城・小原城	津山市小原	4
2 渋谷屋敷	津山市小田中	4
3 神楽尾城	津山市総社・小原・上田邑・一宮	5
4 二宮城・美和山城・城山	津山市二宮	8
5 構城	津山市院庄	9
6 毘沙門屋敷	津山市院庄	10
7 院庄館	津山市神戸	10
8 局笠山城	津山市下田邑・戸島	11
9 鶴山城・津山城	津山市山下	12
10 うらば城・浦場城	津山市上横野	12
11 天神山城	津山市上横野	13
12 年本城・年元城・利元城	津山市上横野	14
13 福田城・勝山城	津山市上横野	15
14 横田城	津山市上横野	16
15 大山城・代山城・台山城	津山市大篠	17
16 天狗寺城	津山市大篠	18
17 藤田城・たう多山城・藤田山城・藤多山城	津山市大篠	18
18 烏ヶ山城・烏ヶ仙城	津山市大篠	19
19 城山	津山市粕保	20
20 勘解由屋敷	津山市大田	20
21 池上城	津山市下横野	20
22 懸縄山城	津山市下横野・上横野	21
23 小丸山城	津山市上横野	21
24 城山	津山市下横野	22

25 芦田屋敷・城山	津山市東田辺	22
26 谷上城	津山市東田辺	23
27 関勘解由屋敷	津山市東一宮	23
28 中島頼名屋敷	津山市東一宮	24
29 城所屋敷・構屋敷	津山市一宮	24
30 長良嶽城、甲宮ノ谷城	津山市一宮	24
31 采女屋敷	津山市綾部	25
32 塩屋ヶ城	津山市綾部	25
33 中陣	津山市綾部	26
34 八臥城・鉢伏城	津山市綾部	26
35 岩尾山城・祝山城・医王山城	津山市吉見	27
36 有元屋敷	津山市草加部	29
37 別所城	津山市上高倉	29
38 岡隅城	津山市下高倉西	30
39 郡家屋敷	津山市下高倉西	30
40 城・高野城	津山市高野	30
41 志戸部城	津山市志戸部	31

〔旧勝田郡域〕

42 河辺構	津山市河辺	32
43 河辺城	津山市河辺	32
44 シト卜城	津山市河辺	33
45 相賀屋敷	津山市瓜生原	33
46 井保木屋敷	津山市瓜生原	33
47 尉ヶ城・横手城・城山	津山市瓜生原	34
48 神宮城・新宮山城	津山市新田・福井	35
49 義経屋敷・義経陣場・義経陣	津山市新田・池ヶ原	37
50 梶原が陣・梶原陣	津山市池ヶ原	37
51 蒲の尾・蒲生陣	津山市池ヶ原	37
52 大屋敷	津山市池ヶ原	37

真庭郡

〔真庭市〕落合町

1 鳥越山	真庭市古見	52
2 かげ由屋敷	真庭市赤野	52
3 家中屋敷	真庭市赤野	53
4 坂牧城・逆巻城・城山	真庭市赤野・法界寺	54
5 月沢城・手谷城	真庭市中	55
6 野田屋敷	真庭市日名	56
7 市構	真庭市福田	56
8 中村城・地家城	真庭市上河内	56
9 野州陣山	真庭市上河内	57
10 高山城	真庭市下河内	57

53 田淵城・田口山城	津山市金井	38
54 難波屋敷	津山市西吉田	39
55 殿屋敷	津山市三浦	39
56 黒見山城・黒目城・黒女城	津山市堀坂・新野山形	39
57 天王山	津山市堀坂・西下	40
58 堀坂城	津山市堀坂	40
59 岩黒山城・岩黒城・岩倉山城	津山市田熊	41
〔旧久米郡域〕		
60 神原山城・小桁城	津山市小桁	42
61 荒神山	津山市荒神山	43
62 嵯峨山城	津山市中島・美咲町錦織	45
63 篠山城・皿山城	津山市皿	46
64 丸山城	津山市福田	48
65 間鍋山城・神南備山城	津山市井口	48

11 土器尾城	真庭市下河内・赤野	59
12 田楽城	真庭市中河内	60
13 上山城・梅森城・都我布呂城	真庭市上山	61
14 城山	真庭市上市瀬	62
15 殿土居	真庭市上市瀬	62
16 宮山城・高屋城	真庭市上市瀬・高屋	62
17 志見山城・志め山城・注連山城	真庭市落合垂水	65
18 薬師寺構	真庭市西河内	66
19 殿屋敷	真庭市日野上	66
20 一色山城・大井手城・中村城・城山	真庭市一色	66
21 石ヶ城・城山	真庭市鹿田	67
22 真木城・真木山城・槇山城・槇ヶ城	真庭市鹿田	67
23 植木構	真庭市鹿田	69
24 八ヶ城	真庭市栗原	70
25 栗原城	真庭市栗原	70
26 佐引城	真庭市佐引	71
27 十六城・十六ヶ城	真庭市下方・落合垂水	72
28 関山城・飯山城・城頭山城・初伏城	真庭市関	72
29 佐野屋敷	真庭市別所	73
勝山町		
30 舟津屋敷	真庭市組	74
31 大壇城	真庭市山久世	74
32 阿波土居	真庭市勝山	75
33 市構	真庭市勝山	75
34 鍛冶屋敷	真庭市勝山	75
35 陣山	真庭市勝山	75
36 高田城	真庭市勝山	76
37 牧土居	真庭市勝山	79
38 出羽屋敷・殿屋敷	真庭市柴原	79

39 浅田城	真庭市福谷	80	67 向立石城	真庭市粟谷	93
40 会下山城・後谷山城	真庭市月田	80	68 飯山城	真庭市藤森	94
41 三堂坂城	真庭市月田	80	69 城ヶ山	真庭市種	95
42 宮原山城・鳶乃森城	真庭市月田	81	70 塚原城	真庭市種	95
43 手谷城・月田城	真庭市月田	82	71 釜戸原城	真庭市小童谷	95
44 榎原城	真庭市荒田	83	久世町		
45 大料城・横塚城	真庭市神代・本郷	83	72 大寺畑城	真庭市久世	96
46 八幡山城	真庭市曲り	83	73 陣山	真庭市久世	97
47 城山	真庭市若代畝	84	74 中山屋敷	真庭市久世	98
48 荒木屋敷	真庭市若代畝	84	75 羽庭城	真庭市久世	98
49 白水城・城山	真庭市古呂々尾中	84	76 陣屋	真庭市久世	99
50 岩明山・要害	真庭市清谷	84	77 加那女岐山・金砕山城	真庭市惣・日名	99
51 城山	真庭市清谷	85	78 飯山城	真庭市草加部	99
52 長者屋敷	真庭市若代	85	79 梶原屋敷	真庭市草加部	100
53 長者屋敷	真庭市若代	85	80 殿土井	真庭市草加部	100
54 若代城	真庭市若代	85	81 さいしょう小屋	真庭市樫西	101
55 本山城・城山	真庭市月田本	86	82 小寺畑城	真庭市三阪	101
56 則行城・岩井城・城山	真庭市岩井谷	87	83 多田山城	真庭市三阪	101
57 兵庫屋敷	真庭市上	87	84 高仙城・高山城	真庭市余野上	102
湯原町			85 二山城	真庭市余野下	103
58 湯山城・湯本城	真庭市湯原温泉	88	86 神上城・高上城	真庭市樫東	103
59 田井城	真庭市社	89	87 砥石山城	真庭市目木	104
60 大沼嶽	真庭市豊栄	89	88 目木構	真庭市目木	105
61 目地山城	真庭市豊栄	90	89 篠向城・篠吹城・篠葺城	真庭市三崎・大庭	105
62 藪途山城	真庭市豊栄	91	美甘村		
63 小坂山城・城山	真庭市見明戸	91	90 柴平山	真庭市鉄山	108
64 鶴山城・栗田城・城山	真庭市見明戸	92	91 要害山城	真庭市黒田・鉄山	108
65 常隆院城	真庭市見明戸	92	92 陣山	真庭市美甘	108
66 土居城	真庭市禾津	93			

苦田郡

〔津山市〕 加茂町

1 殿ノ山

2 比丘尼屋敷

津山市加茂町字野……………120
津山市加茂町物見……………120

93 麓城……………109

川上村

94 粟住山城・城山……………111

95 経塚山城……………111

96 城……………112

97 波作利山城……………112

98 天王屋敷……………113

99 徳山屋敷・城山……………113

八束村

100 日爪城・日ノ爪城……………114

101 山名屋敷……………114

中和村

102 城山……………115

103 下和城……………115

104 殿屋敷……………116

105 殿屋敷……………116

新庄村

106 浦山城……………117

107 沢城……………118

3 高山城・矢筈山城……………120

4 内構……………124

5 杉山城・青柳城……………124

6 室尾城……………124

7 佐良山城……………126

8 松ヶ札城……………127

9 笠松城……………127

10 丹後屋敷……………127

11 大島屋敷……………128

12 梶間山……………128

13 袴腰城……………128

14 行重山城……………129

15 石山城……………129

16 仙の城……………129

17 日詰城・百々城……………130

〔鏡野町〕 富村

18 城山……………132

19 殿屋敷……………132

20 びくにヶ城……………132

21 三塚の壇・岡の札城……………133

奥津町

22 西浦城・井坂城……………134

23 二ツ山城・二山城……………134

24 寄山城……………135

25 小丸山城……………136

26 天狗山城……………136

27 斎藤屋敷……………137

28 侍屋敷……………137

苦田郡鏡野町西屋……………137
苦田郡鏡野町西屋……………137
苦田郡鏡野町杉……………136
苦田郡鏡野町杉……………136
苦田郡鏡野町養野……………135
苦田郡鏡野町養野……………134
苦田郡鏡野町井坂・養野……………134

苦田郡鏡野町富西谷……………132
苦田郡鏡野町富西谷……………132
苦田郡鏡野町富東谷……………132
苦田郡鏡野町富東谷……………133

津山市加茂町榑井……………129
津山市加茂町榑井……………129
津山市加茂町行重……………129
津山市加茂町行重・上横野……………128
津山市加茂町成安……………128
津山市加茂町下津川……………128
津山市加茂町下津川……………127
津山市加茂町下津川……………127
津山市加茂町公郷……………126
津山市加茂町青柳……………124
津山市加茂町知和……………124
津山市加茂町山下・知和……………120

29 西屋城	苦田郡鏡野町西屋・女原	137
30 河端構・構ノ城	苦田郡鏡野町河内	138
31 河内城	苦田郡鏡野町河内	139
32 城尾山・城山・久田上原城	苦田郡鏡野町久田上原	140
33 堀ノ内	苦田郡鏡野町久田下原	141
34 末谷の城・東山城	苦田郡鏡野町久田下原	142
35 下原城・比丘尼城・比丘尼ヶ城	苦田郡鏡野町久田下原	143
36 城峪・城谷・城峪城	苦田郡鏡野町久田下原	144
37 城尾山・奥津城山城	苦田郡鏡野町奥津	145
38 大河原城・鷹巣山城・余瀬ヶ城	苦田郡鏡野町奥津川西	146
39 陣山	苦田郡鏡野町羽出	147
40 山崎鼻	苦田郡鏡野町羽出西谷	147
鏡野町		
41 さんこう城	苦田郡鏡野町岩屋	148
42 あふさかの城・相坂城・逢坂城	苦田郡鏡野町真経	148
43 日上城・日上山城	苦田郡鏡野町寺和田	149
44 升形城	苦田郡鏡野町香々美	150
45 山名屋敷	苦田郡鏡野町香々美	152
46 犬城・犬ヶ城・張方城	苦田郡鏡野町土居	152
47 土居	苦田郡鏡野町土居	152
48 沖構・構ノ城	苦田郡鏡野町円宗寺	152
49 家老屋敷	苦田郡鏡野町円宗寺	153
50 古川城・城山	苦田郡鏡野町寺元	154
51 茶臼山	苦田郡鏡野町寺元・沖	154
52 大田和城	苦田郡鏡野町竹田	154
53 斎藤丸	苦田郡鏡野町竹田	155
54 景清屋敷	苦田郡鏡野町古川	156
55 石須構・鴨津構	苦田郡鏡野町真加部	156
56 眼崎城・日崎城	苦田郡鏡野町下原・津山市領家	157

57 下原構	苦田郡鏡野町下原	158
58 城山	苦田郡鏡野町高山	158
59 小田城	苦田郡鏡野町高山	159
60 小屋谷	苦田郡鏡野町高山	160
61 離山	苦田郡鏡野町高山	160
62 岩棚構	苦田郡鏡野町入	160
63 五郎丸山城・五郎やぶ城	苦田郡鏡野町入・下森原	161
64 葛下城	苦田郡鏡野町山城・中谷	162
65 朝山壇	苦田郡鏡野町中谷	163
66 長者屋敷	苦田郡鏡野町中谷	163
67 中屋山城・城山	苦田郡鏡野町貞永寺	164
68 桜井屋敷	苦田郡鏡野町塚谷	164
69 小田草城	苦田郡鏡野町馬場	164
70 城山	苦田郡鏡野町馬場	166
勝田郡		
勝北町		
1 関源次郎屋敷	津山市奥津川	168
2 矢櫃城	津山市大吉	168
3 爪ヶ城	津山市大岩	169
4 構	津山市新野東	169
5 草刈景継屋敷	津山市新野東	170
6 寺坂屋敷	津山市新野東	170
7 古土居	津山市新野東	170
8 河原山城	津山市市場	170
9 国司尾館	津山市市場	171
10 関源次郎屋敷	津山市市場	171
11 吹山城・本丸城	津山市市場	172

12 吹山	津山市市場	172
13 河内館	津山市原	173
14 構・仁木屋敷・下野田構	津山市下野田・勝田郡勝央町植月北	173
15 構屋敷・野田構・上野田構	津山市上野田	173
16 金盛山城・金森山城	津山市中村	174
17 いまごか屋敷・今坂屋敷・美作屋敷	津山市西上	174
18 川戸屋敷	津山市西上	174
19 金剛山城・金剛寺城・烏帽子形城	津山市西上	175
20 土居	津山市西上	176
21 中西屋敷・中西城	津山市西中	176
22 城ノ段	津山市上村	176
23 流郷構・流郷屋敷	津山市上村	176
24 土居	津山市西下	177
25 末田城	津山市新野山形	177
26 中山城・東ヶ城・西ヶ城	津山市新野山形	177
〔美作市〕勝田町		
27 長畑構	美作市久賀	180
28 佐々木屋敷	美作市余野	180
29 鷹取城	美作市余野	180
30 松本寺構	美作市余野	181
31 余野山屋敷・鷹取城	美作市余野	181
32 大爺構	美作市真加部	181
33 真加部構	美作市真加部	182
34 真加部山城・上の山城	美作市真加部	182
35 比丘尼城	美作市長谷内・大町	183
36 高山城	美作市馬形	184
37 高畑城	美作市馬形	186
38 大町山城・別所山城	美作市大町	186
39 星尾城・構	美作市大町	187

40 干尾城	美作市大町	187
41 山王山城	美作市大町	188
42 河内山城	美作市河内	189
43 西田屋敷	美作市矢田	189
44 右手城	美作市右手	190
45 上の土居・富坂屋敷・駿河屋敷	美作市東谷下	190
勝央町		
46 出雲井館	勝田郡勝央町河原	192
47 菊松屋敷	勝田郡勝央町河原	192
48 鎌倉屋敷	勝田郡勝央町豊久田	192
49 神尾山城	勝田郡勝央町豊久田	193
50 殿屋敷	勝田郡勝央町上香山	193
51 構城	勝田郡勝央町美野	193
52 小風呂城・城山	勝田郡勝央町美野	193
53 将監屋敷	勝田郡勝央町美野	194
54 石生構・構	勝田郡勝央町石生	194
55 糸山城・筑紫城	勝田郡勝央町岡	194
56 岡城	勝田郡勝央町岡	195
57 神崎屋敷・神崎城	勝田郡勝央町黒土	195
58 小矢田城・戸倉城	勝田郡勝央町小矢田	195
59 高山城	勝田郡勝央町東吉田	196
60 吉田城・城山	勝田郡勝央町東吉田	196
61 畑屋敷	勝田郡勝央町畑屋	197
62 塔尾城・井上城	勝田郡勝央町為本	197
63 神田山城・為本城	勝田郡勝央町為本	198
64 為本城・高取城	勝田郡勝央町為本	199
65 塔尾城・新造構	勝田郡勝央町為本	199
66 スガシ山城	勝田郡勝央町田井	199
67 鬼池ヶ城・鬼ヶ池城	勝田郡勝央町植月中	200

68	金山城・穢多城・江田ヶ城	勝田郡勝央町植月中	200
69	構の城・構城	勝田郡勝央町植月中	200
70	比丘尼屋敷	勝田郡勝央町植月中	201
71	宮山城・小山城	勝田郡勝央町植月中	201
72	茂平城	勝田郡勝央町植月中	202
73	矢入道屋敷	勝田郡勝央町植月中	202
奈義町			
74	鎌倉山城	勝田郡奈義町馬桑・関本・小坂	203
75	丸山城	勝田郡奈義町皆木	204
76	永光城	勝田郡奈義町関本	204
77	加賀尾城	勝田郡奈義町西原	205
78	倉内屋敷	勝田郡奈義町西原	206
79	天神城	勝田郡奈義町西原	206
80	三穂太郎屋敷	勝田郡奈義町高円・是宗	206
81	大見丈城・大別当城	勝田郡奈義町高円・関本	207
82	殿小屋	勝田郡奈義町高円	208
83	奈義仙城	勝田郡奈義町高円	209
84	菩提寺城	勝田郡奈義町高円	210
85	松岡刑部屋敷	勝田郡奈義町高円	210
86	久常城	勝田郡奈義町久常	210
87	菅原実兼脚館	勝田郡奈義町久常	211
88	長者屋敷	勝田郡奈義町柿	211
89	福光三郎屋敷	勝田郡奈義町柿	212
90	中島山城・西坪城・有元城	勝田郡奈義町中島東	212
91	比久尼城	勝田郡奈義町中島東	213
92	福本城・笹尾城	勝田郡奈義町中島東	214
93	大上屋敷	勝田郡奈義町荒内西	214
94	石引城	勝田郡奈義町中島西	214
95	吉正城	勝田郡奈義町中島西	215

96	香炉寺山	勝田郡奈義町中島西・勝央町河原	215
97	比丘尼屋敷	勝田郡奈義町中島西	216
98	比丘尼屋敷	勝田郡奈義町宮内	216
99	細尾城	勝田郡奈義町宮内	216
100	成松構	勝田郡奈義町成松	217
101	広岡城	勝田郡奈義町広岡	217
102	矢倉か鼻城	勝田郡奈義町広岡	218
103	今宮城	勝田郡奈義町滝本	218
104	久永屋敷	勝田郡奈義町滝本	219
105	久永屋敷	勝田郡奈義町滝本	219
英田郡			
〔美作市〕大原町			
1	大熊屋敷	美作市江ノ原	222
2	県構	美作市古町	222
3	会下城	美作市古町	222
4	三王山城・山王山城	美作市古町	223
5	土居田構	美作市古町	224
6	平尾弥十郎屋敷	美作市古町	224
7	平田又右衛門屋敷	美作市古町	224
8	山田勘介屋敷	美作市古町	224
9	八幡城	美作市古町	225
10	安積小四郎屋敷	美作市中町	225
11	内海孫兵衛屋敷	美作市中町	225
12	小山城	美作市宮本	226
13	高岡構	美作市宮本	226
14	比久尼ヶ城・蜂谷城	美作市宮本	226
15	宮本構	美作市宮本	227

16 隱岐殿	美作市下町	227
17 本位田構	美作市下町	227
18 香山屋敷	美作市下町	227
19 竹山城	美作市下町	228
20 土居構	美作市下町	229
21 船曳屋敷	美作市下町	229
22 星祭城	美作市下町	229
23 尼ヶ城	美作市川上	230
24 大野新左衛門屋敷	美作市川上	230
25 大門屋敷・井垣屋敷	美作市川上	230
26 岡屋敷	美作市川上	231
27 小淵城	美作市川上	231
28 構	美作市川上	231
29 久古屋敷	美作市川上	231
30 新免与三屋敷	美作市川上	232
31 寺坂城	美作市川上	232
32 竹の鼻屋敷	美作市川上	232
33 寺内屋敷・劔持土佐守屋敷	美作市川上	233
34 土居	美作市川上	233
35 塔田屋敷	美作市川上	233
36 中尾屋敷	美作市川上	233
37 中島屋敷	美作市川上	233
38 中屋屋敷	美作市川上	234
39 仁寿寺城	美作市川上	234
40 野間藤三郎屋敷	美作市川上	234
41 比丘尼ヶ城	美作市川上	234
42 法天山城	美作市川上	235
43 的場屋敷	美作市川上	235
44 宮脇屋敷	美作市川上	236
45 森畑屋敷	美作市川上	236

46 山根屋敷	美作市川上	236
47 和気周防屋敷	美作市笹岡	236
48 大当屋敷	美作市下庄町	236
49 本位田駿河守屋敷	美作市下庄町	237
50 千原城	美作市下庄町	237
51 桂坪城・四辻構	美作市桂坪	237
52 滝構	美作市滝	237
53 正岡城	美作市滝	238
54 赤田城・大野城	美作市赤田	238
55 井口構	美作市赤田	239
56 広井城	美作市赤田	240
57 石塔城・堂ヶ峰城	美作市立石	240
58 立石構	美作市立石	240
59 立石城	美作市立石	240
60 尼山城・比丘尼ヶ城	美作市壬生・沢田	241
61 壬生構	美作市壬生	242
62 沢田城下構	美作市沢田	242
63 源内屋敷・中北構	美作市川戸	242
64 郷籠山	美作市川戸	243
65 福原構	美作市川戸	243
66 寺床山構	美作市川戸	243
67 山根構	美作市川戸	244
東粟倉村	美作市太田	245
68 土居殿	美作市川東	245
69 郷城	美作市川東	245
70 梅ヶ坂構	美作市川東	245
美作町	美作市明見・中尾	246
71 城山	美作市明見・中尾	246

72	三星城	美作市明見・入田	246
73	入田城	美作市入田	249
74	花房屋敷	美作市入田	249
75	龍王山城	美作市入田	249
76	刑部屋敷	美作市田殿	249
77	鞍懸城・倉掛城 鞍掛城・榑原城	美作市田殿・榑原中	250
78	大将ヶ陣	美作市田殿	251
79	尼ヶ城	美作市北山	251
80	龍王山城	美作市北山	252
81	屋敷	美作市豊国原	252
82	大塚屋敷	美作市榑原中	252
83	比丘尼城	美作市榑原中	252
84	妙見山城	美作市平福	253
85	難波屋敷	美作市平福	253
86	平野城	美作市平福	254
87	緑青山城	美作市平福	254
88	塩垢離山城	美作市榑原下	254
89	天狗松山城	美作市榑原下	254
90	榑原城	美作市榑原下	255
91	鬢櫛山城	美作市榑原下	255
92	小坂田屋敷	美作市栄町	256
93	屋敷	美作市栄町	256
94	安東相馬屋敷	美作市山口	256
95	比丘ヶ城	美作市山口	256
96	大畠城	美作市山外野・山口	257
97	大札城	美作市大原	257
98	北原城・矢櫃山城	美作市猪臥・北原	258
99	友野城	美作市友野	258
100	林野城・倉敷城	美作市林野	260
101	鷹之巢城	美作市海田	262

102	駿河館	美作市巨勢	263
103	土居	美作市巨勢	263
104	長大寺	美作市三倉田	263
105	三倉田城	美作市三倉田	264
106	勝間山城	美作市位田・岩見田	265
107	山下屋敷	美作市長内	266
108	塩垂山	美作市湯郷	266
109	湯郷土居館	美作市湯郷	266
110	下大谷城	美作市下大谷	266
111	殿屋敷	美作市奥大谷	267
作東町			
112	尾総城・小房城・尾房城	美作市小房・勝田町久賀	268
113	殿屋敷	美作市小野	269
114	四乳山城	美作市小野	269
115	中村城・粟井城・淡相城	美作市粟井中	270
116	殿河内構	美作市五名	271
117	横山城・吉野城	美作市五名・沢田	271
118	吉野城下構	美作市五名	272
119	郷城	美作市宮原	272
120	豆田構	美作市豆田	272
121	清水構	美作市小ノ谷	272
122	殿屋敷	美作市山手	273
123	山手城	美作市山手	273
124	湯川屋敷	美作市瀬戸	273
125	阿部屋敷	美作市岩辺	273
126	岩辺山城・越坂山城	美作市岩辺・小ノ谷	274
127	岩戸城	美作市大内谷・大聖寺	275
128	土居殿屋敷	美作市鯉	275
129	鳥坂山城・鳥越城	美作市鯉	275

130 川端屋敷	美作市江見	276
131 岡崎孫次郎屋敷	美作市原	276
132 久保木城	美作市原	276
133 殿屋敷	美作市原	277
134 日指城	美作市日指	277
135 杉坂城	美作市田原	277
136 土居山城・福城	美作市土居	277
137 景清屋敷	美作市竹田	278
138 公文所	美作市竹田	278
139 比丘ヶ城	美作市上福原	278
140 大谷城	美作市山城	279
141 古屋敷	美作市山城	279
142 大夫殿屋敷	美作市白水	280
143 角南城	美作市角南	280
144 小越城	美作市柿ヶ原	280
145 柿ヶ原城	美作市柿ヶ原	281
146 平井屋敷	美作市万善	281
147 朝霧屋敷	美作市国貞	281
148 安東屋敷	美作市鈴家	282
149 佐々木屋敷	美作市鈴家	282
英田町		
150 城尾城	美作市真神	283
151 横尾城	美作市横尾	283
152 上山城・城山	美作市上山	283
153 下山城・井ノ内城	美作市下山	284
154 谷口喜右衛門尉屋敷	美作市英田青野	285
西粟倉村		
155 景清屋敷	英田郡西粟倉村影石	286

156 船曳屋敷	英田郡西粟倉村影石	286
157 塔尾城・堂尾城	英田郡西粟倉村影石	286
158 景石城	英田郡西粟倉村長尾	286
159 公文所	英田郡西粟倉村長尾	287
160 黒山城・尼城・比丘尼ヶ城	英田郡西粟倉村長尾・美作市東吉田	287
161 佐淵城	英田郡西粟倉村長尾	287
162 船曳屋敷	英田郡西粟倉村長尾	288
163 清水構・城山	英田郡西粟倉村知社	288
164 御馬屋敷	英田郡西粟倉村知社	289
兵庫県佐用郡佐用町		
165 平井城	兵庫県佐用郡佐用町上石井	290
166 構の段	兵庫県佐用郡佐用町上石井	290
167 荒神城	兵庫県佐用郡佐用町下石井	290
旧久米郡		
津山市〔久米町〕		
1 城山・仲仙道城山	津山市宮部上	292
2 高味籠屋・高味城	津山市宮部上	292
3 日吉城・日吉神社裏山	津山市宮部上	293
4 陣簾	津山市中北下	293
5 宗呂木	津山市中北下	293
6 河本城・構之城・亀山城・城山	津山市坪井下	294
7 長者屋敷	津山市坪井下	295
8 寺城	津山市坪井下	295
9 加治子山・寄合場	津山市坪井上	295
10 姿山	津山市坪井上	296
11 茶臼山	津山市坪井上	296

12 長者屋敷	津山市坪井上	297
13 いそづ城・磯尾城・敵見要害	津山市中北上	297
14 岩屋城	津山市中北上	297
15 赤木屋敷	津山市中北上	301
16 河本屋敷	津山市中北上	301
17 大蔵又兵衛屋敷	津山市中北上	301
18 怒本新右衛門屋敷	津山市中北上	301
19 安田屋敷	津山市中北上	301
20 市三郎兵衛屋敷	津山市中北上	302
21 植木藤左衛門屋敷	津山市中北上	302
22 清水伊勢屋敷	津山市中北上	302
23 長船越中屋敷	津山市中北上	302
24 新田屋敷	津山市中北上	302
25 清水勘右衛門屋敷	津山市中北上	303
26 原田屋敷	津山市中北上	303
27 西尾屋敷	津山市中北上	303
28 石蔵城	津山市中北上	303
29 井ノ奥城	津山市中北上	304
30 往還ノ上城	津山市中北上	304
31 楽万ノ上城	津山市中北上	304
32 妙福寺ノ上城	津山市中北上	305
33 荒神ノ上城	津山市中北上	305
34 与右衛門ノ上城	津山市中北上	306
35 遣手場城	津山市中北上	306
36 梅ヶ峠城	津山市中北上	306
37 的場ノ峠城	津山市中北上	307
38 とちの木城	津山市中北上	307
39 八幡塔城	津山市中北上	307
40 年末城・田辺城	津山市中北上・宮部下	308
41 仏空殿・長者屋敷	津山市久米川南	309

42 鍋山城	津山市神代	309
43 構城・川原屋敷	津山市神代	309
44 砥岩城	津山市神代	310
45 成友屋敷	津山市神代	310
46 江原兵庫助屋敷	津山市戸脇	311
47 八幡屋敷城	津山市里公文	311
48 平福寺城・平福城	津山市里公文	311
49 円宗寺城	津山市里公文	312
50 一丁田城	津山市福田下	313
51 八幡長者屋敷	津山市油木下	313
52 高山城・江原城	津山市油木北・久米郡美咲町北	313
美咲町〔中央町〕		
53 立万城	久米郡美咲町錦織	315
54 錦織屋敷	久米郡美咲町錦織	315
55 天神山城	久米郡美咲町打穴下	316
56 鬼山城	久米郡美咲町打穴中	316
57 城山	久米郡美咲町打穴里・打穴上	317
58 城屋敷	久米郡美咲町打穴里	318
59 鳥越山城	久米郡美咲町打穴上・打穴里	318
60 是久山城	久米郡美咲町打穴西	318
61 城山	久米郡美咲町打穴北	319
62 陣所	久米郡美咲町新城	319
63 新庄山城	久米郡美咲町新城	319
64 丸尾山城	久米郡美咲町西城	320
65 稻荷山城	久米郡美咲町西幸	320
66 大谷城	久米郡美咲町原田・西幸	320
67 高陣城	久米郡美咲町原田	321
68 白萩城	久米郡美咲町両山寺	322
69 高土城	久米郡美咲町境・久米南町北庄	322
	久米郡美咲町境	323

70	城能城	久米郡美咲町境・角石祖母	323
71	三角城	久米郡美咲町角石祖母	324
72	清水寺城	久米郡美咲町境・久米南町上柵	324
73	宮ノ礼城	久米郡美咲町境	324
74	金地城	久米郡美咲町和田北	325
75	長箱城	久米郡美咲町和田北	325
76	茶臼山城	久米郡美咲町大埴和西	325
〔旧旭町〕			
77	上屋敷	久米郡美咲町北	326
78	萩丸城	久米郡美咲町北	326
79	侍屋敷	久米郡美咲町南	326
80	長者屋敷	久米郡美咲町南	327
81	城小屋	久米郡美咲町中	327
82	横岩城	久米郡美咲町中	327
83	三宮城	久米郡美咲町西埴和・東埴和	327
84	城尾・城之尾	久米郡美咲町西埴和	328
85	氏平屋敷	久米郡美咲町中埴和	328
86	中山手城	久米郡美咲町里	329
87	丸山城	久米郡美咲町里	330
88	鳥首城	久米郡美咲町柵原	330
89	一之瀬城・一瀬山城・大串城	久米郡美咲町柵原	330
〔旧柵原町〕			
90	倉見屋敷	久米郡美咲町安井	332
91	屋敷	久米郡美咲町塩気	332
92	長者屋敷	久米郡美咲町上間	332
93	上間城	久米郡美咲町百々・上間	332
94	成安城	久米郡美咲町百々	333
95	金室城	久米郡美咲町行信	333

96	城ノ尾山城	久米郡美咲町藤田上	334
97	藤田西城	久米郡美咲町藤田上	334
98	藤田東城	久米郡美咲町藤田上	335
99	弾正屋敷	久米郡美咲町藤田上	335
100	一村屋敷	久米郡美咲町藤田上	335
101	藤田屋敷	久米郡美咲町藤田上	335
102	矢の藤屋敷	久米郡美咲町連石	336
103	鷺山城	久米郡美咲町飯岡	336
104	城ヶ山	久米郡美咲町小瀬	337
105	藤原城	久米郡美咲町藤原	337
106	山上城・山之上城・白尾山城	久米郡美咲町高城	337
107	姥ヶ城	久米郡美咲町羽仁	338
108	鴛淵山城	久米郡美咲町羽仁	338
109	ととめき山城・轟ノ城	久米郡美咲町大戸下	339
久米南町			
110	真盛屋敷・実盛屋敷	久米郡久米南町北庄	340
111	津野田屋敷	久米郡久米南町北庄	340
112	御所屋敷・本丸	久米郡久米南町里方	340
113	原田監物屋敷	久米郡久米南町里方	341
114	奥谷城	久米郡久米南町南庄	341
115	構屋敷	久米郡久米南町南庄	341
116	大將軍城	久米郡久米南町南庄	341
117	吹上城	久米郡久米南町南庄	342
118	秋小屋城・本丸城	久米郡久米南町塩之内	342
119	横部屋敷	久米郡久米南町羽出木	342
120	長者屋敷	久米郡久米南町松	343
121	樋の元城	久米郡久米南町上弓削	343
122	上原陣	久米郡久米南町下弓削	343
123	将監山城	久米郡久米南町上二ヶ	343

124	立畑城	久米郡久米南町上二ヶ	344
125	蓮華寺城・連下地城	久米郡久米南町下二ヶ・全間	344
126	大西構	久米郡久米南町下二ヶ	345
127	草木城	久米郡久米南町下二ヶ	346
128	草木西城	久米郡久米南町下二ヶ	346
129	小松城	久米郡久米南町下二ヶ・下弓削	347
130	小松尾城	久米郡久米南町下二ヶ	347
131	沼元構・沼元城・本丸城	久米郡久米南町下二ヶ	347
132	上の殿城・上殿城	久米郡久米南町中村・岡山市北区建部町三明寺	348
133	龍王山城	久米郡久米南町下村	348
134	高田屋敷	久米郡久米南町上神目	349
135	安盛城	久米郡久米南町上神目	349
136	三村屋敷	久米郡久米南町神目中	350
137	大上城・大植城	久米郡久米南町山手	350
138	右近屋敷・左近屋敷	久米郡久米南町安ヶ札	351
岡山市〔旧御津郡建部町の一部〕			
139	鶴田城・城山	岡山市北区建部町鶴田	352
140	石丸屋敷	岡山市北区建部町和田南	353
141	高城・高山城	岡山市北区建部町和田南	353
142	松端山・松ヶ端	岡山市北区建部町三明寺	355
143	蕨尾山	岡山市北区建部町三明寺	355
144	伊勢畑城・旗ヶ瀬城	岡山市北区建部町下神目	356
145	下風城・中尾山城・尾城	岡山市北区建部町下神目	358
146	鷹栖城	岡山市北区建部町下神目	358
147	伏山城	岡山市北区建部町下神目	359

美作国周縁の城館	
備前市〔旧和气郡吉永町〕	岡山県備前市吉永町多麻
1 飯盛山城	362
真庭市〔旧北房町〕	
2 山王城	岡山県真庭市五名
3 佐井田城・斉田城・才田城・城山	岡山県真庭市下中津井
4 高釣部城	岡山県真庭市上啓部
久米郡美咲町〔旧旭町〕	
5 江与味城	岡山県美咲町江与味
	366
	365
	363
	363

美作国の山城

初版 平成二十二年一〇月三〇日 発行

改訂版 平成二十三年二月二〇日 発行

編集 「美作国の山城」編集委員会
発行 津山市教育委員会

生涯学習部 文化課

岡山県津山市山北五二〇番地

印刷 株式会社 廣陽本社

岡山県津山市田町二二番地

